中　村　1　号　墳

本文編（第1分冊）

2012年

出　雲　市　教　育　委　員　会

序

中村 1 号墳は平成 14 年（2002）5 月 2 日，工事用道路建設中に発見されました。発見後，すぐに事業者および地権者，住民のみなさまのご理解により，工事用道路の建設中止及び古墳の保存が決まりました。

当古墳は発見当初から古墳時代後期の未盗掘の横穴式石室と考えられていたので，出雲市は特に重要な遺跡と位置付けました。そこで，平成 18 年度から 22 年度の 5 年間をかけて本格的な発掘調査を実施し，その結果，未盗掘ならではの数多くの成果を確認しました。そして，全国的にみて他に例がないほどの良好な石室の保存状態であることがわかりました。

これらの成果から，出雲地域の古墳時代の社会や死に対する考え方がわずかではありますが明らかになりつつあります。

こうした調査成果が，この地域の文化財に対する理解と関心を深め，また，現代と未来の社会を見つめるひとつの素材となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査及び本書の作成にあたりご理解とご協力を賜りました地域のみなさま，関係者の方々に対し心からお礼申しあげます。

平成 24 年 5 月

出雲市教育委員会

教育長　中尾　一彦

例　言

1．　本書は，出雲市教育委員会が平成 18 年度～平成 22 年度に国宝重要文化財等保存整備補助金を受けて実施した中村 1 号墳の第３次発掘調査報告書である。中村 1 号墳を評価するために 1・２次調査の成果を加えて掲載した，中村 1 号墳の総括的な報告書である。

2．　本書は「本文編」と「図版編」からなる。図版編の遺物写真に示した番号は，本文編の挿図に示した遺物番号に対応する。

3．　発掘調査は，以下の期間において断続的に実施した。

３次調査　平成 18 年（2006）7 月～平成 22 年（2010）9 月 30 日

4．　発掘調査を実施した地番は次のとおりである。

島根県出雲市国富町 1948 番地ほか

5．　調査は以下の組織で実施した。

調査主体　　出雲市教育委員会

平成 18 年度（2006）

事務局	石飛幸治（出雲市文化観光部文化財課長）	
	川上　稔（	同　主査　兼　埋蔵文化財係長）
	花谷　浩（	同　学芸調整官）
	野坂俊之（	同　文化財企画係長）
調査員	坂本豊治（	同　埋蔵文化財係主事）
調査補助員	高橋亜紀（	同　臨時職員）
発掘作業員	稲村玉枝，渡部政義	

平成 19 年度（2007）

事務局	花谷　浩（出雲市文化観光部次長　兼　文化財課学芸調整官）	
	石飛幸治（	同　文化財課長）
	景山真二（	同　埋蔵文化財係長）
調査員	坂本豊治（	同　埋蔵文化財係主事）
調査補助員	櫻井康行（	同　臨時職員）
発掘作業員	稲村玉枝，佐野静枝，渡部政義	

平成 20 年度（2008）

事務局	花谷　浩（出雲市文化企画部次長　兼　文化財課学芸調整官　兼　出雲弥生の森博物館創設準備室長）	
	石飛幸治（出雲市文化企画部文化財課長）	
	景山真二（	同　埋蔵文化財係長）
調査員	坂本豊治（	同　埋蔵文化財係主事）

調査補助員　櫻井康行（同　臨時職員）

室内整理作業員　永田節子

平成 21 年度（2009）

事務局　花谷　浩（出雲市文化企画部次長　兼　文化財課学芸調整官　兼　出雲弥生の森博物館創設準備室長）

石飛幸治（出雲市文化企画部文化財課長）

景山真二（同　埋蔵文化財係長）

調査員　坂本豊治（同　埋蔵文化財係主事）

調査補助員　藤田大輔（同　臨時職員）

室内整理作業員　永田節子

平成 22 年度（2010）

事務局　花谷　浩（出雲市文化環境部次長）

石飛幸治（同　文化財課長）

景山真二（同　埋蔵文化財係長）

調査員　坂本豊治（同　埋蔵文化財係主事）

調査補助員　片寄雪美，和田みゆき（同　臨時職員）

室内整理作業員　荒木恵理子，糸賀伸文

平成 23 年度（2011）

事務局　花谷　浩（出雲市文化環境部学芸調整官）

福間　浩（同　文化財課長）

景山真二（同　埋蔵文化財係長）

調査員　坂本豊治（同　埋蔵文化財係主事　10 月より出雲弥生の森博物館主事）

調査補助員　糸賀伸文（同　臨時職員）

平成 24 年度（2012）

事務局　花谷　浩（出雲市文化環境部学芸調整官）

福間　浩（同　文化財課長）

宍道　年弘（同　課長補佐　兼　埋蔵文化財 1 係長）

調査員　坂本豊治（同　出雲弥生の森博物館主事）

6．　調査指導者

調査指導委員会　渡辺貞幸（委員長），角田徳幸，大谷晃二，澤田正明，島根県教育庁文化財課

その他の指導者　文化庁記念物課，岩本　崇，牛嶋　茂，加島次郎，川本耕三，栗田茂敏，齊藤　努，斉藤紀行，酒井哲弥，柴崎晶子，下條信行，白石　純，杉本和樹，高橋　敦，髙橋　周，田中良之，永嶋千鳥，

中村唯史，　橋本英将，樋野真司，森本　徹，渡邉正巳

古墳を見学していただいた有識者

石野博信，岩永省三，大橋泰夫，岡田　登，小野正敏，木立雅朗，近藤喬一，坂井秀弥，佐古和枝，白石太一郎，髙橋克壽，瀧音能之，武末純一，辰巳和弘，広瀬和雄，町田　章，村上恭通，茂木雅博，矢野健一，吉田　広，和田　萃，和田晴吾

７．　調査協力

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター，島根県教育庁古代文化センター，島根県立古代出雲歴史博物館，トリアド工房，飛鳥工房，国富コミュニティセンター，地権者のみなさま，国富地区のみなさま，プラッツ金山，飯國陽子，勝部真紀，髙橋節子，吹野初子，細野陽子，前島浩子，山口恵里，山口智子

８．　遺構・遺物の写真撮影は坂本が行い，主要なものは牛嶋　茂，杉本和樹に依頼し第２分冊にまとめた。図版 31・32 の顕微鏡写真および編集は永嶋正春に依頼した。図版の一部には１・２次調査時のものを含む。

９．　本書で示した方位は真北を示す。座標は世界測地系第３座標系に基づき，標高は海抜高を示す。

10.　本遺跡の遺物・実測図及び写真は出雲市教育委員会で保管している。また，遺物の一部は出雲弥生の森博物館で展示している。

11.　本書の編集は，花谷学芸調整官の指導のもと，坂本が行った。執筆は，第１章が坂本・原　俊二，第２章が坂本・髙橋　周，第３章が坂本，第４章が坂本・花谷　浩・橋本英将，第５章が坂本・澤田正明・永嶋千鳥・斉藤紀行・高橋　敦・川本耕三・齊藤　努・永嶋正春・白石　純・渡邉正巳，第６章が岩本　崇・橋本英将・田中良之・髙橋　周，第７章が坂本・花谷，第８章は坂本が担当した。執筆分担は，それぞれの文末に明記した。

目　次

第１章　調査の目的と経過……1

第１節　古墳の発見……1　　第２節　調査の目的と経過……2

第２章　遺跡の立地と環境……9

第１節　遺跡の地理的環境……9　　第２節　遺跡の歴史的環境……11

第３章　墳丘の調査……21

第１節　墳丘の調査……21　　第３節　墳丘調査のまとめ……36

第２節　閉塞部の調査……31

第４章　石室内の調査……39

第１節　石室と石棺の構造……39　　第４節　副葬品の詳細……67

第２節　石室と石棺の築造過程…49　　第５節　遺物一覧表……99

第３節　副葬品出土状況……51　　第６節　葬送過程……103

第５章　保存処理と自然科学分析……109

第１節　石室内遺物の取り上げ……109

第２節　中村１号墳出土金属製品等の保存処理及び修復の記録……111

第３節　中村１号墳出土金銅製鈴の自然科学分析……126

第４節　中村１号墳出土遺物の自然科学分析……129

第５節　中村１号墳出土鞍金具の蛍光Ｘ線分析……155

第６節　中村１号墳出土資料の理化学的調査……157

第７節　中村１号墳出土資料の鉛同位体比分析結果……167

第８節　中村１号墳ほか出土須恵器の胎土分析……173

第９節　中村１号墳の前室石棺内埋土のリン濃度分布……177

第６章　付　論……183

第１節　中村１号墳出土珠文鏡と出雲地域の銅鏡出土後期古墳……183

第２節　中村１号墳出土装飾大刀群の位置付け……197

第３節　中村１号墳における葬送儀礼……207

第４節　「黄泉国訪問神話」と喪葬儀礼……217

第７章　総　括……233

第１節　横穴式石室の玄門構造からみた中村１号墳……233

第２節　石室と墳丘規模からみた中村１号墳……257

第３節　横穴式石室の閉塞からみた中村１号墳……277

第４節　中村１号墳の石棺の時期と灯明石……289

第５節　馬具の特徴……307

第６節　須恵器からみた中村１号墳……315

第８章　結　語……345

報告書抄録……352

挿　図

第１章～第４章

第１図　中村１号墳の位置（現在）……9
第２図　出雲地域の地質図……10
第３図　中村１号墳の位置と周辺の遺跡（１）……12
第４図　中村１号墳の位置と周辺の遺跡（２）……13
第５図　中村１号墳周辺の遺跡分布図……14
第６図　奈良時代出雲国の郡郷図……18
第７図　中村１号墳 1999 年地形測量図……22
第８図　中村１号墳 2008 年地形測量図……23
第９図　トレンチ配置図……24
第 10 図　１トレンチ測量図……25
第 11 図　３・７トレンチ測量図……26
第 12 図　４トレンチ測量図……27
第 13 図　５トレンチ測量図……27
第 14 図　６トレンチ測量図……28
第 15 図　墳丘トレンチ出土遺物……30
第 16 図　閉塞部測量図……32
第 17 図　閉塞部遺物出土状況……34
第 18 図　閉塞部出土遺物……35
第 19 図　墳丘形態の推定……37
第 20 図　出雲型子持壺出土地点……38
第 21 図　石室内調査前測量図と土層図……40
第 22 図　石室測量図（１）……42
第 23 図　石室測量図（２）……43
第 24 図　Ａ石棺測量図……44
第 25 図　Ｂ石棺測量図……47
第 26 図　Ａトレンチ測量図……48
第 27 図　Ｂトレンチ測量図……48
第 28 図　石室・石棺の築造過程……50
第 29 図　石室内遺物出土状況（１）……52
第 30 図　石室内遺物出土状況（２）……53
第 31 図　石室内遺物出土状況（３）……54
第 32 図　石室内遺物出土状況（４）……55
第 33 図　石室内遺物出土状況（５）……56
第 34 図　Ｂ石棺遺物出土状況……57
第 35 図　石室内遺物出土状況（６）……58
第 36 図　石室内遺物出土状況（７）……59
第 37 図　石室内遺物出土状況（８）……60
第 38 図　石室内遺物出土状況（９）……60
第 39 図　鏡・装身具・大刀・刀子出土状況……62
第 40 図　鉄鏃出土状況……64
第 41 図　馬具出土状況……65
第 42 図　須恵器出土状況……66
第 43 図　Ｍ１実測図……67
第 44 図　装身具実測図……68
第 45 図　Ｓ１実測図……70
第 46 図　Ｓ２実測図……71
第 47 図　Ｓ３実測図……73
第 48 図　玄室出土鉄鏃実測図（１）……75
第 49 図　玄室出土鉄鏃実測図（２）……76
第 50 図　玄室出土鉄鏃実測図（３）……77
第 51 図　前室出土鉄鏃実測図……78
第 52 図　刀子実測図……80
第 53 図　馬具実測図（１）……82
第 54 図　馬具実測図（２）……83
第 55 図　馬具実測図（３）……84
第 56 図　馬具実測図（４）……85
第 57 図　馬具実測図（５）……86
第 58 図　馬具実測図（６）……87
第 59 図　馬具実測図（７）……88
第 60 図　馬具実測図（８）……89
第 61 図　馬具実測図（９）……90
第 62 図　馬具実測図（10）……91
第 63 図　須恵器出土位置群……92
第 64 図　須恵器実測図（１群）……93
第 65 図　須恵器実測図（２群）……95
第 66 図　須恵器実測図（３群・その他）……96
第 67 図　須恵器実測図（４・５群）……97
第 68 図　閉塞部から石室の測量図……106
第 69 図　埋葬終了後の進入の痕跡……107

第５章　第２節

第１図　Ｓ１装飾大刀……124
第２図　Ｓ２装飾大刀……125

第５章　第３節

第１図　出雲市中村１号墳出土　鈴（Ａ７）……126
第２図　鈴（Ａ７）の分析箇所ａ～ｃ……127
第３図　分析箇所ａの拡大図……127
第４図　分析箇所ｂの拡大図……127
第５図　分析箇所ｃの拡大図……127
第６図　鈴（Ａ７）の分析箇所ａの XRF スペクトル……128
第７図　鈴（Ａ７）の分析箇所ｂの XRF スペクトル……128
第８図　鈴（Ａ７）の分析箇所ｃの XRF スペクトル……128

第５章　第４節

第１図　№１（B13）鏡板付着金箔の SEM-EDS 分析結果……133
第２図　№２（B18）杏葉付着金箔の SEM-EDS 分析結果……133
第３図　№４（B17）杏葉付着金箔の SEM-EDS 分析結果……134
第４図　№５（B16）杏葉付着金箔の SEM-EDS 分析結果……134
第５図　№８（B19）杏葉付着金箔の SEM-EDS 分析結果……135
第６図　№９（B20）杏葉付着金箔の SEM-EDS 分析結果……135
第７図　№ 10（B21）杏葉付着金箔の SEM-EDS 分析結果……136
第８図　№ 11（B14-1）鏡板付着金箔の SEM-EDS 分析結果……136

第９図　№12（B14-2）鏡板付着金箔の SEM-EDS 分析結果……137
第 10 図　№14（B12・42）鋲具・飾金具付着金箔の SEM-EDS 分析結果……137
第 11 図　№15（B32）鋲具付着金箔の SEM-EDS 分析結果……138
第 12 図　№19（B27）辻金具付着金箔の SEM-EDS 分析結果……138
第 13 図　№20（B26）辻金具付着金箔の SEM-EDS 分析結果……139
第 14 図　№22（B23）辻金具付着金箔の SEM-EDS 分析結果……139
第 15 図　№28（S1）大刀付着金箔の SEM-EDS 分析結果……140
第 16 図　№49（B1）鞍の SEM-EDS 分析結果……140
第５章　第５節
第１図　馬具 B1・B4・B5 蛍光Ｘ線分析結果〈スペクトル〉……156
第５章　第７節
第１図　中村１号墳出土資料の鉛同位体比測定結果……168
第５章　第８節
第１図　大井窯跡群と木舟窯跡群の比較（K-Ca 散布図）……174
第２図　大井窯跡群と木舟窯跡群の比較（Sr-Ca 散布図）……174
第３図　中村1号墳ほか出土須恵器の産地推定（K-Ca 散布図）……174
第５章　第９節
第１図　リン濃度分布（グリッドの配置と平面分布）……177
第２図　リン濃度分布（度数分布 148 試料 0.25g/kg間隔）……179
第６章　第１節
第１図　中村１号墳出土珠文鏡とその類例……184
第２図　中村１号墳出土珠文鏡の同一系列鏡群……186
第６章　第２節
第１図　格子状列点文関連資料……198
第２図　倭装大刀の打ち込み鋲関連資料……199
第３図　厚みと断面形による金銅装鍔の分類……200
第６章　第３節
第１図　上の原 48 号墓人骨出土状態……209
第２図　殿ヶ迫１－２号横穴墓……210
第３図　人骨上土器供献……211
第７章　第１節
第１図　本稿で扱う主な横穴式石室の分布……233
第２図　出雲における導入期の横穴式石室……238
第３図　Ⅰ類石室の玄門構造の分類……242
第４図　出雲西部における子持壺の変遷……243
第５図　Ⅰ類石室の型式組列……243
第７章　第２節
第１図　Ⅰ・Ⅱ類石室玄室面積……262
第２図　Ⅲ類石室玄室面積……262
第３図　出雲２・３期における横穴式石室玄室の面積比較…263
第４図　出雲４期における横穴式石室玄室の面積比較……264
第５図　出雲５・６期における横穴式石室玄室の面積比較…265
第７章　第３節
第１図　出雲における横穴式石室の閉塞部１……278
第２図　出雲における横穴式石室の閉塞部２……279
第３図　西日本における自然石による閉塞の長さ……281
第４図　羨道部内の閉塞１……283
第７章　第４節
第１図　組合せ式家形石棺の部位名称……289
第 17 図　№54（S1～4）大刀，木質片＋金の SEM-EDS 分析結果……141
第 18 図　№57（A8）鈴の SEM-EDS 分析結果……141
第 19 図　№26（S3-1）柄頭の蛍光Ｘ線（EDX）の分析結果……142
第 20 図　№58（M1）珠文鏡Ｂ断片の SEM-EDS 分析結果……143
第 21 図　№53（A1）金環の蛍光Ｘ線（EDX）の分析結果……143
第 22 図　№61（A3）ガラス勾玉の SEM-EDS 分析結果……144
第 23 図　№58（M1）珠文鏡Ｅ断片のＸ線回折図……144
第 24 図　金（Au）－銀（Ag）－銅（Cu）の三角ダイアグラム……145
第５章　第６節
第１図　蛍光Ｘ線分析結果……165
第２図　馬具の青銅原料産地……171
第４図　中村1号墳ほか出土須恵器の産地推定（Sr-Ca 散布図）…174
第５図　胎土分析を行った出雲型子持壺実測図……175
第３図　リン濃度分布（度数分布 133 試料 0.10g/kg間隔）……179
第３図　出雲地域の後期古墳出土銅鏡……191
第４図　頭椎大刀変遷の３段階……201
第５図　Ａ類圭頭大刀と方頭大刀関連資料……204
第４図　長湯７号横穴墓人骨出土状態……212
第５図　葉佐池古墳２号石室１……214
第６図　神門郡・出雲郡南部の横穴式石室編年……246
第７図　出雲郡北部・楯縫郡の横穴式石室編年……247
第８図　意宇郡・島根郡におけるⅢ類石室の編年……248
第９図　上石堂平１号墳の玄門構造……250
第 10 図　石室２～３期における東西出雲の地域区分……252
第６図　出雲西部における主丘規模比較……267
第７図　出雲東部における主丘規模比較……267
第８図　出雲東部における出雲２期の石室と墳丘の位置……272
第９図　出雲東部における出雲３～６期の石室と墳丘……273
第 10 図　出雲西部における出雲3～6期の石室と墳丘の位置…274
第５図　羨道部内の閉塞２……284
第６図　羨道部内の閉塞３……285
第７図　前庭部まで伸びる閉塞……286
第８図　密閉度の高い状態で発見された横穴式石室……287
第２図　家形石棺からみた出雲の３地域区分……291

第３図　出雲西部における組合せ式家形石棺の編年……295
第４図　石棺の蓋石がない未盗掘横穴墓……296
第５図　福岡県王塚古墳石室……298
第６図　熊本県宮穴横穴墓群……298
第７図　出雲における組合せ式家形石棺付属施設の型式組列…301
第８図　組合せ式家形石棺に伴う付属施設の変遷……302
第９図　組合せ式家形石棺に伴う付属施設の分布……303

第７章　第５節

第１図　中村１号墳出土馬具の組み合せ……308
第２図　花形鏡板轡・花形杏葉分布図……310
第３図　島根県内馬具出土古墳分布図……313

第７章　第６節

第１図　脚形態の分類……319
第２図　かえり高計測位置……323
第３図　Ⅲｂ類からⅢｃ類への変化の過程……324
第４図　出雲東部における有蓋高杯の編年……326
第５図　出雲西部における有蓋高杯の編年……327
第６図　大型の有蓋高杯Ⅲｂ類……329
第７図　有蓋高杯の蓋の分類……330
第８図　趾の計測位置……331
第９図　出雲３～４期におけるＡ型趾……332
第 10 図　出雲におけるＢ型趾の編年……333
第 11 図　横瓶の計測位置……335
第 12 図　横瓶胴部最大径による分類……335
第 13 図　大型横瓶の口縁部高と型式……336
第 14 図　出雲における横瓶の編年……337

第８章

第１図　中村１号墳の葬送過程……348
第２図　黒木山５号横穴墓遺物出土状況……349

表

第１章～第４章

第１表　中村１号墳調査指導委員会（３次調査委員名簿）……4
第２表　中村１号墳調査の経過……7
第３表　出土鉄鏃一覧……79
第４表　飾金具一覧……92
第５表　中村１号墳の石室内遺物出土位置……104
第６表　中村１号墳の葬送過程……104

第５章　第２節

第１表　保存処理工程記録（1）……117
第１表　保存処理工程記録（2）……118

第５章　第４節

第１表　分析試料一覧……131
第２表　金箔の半定量結果……142
第３表　銅鏡の半定量結果……143
第４表　ガラスの半定量結果……144
第５表　木質の樹種同定結果……149

第５章　第７節

第１表　中村１号墳出土資料の鉛同位体比測定結果……168

第５章　第８節

第１表　中村１号墳ほか出土須恵器の胎土分析値一覧表……174

第５章　第９節

第１表　全リン測定結果……178
第２表　人間，動植物，土壌中の元素の割合……180

第６章　第１節

第１表　出雲地域における銅鏡出土後期古墳……188

第７章　第１節

第１表　出雲における横穴式石室の実年代比較……237
第２表　Ⅰ類石室の特徴……241
第３表　Ⅰ類石室の分類……241
第４表　出雲における副葬品からみたⅠ類石室の変遷と特徴…243
第５表　Ⅰ・Ⅲ類石室の玄門面積の比較……249
第６表　出雲における主な横穴式石室の編年表……251
付表１　Ⅲ類石室の玄室縦横比の変遷……253
付表２　Ⅲ類石室の羨道幅と玄門幅の比率の変遷……253

第７章　第２節

第１表　出雲西部における主要な横穴式石室玄室の面積と墳丘…260
第２表　Ⅰ・Ⅱ類石室玄における超大型の玄室……260
第３表　Ⅰ・Ⅱ類石室玄における大型の玄室……260
第４表　Ⅰ・Ⅱ類石室における中型の玄室……260
第５表　Ⅰ・Ⅱ類石室における小型の玄室……260
第６表　出雲東部における主要な横穴式石室玄室の面積と墳丘…261
第７表　Ⅲ類石室における大型の玄室……261
第８表　Ⅲ類石室における中型の玄室……261
第９表　Ⅲ類石室における小型の玄室……261
第 10 表　Ⅲ類石室における超小型の玄室……261
第 11 表　出雲西部における大型古墳……268
第 12 表　出雲東部における大型古墳……268
第 13 表　出雲西部における中型古墳……268
第 14 表　出雲東部における中型古墳……268

第 15 表　出雲西部における小型古墳……268
第 16 表　出雲東部における小型の古墳……268
第 17 表　出雲東部における玄室と墳丘規模の関係……271
第 18 表　出雲西部における玄室と墳丘規模の関係……271
第 19 表　玄室と墳丘規模の組合せと分類……271
第 20 表　東西出雲における玄室と墳丘規模の組合せ関係……271

第７章　第３節

第１表　日本における３m以上の閉塞……281

第７章　第４節

第１表　出雲西部における家形石棺の変遷……293
第２表　出雲における組合せ式家形石棺の付属施設の特徴1…301
第３表　出雲における組合せ式家形石棺の付属施設の特徴2…301

第７章　第５節

第１表　花形鏡板轡・花形杏葉一覧……310
第２表　島根県内馬具出土古墳一覧……312

第７章　第６節

第１表　大谷編年の杯蓋Ａ類の特徴と時期……318
第２表　中村１号墳杯蓋の特徴……318
第３表　出雲東部における有蓋高杯1段透かし（Ⅰａ類・Ⅱａ類・Ⅲｃ類）の特徴……320
第４表　出雲東部における有蓋高杯２段透かし（Ⅲｂ類）の特徴……320
第５表　出雲西部における有蓋高杯1段透かし（Ⅰａ類・Ⅲｃ類）の特徴……321
第６表　出雲西部における有蓋高杯２段透かし（Ⅱｂ類・Ⅲｂ類）の特徴……322
第７表　出雲東部における有蓋高杯1段透かしの特徴のまとめ…323
第８表　出雲西部における有蓋高杯1段透かしの特徴のまとめ…323
第９表　出雲東部における有蓋高杯2段透かしの特徴のまとめ…323
第 10 表　出雲西部における有蓋高杯２段透かしの特徴のまとめ……323
第 11 表　出雲における有蓋高杯身の型式組列と時期……323
第 12 表　出雲東部の有蓋高杯の蓋……330
第 13 表　出雲西部の有蓋高杯の蓋……330
第 14 表　中村１号墳有蓋高杯蓋の特徴……331
第 15 表　出雲３～４期におけるＡ型横穴の計測値……332
第 16 表　出雲におけるＢ型横穴の特徴……333
第 17 表　大型横瓶の特徴……336
第 18 表　大型横瓶の型式的特徴……336
第 19 表　小型横瓶の特徴……338
第 20 表　中村１号墳出土須恵器の器種別の型式と時期……338

第８章

第１表　埋葬時の副葬品の組合せ……347

写　真

第１章～第４章

写真１　１次調査の状況……2
写真２　３次調査の状況……8
写真３　中村１号墳周辺の遺跡（空撮）……15
写真４　米軍撮影空中写真……21
写真５　中村２号墳箱式石棺（南西から）……24
写真６　中村横穴墓群全景（南東から）……24
写真７　Ａ石棺蓋の打撃痕跡……45
写真８　灯明石と障石の構造……46
写真９　Ｂ石棺内埋土ブロック取り上げ状況……59

第５章　第１節

写真１　遺物取り上げ状況……110

第５章　第２節

写真１　Ｍ１珠文鏡……119
写真２　Ａ３ガラス製品……119
写真３　Ａ６鈴及びＡ９鈴断片……120
写真４　Ｓ１装飾大刀……120
写真５　Ｓ２装飾大刀……121
写真６　Ｓ３－１柄頭……121
写真７　Ｂ 13 －１・２鏡板……122
写真８　Ｂ 15 素環轡……122
写真９　Ｂ 16 杏葉……123
写真 10　Ｂ 30 雲珠……123

第５章　第４節

写真１　柄頭・大刀の木質……152
写真２　刀子の木質……153
写真３　大刀の木質……154

第５章　第６節

写真１　珠文鏡Ｍ１　鏡面に残る絹布の痕跡（10 倍大）……165
写真２　Ｘ線透過像（１）……165
写真３　Ｘ線透過像（２）……166

第１章　調査の目的と経過

第１節　古墳の発見

平成 14 年（2002）５月２日の午後，旧平田市国富町（現出雲市国富町）の砂防工事用進入道路を建設中の業者から，横穴墓らしいものを発見した，との連絡が当時の島根県出雲土木建築事務所の工務２課（以下，出雲土木）に入った。

この連絡は直ちに出雲土木から旧平田市建設課（以下，市建設課），さらに，市建設課から旧平田市教育委員会生涯学習課（以下，市教委）へと伝えられ，３者で現地を確認することになった。

目的地は，少し小高く，頂上はほぼ平坦であった。示された場所には，重機で掘った穴があき，その底に平らな石が見えた。開口部から中を覗き込むと，積み重ねられた石と，石棺，そして須恵器の壺などが横転している状態が見てとれた。このことから，通報時に言われていたような横穴墓ではなく，横穴式石室であることが明らかとなった。

その後，業者から発見時の状況説明を受けた。作業用道路を作るために，前日（５月１日）まで立木伐採・伐根，整地作業などの準備工事を行った。２日の朝に安全祈願祭を行った後，掘削工事に着手し，大石を重機で除去しようとしたところ，石が割れて落下した。空洞ができたので，中に入って状況を確認した。その際，石室内から割れた須恵器片を取り上げた。埋蔵文化財と思われたので，発注者の出雲土木に連絡した，とのことであった。採取されていた須恵器片は全て落下した天井石付近のもので，地表で拾ったものではないことなどを確認した。

状況説明を聞いた後，開口部から脚立を使って中に降り，石室の状況を観察した。

① 開口部は，玄室の天井石が割れてできたもので，その直下に落下した石がある。
② 石室は複室構造である。島根県内でも石室規模が大きい部類にはいる。
③ 玄室には組合せ式の横口式家形石棺があり，その前面には灯明石と思われるものが付く。
④ 前室には，石室長軸に直交する石障状のものが見える。
⑤ 副葬品は以下のものを確認した。玄室内に落下した天井石の下敷きとなった須恵器，石棺上の須恵器短頸壺，石棺前の須恵器壺，そして奥壁左側に立てかけられた大刀，前室の左袖石に立てかけられた装飾付大刀である。このことから，未盗掘古墳の可能性高い。
⑥ 室内は，湿度が高く，壁石の表面はしっとりと濡れていた。石の隙間から植物の根が垂れているものの，コケなどは見られなかった。また，昆虫などの生き物の姿もなかった。
⑦ 石室内の土砂は，入口方向から奥壁に向かって，起伏もなく自然ななだらかな堆積状況をしていた。
⑧ 各壁は，亀裂こそあるものの，欠落したり崩れたりした様子はなかった。

以上のことから，本古墳が大変重要であると判断し，そのことを出雲土木に伝え，工事を一時中断するよう依頼した。そのうえで，開口部を鉄板と土嚢で塞ぎ，その上にシートを掛けるなどの応急処置を行い，現地確認を終了した。

市教委は，島根県教育委員会（以下，県教委）に第一報をいれ，５月７日に，現地で古墳の発見と状況を報告した。

５月 10 日には，島根県土木部砂防課・出雲土木・県教委・市教委の４者で，古墳の取り扱いについて協議を行った結果，古墳の重要性を考慮するとともに，工事の遅延を防ぐため，工事用の進入道路は古墳を迂回するルートで検討することとなった。そして，丹堀川沿いのルートに決定し，工事は再開することとなった。これにより，古墳の上を通る工事用道路は，当初の目的を失うことになる。

工事用道路は元々，砂防工事が終了した段階で，市道に切り替えることを前提としていた。そのため，土地は地権者から旧平田市に寄贈されており，議会での市道認定も終了していた。この道路問題については，古墳の調査が終了し古墳の評価が確定した後，改めて検討することで地元の了解を得た。

上記のように不時発見のこの古墳は，５月 14 日に中村１号墳と命名された。

第２節　調査の目的と経過

１　１次調査（写真１，図版５・41・63）

上記のような経緯から古墳を正確に評価するために発掘調査が必要になった。県教委及び調査指導者（島根大学渡辺貞幸教授）の指導のもと，古墳の概要がわかる基礎資料をまとめる目的で平成 14 年６月７日～ 10 月 31 日まで調査を実施した。調査を行う上で，できるだけ最低限の掘削に留めることに留意した。この調査が１次調査である。

墳丘調査は，まず，地形測量用に，国土座標と標高を取り付けた杭を設置した。これをもとに，古墳の測量図（縮尺１/100，等高線は 25㎝間隔）を作成し，そして周辺の地形との関係を見るため，出雲土木作成の縮尺１/1,000 の工事用平面図と合成した。また，測量にあたっては，墳形が前方後円墳の可能性も考慮した。

石室内調査は，発見時の石室内部の状況を残すために，大判カメラ（４×５インチ判）で石室内を撮影し，石室の測量図（縮尺１/10）を作成することから始めた。そして，前室の装飾付大刀を取り上げた。この大刀は，前室側の左袖石に立てかけられていたもので，切っ先を下にしており，全長の約

石室発見状況の撮影状況

前室大刀の取り上げ

写真１　１次調査の状況

半分が土砂の上に露出していた。今まで封鎖されていた石室が開口したことにより，大刀の腐食が進行するおそれがあることから，すぐに取り上げた。

調査は６月７日に開始し，10 月 31 日に現地調査を終了した。この間，９月１日には，第１回市民現地説明会を開催した。午前は地元向け，午後は一般市民向けとして実施し，約 360 人の見学者があった (図版 62・63)。

２　２次調査（図版 12・46）

古墳の形と規模を確認することを目的に必要最低限の調査をすることとし，平成 15 年（2003）９月 26 日～平成 16 年（2004）１月 31 日まで調査を実施した。これが２次調査である。

９月26日から伐採を開始し,前年度作成した地形測量図をもとに,さらに広い範囲の測量を行った。その後，墳丘のトレンチ調査を開始した（第９図)。調査に当り，墳丘の中心と石室の長軸を基準とした。玄室の四隅を対角線で結び，その交点を墳丘の中心（原点）と仮定した。また，原点から横穴式石室の入口までの長さを推定し，墳丘裾の見当をつけた。トレンチは５本設定した。

１・２トレンチは，前方後円墳の前方部の有無を確認するため，等高線に直交するように配置した。だが，いずれも，丹堀川の氾濫による堆積と判明し，前方部の存在の可能性はなくなった。

３・４・５トレンチは，後円部の規模と墳丘の構造を確認するために設定し，原点から放射状に配置した。特に５トレンチは，１・２トレンチの結果から前方部の存在の可能性は低かったが，念を押す目的もあった。３・４・５トレンチでは黄色土と黒色土の互層部分が見つかり，墳丘の盛土と確認した。当初は数 10㎝で地山まで達すると考えていたが，場所によっては川の氾濫による土砂が厚く堆積しており，予想に反し２m近くまで掘り下げる結果となった。

１・２次調査の２か年の成果としては，次のようなことがあげられる。

① 古墳は，直径約 16 m，高さ３m以上の円墳。
② 外部施設の埴輪や葺石は，現状では不明。
③ 横穴式石室は，切り組み積みの複室構造であり，規模は全長 7.4 m以上，幅は奥壁で 1.8 m以上，高さは玄室で 1.75 m以上。石室の構築は，墳丘築造基底面より一段低いところから始まる。
④ 平田市内（当時）の石室としては最大級。
⑤ 副葬品は，玄室では大刀・須恵器が，前室では装飾付大刀，鉄鏃，須恵器を確認。
⑥ 古墳の時期は，石室の平面形や側壁，奥壁の構成と石材の加工具合などから，６世紀中葉頃と推定。付近の山根垣古墳（出雲市西郷町）や神戸川流域の上塩冶築山古墳（出雲市上塩冶町）に近い時期。

これら１・２次調査の成果を発掘調査報告書にまとめ，年度末に刊行した[(1)]。その後，平成 16 年（2004）度には取り上げた装飾大刀の保存処理を実施した。

工事用道路の取り扱いについては，土地を寄贈していただいた元地権者や地元の皆様に，古墳が重要であることを理解していただき，市道は建設できないことに対し了承を得た。したがって，当初の市道認定を取り消し，寄贈された土地はそのまま市の土地とし，古墳の保存用地となった。

翌年の平成 17 年（2005）度には，装飾大刀の保存箱製作と，古墳周辺の環境整備として，排水路

改修工事の測量設計や排水路の雨水流量調査を実施した。　（原　俊二）

註

（1）平田市教育委員会編 2004『中村１号墳』平田市埋蔵文化財調査報告書第 12 集

３　３次調査

３次調査は，平田市と周辺の１市４町が合併した新出雲市になって実施した。これは，未盗掘と推察される横穴式石室を内蔵する古墳を十分な調査体制で実施するためである。合併してから１年後の平成 18 年（2006）に調査を開始し，平成 24 年（2012）に報告書刊行する運びとなった。調査を開始するにあたって，調査指導委員会（委員長　渡辺貞幸島根大学教授）を設置し（第１表），第三者の指導を受けながら調査を実施した。当初から遺跡の重要性を認識していたため，調査計画に加え調査後の保存管理計画も検討し，発掘調査後の公開を見据えた３次調査に取り掛かった。調査は国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けた市内遺跡発掘調査事業で実施した。費用の内訳は国が事業費の 50％，出雲市が 50％である。

（1）　調査の目的

工事用道路新設工事の関係で古墳を中心とした周囲の樹木類はきれいに伐採され，現状では墳丘が丸裸の状態となっていた。そのため，盛土や石室への影響が懸念された。また，工事用車両が石室上面に乗り作業を行ったためか，横穴式石室の特に前室の側壁石材に亀裂が入っており，今後破損していく恐れもある。これらの要素を踏まえ文化財保護の観点から，墳丘，石室，周辺環境の保護を早急に行う必要があるため，詳細な発掘調査を実施する必要があった。

石室内には，奥壁に立てかけた状態で大刀がもう１本残ったままになっており（図版５・34），また前室の大刀を取り上げる際に鉄鏃が数本残されていることがわかっている。遺物自体のことを考えれば，現状での維持は難しく，できるだけ早い段階に調査し，取り上げ，保存処理を施すほうが 100％ではないにしろ，現状よりは良いと考えた（澤田委員による助言）。

そこで，当初は石室内を完掘し，すべての金属器を取り上げ保存処理を行い保護することを目的とした。そして，詳細な墳丘規模を確定する目的で，トレンチ調査を行った。また，石室への進入回数などの把握と，石室の本来の入り口を確認することを目的に閉塞部の調査も行った（図版 10・11）。

上記のような調査目的と方針を決めて調査に臨むこととしたが，調査の進行に合わせて，調査指導委員会を開催し，その都度，現状確認と今後の調査方針を検討しながら調査を進めることにした。

第１表　中村１号墳３次調査指導委員会名簿

氏　名	役職等	委員期間	指導項目
渡辺貞幸	島根大学法文学部教授	2006/ 4 ～ 2009/ 3	古墳全般
	島根大学名誉教授	2009/ 4 ～ 2012/ 3	
大谷晃二	島根県立松江北高等学校教諭	2006/ 4 ～ 2008/ 3	古墳全般
	島根県立矢上高等学校教諭	2008/ 4 ～ 2012/ 3	
角田徳幸	島根県教育庁文化財課	2006/ 4 ～ 2012/ 3	古墳全般
澤田正明	島根県教育庁文化財課	2006/ 4 ～ 2012/ 3	保存科学
勝部智明	島根県教育庁文化財課	2006/ 4 ～ 2007/ 3	指導機関
東森　晋		2007/ 4 ～ 2008/ 3	
池淵俊一		2008/ 4 ～ 2011/ 3	
松尾充晶		2011/ 4 ～ 2012/ 3	

調査にあたって，不測の事態や小動物の侵入，雨水やゴミが入るのを避けるため石室を覆う３間×４間，高さ 2.7 mのプレハブを設置した（図版 47）。また，仮設電源を設置し，石室内の照明を確保した。そして，石室内へは，天井石に開口した穴に梯子をかけて出入りした。

（２）　調査の経過

石室内には約６トンの土砂が流入しており，それを移植ゴテやナイフ，竹串で取り除いた。取り除いた排土は土嚢袋に入れ，十数個溜まった段階で，プレハブの骨組につるした滑車を用い，一袋ずつ石室内から釣り上げた。これらの排土は，出雲市文化財課に持ち帰り，水洗し遺物の有無を確認した。

石室内の土砂を取り除いていると，玄室奥に立てかけられた大刀の鞘には木質が残存していることがわかった。大刀が直立していることから，鞘の木質が剥がれ落ちることが推測された（図版５）。そのため，急遽この大刀を取り上げて保護することにした。他の石室内遺物は，基本的に石室床面を確認してから随時取り上げた。

閉塞部には自然石が長さ推定６ｍにわたり積まれ，羨道天井石に接し，石室は完全に閉ざされていた（図版４・40）。つまり未盗掘であることが確実となったのである。このように閉塞石がほぼ完存する例は少なく（第７章３節），石室内から「死者だけがみることができる光景」を，目の当たりにできる貴重な発見となった。そこで，閉塞部を保存することが重要と判断し，これらを取り除くことを中止した。また，石室内に未盗掘部分を残すことで，保存と公開が同時並行的に行える可能性がでてきた。そこで，石室内に未盗掘部分を残すことへと方針を転換した。具体的には，玄室の石棺の掘削を中止し未盗掘部分を残すこととした。さらに床面の玉砂利面も保存し，玄室玉砂利内にある須恵器（図版 36）や石棺内にある須恵器（図版６）は取り上げないことを決定した。ただし，石室や石棺の築造過程を確認するため，および，確認した床面が初葬面にあたるかどうかを判断するため，玄室と前室の各１か所で最小限の範囲のみ断ち割り調査を行った（図版 42）。その結果，現状の床面の下層に，埋葬面はないと判断した。また，石室と石棺の築造過程が明らかになった（第４章第１・２節）。

墳丘確認調査では，６・７トレンチの２本を設定し，６トレンチで明確な周溝を確認した（図版 12・47）。２次調査では直径約 16 ｍの円墳と報告されていたが，３次調査の結果，直径約 30 ｍの円墳と規模を修正するにいたった（第３章）。

石室内および墳丘トレンチから古墳に関係するおよそ 250 点の遺物が出土した（図版 13）。取り上げた石室内の須恵器から古墳の築造時期は６世紀末～７世紀初頭と考えられ（第７章６節），遺物からの評価ができなかった１・２次調査の年代観を修正することになった。

ここで年度ごとの作業内容をまとめておく。平成 18・19 年（2006・2007）度に，石室内と閉塞部および墳丘のトレンチ調査を行い，石室内と閉塞部の３次元測量を実施した。主な現地調査は，この２年で終了した。閉塞部は，閉塞石が残っている部分を土嚢で埋め戻し，地表近くは排土で埋め戻し，タービーシートで覆った。

平成 20 年（2008）度には，古墳の立地を検討する目的で周辺地形測量（面積 1,500㎡，縮尺１/200）を実施した。また，取り上げた須恵器内の土砂および前室石棺内の土砂を文化財課へ持ち帰り，室内で慎重に発掘した。これらを発掘する前に，Ｘ線撮影を行い遺物の有無を確認した。また，石室内の土砂の水洗を行なった。

平成 21 年（2009）度は，文化庁主催「発掘された日本列島 2009 展」に遺物 59 点を出品した。また，石室床面の断ち割り調査を実施し，平成 22 年（2010）度にも継続して行なった。

すべての金属製品について，平成19～21年度の3年かけて保存処理を実施した。それと同時にX線撮影と材質分析，鉄鏃塊はX線CT撮影（図版65）を行った。金属製品の写真撮影は，処理前と処理後の2回行い，図版編には処理後の写真を掲載している（図版14～27）。出土品の実測は，平成19～21年度に行った。

以上7年にわたった3次調査は，その間11回の調査指導員会を開催し，方針を修正しながら慎重に進めていった。閉塞部を保存したことと，未盗掘部分を残したことで常時公開はできなくなった。しかし，そのおかげで，中村1号墳の横穴式石室は全国的にも例のない良好な状態を保つ石室になった（第7章第3節）。同時に，この石室の保護と整備，活用が今後の課題として残っている。

調査の公開は，石室や遺物を中心に随時行ってきた。そして，平成22年（2010）4月29日からは出雲市大津町の出雲弥生の森博物館で遺物と石室模型，発掘ビデオなどを常時展示している。現地では，出雲市単独で古墳の周辺を用地買収し，説明看板や駐車場，排水路などの簡易整備を行い，平成23年（2011）4月から現地見学が可能な状態（石室の見学は不可）となった。

報告書作成は，平成22年度（2010）から24年度（2012）当初にかけて行なった。報告書は2分冊で，平成22年度に図版編，24年度に本文編（本書）を印刷した。

以上のような経過をたどって，本報告書を刊行する運びとなった。最後に法令に関する手続きと，調査経過（第2表）をまとめておく。

平成18年（2006）7月4日　『埋蔵文化財発掘調査の通知』を出雲市教育委員会（以下，市教委）から島根県教育委員会（以下，県教委）へ
平成19年（2007）4月2日　『埋蔵文化財発掘調査の通知』を市教委から県教委へ
7月30日『埋蔵文化財発見届』を市教委から出雲警察署へ
7月30日『埋蔵文化財保管証』を市教委から県教委へ
7月30日『拾得物件預り書』が出雲警察署から市教委へ
8月31日『埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）』県教委から市教委へ
平成20年（2008）3月12日『県帰属文化財譲与申請書』を市教委から県教委へ
3月26日『島根県帰属文化財の譲与について（通知）』が県教委から市教委へ
5月19日『埋蔵文化財発掘調査の通知』を市教委から県教委へ
平成21年（2009）4月22日『埋蔵文化財発見届』を市教委から出雲警察署へ
4月22日『埋蔵文化財保管証』を市教委から県教委へ
4月23日『拾得物件預り書』が出雲警察署から市教委へ
5月14日『埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）』県教委から市教委へ
平成22年（2010）6月3日　『埋蔵文化財発掘調査の通知』を市教委から県教委へ

（坂本豊治）

第２表　中村１号墳の調査の経過

調査歴	年月日	項　目	内　容
古墳の発見	2002/ 5/ 2	工事中に発見	
	2002/ 5/ 7	島根県教育委員会と協議	
	2002/ 5/ 8	工事用進入路ルート変更協議	
	2002/ 5/10	ルート変更決定，古墳は現状保存	
	2002/ 5/13	事業者から業者に工事中止命令	
	2002/ 5/14	遺跡名が中村1号墳となる	
	2002/ 6/ 4	中村地区工事関係者説明会	
一次調査	2002/ 6/ 7	1次調査の開始，石室内の落石（天井石）の除去，前室大刀取り上げと石室の測量	
	2002/ 6/16	中村地区自治会で古墳の概要説明	
	2002/ 6/27	島根大学渡辺貞幸教授，松江北高等学校大谷晃二教諭調査指導	
	2002/ 9/ 1	第1回市民現地説明会	石室の公開，360 人
	2002/10/31	1次現地調査終了	
二次調査	2003/ 9/26	2次調査開始	墳丘規模確認調査
	2003/10/17	島根県教育委員会調査指導	
	2003/11/ 6	島根大学教授渡辺貞幸教授，島根県教育委員会調査指導	
	2003/11/19	島根県教育委員会調査指導	
	2003/11/29	三瓶フィールドミュージアム中村唯史指導員調査指導	土層，石材
	2003/12/ 2	松江北高等学校大谷晃二教諭調査指導	
	2003/12/25	島根県教育委員会調査指導	
	2004/ 1/22	島根大学渡辺貞幸教授，松江北高等学校大谷晃二教諭，島根県教育委員会調査指導	
	2004/ 1/31	2次現地調査終了	
	2004/ 3/31	1・2次調査の報告書刊行	平田市教育委員会発行
	2004/ 7/30	前室大刀保存処理委託	
	2005/ 3/22	平田市と１市4町合併，新出雲市の誕生	
	2006/ 3/31	前室大刀の報告（出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第 16 集）	出雲市教育委員会発行
三次調査	2006/ 4/26	3次調査の第1回調査指導委員会	調査方針について，石室内完掘の方向
	2006/ 6/18	第3回市民説明会	3次調査事前説明会，70 名
	2006/ 7/10	3次調査の開始	石室内調査と閉塞部調査
	2006/ 8/25	文化庁記念物課　清野調査官調査指導	調査方針について
	2006/ 9/25	第2回調査指導委員会	現状報告
	2006/12/ 7	第3回調査指導委員会	倭装大刀の取り上げと調査方針
	2006/12/ 8	発掘調査中間報告記者発表1	倭装大刀の公開
	2007/ 2/19	第4回調査指導委員会	玄室石棺の掘削を行わないこと（保存）を決定
	2007/ 3/22	発掘調査中間報告記者発表2	報道機関に石室内を公開
	2007/ 5/16	第5回調査指導委員会	墳丘確認トレンチの位置決定
	2007/ 5/27	第4回市民現地説明会（国富自治会向け）	副葬品と石室の公開，70 名
	2007/ 6/ 3	第4回市民現地説明会（一般向け）	副葬品と石室の公開，60 名
	2007/ 6/ 9	第4回市民現地説明会（研究者向け）	副葬品と石室の公開，60 名
	2007/ 6/20	第4回市民現地説明会（国富小学校6年生）	副葬品と石室の公開，40 名
	2007/ 7/18	第6回調査指導委員会	石室内遺物の取り上げについて
	2007/ 8/22	発掘調査中間報告記者発表3	馬具3組出土
	2007/ 9/21	第7回調査指導委員会	墳丘トレンチ調査について
	2007/11/29	第8回調査指導委員会	墳丘規模が約 30 mの円墳とほぼ確定
	2007/12/12	島根大学総合理工学部酒井哲弥助教授調査指導	石室石材と土石流について
	2007/12/16	第5回市民現地説明会	副葬品の墳丘トレンチの公開
	2008/ 7/11	第9回調査指導委員会	石室床面断ち割り箇所の決定
	2008/ 9/17	文化庁協議	床面断ち割りと今後の方針について
	2009/ 3/27	第 10 回調査指導委員会	床面断ち割りの結果について
	2010/ 4 ～ 2011/ 3	文化庁主催「発掘された日本列島展 2009」に出展	59 点出展
	2010/ 6/14	床面断ち割り継続調査と補足測量開始	
	2010/ 9/30	3次調査の現地調査終了	床面断ち割り調査終了
	2010/10/23	文化庁記念物課　渡辺調査官調査指導	報告書と今後の方針について
	2010/11/10	第 11 回調査指導委員会	断ち割り追加調査の結果と報告書について
	2010/12/18	文化庁記念物課　禰宜田主任調査官調査指導	報告書と今後の方針について
	2011/ 1/26	愛媛大学下條信行名誉教授調査指導	葉佐池古墳との比較と葬送儀礼について
		松山市　栗田茂敏氏調査指導	葉佐池古墳との比較と葬送儀礼について
	2011/ 2/28	九州大学田中良之教授調査指導	葬送儀礼について
	2011/ 3	中村1号墳図版編（第2分冊）刊行	
	2011/ 8/31	文化庁記念物課　林調査官調査指導	報告書の内容について
	2012/ 2/ 6	文化庁記念物課　禰宜田主任調査官，林調査官調査指導	報告書の内容について
	2012/ 3/12	三瓶フィールドミュージアム中村唯史指導員調査指導	古墳の立地について
	2012/ 5	中村1号墳本文編（第1分冊）刊行	

1

2

3

4

5

6

7

1　石室内実測状況
2　調査指導委員会の様子
3　石室内から天井を見上げる　（壊れた天井部分）
4　須恵器蓋杯内部の土壌サンプリング
5　石室内土砂水洗
6　説明会用パンフレット
7　駐車場と看板

写真２　３次調査の状況

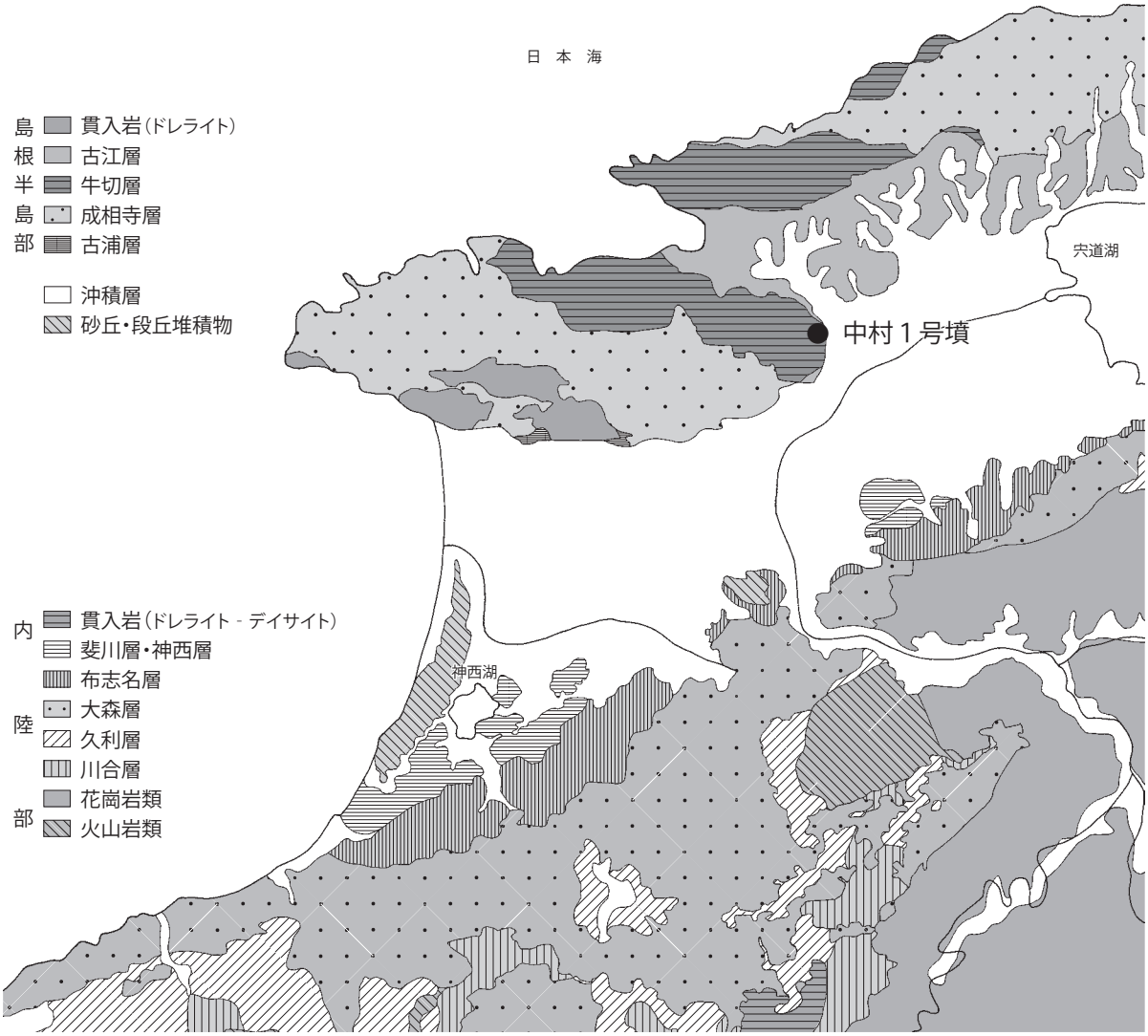
第２章　遺跡の立地と環境

第 1 節　遺跡の地理的環境

1　立　地

中村 1 号墳は島根県出雲市国富町大平 1948 － 2 ほかに所在する。島根県は本州の西部，中国地方の北部に位置する。東は鳥取県に接して近畿地方に，西は山口県を挟んで九州地方に通じ，南は中国山地を隔てて広島県に接する。北は日本海に面す。そして，中村 1 号墳が所在する出雲市は，島根県の東部に位置する。出雲市は，地形から北の島根半島，中央の出雲平野，南の中国山地という 3 地域に分けられる。中村 1 号墳は発見された平成 14 年（2002）当時，平田市国富町であったが，平成 17 年（2005）の 2 市 4 町の市町合併により出雲市国富町となった（平成 23 年（2011）には出雲市と斐川町が合併）。国富町は出雲平野の北東にあり，現状は旅伏山（島根半島にある）を中心とする山地と北東を流れる平田船川，南を流れる斐伊川との間の，扇形に広がる沖積平野から成り立っている。中村 1 号墳はその旅伏山の南東麓に位置している（第 1 ・ 4 図）。中村 1 号墳が築かれた 6 世紀末～ 7 世

第 1 図　中村 1 号墳の位置（現在）（1：800,000）



第２図　出雲地域の地質図

紀初頭は，出雲大川（奈良時代の斐伊川）が東流し日本海に流れ，中村１号墳の近くまで入海（旧宍道湖）が迫っていたといわれている（写真３，第６図）。

出雲市の地質は，大きく分けると島根半島に新第三紀の地層が，平野部に第四紀の地層が，そして，中国山地に新第三紀とそれよりも古い地層が分布している。島根半島の新第三紀堆積物は，下から古浦層，成相寺層，牛切層，古江層などに区分される（第２図）。

中村１号墳が位置する周辺には牛切層が分布している。牛切層は礫岩，砂岩，泥質岩，安山岩，流紋岩，凝灰岩などからなる。中村１号墳の石室と前室石棺の石材は砂岩，玄室石棺の石材は凝灰岩である。すなわち，中村１号墳に使用された石材は，古墳周辺にある牛切層に由来すると推察でき，近い場所から石材を切り出してきたのであろう。

参考文献

鹿野和彦・竹内圭史・松浦浩久 1991「今市地域の地質」『地域地質研究報告』地質調査所

鹿野和彦・竹内圭史・大嶋和雄・豊遥秋 1991「大社地域の地質」『地域地質研究報告』地質調査所

第２節　遺跡の歴史的環境

１　遺跡からみた歴史的環境

中村１号墳がある旅伏山東南麓を中心とする地域では，縄文遺跡はあまり知られていない。この地域では，弥生時代～古代の遺跡が分布しており，特に古墳時代の古墳や横穴墓が多く発見されている。2000 年代になって，国道 431 号線バイパス建設工事にともなう事前調査などが行われ，また，報告書も刊行され，低地部の遺跡の状況が明らかになりつつある。そこで，旅伏山東南麓地域を中心に，出雲地域（現在の出雲市）の遺跡の状況を概観してみよう（第３～５図・写真３）。

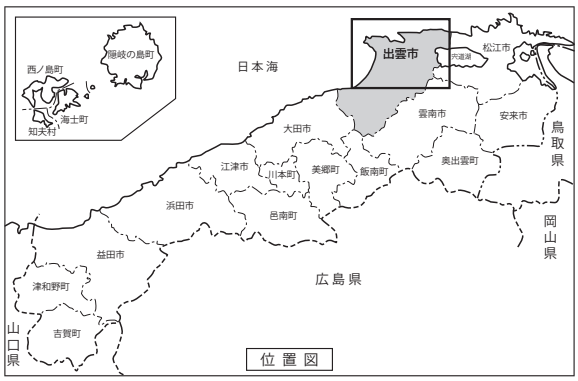
（１）　弥生時代

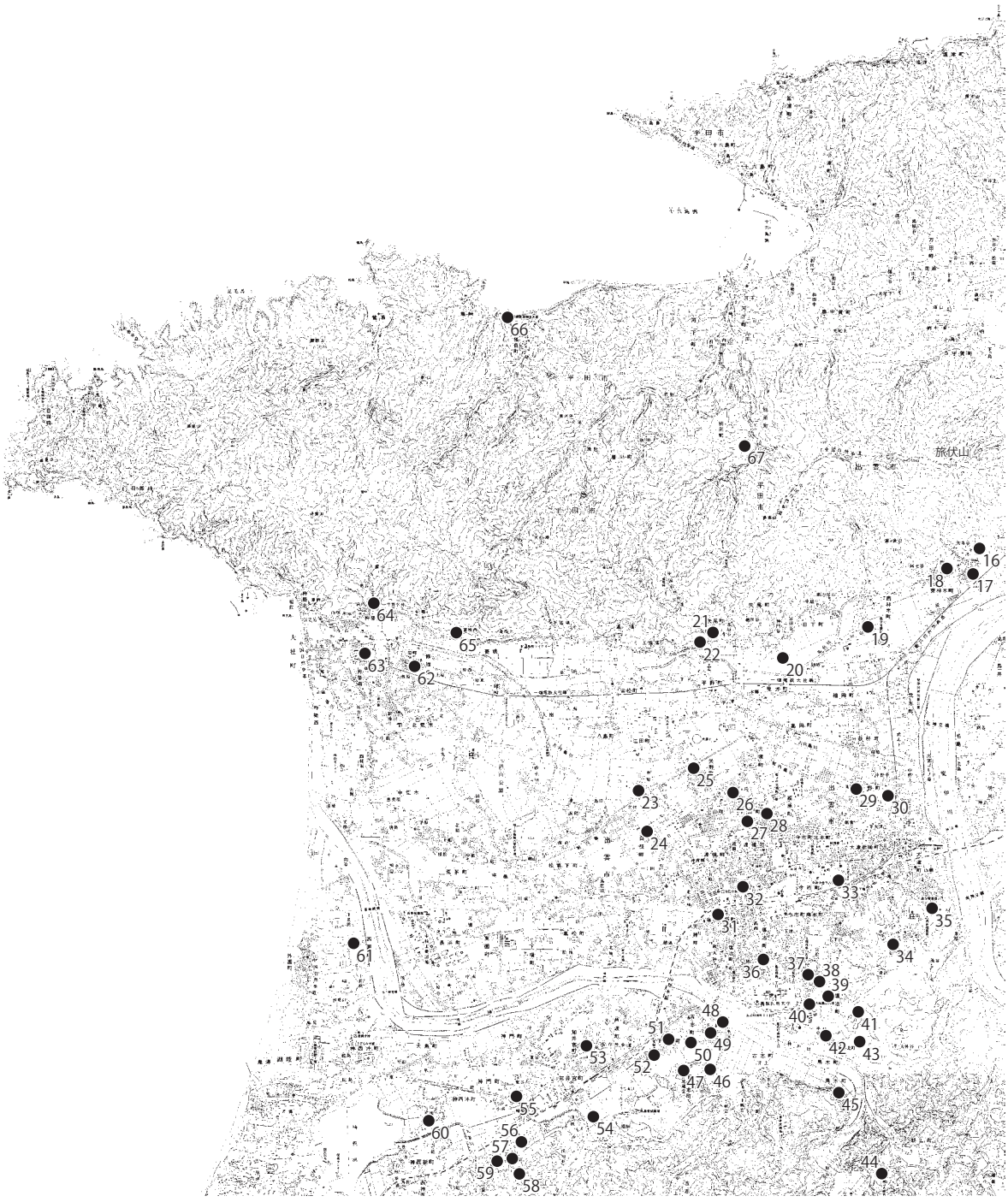
旅伏山東南麓地域における近年の大きな成果は，青木遺跡（出雲市東林木町，第３・４図 17）で発見された弥生中期後葉頃の四隅突出型墳丘墓である。この時期に遡る四隅突出型墳丘墓は出雲平野部では初めての発見である。ただし，その後に続く四隅突出型墳丘墓は後期後葉まで待たねばならず，現状では単発的に採用された墳丘墓と考えられよう。さらに，出雲では初めて近畿式銅鐸の飾耳が出土した。中村１号墳（第４図１）の東にある源代遺跡（国富町，第５図，写真３）からは，管玉製作関連遺物が出土している。また，美談神社２号墳（美談町，第４図 15）の下層からは，中期後半の出雲型広口壺が４点以上出土した。それらの中に，頸部外面に４頭のシカが描かれた絵画土器が１点あり，注目される。

出雲地域では神戸川や斐伊川下流域の微高地や丘陵縁辺部に集落が営まれるようになり，周辺の湿地帯を水田として広げながら集落が発展していったと考えられる。

前期には原山遺跡（第３図 62）において配石墓が確認され，平野部では矢野遺跡（第３図 25），古志本郷遺跡（第３図 48），築山遺跡（第３図 38），三田谷Ⅰ遺跡（第３図 42），蔵小路西遺跡（第３図 27），山持遺跡（第３図 19），里方本郷遺跡（第３図 20）等で前期の土器が出土している。特に矢野遺跡からは前期中葉～後葉の土器や木製品がまとまって出土して注目される。中期には，天神遺跡（第３図 31），白枝荒神遺跡（第３図 24），田畑遺跡（第３図 50），下古志遺跡（第３図 51），知井宮多聞院遺跡（第３図 53）などの遺跡が出現し，出雲平野中央部だけでなく神戸川西岸を含め出雲平野全体に広範囲にわたって大規模な集落が展開されるようになる。また，中期末から後期前葉と考えられる神庭荒神谷遺跡（第４図 70）や加茂岩倉遺跡（第４図 73）からは大量の青銅器が発見されている。そして，ゴホウラ貝の貝輪を腕に装着した人骨が発見された猪目洞窟遺跡（第３図 66）もこの時期である。

そして，弥生時代後期後葉になると，斐伊川左岸の西谷丘陵に四隅突出型墳丘墓が築かれる（第３図 35）。なかでも，９号墓は山陰地方最大級の大きさを誇る。埋葬施設が発掘調査されている３号墓からは吉備地方から搬入された土器や，丹後や北陸地方の影響を受けた土器が出土し，他地域の首長と広域交流があったことを知ることができる。この時期，出雲平野に下古志遺跡，古志本郷遺跡，矢野遺跡，中野清水遺跡（第３図 30），山持遺跡など大規模な集落遺跡が分布している。これらの遺跡から，九州の北部や東北部および西部瀬戸内の土器を中心に，中国地方山間部や北陸，朝鮮半島の遺

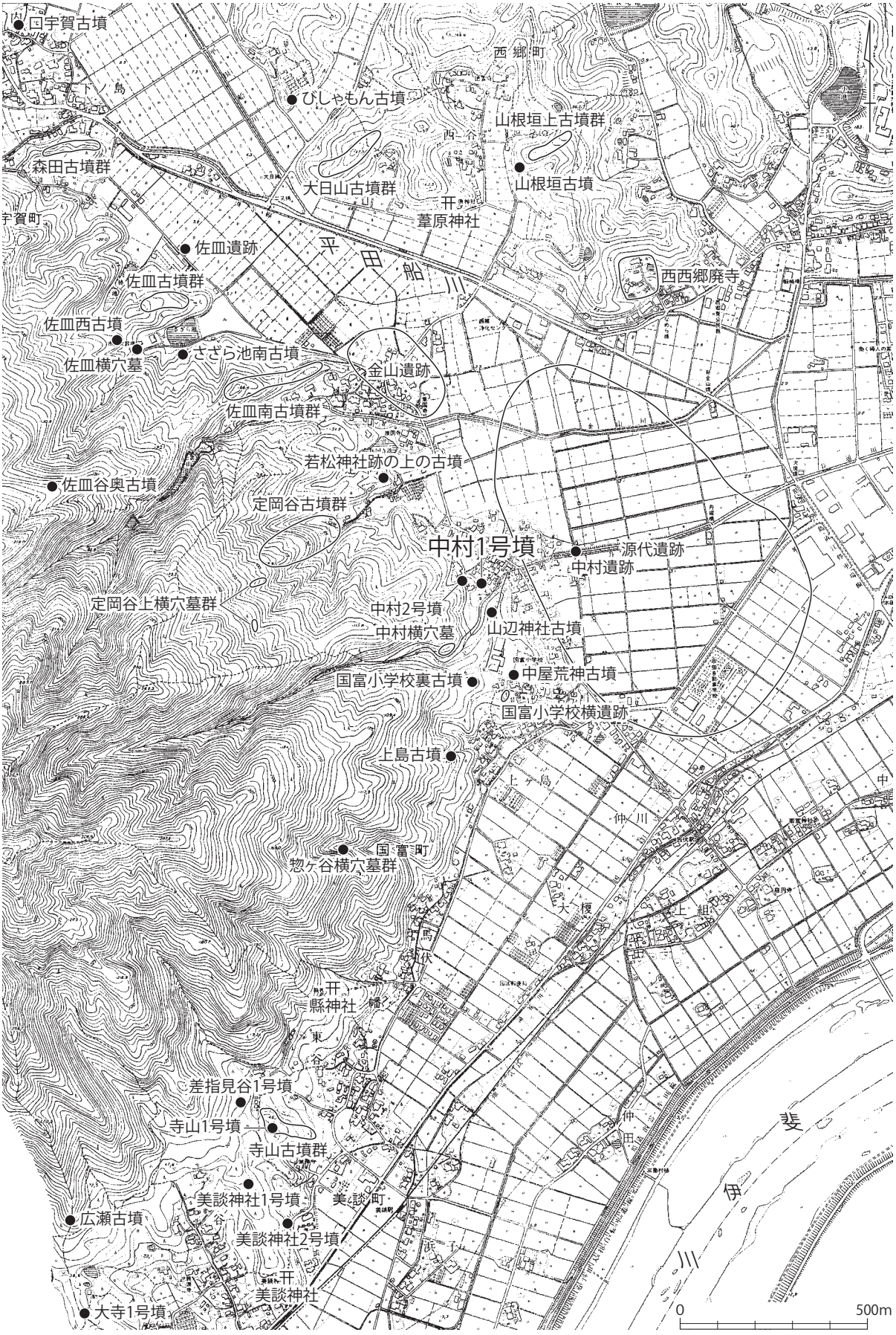




第３図　中村１号墳の位置と周辺の遺跡（１）（１：100,000）

1　中村１号墳
2　中村横穴墓群
3　山辺神社古墳
4　上島古墳
5　西西郷廃寺
6　山根垣古墳
7　上石堂平１号墳
8　小谷下古墳
9　奥屋敷古墳
10　山崎古墳
11　口宇賀古墳
12　佐皿谷奥古墳
13　定岡谷古墳群
14　寺山１号墳
15　美談神社２号墳
16　大寺１・２号墳
17　青木遺跡
18　膳棚山古墳群
19　山持遺跡・山持川川岸遺跡
20　里方本郷遺跡
21　大前山古墳
22　石臼古墳
23　井原遺跡
24　白枝荒神遺跡
25　矢野遺跡
26　小山遺跡
27　蔵小路西遺跡
28　姫原西遺跡
29　中野美保遺跡
30　中野清水遺跡
31　天神遺跡
32　海上遺跡
33　今市大念寺古墳
34　菅沢古墓
35　西谷墳墓群
36　神門寺境内廃寺
37　上塩冶築山古墳
38　築山遺跡
39　池田古墳
40　上塩冶地蔵山古墳
41　上塩冶横穴墓群
42　三田谷Ⅰ遺跡
43　光明寺３号墓
44　朝山古墓
45　刈山古墳群
46　放レ山古墳
47　妙蓮寺山古墳
48　古志本郷遺跡
49　大梶古墳
50　田畑遺跡
51　下古志遺跡
52　宝塚古墳
53　知井宮多聞院遺跡
54　浅柄遺跡
55　神門横穴墓群
56　間谷東古墳
57　御崎谷遺跡
58　北光寺古墳
59　九景川遺跡
60　山地古墳
61　上長浜貝塚
62　原山遺跡
63　鹿蔵山遺跡
64　出雲大社境内遺跡
65　菱根遺跡
66　猪目洞窟遺跡
67　鰐淵寺
68　後谷Ⅴ遺跡
69　結古墳群
70　神庭荒神谷遺跡
71　神庭岩船山古墳
72　軍原古墳
73　加茂岩倉遺跡
74　天寺平廃寺
75　神原神社古墳

第４図　中村１号墳の位置と周辺の遺跡（２）（１：100,000）



第５図　中村１号墳周辺の遺跡分布図（１：15,000）

写真３　中村１号墳周辺の遺跡（空撮）

物やその模倣品などが出土している。このことから，出雲地域では，活発な他地域との交流が行われていたことが分かってきている。このような交流と出雲地域の肥沃な大地を背景に西谷３号墓，２号墓，４号墓，９号墓の首長墓が継続的に築造されたのであろう。

（２）　古墳時代

旅伏山東南麓地域において古墳時代の劈頭をかざる古墳は，大寺１号墳（東林木町，第３・４図 16）である。短小な竪穴式石槨をもつ，出雲最古の前方後円墳（全長 52 m）である。石槨から鉄斧，鉄鋤先，碧玉勾玉が出土した。前期後葉から中期初頭（４世紀末から５世紀初め）の築造と推定される。中期と確定できる古墳は，今のところみつかっていない。大寺１号墳の西方には，膳棚山古墳群（東林木町，第３・４図 18）など中期の群集墳と推定されるものがあるが，その詳細は明らかでない。

後期の６世紀中頃以降は，中小規模の古墳が多数ある。上島古墳（国富町，第４図４）は，径 22 m の円墳とみられているが，墳丘の確認調査は行なわれていない。家形石棺を直葬し，それと平行する短い竪穴式石室をもつ。石棺は出雲最古の刳抜式家形石棺で，横口をあけない畿内型の唯一の例である。鏡，鈴釧，玉類，大刀，馬具など豊富な副葬品が発見されている。ｆ字形鏡板轡と剣菱形杏葉からなる馬具一式や須恵器の型式からみて，６世紀中頃（第３四半期）の古墳である。

美談神社２号墳は，方墳で出雲東部に特徴的な「石棺式石室」の影響を受けた横穴式石室である。金環や馬具が出土した。７世紀前半の築造である。

美談神社２号墳の周辺には，箱式石棺をもつ美談神社１号墳（第５図）のほか，方墳で石棺式石室を内蔵する寺山１号墳（美談町，第４図 14），八角形墳とされる差指見谷古墳（美談町，第５図）など，特徴的な古墳が点在している。

一方，中村１号墳の北には，20 基を越える群集墳・定岡谷古墳群（国富町，第４図 13）がある。６世紀後半から７世紀前半にかけて築造された古墳群で，近傍にはない規模である。

このほか，やや規模の大きい横穴式石室の口宇賀古墳（口宇賀町，第４図 11）や，これらの古墳とは平田船川をはさんだ対岸に山根垣古墳（西郷町，第４図６）などの古墳が点在する。

出雲地域の前期の集落は，古志本郷遺跡や下古志遺跡，山持遺跡などでは集落の区画大溝への土器廃棄がみられ，その後，生活痕跡がみえにくくなる。このように，弥生時代中期から発展してきた集落は全体に減少する傾向がみられる。

中・後期になると三田谷Ⅰ遺跡や中野美保遺跡（第３図 29）など生活遺跡は数例となるが，浅柄遺跡（第３図 54）で住居跡が確認され，御崎谷遺跡（第３図 57）でも大量の遺物が出土していることから，神戸川西岸にはこの時期の集落が営まれていたことがわかってきた。

古墳については，前期に，四隅突出型墳丘墓に系譜がある西谷７号墳（西谷墳墓群）が築造される。前期末になると平野南西部に，山地古墳（第３図 60），間谷東古墳（第３図 56）などの小規模ながら主体部に礫床を有する円墳が見られる。

中期になると，出雲平野の南丘陵上に北光寺古墳（第３図 58）や神庭岩船山古墳（第４図 71）が築かれる。北光寺古墳は全長約 70 mと，この時期の前方後円墳としては出雲地域最大の大きさを誇る。

後期古墳では，今市・塩冶古墳群が際立つ。今市大念寺古墳（第３図 33）→上塩冶築山古墳（第３

図 37）→上塩冶地蔵山古墳（第３図 40）と県内屈指の首長墳が築造されている。また，横穴墓も盛んに造られ，神戸川右岸には石室墳の他に上塩冶横穴墓群（第３図 41），左岸に神門横穴墓群（第３図 55）など大規模な横穴墓群が築造されている。

（３）　奈良時代

中村１号墳の東方低地部からは，奈良時代の墨書土器がみつかっており（中村遺跡，第５図），官衙的な施設が存在すると推定されている。ただ，その後の調査では遺跡の情報が全く得られていない。

この時代の代表的な遺跡には，平田船川左岸に位置する西西郷廃寺（西郷町，第４図５）がある。堂塔の規模構造や伽藍配置は不明だが，『出雲国風土記』に記載される「楯縫郡沼田郷新造院」とみてまちがいない。沼田郷新造院は，楯縫郡大領出雲臣太田が造営した寺院であり，その創建年代は 733 年以前の８世紀前半と確定できる。出土した軒平瓦は，重弧紋に×紋様を重ねた特異な瓦当紋様をもつもので，近在に類品をみない。

近年，青木遺跡（東林木町）からは，奈良時代から平安時代初めにかけて多数の遺構と遺物がみつかった。なかでも，神社遺構と推定される９本柱の建物跡と大量の木簡が注目される。この木簡の中には，「美談郷」「伊努郷」「美談社」の記載があり，郷をこえる領域を単位とする集団によって行なわれた祭祀の存在が推定されている。

出雲地域では，出雲郡家との関連が指摘されている後谷Ｖ遺跡（斐川町，第４図 68），神門郡家との関連が指摘されている古志本郷遺跡などがある。また，出雲国風土記に記載される新造院のうち，神門寺境内廃寺（第３図 36）は朝山郷新造院に，天寺平廃寺（第４図 74）は河内郷新造院と考える説もある。墳墓としては火葬骨を納めた石櫃が出土した光明寺３号墓（第３図 43）や石製骨蔵器を納めた小坂古墳（刈山古墳群，第３図 45），朝山古墓（第３図 44），菅沢古墓（第３図 34）などが知られている。

以上のように，出雲地域の東北に位置する旅伏山東南麓域には，弥生時代以降，重要な遺跡が集中している。

（坂本豊治）

参考文献

出雲市教育委員会 1997『遺跡が語る古代の出雲』

出雲市教育委員会 2006『西谷墳墓群－平成 14 年～ 16 年度発掘調査報告書－』

出雲市教育委員会 2010『矢野遺跡　遺構編（第１分冊）』新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　出雲市の文化財報告 10

島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅰ遺跡 Vol. ３』

島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡Ⅴ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ

島根県教育委員会 2004『青木遺跡（中近世編）』国道 431 号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

島根県教育委員会 2006『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』国道 431 号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　第１分冊（弥生時代）

島根県教育委員会 2007『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区 Vol. 2』

島根県教育委員会 2012『山持遺跡 Vol. 8（6，7区）』

花谷　浩 2008『出雲における県（あがた）の歴史考古学的研究』平成 19 年度科学研究費補助金（奨励研究）成果報告書

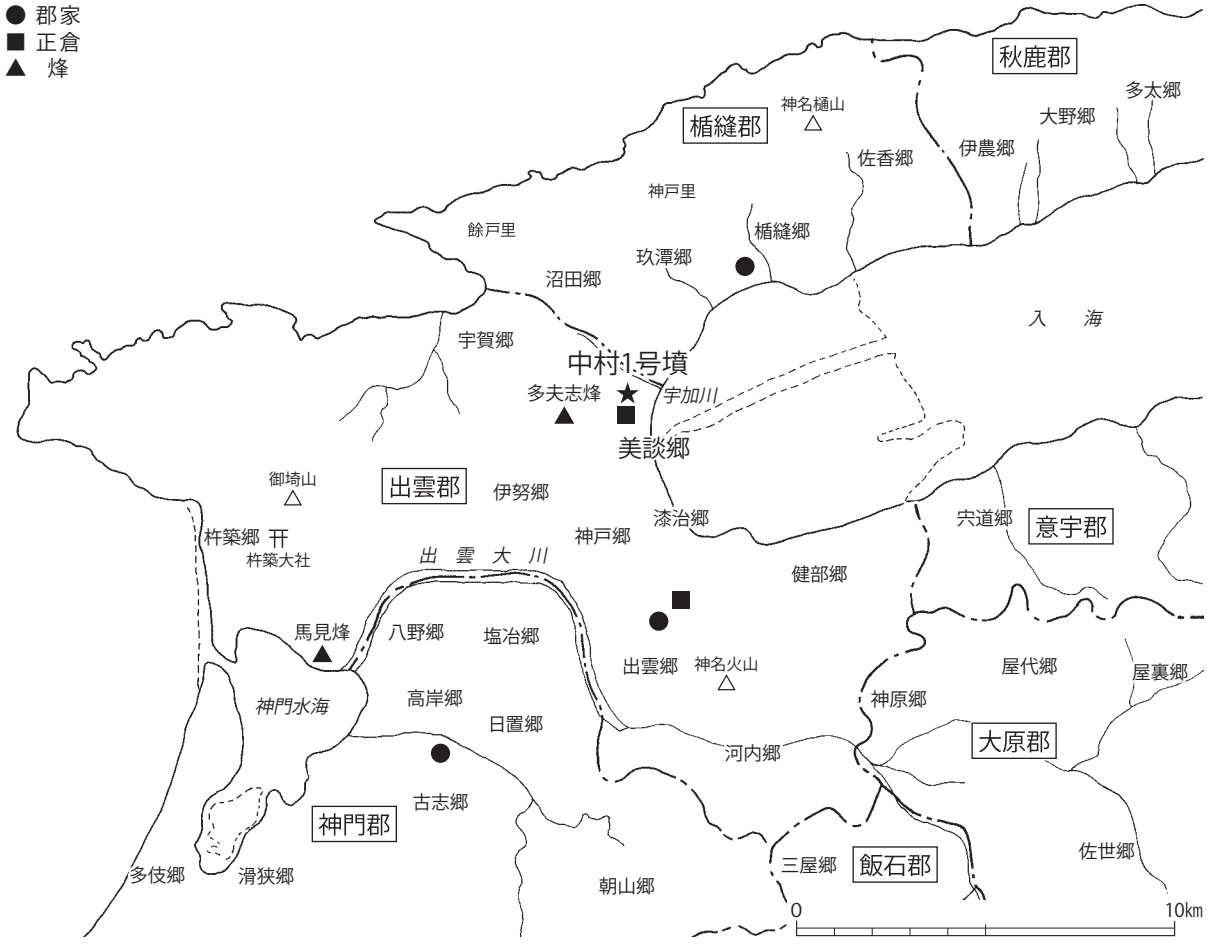
平田市教育委員会 1993『源代遺跡１』平田市埋蔵文化財調査報告書第４集

平田市教育委員会 1994『源代遺跡２』平田市埋蔵文化財調査報告書第５集

平田市教育委員会 2004『金山地区県営土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』平田市埋蔵文化財調査報告書第 11 集

２　文献からみた歴史的環境

中村１号墳が所在する出雲市国富町は，奈良時代においては出雲郡美談郷に相当する。『出雲国風土記』によると，美談郷の東は楯縫郡の境とされる「宇加川」（現・平田船川），西は伊努郷，南は神戸郷・漆治郷に接したことが分かる。奈良時代の郷・里は，「五十戸一里」と表現されるように，人間集団を基礎としたもので，明確な領域区画は存在しない（荒井 2009）。したがって，郷に所属する人々



第６図　奈良時代出雲国の郡郷図（１：200,000）

の集住地や基本的な生活圏が，いわゆる郷域となる。出雲郡美談郷は，現在の地名では出雲市国富町・美談町，斐川町原鹿・今在家の北の一部に相当すると考えられている（関 1998）。

『出雲国風土記』出雲郡美談郷条

美談郷。郡家の正北九里二百四十歩なり。所造天下大神の御子，和加布都努志命，天地初めて判れし後，天御領田の長と供へ奉り坐しき。即ち彼の神，郷の中に坐せり。故，三太三と云ふ。〈神亀三年に，字を美談と改む。〉即ち正倉あり。

『出雲国風土記』は美談の地名由来として，オオナムチの子ワカフツヌシが「天御領田の長」として供奉したことを記す。関和彦は「御領田」をミタ，「長」をミとして霊・神の意と解し，ミタミとは御田の神を表わしたものとする（関 1998）。また，美談郷は神亀３年（726）に「三太三」から「美談」への郷名改称が行われた。霊亀３年（717）には里から郷へ改められ，「（出雲郡）三太三里→三太三郷→美談郷」といった表記上の変遷が推測される。出雲郡の神社条の「彌陀彌社」「彌太彌社」の社名から，さらに古い表記は「彌陀彌（ミダミ）」であったとみられる（関 1994）。

美談郷とその西の伊努郷にまたがる位置には，青木遺跡が所在する。青木遺跡では，８世紀中葉から９世紀初めを中心とする多数の木簡や墨書土器が出土し，美談郷や伊努郷などに関わる資料が多く見られる。同遺跡をめぐっては，遺跡周辺の複数郷にわたる在地共同体的な諸集団による共同飲食を伴う儀礼および祭祀を行う施設の存在，有力氏族層が関与する租税徴収機能をもつ管理施設の存在などが指摘される。その祭祀の中心とみられる神社遺構は，墨書土器に見える「美談社」にあたる可能性が高い（平石 2006）。墨書土器には「美鮒」「三鮒」と記すものもあり，美談郷に属する集団が神社への御贄としてフナの貢進を行っていた可能性を示唆する。『出雲国風土記』出雲郡条に「西門江周三里一百五十八歩　東流して入海に入る。鮒有り」とあり，入海（現・宍道湖）への河口付近にフナが生息したことが分かる。美談郷東端の宇加川や入海において，フナなどの漁獲を生業とした人々の存在を想起することができよう。

青木遺跡では，郷名を表わす文字と人名とを記載する付札木簡が出土し，伊努郷や美談郷などの氏族名を知ることができる。すなわち，美談郷に若和（倭）部 / 舎人 / 鳥取部 / 日置 / 吉備部 / 物部，伊努郷に海部 / 丈部 / 肘部 / 稲置部 / 鳥取部 / 和（倭）文部といった氏族名が確認される。天平 11 年（741）の「出雲国大税賑給歴名帳」には伊努・美談郷に接する出雲郡北半部の杵築・漆治・神戸郷の氏族名が記され，青木遺跡の木簡と同様の氏族名が散見される。これらの氏族の分布を見ると，必ずしも郷域に拘らない分布であることが分かる。令制郡の前身である評の分割〈島根評→秋鹿評，大原評→飯石評〉（荒井 2009），藤原宮木簡「楯縫評乃呂志里」（『飛鳥藤原木簡概報』20）「□□〔神門ヵ〕評阿尼里」（『木簡研究』５）などの事例から，令制郡とそれ以前の評とでは行政区画の様相が異なった可能性が高い。青木遺跡の神社遺構に比定される「美談社」が伊努郷や美談郷などの複数郷に属する人々の祭祀対象となったように，令制以前からの影響を残した形で，奈良時代においても郷を越えた一定程度の地域性が存在したとみられる。

この地域性に関して注目されるのが，『出雲国風土記』所載の出雲・楯縫・秋鹿郡の地名伝承である。例えば，楯縫郡に接する秋鹿郡伊農郷（現出雲市美野町周辺）の由来には出雲郡伊努郷の「赤衾伊農（努）意保須美比古佐倭気能命」を掲げ，両地域の関連性が窺える。さらに，「楯縫」の地名は「所造天下大神の宮」出雲大社の装束としての楯の造作に由来し，楯縫郡佐香郷の伝承には「百八十神等」の参集が語られる。神々の参集は，佐香郷と出雲郡杵築郷の記載に見えるのみである。また，出雲郡美談郷の伝承に見える「天御領田」についても，楯縫郡玖潭郷に「天御飯田之御倉」に関わる記載がある。このように，『出雲国風土記』所載の地名伝承で郡を越えた地域での関連性が窺える事例は少なく，出雲・楯縫・秋鹿郡の宍道湖北西岸一帯の地域性を見出すことができる。さらに，出雲大社や「天御飯田」「天御領田」に関わる伝承の存在からすると，同地域における出雲国造・出雲国司あるいはその上部権力との関連も想定される。

これらの地域性の背景には，令制以前の様相が関わる可能性がある。その具体相は不明であるが，令制以前の支配制度の一つとしての「県」「稲置」の遺称が同地域に見えることは注目される。すなわち，「県」の事例として『出雲国風土記』出雲郡の神社条の「阿我多社」「県社」（以上，在神祇官社）「県社」（不在神祇官社）の社名に見え，「稲置」の事例として「出雲国大税賑給歴名帳」や青木遺跡出土木簡に見える「稲置部」（伊努郷 / 漆治郷 / 出雲郷）・「漆治稲置」（漆治郷 / 健部郷）などの氏族名がある。「稲置」は現実に機能する職名としての意味を失い氏姓として使用された例とみられ，同様の例に静岡県・伊場遺跡出土木簡の「五十戸造」などの事例が知られる。

令制以前の畿外における「県」「稲置」については諸説あるが，『日本書紀』大化元年８月庚子条の「国造，伴造，県稲置」の記述などから，６世紀以降に国造の下で「県稲置」として地方支配の一端を担ったとする見解が近年では多くみられる（毛利 2006・森 2009・北 2011）。この見解に従うならば，宍道湖北西岸地域における地名伝承の関連性からして，出雲東部を拠点とする出雲国造氏の影響の及ぶ「県」の存在を，令制以前の美談郷周辺に想定することも可能である。

出雲国府から「三太三」と記した墨書土器が出土している。従来その意義について考察されることはないが，国府所在郡の意宇郡以外の郷名が記される意義は注目すべきである。奈良時代においても美談郷周辺は出雲東部との関連をもつ地域であったことを示唆するものである。

（出雲弥生の森博物館　髙橋　周）

参考文献

荒井秀規 2009「領域区画としての国・評（郡）・里（郷）の成立」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所

北　康宏 2011「国造制と大化改新－大化前代の支配構造－」『史林』94 － 2

関　和彦 1994「『出雲国風土記』と神祇官帳」『古代文化研究』２

関　和彦 1998「『出雲国風土記』註論　その三　出雲郡条」『古代文化研究』６

毛利憲一 2006「六・七世紀の地方支配－「国」の歴史的位置－」『日本史研究』523

森　公章 2009「評司・国造の執務構造」『地方木簡と郡家の機構』同成社

第 3 章　墳丘の調査

第 1 節　墳丘の調査

1　中村 1 号墳周辺の状況

中村 1 号墳は，東西を低丘陵に挟まれた谷の出口部に位置する（写真 4，第 7 ・ 8 図，図版 8・9）。この谷は南から北東に流れる丹堀川が開析したもので，川は古墳のすぐ東を流れる。つまり川の影響を受けやすい場所にこの古墳は築造されている。古墳の北東には丹堀川により形成された扇状地が広がる。3 次調査前には，古墳は 3 軒の民家によって囲まれ，工事用道路予定地部分のみが伐採されていたが，直径約 10 mの高まりが残る程度で，外観では古墳の形状を留めていないと思われた。

中村 1 号墳の西側約 50 mの丘陵上に中村 2 号墳がある。小型の墳丘をもち，中央に箱式石棺の石材の一部が露出している（写真 5）。また，丹堀川を挟んだ南南東約 80 mの丘陵上には，長方形墳の山辺神社古墳（長辺約 27 m）がある。これら 2 基は未調査で，時期等の詳細は不明である。

丹堀川を南に約 200 m遡った場所に，5 基からなる中村横穴墓群がある（写真 6，出雲市教育委員会 2009）。6 世紀末～ 7 世紀にかけて築造されたもので中村 1 号墳と近い関係にあったと考えられる。

写真 4　米軍撮影空中写真　中央の点線で囲った場所が中村 1 号墳（昭和 22 年 10 月 3 日撮影，国土地理院）

第７図　中村１号墳 1999 年地形測量図（１：2,000）

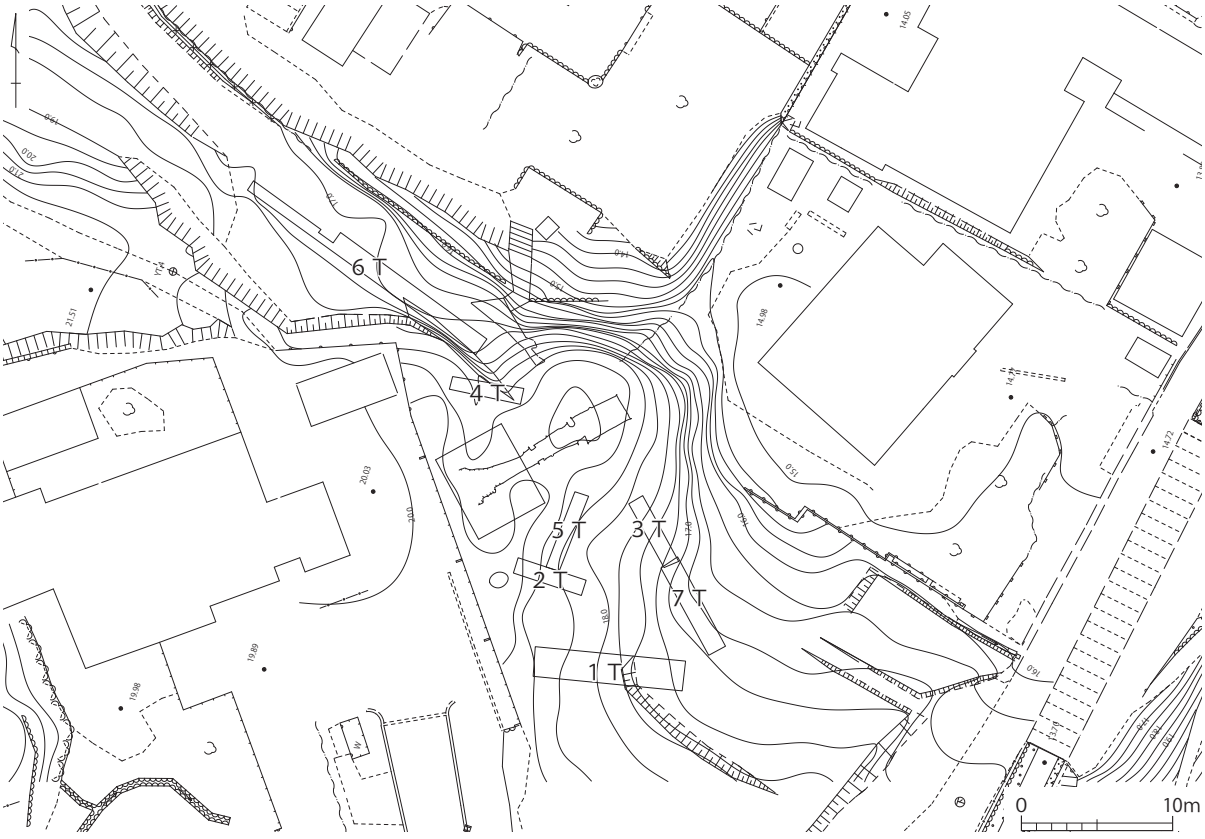
第 8 図　中村 1 号墳 2008 年地形測量図（1 ：1,000）

写真５　中村２号墳箱式石棺（南西から）

写真６　中村横穴墓群全景（南東から）

２　墳丘の規模確認調査

２次調査の結果，中村１号墳は直径 16 ｍの円墳と推定された。３次調査前の調査指導委員会で，石室規模に対し墳丘規模が小さい，前方後円墳の可能性はないかという指摘があり，２次調査で実施した調査の結果を使いながら，必要最小限の追加調査を行うこととなった。２次調査で掘削したトレンチは１～５トレンチである。３次調査では，より墳丘が大きいことを考慮し，１トレンチの拡張に加え，３トレンチを延長した７トレンチと，墳丘の西北部に６トレンチを新たに追加した。本章では，２次調査と３次調査の成果を各トレンチごとにまとめ，墳丘の規模と構造について報告する。



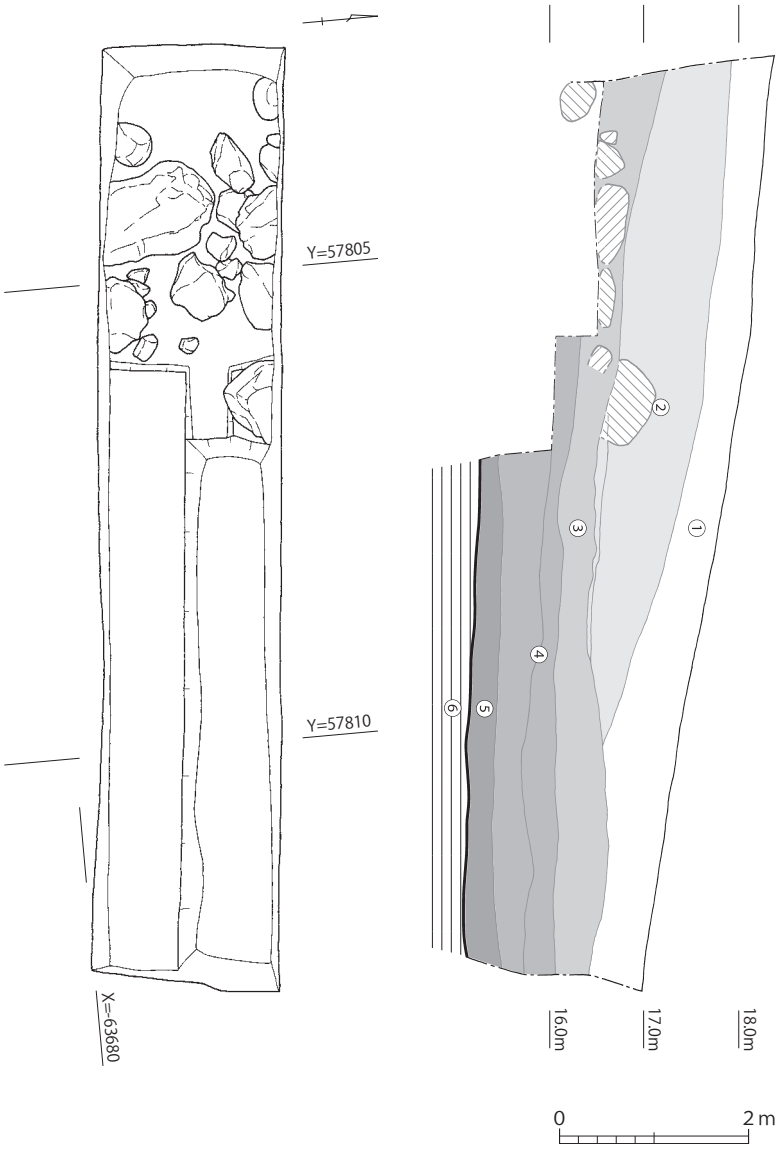
第９図　トレンチ配置図（１：500）

（1）　1 トレンチの調査

本墳が前方後円墳かどうかを確認するため，２次調査の１トレンチ（墳丘の南）を北側に拡張した。２次調査時のトレンチ掘削深度は約 1.3 ｍであり，さらに深い位置で古墳に伴う盛土がある可能性を考えての拡張である。本墳の横穴式石室の入口は山側にある。一般的には，平野側に開口するが，前方後円墳の括れ部に開口する場合には，山側に開口するものが稀にある。また，２次調査時点では築造時期が出雲地域で前方後円墳が築造されている出雲３期（Ｔ K43 型式期）と考えられていた。これらの理由から，本墳も前方後円墳の可能性が考慮されていた。

１トレンチは，長さ 10 ｍ，幅２ｍで，段掘りした。最も深く調査した場所で，掘削の深さは約 2.6 ｍである。調査の結果，③層に転石とは考えられない巨大な石の集積を確認し，人為的な盛土と判断した。③層を挟む②・④層は土石流や川の堆積と考えられた。①～③層は，古墳時代後期～近世の遺物を包含していることから，近世以降に堆積したことがわかる。④・⑤層からの遺物の出土はない。⑥層（暗褐色砂質土）は基盤層と考え，掘削を停止した。

以上，１トレンチでは古墳に伴う盛土は確認されなかった。



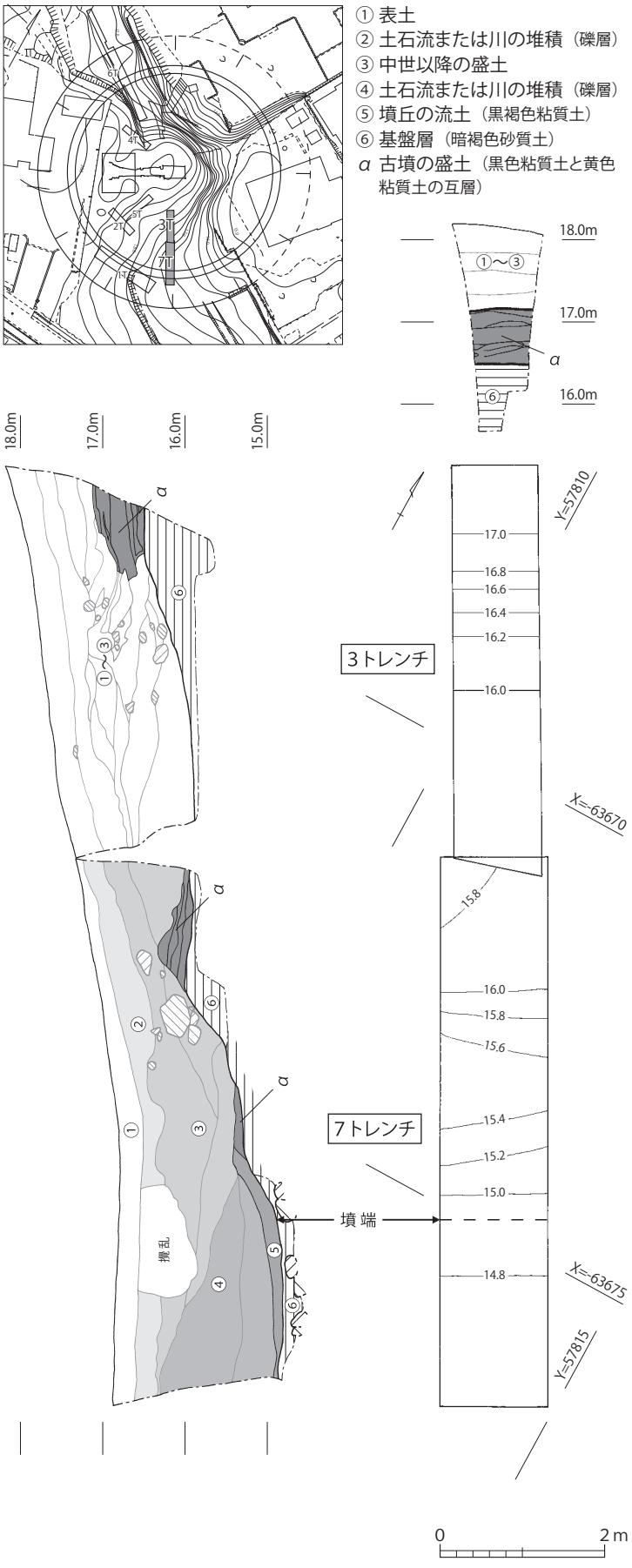
第 10 図　１トレンチ測量図（1：80）

（2）　３・７トレンチの調査

３トレンチ（２次）および７トレンチ（３次）は，古墳の南東端を確認する目的で，横穴式石室に直交するように設定した。このトレンチを合わせた長さは約 11.4 m，幅は約１mである。

３トレンチでは，黒色粘質土と黄色粘質土が水平かつ互層に堆積していることが確認されている。これらを，古墳の盛土と判断し，「α層」と呼ぶ。α層は，厚さ約 10 ～ 20㎝の薄さで積まれている。このα層より後に堆積した層は，洪水などにより墳丘が大きく削られた後の再堆積と判断した。２次調査では，この盛土が残存している部分を墳端として，直径約 16 mの円墳と報告した。しかし，７トレンチでも２か所でα層を確認できた。７トレンチでも３トレンチと同じく，墳丘が大きく削られた時に再堆積した②・③層がみつかり，１トレンチとほぼ同じ堆積状況であることを確認した。７トレンチでα層が確認されたことにより，墳丘規模が大きくなることが確定した。

ここで，問題となるのは，墳端の位置である。７トレンチ中央のα層までは確実に墳丘であるが，そこが墳端とは限らないからである。ここで，重要なのが⑤層である。層位から⑤層の堆積後に墳丘が削られている。③層からは古墳時代～古代の須恵器が出土したが，⑤層からは古墳時代後期の須恵器甕の破片が出土した。よって，⑤層は，α層と時間的に最も近い関係にある。

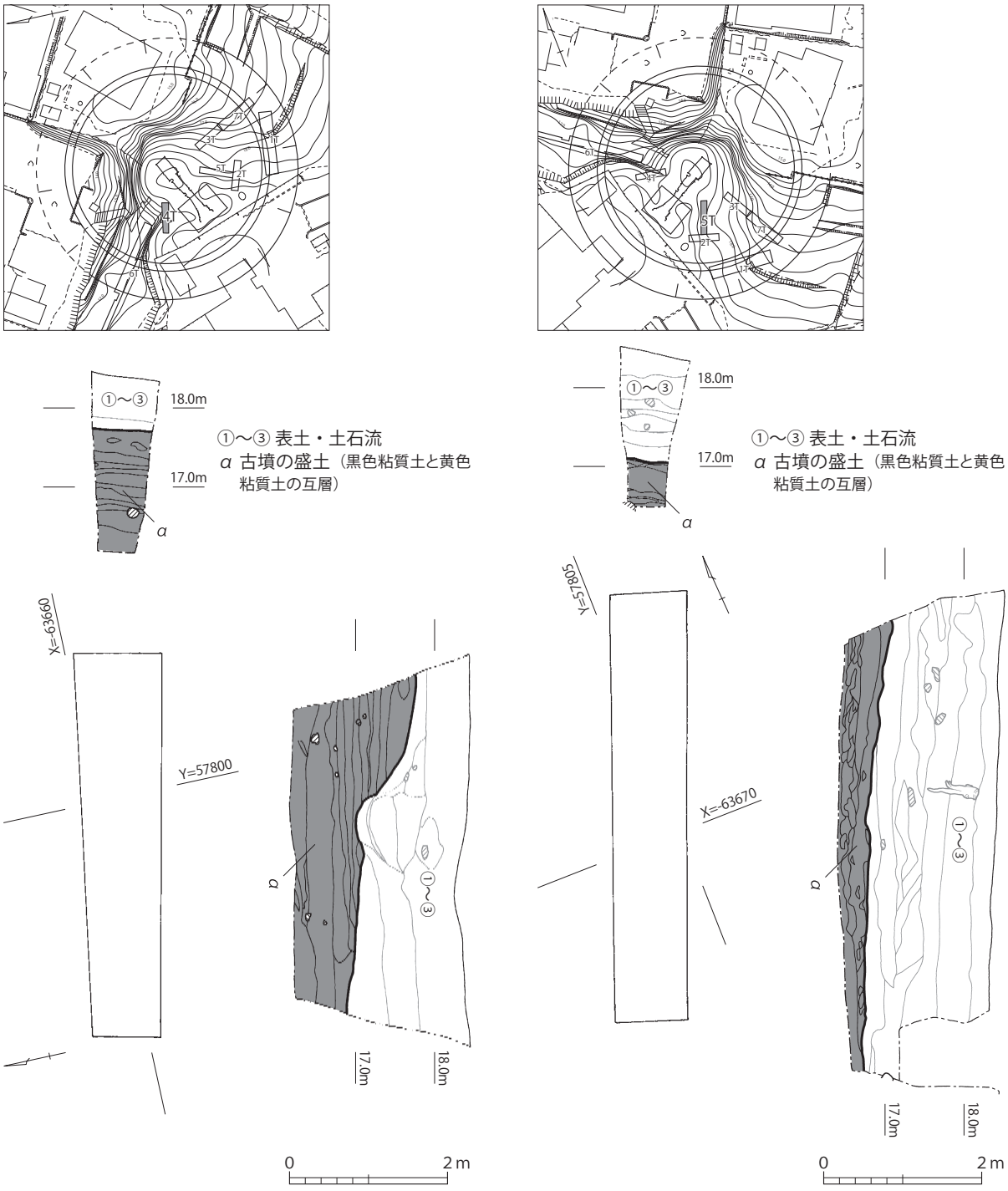


第 11 図　３・７トレンチ測量図（１：80）

そこで，⑤層の直下にある基盤層の傾斜変換点が墳端（標高 14.9 m）であると推察した。そして，墳端ラインはトレンチに対しほぼ直交している。

（3）　4・5トレンチの調査

4・5トレンチは２次調査時のトレンチで，墳丘の西南部に設定してある。基本的に２つのトレンチは同じ堆積状況である。α層が両方で確認されており，ともに墳丘内に位置することがわかる。5トレンチに直交して２トレンチがあり，そこでもα層が確認されている。4・5トレンチともα層の途中で掘削を終了している。



第 12 図　4 トレンチ測量図（1：80）

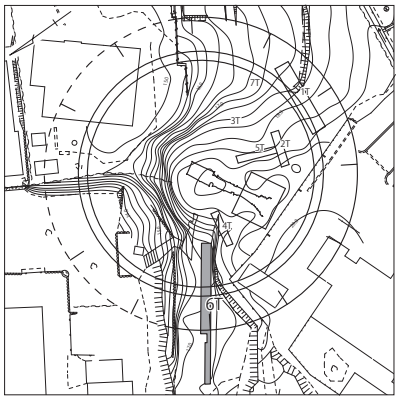
第 13 図　5 トレンチ測量図（1：80）

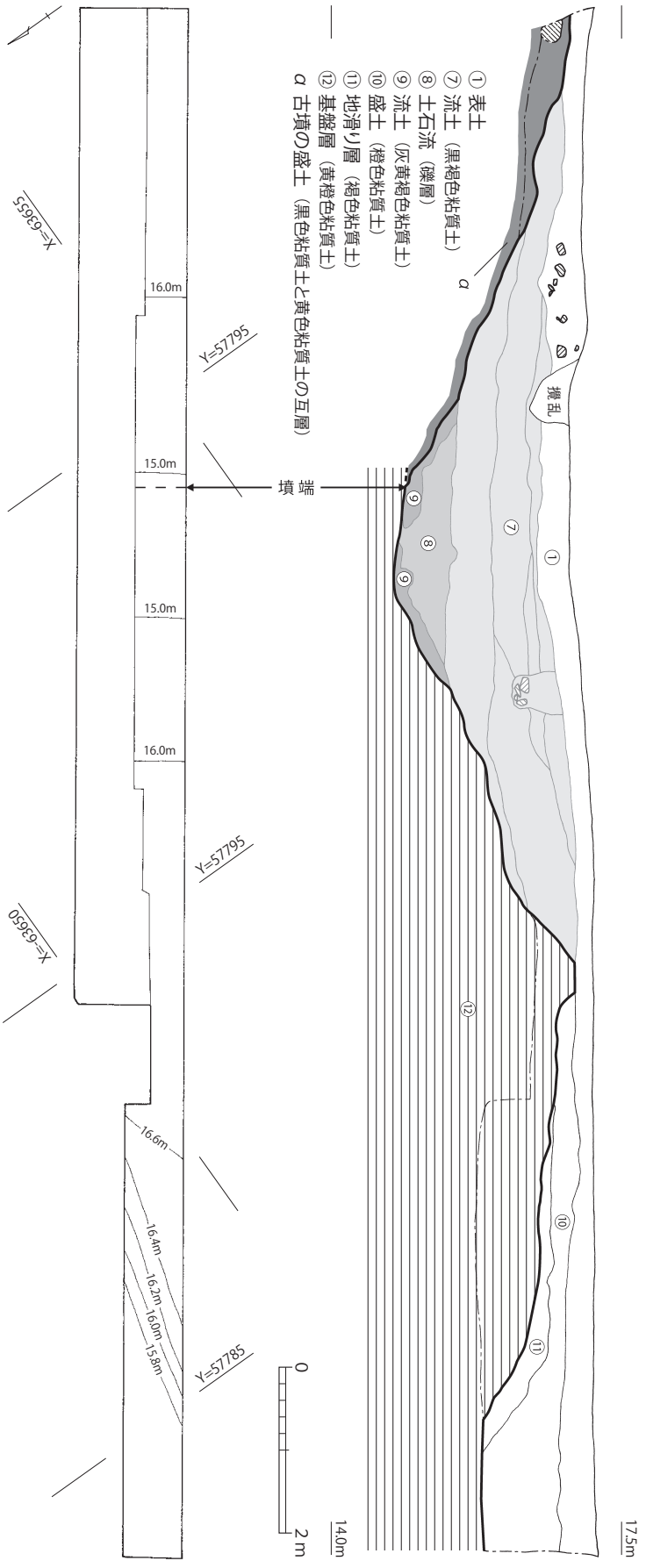
（4）　6トレンチの調査

6トレンチは，墳丘北西側に設定した長さ約18ｍのトレンチである。

このトレンチでは，断面がＶ字状の溝を確認した。これを，古墳の周溝と判断し，溝の墳丘側の下端を墳端（標高約 14.9 m）とした。墳裾の標高は７トレンチとほぼ一致する。溝の墳丘側では，古墳の盛土α層を確認した。溝の残存状況は良好であり，墳丘の南側のように，土石流などによる削平はみられない。⑧層は礫層であり，土石流が溝の中を流れたことがわかる。①・⑦層から古墳時代の須恵器や円筒埴輪，中世土師器などが少量出土した。⑨層からは，古墳時代の須恵器甕片が出土した。また，葺石やその転石は確認していないので葺石はないのであろう。

墳丘の基盤層は硬くしまった黄橙色粘質土であり，１・３・７トレンチの基盤層とは土質が異なる。





第 14 図　6トレンチ測量図（1：80）

３　トレンチ出土遺物

（１）　１トレンチ出土遺物（第 15 図Ｐ 1 ～ 12）

１トレンチからは古墳に伴う，あるいは近い時期のＰ１～３と，古墳に伴わない時期のＰ４～ 12 が出土した。

Ｐ１～３は⑤層から出土した。そして，Ｐ５・７・８・９・10 は③層から，Ｐ４・６・11・12 は②層から出土した。Ｐ１・２は出雲型子持壺の脚部片である。Ｐ１は脚部の上部あるいは中間の破片で，三角形の透かしがある。その下には，１条の凹線が巡る。内外面はともに横方向のナデが施され，特に内面にはナデの痕跡がよく残る。Ｐ２は裾の破片であり，内外面はともに丁寧な横ナデが施されている。Ｐ１・２は胎土分析を行った（第５章８節参照）。Ｐ３は甕の口縁部片で，口縁先端が欠けている。口縁端部から 1.5㎝下がった外面には低い突帯がめぐる。その下には 10 条の波状文があり，その下にもわずかに波状文が確認できる。波状文と波状文の間は３条の凹線文で区画してある。これら３点は古墳の流土と考えられる層から出土したもので，子持壺が墳丘上にあったことを推察させる。

Ｐ４は弥生土器低脚杯の脚部片である。時期は弥生後期後葉頃であろう。Ｐ５・６は８世紀後半～９世紀の須恵器片，Ｐ７～ 10 は 12 ～ 13 世紀頃の土師器である。Ｐ 11 は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類で，14 世紀頃である。Ｐ 12 は 18 世紀末～ 19 世紀の在地陶器の皿である。

（２）　６トレンチ出土遺物（第 15 図Ｐ 13 ～ 17）

６トレンチからは古墳に伴うあるいは近い時期のＰ 13 ～ 15 と，古墳に伴わない時期のＰ 16 ～ 17 が出土した。Ｐ 14・15 は⑨層から，Ｐ 16・17 は⑦層から，Ｐ 13 は①層から出土した。

Ｐ 13 と 14 は須恵器の口縁部片である。Ｐ 13 は壺あるいは横瓶の口縁部片で，端部から 1.7㎝下がった外面には低い突帯がめぐる。その下に文様はない。内外面ともに丁寧な横ナデが施され，内面には自然釉が付着している。Ｐ 14 は甕の口縁部片で，口縁端部から２㎝下がった外面には低い突帯がめぐる。その下には，波状文が施され，さらに下には３条の凹線が確認できる。Ｐ 15 は円筒埴輪のタガ部分の破片である。全体に磨滅が著しく，調整は不明である。Ｐ 16 と 17 は 12 ～ 13 世紀頃の土師器杯である。出土層位からＰ 14・15 が古墳に伴う可能性が高い。

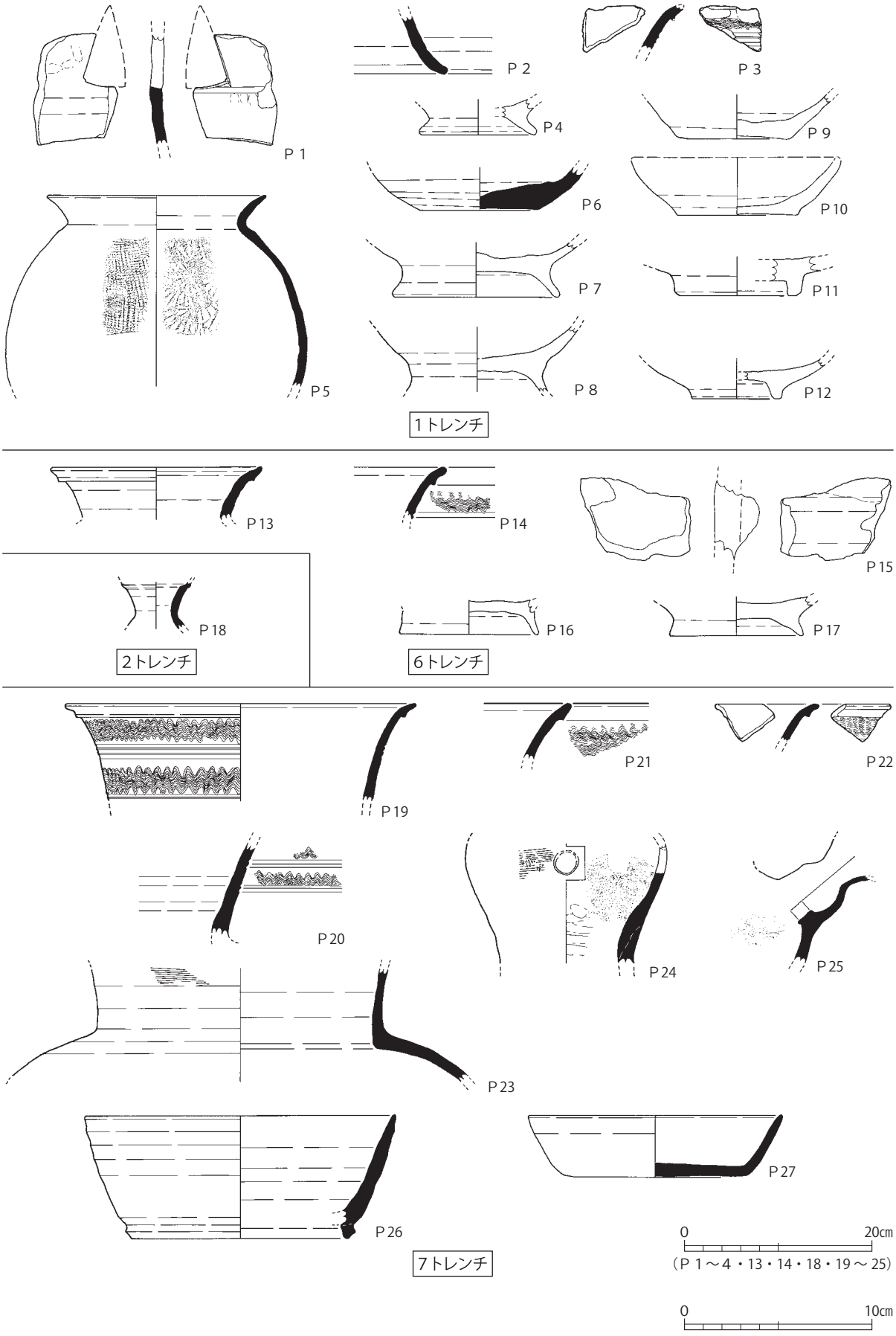
（３）　２トレンチ出土遺物（第 15 図Ｐ 18）

２トレンチからは，Ｐ 18 を表採した。出雲型子持壺の小壺の破片である。

（４）　７トレンチ出土遺物（第 15 図Ｐ 19 ～ 27）

７トレンチからは古墳に伴うか，あるいは近い時期のＰ 19 ～ 25 と，古墳に伴わない時期のＰ 26・27 が出土した。Ｐ 19・21 ～ 23 は⑤層から，Ｐ 20・24 ～ 27 は③層から出土した。いずれも須恵器である。

Ｐ 19 ～ 23 甕の口縁部から頸部にかけての破片である。Ｐ 19 ～ 22 は外面に波状文と凹線文が巡っている。Ｐ 23 は波状文はないが，カキメが施されている。Ｐ 24・25 は出雲型子持壺の破片である。Ｐ 24 は，胴部～脚部にかけての破片である。円形の透かしがある。Ｐ 25 は胴部から小壺にかけての破片である。底部のある小壺を親壺に接合した後に小壺底部と親壺を同時に穿孔している。Ｐ



第 15 図　墳丘トレンチ出土遺物（1：3，1：6）

26・27 は８世紀後半～９世紀の須恵器である。

６・７トレンチの周溝に溜まった最下層の流土から出土した遺物は古墳に伴う可能性が高い。それは，Ｐ 14・15，Ｐ 19・21 ～ 23 である。これらは須恵器の出雲型子持壺と甕，そして円筒埴輪である。１トレンチのＰ１～３もそれらに準ずるであろう。破片が小さく詳細な時期を決定することはできないが，古墳時代後期のものである。円筒埴輪片は小さい破片１点のみので，当時の使用状況を復元することは難しい。また，古代や中世にも継続してこの周辺で人が活動していたことがわかる。墳丘が土石流によって削られたのは中世の 12 ～ 13 世紀頃と推察できる。

第２節　閉塞部の調査

１　閉塞部の調査

（１）　閉塞部の土層（第 16 図，図版 10・11・44・45）

石室の閉塞状況を確認するため，６ｍ×４ｍの調査区を設定した（第 16 図）。設定した中心軸（杭２から杭５）は，石室の中心軸に合わせている。調査区の北西隅に大きな樹木があり，この部分は掘削ができなかった。

調査の結果，①～⑤層は，人為堆積あるいは川による自然堆積で中世以降に堆積したことがわかった。③～⑤層を掘削して，横穴式石室の羨道天井石と閉塞石の一部，そして前庭部の輪郭を検出した。調査区内の全面調査は，この面までとし，それより下は，前庭部の北半分の掘削と調査区の南辺と西辺の断ち割り調査に留めた。断ち割りの結果，古墳の盛土Ⓐ～Ⓗ層を確認した。これらをβ層と呼ぶ。β層は厚さ約 40㎝を単位とした盛土層で，墳丘の各トレンチで確認したα層とは積み方が異なる。β層は石室築造に伴う盛土及び前庭部の土壁を構成するものと考えられ，１次墳丘と理解した。今回は最小限の掘削を念頭に調査を行ったため，１次墳丘の範囲は確認していない。これらの土層堆積状況と、杭２付近で羨道天井石を検出したが，天井石の上部には古墳の盛土がないので，墳丘上部の盛土はすでに破壊されており，露出していた時期（12 ～ 13 世紀頃か）があったと考えられる。

（２）　羨道天井石

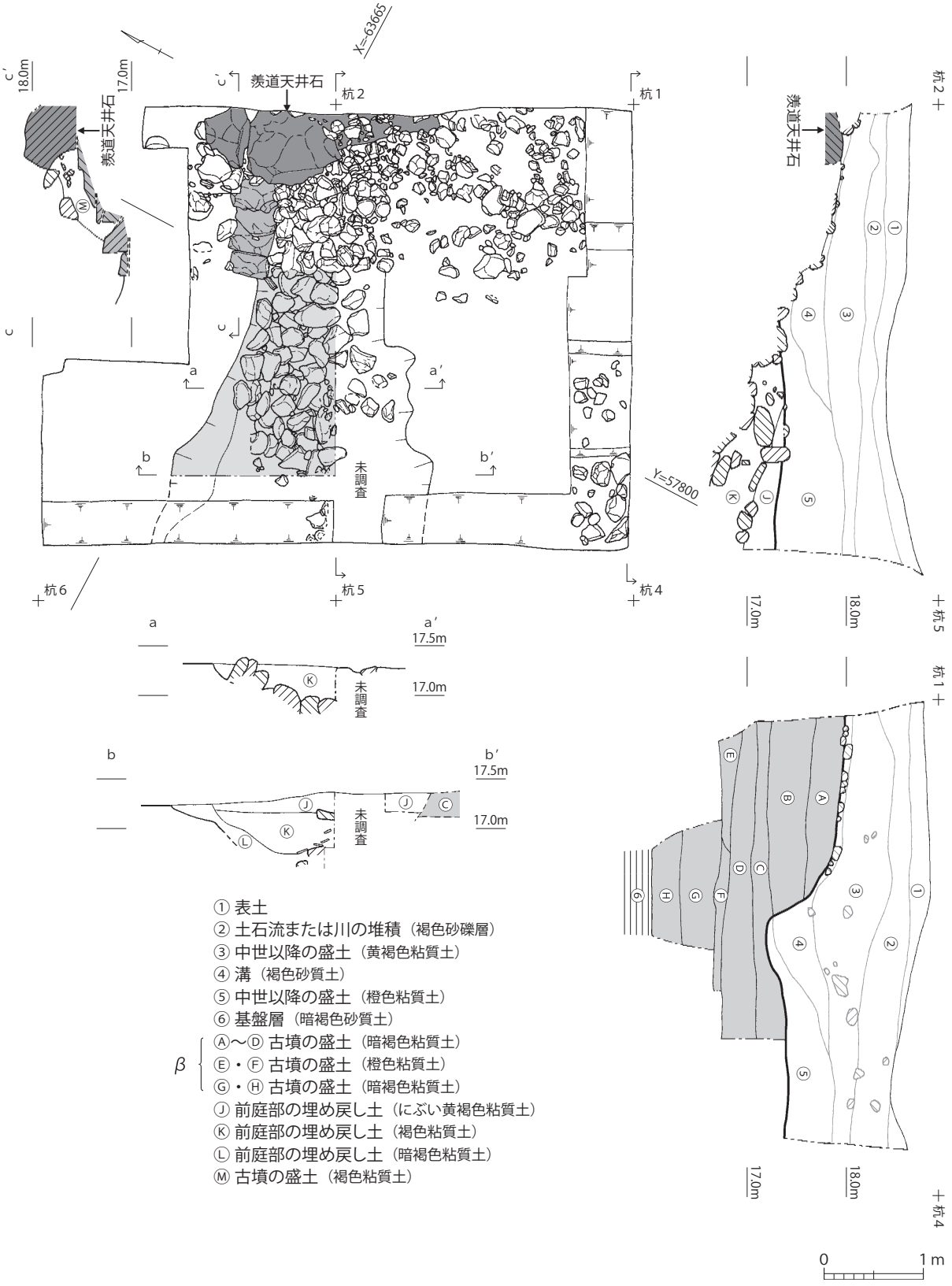
羨道天井石は一石を確認した，一部が割れていて，幅は約 2.3 ｍある。天井石上面と同じレベルで，拳大程度の礫が散在した状況で出土した。礫群は，一部盛土層のⒶ層に入り込んだものもあるが，多くはⒶ層上面にある。これらは，川の堆積ではなく，人工的に置かれたものと判断した。ただし，古墳に伴うか，そして，その分布範囲も，今回の調査ではわからなかった。

（３）　羨道側壁

羨道側壁は，羨道天井石に接したところから，前庭部に向かって階段状に傾斜している。標高 17 ｍ以下は，掘削を停止したため，羨道側壁の先端を確認していないが，まだ続くようである。側壁の上部に古墳の盛土層Ⓜ層を検出した。

（４）　閉塞石

羨道側壁の内側には，長さ 30㎝前後の自然石（川原石）が詰め込まれていた。これらは，羨道天井



第 16 図　閉塞部測量図（1：60）

部の上面まで積まれていた。したがって，閉塞石は完存しており，石室が密閉された未盗掘古墳であることを石室外からも確認した。そのため，この良好な状態を保持するため，閉塞石を取り除くことなく保存することとした。閉塞部の調査は石の輪郭を確認する程度に留め，隙間にある埋め戻し土を取り除いた。標高 16.6 m付近まで確認したところで掘削を停止し，調査を終了した。

（５）　前庭部埋め戻し土

埋め戻し土は，Ⓙ～Ⓛの３層に分層できた。これらは，石室への進入の痕跡として重要であるが，古墳の上部が破壊されていたため，石室への進入回数は明らかにできなかった。

２　閉塞部出土遺物（第 17・18 図，図版 11・29・30）

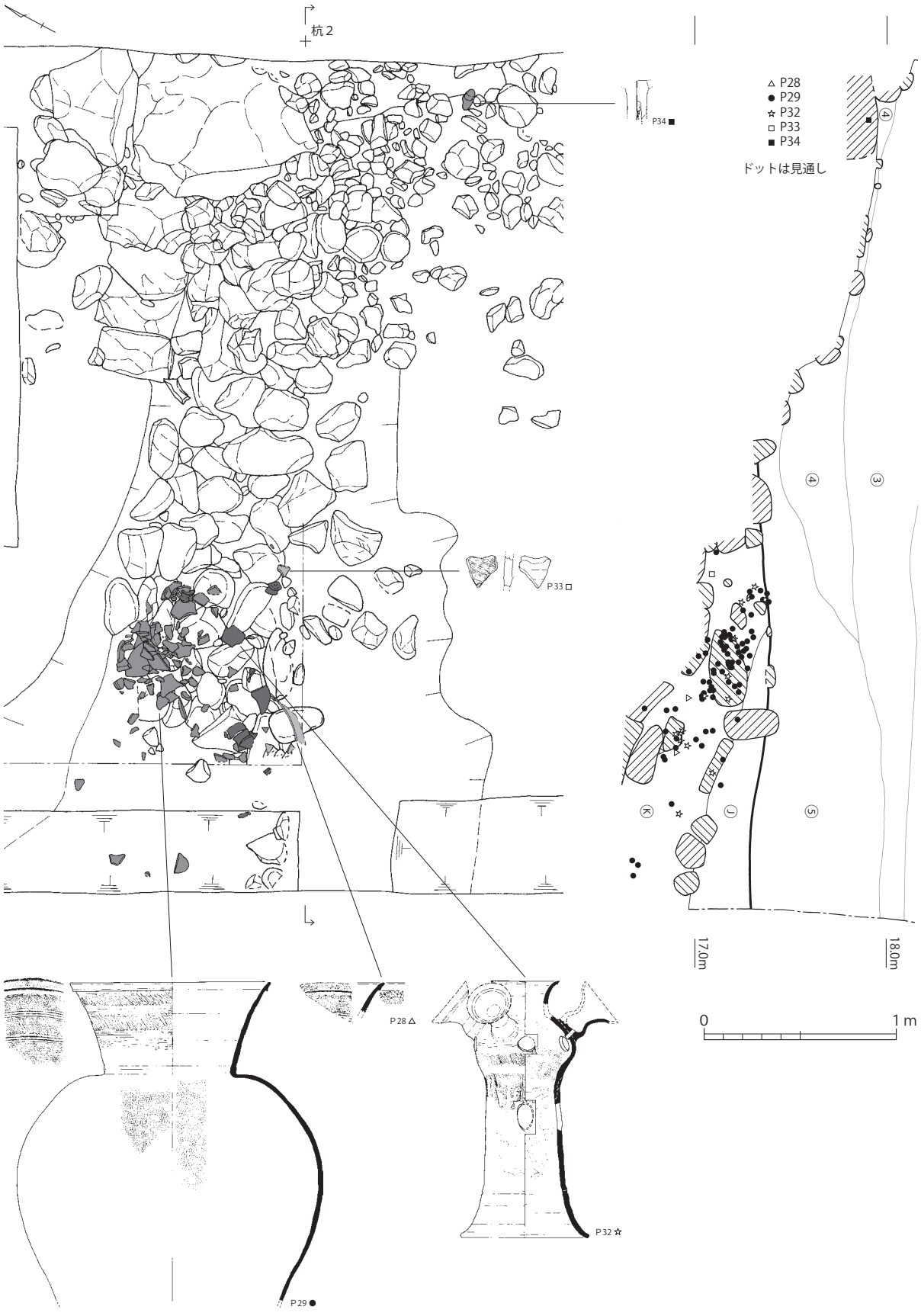
閉塞部からはＰ 28 ～ 35 が出土した。古墳に伴う，あるいは近い時期のＰ 28 ～ 34 と，古墳に伴わないＰ 35 である。Ｐ 34・35 以外は，前庭部埋め戻し土のⓀ層から出土したもので，確実に古墳に伴う遺物である。

Ｐ 28・29 は須恵器甕の破片である。Ｐ 28 は口縁部片で，調査区壁面に同一個体の破片の多く埋没するが，取り上げず現地に保存した。口縁端部から 1.5㎝下がった外面には低い突帯がめぐる。その下には，波状文が施され，さらに下には３条の凹線が確認できる。Ｐ 29 は口縁部から胴部にかけての破片で，底部の破片はない。破片は集中して出土したが，足らない破片があること，上部のⒿ層からは，破片が出土していないことからも，完形品が置かれたのではなく，甕を毀損して破片を配置した状況と判断した。口径約 42㎝，残存高 66.5㎝。口縁端部から 1.5㎝下がった外面には低い突帯が巡る。その下は，カキ目調整の後，凹線によって３区分され，上段と中段に波状文が巡る。

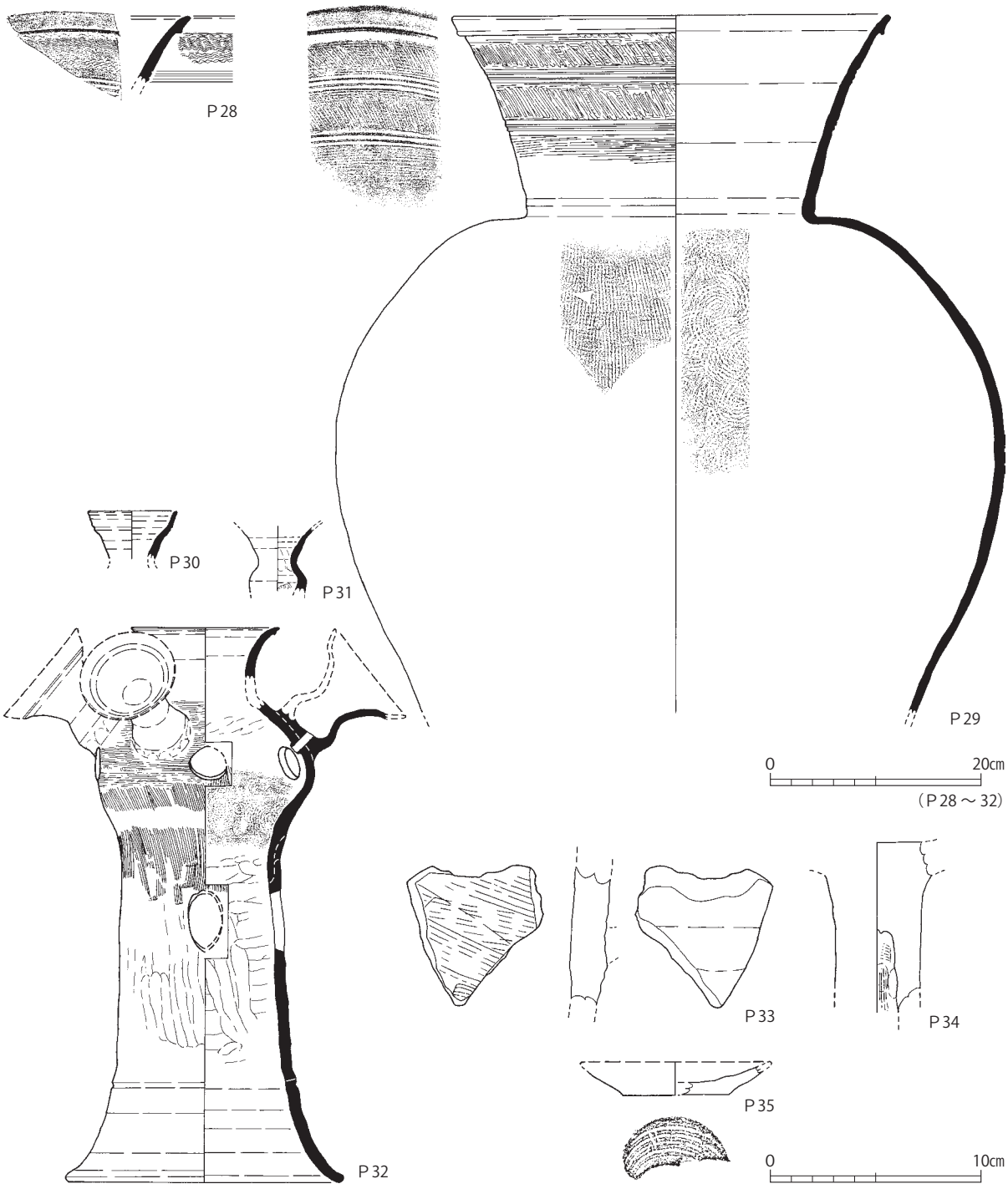
Ｐ 30 ～ 32 は出雲型子持壺である。Ｐ 30・31 は小壺の破片で，Ｐ 32 と同一個体と考えられる。接合はできなかった。これらは散在して出土していることから，毀損後に配置されたことがわかる。口径 19㎝，器高 53㎝。口縁部は段状をなす。親壺には円形の透かしがある。小壺は５～６個あったと推定でき，文様はないが口縁部・頸部・胴部の境が明瞭である。底部のある小壺を親壺に接合した後に小壺底部と親壺を同時に穿孔している。脚部は，裾部が「ハ」字状に開く。脚部外面は縦ナデ調整である。また，３段に区分され，上段に水滴状の透かし，上段と中段の境に凹線は無く，中段と下段の境のみに凹線が巡っている。これらの特徴からＰ 32 は池淵分類（池淵俊一 2004）のＣ１型に該当する。Ｐ 32 は，出雲東部の資料と同じ特徴を持ち，かつ，胎土分析の結果，出雲東部の大井窯跡群と同じ分布域に属すことが判明した（第５章第８節）。すなわち，出雲東部の大井窯跡群で生産された製品と考えられる。Ｃ１型の時期は出雲４期前半と考えられている。

Ｐ 33 は，円筒埴輪の破片である。タガが外れた小片で，内面にはハケメが施されている。詳細な時期はわからない。

Ｐ 34 は，土師器の高杯の脚部（筒部）で，内外面ともに磨滅が著しい。これは，羨道天井石の上部，礫群の間から出土した。出土層は④層である。礫群と同じ位置で出土していて，礫群に伴うと考えられるが，古墳に伴うものかは不確実である。Ｐ 35 は土師器の小皿で，12 ～ 13 世紀頃のものである。これは，⑤層から出土した。⑤層は古墳の盛土ⓒ層及び前庭部埋め戻し土Ⓙ層の直上に堆積した土層



第 17 図　閉塞部遺物出土状況（1：30）



第 18 図　閉塞部出土遺物（1：3，1：6）

である。したがって，墳丘は中世（12 ～ 13 世紀頃）以降に土石流などによって削られた可能性が高い。

閉塞部で確実に古墳に伴う遺物は，須恵器の甕２個体と出雲型子持壺１点である。甕の詳細な時期は決定できないが，出雲型子持壺は出雲４期（６世紀末～７世紀初頭）と考えられる。これらは，毀損された状況で出土していて，古墳の葬送儀礼の一端を示していると考えられる。

第３節　墳丘調査のまとめ

１　墳形と規模の推定（第 19 図）

トレンチ調査の結果，墳端を認定できた場所は６トレンチと７トレンチの２か所のみである。２か所で墳形を決めることは困難であるが，出雲地域の他古墳との比較から墳形を推定したい。

まず，横穴式石室がある部分の主丘部が円形か方形かを検討する。中村１号墳の横穴式石室は玄門部が両袖式である。この型式の石室を内蔵している出雲の古墳は，玄室の中心あるいは奥壁部分に墳丘の中心がある。このことと２か所の墳端との関連から中村１号墳の主丘部の墳形を推定しよう。方墳の場合，墳丘の中心が玄室から外れてしまう（第 19 図①）。よって，方墳ではない。円墳の場合，墳丘の中心が奥壁にある場合（第 19 図②）と玄室の中央にある場合（第 19 図③）がある。墳丘が正確な円形をなすとは限らないため，第 19 図②か③のいずれかに確定することは難しい。あえていずれかを決めるとすれば，７トレンチで確認した墳端ラインは，トレンチにほぼ直交する。墳丘の中心が奥壁にある場合，７トレンチの墳端ラインはトレンチに対し直交しないことがわかる。すなわち，第 19 図③が，より可能性が高いであろう。そして，玄室の中央から墳端まで約 15 mあることから，主丘部の直径は約 30 mと推察できる。

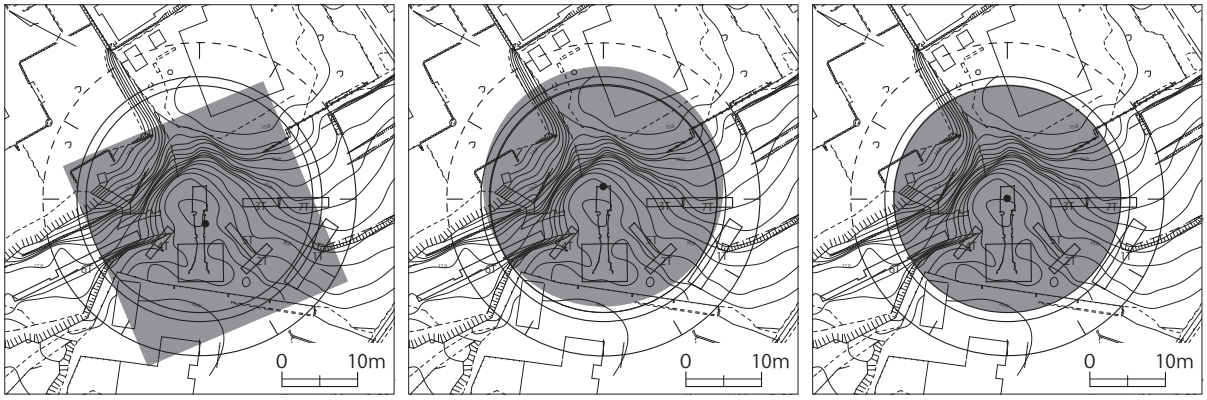
ここで，墳形が前方後円墳か円墳かという問題が残る。１トレンチでは，前方部の痕跡を確認できなかったが，土石流により前方部が削平された可能性もある。ここで，出雲地域の他古墳の墳形をみてみたい。中村１号墳の時期は，石室内出土須恵器が出雲４期であるから，この時期に古墳が築造されたと考えられる（第７章第６節）。出雲の横穴式石室墳では，出雲３期までに前方後方墳や前方後円墳は終焉し，出雲４期からは方墳と円墳が築造されている。このような状況から判断して，前方後円墳ではなく円墳の可能性が高い。

次に古墳の盛土についてまとめておく。墳丘トレンチで確認した盛土α層と閉塞部で確認した盛土β層とは積み方が異なる。また，横穴式石室の楣石上の盛土は，約 40㎝以上同質の土が積まれていることからβ層と同じ積み方と判断した。これらの状況から，β層を１次墳丘，α層を２次墳丘と推定した（第 19 図）。そして，墳丘の高さは，4.5m 以上と考えられる。

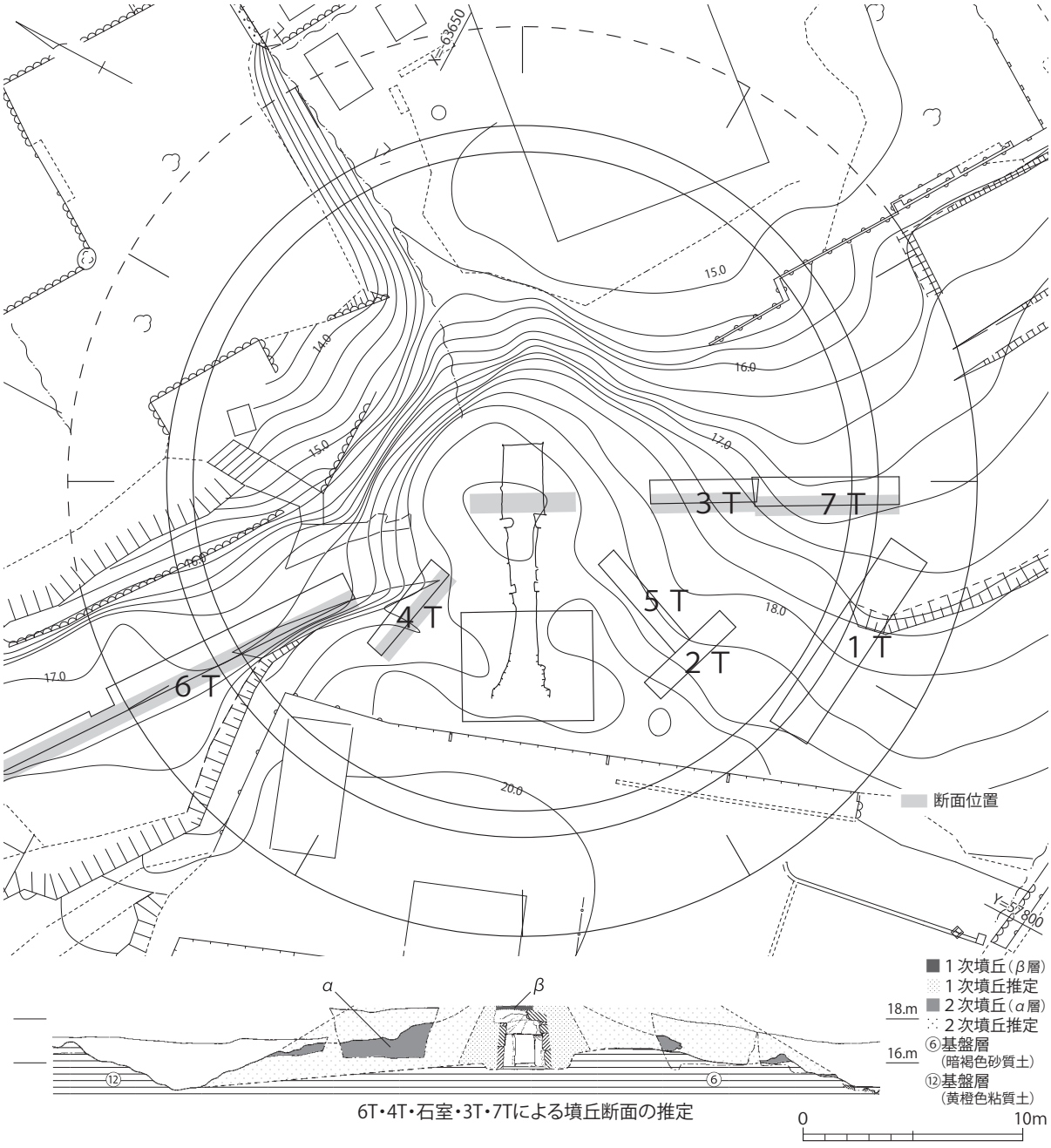
以上のことから，中村１号墳は直径約 30 mの円墳で，墳丘の中心は玄室の中央にある。墳丘の高さは 4.5 m以上で，葺石はない。墳丘には周溝がめぐり，周溝を含む中村１号墳の規模は直径約 42 mとなる。

２　閉塞部

閉塞部は，羨道天井石より下が良好に残存していることがわかった。前底部埋め戻し土の中から毀損された甕２個体と出雲型子持壺１個体が出土した。残念ながら，閉塞部の上層が崩壊しているため石室への進入回数は不明である。これらの須恵器の毀損は、玄室の石棺あるいは前室の石棺に埋葬された後に行われたと考えられる（第４章第６節）。



①方墳の場合　②中心が奥壁の場合　③中心が玄室中央の場合



6T・4T・石室・3T・7Tによる墳丘断面の推定

第 19 図　墳丘形態の推定（1：300）

３　出雲型子持壺の分布

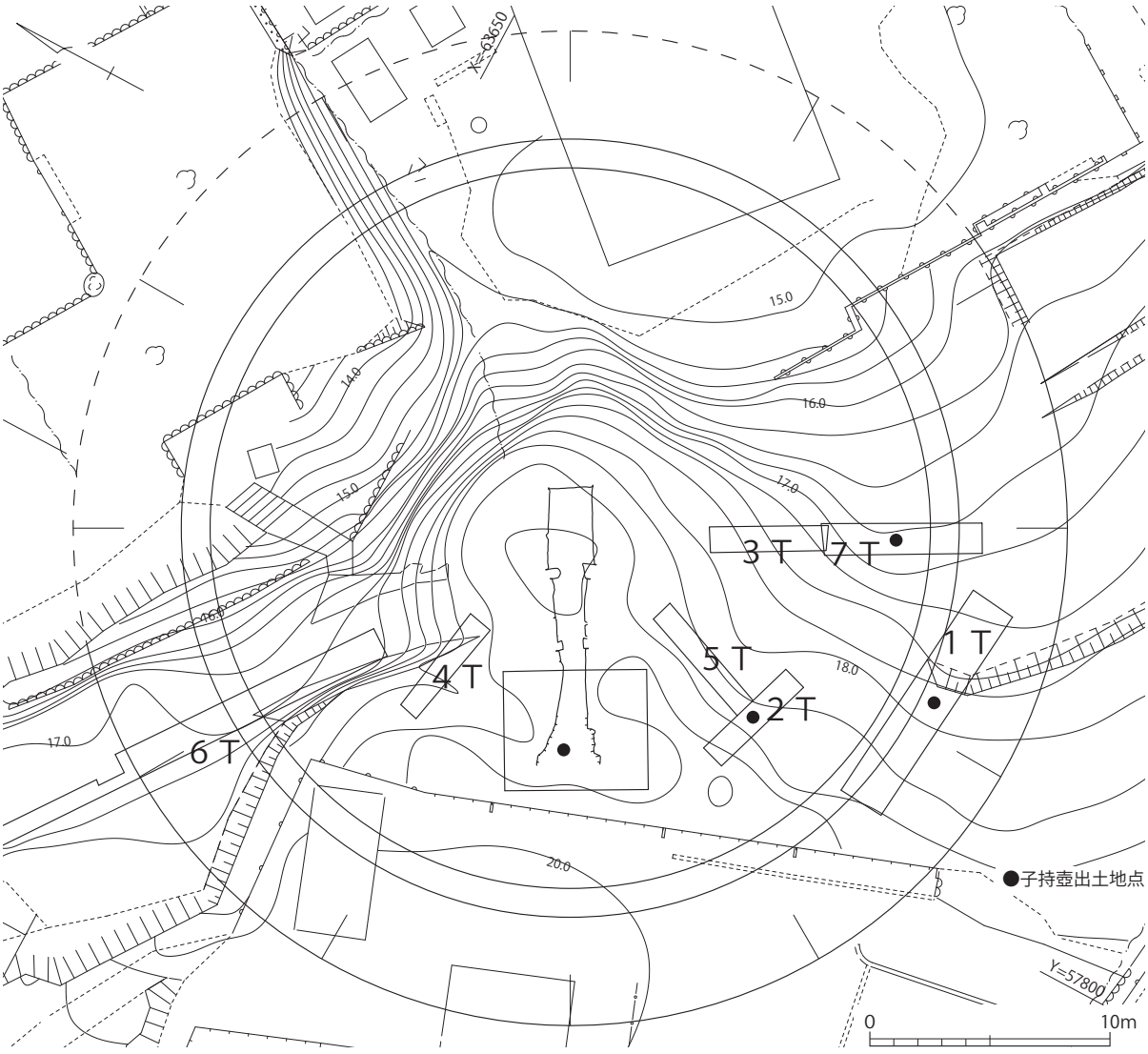
墳丘調査の結果，出雲型子持壺が１・２・７トレンチ及び閉塞部から出土した（第 20 図）。元位置を留めているものは，閉塞部から出土したＰ 30 ～ 32 のみで，他は再堆積土の中から出土した。これらの分布のみから，出雲型子持壺の古墳での使用方法を推察することは難しい。確実なことは，閉塞部で子持壺と甕が使用されたことにとどまる。

（坂本豊治）

参考文献

出雲市教育委員会 2009「中村横穴墓群」『平成 20 年度出雲市文化財調査報告書』出雲市の文化財報告７

池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会　498 ～ 516 頁



第 20 図　出雲型子持壺出土地点（１：300）

第４章　石室内の調査

第１節　石室と石棺の構造

１　石室の概要

中村１号墳の内部主体は，玄室と前室からなる複室構造の横穴式石室で，前室の手前に短い羨道がつく。墳丘の中心に玄室があり，南西方向に開口する。この開口方向は，平野側ではなく山地側（島根半島）を向き，特異である。出雲平野では近い時期に築造された首長墳である今市大念寺古墳や，上塩冶築山古墳，これらに次ぐ規模の妙蓮寺山古墳，放レ山古墳，宝塚古墳，さらには，築山遺跡の円墳群などの横穴式石室がいずれも南西方向に開口している（第７章第２節第 11 図）。中村１号墳の石室もこれらの開口方向に合わせたのかもしれない。

石室の全長は 9.3m 以上（羨道側壁検出部分まで）である（第 22・23・68 図，図版１）。石材は近傍に分布する牛切層で産出される砂岩で，割石および切石に加工されている。

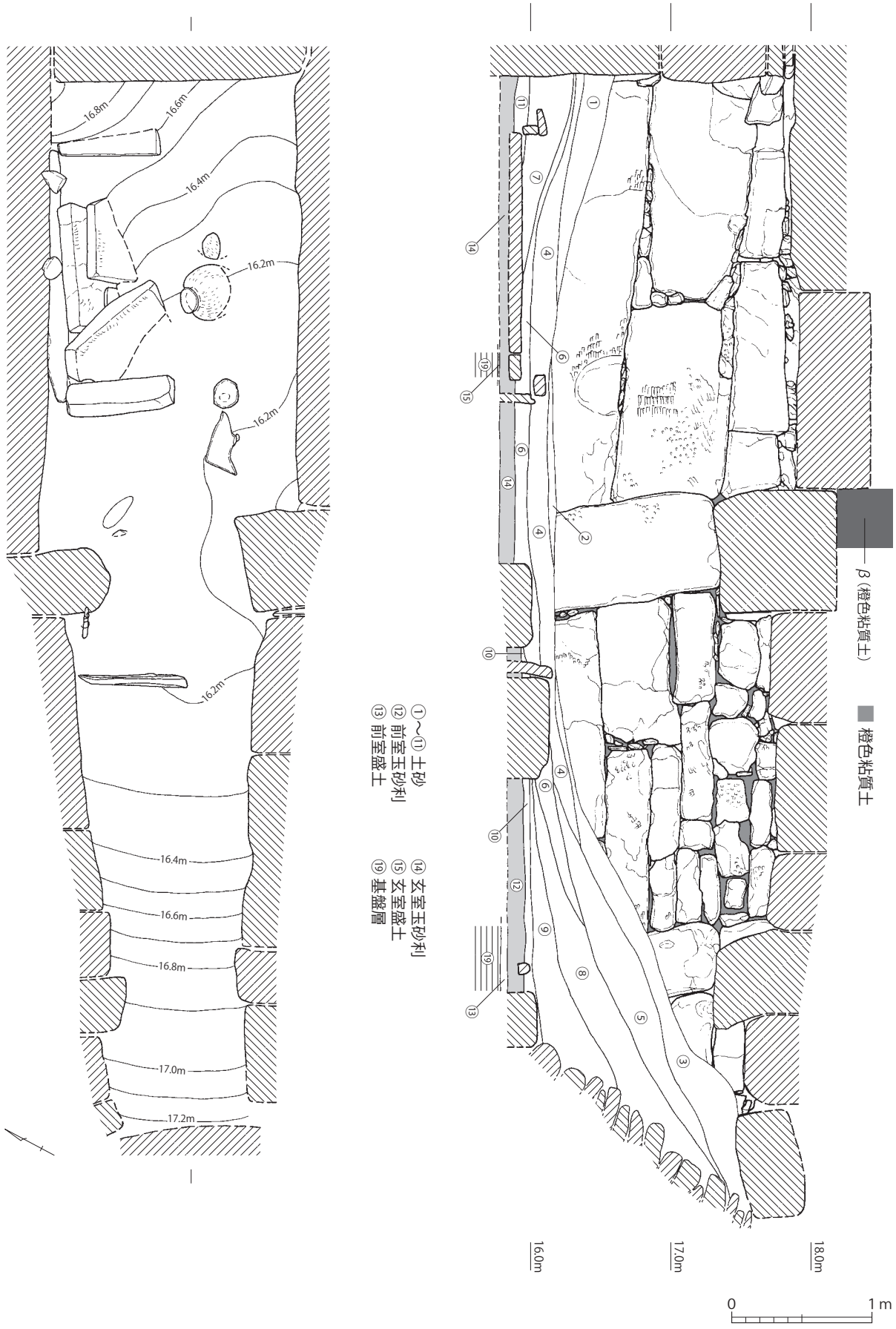
玄室・前室それぞれに石棺があり，玄室の石棺をＡ石棺，前室の石棺をＢ石棺と呼ぶことにする。調査は，石室の主軸に基準線を設定し行なった。２基の石棺を避ける必要があったため，石室の中心から右側によったラインを基準線とした。この基準線を基に，50㎝グリッドを設定し，発掘・実測を行った。

古墳の発見時には石室内に土砂が流入していた。土砂上面の平板測量と発掘によって，土砂は羨道側および左奥壁隅から流入していることがわかった。発掘の結果，流入土砂は①～⑪層に分層できた（第 21 図，図版 33・34・39）。

（１）　玄　室

玄室の平面形は，主軸方向に長い縦長長方形である。長さ約 3.3 m，幅約 1.9 m（床面），高さ約２mである。奥壁は，大型の厚さのある石を２段積み，その上に薄い石を積んだ３段で構成されている。最下段の右隅はカットされ，別の石が積んである（図版３）。これは，「切り組み積み」と呼ばれ，同時期の上塩冶築山古墳でもこの石積みが採用されている。側壁も奥壁と同じく３段積みで，最上段に薄い石が積まれる。左右壁とも最下段は一石である。その石の長さは約３m，厚さ約１mである。奥壁及び側壁の各石は，基本的には石の加工が丁寧で，隙間なく積まれている。ただし，部分的には間に小礫が挟まれている。奥壁は，両側壁に挟まれていて，側壁の最下段の石材には奥壁を受ける段が造られている。天井には２枚の割石を架ける。天井石の内面は石室の中央部でやや窪み，断面形がアーチ状をなす。工事で壊れた天井石は玄門側のもので，全体の６分の１ほどが割れて落下した。厚さ 0.5 mある。その壊れた天井石の破片は石室外に取り出し，現在は古墳の説明看板の横に置いている（図版 63）。

玄門部は，柱状の袖石が両壁から飛び出した両袖式である（図版２）。袖石は，奥壁側に傾斜し，そ



第 21 図　石室内調査前測量図と土層図（1：40）

の上には直接，楣石が架構されている。楣石は，袖石と玄室および側壁に支えられており，玄室側の側壁は，楣石が架かるように角がカットされている。楣石の厚さは約 0.85 mで，その上には盛土β層がある（第 23 図，図版１・34）。

奥壁および側壁，天井には，整形時のノミ痕が残る部分がある。玄室と前室の床の境には，縦 0.6 m，横幅 1.05 mの梱石がある。

床面には径１～ 10㎝程度の多彩な色の玉砂利が厚さ 10㎝前後敷き詰められている（図版３）。これらの玉砂利は，島根半島の日本海沿岸の流紋岩と凝灰岩，宍道湖南岸の花崗岩，産地不明の泥岩で構成されている。したがって，玉砂利の採集地は複数箇所に及ぶと推測される。

（２）　前　室

前室の平面形は，奥が広い台形状をなす。長さ約 2.5 m，幅は約 1.5 ～ 1.2 m（床面），高さ約 1.8 mで，玄室よりやや狭い。左側壁は割石および切石の５～６段積み，右側壁は５～８段積みである。最下段の石は，１枚石ではないが，長さ約 1.6 m，厚さ 0.6 mである。最上段の石は，長さ 30 ～ 50㎝前後，厚さは約 20㎝である。側壁の石の間には，橙色粘質土があり，壁の安定が図られている。これは，玄室ではみられない行為で，玄室の石積みの方が，石材加工の精度が高い。天井には３枚の割石を架ける。側壁および天井には，整形時のノミ痕が残る部分がある。

前室の玄門部（以下，前門と呼ぶ）は，玄室と同じく両袖式である。袖石はやはり，奥壁側に傾斜している。袖石の上には直接，楣石が架構されている。前室と羨道の床の境には，縦 0.4 m，横幅 0.9 mの梱石がある。

床面には玄室と同じ玉砂利が敷き詰めてある。

（３）　羨　道

羨道の平面形は閉塞石が残っているため，床面では不明であるが，奥が広い台形状をなすと想定される。長さは約 1.4 m，幅は約 1.2 ～ 1.05 m，高さは 1.55 mである。左右の側壁は厚さ約 20 ～ 30㎝薄い石による６段積みである。天井には２枚の割石を架ける。

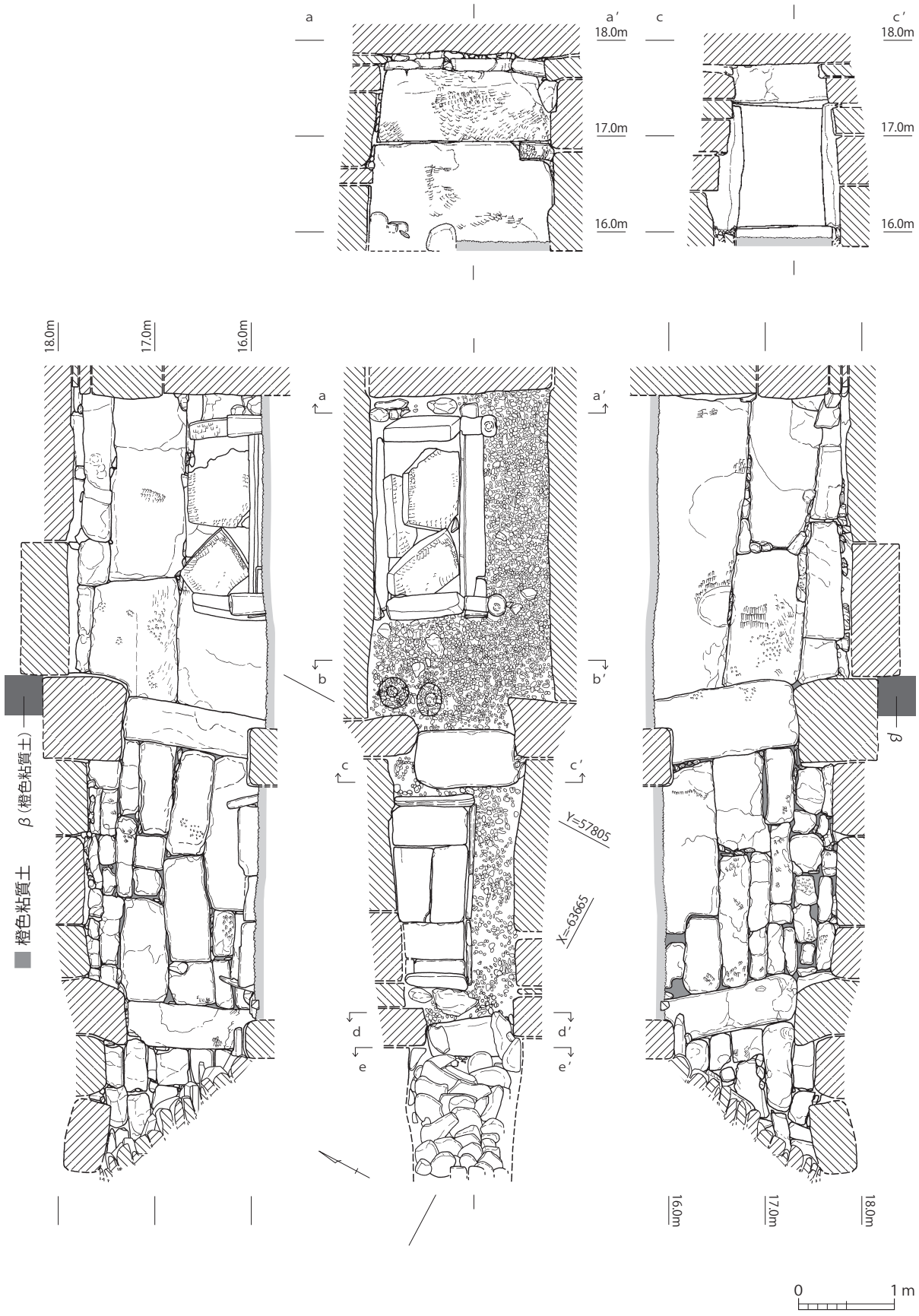
羨道はほぼ閉塞石で埋まっている。床面には玄室および前室と同じ玉砂利が敷き詰めてあるが，閉塞石によって，ほとんど隠れているため，どこまで敷かれているかは不明である。閉塞石は，長さ約 40㎝，幅約 20㎝，厚さ約 10 ～ 20㎝前後の礫である。前門部から約 50°の角度で積まれ，羨道側の天井石に接している（図版 40）。最下段は球状に近く，それより上はやや扁平な礫が積み上げられている。人が出入りできるような隙間はない。確実に未盗掘墳である。石室内と石室外の閉塞石については本章の第６節および第７章第３節を参照。

２　石棺の概要

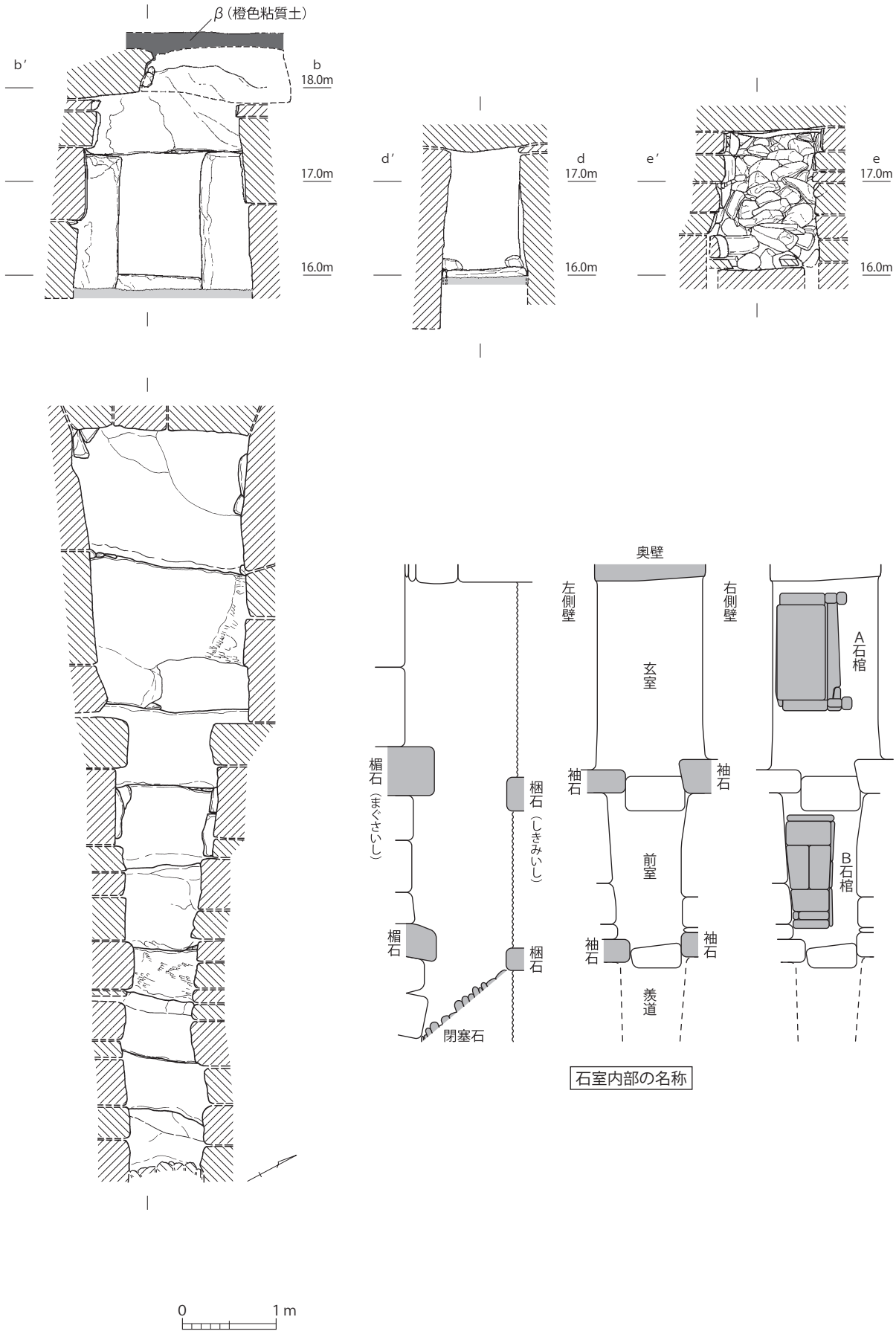
（１）　A石棺

玄室にあるＡ石棺は，組合せ式家形石棺で，石棺の前に付属施設がつく（第 24 図，図版３・６）。

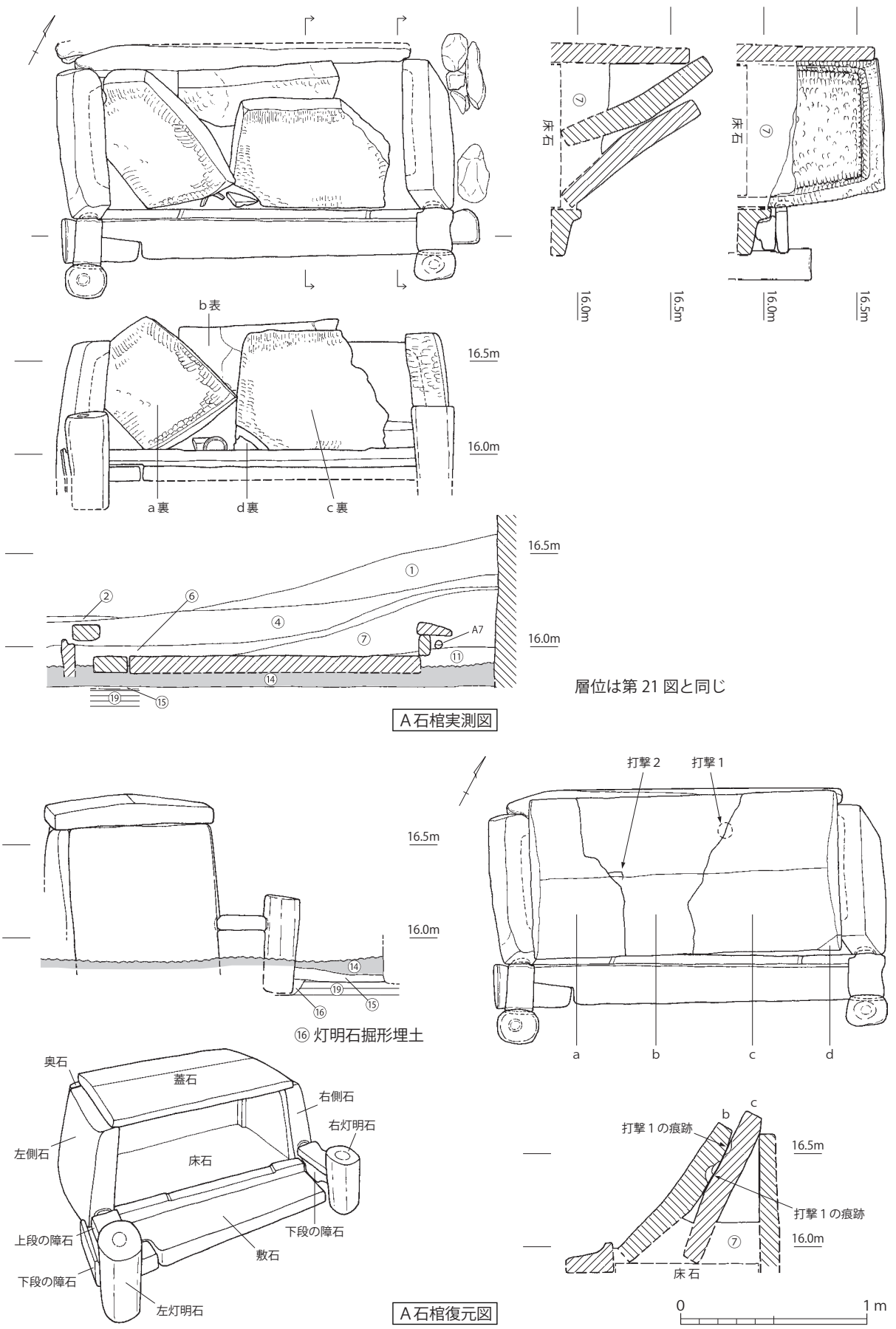
石棺は横口式で閉塞石はない。石棺は両側石，奥石，蓋石，床石からなる。両側石の内面側は丁寧に刳り込まれ，横断面がコの字状になっている。長辺約 2.1 m（内法 1.7 m），短辺約 0.9 m（内法 0.78



第 22 図　石室測量図（1）（1：60）



第 23 図　石室測量図（2）（1：60）

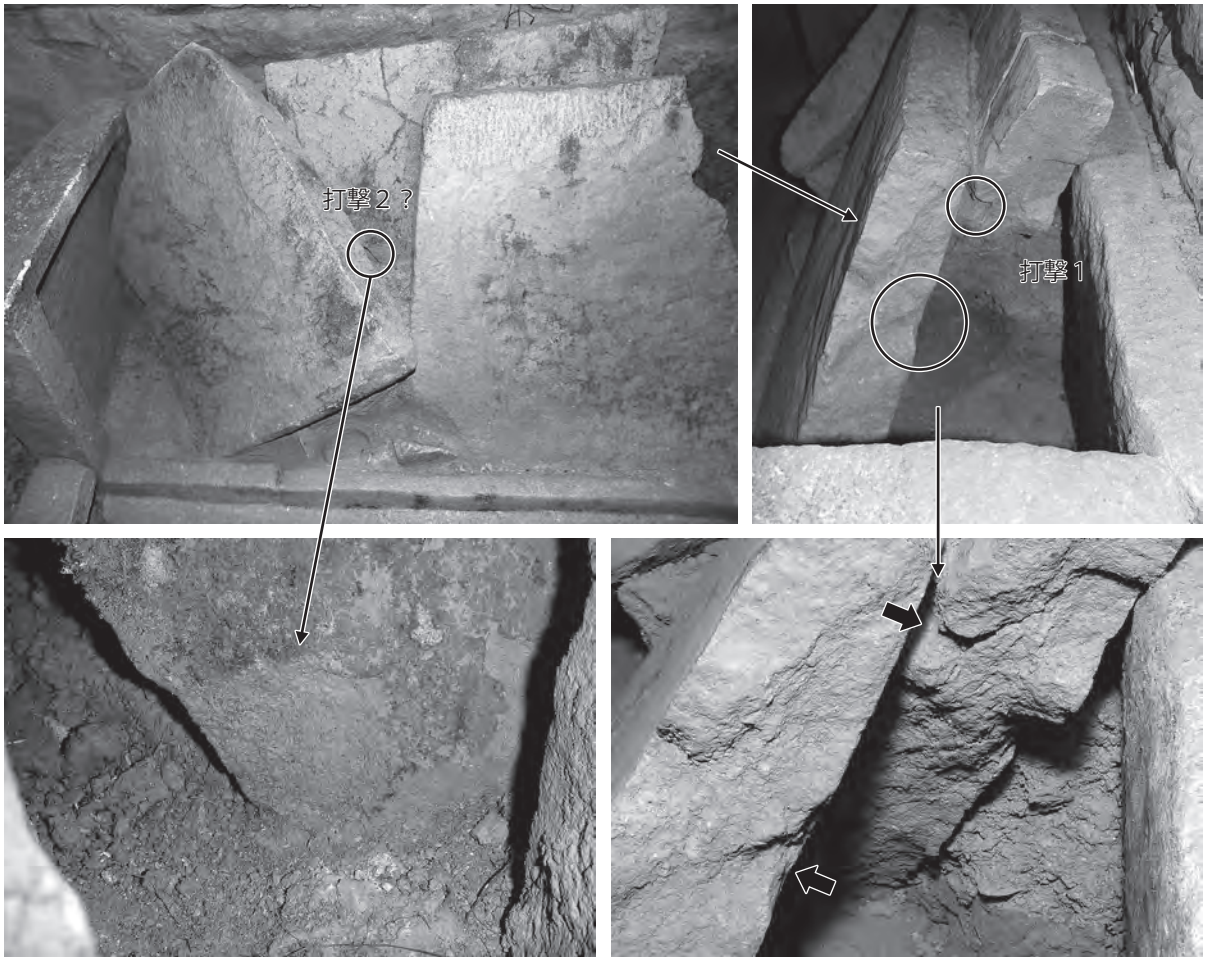


第 24 図　A石棺測量図（1：30）

m），高さ約 1.9 m（内法 0.7 m）である。

発見時から蓋石は割れて，石棺内に落ち込んでいた。Ａ石棺内に土砂を残したまま保存する（未盗掘部分を残す）ことが決まったことから，石棺内の調査は，蓋石の輪郭を確認する程度にとどめた。そのため，石棺内の土砂の堆積状況、そして床石が１枚あるいは複数枚かは不明である。蓋石は平入りで，棟の厚さ約 15㎝，軒側の厚さは約８㎝である。蓋石の内面はわずかに窪んでいる。蓋石はａ～ｄの４片に割れている。破片ａ～ｃは蓋石をおおむね三分する大きさだが，破片ｄは破片ｃの隅部の小片である。破片ｂのみが棟を表に向け，他の破片ａ・ｃ・ｄは裏を向いている（図版 33）。この状況から，自然な破損転落の状況とは考えにくく，人為的に蓋石が反転された状況と判断した。そして，蓋石を観察すると，２か所に打撃痕を確認できた。打撃１は蓋石の破片ｂとｃの破断面を形成したもので，両者の同じ位置に窪みがある（写真７）。これは人為的な打撃痕と判断して間違いない。打撃２は蓋石破片ｂの上面にある。約 10㎝の剥離面を確認した。Ａ石棺の他の部位に剥離痕がないことから，打撃痕の可能性が高いと判断した。ただし，打撃２により割れた部位は堆積土により覆われていて，確認できない。よって，確実な打撃痕は打撃１であり，これは人為的なものとみてよい。

Ａ石棺右側石と奥壁との間には，石を詰め込んで石棺が倒れないようにしてある。その石の底面の⑰層上面で発掘を停止した（第 30 図）。その理由は，Ａ石棺右側石の底面付近を確認し，これより下



蓋石破片ｂ表の剥離痕　　打撃１の痕跡（蓋石破片ｂと蓋石破片ｃ）

写真７　Ａ石棺蓋の打撃痕跡

左灯明石と障石

右灯明石と障石

写真８　灯明石と障石の構造

に新たな床面はないと判断したからである。また，Ａ石棺側石の底面付近には土砂⑪層が堆積しており，側石の明確な掘形はなかったと推察される。

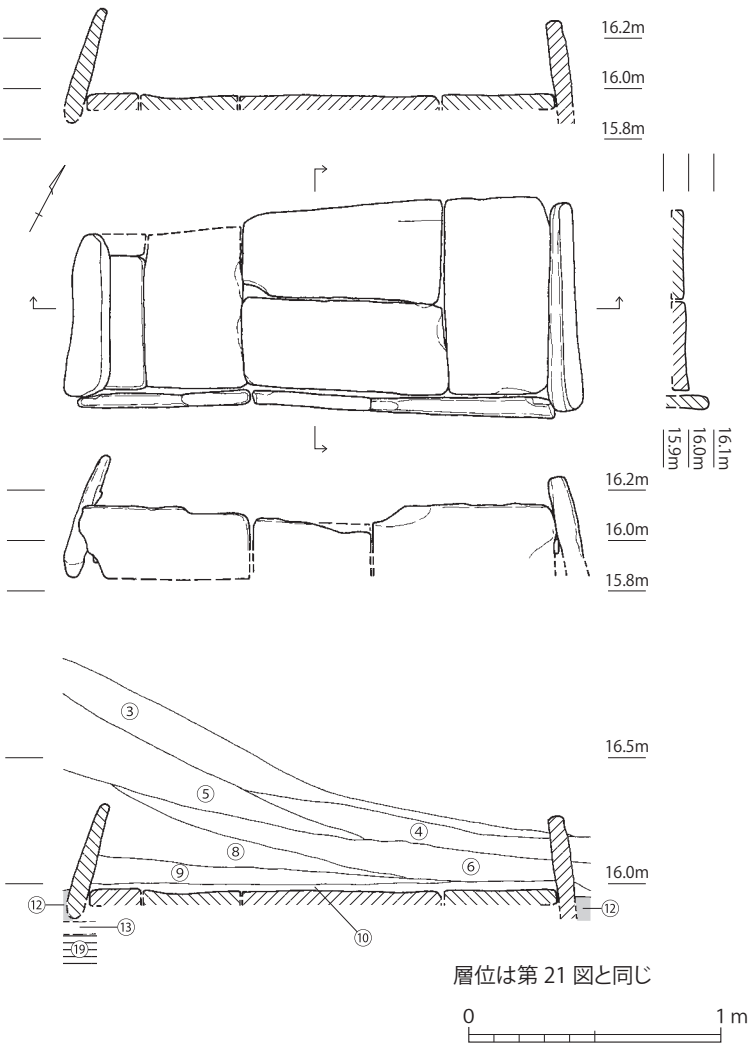
Ａ石棺は前面に付属施設がある。それは，敷石，灯明石，２段の障石からなる。敷石はＡ石棺と接し，側石の間に入るように設計されたと推定できるが，やや前方にずれている。敷石の石棺側は，断面Ｌ字状に削り出され，仕障をなす。その仕障はＵ字形の浅い刳り込みをもつ。敷石は、長辺長が約1.75 m，平坦面の幅は約 18 ～ 22㎝，仕障部分を含めると約 25㎝である。敷石の左側角は，別の石で補填されている。

両側石の前には，灯明石がある。灯明石は歪な円柱状をなし，上面には直径約 10㎝，深さ約２㎝の円い窪みがある。左灯明石は，平面が約 23㎝×約 19㎝，高さは露出部分が約 35㎝、全高は約 52㎝である。右灯明石は平面が約 23㎝×約 17㎝，高さは約 40㎝（露出部分）である。両灯明石は上段の障石によって，側石と繋がれている（写真８，図版３）。上段の障石には２方向に突起（ほぞ）があり，その一方を石棺の側石にあるほぞ穴に差し込む構造である。一方，灯明石側は溝状の切り込み（穴ではない）にはめ込む構造となっている。下段の障石は，左右で構造が異なる。左下段障石は，基本的に直方体で，基部が床面に埋め込まれている。上面には上に載る上段の障石を支えるための段が削り出されている。右下段の障石は歪な凸字形をしており，敷石と上段の障石に挟み込まれている（図版３）。

Ａ石棺は，凝灰岩で造られている。凝灰岩は牛切層での分布範囲が狭く，特別に用意された石材であろう。

（２）　Ｂ石棺

前室にあるＢ石棺は，組合せ式の箱形石棺で，短辺と一方の長辺に立てた側石と床石からなる（第25 図，図版４）。奥石を石室の側壁で代用するため，左側壁に接して設置されており，蓋石もない。前側の側石は，３枚の板石からなる。両端の板石の角を加工し，中央の板石をやや低く立てて，全体でＵ字状の刳り込みを表現する。短辺の側石の角は丸みをもつ。床石は，大小６枚からなる。長辺約2.05 m，短辺約 0.9 ～ 0.7 m，長辺の側石の高さ約 30㎝，短辺の側石の高さ約 45㎝である。石の



第 25 図　B石棺測量図（1：30）

厚さは約８㎝である。平面形は，玄室側が幅広く，羨道側が狭いことから，被葬者の頭部は玄室側に置かれた可能性が高い。

B石棺は，石室と同じく砂岩で造られている。床石と床石の間，床石と側石との間には石室と同じ玉砂利がいくつか観察された。

B石棺内の土砂の発掘は，⑧層まで他と同じく慎重に掘り下げた。床面が近いと推察し，⑨・⑩層上面で一旦掘り下げを停止した。この層まで，遺物が出土しなかった。そこで，大きな遺物はないと判断し，石棺内に 10㎝グリッドを設定し，グリッドごとに埋土を切り取り，それを文化財課へ持ち帰り，室内で発掘した。発掘前には，X線撮影をして遺物の有無を確認した。また，グリットごとに床石と接した埋土を少量採取し，リン濃度の分析を行った。その結果，遺体が石棺内に安置された後に，人骨が集骨されたという解釈が導き出された（第５章第９節）。

3　床面の断ち割り調査

石室および石棺の築造過程を確認するのと，検出した玉砂利面が初葬面か追葬面かを確認する目的で，玄室にAトレンチ，前室にBトレンチを設定した。

（1）　Aトレンチ

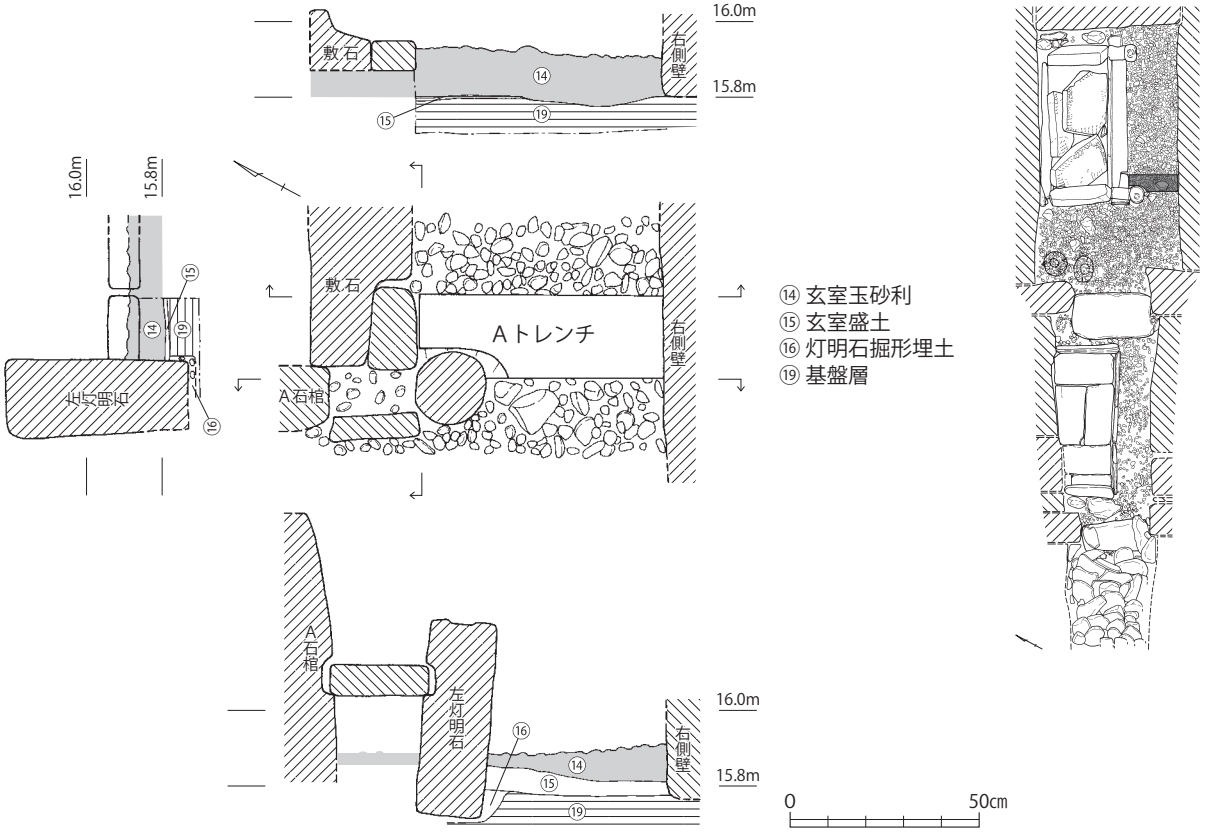
Aトレンチは，右側壁と左灯明石，そして，A石棺敷石に接するように設定した。長辺約 65㎝，幅約 20㎝のトレンチである（第 26 図，図版 42）。調査の結果，以下のことがわかった。

① 玄室右側壁の最下段の石は，⑲層（基盤層）に据えられている。その側壁の掘形はない。

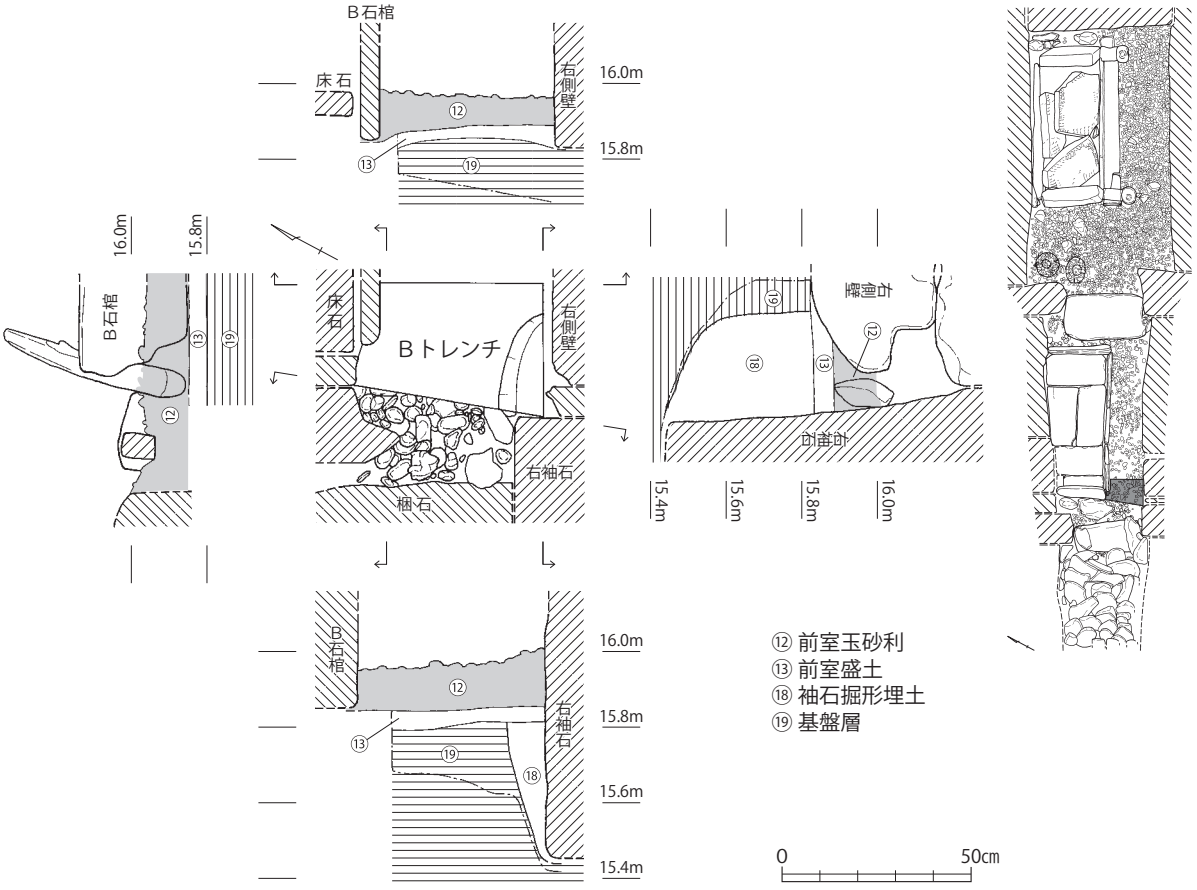
② 左灯明石の掘形を確認した。それは，⑲層から掘り込まれている。灯明石を安定させるため玉砂利が隙間に詰め込まれていた。灯明石の全高は，約 52㎝である。

③ 玄室右側壁および左灯明石の設置後，盛土⑮層（横褐色粘質土）が置かれている。盛土の厚さは均等ではなく，盛土がない場所もある。厚い場所では約 12㎝もある。

④ 盛土⑮層の上に玉砂利⑭層が敷き詰められている。厚さは一定ではなく，約５～ 14㎝である。



第 26 図　Aトレンチ測量図（1：20）



第 27 図　Bトレンチ測量図（1：20）

⑭層は玉砂利のみで，粘土などは混ざっていない。Ａ石棺敷石は，玉砂利の上に設置されている。

⑤　埋葬時の床面は，Ａトレンチ内では，玉砂利⑭層上面以外にないと判断した。

以上のことから，次のことが推定される。Ａ石棺側石は灯明石とほぼ同時に設置された可能性が高い。それは，灯明石と石棺側石が上段の障石で連結されているからである。したがって，Ａ石棺の設置は，石室側壁の構築と連結して行なわれていたことがわかる。すなわち，Ａ石棺は石室築造時から計画的に設置されていたと考えられる。

（２）　Ｂトレンチ

Ｂトレンチは，前室の右側壁と右袖石，そして，Ｂ石棺の長辺の側石に接するように設定した。トレンチは長辺約 50㎝，短辺約 35㎝である（第 27 図，図版 42）。調査の結果，以下のことがわかった。

①　右側壁は，⑲層（基盤層）にたてられている。右側壁の掘形はない。

②　前室右袖石の掘形を確認した。それは，⑲層（基盤層）から掘り込まれている。左袖石の全高は，1.9 ｍで，その３分の１近い約 55㎝が埋められている。右袖石の掘形は，右側壁の直下にあるから，右袖石を立てた後に，右側壁を積んでいる。

③　側壁を立てた後に，厚さ約５㎝の盛土⑬層（褐色粘砂土）が置かれている。⑬層はＡトレンチの⑭層とは土質が異なる。Ｂ石棺の長辺と短辺の側石は⑬層上面に設置されている。床石の下には⑬層があるので，これも一連の設置作業による。

④　Ｂ石棺を設置後（同時に），玉砂利⑫層が約 12㎝敷き詰められている。⑫層は，玉砂利のみではなく⑬層が混ざっていて，玄室の玉砂利⑭層とは異なり，雑な敷き方である。

第２節　石室と石棺の築造過程

以上の成果をまとめ，以下に石室の築造過程を大まかに６工程に分けて示す（第 28 図）。

第１工程（石室掘形の掘削）

まず，石室の掘形を掘削し，さらに，その中に玄室および前室の袖石と奥壁の掘形を掘削し石室の平面形を決定する。石室の構築面（基盤層）の標高は約 15.8 ｍで，墳丘の３トレンチで確認した基盤層の標高は，約 16.5 ｍである。したがって，石室部分が約 0.7 ｍ低くなっており，石室に掘形があったと推察する（第 19 図）。そして，　袖石の掘形の存在は，Ｂトレンチで分かっている。また，奥壁の底面は側壁の底面よりも５㎝以上（奥壁の底面は確認していない）低い位置にあるから，奥壁にも掘形があることが推察できる（第 29 図）。

第２工程（奥壁と袖石の設置）

第１工程で掘削した掘形に奥壁と袖石を設置し，掘形を埋める。

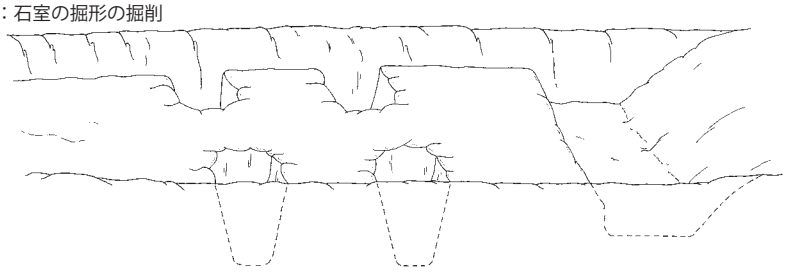
第３工程（基盤層に最下段の側壁を置く，Ａ石棺の掘形の掘削）

石室掘形の壁沿いに最下段の側壁を置く。そして，Ａ石棺灯明石の掘形を掘削し，灯明石を立てる。それと同時にＡ石棺の側石を立てる。

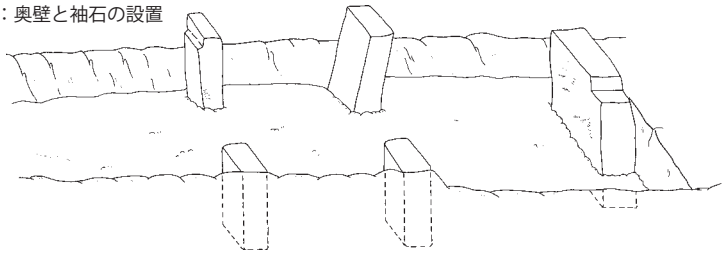
第４工程（Ａ石棺の完成と玄室床面の完成）

Ａ石棺の完成と同時に，盛土⑮層を置き，玉砂利⑭層を敷き詰め，敷石を設置する。

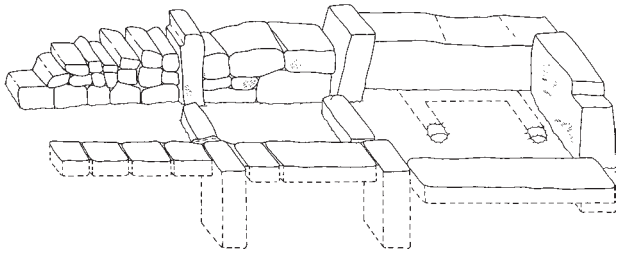
第 1 工程：石室の掘形の掘削



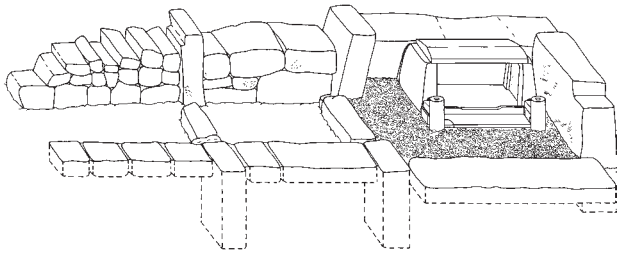
第 2 工程：奥壁と袖石の設置



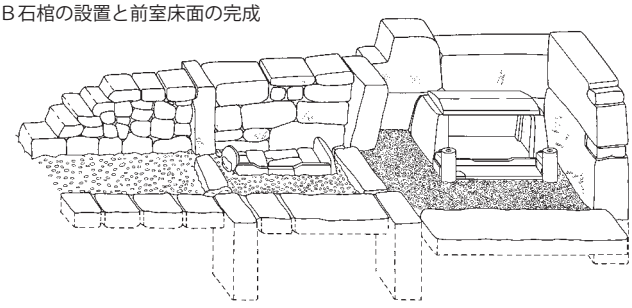
第 3 工程：基盤層に側壁を積む，A 石棺の掘形の掘削



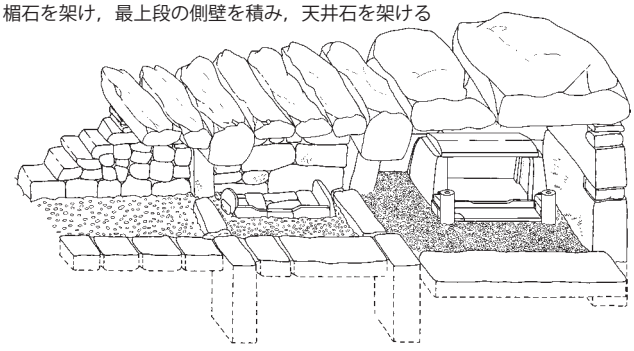
第 4 工程：A 石棺の完成と玄室床面の完成



第 5 工程：B 石棺の設置と前室床面の完成



第 6 工程：楣石を架け，最上段の側壁を積み，天井石を架ける



第 28 図　石室・石棺の築造過程

第５工程（Ｂ石棺の設置と前室床面の完成）

前室では盛土⑬層を敷いた後，Ｂ石棺を設置する。Ｂ石棺の設置と同時に玉砂利⑫層を敷き詰める。その後，側壁が上段まで積まれる。Ｂ石棺の設置面から判断して，第５工程は第４工程と連続していると推察した。

第６工程（楣石を架け，最上段の側壁を積み，天井石を架ける）

袖石の高さまで，側壁が積まれたあとに，楣石が架けられれる。そして，最上段の側壁が積まれ，最後に天井石を架けて，石室が完成する。

以上のような石室と石棺の築造過程を推察した。この築造過程で曖昧な部分は，第５工程である。特にＢ石棺の設置時期がはっきりしない。本項で示した段階と第６工程以降の埋葬直前の設置の２案が推定できる。

第３節　副葬品出土状況

石室内からは約 230 点の遺物が出土した。本項では，出土位置別および器種別の出土状況を示したい。

１　位置別遺物出土状況

石室内の遺物出土状況の全体平面図を第 29 図に示した。さらに，細部の平面及び断面図を第 30 ～ 38 図に示した。

（１）　玄室奥壁沿い（細部１・３～５）

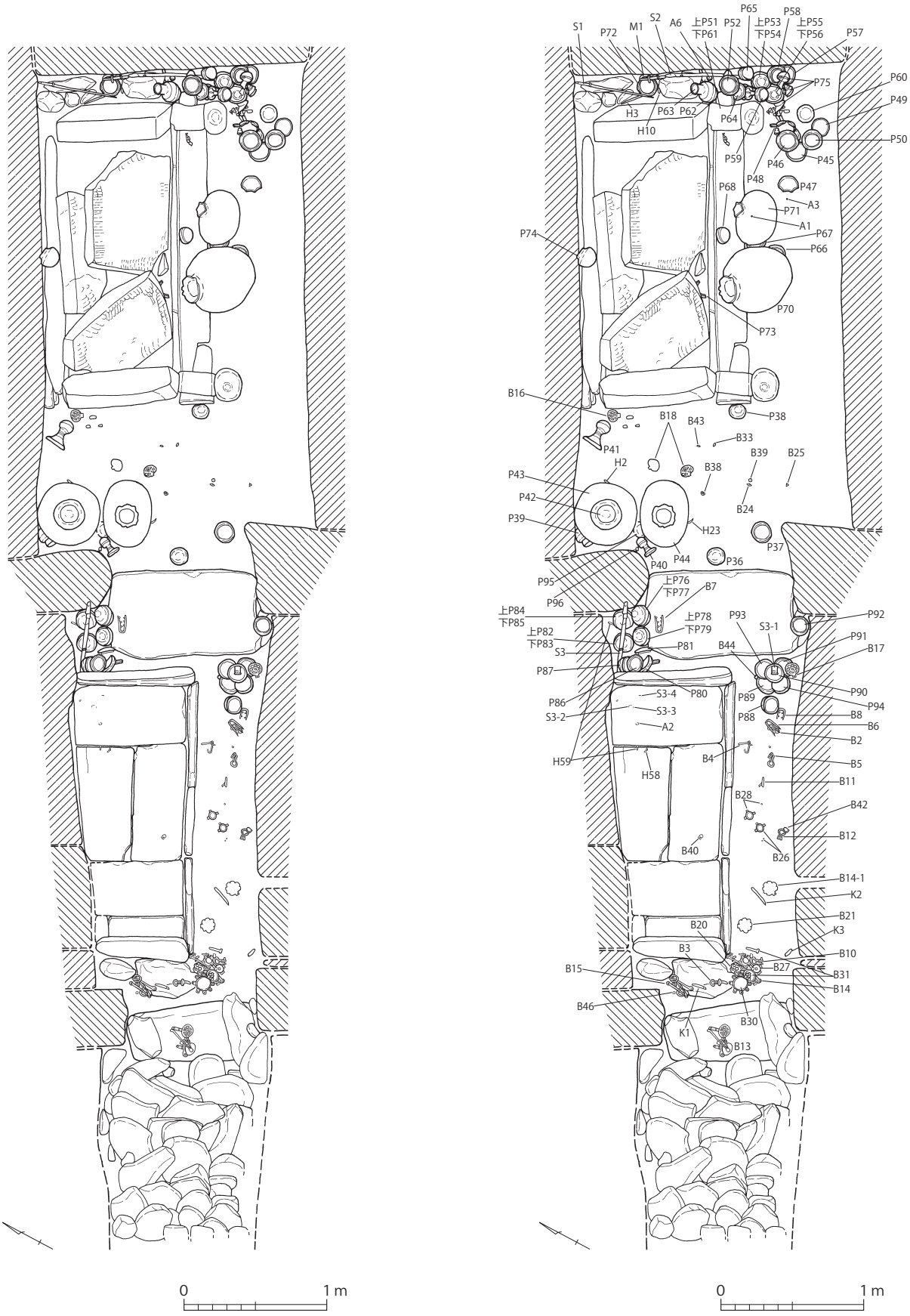
細部１・３～５は奥壁沿いの一群である（第 30・31 図，図版７・37・38）。遺物が出土する層位は，床面（⑭・⑰）と，土砂⑪層内，土砂⑪層上面の３つに分けられた。床面出土および一括性の高いものは，鉄鏃Ｈ１，須恵器Ｐ 51 ～ 59 である。鉄鏃Ｈ１は胡籙に入ったままの状態で出土している。

土砂⑪層内からは，珠文鏡Ｍ１（図版 38），金銅製鈴Ａ６（図版７・37）・８・９，大刀Ｓ１－１～４，大刀Ｓ２（図版７・37），大刀Ｓ２の足金具と茎尻，鉄鏃Ｈ３～ 48（い群・第 40 図），須恵器Ｐ 72 が出土した。これらが⑪層中に埋没した理由は，矢柄の残った鉄鏃（い群）が毀損された後に，奥壁とＡ石棺の間に置かれ，それらの上に鉄鏃以外の遺物が置かれた結果と推察した。

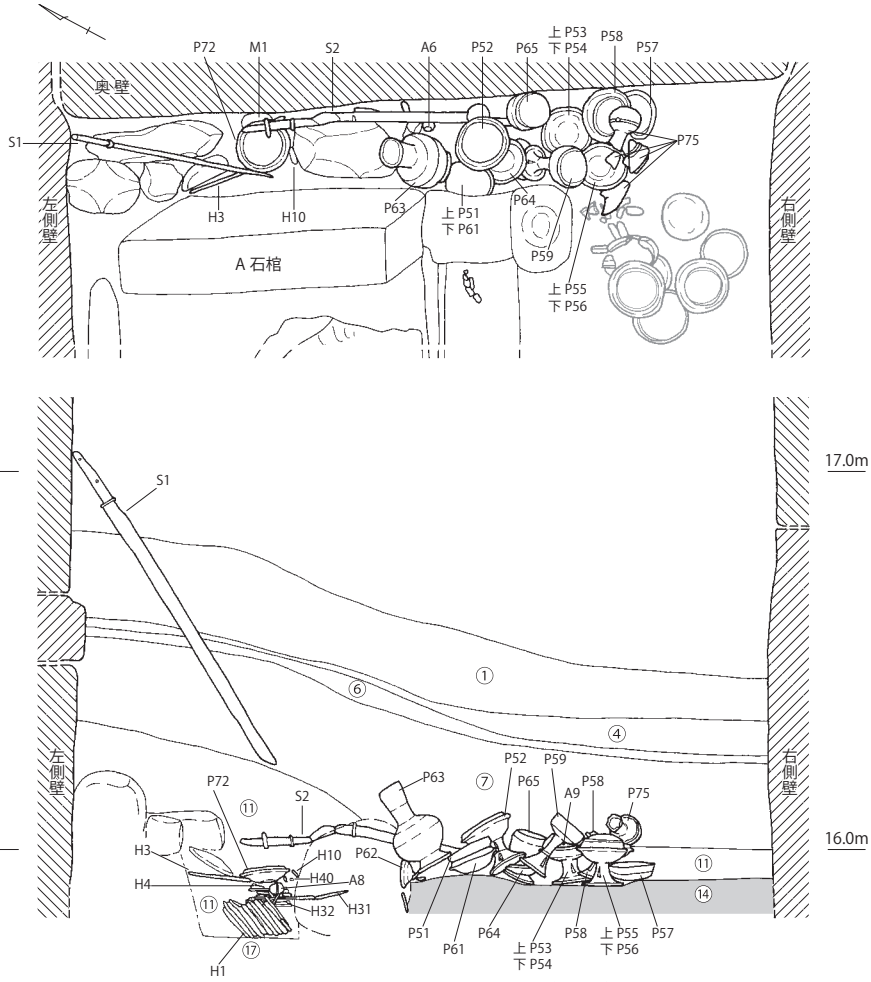
土砂⑪層上面からは，大刀Ｓ１，金銅製鈴Ａ７（第 24 図），須恵器Ｐ 75 が出土した。大刀Ｓ１は立て掛けられて（図版５・34），須恵器Ｐ 75 は口縁部が破損して⑪層上面に散らばっていた（図版７・37）。

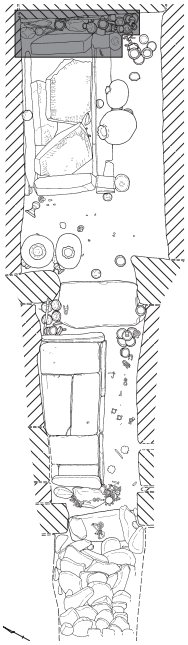
（２）　Ａ石棺右灯明石前（細部２）

細部２は右灯明石の前である（第 30 図，図版７）。須恵器Ｐ 45・46・48 ～ 50・60 は床面（玉砂利⑭層上面）から出土した。須恵器Ｐ 48 は不自然な割れ方をしている。破片は床面の他に，土砂⑪層内，⑪層上面から出土していて，⑪層堆積後，割れた可能性が推定できる。須恵器Ｐ 47（第 29 図）は細部２の近くの床面から出土した。口縁部が欠けているが，周辺では破片は見つからなかった。



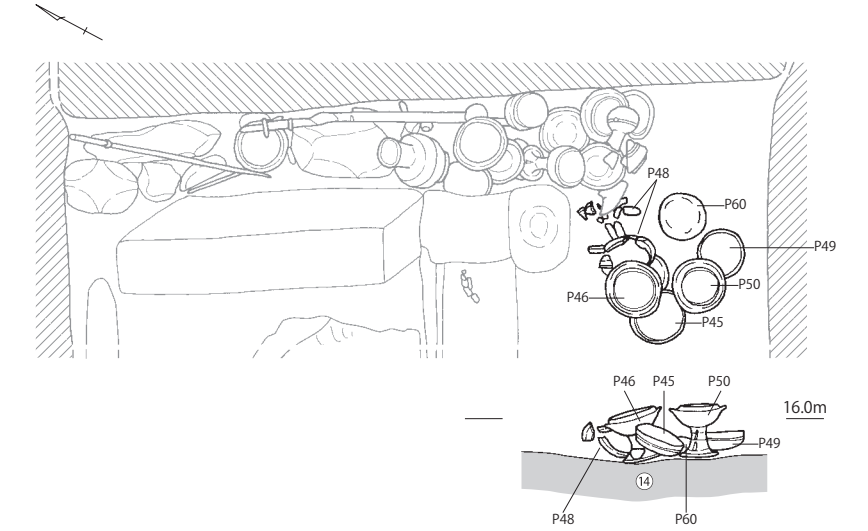
第 29 図　石室内遺物出土状況（1）（1：40）

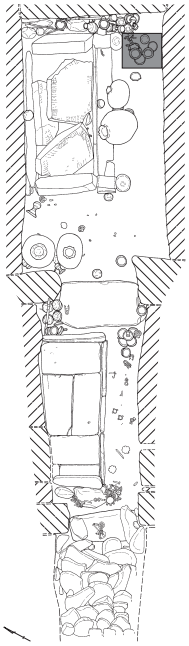




⑰ 奥壁あるいはＡ石棺の掘形埋土

細部１

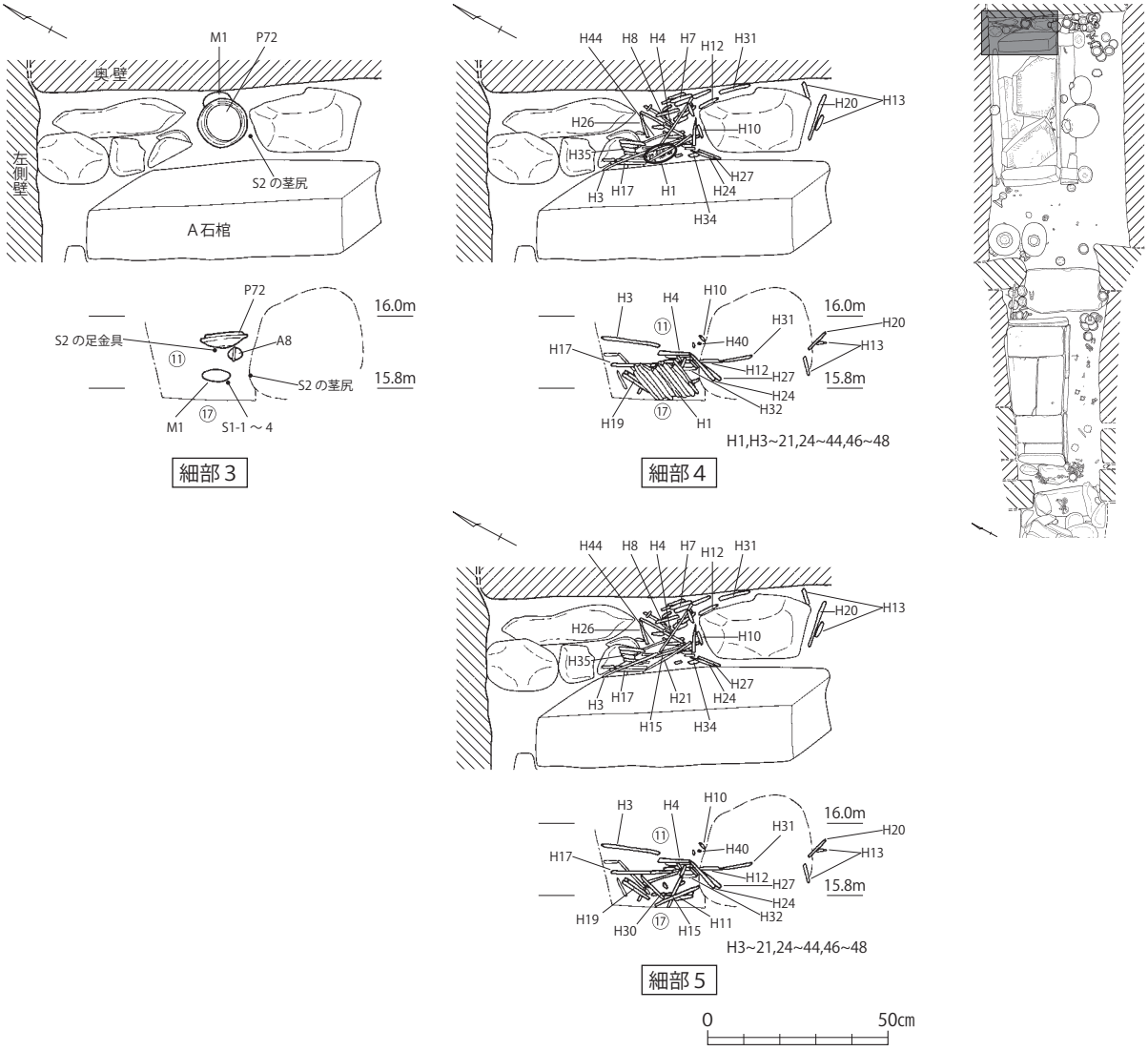




細部２

0　50cm

第 30 図　石室内遺物出土状況（２）（１：20）



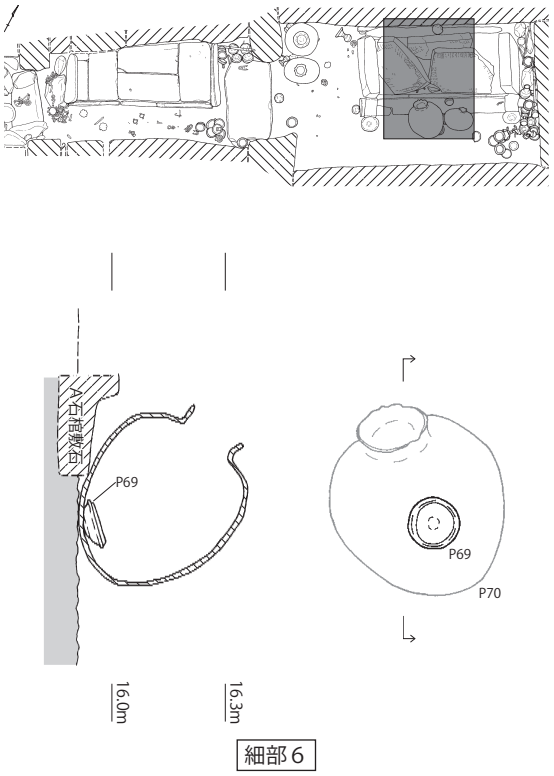
第 31 図　石室内遺物出土状況（3）（1：20）

（3）　A 石棺前面（細部 6 ～ 9）

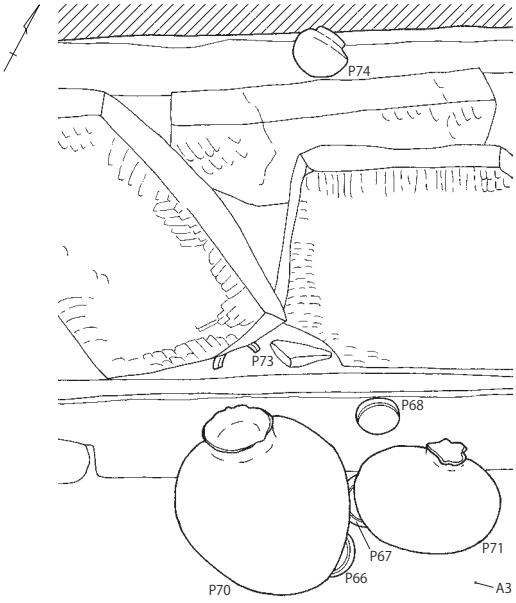
細部 6 ～ 9 は A 石棺の全面である（第 32 図，図版 6 ・35）。A 石棺前の敷石に寄りかかるように須恵器 P 70･71 が出土した。これらは，床面に接している。P 70 の内部には土砂と水が溜まっていて，総重量約 50kg であった。内部の土砂を取り除くと，須恵器 P 70 の内底に接して，P 69 がみつかった（図版 57）。

須恵器 P 70・71 の下，床面上から P 66・67，金環 A 1，ガラス勾玉 A 3 が出土した（図版 35）。須恵器 P 68 は敷石の上面にあった。これらは，当初は石棺内にあったと考えられ，それがかき出されたと判断した（金環 A 1 については第 5 章第 6 節 158 頁参照）。石棺内で確認した P 73 は，取り上げず保存した（図版 1 ・ 6）。かえりがあり，杯身あるいは有蓋高杯の可能性がある。その状態から判断すると，前者は何かに支えられているか，後者は倒れている可能性が考えられる。いずれにしても，正位置に置かれた状況ではなく，石棺内から遺物を出す際の名残りであろう。

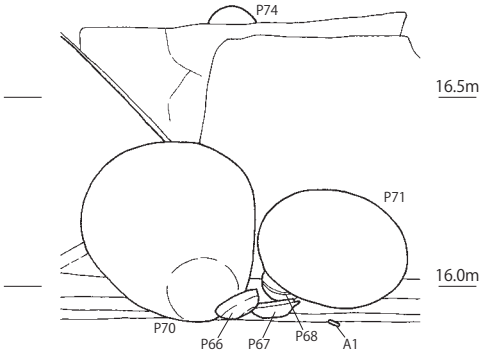
須恵器 P 74 は，A 石棺奥石の上面にあり（図版 6･34），蓋石が破損した後に置かれたと考えられる。



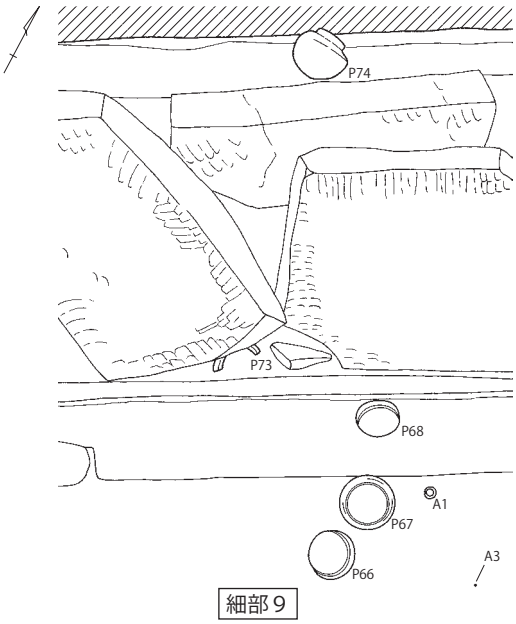
細部６



細部７



細部８



細部９

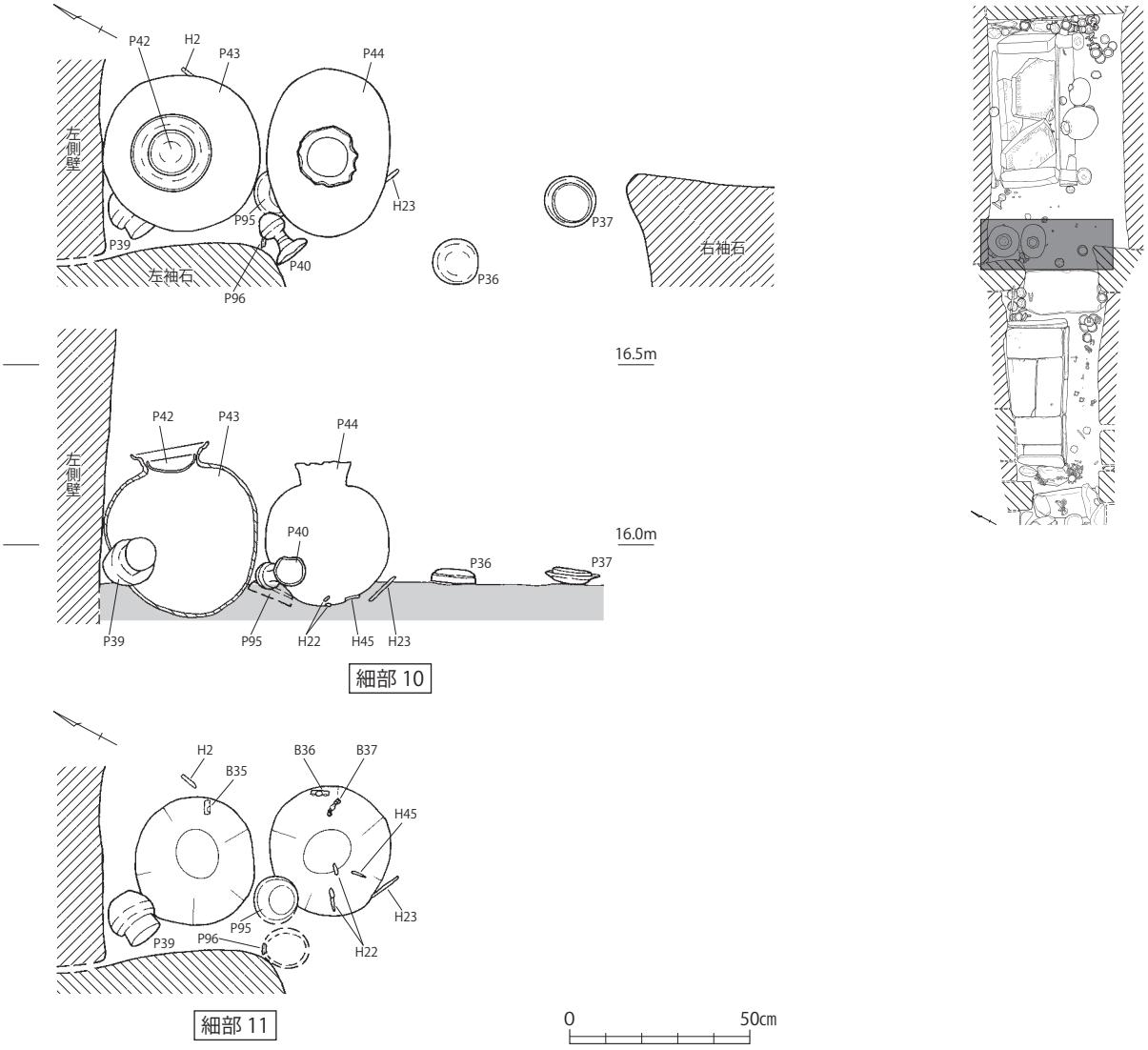
第 32 図　石室内遺物出土状況（4）（1：20）

（4）　玄室玄門部（細部 10・11）

細部 10・11 は玄室の玄門部付近である（第 33 図，図版 7・36）。須恵器Ｐ 43・44 は，床面を窪ませた中にそれぞれ入れられ，倒れないようにしてある。この２点は，古墳発見時の天井石落下により上部が破損している。天井石が破損する前は，２点とも完形に近い状態であったと推察する。須恵器Ｐ 42 は，割れて須恵器Ｐ 43 の中に落ち込んだ状態で出土したが，天井石落下前は，須恵器Ｐ 43 の蓋の役目をしていたと推定している（図版７）。それは，須恵器Ｐ 42 の外面と須恵器Ｐ 43 の内面に同じ形をした鉄分が付着していることからの判断である。

須恵器Ｐ 39 は，床面（玉砂利⑭層上面）から出土している。馬具Ｂ 35 ～ 37，鉄鏃Ｈ 22･45 は，須恵器Ｐ 70・71 の下の窪み（玉砂利⑭層上面）から出土した。また，須恵器Ｐ 95･96，鉄鏃Ｈ２・23 は，床面（玉砂利⑭層上面）の中から出土した。

馬具Ｂ 16・18・24・25・33・38・39・43，



第 33 図　石室内遺物出土状況（5）（1：20）

須恵器P 36 ～ 38・41・40 は（第 29 図），すべて床面から出土した。馬具B 18 は楕円形斜格子杏葉で，金銅板と地板が外れて出土した。

玄室の玄門部の床面から出土した馬具は，既に毀損された状態で置かれている。それらの上に，須恵器P 43・44 は置かれていた。そして，これらの須恵器を配置するための窪みをつくる際に，床面（玉砂利⑭層上面）の中に遺物が混入したと判断した。

（5）　B石棺

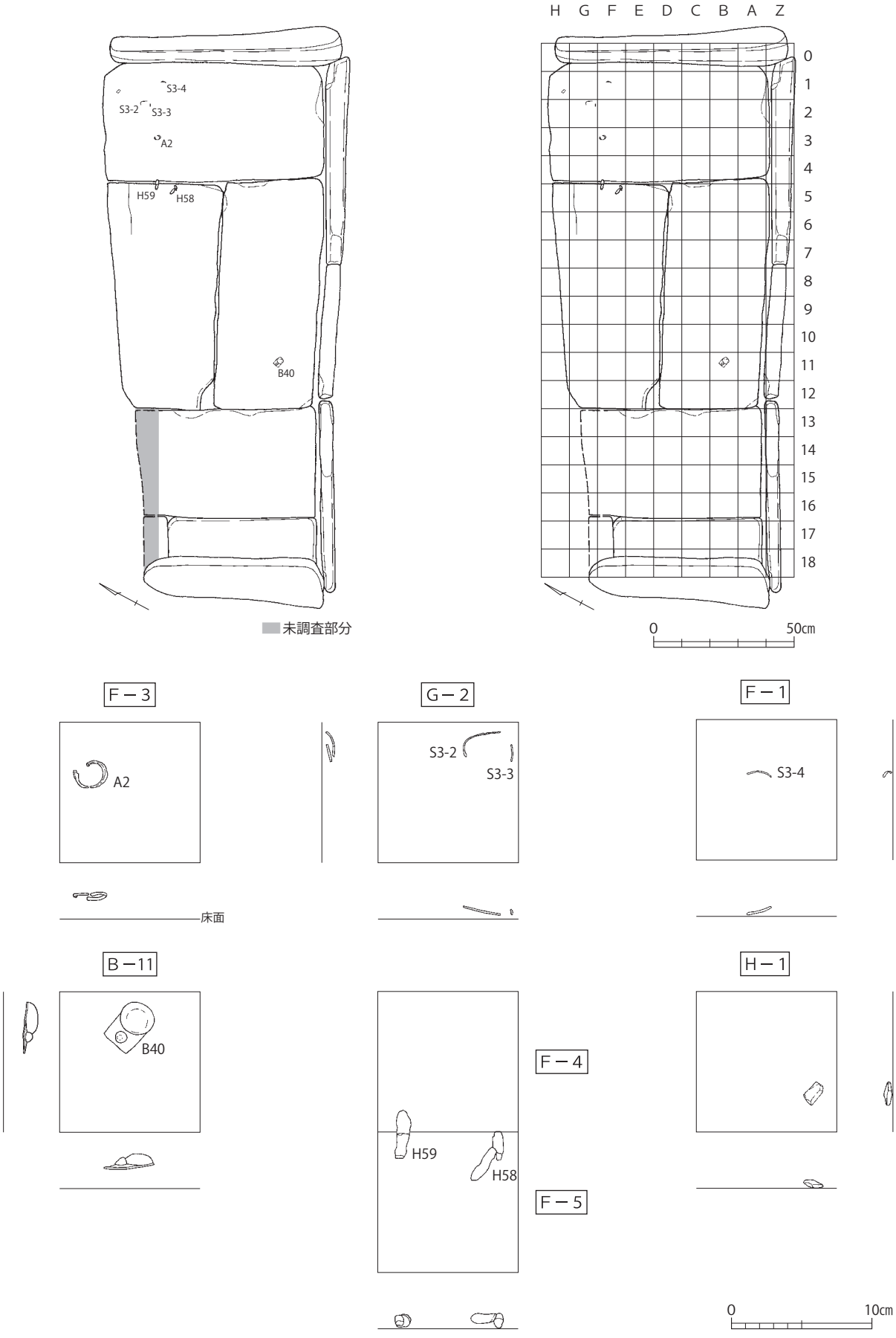
石棺の頭部左側付近から遺物がまとまって出土した（第 34 図，図版 67）。床面からは，大刀S 3－2～4，鉄鏃H 58・59 が出土した。

銀環A 2・馬具B 40 は，土砂⑩層上面から出土した。

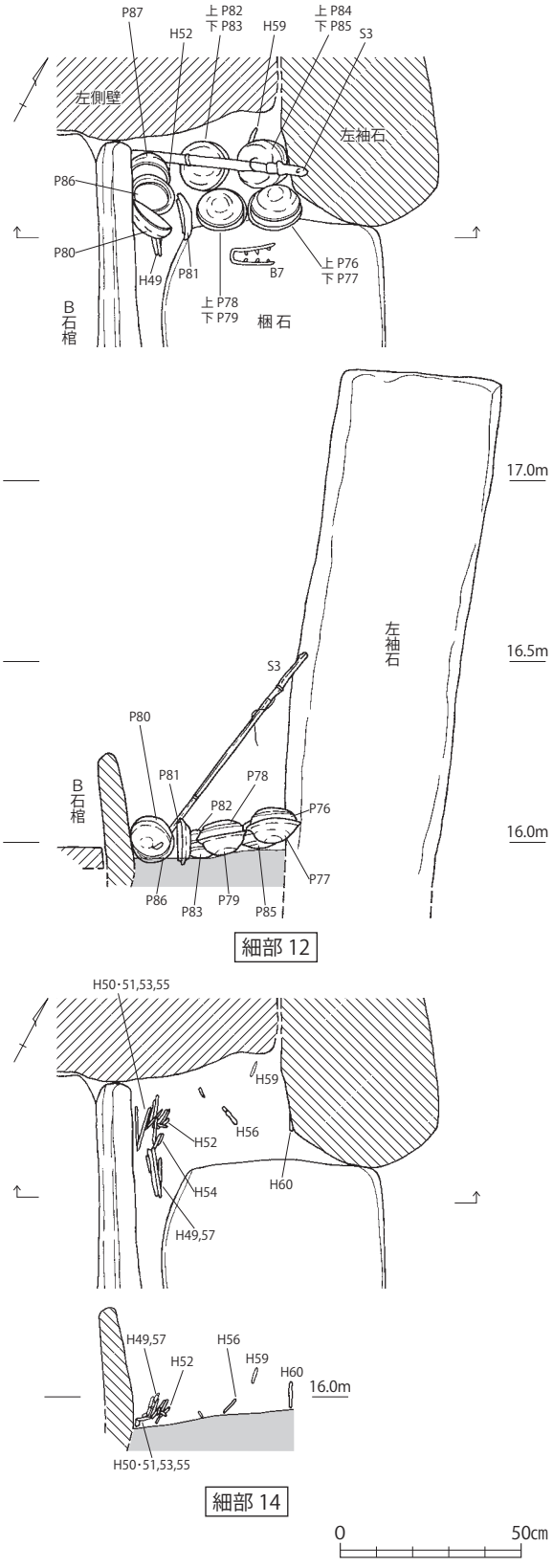
これらのことから，大刀S 3が副葬当初は石棺内にあり，また，鉄鏃H 58・59 は毀損後ばら撒かれたと考えられる。土砂⑩層が堆積後，毀損された馬具B 40 や，銀環A 2が配置されたと考えられる。

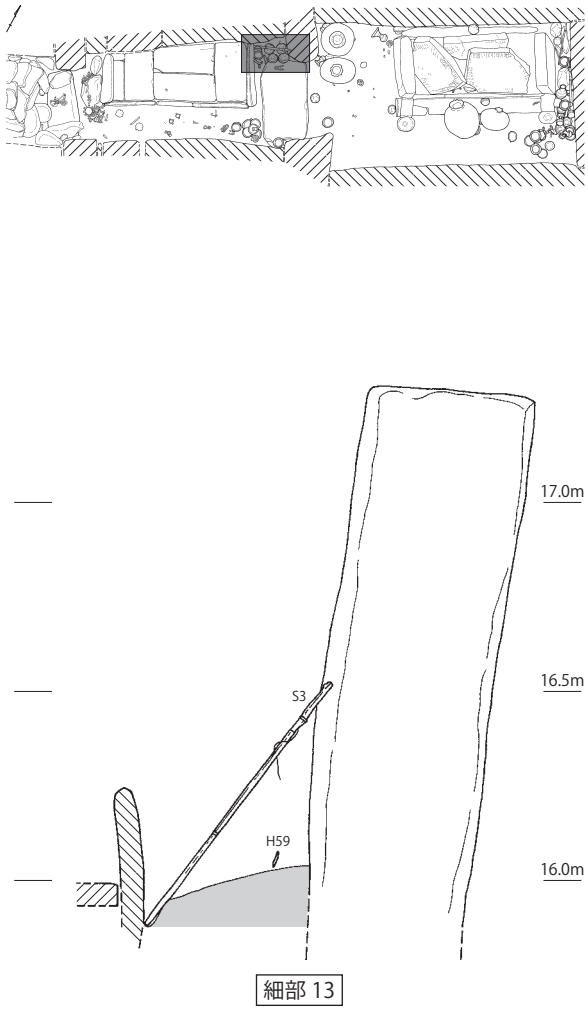
（6）　玄門左袖石とB石棺の間（細部 12 ～ 15）

細部 12 ～ 14 は，玄門の左袖石とB石棺の間である（第 35・36 図，図版 5・41）。1次調査で取り



第 34 図　Ｂ石棺遺物出土状況（1 ：20，遺物 1 ： 4）



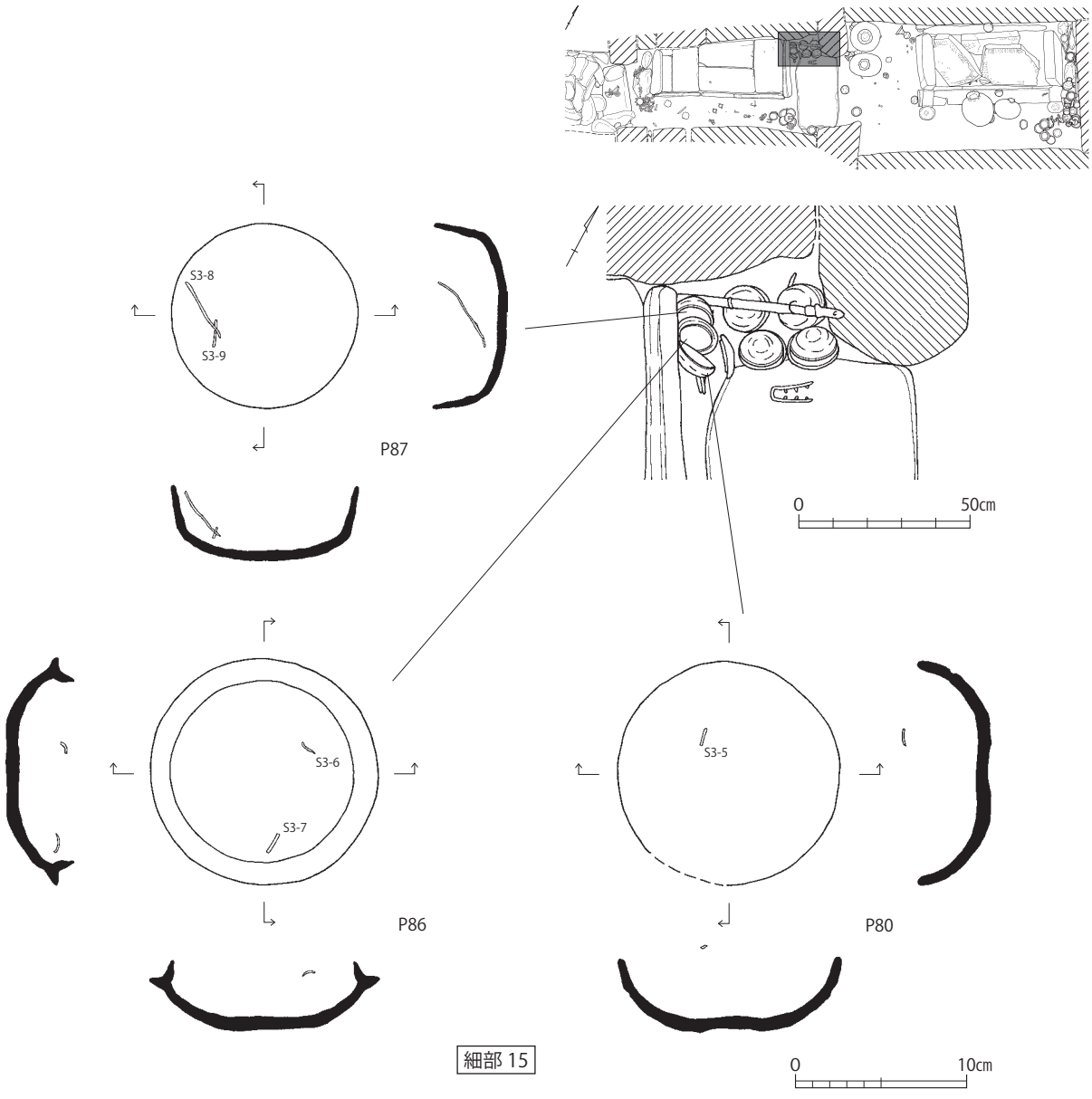


第 35 図　石室内遺物出土状況（6）（1：20）

上げた大刀Ｓ３は，Ｂ石棺と床面の隙間に切っ先を入れ，刃部を左側壁に向けて，左袖石側に立て掛けられて出土した。大刀Ｓ３に寄り掛かるように須恵器Ｐ 86・87 があり，その近くに須恵器Ｐ 80・81 が出土した。また，大刀Ｓ３の下に，須恵器Ｐ 82 ～ 85 があり，その近くに須恵器Ｐ 76 ～ 79 が出土した。須恵器Ｐ 80・86・87 からは，大刀Ｓ３の柄巻きに使用された銀線が切れた状態で出土した（第 36 図，図版 19・67）。これらは，土砂⑩層の堆積後に溜まったものである。

以上の須恵器を取り上げた下から，鉄鏃Ｈ 49 ～ 57・59・60（う群，第 40 図）が出土した。鉄鏃Ｈ 59 のみが土砂⑩層上面から出土し，その他の鉄鏃は，床面に散乱していた。この床面は，玄門の左袖石と前室左側壁，Ｂ石棺と梱石に囲まれた部分で，わずかな玉砂利と石が置いてある。その他に，馬具Ｂ７が梱石の上から出土した。

写真９　Ｂ石棺内埋土ブロック取り上げ状況

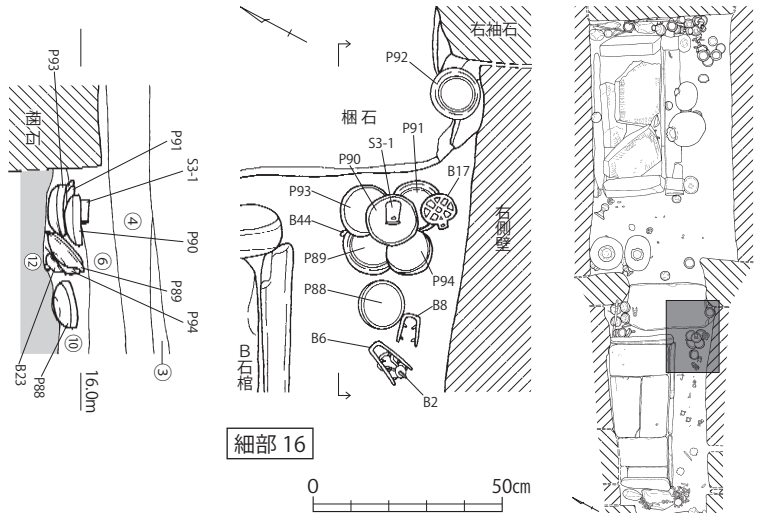


第 36 図　石室内遺物出土状況（7）（1：20，遺物 1：4）

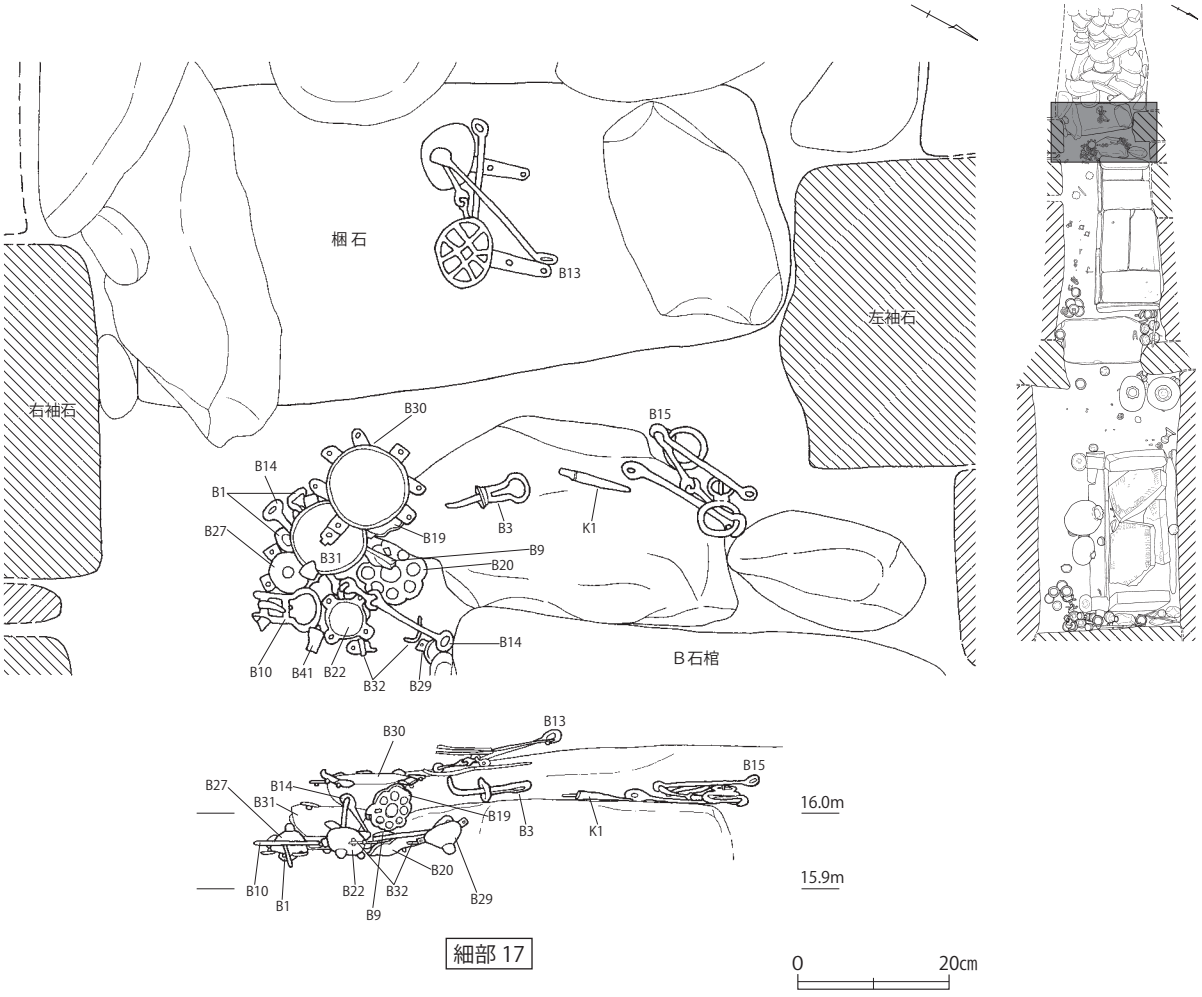
以上の出土状況から，玄門の左袖石とＢ石棺の間に遺物が置かれた過程を推定したい。最初に置かれたのは，鉄鏃（う群）で，毀損後ばら撒かれている。鉄鏃Ｈ 59 は土砂が流入してから置かれており，その他の鉄鏃も，石室築造後すぐではなく，土砂が堆積する時間が経過した後に置かれたのかもしれない。その後，須恵器Ｐ 76 ～ 79・82 ～ 85 が置かれ，そして，大刀３が置かれた。そして，Ｐ 80・81・86・87 が置かれたと考えられる。すなわち，玄門の左袖石とＢ石棺の間から出土した遺物は，最下部の鉄鏃が散乱していることと，その一部が土砂⑩層の上から出土していることから，埋葬当初に置かれたものではないと推定できる。

（６）　前室右側壁とＢ石棺の間（細部 16）

細部 16 は前室右側壁とＢ石棺の間で，玄門の右袖石付近である（第



第 37 図　石室内遺物出土状況（８）（１：20）



第 38 図　石室内遺物出土状況（９）（１：10）

37 図，図版２・40)。最初に出土したのは，大刀Ｓ３－１（柄頭）である。これは，土砂⑩層上面から出土した。その下から，Ｐ 89 ～ 91・93・94 が集められた状況で床面（玉砂利⑫層）から出土した。また，須恵器Ｐ 91 の上から，馬具Ｂ 17 が出土した。須恵器の下からは，馬具Ｂ 23・44 が床面から出土した（玉砂利⑫層)。これらが，出土した床面は窪んでいた。その他に，須恵器Ｐ 88 が床面から，須恵器Ｐ 92 は梱石の上から出土した。また，羨道側に向かって，馬具Ｂ２・４～６・８・11・12・14 －１・21・26・28・42 と刀子Ｋ２が床面で散乱して出土した（第 29 図)。その中の馬具Ｂ２と６，Ｂ 12 と 42 は錆で着いた状態で出土した。

以上の出土状況から，前室右側壁とＢ石棺の間に遺物が置かれた過程を推定したい。最初に床面を窪ませ，底に毀損した馬具Ｂ 23・44 を置く。その上に，須恵器Ｐ 89 ～ 91・93・94 が置かれている。同時に須恵器Ｐ 91 の上に馬具Ｂ 17 が置かれた。また，大刀Ｓ３－１以外の遺物は，これらと同時期に配置されたと推察する。馬具は毀損され本体から遊離した後に配置されたのであろう。

そして，Ｐ 90 の内面に土砂⑩層が堆積した後に大刀Ｓ３－１が配置されたと考えられる。大刀Ｓ３－１のみが，他の遺物とは時間差があるようだ。

（７）　前室と羨道の境（細部 17）

細部 17 は前室と羨道の境である（第 38 図，図版 40)。遺物はＢ石棺短辺の側石の上と，前室床面，梱石の上から出土した。土砂堆積後の遺物はない。特に注目されるのは，馬具の雲珠２点が，反転し重なって出土したことである。

２　器種別遺物出土状況（第 39 ～ 42 図）

（１）　鏡

珠文鏡Ｍ１は，当初，Ａ石棺内にあり，その後，奥壁とＡ石棺右側石の間から，鏡背を上にした状態で土砂⑪層中から出土した（第 39 図，図版 38)。

（２）　装身具

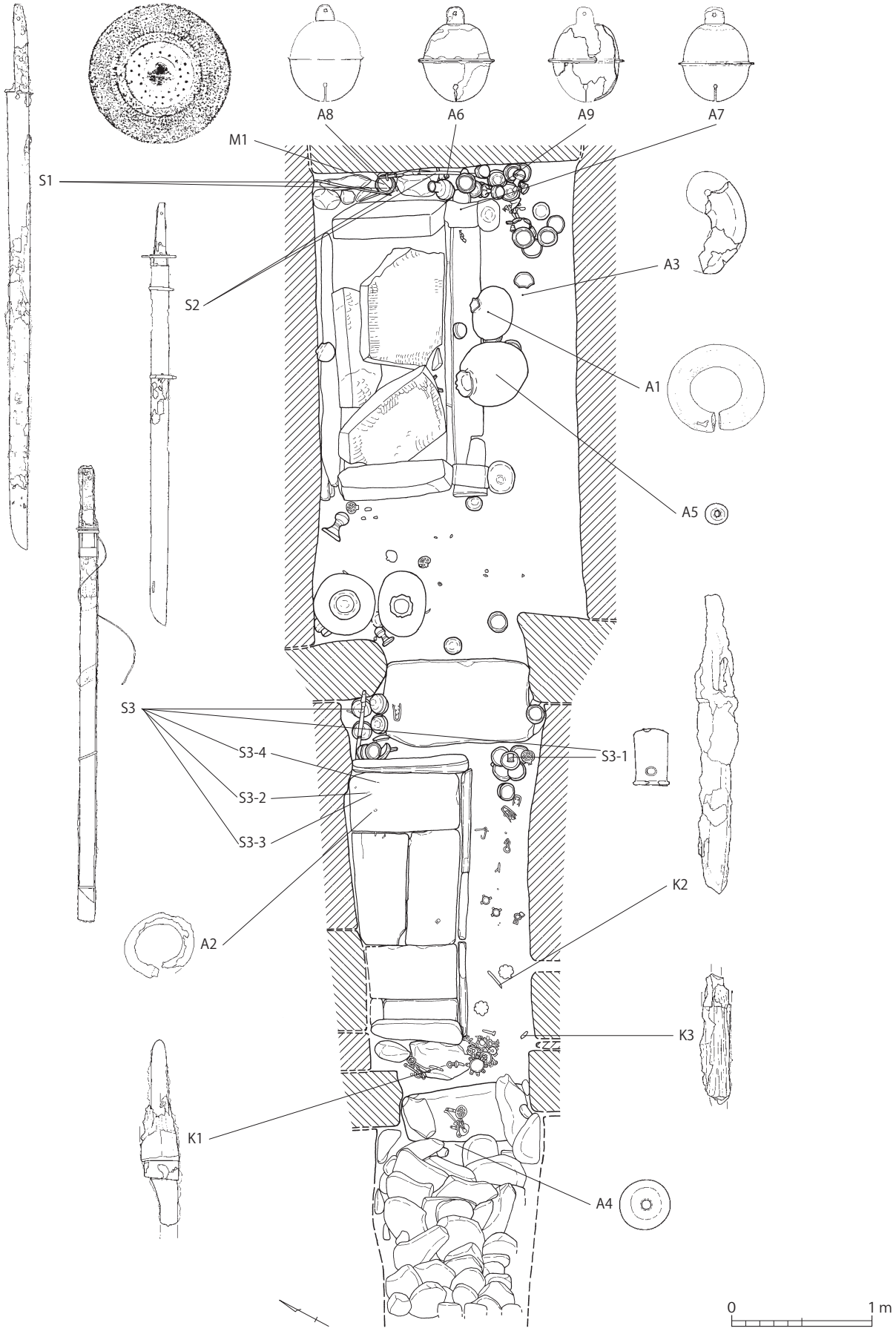
装身具には，金環Ａ１と銀環Ａ２，ガラス製勾玉Ａ３，ガラス製丸玉Ａ４，ガラス製小玉Ａ５，金銅製鈴Ａ６～９がある（第 39 図)。Ａ１はＡ石棺前のＰ 71 下の床面上から出土した。Ａ５は，Ａ石棺前のＰ 70 下の土砂を水洗中に出土した。そして，Ａ３は，Ａ石棺と右側壁の間の床面から出土した。Ａ６～９は奥壁とＡ石棺の間から散在して出土した。Ａ８のみが土砂⑪層中から出土し，それ以外は土砂⑪層上面から出土した。これらの装身具はＡ石棺内からかき出されたものと判断した。

Ａ２は前室Ｂ石棺内から出土した。これは，床面直上ではなく土砂⑩層から出土した。Ａ４は羨道の土砂⑩層を水洗中に出土した。これらも，埋葬当初の状態ではないと判断した。

（３）　大　刀

大刀はＳ１～３の３振りが出土した（第 39 図)。Ｓ１は奥壁に平行し，左側壁に刃部を向けて立て掛けられて，土砂⑪層上面にある。Ｓ１の鞘尻ないし柄頭と推定されるＳ１－１～４（図版 19）は，土砂⑪層内にあることから，Ｓ１が立て掛けられたときには，既に大刀が壊れていたと考えられる。

大刀Ｓ２は奥壁に平行し，右側壁に切っ先が向いている。Ａ石棺の右側石を支えている石に横たわ



第 39 図　鏡・装身具・大刀・刀子出土状況（1：40）

る状態で，土砂⑪層中からの出土した。Ｓ２の茎尻も土砂⑪層中から出土した。茎尻は自然に割れて落ちたとは考えにくい位置で出土しており，Ｓ２も壊れた状態で出土位置に置かれたと推察できる。

大刀Ｓ３は前室側の左袖石に立て掛けられていた。Ｓ３－２～４は銀線で，石棺内の床面直上から出土した。このことから，当初は前室のＢ石棺内にあった（柄頭が奥壁側を向く）が，その後，壊れた状態で立て掛けられたと推察できる。そして，Ｓ３－１の柄頭は⑩層上面から出土した。立て掛けられた位置から柄頭が自然に脱落し，約 1.1 ｍ離れた出土位置まで転がったとは考えにくく，人為的な移動と想定される。Ｓ３－５～９の銀線は土砂⑩層が堆積した段階のもので，柄頭が移動された時に，さらに銀線が切れた可能性が高い。

（４）　刀　子

刀子の３点は，前室のＢ石棺外の床面から出土している（第 39 図）。これらも，当初はＡ石棺内あるいはＢ石棺内にあったものが移動したと推察した。

（５）　鉄　鏃

鉄鏃は，刃部の型式と出土状況からあ～う群の３群と型式不明なものとに分けた（第 40 図）。

あ群は鉄鏃塊で，奥壁とＡ石棺右側石との間で，刃部が床面（⑰層）直上から出土した。い群は，あ群の周辺に散在した状況で，土砂⑪層内から出土した一群である。各鉄鏃の出土標高が様々である。う群は玄門の左袖石周辺から散在した状況で出土した一群である。これらは，床面直上から出土したものと，床面の玉砂利に突き刺さったものがある。

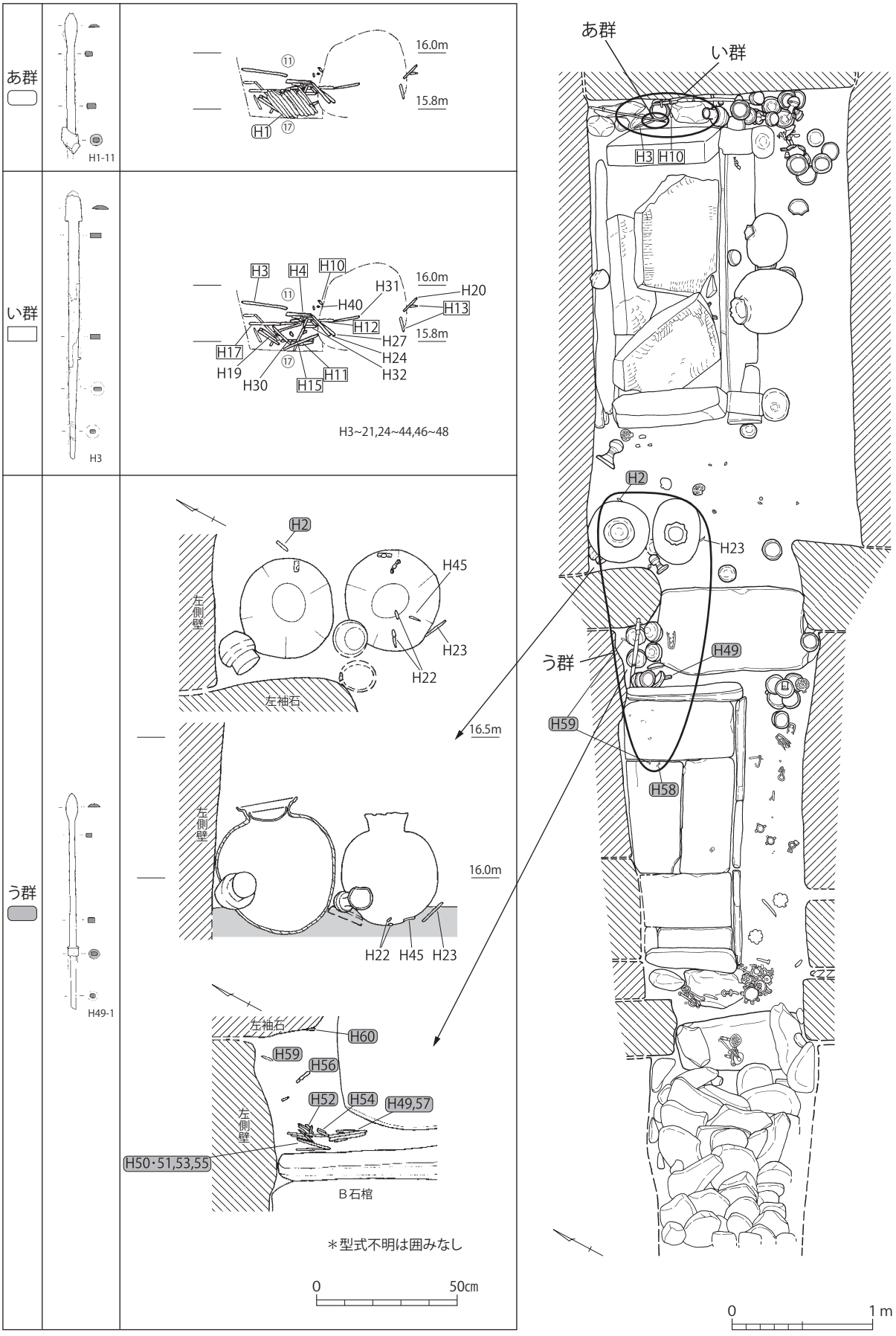
あ群は胡籙に入ったまま朽ちた状態と判断し，副葬時からほとんど移動はないと考えられる。い群は矢柄がある状態で配置され，その矢柄が毀損された結果と判断した。う群も毀損後にばら撒かれたと考えられる。い群・う群は副葬当初から毀損されていたとは考えにくいため，当初はあ群のようなまとまった状態で配置され，しばらくして，毀損さればら撒かれたと推定している。副葬当初に置かれた場所は，鉄鏃がまとまって出土した周辺と推定すると，い群が奥壁とＡ石棺右側石との間，う群が玄門左袖石の前室側であったと考えられよう。

（６）　馬　具

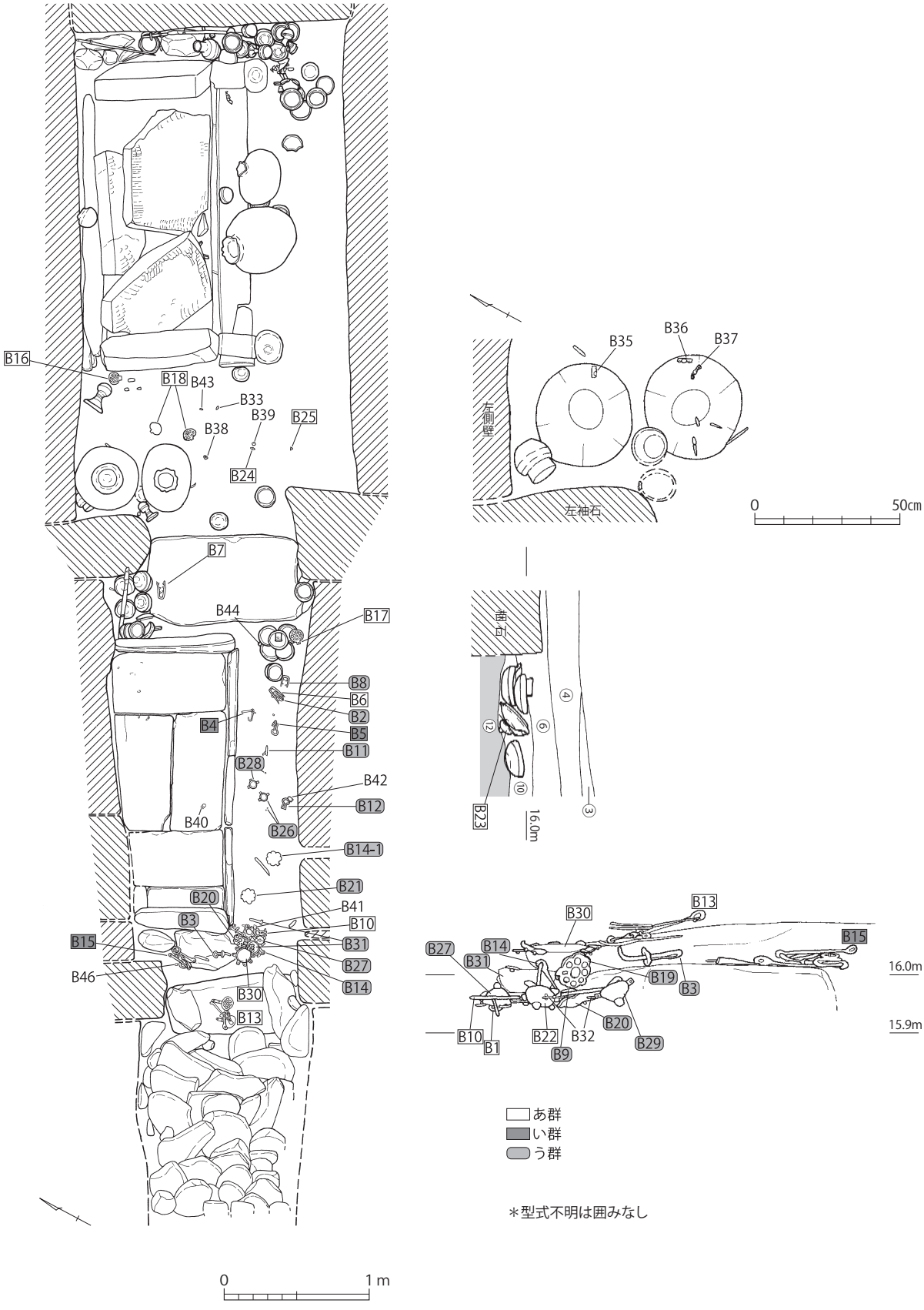
馬具は，鏡板などの形態からあ～う群の３群に分けられる（第 41 図）。ほとんどが床面から出土した。飾金具は，どの群に入るか不明である。

あ群は，Ａ石棺と玄門の間から前門部まで散在して出土した。特に，楕円形杏葉のＢ 18 は，地板と金銅板が外れて出土した（図版 36）。い群は，前室の中で散在して出土した。う群も前室の中で散在し出土した。

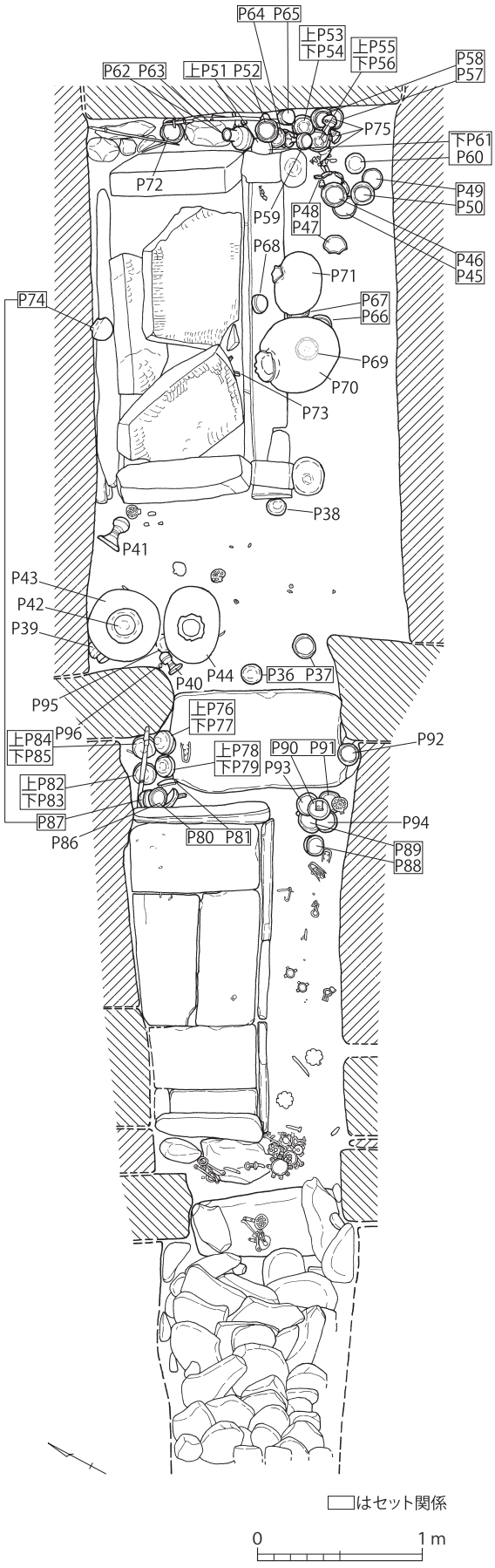
以上のことから，あ～う群の馬具は一連の完形品ではなく，毀損され，散在して出土したことがわかる。副葬当初から毀損しているとは考えにくいため，副葬当初は完形品が置かれていたと推察する。分布をみると，あ群だけが玄室にある。副葬当初は馬具の復元規模から推定して，玄室のＡ石棺と玄門の間に配置されていたと考えられる（図版 68・69）。い・う群は前室から出土し，い群は総点数が少ないため玄室にあった可能性もある。そうすると，う群が前室に置かれていたことが推定される。



第 40 図　鉄鏃出土状況（1：40）



第 41 図　馬具出土状況（1：40）



第 42 図　須恵器出土状況（1：40）

（7）　須恵器

須恵器は奥壁から前室の玄門付近まで出土した（第 42 図）。これらを出土位置がまとまる 1 ～ 5 群と，単体のその他に分けた（第 63 図）。その結果，蓋杯と有蓋高杯のセット（蓋と身）は，近い位置で確認できた。その中で，離れた場所でセット関係が判明したものがある。短頸壺のセット P 87・74 である。これらには鉄錆が付着しており，長い間金属製品と近い位置にあったと推察される（図版 61）。その後，P 74 が移動され，A 石棺の上に配置されている。P 41 にも錆が付着しており，出土した場所が当初に置かれた位置ではないことがわかる。

奥壁沿いに出土した一群のみが，副葬当初に置かれたままの可能性がある。他の須恵器はそれらの下に，すでに毀損された他の遺物が置かれており，当初置かれた場所から移動しているのであろう。

3　毀損された石棺と副葬品

本章では，石室構造と遺物出土状況を報告してきた。その中で，A 石棺と遺物に毀損行為が認められることを指摘した。問題は，これらの毀損がいつ行なわれたかである。埋葬後すぐに石棺蓋を毀損し，棺を使用不可能としたとは考えにくい。やはり，埋葬当初は正常な状態の棺があり，埋葬後，しばらくしてから毀損したと考えた方が自然である。これと同様な理解で，馬具や鉄鏃などの副葬品の毀損が説明付けられる。以上の視点は，中村 1 号墳を理解する上で重要である。ただし，これを証明することは現状では困難で，所詮，推測の域を超えないとの指摘があろう。いくつもの前提を持てば，論が不安定になる。中村 1 号墳は，完掘していないので，不明な点が多いが，完掘したからといって全ての疑問が解決されるわけでもない。本書では，この前提をもとに論を進めていく。今後，毀損の類例を探し，改めてこの前提について検討してみたい。（坂本豊治）

第４節　副葬品の詳細

１　鏡　鑑

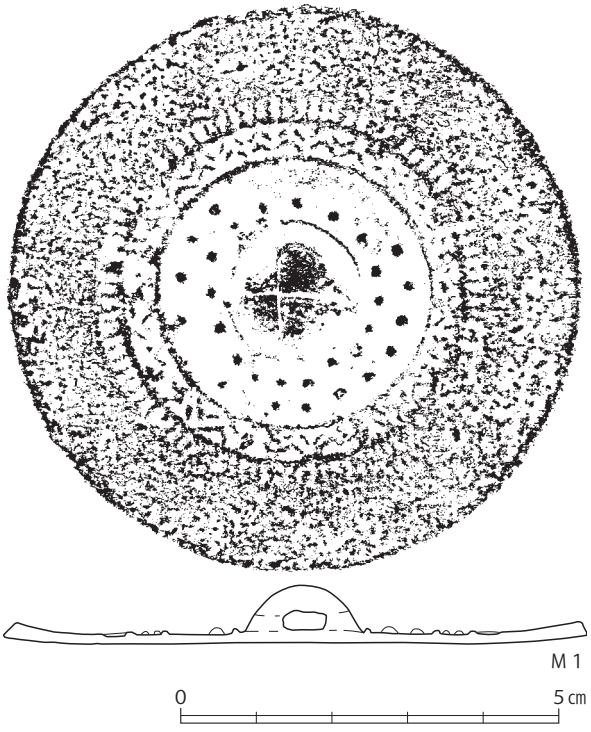
中村１号墳の玄室では，Ａ石棺と奥壁との間から１面の青銅鏡が出土した（第 43 図，図版 14・32)。これは，日本列島で製作されたと考えうる珠文鏡である。

遺存状態　完形である。土圧によって若干折れ曲がっており，鏡面は白銀色を残す部分が多いのに対し，鏡背面は，錆化により全体に淡い緑色を呈す。Ｘ線透過写真によれば，かなりのひび割れを生じていることがわかる。鏡面には，革状の有機質や目の細かい布が付着し，一部に他の遺物の木質が付着している。鏡背には赤色の錆が付着している。鈕孔内には紐状の有機質が残る。

法　量　直径は 7.6㎝である。厚さは内区で 1.0 ～ 1.5㎜程度，外区で約２㎜，縁端部で約 2.5㎜である。現状での鏡面の反りは，平均的な部分で約１㎜程度となっている。重量は 33.6 ｇ（保存処理後）である。

文様・形態　中心に円座にのった鈕がある。鈕は半球形を呈する。鈕孔は丸みのある長方形をなす。鈕孔下辺は円座の上面と一致する。鈕の外周に２列の珠文がめぐる。その外側に複波文，櫛歯文がある。外区は素文である。外区の上面はやや反りをもつ。縁端部に向かって，徐々に厚みを増す。

鋳造・研磨　文様の表出は不鮮明であり，鋳上がりは良好とはいえない。肉眼観察では湯口が判然としない。ただし，Ｘ線透過写真による観察では，図で右上に位置する外区付近に鋳巣が集中する点を考慮すれば，鋳巣が目立つ外区付近の縁部に湯口が取り付けられた可能性が高いと判断しうるであろう。仕上げの研磨は，鏡面と鏡背面の全体にほどこされている。やや粗い研磨である。鏡背面では，珠文の頂部が研磨により平らになっている。外区では大きな研磨の単位を確認することができる。（坂本豊治）



第 43 図　Ｍ１実測図（１：１）

２　装身具（第 44 図，図版 14・15・31）

石室内部の堆積土をすべて持ち帰り，洗浄選別したものの装身具は６種９点が出土したにとどまる。出土地点の詳細は第 39 図（62 頁）参照。

（１）　金環　　１　（２）　銀環　　１　（３）　ガラス製勾玉１
（４）　ガラス製丸玉　１　（５）　ガラス製小玉１　（６）　金銅製鈴　　４

（１）　金環（Ａ１）

銅芯金薄板[1]張りの金環である。わずかに楕円形をしており，長径（左右径）3.41㎝×短径 3.11㎝の大きさである。断面は 0.81 ～ 0.82㎝のほぼ円形だが，開き部では直径方向に潰れて 0.69 × 0.85㎝である。開き部の端面はほぼ平ら（村上分類ａ）で，そこに金箔のシワがみえる（村上分類Ⅰ）[2]。現重量 30.9 ｇ。玄室の石棺前面から出土した。

（２）　銀環（Ａ２）

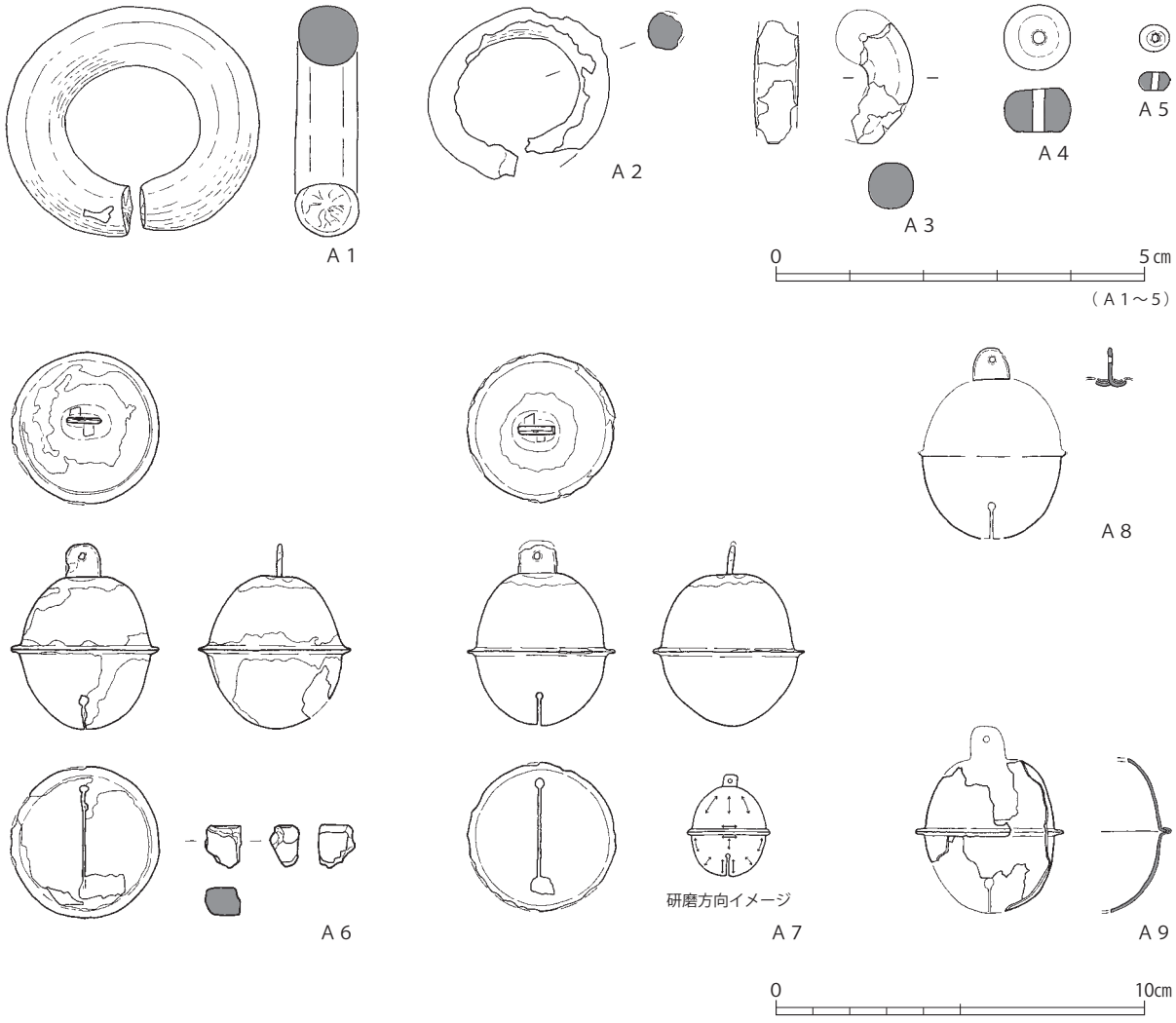
銅芯銀薄板張りの銀環である。外周が欠損・腐食しており，元の形はとどめていない。銀箔も内周部分にしか残っていない。現状ではわずかに楕円形で外周径 2.30 × 2.40㎝。断面は 0.45 × 0.46㎝のほぼ円形である。開き部の形状および仕上げ手法は破損して不明。現重量 0.9 ｇ。前室Ｂ石棺出土。

（３）　ガラス製勾玉（Ａ３）

緑色のガラス製勾玉である。風化により頭部と尾部を欠き，欠損部分も多い。現状で上下 16.5㎜，復元すると 18.5㎜ほどであろうか。頭部厚さ 5.8㎜。保存処理後重量 0.78 ｇ。

（４）　ガラス製丸玉（Ａ４）

紺色の１点がある。直径 8.8 × 8.7㎜，高さ 6.0㎜。端面は上下とも平坦だが，平行しない。ほぼ



第 44 図　装身具実測図（１：１，１：２）

中央に径 1.7㎜の円孔があく。孔は筒状をし，上下で径の違いがない。現重量 0.72 ｇ。

（５）　ガラス製小玉（Ａ５）

紺色の１点がある。径 4.0 × 3.5㎜，高さ 2.5㎜。端面は平坦で，これにやや斜行して径 1.0㎜の円孔があく。現重量 0.05 ｇ。

（６）　金銅製鈴（Ａ６～Ａ９）

ほぼ同形同大の４点が出土した。いずれも銅製鍍金で，鍍金は表面だけである。形状と法量についてはＡ６・Ａ７によって，製作技法についてはおもに破断したＡ８とＡ９によって記述する。

Ａ６とＡ７はともに，おおよそ長楕円体をしており，最大径の位置にツバがめぐる。下端には鈴口があき，上端には爪形をした板状の鈕が付けられている。鈴口は幅１～２㎜で，両端は円い。鈕は板状で，径２㎜ほどの円孔がある。なお，鈕孔に繊維の痕跡は残っていなかった。Ａ６は，直径 4.0 × 4.1㎝，高さ 5.0㎝，鈕高 0.9㎝。Ａ７は，直径 4.05 × 4.0㎝，現存高 4.9㎝。

Ａ６の内部には，1.15 × 0.95㎝，厚さ 0.75㎝の黒色石材の丸が入っていた。

鈴の本体は，半球形に打ち出された部品２つを合わせて作られている。下側の部品には鈴口が切られ，上側の部品は頂点部に切れ目が入れられてそこへ鈕が差し込まれている。鈕の基部には３～４㎜の切り目が入れてあり，それを開くことで鈕が固定される（Ａ８）。２つの部品はそれぞれ，縁辺が帽子のツバ状となっており，細工を終ったのち，たがいのツバ状の部分を合わせ，下側部品のツバを上側のそれにかぶせてかしめられている（Ａ９）。錆がツバの上面側に多いのは，このためであろう。

鈴の表面には，鍍金後の研磨の跡がのこっている。基本的には長軸方向（上下方向）だが，ツバの上下だけは円周方向である（Ａ７）。

Ａ６とＡ７は，鈕の周囲の径２㎝ほどの範囲が特に緑青の付着が著しく，その中には繊維状の痕跡が観察される。これによって，鈕の基部を繊維製品に密着させるような使用方法が推測できる。そこで想起されるのが鈴付き腰帯である。千葉県山武市経僧塚古墳箱形石棺の１号人骨にともなった鈴付き腰帯の鈴は，間に金銅製円板を挟むという違いはあるが，鈕を布製腰帯に貫通させて固定させるという取り付け手法である[(3)]。本墳の鈴の使用法，および装着された器物を考えるのに参考となろう。

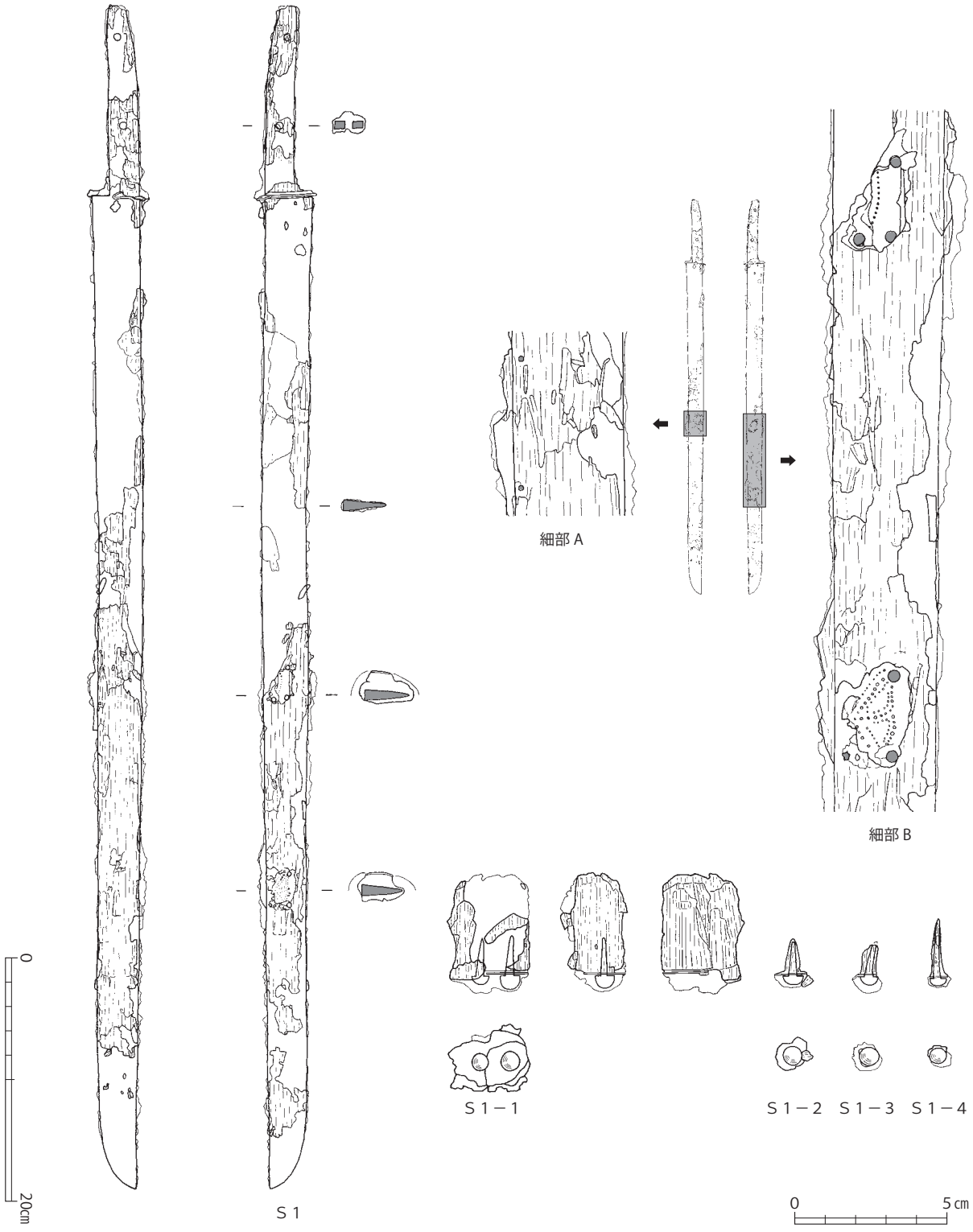
（花谷　浩）

３　大　刀

（１）　倭装大刀（Ｓ１，第 45 図，図版 17・19）

玄室内北東隅，⑪層上面で，側壁と奥壁のコーナー部分に，柄部を上方に向けて，立てかけられた状態で出土した。鉄製の刀身本体は完存し，柄部，鞘部に木質が部分的に残る。鞘口，鞘身の一部に金銅製装具が残存している。また，⑪層から，木質の端部に金属板をあて，金銅装の鋲を打ちこんだものの一部と考えられる破片が出土した（第 44 図Ｓ１－１，２，３，４）。倭装大刀の柄頭ないし鞘尻装具の一部と考えられるため，あわせて報告する。

柄頭から鞘尻までの，装具を含めた全長は不明であるが，刀身本体は全長 96.9㎝，刃部長 81.4㎝，刃部最大幅 3.8㎝，刃部最大厚 1.0㎝を測る。切先はフクラで，関に向かって徐々に刃部幅を増す。



第 45 図　Ｓ１実測図（１：５，１：２）

関は片関で，刃側にのみ深さ 1.4㎝の直角関を持つ。鋩はもたない。茎は長さ 15.5㎝，最大幅 2.4㎝を測る。やや刃側に内反りし，茎尻に向かってわずかに幅を減じる。茎尻は一文字尻を呈する。目釘孔を二つもつ。

柄部の木質は残存状況が良くなく，柄装具の形状を復元することは困難である。関部と一致する部分に，柄縁と鞘口が接する小口面と考えられる金銅板が残る。鞘間の鞘木が残存する部分には，一部

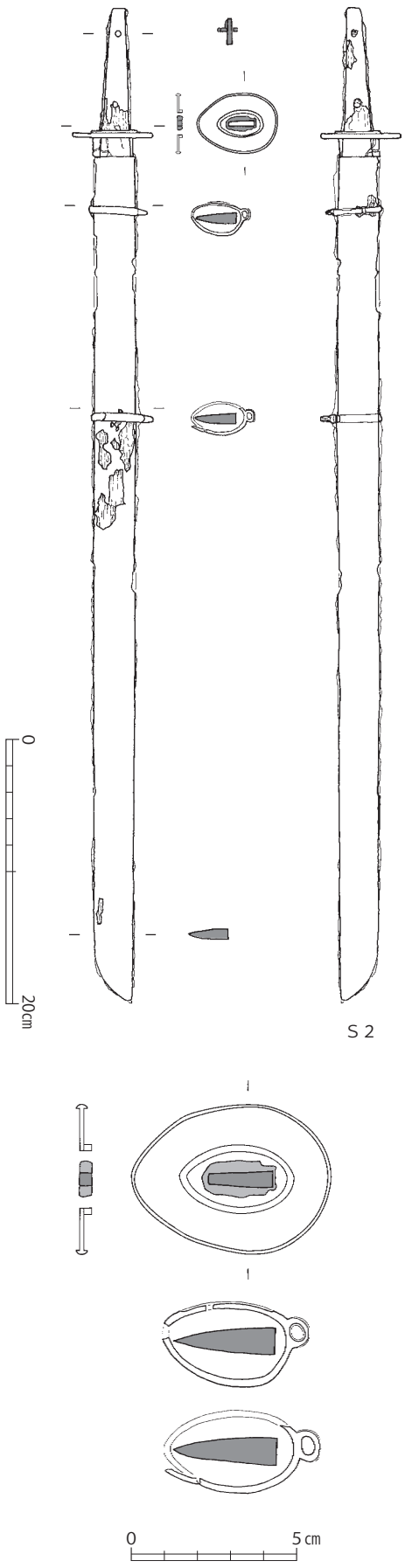
に本来の鞘の構造を反映しているとみられる部位が確認できる（細部Ａ，Ｂ）。佩表の刃側中央部付近では，4.2㎝の間隔をあけて，鋲孔が確認される（細部Ａ）。倭装大刀の鞘身刃側に帯状にあてる銅板を留めていた鋲の孔の一部であると考えられる。佩裏側では，２か所で鞘木に，鋲頭径 0.35㎝の金銅製の打ち込み鋲で鋲留された，幅 3.5㎝の筒金具の一部が残存している。筒金具には先端が円形の鏨で格子状とみられる列点文が刻まれ，金銅板の表側から打たれる列点文と，裏側から打たれる列点文がみられる。⑪層から出土した，木質と金属板および鋲からなる破片は，砕片と化しているが，木質の小口面に金属板をあて，金銅装の鋲を密に打ち込んでいたものである。鋲頭径は 0.5㎝から 0.6㎝である。また，鋲脚の長さは１㎝から２㎝までと大幅なばらつきをもつ。

以上の特徴をまとめると，以下のようになる。片関で金属製の鍔をもたず，柄縁，鞘口に金属製の装具を用い，鞘間に鋲留による責金具を二つ以上もち，刃側には刃と並行に帯状にのびる金属板をあてたと想定される。柄頭ないし鞘尻とみられる金具には，柄頭端部ないし鞘尻端部に相当する部位に，打ち込み鋲を複数配する，ということになる。これらの特徴はいずれもいわゆる倭装大刀に共通する要素であり，装具の残存状況は決して良好ではないが，本例は倭系の装飾大刀であると判断できる。

（２）　金銅装大刀（Ｓ２，第 46 図，図版 16・20）

玄室奥壁に沿って，柄頭を北に向けた状態で出土した。鉄製の刀身本体はほぼ完存し，柄木と鞘身に一部木質が残る。金銅製の装具として，鍔，鍔，一の足，二の足の二つの単脚足金具が残る。

刀身本体の全長は 74.9㎝，刃部長 63.5㎝，刃部最大幅 3.2㎝，刃部最大厚 0.8㎝を測る。切先は，現状ではフクラ切先に見かけ上見えるが，Ｘ線ラジオグラフィを観察すると，本来はカマス切先であったと考えられる。刀身の幅は，切先付近を除いてはほぼ均質な幅を保つ。関は直角の両関で，金銅製の鍔をともなう。鍔は長さ 1.5㎝，幅 3.4㎝，厚さ 2.2㎝を測る。茎は長さ 11.4㎝，最大幅 2.0㎝を測る。茎尻に向かうほど細くなり，茎尻は一文字を呈する。目釘孔を二つもち，



第 46 図　Ｓ２実測図（１：５，１：２）

柄頭側の目釘孔には鉄製の目釘が残る。目釘は佩表側が太く佩裏側が細いテーパ状を呈しており，この目釘が佩表側から挿入されたことがわかる。

鍔は長径 6.0㎝，短径 4.6㎝を測り，ややゆがんだ倒卵形を呈する。窓はなく，鍔の縁部を断面Ｔ字状に肥厚させる。足金具は，二足佩用の際に紐等を通す吊部の部分と責金具部分が一体で作られ，一の足，二の足ともに吊部が佩裏側に傾くが，一の足のほうが佩裏側により大きく傾く。大刀を佩用した際のバランスを考慮し，傾きを変えているものと考えられる。

（３）　圭頭大刀（Ｓ３，第 47 図，図版 18・19）

前室奥玄門左側に立てかけられた状態で出土した。また，柄頭（Ｓ３－１）は⑩層より出土した。

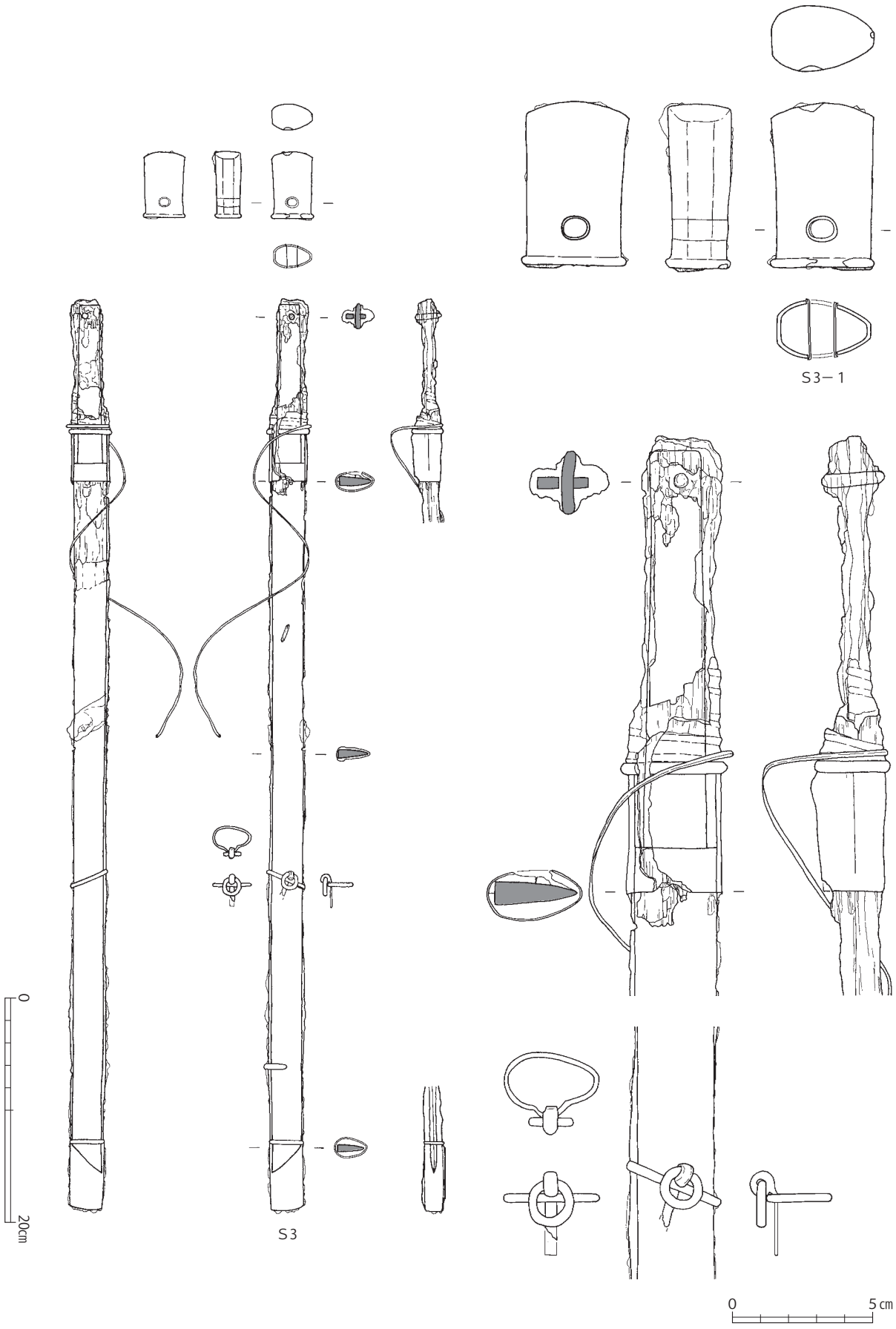
刀身全体と柄木，鞘木の一部，および柄頭，銀製の柄巻き，鍔，鏃，鞘口金具，環付足金具，責金具，鞘口金具が残る。柄巻の銀線は柄頭端部から外れて垂れ下がり，現状では柄縁側の端部のみが柄間にかろうじて固定されている。鞘間の環付足金具も，同様に鞘尻側に滑り落ち，鞘尻端から 28.3㎝の位置にとどまっている。柄間，鞘間には全体に薄く木質が残るが，残存状況は良好でなく，木製装具同士の合わせなどは認識できない。布や漆などの有機質については，現状ではその有無を断定できない。

柄頭をのぞく全体の残存長は 81.2㎝，刀身本体の全長は 77.1㎝で，切先はわずかに膨らみをもつカマス切先である。刀身の幅は切先部を除いてほぼ均質な幅を保つ。関は深さ 0.3㎝の直角の両関で，金属製の鏃をともなう。鏃は長さ 2.6㎝，幅 2.9㎝を測る。鏃の材質は鞘口金具に覆われているため，確認できない。茎は長さ 14.1㎝，最大幅 2.3㎝を測る。茎尻にむかってわずかに幅を減じ，茎尻は一文字を呈する。目釘孔を茎尻端部に一つもち，目釘が残る（4）。目釘は柄木の木質に覆われているが，Ｘ線ラジオグラフィの観察からは，佩裏側が太いように見えており，目釘は佩裏から挿入された可能性が高いと考えられる。

柄頭は鋳銅製で，長さ 5.8㎝，幅 3.7㎝，厚さ 2.2㎝を測る。柄頭の頂部にやや膨らみをもち，カーブはほぼ左右対称となる。刃側，背側それぞれに稜線をともなう明瞭な面を持つ。柄頭基部には，責金具状の突線が一体で鋳出されている。懸通孔に銀製の鳩目金具をもつが，鳩目金具は一体で，佩表側が佩裏側よりもやや大きく，テーパ状に造られている。柄頭本体の懸通孔の直径も同様で，鳩目金具は佩表側から挿入したものと判断できる。

柄間には，幅 0.2㎝で刻み目をもたず，断面形が二等辺三角形の銀線が巻かれている。この銀線は，柄頭側の端部が外れ，鞘尻側へ垂れ下がった状態であるが，柄付近に残る銀線の圧痕を観察すると，約 0.5㎝程度の間隔をあけてらせん状に巻かれていたことが確認できる。銀線は現状で約 60㎝程度残っており，このほか前室内から，10㎝分程度の銀線片が出土した。銀線は，少なくとも 70㎝以上は存在したものと想定される（5）。柄縁には鉄地銀貼の喰出鍔を持ち，長径 3.8㎝，短径 2.6㎝，厚さ 0.4㎝を測る。

鞘口は銅製の筒金具であり，金鍍金等は施されていない。背側にろう付けした部分が剥離した痕跡が確認できる。長さ 4.2㎝，長径 3.4㎝，短径 1.7㎝，厚さ 0.1㎝を測る。環付足金物は，本来の位置から鞘尻側へずれており，鞘尻端部から 28.3㎝の位置で錆着している。鞘口装具の佩裏側の端部に，



第 47 図　Ｓ３実測図（1：5，1：2）

欠損箇所があることから，本来は鞘口装具と結合していたものと考えられる。環は銅地金鍍金，責金具は銅地銀貼である。環は外径 1.7㎝，内径 1.1㎝，断面径 0.3㎝を測る。責金具は断面蒲鉾形を呈し，長径 3.4㎝，短径 2.3㎝，幅 0.3㎝を測る。鞘尻装具は鉄製で，キャップ状に造り出される。長さ 6.2㎝，長径 3.0㎝，短径 1.9㎝を測る。肉眼での観察，Ｘ線での観察でも，ろう付け，鍛接の痕跡は確認できなかった。蟹目釘はもたない。鞘尻装具の柄頭側小口に接する銅地銀貼の責金具は長径 3.1㎝，短径 1.7㎝，幅 0.3㎝を測る。　（元興寺文化財研究所　橋本英将）

４　鉄鏃（第 48 ～ 51 図，図版 50・51）

鉄鏃は，合計 60 点が出土した（Ｈ１～Ｈ 60，第３表）。すべて棘状関をもつ長頸鏃である。

60 点のうち複数本が錆びついた状態のものが７点あり，Ｈ１は 38 点，Ｈ 49 とＨ 52 は４点，そしてＨ 12・Ｈ 19・Ｈ 35・Ｈ 50 は２点，が固まっている。したがって，破片数は 107 点となる。ただし，破片の部位はさまざまである。棘状関（被篦）の数は 73 点あるので，これが副葬された矢の算定できる最小限の数と考えておく。

「副葬品出土状況」（第３章第３節）でも述べたように，鉄鏃は玄室の家形石棺（石棺）と奥壁との間，そして玄門左袖石周辺の２ヵ所から出土した。そして，前者からは「あ群」と「い群」，後者からは「う群」の鉄鏃が出土した。本項でも，この順で記述する。

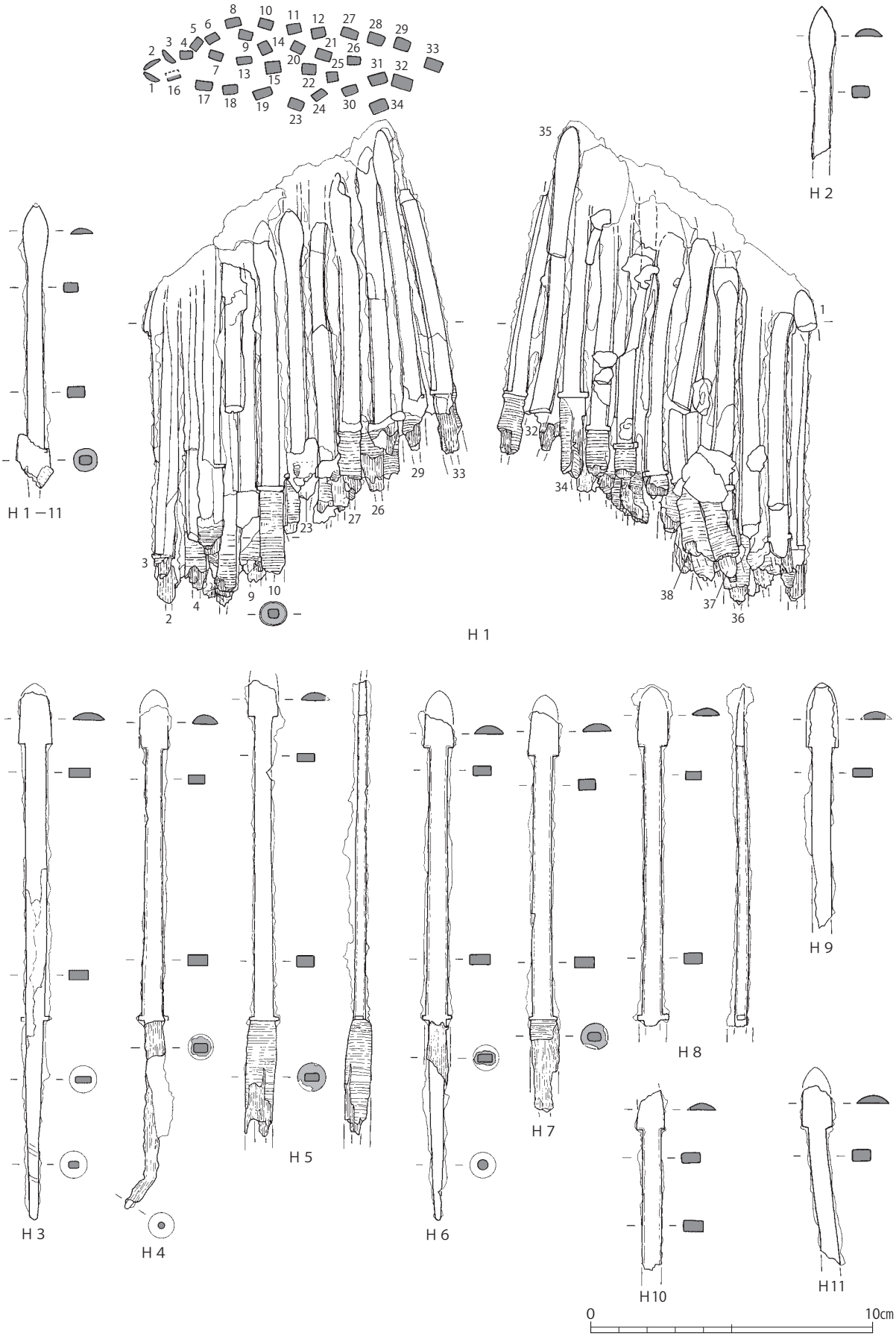
あ　群　塊となった鉄鏃Ｈ１である（第 48 図）。破片数は 38 点あり，そのうち 32 点に棘状関を確認できる。片丸造りの柳葉形刃部をもつ鉄鏃である。全長の判明するものはないが，鏃身部長は 8.7 ～ 9.7㎝，茎部長は 3.7 ～ 3.9㎝なので，全長 12.4 ～ 13.6㎝ほどと推定される。茎部に細い繊維束を巻き付けて矢柄に挿入し，樹皮を巻いた矢である。

「あ群」鉄鏃は，刃先を下にして錆付いていたので，胡籙に収められていたとみてよい。同じような出土状況を確認できる例として，近傍では上島古墳がある。

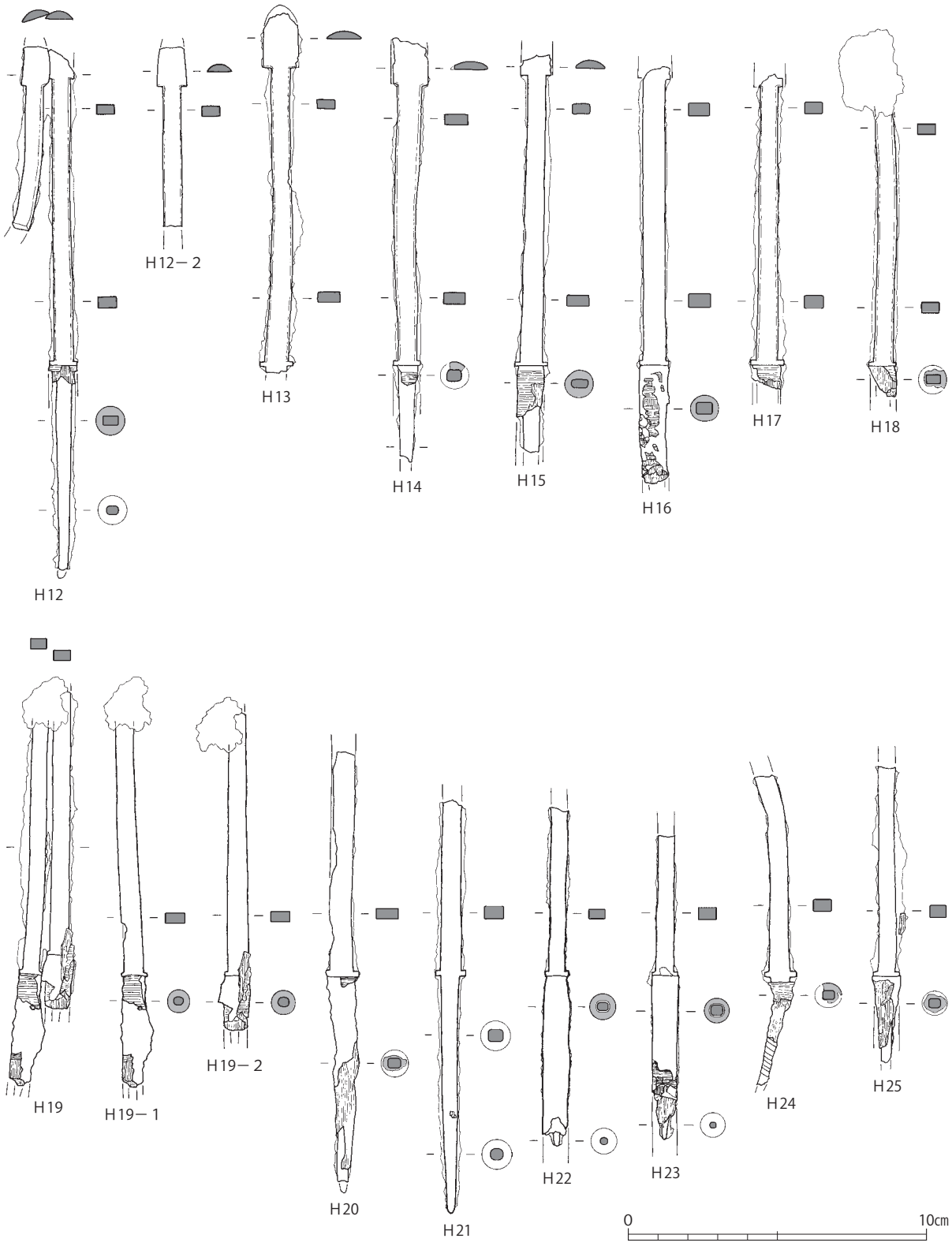
い　群　あ群の周辺から出土した鉄鏃Ｈ３～ 21，Ｈ 24 ～ 44，Ｈ 46 ～ 48，合計 46 点がある（第 48 ～ 50 図）。うち，28 点に棘状関を確認できる。直角関をもつ長三角形，片丸造りの刃部をもった鉄鏃である。Ｈ３とＨ４は，刃部先端を欠損するのみでほぼ全形を残しており，推定全長は，20.0㎝と 18.4㎝である。また，鏃身部長は 10.9 ～ 11.7㎝，茎部長は 5.5 ～ 8.0㎝の範囲にあり，３群の鉄鏃では，全長・鏃身部長・茎部長いずれも長い。重量（保存処理後）も 20 ～ 25 ｇあって，一番重い。

う　群　玄室左袖石の周辺から出土した鉄鏃は，Ｈ２，Ｈ 22 ～ 23，Ｈ 45，Ｈ 49 ～ 51 の 23 点である（第 48 ～ 51 図）。うち，13 点に棘状関を確認できる。片丸造りの柳葉形刃部をもつ鉄鏃である。全形が残る例はないが，鏃身部長は 10.9 ～ 11.3㎝，茎部長は 5.5 ～ 5.7㎝あるので，全長は 16.4 ～ 17.0㎝と推定される。重量は 15 ～ 20 ｇと推測される。「あ群」の鉄鏃と刃部の形はほぼ同じだが，頸部が長いため鏃身部も長く，また茎部も長く，全長も長い。頸部は「あ群」よりも細いものが多いようである。

以上のように，出土状況によって分類される３群は，鏃の形や規格（長さ・重量）にも各々違いが認められる。



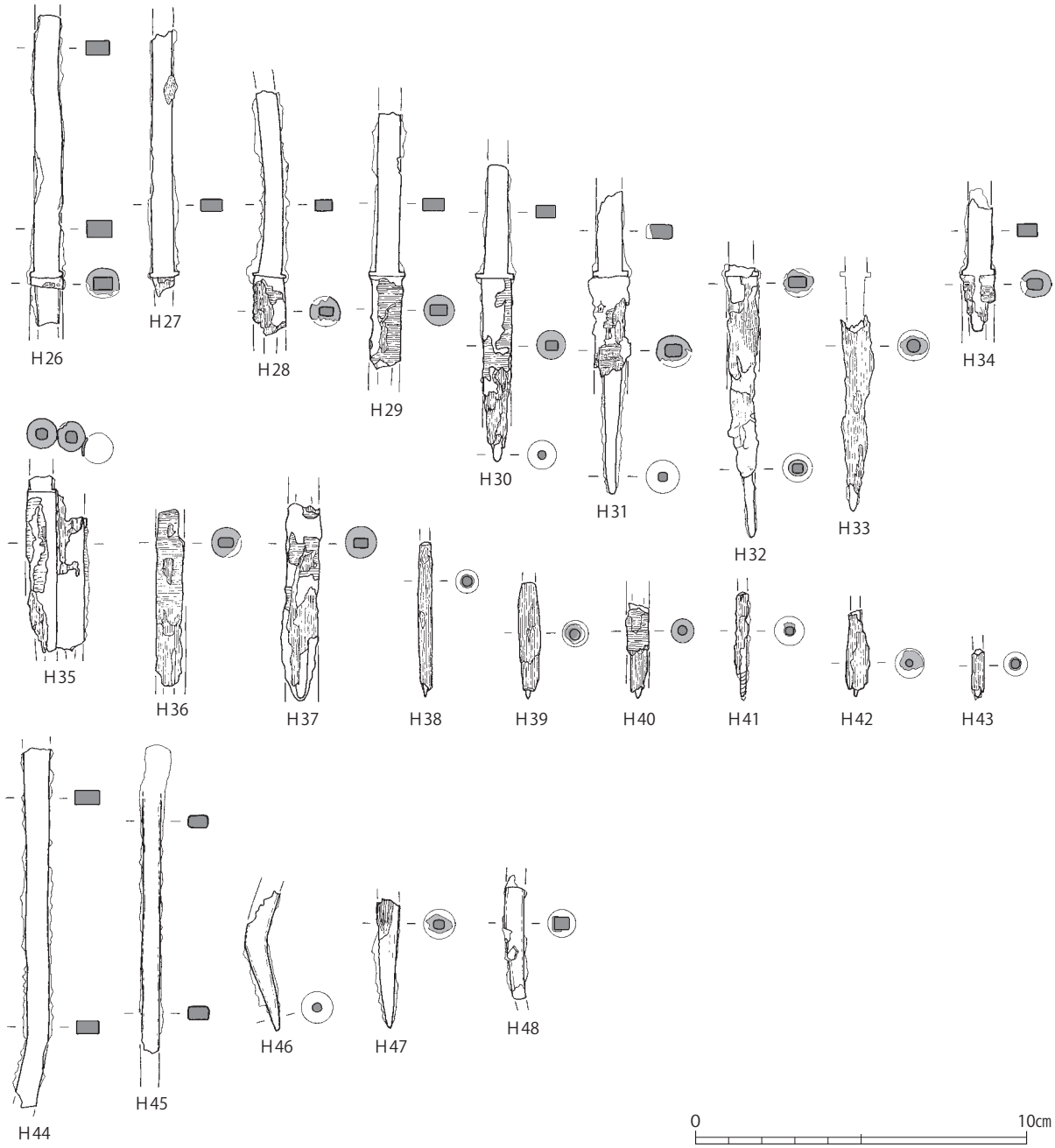
第 48 図　玄室出土鉄鏃実測図（1）（1：2）



第 49 図　玄室出土鉄鏃実測図（2）（1：2）

中村 1 号墳の鉄鏃は，長頸鏃のみで構成される。出土点数が 10 本以上あり，かつ長頸鏃に限られる県内の古墳や横穴墓は 8 例を確認した。

二名留 3 号墳（松江市乃木福富町）は，径 12 ～ 14 mの円墳で箱形石棺の中から 23 本が束で出土した。台形関の長頸鏃と推定される。鉄鏃の型式および共伴した子持勾玉や墳丘出土須恵器などから，



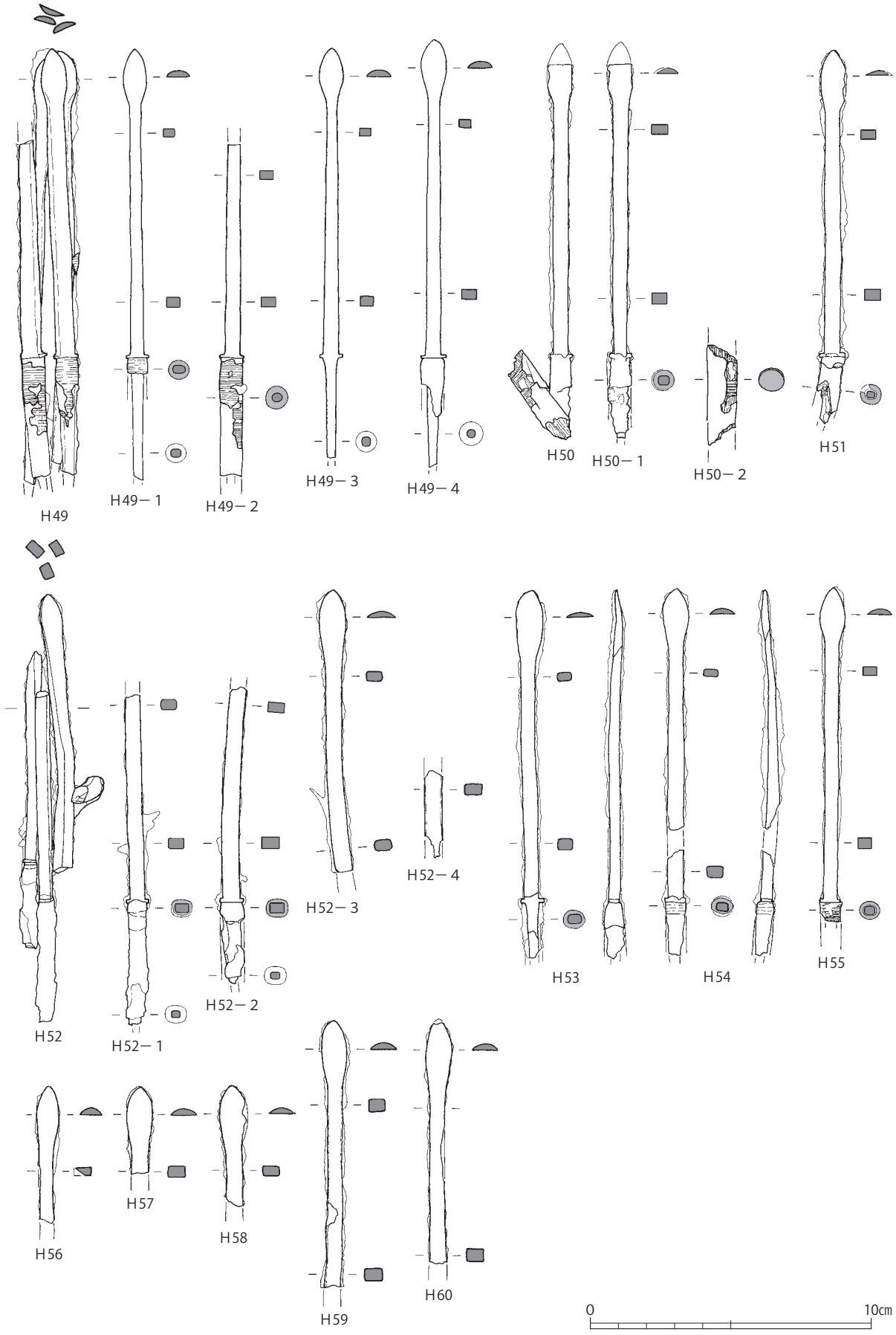
第 50 図　玄室出土鉄鏃実測図（3）（1 ： 2）

その時期は５世紀後半と推定される。

上島古墳（出雲市国富町上島）は，径 22 mの円墳あるいは長 35 mの前方後円墳と推測される古墳である。直葬された家形石棺に併設された竪穴式石室から 47 本以上の長頸鏃が出土した。出雲２期の須恵器や， f 字形鏡板付轡，剣菱形杏葉などがともなった。

高広遺跡Ⅳ区１号横穴墓（安来市黒井田町長廻）は，10 本すべてが長頸鏃である。家形石棺を内蔵し，双龍環頭大刀を出土した横穴墓で，出雲４～５期の須恵器がともなう。

島田池遺跡１区２号横穴墓（松江市東出雲町揖屋）でも，22 点（関部は９点）の長頸鏃が出土している。ここでは，銀象嵌大刀や水晶製三輪玉，馬具などがともなった。出土須恵器は，出雲４～５期である。この遺跡では， ６区７号横穴墓でも 49 点出土した鉄鏃（うち関部は 20 点）すべてが長頸鏃だった。



第 51 図　前室出土鉄鏃実測図（１：２）

第３表　出土鉄鏃一覧

遺物番号	枝番号	群別	全長	残存長	鏃身長	刃部長	頸部長	茎部長	矢柄径	重量	茎部の糸巻
H1	1	あ群		1.4						468	
	2			11.0	9.7	2.1	7.6		0.85		
	3			10.6			7.5		0.85		
	4								0.85		
	5			9.5							
	6			11.7				3.9	0.85		
	7							3.7	0.85		
	8			5.2							
	9			10.7	9.2	2.1	7.1				
	10			12.5	9.4	2.0	7.4		0.9		
	11			10.0	8.7	2.2	6.5		0.85		
	12			9.2					0.85		
	13										
	14			10.2					0.9		
	15			10.0					0.8		
	16			9.4					0.85		
	17										
	18			10.8					0.8		
	19			12.3					0.85		
	20			10.2					0.9		
	21										
	22			10.7					0.8		
	23			10.3	9.4	2.4	7.0		0.85		
	24			10.5			7.4		0.8		
	25			11.5	9.0	2.2	6.8		0.85		
	26			11.6					0.85		
	27			11.3					0.8		
	28			11.0			7.5		0.85		
	29			11.4	9.6	2.0	7.6		0.8		
	30			11.3	9.7	2.5	7.2		0.85		
	31			11.1					0.8		
	32			10.2		2.4					
	33			9.5					0.85		
	34			11.8					0.85		○
	35			4.5		2.2					
	36			4.9					0.85		
	37			4.6					0.85		
	38			3.0					0.85		
H2		う群		5.3		2.2				5.3	
H3		い群	[20.0]	18.7			9.8	7.1		24.5	○
H4			[18.4]	17.8			9.6	6.9		21.7	
H5				16.2			10.7		1.0	21.3	
H6				18.0			9.7	7.1	0.9	23.8	
H7				14.2			9.3		0.9	19.5	
H8				12.0	11.7	2.1	9.6			15.3	
H9				8.6						9.2	
H10				6.4						6.5	
H11				6.3						7.6	
H12	1			17.5			9.7		0.9	29.6	
	2			6.0							
H13				12.0			9.8			16.5	
H14				14.2			9.4		0.9	19.5	
H15				13.3			9.7		0.9	19.8	
H16				13.9			9.5		0.9	22.4	
H17				10.6			9.2		0.9	16.5	
H18				12.3			9.1		0.9	17.4	
H19	1			12.2					0.7	27.9	
	2			10.6					0.8		
H20				14.4					0.9	16.3	
H21				13.9				8.0		16.7	
H22		う群		11.4				5.7	0.85	12.9	
H23				10.1				5.5	0.85	14.2	

遺物番号	枝番号	群別	全長	残存長	鏃身長	刃部長	頸部長	茎部長	矢柄径	重量	茎部の糸巻
H24		い群		10.4					0.9	10.7	○
H25				9.9					0.8	11.5	
H26				9.4					1.0	14.2	
H27				8.1						8.4	
H28				6.4					0.9	9.5	
H29				7.8					0.9	10.9	
H30				8.9				5.5	0.9	9.4	
H31				9.2				6.6	1.0	11.3	
H32				8.3				7.9	0.9	8.9	
H33				5.9						5	
H34				4.3					0.95	4.4	
H35	1			5.3					0.9	9.3	
	2			4.8					0.9		
H36				5.3					0.9	5.7	
H37				5.9					0.9	8.1	
H38				4.7						0.9	
H39				3.5						1.4	
H40				2.8					0.7	1.5	
H41				3.2						0.8	○
H42				2.6						0.8	
H43				1.5						0.3	
H44				10.9						15.4	
H45		う群		9.3						7.6	
H46		い群		4.3						3.2	
H47				3.7						2.8	
H48				3.7						3	
H49	1	う群		15.4	11.0	1.7	9.0		0.7	64.1	
	2			11.8					0.8		
	3			14.6	11.0	1.6	9.0				
	4			15.2	11.3	1.7	9.3				
H50	1			13.3			9.0		0.9	13.2	
	2			3.5					0.9		
H51				13.3	10.9	1.8	8.8		0.75	12.4	○
H52	1			11.7					0.75	38	
	2			10.5					0.75		
	3			10.0		1.9					
	4			3.1							
H53				13.0	11.0	1.9	8.7			12.1	
H54						1.5			0.8	11.3	
H55				11.9	11.2	1.7	9.2		0.7	9.8	
H56				4.9		1.8				3.7	
H57				3.1		1.8				3.1	
H58				4.3		1.8				3.4	
H59				9.5		1.9				10.4	
H60				8.6		1.9				8.5	

（単位：cm）

大刀や鉇がともない，出土須恵器は 5 期である。これら島田池遺跡の 2 基の横穴墓は，ともに前方後方形の後背墳丘をともなう。

その近傍に位置する，古城山遺跡 B 区 3 号横穴墓（松江市東出雲町出雲郷）でも，10 点の長頸鏃が出土した。家形石棺を内蔵する横穴墓で，大刀や素環轡，出雲 4 期の須恵器がともなう。

横穴墓では，ほかに 10 点の長頸鏃を出土した弥陀原 4 号横穴墓（松江市乃白町弥陀原）がある。放レ山古墳（出雲市古志町）は，径 20 mばかりの横穴式石室をもつ円墳である。出土した鉄鏃が神戸川小学校に保管されている。大小 99 点があり，すべて長頸鏃とみてよいだろう。金銅装の馬具や大刀，そして出雲 4 期の須恵器がともなっている。

このほかに，岡田山 1 号墳（松江市大庭町有）から 1970 年の調査では石室の奥から鉄鏃が出土した。この鉄鏃 58 点（関 14 点，切先 34 点）は，すべて長頸鏃である。ただし，1915 年の発掘で見つかった鉄鏃がすべて失われているので，副葬された鉄鏃の構成は不明である。

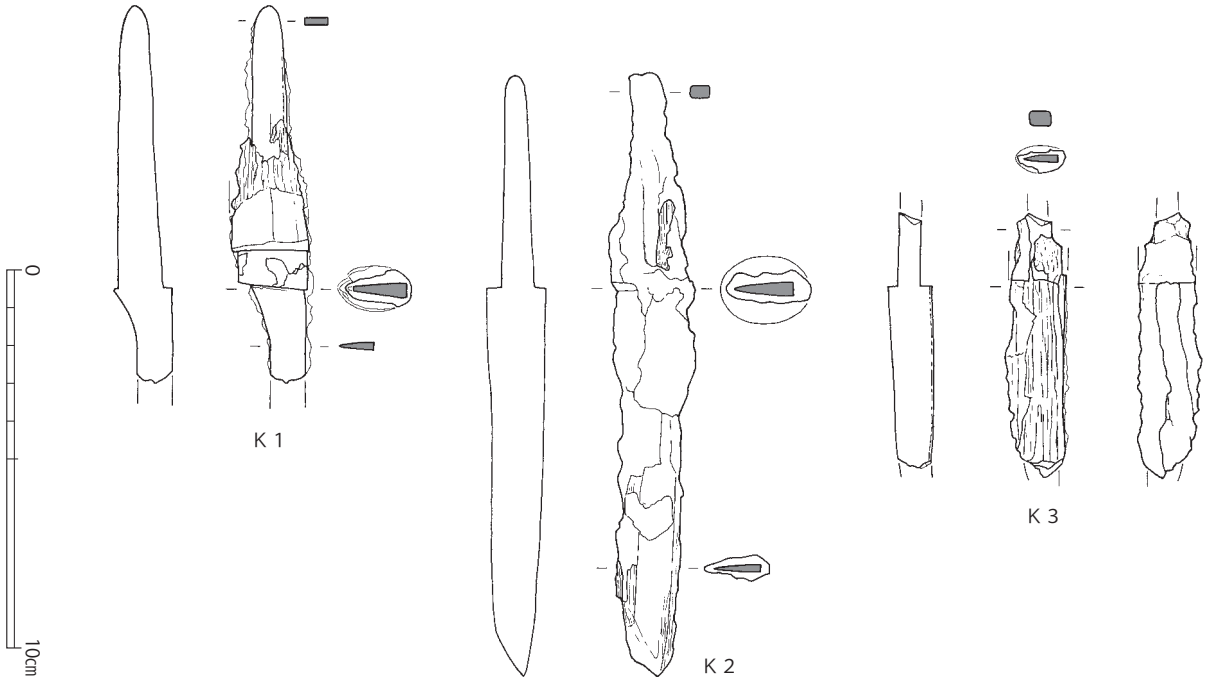
5．刀子（第 52 図，図版 15）

工具類は，刀子が 3 本出土した。すべて，前室からの出土である。

K 1 は，銅製柄縁金具をはめた鉄刀子。残存長 10.0㎝で，刃先を欠く。両関で，刃部は研ぎ減りが著しい。長さ 7.5㎝の茎を，長径 1.9㎝×短径 1.2㎝の木製柄に差し込んでいる。刃部にも木質痕があるので，鞘も木製のようである。

K 2 は，鉄製木装の鉄刀子である。柄縁金具はない。鉄刀子本体は，全長 15.9㎝，刃部長 10.3㎝，関部での刃幅 1.6㎝，茎部長 5.6㎝。柄も鞘も木製である。両関で，刃部に研ぎ減りが少ない。

K 3 は，鹿角製柄に木製鞘をはめた鉄刀子。刃部と茎部とも欠損がある。関は両関である。現存長 7.0㎝，関部での刃幅 1.2㎝。



第 52 図　刀子実測図（1：2）

６　馬　具

３組の馬具が出土した。部品ごとの出土点数は次の通りである。

（１）　鞍の金具（鞍）３組５点　　（５）　辻金具　　２組６点＋
（２）　鐙吊金具と鋲具２組４点・３点　（６）　雲珠　　２点
（３）　轡　　３組　　（７）　鋲具　　１点＋
（４）　杏葉　　２組６点　　（８）　飾金具　　12 点

（１）　鞍の金具（第 53 図，図版 24）

鞍の後輪に装着する鞍が５点出土した。いずれも，凸字形の鉄製輪金の基部に鉄製の脚をからめた型式である。

Ｂ１は，銅製八花形座金具をともなう鞍。１点のみ確認した。輪金の基部にからめられた脚は一方が長く，その先端がコ字形に曲げられて，木製鞍に固定されていたと推定される。現状では，座金具と折り曲げられた脚先端部とは平行していない。また，脚部に残る木質の木目は，脚の軸と斜行する。輪金の大きさは，タテ 6.0㎝×ヨコ 4.7㎝。座金具の径は 3.1㎝。

Ｂ２とＢ３は，鉄地銀張りの栗形座金具をともなう鞍。輪金の形状もほぼ同じである。脚は，２点とも長い方を折り曲げているが，先端部の折り曲げ方には違いがある。脚部に木質は遺存していない。Ｂ２は，輪金のタテ 6.7㎝×ヨコ 5.0㎝，座金具のタテ 3.7㎝×ヨコ 3.2㎝。Ｂ３は，輪金のタテ 6.3㎝×ヨコ 4.5㎝，座金具のタテ 3.5㎝×ヨコ 3.6㎝。

Ｂ４とＢ５は，鉄製の円形座金具をともなう鞍。輪金の円環部が大きい特徴も共通する。脚は大きく折り曲げられている（Ｂ 4）。Ｂ４は，輪金のタテ 8.1㎝×ヨコ 5.3㎝，座金具の径 4.2㎝。Ｂ５は，輪金のタテ 8.1㎝×ヨコ 5.2㎝，座金具の径 4.1㎝。

（２）　鐙吊金具と鋲具（第 54 図，図版 24・25）

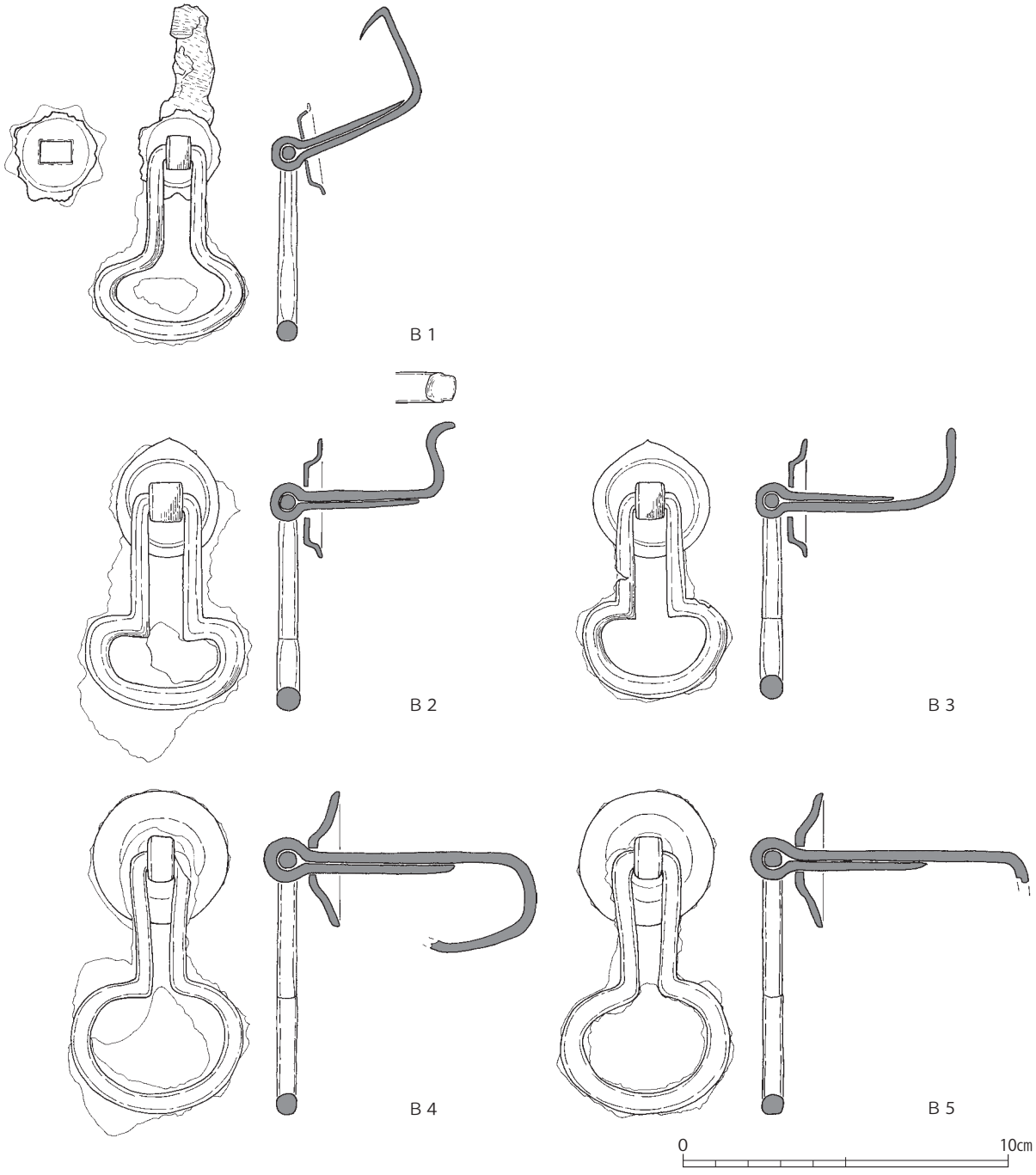
木製壺鐙の吊手となる鉄製の吊金具が２組４点と，鐙鞅用の大型鋲具２組３点が出土した。

Ｂ６とＢ７は，柳葉形の脚部に３本ずつ計６本の鉄釘が打たれた吊金具。釘は最長で 2.1㎝ある（Ｂ６）。脚部の内面と釘の軸部には鐙本体の木質が残っているが，Ｂ７の吊手部内面には木質がない。吊手孔は，幅 2.7㎝，高さは 1.5㎝である。Ｂ６の吊手部には鐙鞅の革帯が錆付いて残っている。Ｂ６の全高 12.5㎝，脚端部の開き幅 6.5㎝。Ｂ７の全高 12.4㎝，脚端の開き幅 6.0㎝，脚部長 10㎝。

兵庫鎖をともなわない鐙吊金具は，奈良県牧野古墳から出土した木製鉄装三角錐形壺鐙によって，吊金具の脚を壺鐙の前後に留めつけること，したがって吊手孔は鐙の爪先方向と直交することが判明する（河上ほか 1987　第 62 図・図版 42）。本墳出土例も，Ｂ６とＢ７の脚部をみると，その反り返りの状況が２枚の脚部で微妙に違うので，牧野古墳例と同様の留め付け方とみてよかろう。

Ｂ８とＢ９は，脚部に２本ずつ計４本の鉄釘が打たれた吊金具。脚部長も８㎝と短い。Ｂ８は，全高 8.0㎝，脚端部の開き幅 5.3㎝，吊手孔の幅 3.3㎝，高さ 1.0㎝。Ｂ９は，脚部を欠損するが，木質がよく残っており，釘の長さが 2.4㎝とわかる。Ｂ９の表面には黒漆が残っている。

Ｂ 10 ～Ｂ 12 は，鋲具である。Ｂ 10 は，凸字形の輪金の基部に別作りの鉄棒をかしめる型式。



第 53 図　馬具実測図（1）（1：2）

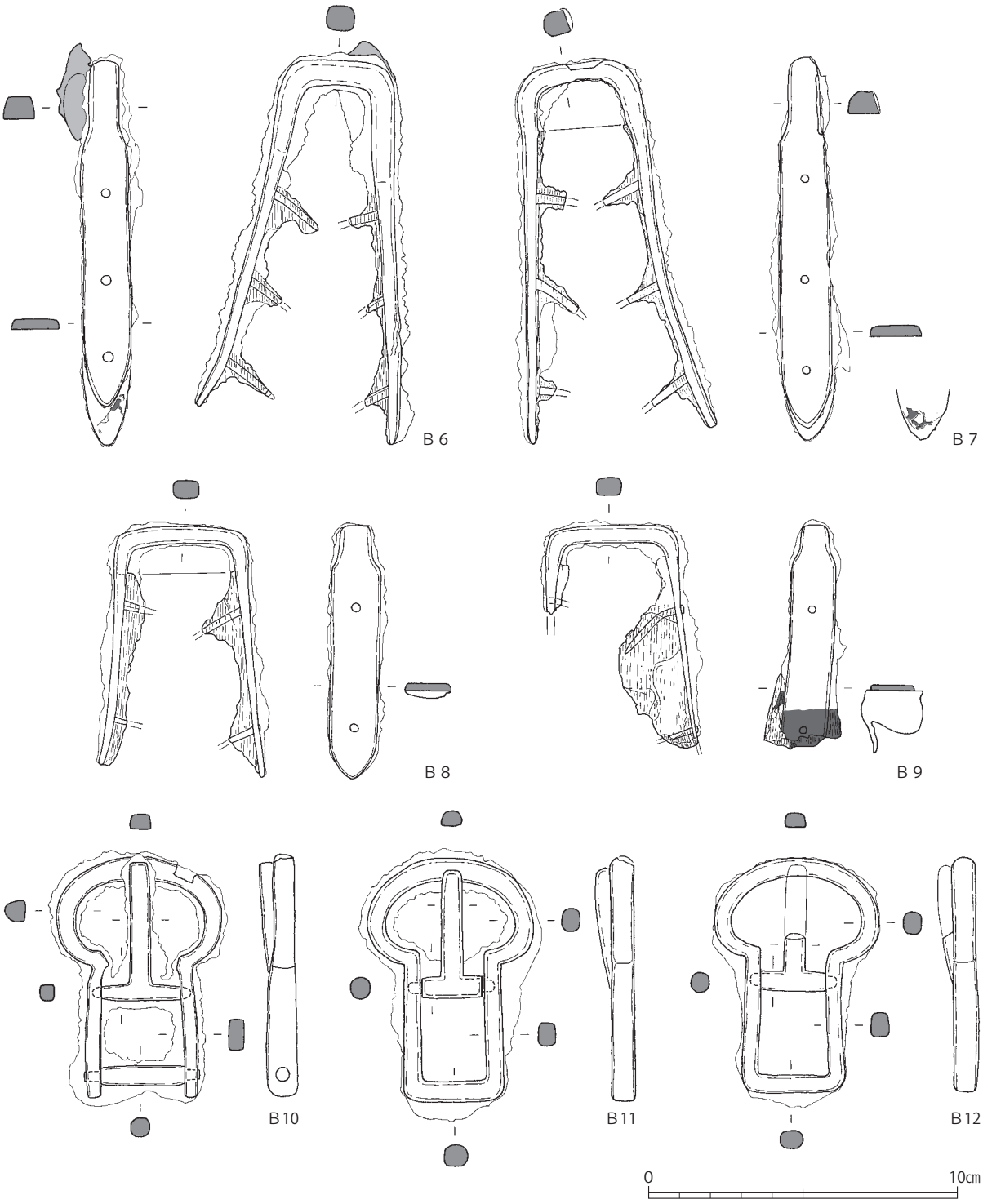
B 11 とB 12 は，一本の鉄棒で輪金を形成する型式。いずれも，T 字形の刺金を挟み込む。B 10 は，全長 7.8㎝，最大幅 5.3㎝。B 11 は，全長 7.9㎝，最大幅 5.3㎝。B 12 は，全長 7.6㎝，最大幅 5.3㎝。B 12 は刺金を欠損する。

（3）　轡（第 55 ～ 57 図，図版 22・23）

鉄地金銅張りの鏡板をそなえた轡が 2 組と，鉄製環状鏡板付き轡が 1 組出土した。

心葉形斜格子紋鏡板付き轡　B 13 は，わずかに下端が突出した心葉形の鏡板の轡。一部の鋲頭や金銅板に欠損はあるが，遺存状態は良好である。

鏡板は，中央に銜先を覆う半球形の突出部があり，その四方にV字形紋様を配置して斜格子紋を表

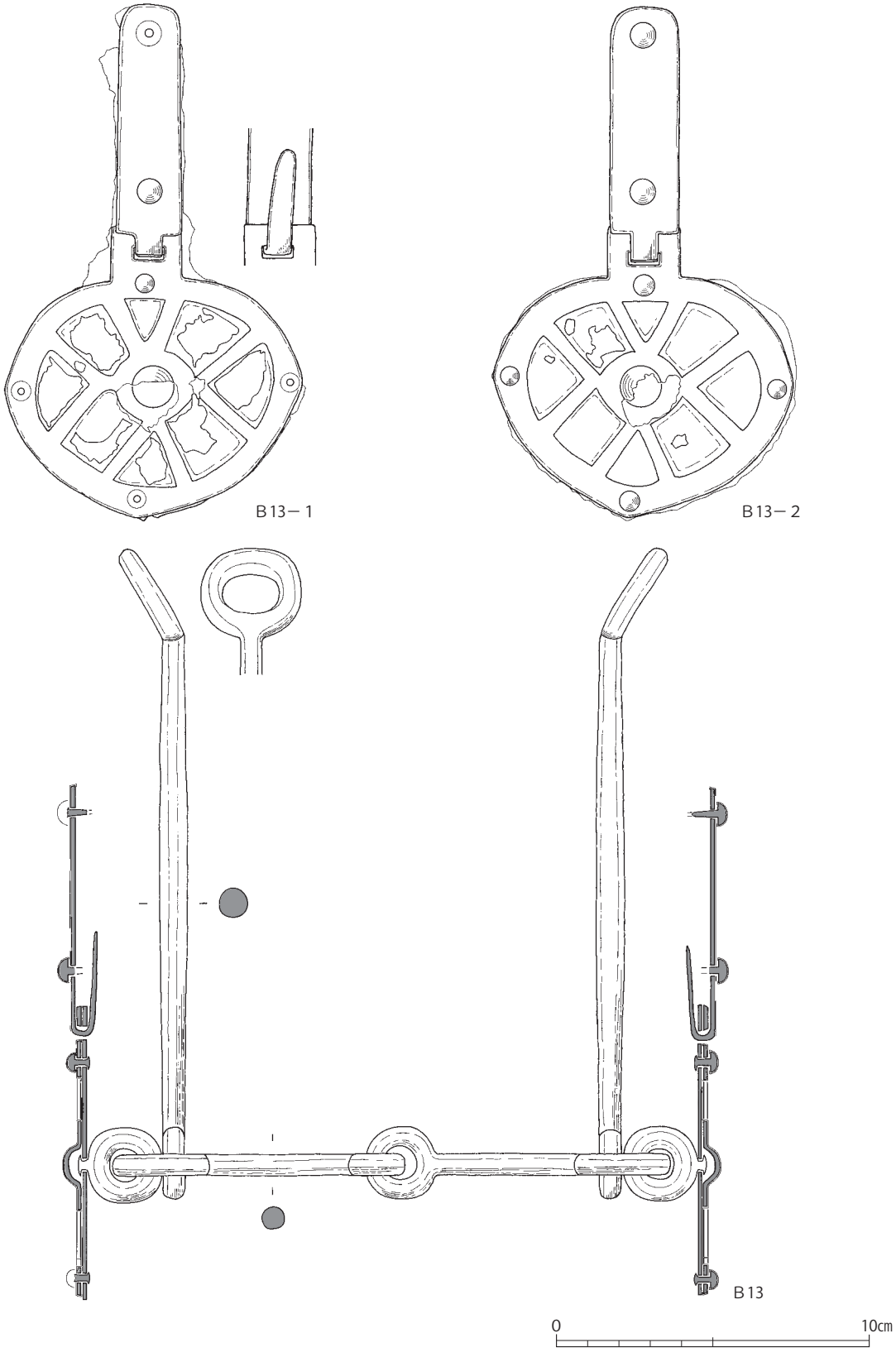


第 54 図　馬具実測図（2）（1：2）

現する。金銅装された紋様板と鉄地板とは，頭部金銅張りの円頭鋲４本で鋲留めされている。方形の立聞には，２鋲留めの鉄地金銅張りの舌状吊金具が付く。吊金具の鋲も頭部は金銅張りである。

鏡板の裏面には，径 2.4㎝の円環がかしめられており，これに２連式の銜の端環がからみ，その端環に引手がつながる。引手の軸は中央部がやや太い。引手壺は約 45°屈折する。

鏡板の大きさは，Ｂ 13 － 1 が高さ 9.4㎝，幅 9.5㎝，吊金具の長さ 8.0㎝，Ｂ 13 － 2 が高さ・幅とも 9.5㎝，吊金具の長さ 8.1㎝。銜は全長 17.8㎝，引手長 20.9㎝である。



第 55 図　馬具実測図（3）（1：2）

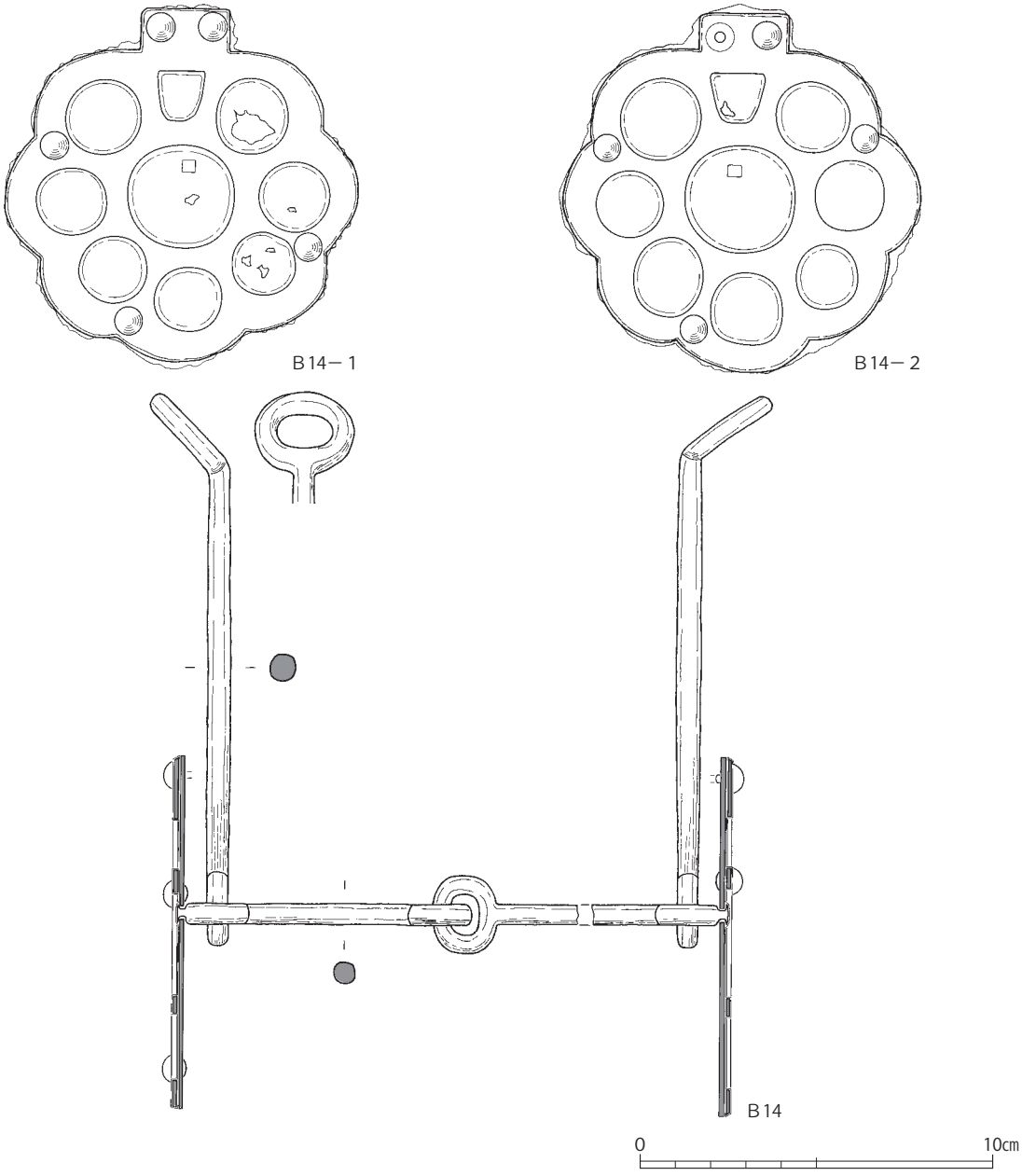
花形鏡板付き轡　B 14 は，長方形の立聞を含めると八花形をした花形鏡板の轡。鋲頭や金銅板，および銜にわずかな欠損があるだけで，遺存状態は良好である。

鏡板は，中央に径約４㎝の大型の円紋が，その周囲には花形の輪郭とそろうように７個の円紋および立聞位置に爪形紋が配置されている。金銅張りされた紋様板と鉄地板とは，頭部金銅張りの円頭鋲３本で鋲留めされている。立聞には面繋を留めた円頭鋲が２本あるだけで，吊金具は附属しない。

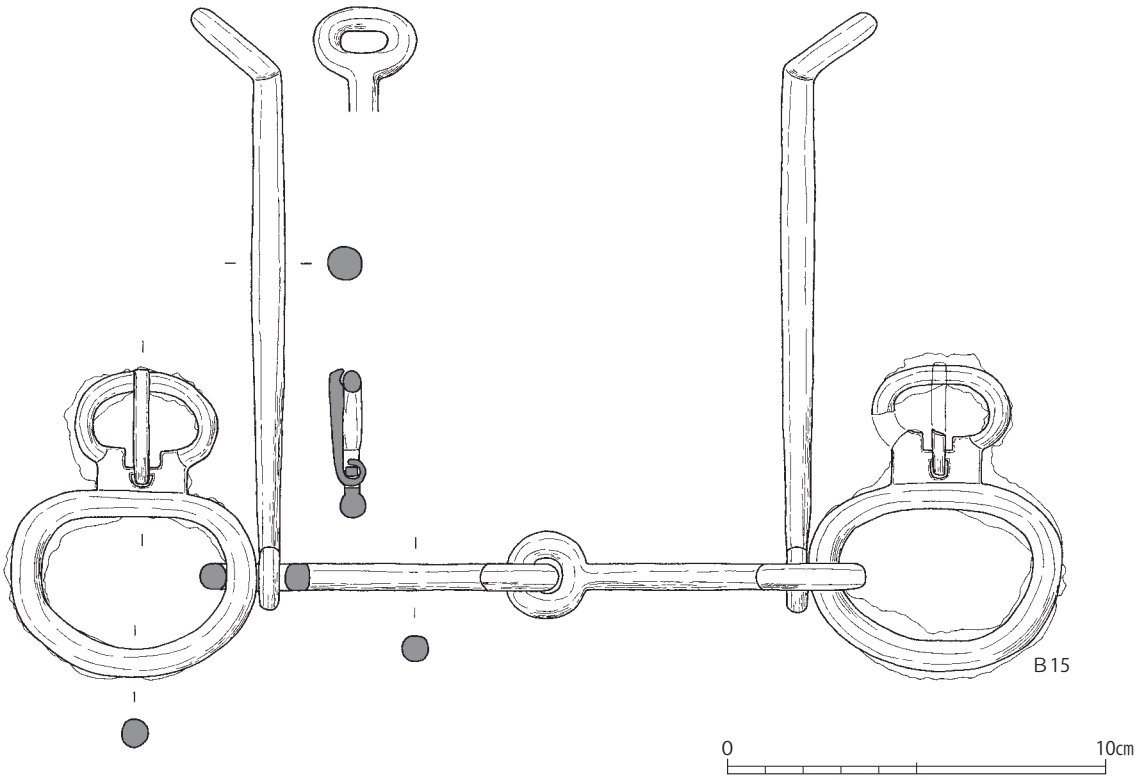
銜は２連式で，端環にもうけた突起を鏡板地板にかしめて固定されている。銜の端環には引手が連結されている。引手は軸の中央部がごくわずかに太く，引手壺は約 45°の角度で屈折する。

鏡板の大きさは，B 14 － 1 が高さ・幅とも 10.0㎝，B 14 － 2 が高さ 10.2㎝，幅 10.1㎝。銜の全長 15.2㎝，引手長 15.7㎝である。

鉄製環状鏡板付き轡　略楕円形の円環を鏡板とし，立聞を鉸具につくった鉄製の轡。



第 56 図　馬具実測図（4）（1：2）



第 57 図　馬具実測図（5）（1：2）

（4）　杏葉（第 58 図，図版 26）

鉄地金銅張りの杏葉が２種類６枚出土した。

楕円形斜格子紋杏葉　B 16 ～ B 18 は，中央の菱形紋の四方に V 字形紋様を配置したような斜格子紋杏葉である。金銅張りの紋様板と鉄地板とは，頭部金銅張りの円頭鋲６本で鋲留めされている。方形の立聞には吊金具をからめる長方形の孔があり，B 16 には吊金具のごく一部が残っているほか，後述する雲珠 B 30 には鋲留めされた吊金具１個が附属している。吊金具は鉄地金銅張りで，長さ 3.5 ㎝，幅 2.1㎝ある。

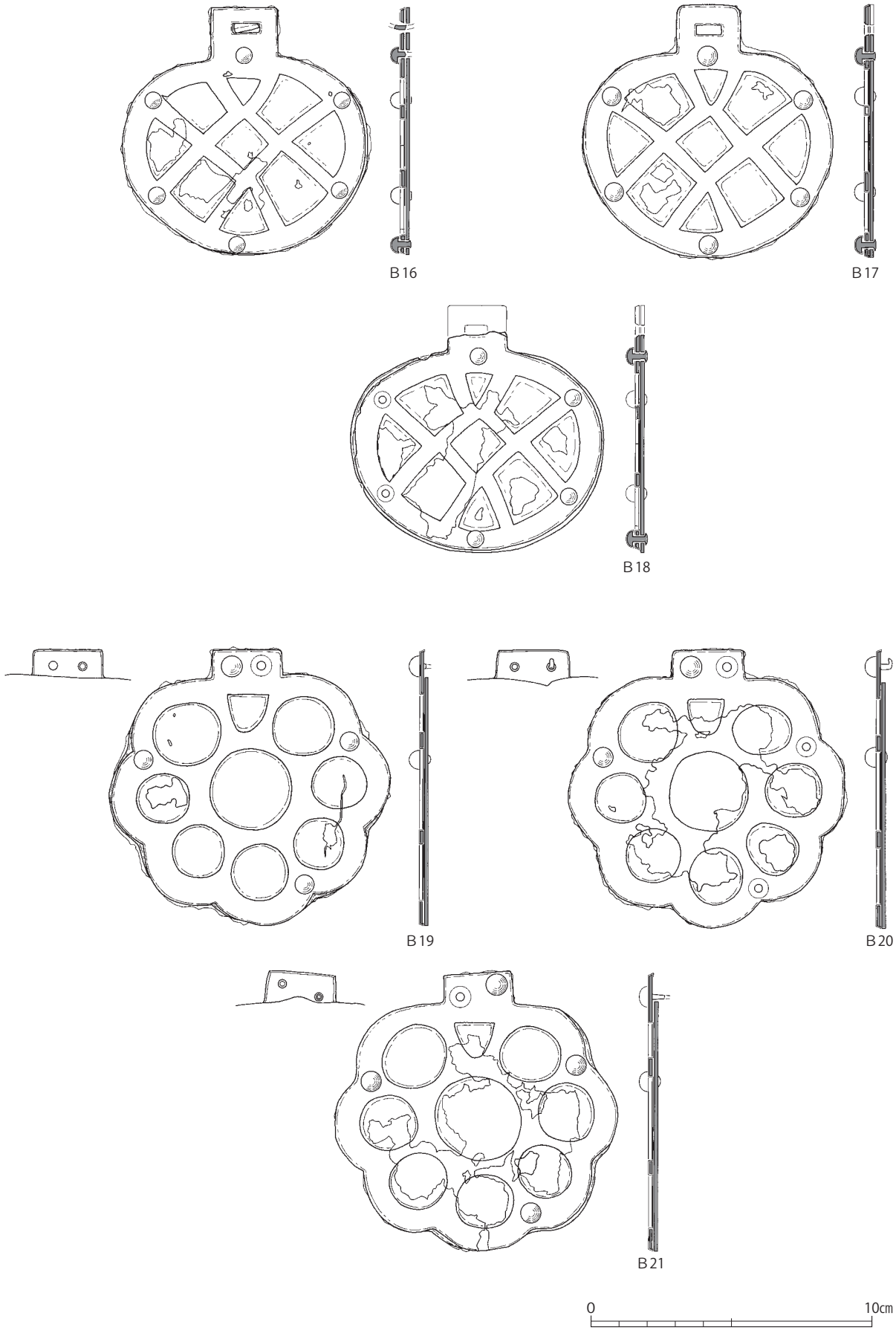
B 16 は高さ 8.8㎝，幅 8.7㎝，B 17 は高さ 9.0㎝，幅 8.8㎝，B 18 は復元高 8.8㎝，幅 9.0㎝。B 16 は立聞の地板を欠損するが，立聞孔に吊金具の一部が残る。また，B 18 は立聞の上半部が欠損する。なお，金銅板の表面には磨きの時についた擦痕がある。縁金部分では円周方向に，斜格子紋部分では格子の方向に向くようである。

花形杏葉　B 19 ～ 21 は，長方形の立聞を加えると八花形の外形となる花形杏葉である。中央のやや大きな円紋の周囲には，輪郭に合わせて７個の円紋と１個の爪形紋が配置される。金銅張りの紋様板と鉄地板とは，頭部金銅張りの円頭鋲３本で鋲留めされるが，鉄地板は立聞部には及ばない。立聞には２本の頭部金銅張り円頭鋲が打ち込まれ，これで尻繋に繋いでいた。したがって吊金具はともなわない。B 20 の立聞部の鋲脚には，先端を折り曲げた状況が残っている。

B 19 は高さ 9.8㎝，幅 10.0㎝，B 20 は高さ 9.9㎝，幅 9.8㎝，B 21 は高さ幅とも 10.0㎝。

（5）　辻金具（B 22 ～ 29，第 59・60 図，図版 26）

鉄地金銅張りの辻金具が２種６点ある。



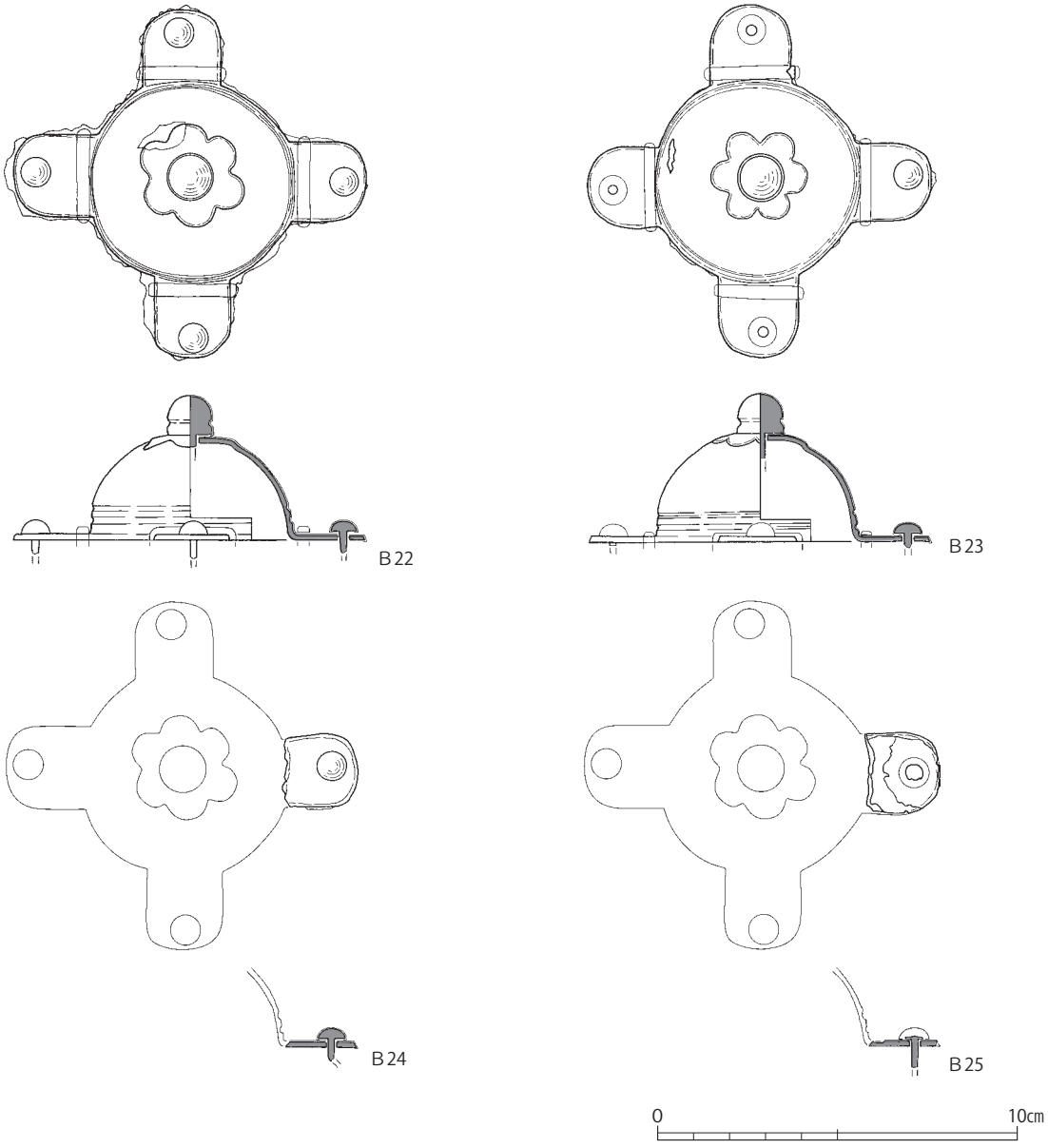
第 58 図　馬具実測図（6）（1：2）

鉢部半球形辻金具（B 22 ～ 25）　鉢部が半球形をした 4 脚の辻金具である。ほぼ完形の 2 点があり，ほかにその脚部片が 2 点ある（第 59 図）。

鉢部の側面には 2 条の凹線がめぐり，頂部には，側面に浅い凹線のめぐる宝珠形飾りがある。宝珠形飾の基部には六花形の座がある。X 線透過写真によると，別作りの鉄地金銅張り座金具を鉢部と宝珠形飾りとの間にはさみ込むのではなく，鉢部の鉄地板頂部に六花形を叩き出して形成したものと推定される。脚部は爪形をしており，頭部金銅張りの円頭鋲が 1 本ずつ打たれている。鉢部と脚部とは一体で金銅板が張られている。脚部の責金具は，ほぼすべて脱落しているため，金銅装かどうかは不明である。また，脚部の裏面には革帯の痕跡がある。

B 22 は，脚部の鋲頭がすべて残っている。差し渡しの直径 9.7 ～ 9.8㎝，全高（鋲脚を除く）4.0㎝，鉢部の直径 5.7㎝。

B 23 は，1 本を残して脚部の鋲頭が欠落するが，1 つの脚基部に責金具の断片が残っている。差



第 59 図　馬具実測図（7）（1 ： 2）

し渡しの直径 9.5 ～ 9.8㎝，高さ（鋲脚を除く）4.1㎝，鉢部の直径 5.7㎝。

B 24 とB 25 は，上記２点と同じ形状をした脚部の破片。これらが同じ辻金具のものか，別個体のものかはわからない。

鉢部円錐台形辻金具（B 26 ～ 29）　鉢部が円錐台形をした４脚の辻金具である。鉄地金銅張りである。ほぼ完形の３点と２脚を欠損した１点の計４点がある（第 60 図）。

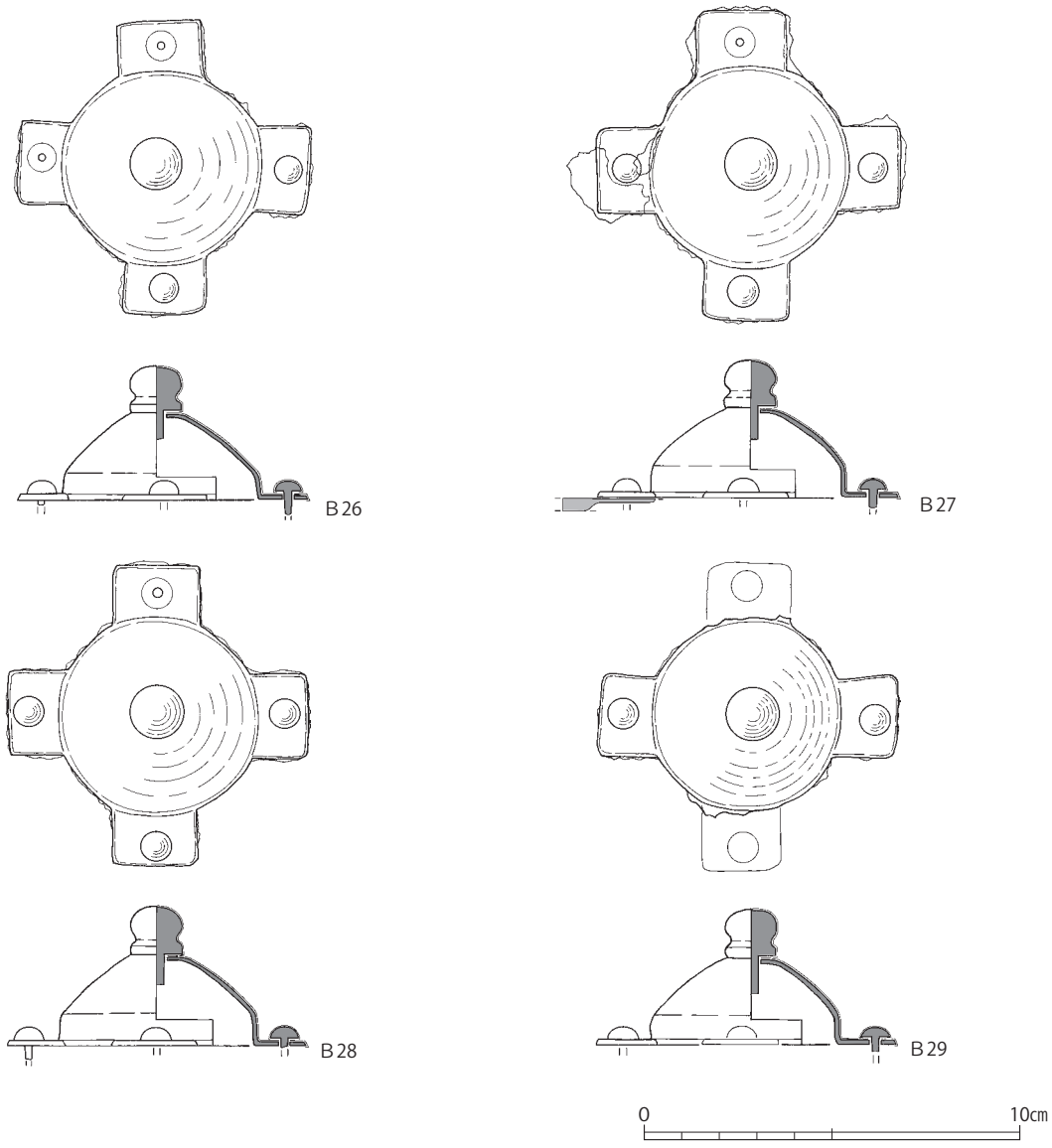
鉢部は側面が直立した円錐台形で，その四方に短い方形の脚が付く。鉢部の頂部には宝珠形飾りがある。長さ 0.7 ～ 0.8㎝の軸が付いており，鉢部の内面に脚部に責金具はない。

B 26 は，２本の鋲頭が欠損する。差し渡しの直径 7.8㎝，高さ 4.0㎝，鉢部の直径 5.3㎝。

B 27 は，１本の鋲頭が欠損する。差し渡しの直径 8.1 ～ 8.3㎝，高さ 4.0㎝，鉢部の直径 5.3㎝。１本の脚部裏面に革帯の痕跡がある。

B 28 は，１本の鋲頭が欠損する。差し渡しの直径 8.0㎝，高さ 4.1㎝，鉢部の直径 5.3㎝。

B 29 は，２脚を欠損する。差し渡しの直径 8.0㎝，高さ 3.8㎝，鉢部の直径 5.0㎝。



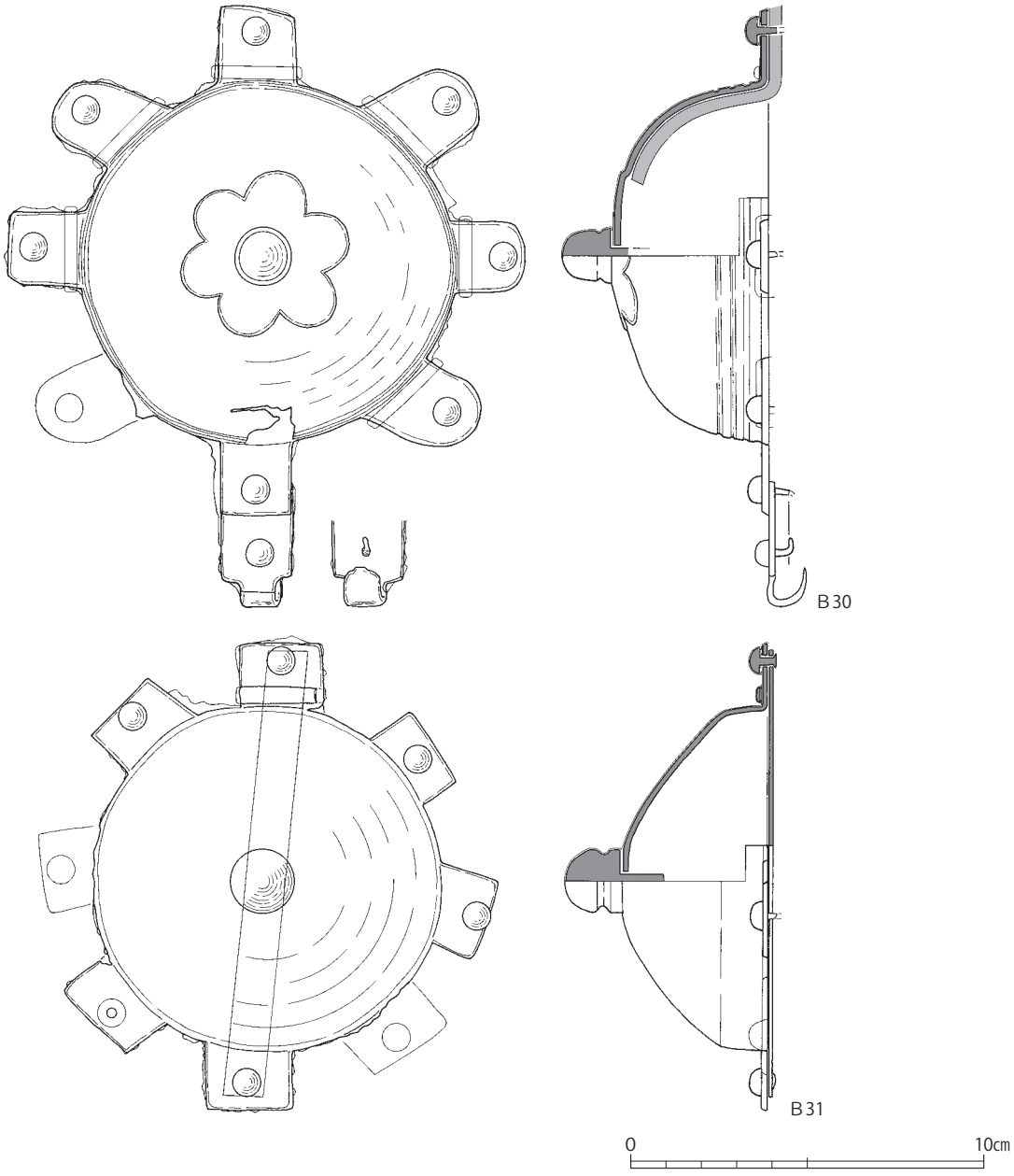
第 60 図　馬具実測図（8）（１：２）

（6） 雲珠（第 61 図，図版 27）

鉄地金銅張り 8 脚の雲珠が 2 点出土した。

鉢部半球形雲珠　半球形の大型の鉢部をもち，側面に 3 条の凹線をめぐらせた雲珠。頂部には，六花形の座飾りをともなった宝珠形飾りが付く。六花形の飾りは，辻金具 B 22・B 23 と同じく，鉄地板を叩いて陽起されたものと推定される。宝珠形飾りには鉢部に貫通する軸があるが，その長さは不明。

脚は 8 脚である。方形の脚 3 本と短い爪形の脚 1 本が直交する位置にあり，これと斜行してやや長めの爪形の脚 4 本が配置される。このうち 1 本が欠損する。脚部にはすべて頭部金銅装の円頭鋲が打ち込まれており，すべて鋲頭は残っている。また，方形の脚の 1 本には，鉄地金銅張り吊金具が固定されている。吊金具と脚とに打たれた鋲はかしめられることなく，革帯の固定にも使われている。ま



第 61 図　馬具実測図（9）（1：2）

た，吊金具には別に円頭鋲 1 本が打たれ，その軸の先端が折り曲げられた状態で残っている。曲げの状況からみて，留められた革帯の厚さは 0.4㎝くらいとみられる。この吊金具の付く脚と反対側に位置する方形脚は，裏面に革帯の痕跡が残る。革帯の痕跡は，鉢部の内面に長く延びている。脚を含めた直径は 14.6㎝，鉢部の径 10.3㎝，鉢部の高さ 4.4㎝。

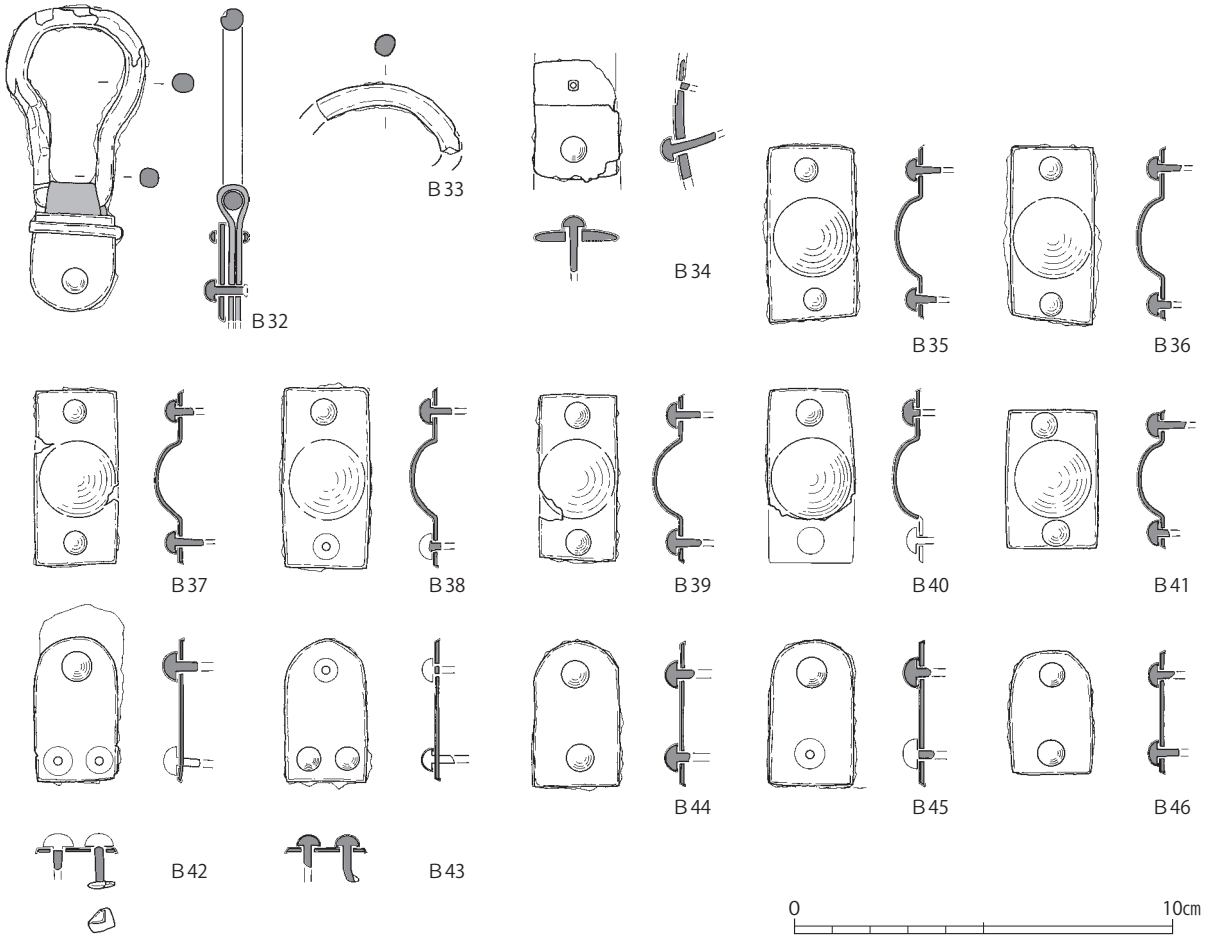
鉢部円錐台形雲珠　短い側面がほぼ垂直になった円錐台形の鉢部をもつ雲珠。側面に凹線はない。頂部には，有軸の鉄地金銅張り宝珠形飾りが付く。脚はすべて方形で，図の左右に位置する 2 脚以外は，ほぼ 45 度の角度で配置されている。脚は 2 つが欠損する。

脚部にはすべて 1 本ずつの円頭鋲が打たれている。図で上下に置いた 2 つの脚には，裏面に幅 1.1 ㎝・長さ 12.6㎝の細長い鉄板が鋲留めされている。そして，その片方の脚には責金具の痕跡がある。他の脚に責金具の痕跡はない。脚を含めた直径は 13.2㎝，鉢部の径 9.7㎝，鉢部の高さ 4.1㎝。

（7）　鉸具（第 62 図，図版 25）

B 32 は，凸字形の鉄製輪金の鉸具である。輪金の狭いほうには，搦められた革帯の痕跡が錆付いている。そこに爪形をした鉄地金銅張り金具を革帯にあて，頭部金銅装の円頭鋲を打って革帯を鋲留めしたのち，鉄地金銅張りの責金具でかしめてある。全長 8.0㎝，輪金の幅 3.7㎝。面繋に用いた鉸具であろう。

B 33 は，鉸具の輪金の断片。あるいは，鞍の破片かもしれない。



第 62 図　馬具実測図（10）（1 ： 2）

（８）　飾金具，その他（第 62 図，図版 25）

B 35 ～ B 41 は，長方形の鉄地金銅張り飾金具。中央に半球形の膨らみがあり，両端に頭部金銅装の円頭鋲１本ずつが打たれる。全長 4.4 ～ 4.8㎝・幅 2.1 ～ 2.3㎝で，B 41 のみ全長は短いが幅が広い。

B 42 ～ B 46 は，爪形の鉄地金銅張り飾金具。頭部金銅装の円頭鋲３本が打たれたB 42･B 43 と，２本が打たれたB 44 ～ B 46 がある。全長3.8 ～ 4.0㎝・幅 2.2 ～ 2.3㎝で，B 46 だけが短い。

B 34 は，頭部金銅装の円頭鋲が打たれた鉄地金銅張りの鉄板である。鋲は約２㎝間隔で２本が並ぶようで，長さ 1.5㎝以上ある。用途不明。（花谷　浩）

第４表　飾金具一覧

	形状	鋲数	長さ＊	幅＊	高さ＊	鋲長＊
B 35	長方形（半球形突起）	2	4.7	2.3	0.7	0.9+
B 36			4.7	2.2	0.7	0.9+
B 37			4.6	2.2	0.7	1.1+
B 38			4.8	2.3	0.7	0.8+
B 39			4.4	2.1	0.8	0.9+
B 40			［4.6］＊＊	2.3	0.7	0.4+
B 41			3.7	2.5	0.7	1.0+
B 42	爪形	3	3.9	2.2		［1.4］＊＊
B 43			3.8	2.2		1.2
B 44		2	4	2.3		
B 45			3.9	2.2		
B 46			3.3	2.2		0.8+

＊：㎝　＊＊：復元値

7　須恵器

石室内から 61 点の須恵器を確認した（図版 28）。その内，３点（P 73・95・96）を取り上げず現地に保存し，58 点を取り上げた。これらを出土位置がまとまる１～５群と，単体のその他に分けた（第 63 図）。そして，取り上げた 58 点と，実測図が推定作図できたもの（現地に保存したP 73）について報告する。主要な須恵器（杯蓋・無蓋高杯・𤭯・有蓋高杯・横瓶）の時期は，第７章第６節を参照。

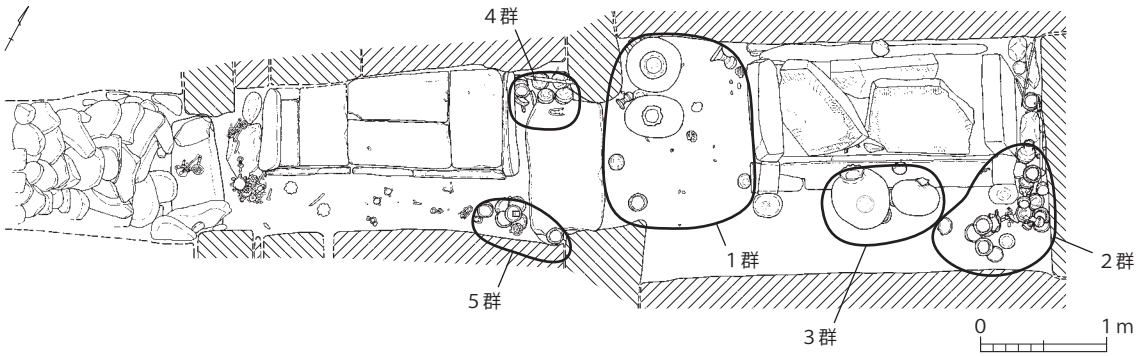
掲載した須恵器の器種と点数は，杯蓋 15 点，杯身 15 点，𤭯３点，有蓋高杯蓋７点，有蓋高杯身７点，無蓋高杯１点，直口壺１点，短頸壺１点，同蓋１点，台付有蓋長頸壺１点，同蓋１点，台付有蓋椀１点，同蓋１点，壺２点，横瓶２点である。

（１）　１群（第 64 図P 36 ～ 44，図版 52・57・58）

１群はＡ石棺と玄門（玄室側）の間から出土した。蓋杯１組，坏蓋２，直口壺１，𤭯２，壺１，横瓶１である。

蓋杯（P 36 ～ 38・42）　P 36・37 は径と焼色からセットと考えた。P 42 の口縁部外面には鉄分が付着（６分の５周）する（図版 57）。

直口壺（P 39）　平底の体部に，広口の口縁部が付く。口縁部は内湾気味に直立し，口縁端部は先細りする。口縁部は横ナデ，胴部下半はヘラケズリである。

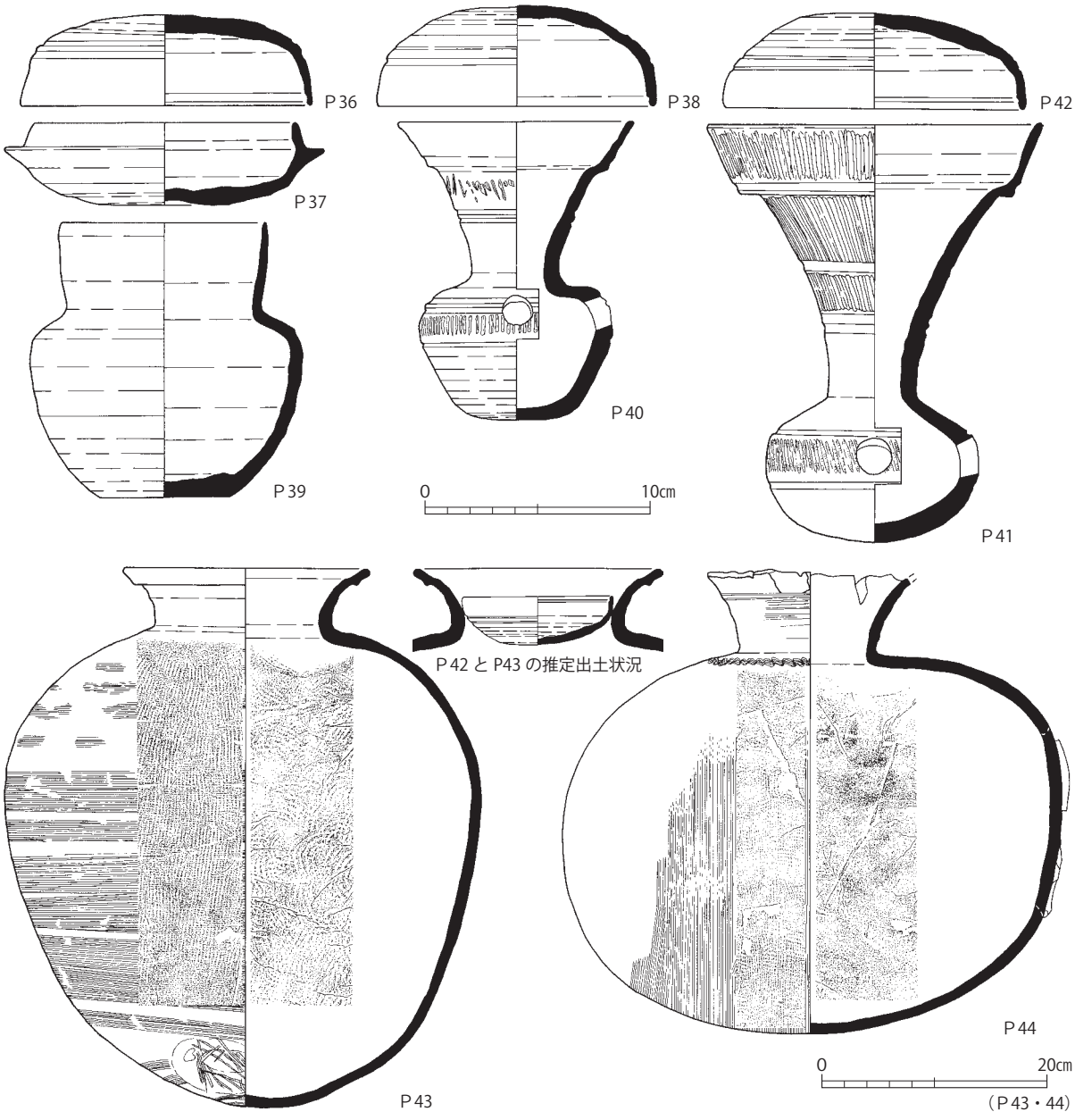


第６３図　須恵器出土位置群（１：60）

𤭯（P 40・41）　P 40 は底部が平底をなし出雲産の特徴をもつ。頸部は２条の凹線文で文様帯が分けられる２段型で(6)，上段に荒い波状文が施されている。P 41 は，頸部の付け根が強くしぼられ，ラッパ状に広がる頸部と，きれいな丸底の胴をもつ畿内系の𤭯である。体部には，鉄錆がついている。

壺（P 43）　P 43 の口縁部は短く外反し，口縁端部外面には突帯がめぐる。胴部は長胴をなし，底部は丸底をなす。胴部外面には擬格子状タタキ目の上にカキメ，内面には当具痕がある。頸部内面には，鉄錆が付いていて，その形状は蓋P 42 の外面のものと一致するので，P 42 を反転させP 43 の蓋にしていたことがわかる。鉄錆は両者の隙間に溜まった水分などに起因するのであろう。

横瓶（P 44）　P 44 は，俵形の胴部に長い頸部をもつ横瓶。胴部の外面にはタタキ目の上にカキ目があり，頸部の周囲には８条程度の波状文がめぐる。内面の当具痕は丁寧にナデ消されている。口縁部および胴部の内外面には自然釉が付いており，その流れ方から胴部の長軸を立てた状態で焼成され



第 64 図　須恵器実測図（1 群）（1：3，1：6）

たことがわかる。この時に敷かれた杯片などが付着している。口縁端部の欠損部は風化しているので，天上石落下時の損傷ではなく，副葬以前のものである。

（２）　２群（第 65 図，図版 53 ～ 56）

２群は奥壁沿いから出土した。蓋杯１組，有蓋高杯７組，無蓋高杯１，台付有蓋長頸壺１組，台付有蓋椀１組である。

有蓋高杯（P 45 ～ 58）　P 53 と 54，P 55 と 56 は蓋がかぶった状態で出土し，また，焼け色も同じことからセットは確実である（図版 54）。その他は，径と焼け色からセットと判断した。P 46・48・50・52 の脚部には２段三角形透かしが３方向に，そして，P 54 ～ 56 の脚部には１段三角形透かしが３方向にある。有蓋高杯蓋につまみはない。

無蓋高杯（P 59）　P 59 の杯部は，平らな底部から体部が直立するもので，底部外面に刺突文が巡る。脚部には上段に切れ目，下段に三角形状の透かしが３方向にある。

蓋杯（P 60・61）　P 60 とP 61 は径と焼け色からセットであると判断した。P 61 の外面には２本の細い棒状のものがあたり，その部分が黒色化した部分がある。

台付有蓋長頸壺（P 62・63）　P 63 は，やや扁平な球形の胴部と筒状の口頸部をもち，ハ字形に開く短い台が付いた長頸壺である。口縁部はわずかに内湾する。胴部の肩部と口頸部中段には，凹線と刺突文がめぐる。また，台の三方には小円孔があく。これにかぶる蓋P 62 は，天井部に小さなつまみがあり，口縁部内面には短いかえりがある。

台付有蓋椀（P 64・65）　P 65 の椀部は，やや丸みをもった底部から外反気味に立ち上がり，口縁部は内傾する。底部外面には刺突文がめぐる。台部は八の字状をなし，脚端部は面をなす。P 64 はつまみはなく，内面にはかえりがある。P 64・65 それぞれの外面に自然釉が着いており，また，蓋の内面に椀の口縁端部が着いていることから，蓋が開かない状態であったと考えられる。副葬時までに椀の口縁端部を壊し，蓋を開けたようだ。

（３）　３群（第 66 図，図版 57）

３群はＡ石棺前から出土した。蓋杯１組，杯蓋１，杯身１，壺１，横瓶１である。

蓋杯（P 66 ～ 69）　P 66・67 は径と焼色からセットと考えた。P 69 はP 70 内から出土した（図版 57）。

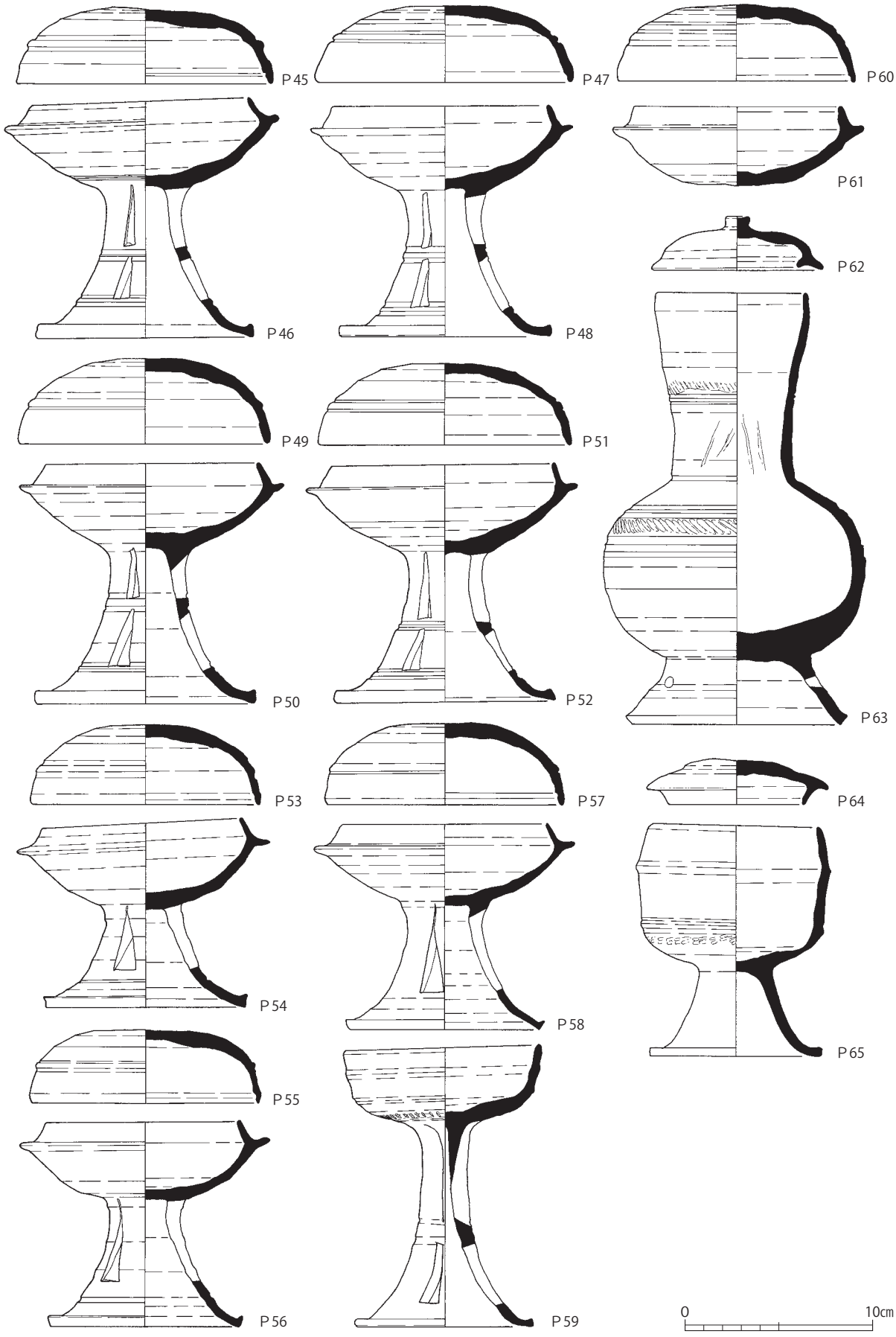
壺（P 70）　P 70 の口縁部は短く外反し，口縁端部外面には突帯がめぐる。胴部は長胴で，底部は丸底をなす。胴部外面には擬格子状タタキ目の上にカキメ，内面には当具痕がある。口縁端部が２カ所欠けている。

横瓶（P 71）　P 71 は俵形の胴部に長い頸部をもつ。胴部外面はタタキ後カキメ，内面はタタキ当具痕がある。口縁部は約６分の５欠けている。

（４）　その他（第 65 図，図版 52・55・61）

その他は玄室内から単体で出土したものである。杯身２，有蓋短頸壺１，鏃１である。

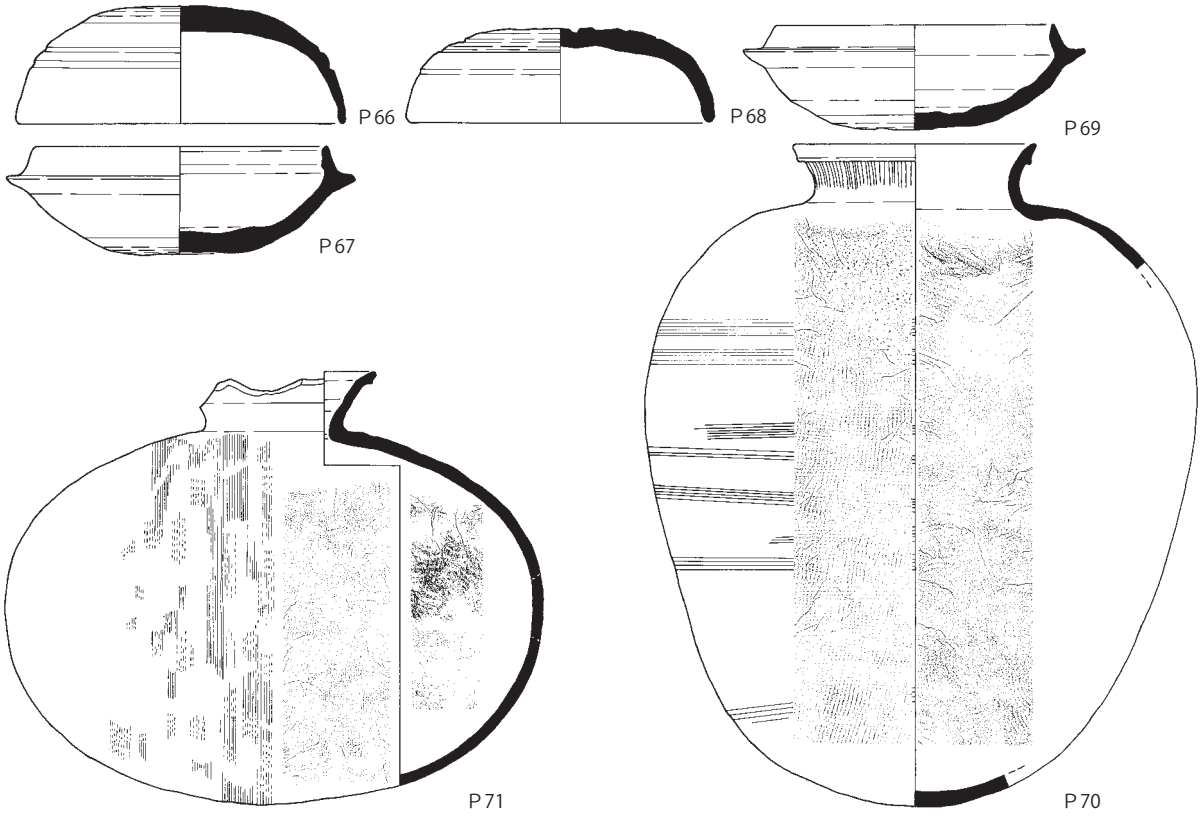
蓋杯（P 72・73）　P 73 は石棺内にあり取り上げていない。杯身あるいは有蓋高杯の身の可能性がある。



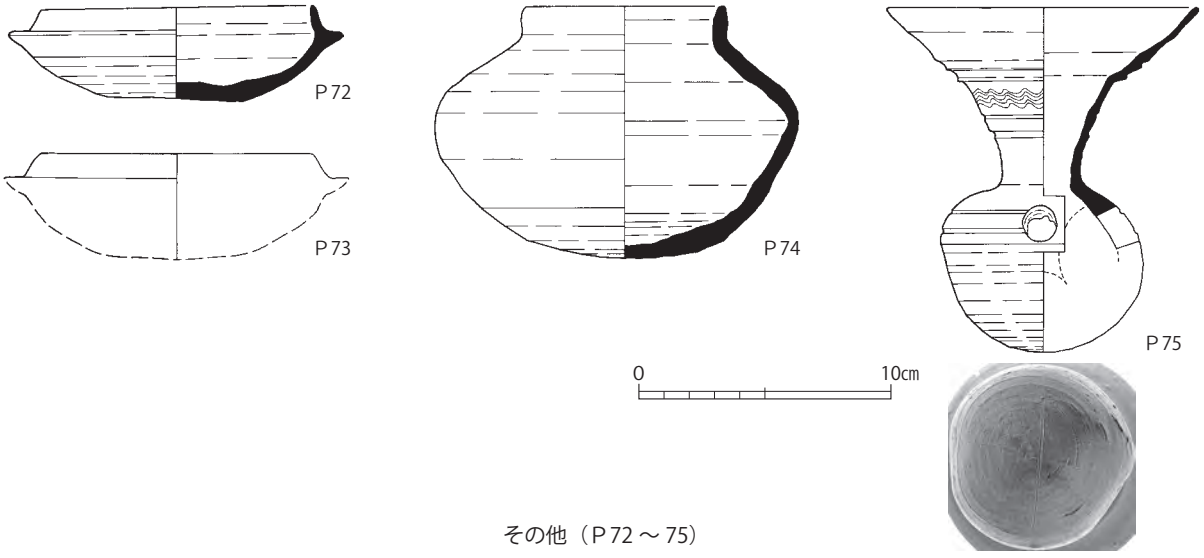
第 65 図　須恵器実測図（2群）（1：3）

有蓋短頸壺（P 74）　P 74 は，算盤形の胴部と，短い口縁部からなる丸底の短頸壺。焼成時に蓋がかぶっていたことが，焼け色でわかる。前室で出土したP 87（第 67 図）は，この蓋になると可能性があるが，P 87 の口径が短頸壺P 74 の蓋の痕跡よりも大きいので，焼成時のセットではない。

瑞（P 75）　P 75 は球形の胴部と大きく開いた口縁部をもつ。底部は丸底である。頸部の文様帯は 2 条の沈線で区画された2段型で，上段に波状文が施されている。底部には「×」のヘラ記号がある。胴部の器壁は，焼成時に内面側に大きく膨らんでいて，仮に液体を入れたとしてもほとんど入らない。



3群（P66 ～ 71）　（P70・71）



その他（P72 ～ 75）

第 66 図　須恵器実測図（3群・その他）（1：3，1：6）

（５）　４群（第 67 図，図版 59 ～ 61）

４群は前室のＢ石棺と左玄門との間から出土したものである。蓋杯５組，杯身１，短頸壺蓋１である。

蓋杯（Ｐ 76 ～ 86）　Ｐ 76 と 77，78 と 79，82 と 83，84 と 85 は，蓋がかぶった状態で出土し，また，焼け色も同じことからセットであることが確実である（図版 59）。蓋を開けるとわずかに土砂が流入しているのみで，遺物は確認できなかった。また，内部の土の科学分析も行なったが内容物を明らかにすることはできなかった。Ｐ 80・81 は径と焼き色からセットと考えた。

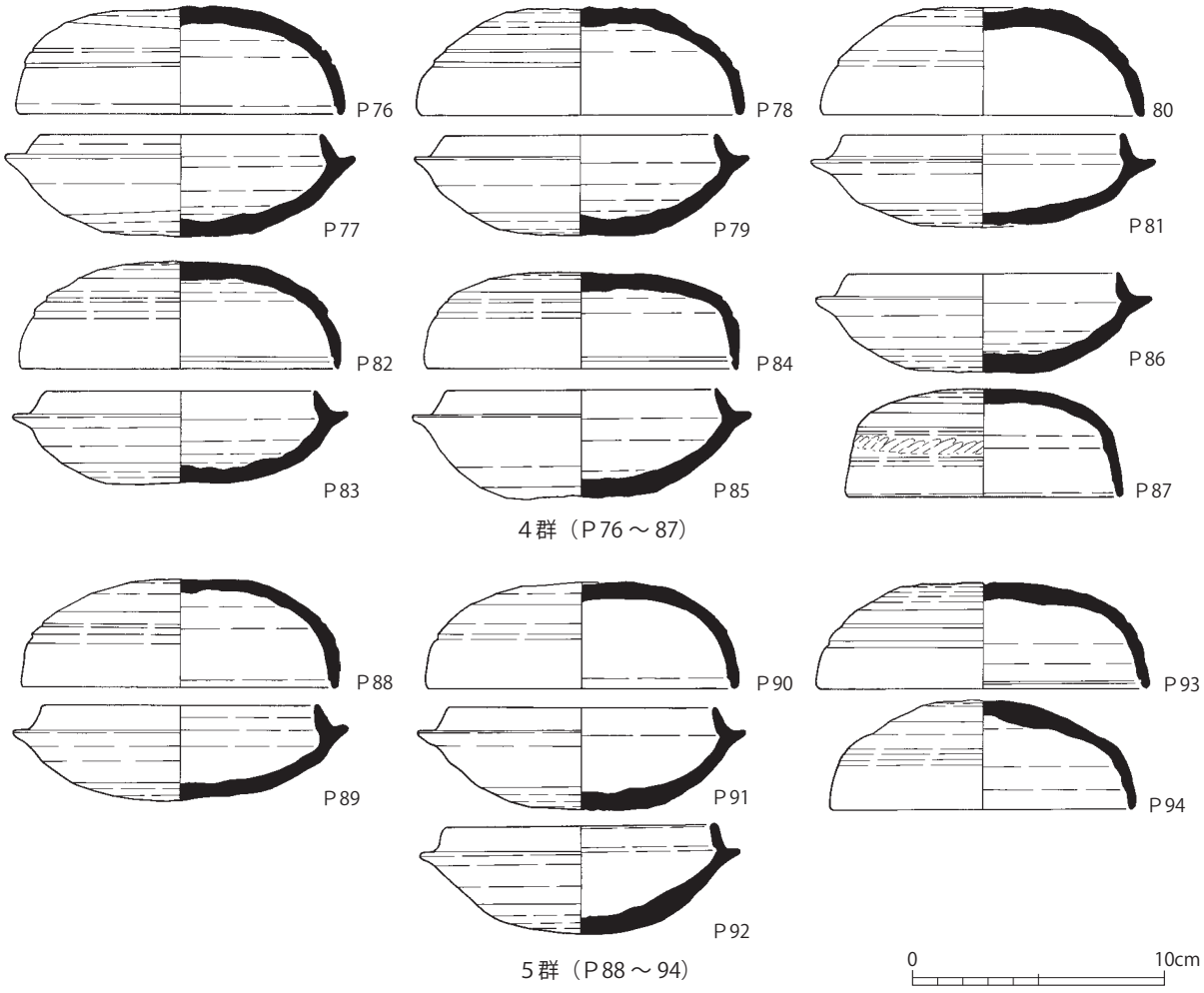
短頸壺蓋（Ｐ 87）　Ｐ 87 の肩部にヘラ記号があり，口縁部外面には刺突文が巡る。鉄錆が付いている。径がやや大きいが，短頸壺Ｐ 74 の蓋と判断した。

（６）　５群（第 67 図，図版 61）

５群はＢ石棺と右袖石との間から出土した。蓋杯２組，杯蓋２，杯身１である。

蓋杯（Ｐ 88 ～ 94）　Ｐ 88 と 89，Ｐ 90 と 91 は径と焼き色からセットと考えた。Ｐ 88 の天井部にはヘラによる擦痕がある。

（坂本豊治）



第 67 図　須恵器実測図（４・５群）（１：３）

註

（1）「金薄板」の用語は，永嶋正春氏の用例（第 5 章第 6 節）にならう。

（2）村上　隆 2001「東山古墳群から出土した耳環の分類と分析」京都府立大学文学部考古学研究室編『東山古墳群Ⅱ』中町文化財報告 25　中町教育委員会　237 ～ 239 頁

（3）早稲田大学経僧塚古墳発掘調査団 2010『武射　経僧塚古墳　石棺編　報告』

（4）前稿（橋本 2006）では，この目釘を，「目釘としての機能のみではなく，柄頭の装具を固定しつつ，端部が柄の佩表・佩裏に露出し，本来装飾的な効果をもっていた可能性が考えられる。」としたが，その後の調査により出土した柄頭に，鳩目金具が残り，この目釘と柄頭が直接結合しないことが確実となった。

（5）前稿では，目釘部分に柄頭が来るとの想定のもと，柄巻きの銀線の長さを本体に残る 60㎝のみとしていたが，その後の調査により，さらに銀線片が出土したこと，柄頭が明らかになり，目釘と結合しないことが確実となったため，前稿での記述を修正する

（6）吉田知史 2007「文様と形態からみた後期古墳出土鏡の編年」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第 4 冊　259 ～ 277 頁

第５節　遺物一覧表

１　青銅鏡

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	備　考
M1	第 43 図	玄室⑪層中	青銅鏡	珠文鏡		鈕に繊維

２　装身具

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	備　考
A1	第 44 図	玄室床面上面	装身具	金環		
A2	第 44 図	前室B石棺床面	装身具	銀環		B石棺のF－3ブロックから出土
A3	第 44 図	玄室床面上面	装身具	ガラス勾玉		
A4	第 44 図	前室床面	装身具	ガラス製丸玉		
A5	第 44 図	玄室床面上面	装身具	ガラス製小玉		
A6	第 44 図	玄室⑪層上面	装身具	金銅製鈴		
A7	第 44 図	玄室⑪層上面	装身具	金銅製鈴		
A8	第 44 図	玄室⑪層中	装身具	金銅製鈴		
A9	第 44 図	玄室⑪層上面	装身具	金銅製鈴		

３　大　刀

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	備　考
S1	第 45 図	玄室⑪層上面	大刀	倭装大刀		
S1－1～4	第 45 図	玄室⑪層中	大刀	鞘尻あるいは柄頭		
S2	第 46 図	玄室⑪層中	大刀	金銅装大刀		
S3	第 47 図	前室床面	大刀	圭頭大刀		
S3－1	第 47 図	前室⑩層上面	大刀	柄頭		大刀S３の柄頭，鋳造品
S3－2～9	第 34 図 第 36 図	前室床面	大刀	銀線		大刀S３の部品，須恵器内とB石棺のブロック内から出土

４　鉄　鏃

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	備　考
H1	第 48 図	玄室床面上面	鉄鏃	鉄鏃	あ群	柳葉形，撫関，約 39 個体
H2	第 48 図	玄室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H3	第 48 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H4	第 48 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H5	第 48 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H6	第 48 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H7	第 48 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H8	第 48 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H9	第 48 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H 10	第 48 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H 11	第 48 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H 12	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H 13	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H 14	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H 15	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H 16	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H 17	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群	長三角形，直角両関
H 18	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 19	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 20	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 21	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 22	第 49 図	玄室床面内	鉄鏃	鉄鏃	う群か	
H 23	第 49 図	玄室床面内	鉄鏃	鉄鏃	う群か	
H 24	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 25	第 49 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 26	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 27	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 28	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 29	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	備　考
H 30	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 31	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 32	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 33	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 34	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 35	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 36	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 37	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 38	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 39	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 40	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 41	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 42	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 43	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 44	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 45	第 50 図	玄室床面内	鉄鏃	鉄鏃	う群か	
H 46	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 47	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 48	第 50 図	玄室⑪層中	鉄鏃	鉄鏃	い群か	
H 49	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H 50	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H 51	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H 52	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H 53	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H 54	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H 55	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H 56	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H 57	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関
H 58	第 51 図	前室Ｂ石棺床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関，Ｂ石棺のＦ－５ブロックから出土
H 59	第 51 図	前室床面・Ｂ石棺床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関，前室床面とＢ石棺のＦ－４・５ブロックで接合
H 60	第 51 図	前室床面	鉄鏃	鉄鏃	う群	柳葉形，撫関

5　刀　子

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	備　考
K 1	第 52 図	前室床面	刀子	刀子		銅製柄縁金具をはめた鉄刀子
K 2	第 52 図	前室床面	刀子	刀子		木装の鉄刀子
K 3	第 52 図	前室床面	刀子	刀子		鹿角製柄に木製鞘をはめた鉄刀子

6　馬　具

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	備　考
B 1	第 53 図	前室床面	馬具	鞍	あ群	座金具銅製，八陵形
B 2	第 53 図	前室床面	馬具	鞍	う群	座金具銀装，栗形
B 3	第 53 図	前室床面	馬具	鞍	う群	座金具銀装，栗形
B 4	第 53 図	前室床面	馬具	鞍	い群	座金具鉄製
B 5	第 53 図	前室床面	馬具	鞍	い群	座金具鉄製
B 6	第 54 図	前室床面	馬具	鐙吊金具	あ群	
B 7	第 54 図	前室床面	馬具	鐙吊金具	あ群	
B 8	第 54 図	前室床面	馬具	鐙吊金具	う群	
B 9	第 54 図	前室床面	馬具	鐙吊金具	う群	
B 10	第 54 図	前室床面	馬具	鉸具	あ群	
B 11	第 54 図	前室床面	馬具	鉸具	う群	
B 12	第 54 図	前室床面	馬具	鉸具	う群	
B 13	第 55 図	前室床面	馬具	鏡板付轡	あ群	心葉形鏡板
B 14	第 56 図	前室床面	馬具	鏡板付轡	う群	花形鏡板
B 15	第 57 図	前室床面	馬具	素環轡	い群	鉸具造り立聞鏡板
B 16	第 58 図	玄室床面上面	馬具	杏葉	あ群	楕円形斜格子
B 17	第 58 図	前室須恵器Ｐ 19 の上	馬具	杏葉	あ群	楕円形斜格子
B 18	第 58 図	玄室床面上面	馬具	杏葉	あ群	楕円形斜格子
B 19	第 58 図	前室床面	馬具	杏葉	う群	花形
B 20	第 58 図	前室床面	馬具	杏葉	う群	花形
B 21	第 58 図	前室床面	馬具	杏葉	う群	花形
B 22	第 59 図	前室床面	馬具	辻金具	あ群	脚丸形
B 23	第 59 図	前室床面	馬具	辻金具	あ群	脚丸形
B 24	第 59 図	玄室床面上面	馬具	辻金具	あ群	脚丸形

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	備　考
B 25	第 59 図	玄室床面上面	馬具	辻金具	あ群	脚丸形
B 26	第 60 図	前室床面	馬具	辻金具	う群	脚方形
B 27	第 60 図	前室床面	馬具	辻金具	う群	脚方形
B 28	第 60 図	前室床面	馬具	辻金具	う群	脚方形
B 29	第 60 図	前室床面	馬具	辻金具	う群	脚方形
B 30	第 61 図	前室床面	馬具	雲珠	あ群	八脚，脚は丸形と方形が混在
B 31	第 61 図	前室床面	馬具	雲珠	う群	八脚，脚方形
B 32	第 62 図	前室床面	馬具	鋲具		
B 33	第 62 図	玄室床面上面	馬具	鞍?		
B 34	第 62 図		馬具	鋲留金具		
B 35	第 62 図	玄室床面内	馬具	飾金具		長方形
B 36	第 62 図	玄室床面内	馬具	飾金具		長方形
B 37	第 62 図	玄室床面内	馬具	飾金具		長方形
B 38	第 62 図	玄室床面上面	馬具	飾金具		長方形
B 39	第 62 図	玄室床面上面	馬具	飾金具		長方形
B 40	第 62 図	前室B石棺床面	馬具	飾金具		長方形，B石棺のB－11ブロックから出土
B 41	第 62 図	前室床面	馬具	飾金具		長方形
B 42	第 62 図	前室床面	馬具	飾金具		爪形
B 43	第 62 図	玄室床面上面	馬具	飾金具		爪形
B 44	第 62 図	前室床面	馬具	飾金具		爪形
B 45	第 62 図	前室床面	馬具	飾金具		爪形
B 46	第 62 図	前室床面	馬具	飾金具		爪形

7　土　器

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	口径（cm）	器高（cm）	備　考
P 1	第 15 図	1トレンチ⑤層	須恵器	子持壺				
P 2	第 15 図	1トレンチ⑤層	須恵器	子持壺				
P 3	第 15 図	1トレンチ⑤層	須恵器	甕				
P 4	第 15 図	1トレンチ②層	弥生土器	低脚杯				
P 5	第 15 図	1トレンチ③層	須恵器	壺		23.0		
P 6	第 15 図	1トレンチ②層	須恵器	長頸壺				
P 7	第 15 図	1トレンチ③層	土師器	高台付杯				
P 8	第 15 図	1トレンチ③層	土師器	高台付杯				
P 9	第 15 図	1トレンチ③層	土師器	杯				
P 10	第 15 図	1トレンチ③層	土師器	杯		10.3	3.1	
P 11	第 15 図	1トレンチ②層	陶磁器	皿				
P 12	第 15 図	1トレンチ②層	陶磁器	皿				
P 13	第 15 図	6トレンチ①層	須恵器	壺あるいは横瓶		22.2		
P 14	第 15 図	6トレンチ⑨層	須恵器	甕				
P 15	第 15 図	6トレンチ⑨層	埴輪	円筒埴輪				
P 16	第 15 図	6トレンチ⑦層	土師器	高台付杯				
P 17	第 15 図	6トレンチ⑦層	土師器	高台付杯				
P 18	第 15 図	2トレンチ表採	須恵器	子持壺				
P 19	第 15 図	7トレンチ⑤層	須恵器	甕		37.2		
P 20	第 15 図	7トレンチ③層	須恵器	甕				
P 21	第 15 図	7トレンチ⑤層	須恵器	甕				
P 22	第 15 図	7トレンチ⑤層	須恵器	甕				
P 23	第 15 図	7トレンチ⑤層	須恵器	甕				
P 24	第 15 図	7トレンチ③層	須恵器	子持壺				
P 25	第 15 図	7トレンチ③層	須恵器	子持壺				
P 26	第 15 図	7トレンチ③層	須恵器	高台付杯		16.4	6.5	
P 27	第 15 図	7トレンチ③層	須恵器	杯		13.4	3.3	
P 28	第 18 図	閉塞部Ⓚ層	須恵器	甕				
P 29	第 18 図	閉塞部Ⓚ層	須恵器	甕		41.8	（66.3以上）	
P 30	第 18 図	閉塞部Ⓚ層	須恵器	子持壺				
P 31	第 18 図	閉塞部Ⓚ層	須恵器	子持壺				
P 32	第 18 図	閉塞部Ⓚ層	須恵器	子持壺		14.0	52.5	
P 33	第 18 図	閉塞部Ⓚ層	埴輪	円筒埴輪				
P 34	第 18 図	閉塞部④層	土師器	高杯				
P 35	第 18 図	閉塞部⑤層	土師器	小皿				
P 36	第 62 図	玄室床面上面	須恵器	杯蓋	1群	12.8	3.9	P 37 とセット
P 37	第 64 図	玄室床面上面	須恵器	杯身	1群	11.6	3.6	P 36 とセット
P 38	第 64 図	玄室床面上面	須恵器	杯蓋	1群	12.3	4.5	
P 39	第 64 図	玄室床面上面	須恵器	直口壺	1群	9.0	12.2	平底
P 40	第 64 図	玄室床面上面	須恵器	𤭯	1群	10.4	13.3	
P 41	第 64 図	玄室床面上面	須恵器	𤭯	1群	14.8	18.6	

番　号	挿　図	出土地・層位	種　別	器　種	分　類	口径（cm）	器高（cm）	備　考
P 42	第 64 図	玄室床面上面	須恵器	杯蓋	1群	13.2	4.2	P 43 の蓋
P 43	第 64 図	玄室床面上面	須恵器	壺	1群	21.4	47.8	
P 44	第 64 図	玄室床面上面	須恵器	横瓶	1群	（17.8 以上）	（40.8 以上）	
P 45	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯の蓋	2群	13.5	4.0	P 46 とセット
P 46	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯	2群	14.6	12.8	2段3方向三角形透かし P 45 とセット
P 47	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯の蓋	2群	13.4	4.0	P 48 とセット
P 48	第 65 図	玄室⑪層上面	須恵器	有蓋高杯	2群	13.9	12.2	2段3方向三角形透かし P 47 とセット
P 49	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯の蓋	2群	13.1	4.5	P 50 とセット
P 50	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯	2群	14.1	12.9	2段3方向三角形透かし P 49 とセット
P 51	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯の蓋	2群	13.4	4.3	P 52 とセット
P 52	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯	2群	11.9	14.4	2段3方向三角形透かし P 51 とセット
P 53	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高坏の蓋	2群	12.0	4.2	P 54 とセット
P 54	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯	2群	13.4	10.1	1段3方向三角形透かし P 53 とセット
P 55	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高坏の蓋	2群	12.0	3.9	P 56 とセット
P 56	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯	2群	13.3	10.9	1段3方向三角形透かし P 55 とセット
P 57	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯の蓋	2群	12.3	4.3	P 58 とセット
P 58	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	有蓋高杯	2群	13.9	11.0	1段3方向三角形透かし P 57 とセット
P 59	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	無蓋高杯	2群	10.2	15.1	2段3方向上段は線状 下段は三角形透かし
P 60	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	杯蓋	2群	12.6	4.1	P 61 とセット
P 61	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	杯身	2群	13.3	4.2	P 60 とセット
P 62	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	台付有蓋長頸壺の蓋	2群	8.9	2.8	P 63 の蓋
P 63	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	台付有蓋長頸壺	2群	7.8	23.0	P 62 とセット
P 64	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	台付有蓋椀の蓋	2群	9.6	2.4	P 65 の蓋
P 65	第 65 図	玄室床面上面	須恵器	台付有蓋椀	2群	8.7	12.4	P 64 とセット
P 66	第 66 図	玄室床面上面	須恵器	杯蓋	3群	12.8	4.6	P 67 とセット
P 67	第 66 図	玄室床面上面	須恵器	杯身	3群	13.8	4.3	P 66 とセット
P 68	第 66 図	玄室A石棺敷石上面	須恵器	杯蓋	3群	11.8	3.7	
P 69	第 66 図	玄室床面上面	須恵器	杯身	3群	13.5	4.2	壺（P 70）内から出土
P 70	第 66 図	玄室床面上面	須恵器	壺	3群	19.0	52.5	壺内から杯身（P 69）が出土
P 71	第 66 図	玄室床面上面	須恵器	横瓶	3群	15.8	34.5	
P 72	第 66 図	玄室⑪層中	須恵器	杯身	その他	13.2	3.7	
P 73	第 66 図	玄室A石棺床面か	須恵器	杯身か	その他	13.6		取り上げず
P 74	第 66 図	玄室A石棺奥石上面	須恵器	短頸壺	その他	7.8	10.0	P 87 とセット
P 75	第 66 図	玄室⑪層上面	須恵器	甕	その他	12.2	13.7	底部にヘラ記号
P 76	第 67 図	前室床面	須恵器	杯蓋	4群	12.8	4.3	P 77 とセット
P 77	第 67 図	前室床面	須恵器	杯身	4群	13.8	4.1	P 76 とセット
P 78	第 67 図	前室床面	須恵器	杯蓋	4群	12.5	4.3	P 79 とセット
P 79	第 67 図	前室床面	須恵器	杯身	4群	13.2	4.0	P 78 とセット
P 80	第 67 図	前室床面	須恵器	杯蓋	4群	12.6	4.2	P 81 とセット
P 81	第 67 図	前室床面	須恵器	杯身	4群	13.6	3.7	P 80 とセット
P 82	第 67 図	前室床面	須恵器	杯蓋	4群	12.6	4.3	P 83 とセット
P 83	第 67 図	前室床面	須恵器	杯身	4群	13.2	3.7	P 82 とセット
P 84	第 67 図	前室床面	須恵器	杯蓋	4群	12.4	3.8	P 85 とセット
P 85	第 67 図	前室床面	須恵器	杯身	4群	13.4	4.3	P 84 とセット
P 86	第 67 図	前室床面	須恵器	杯身	4群	13.3	3.9	
P 87	第 67 図	前室床面	須恵器	短頸壺の蓋	4群	10.8	4.2	P 74 の蓋
P 88	第 67 図	前室床面	須恵器	杯蓋	5群	12.5	4.3	P 89 とセット
P 89	第 67 図	前室床面	須恵器	杯身	5群	13.3	3.8	P 88 とセット
P 90	第 67 図	前室床面	須恵器	杯蓋	5群	12.0	4.2	P 91 とセット
P 91	第 67 図	前室床面	須恵器	杯身	5群	13.0	4.1	P 90 とセット
P 92	第 67 図	前室床面	須恵器	杯身	5群	12.8	4.3	
P 93	第 67 図	前室床面	須恵器	杯蓋	5群	13.0	4.2	
P 94	第 67 図	前室床面	須恵器	杯蓋	5群	11.8	4.3	
P 95	第 33 図	玄室床面内	須恵器	杯蓋	1群			取り上げず
P 96	第 33 図	玄室床面内	須恵器	杯身	1群			取り上げず

第６節　葬送過程

ここでは，石室内の遺物出土状況から中村１号墳の葬送過程を復元してみたい。完掘していないため，推定部分が多くなるが，土砂と遺物の関係から大まかな葬送の流れは推定できる。そこで，遺物の出土位置を第５表，それをもとにした葬送過程を第６表にまとめた。

１　埋　葬

初葬は玄室の家形石棺（Ａ石棺）へ，追葬は前室の石棺（Ｂ石棺）へ行ったと考えられる。埋葬に伴って，石室内には多くの副葬品が供えられている。須恵器の杯蓋はほぼ同型式（出雲４期・TK209 か）であり，同時に埋葬された可能性もあるが，玄室から出土した大刀と馬具は前室から出土したそれらよりは古い型式的特徴をもつ。したがって，本稿では短期間に別々に埋葬されたと考え論を進めていきたい。Ａ石棺あるいはＢ石棺への埋葬終了後，自然石による閉塞が行われる。その際，石室の外の閉塞部では，閉塞の儀礼が行われた。その痕跡が，閉塞石上面で出土した毀損された甕Ｐ 28・29 と出雲型子持壺Ｐ 30 ～ 32 であろう。

２　石室への進入１

そして，埋葬後しばらくして，石室内への再進入があったことが以下のことから推定できる。まず，金環Ａ１やガラス勾玉Ａ３，ガラス小玉Ａ５が，Ａ石棺の外にかき出された状態で出土していることである。これと同時に遺体を棺から出したことも考えられる。また，棺内の他の副葬品の一部も取り出され，奥壁とＡ石棺の間に再配置されたのであろう（鏡Ｍ１や鈴Ａ８，須恵器Ｐ 72，大刀Ｓ１の鞘尻あるいは柄頭，大刀Ｓ２）。そして，「鉄鏃い群」を毀損し，奥壁とＡ石棺の間に散在させている。左袖石付近では「馬具う群」の毀損・ばら撒き（再配置）が行われる。この上に，壺Ｐ 43 と横瓶Ｐ 44 を据え置いている。これらを据え置く前に，須恵器Ｐ 95・96 や馬具Ｂ 35 ～ 37 や鉄鏃 H22, 23,45 を玉砂利内に埋めている。以上の行為を一括して「玄室進入１」とする。壺Ｐ 43 と横瓶Ｐ 44 は，玄室進入１に伴って配置されたのであろう。Ａ石棺への追葬の有無は，未調査のため不明であるが，時期差がある副葬品が棺外にないため追葬はなかったと判断したい。

前室でも，Ｂ石棺の副葬品の出土状況から判断して，副葬品が取り出されたと考えられる。棺内のリン濃度の分布から，埋葬時は正常な状態で遺体が安置された後，骨化後に人骨が集骨された可能性が高い（第５章第９節参照）。棺内にその後の追葬に伴う副葬品がないため，Ｂ石棺へ埋葬は１回のみと判断できる。集骨と同時に，「鉄鏃う群」や「馬具う群」の毀損・再配置が行われ，須恵器４・５群がそれらの上に置かれた。これらの須恵器のいくつかは棺内にあったものであろう。そして，大刀Ｓ３が左袖石付近に立て掛けられる（大刀Ｓ３の柄の銀線が棺内から出土している。当初は大刀Ｓ３が柄頭を奥壁に向けた状態で棺内にあったのであろう）。これらの行為を一括して「前室進入１」とする。「鉄鏃う群」や「馬具あ群」の分布状況から玄室進入１と前室進入１の行為は同時期に行われた可能性が高く，これらを「石室進入１」とする。

第５表　中村１号墳の石室内遺物出土位置

玄　室

層位	A石棺	A石棺外
基盤層	掘り込んで築造	
床面内		鉄鏃う群・馬具飾金具・須恵器1群
床面上面	須恵器P 73？	金環A１・ガラス製品A３・A５・鉄鏃あ・う群・馬具あ群・須恵器1～3群
土砂⑪層中	石棺蓋の破壊・反転	鏡M１・鈴A８・大刀S１鞘尻・大刀S２・鉄鏃い群・須恵器P 72
土砂⑪層上面		大刀S１・鈴A６・A７・A９須恵器P 48・P 75

前　室

層位	B石棺	B石棺外
盛土⑬層上面	盛土に設置	
床面	銀環・大刀３銀線	大刀S３・鉄鏃う群・馬具あ～う群・刀子・須恵器４群・５群
土砂⑩層上面	銀環A２・馬具飾金具B 40	大刀S３柄頭

第６表　中村１号墳の葬送過程

玄室の状況

埋　葬	A石棺内	遺体の埋葬 ガラス製品・金環 鏡の副葬 鈴の副葬 大刀S１・S２の副葬 須恵器の副葬
	A石棺外	馬具あ・い群の副葬 鉄鏃あ・い群の副葬 須恵器の副葬

⬇

進入１（儀礼）	A石棺から人骨を出す（金環・ガラス玉A５が棺外に） 鏡M１，鈴A８，大刀S１鞘尻あるいは柄頭，S２を取り出して奥壁と石棺の隙間に入れる，あわせて鉄鏃い群の毀損・再配置 馬具い・う群の毀損・再配置 左袖石付近で，壺P 43・横瓶P 44 を据え置く（馬具帯飾・鉄鏃う群の毀損後）

土砂⑪層 ⬇

進入２（儀礼）	須恵器P 48・P 75 が壊れる 大刀S１の立て掛け，鈴A６・A７・A９の再配置 A石棺蓋を割る，反転させる 須恵器短頸壺P 74 をA石棺奥石の上に置く 石棺前に壺P 70・横瓶P 71 を置く

同時期か

前室の状況

埋　葬	B石棺内	遺体の埋葬 銀環 大刀S３，刀子の副葬 須恵器の副葬
	B石棺外	馬具う群の副葬 鉄鏃う群の副葬

⬇

進入１（儀礼）	鉄鏃う群の毀損・再配置（左袖石，B石棺内，玄室） 大刀S３と須恵器４群を左袖石付近に再配置 須恵器５群を右袖付近に再配置（馬具あ群の再配置後） 刀子・馬具う群の再配置

土砂⑩層 ⬇

進入２（儀礼）	S３柄頭・馬具B 40 を再配置

同時期か

３　石室への進入２

石室進入１の後，玄室に土砂⑪層，前室に土砂⑩層が堆積する。その後さらに次のような一連の行為があった。まず，Ａ石棺の蓋に打撃（確実なのは１か所）を加えて，破壊し，蓋を反転する。この行為でＡ石棺の使用を不可能にする。そして，須恵器短頸壺Ｐ 74 をＡ石棺の奥石の上へ置く。Ｐ 74 には錆が付着していることから，これは大刀か馬具などの金属の近くにあったと考えられる。そして，棺横口を塞ぐように壺Ｐ 70 と横瓶Ｐ 71 を置く。また，玄室奥壁とＡ石棺の間に大刀Ｓ１を土砂⑪層の上に立て掛けている。これは，土砂上にあることから再配置と考えられる。土砂⑪層の上から出土した金銅製鈴Ａ６・７・９もばら撒かれた（再配置）。須恵器Ｐ 48・Ｐ 75 の破片が土砂⑪層上にあり，この進入の際に壊れた可能性が高い。これらの行為を一括して「玄室進入２」とする。壺Ｐ 70 と横瓶Ｐ 71 は「玄室進入２」に伴って配置されたのであろう。この進入も埋葬に伴う行為ではない。

前室では，大刀Ｓ３の柄頭や，馬具Ｂ 40 などが土砂⑩層の上面で出土しており，これらも再配置と考えられる。これらの行為を一括して「前室進入２」とする。この進入も埋葬に伴う行為ではないであろう。「玄室進入２」と「前室進入２」も同時期の可能性も考慮し，これらを合わせ「石室進入２」とする。ただし，土砂⑩・⑪層が同時期に堆積したという明確な根拠はないが，どちらも土砂の最下層であることを重視したい。

以上のように中村１号墳の葬送過程を推定した。埋葬人数は２人。埋葬後，しばらくして死者の少なくとも２回の石室への進入があったと考えられる。つまり，石室には少なくとも４回の進入があったであろう。埋葬後の進入１は，遺体毀損および副葬品の毀損・再配置，進入２はＡ石棺の毀損（破壊）を目的に進入したと考えられる。これらの毀損・再配置の理由については第６章３節で検討している。

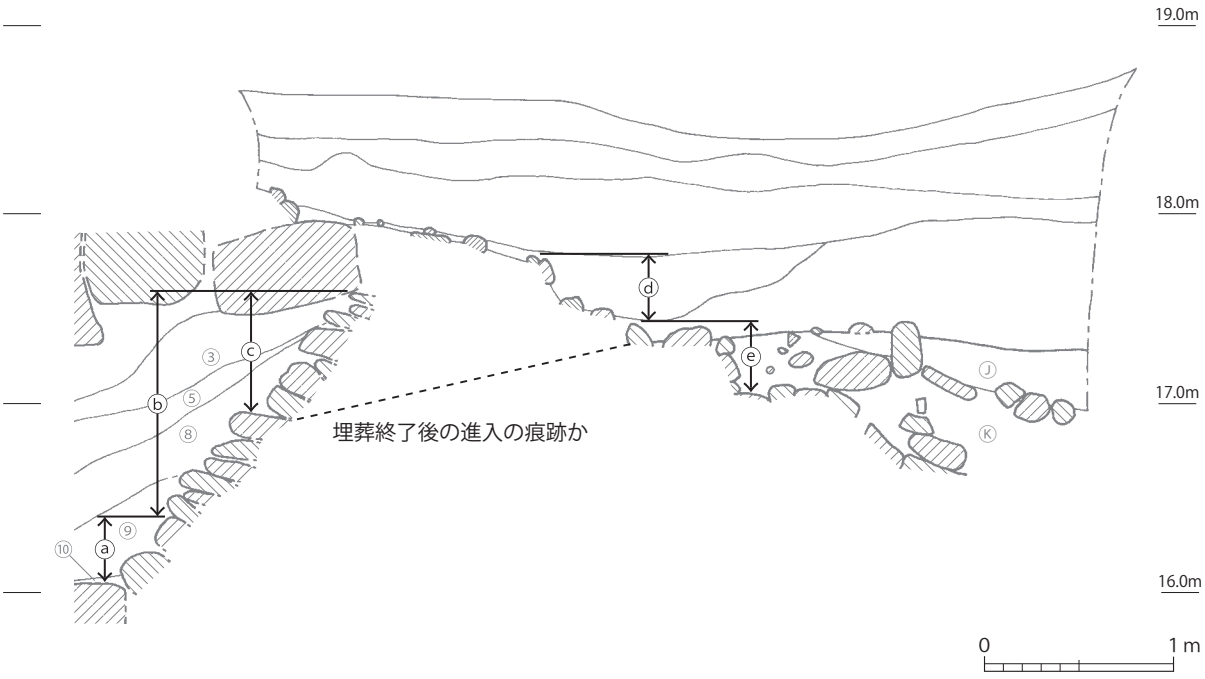
４　閉塞石からみた埋葬終了後の進入痕跡

以上のような複数回にわたる石室への進入は，閉塞に何らかの痕跡を残しているであろう。このことについて，以下に検討する（第 68・69 図）。

中村１号墳の閉塞部の上部は，後世の削平などによって残存しておらず，また，残存部も未調査部分があるため進入の総回数を検討することはできない。かろうじて残存していた前庭部の埋め戻し土Ⓙ，Ⓚ層には進入痕跡は見当たらない（ただし，この部分が最終進入時に埋められた可能性もある）。

ここで，進入痕跡が残っている可能性がある閉塞石を検討してみたい。石室内側の閉塞石をみると，積み方が変化している部分が２か所あることに気づく。最下部には角が丸い礫が積まれている（これをⓐとする）が，それより上は扁平で角がある礫（これをⓑとする）が積まれていて，石の種類に変化がある。そして，標高 16.9 m付近で段（若干の平坦面）がある。この段差から羨道天井石までは 50 ～ 65cm あり，人が横這いになって通れるほどの高さがある（これをⓒとする）。ⓐとⓑについては，埋葬に伴う可能性があるだろう。ⓒについては，最終の進入段階に伴うものの可能性があろう（これ以上狭くなると石室への進入は困難）。

第 68 図　閉塞部から石室の測量図（1 ：60）



第 69 図　埋葬終了後の進入の痕跡（１：40）

次に石室内の土砂と閉塞石の関係について検討する。閉塞石と接する土砂③・⑤・⑧・⑨層は「前室進入２」の後に堆積しているので，土砂と閉塞石の対応はない。「前室進入２」に対応する土砂⑩層の上面は，閉塞石の最下部に接している。閉塞石のⓐの上部には対応しない。したがって，石室内土砂と閉塞石の対応関係から石室進入の痕跡を検討することはできない。

次に，石室外側の閉塞石を検討してみたい。標高 17.4 m（これから 17.8 mまでをⓓとする）と 17 m（これから 17.4 mまでをⓔとする）の２か所に段（平坦面）が確認できる。前庭部の埋め戻し土から判断すると，ⓔからの最終進入は推定しにくい。したがって，石室内部の最終進入口と考えられるⓒと対応する可能性が高いのはⓓであろう。つまり，埋葬終了後の進入時（石室進入２）には，石室築造時の前庭部は埋め戻されているようだ。そして，新たに斜め方向に墓道を掘削し，ⓒ～ⓓの閉塞石を外して石室へ進入したことが推定できる[(1)]。そうすると，前庭部埋め戻し土のⓀ層から出土した須恵器は「石室進入１・２」の時点ではなく，Ａ石棺あるいはＢ石棺への埋葬後すぐに配置されたと考えられる。

５　まとめ

本項では，中村１号墳の葬送過程を推定した。葬送は埋葬⇒閉塞儀礼⇒石室進入１⇒石室進入２の流れで行われていた。また，閉塞部の検討から，石室進入２では，新たに斜め方向に墓道を掘削し，閉塞石の上部（ⓒ～ⓓ）を外して石室へ進入したことを推定した。

以上のように，中村１号墳は，石室の内外で葬送過程がわかるのである。

（坂本　豊治）

註

（1）追葬時等の進入については，岩松保の研究がある。岩松は，古墳時代後期の横穴と横穴式石室の追葬時等の進入は，最低限しか開口せず，上位から下位へ滑り込むととし，この作法が凡日本的に執り行われたと指摘している。

参考文献

岩松　保 2005「黄泉の国への通路」『待兼山考古論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学友の会　609 ～ 625 頁

岩松　保 2010「横穴系埋葬施設の構造と黄泉国の配置－地下式横穴墓の閉塞・開口方法を通じて－」『遠古登攀－遠山昭登君追悼考古学論集』『遠古登攀』刊行会　129 ～ 144 頁

第５章　保存処理と自然科学分析

第１節　石室内遺物の取り上げ

１　石室内遺物の取り上げ

石室内遺物の取り上げは，単体であるものや容易に取り上げられるものについては，調査担当者が行った。特に，取り上げの際に壊れそうなものや，遺物が重なりあっているものについては，島根県教育庁埋蔵文化財調査センター保存科学担当（当時）の澤田正明氏に依頼し，取り上げをおこなった。以下に，それらの特別な方法で取り上げた遺物について，概要を記す（写真１）。　（坂本豊治）

２　珠文鏡Ｍ１の取り上げについて

珠文鏡Ｍ１はＡ石棺と奥壁の間から，鏡面を上にして出土したが，亀裂の有無など詳細な観察ができない状況であった。普通，脆弱遺物を土ごと取り上げるには発泡ウレタンが利用される。これは２液を混ぜ合わせ攪拌することで数十倍の体積に膨らむ薬剤で，硬化後は軽量で扱いやすい。そこで，発泡ウレタンで鏡の表面を型取りし，固定する方法を採った。発泡ウレタンの流し込みに際して，周囲へ流出し他の副葬品が汚染されることを防ぐために，遺物周辺も紙タオルとアルミホイルで養生を行った。２液の反応が進んで粘度が上がってから流し込み，段ボールの板で軽く抑えて密着させた。そして，硬化後に鈕の厚みを考慮した深さにパレットナイフを差し込み，発泡ウレタンの型で鏡面を抑えながら取り上げた。

３　大刀Ｓ１の取り上げについて

大刀Ｓ１の木質は，刀身中程から柄へかけて残っており，本体に薄く固化した状態であった。検出途中から，土中の切先側には多量の木質があると予想された。通常，金属遺物に付着する木質は乾燥している場合が多いので，アクリル樹脂を滴下し強化する。Ｓ１の場合，石室内の湿度が高く水分を多く含んだ木質のため，現地で非水系アクリル樹脂を浸み込ませて強化することができない。そこで，木質を保護しながら，周囲の土を大刀と一緒に取り上げ，作業場へ持ち込んで処置を施すことにした。今回も発泡ウレタンで固定する予定だったが，Ｓ１はＡ石棺と奥壁の間にあり，幅が狭く奥行きがある場所のため作業性が悪い。また，付近には他の遺物が残っていて，硬化前の薬剤が流出し他への汚染などが懸念される。よって，医療用ギプス（スコッチキャスト）を使い本体を包み込む方法を採った。

Ｓ１は峰側のみ切先まで検出されていたので，予想される鞘の厚さより少し広めに土を残して，両側に溝を掘った。次に，ギプスの糊が遺物に直接接触しないようにアルミホイルで養生した。このときアルミホイルに意図的な皺をつけて包むことで，形状にあわせて固定できる。ギプスは巻き付けることはできないので，15 ～ 20㎝の長さに切り，張り子のように積層した。固化後，パレットナイフ

で土の間に切り込みを入れて取り上げた。作業場で不要な土を取り除き，ゆっくりと乾燥させた後，木質にはアクリル樹脂（パラロイド B72/ キシレン・アセトン５% 溶液）をスポイトで滴下し強化した。

４　馬具の取り上げについて

前室と羨道の境から出土した馬具は，折り重なって石の上に乗っていたので，一括して取り上げることにした。薬剤が遺物に直接接触しないように紙タオルとアルミホイルで養生した後，吹きつけタイプの発泡ウレタンで表面を覆い，遺物と石の間にステンレスの板を差し込んで取り上げた。その後，取り上げたままの状態で X 線撮影し，出土状況図を作成した。

（島根県立古代出雲歴史博物館　澤田正明）

１　珠文鏡Ｍ１の表面に発砲ウレタンを流し込む　２　Ｍ１を取り上げ後，余分な土を除去する
３　大刀Ｓ１を養生し，両側に溝を掘る　４　Ｓ１をギプスで包んだ様子　５　アクリル樹脂でＳ１の木質を強化する
６　馬具に発砲ウレタンを吹きつける　７　作業風景

写真１　遺物取り上げ状況

第２節　中村１号墳出土金属製品等の保存処理及び修復の記録

１　はじめに

飛鳥工房では中村１号墳の金属製品について，平成 19 年度，20 年度の２年間にわたり遺物保存の処理作業と修復作業を実施した。遺物の保存処理では，遺物に使われている素材を発掘後の環境下で安定させる処理（脱塩処理）と本体を強化する処理（樹脂含浸）をおこなった。また修復作業では，錆除去，断片接合，欠損部の補填，補彩等の補強を兼ねた造形作業を主とした。保存処理及び修復対象遺物は装飾付大刀，柄頭，刀子，馬具，鈴，鏡，耳環，ガラス製品等があり，平成 19 年度に 28 点，20 年度に 35 点の計 63 点である。

これら遺物は，遺物毎に整然と断片別分類がなされていた。ほとんどの遺物が泥土を被った状態で，遺物によっては泥土が鉄分を吸って錆土化し，表層面の見分けが困難な遺物もあった。また，経年変化により傷んだ遺物は，製作当初の精巧な造りを錆が厚く覆い金属素材の持つシャープさを失っていた。当古墳出土の金属製品のように泥土と錆びに遺物形状が害されている場合，遺物当初の表層確認にはＸ線写真から情報を得る必要がある。当修理では，出雲市文化財課から遺物のＸ線写真を借用し，修理方針と実処理に活用した。

２　修理対象遺物と保存処理

本稿では，保存処理及び修復を施した遺物の保存処理施工記録を第１・２表にまとめた。保存処理は，金属製品の錆の進行を防ぎ，遺物が安定した状態を保つ為の処置を施した。副葬品個々の情報は，土中の環境や経年とともに薄れてしまう。製作当初の僅かな情報に出会うためには，修理作業を通して遺物の注視観察を継続する必要がある。遺物が受けた劣化ダメージに沿った処理方法の選択と充分な施工期間を充てることが，遺物素材の安定に繋がるものと判断した。処理施工において基本としたことは，本体及び断片の個別養生包布と可視可能なガラス素材減圧容器での脆弱な遺物の単品処理，もう１点は雨天時の処理作業を控えることであった。個々それぞれに保存処理上の注意点があるなかで，特に装飾大刀（Ｓ１）については，３．修復の記録の④で詳細を記した。また，保存処理によって失われる素材感，例えば木質，繊維，革については今後の課題である。なお保存処理実施に当たり，脱塩安定処理の薬剤と浸漬期間，強化処理用のアクリル樹脂濃度と浸漬時間等の設定は，金属の厚さ，ヒビや破損の有無，Ｘ線写真の情報などを基準にして適宜選択した。

３　修復の記録

修復については，保存処理による遺物強化終了後，仕様書に沿って錆の除去部分，断片接合の可否，補填箇所，細部注意箇所，補彩等について市担当者と個別の検討をおこなった。保存処理と修復の作業手順は，各遺物の損傷状態により作業内容が前後した。全修理工程において，修復段階を意識しての作業が求められる。例えて言うならば，断片の接点が小さく，見失う恐れがあるものについては，

処理の前に修復手当てが必要であり，処理液浸漬中にはずれる可能性が高い遺物については仮止め養生手当てが，また修復後に保存処理が必要になるなど，変化してゆく遺物を観察しながら，遺物の素材安定と製作当初の形状に近づける修復を目標とした。修理遺物 63 点のなかで，特徴的なものや修復に検討を重ねたもの下記 10 点（第１・２表，網掛け）について作業手順などを写真と共に報告する。写真は修理前と修理中を主に掲載し，第 11・12 図の装飾大刀２点（Ｓ１，Ｓ２）の修理図は作業中に透明なビニールフィルムに透写記録したものを使用した。

（１）　Ｍ１珠文鏡
（２）　Ａ３ガラス製品
（３）　Ａ６鈴及びＡ９鈴断片
（４）　Ｓ１装飾大刀
（５）　Ｓ２装飾大刀
（６）　Ｓ３－１柄頭
（７）　Ｂ 13 －１・２鏡板
（８）　Ｂ 15 素環轡
（９）　Ｂ 16 杏葉
（１０）　Ｂ 30 雲珠

（１）　Ｍ１珠文鏡（写真１）

径 75㎜。薄くて繊細な造りである。表裏両面に泥土が付着しており，鏡面には群青色の地肌を地図様にみせ，鏡背面は土が被って文様の凸部から形状が部分的にうかがえる。鏡背と鈕孔内部には紐の残存が認められた。泥土が孔を塞ぎ辛うじて繊維の崩れを防止していた。泥土の除去（クリーニング）作業は，顕微鏡下で試みたが，繊維が切れる可能性が高いため，繊維の現状を顕微鏡写真（写真１－２）に残して鏡本体の保存を優先することとした。

Ｘ線写真から，鏡本体にひび割れが生じていることや錆化の進んでいるエリアの情報を得ることができた。保存処理作業では，わずかに凸面の鏡面に合わせた金属製架台を用いて鏡を固定した。鏡本体の薄さとヒビの亀裂痕跡を考慮して強化用樹脂の濃度を調整し，減圧による樹脂の含浸処理回数を増やした（写真１－３）。泥土の除去作業も小範囲ずつ回数を重ねておこなった。別に保存されていた極小の鏡剥落片を周縁部に接合した。仕上げ安定の為に表裏に樹脂コーティングをし，余分な樹脂を拭き取った（写真１－４）。

（２）　Ａ３ガラス製品（写真２）

当工房への搬入時，土壌とともにラップに包まれたガラス製品は，形ある製品が劣化により細片化していく段階であった（写真２－２）。土が付着しているものの透明感のある淡青緑色の砕片であり，その中から形を追うことが出来る破片を検出し接合した（写真２－３）。ガラス片は脆く，薄片となって剥がれ易いためピ ンセットで掴むのも難しかった。浸透性，透明性を考慮した樹脂を選択し接合した。部分的に修復された製品は，その形状から勾玉片と考えたい。接合復元された表面の色調は，劣化と土汚れなどによって白く濁った青緑色を呈していた。最後に，土に混ざったガラスの薄片の分類をした（写真２－４）。

（３）　Ａ６鈴及びＡ９鈴断片（写真３）

Ａ６鈴（写真３－１）は，欠損部分はあるものの鈴の形状を充分保っていた。欠失部分の修復には，

不織の薄いガラス繊維を芯材として鈴の損傷部内側から張り込みをした（写真３－２）。張り込みには作業上速硬化性のエポキシ系接着剤を使用し，厚み補填用には硬化時間はかかるが硬化度の高いエポキシ樹脂を選択した。補填にはシリカマイクロバルーンと青銅色の顔料を混ぜた樹脂を使用した。硬化後に表面仕上げを施して修復部分が明確になるように鈴表層レベルを僅かに下げ，修復部分を単色補彩仕上げとした。最後に樹脂コーティングを施し，充分な乾燥をおこなった（写真３－４右）。

Ａ９鈴は，破片７片，小片および極小片計 32 片。おもて面は金銅色をみせている破片もあるが，厚みは極薄，保存処理後でも脆く欠けやすい状態であった。接合破片の検出，接着作業には顕微鏡を使用した。製作当初の鍍金研磨痕跡が接合の決め手となるものもあった。極小片にいたるまで接合の可能性を信じて接合破片検出を試み，鈴の形状に近づけるように充分な時間を当てた（写真３－３，４左）。

（４）　Ｓ１装飾大刀（写真４，第１図）

長さ 970㎜。刀身に折損箇所はない。大刀表裏には鞘木の残存部分が有り，佩裏（左側面）には鞘木上に装飾金銅板残欠部分が２箇所確認されていた。金銅板表層を緑青錆が覆い，大刀全面には泥土が付着していた（写真４－１）。工房搬入時，梱包用の薄葉紙の汚れから錆化の進行が確認された。最も不安に感じていたのは，鞘木上に残存する金銅板であった。金銅板に残された情報（残存位置と金銅板に施された装飾）を失わない保存処理と修復方法が求められた。保存処理作業では，大刀の表裏を返すことが危うく，作業性の面で脱塩処理（鉄錆の安定を図るためのクリーニングと薬液長期浸漬）の徹底には厳しいものがあった。修理完了後，その不安定さは保存環境を保つことで辛うじて保たれていたのだが，修理後に再度保存処理を必要とする状態となった。その状態とは，樹脂で修復された亀裂部から再び滲みだす錆汁，それらが及ぼす形状変化であった。結果的には保存処理を繰り返すことで遺物を安定状態に導くことができた。

◎Ｓ１装飾大刀　総修理工程

イ　修理前（保存処理）の準備作業

①大刀の現状記録（第１図）　②脆弱部分の仮止め　③亀裂部分を中心にクリーニング　④金銅板部分の養生　⑤形状保全のため鉄製架台に大刀を固定　⑥全体を保護布で養生

ロ　錆化安定の為の保存処理工程（脱塩作業）

①減圧下で１％水酸化リチウム・エチルアルコール溶液を注入し，常圧にもどし 40 日間浸漬状態とした。②処理期間中は数回薬液から上げて金銅板の変化を確認した。③処理期間経過後，温純水で２回洗浄し乾燥後再度エチルアルコールで２回洗浄した。④木質部分の観察をしつつ乾燥をおこなった。

ハ　修復（金銅板の錆除去作業１）

顕微鏡下で刷毛，筆により表層の錆を除去した。

ニ　強化の為の保存処理工程（強化作業１回目）

本体を養生のため再度保護布で覆った。減圧下で 30％アクリル樹脂パラロイド NAD － 10・ナ

フサ溶液を含浸し，12 時間の浸漬を経た後，溶剤ナフサで洗浄した。充分な乾燥後，強化状態の確認をおこなった。鞘木である木質部の強化は不十分であった。

ホ　木質部（鞘木）の保存処理（木質強化作業）

鞘木は，長年水分や鉄錆を吸い，泥土を被り，加えて鞘木表層には装飾の為の金銅板（２箇所）が残存していた。金銅板を保存するためにも木質部を固めて強化する必要があった。本体の強化処理にも影響を及ぼさない樹脂プレポリマー PSNY － 6 を選択し使用した。使用に当たっては，微小な鞘木剥落片で試処理をおこなった。処理後の色調は暗褐色を帯びたが，充分な強度を得た。

ヘ　修復（金銅板及び刀身部錆除去作業２）（写真４－２）

①顕微鏡下で表層錆をアートナイフで除去（第１図４）

②金銅板周辺の膨れ錆を取り除き，また大刀不要錆の除去整理をした（写真４－３）

ト　強化の為の保存処理工程（強化作業２回目）

１回目同様の処置を施した。

チ　修復作業

各所の欠損，欠失部分をエポキシ系樹脂で充填し整形した。

リ　仕上げ作業（補彩等）および修理後記録

以下，再保存処理及び修復

ヌ　錆汁流出箇所（第１図３）の記録と再修理の検討と準備

ル　刀身の亀裂，ひび割れ部分を中心にして，温純水による水蒸気洗浄をおこなった（写真４－４）。等間隔期間を空け，処理と乾燥作業を繰り返した。常温での暴露テストにより大刀の安定を確認した。

ヲ　既に保存処理と修復を施してあることを考慮し，アクリル樹脂浸漬時間を調整して３回目減圧下での樹脂による強化作業をおこなった。この作業に於いても鞘木質部を溶剤（ナフサ）に不溶な樹脂で強化してある為，再度の保存処理が可能であった。

ワ　観察を繰り返した後，細部の仕上げ作業および修理後記録をおこなった。

［再修理にあたって］

土中から地上への環境変化に安定して対応できるようになるまでに，ある程度の期間が必要となった。本大刀は，地金の残存率が高く，刀身を覆う鞘木の影響も要因となり，刀身部の錆化が促進されたものと理解している。強化処理では，形状修復に耐えられる強度となっていたが，鉄刀の芯部の安定に到るまでに以上の作業工程を必要とした。

（５）　Ｓ２装飾大刀（写真５，第２図）

長さ 720㎜。茎，鍔，鏃，金具１点を含む断片（第２図１，３），金具１点を含む刀身部断片（第２図４），切っ先を含む刀身断片（第２図２）の計３断片であった。それぞれの断片はさらに既接合部があり，修復時には５断片に分かれた（写真５－２）。刀装具残存状態は良好であったが，刀身部は錆化による折損や反りを生じていた，砂利をかんで固まった瘤状の錆（第２図５）や泥土の付着は各断片の重量バランスを欠いていた。鍔と鏃は，形状も整い製作当初の素材の輝きを覗かせてい

た（写真５－３）。

修復作業では，出来るだけ泥土と瘤状錆を除去した。点在する鞘木残存片の剥落を防ぐ為，エポキシ系樹脂による充填修復をおこなった。折損した各断片の付着物を取り除き，断片の重量バランスを整えた後，５断片の通し接合をおこなった（写真５－４）。接合強度の弱い部分には樹脂による充填補強をおこなった。樹脂による補填，整形をおこなった箇所にはアクリル絵の具による補彩を施した。

（６）　Ｓ３－１柄頭（写真６）

青銅製の圭頭柄頭は泥土が被り，内部にも土が詰まっていたため，錆化の状態が気がかりであった。修理前現状記録を残した後，エチルアルコールによる洗浄をおこなった。顕微鏡下で部分的に泥土を溶かし取り除いた。同時に表層に浮き上がった銅錆の仮接合をした（写真６－２）。錆下面には独特の樹枝状の金属組織が確認できた（写真６－３）。内部の土を残し，処理中の養生包布をした後，保存処理工程へと進めた。１回目の強化処理終了後には柄頭の強度を確認した。この時点で内部の土を除去して細部に詰まった土をできる限り取り除いた（写真６－４）。本体強化及び鵐目（しとどめ）管が銀製であることを考慮して強化処理を３回施した。修復時には錆化により浮き上がった部分を整形，仮接合からエポキシ樹脂による本接合及び隙間部への樹脂充填をおこなった。樹脂充填修復箇所に限ってアクリル絵の具で補彩を施した。

（７）　Ｂ 13－１・２鏡板（ハート形鏡板付轡）（写真７）

２点それぞれに鏡板を付け整合接点を有する轡。各パーツは銹着し，泥土が全面を覆うことで繋ぎ役となって形状の崩れを免れた状態であった。鏡板の内１点は，保存処理後に鉄地と金銅（透かし文様装飾部）の貼り合わせ部分が剥離して十数片にバラける状態となった（写真７－２）。泥土と錆の除去，鋲留め部分の修復，組み上げ手順の検討を行い（写真７－３），折損した引手に芯材を入れて補強接合，補強用樹脂充填部の着彩をおこなった（写真７－４）。傷みの少ない鏡板には，修理前から金銅板の輝きがところどころに見られた。修復時には可能な範囲の金銅装面を表出した。鏡板２点は，銜部折損部と引手折損部とは錆着しているが欠失個所は無く繋がった状態を保っていた。

（８）　Ｂ 15 素環轡（写真８）

２点に分かれているが一揃いに繋げることができる。泥土と鉄錆の付着により，銹着して固まってしまい形状を複雑にしていた（写真８－２）。修理前，各２点はそれぞれ数箇所づつの仮接合がされていたが，保存処理（脱塩処理）後には接合前の状態となった。薬液への浸漬期間が長かったため，仮接合部や脆弱部分が外れることが多く，接合断面の形状が崩れやすい。処理前の観察と接合部が外れた場合の保護養生は，復元時の正確な接合には欠かせない作業である。錆着と泥土の付着は，轡金具等の形を曖昧なものにし，除去作業には，修復に焦点を当てた多方向からのＸ線写真情報の必要性を感じた形状の遺物であった（写真８－３）。整理された段階で２点の内の１点にある欠損部分の樹脂充填修復をおこなった（写真８－４）。

（９）　Ｂ 16 杏葉（写真９）

金銅張り装飾部分と鋲の表出を出来る範囲までおこなった（写真９－２）。Ｘ線写真を基にして，

金銅装の薄板層を覆う硬い土やところどころに盛り上がる瘤状の錆を少しずつ除去した。剥落片３点中に鋲頭を含む断片があり，その整合位置が確認できたので修復をした（写真９－３）。泥土は，黄土顔料を水干したような細かな粒子がひび割れを通して，脆弱な鍍金部層まで入り込んでいたために，エタノール洗浄を必要とした（写真９－４）。なかでも当杏葉は金銅装された表面と泥土の剥離が比較的容易であったため，金銅の光沢，鋲の形を表出することができた。なお，本例を含め，杏葉や鏡板細部への泥土の流入付着は著しいものであった。

（１０）　B 30 雲珠（写真 10）

８脚の内の１脚を欠損するも半円方形相互脚多脚系で，その内の脚１点には１鋲で引っ掛け金具を繋いでいる。半球形鉢の内外には泥土と錆が厚く付着して形状を崩し，金銅装面が見出せるのは限られた部分のみであった。可能な範囲での金銅装面表出（アートナイフ，ダイアモンドディスク・グラインダー切削工具，超音波切削工具）を試みた（写真 10 － 2）。錆除去作業では，鉢中央の宝珠形飾金具を巡って花形の飾りの打ち出し文様があることが判った（写真 10 － 3）。当部分は錆が厚く，Ｘ線写真からは文様の確認はできなかった。表出作業後は保存処理の仕上げとして減圧下での樹脂による強化処理（仕上げ仕様）を施した。接合可能断片をエポキシ系接着剤で接合し，補強の必要な欠失箇所にはエポキシ系充填材を用いて整形した（写真 10 － 4）。樹脂を使用した箇所についてはアクリル絵の具による補彩をおこなった。また多脚に鉢の重みによる負担がかからないように木製台座で支える工夫をした。

４　おわりに

極小片に至るまで取り上げられた貴重な副葬品の数々，分類整理の手を経て引き継がせていただいた保存処理及び修復。中村１号墳とその出土遺物の重要性に作業の重責を感じ，発掘に携われた方々の緊張感に見合う修理が出来るか否か不安を覚えるほどでありました。

修理作業に当たった２年間，作業に専心できましたのは，発掘に携わられた方からの出土時の遺物情報と修理計画のご指導であり，また遺物のＸ線写真によるものでした。副葬品の用途や素材，構造についての理解，損傷状態の把握には欠かせない情報でした。全作業工程を通して，出雲市文化環境部文化財課　花谷浩様，坂本豊治様から度々のご指導の機会をいただきました。また関連資料のご提供は，保存環境を考える上で大変参考になりました。

地殻変動も繰り返されたであろう長い時を越えて残存してきた副葬品，その技術に接することが出来，保存修復の一端を担わせていただきましたことに心から謝意を表します。

（飛鳥工房　永嶋千鳥）

第１表　保存処理工程記録（１）

挿図番号	名　称	素　材	員　数	前処理	安定化処理＊	強化処理＊	備　考
M１	珠文鏡	青銅，紐	１点	土の除去，エタノール洗浄，仮止め，包布，安定台	安定３ 修復の記録参照	強化２，３ 修復の記録参照	
A１	金環	銅地金貼り	１点	剥離部の土除去，エタノール洗浄、包布	安定３	強化１	金貼り部分に破れ有り　単品処理
A３	ガラス製品	ガラス	断片化		不要	強化３	砕片のため顕微鏡下作業
A６	馬具（鈴）	金銅	１点	エタノール洗浄，包布，安定台	安定３ 修復の記録参照	強化１	１個体　単品処理
A８	馬具（鈴）	金銅	２点	既修理部の除去，エタノール洗浄，包布	安定３	強化１	半個体分
A９	馬具（鈴）	金銅	断片化	断片大小，極小分類，エタノール洗浄，包布	安定３	強化１，３	小片含む多数から鈴個体の組み上げ
S１	装飾大刀（２本目）	鉄，鞘木，金銅	１点	修復の記録参照	安定２（１） 修復の記録参照	強化２，３ 修復の記録参照	単品処理，鉄錆び液（塩分）の滲出，鞘木上に装飾金銅装片が２箇所に残存
S２	装飾大刀（３本目）	鉄，銅，鍍金	１点	刷毛クリーニング，エタノール洗浄，個別包布	安定２（１） 修復の記録参照	強化２	単品処理　木質部残存
S３－１	柄頭	青銅，銀（鵐目）（木質残存）	１点	修復の記録参照	安定３ 修復の記録参照	強化２	単品処理，柄頭内部に木質残存，欠損部分有
K１	刀子（鑢付）	鉄（鑢部は金銅）	１点	エタノール洗浄，包布	安定２（１）	強化１	２片接合接点なし　１０㎝
K２	刀子	鉄，木質	１点	エタノール洗浄，包布	安定１	強化１	３片接合　１６㎝
K３	鹿角製刀子	鉄，鹿角	１点	エタノール洗浄，包布	安定１	強化１	鹿角，欠損部あり　７㎝
B１	馬具（鞍）	鉄，座金部銅製	１点	エタノール洗浄，包布	安定２（１）	強化２	木質付着
B２	馬具（鞍）	鉄，座金具鉄地銀装	１点	エタノール洗浄，包布	安定２（１）	強化１	付着物あり　栗形座金
B３	馬具（鞍）	鉄，座金具鉄地銀装	１点	エタノール洗浄，包布	安定２（１）	強化１	４片接合　栗形座金
B４	馬具（鞍）	鉄	１点	エタノール洗浄，包布	安定２（１）	強化１	緑青色の石付着
B５	馬具（鞍）	鉄	１点	エタノール洗浄，包布	安定２（１）	強化１	釘部２片接合
B６	馬具（鐙吊金具）	鉄	１点	エタノール洗浄，包布	安定１	強化１	釘，木質付着
B７	馬具（鐙吊金具）	鉄	１点	エタノール洗浄，包布	安定１	強化１	釘，木質付着　剥落片接合
B８	馬具（鐙吊金具）	鉄	１点	エタノール洗浄，包布	安定１	強化１	付着物あり　釘一部残存
B９	馬具（鐙吊金具）	鉄	１点	エタノール洗浄，包布	安定１	強化１	付着物あり　欠損部あり
B 10	馬具（鋲具）	鉄	１点	エタノール洗浄，包布	安定１	強化１	接合６箇所
B 11	馬具（鋲具）	鉄	１点	エタノール洗浄，包布	安定１	強化１	錆土の被覆部が多い
B 12 B 42	鋲具（飾金具）	鉄（鉄地金銅貼）	１塊	エタノール洗浄，包布	安定２（１）	強化１	数点の遺物付着あり
B 13	轡（ハート形鏡板付）	鉄 鉄地金銅貼り	１揃分	土の除去，エタノール洗浄，仮止め，包布	安定１ 安定２（３）	強化１，２	折損箇所多い鏡板の内の１点は特に脆弱処理前に仮止め及び解体防止処置養生
B 14 B 31	轡（花形鏡板，引手）雲珠	鉄地金銅貼り，鉄	３点	土，錆の除去，エタノール洗浄，仮止め，包布	安定２（３） 引手のみ安定１	強化１	鏡板の金銅装表層の傷み雲珠内面に付着土錆多い
B 14－１	鏡板（花形）	鉄地金銅貼り	１点	おもて面のクリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化１	孔あり，裏面に繊維状
B 15	素環轡（鋲具立聞）	鉄	１揃	エタノール洗浄，仮止め，包布	安定１	強化１	処理前に仮接合部を外した
B 16	杏葉（楕円形斜格子）	鉄地金銅貼り	１点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化１	
B 17	杏葉（楕円形斜格子）	鉄地金銅貼り	１点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化１	泥土厚く付着していたが残存状態が良い
B 18	杏葉断片（表面）	鉄地金銅貼り	表面１	エタノール洗浄，仮止め，包布	安定２（３）	強化２	剥離した装飾おもて面
B 18	杏葉断片（裏面）	鉄	裏面１	エタノール洗浄，包布	安定１	強化１	同上うら面，欠失箇所片の検出
B 19	杏葉（花形）	鉄地金銅貼り	１点	土の除去，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化１	金銅貼り文様面脆弱
B 20	杏葉（花形）	鉄地金銅貼り	１点	クリーニング，エタノール洗浄，仮止め，包布	安定２（３）	強化１	表裏二層に浮き上がり部
B 21	杏葉（花形）	鉄地金銅貼り	１点	土の除去，エタノール洗浄，仮止め，包布	安定２（３）	強化２	脆弱，ひび割れが目立つ
B 22	辻金具（丸形四脚付）	鉄地金銅貼り	１点	土，錆の除去，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化１	付着錆の除去　黒色の塗膜残す
B 23	辻金具（丸形四脚付）	鉄地金銅貼り	１点	土，錆の除去，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化１	一部分金銅装面を表出
B 24	馬具（辻金具脚）	鉄地金銅貼り	１点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化１	

第２表　保存処理工程記録（２）

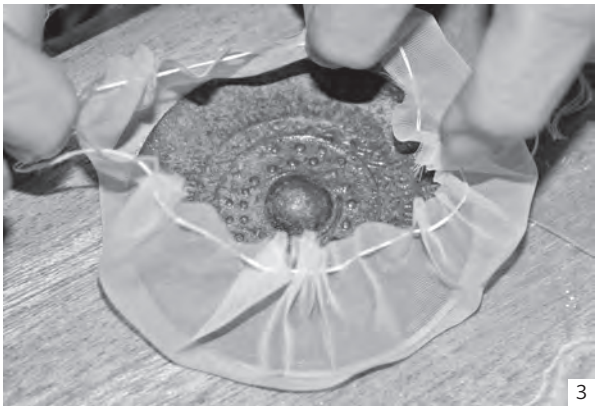
挿図番号	名　称	素　材	員　数	前処理	安定化処理＊	強化処理＊	備　考
B 25	馬具（辻金具脚）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化２	
B 26	辻金具（方形四脚付）	鉄地金銅貼り	1点	土の除去，エタノール洗浄，仮止め，包布	安定２（３）	強化1	ひび割れあり　条なし（鉢縁回し）
B 27	辻金具（方形四脚付）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	革残存部付着　金銅装面の表出　条なし
B 28	辻金具（方形四脚付）	鉄地金銅貼り	1点	土の除去，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	条なし
B 29	辻金具（方形二脚付）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	脚に革残存部あり　条なし
B 30	雲珠（八脚）	鉄地金銅貼り	1点	土，錆の除去，エタノール洗浄，仮止め，包布	安定２（３）	強化1	付着物多し　金銅装面を表出　条あり
B 30	雲珠破片	錆，金銅剥離片	1点	エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1，３	Ｂ 30 剥離薄片
B 31	雲珠脚と板状鉄製品	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	B31 に接合
B 31	馬具（辻金具脚）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 32	鋲具（留め金具付）	鉄（鉄地金銅貼）	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	欠失箇所片の検出
B 32	馬具（鋲具）	鉄	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定1	強化1	同上 B32 欠損部に合致
B 34	馬具（帯飾）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 35	馬具（帯飾）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 36	馬具（帯飾）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 37	馬具（帯飾）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 38	馬具（飾金具）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 39	馬具（帯飾）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，仮止め，包布	安定２（３）	強化1	欠損部あり
B 41	馬具（飾金具）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 43	馬具（飾金具）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 44	馬具（飾金具）	鉄地金銅貼り	1点	土，錆の除去，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 45	馬具（飾金具）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
B 46	馬具（飾金具）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	
非掲載	鉄刀片	鉄	1括	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定1	強化1	木質付着
非掲載	馬具（不明破片）	鉄	2点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定1	強化1	
非掲載	馬具（飾金具?）	鉄地金銅貼り	1点	クリーニング，エタノール洗浄，包布	安定２（３）	強化1	

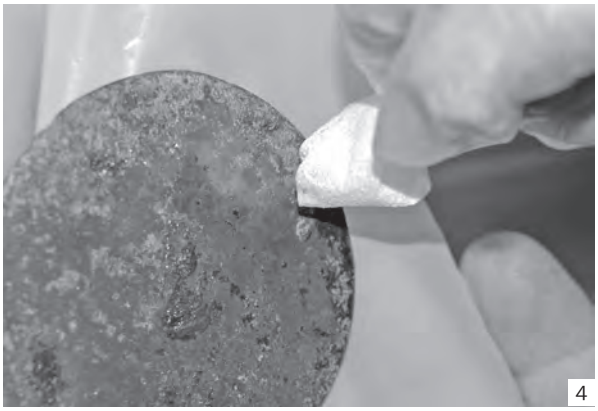
＊安定化処理

安定１　鉄製品
　１%水酸化リチウム・エタノール溶液による減圧含浸
　50 日間浸漬
　温純水洗浄後エタノール洗浄
　充分な乾燥
安定２　鉄製品と非鉄金属製品の組み合わせ　遺物の状態により処理方法を適宜選択
　安定２（1）　安定１鉄製品工程を優先して処理
　安定２（3）　安定３非鉄金属製品工程を優先して処理
安定３　非鉄金属製品
　２% BTA・エチルアルコール溶液による減圧含浸
　50 日間浸漬
　温純水洗浄後エタノール洗浄
　充分な乾燥

＊強化処理

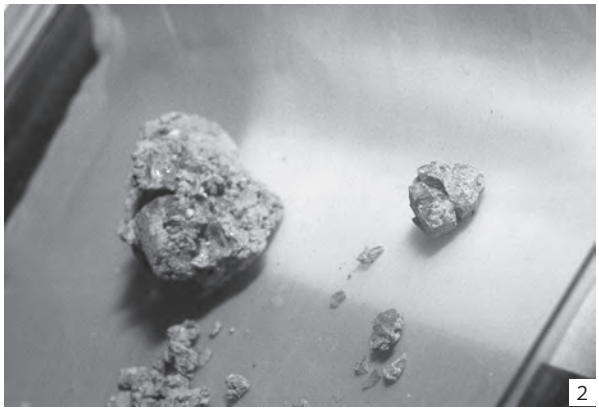
強化１　樹脂含浸作業２回
　30%アクリル樹脂パラロイド NAD － 10・ナフサ溶液による減圧含浸
　１回目 20 時間浸漬　２回目 10 時間浸漬　各回毎，溶剤ナフサで洗浄
　２回目洗浄時に養生布を外し，表層の樹脂溜の除去
　各回毎，赤外線ランプ下で乾燥
強化２　樹脂含浸作業３回
　強化１工程の減圧含浸作業を計３回
強化３　樹脂塗布
　塗布による樹脂処理

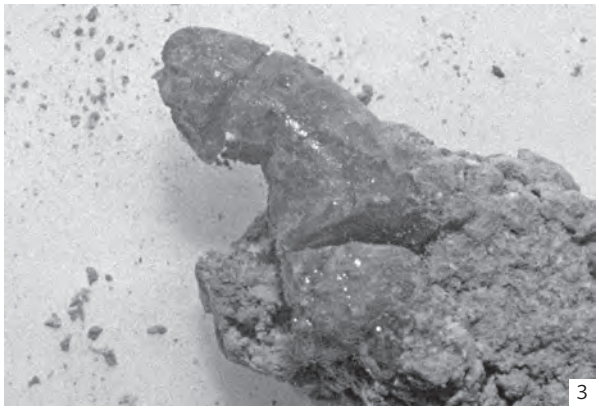




1　修理前
2　修理中
3　修理中
4　修理中

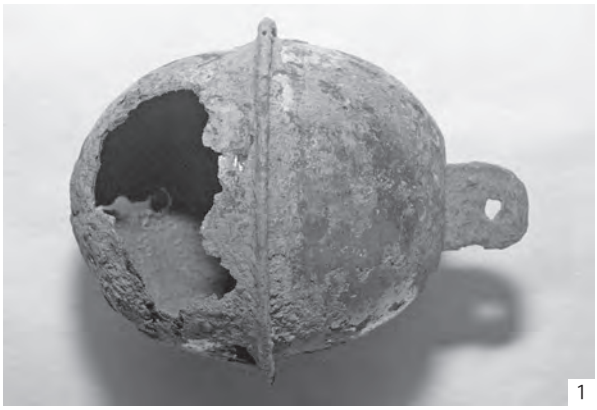
写真１　Ｍ１珠文鏡

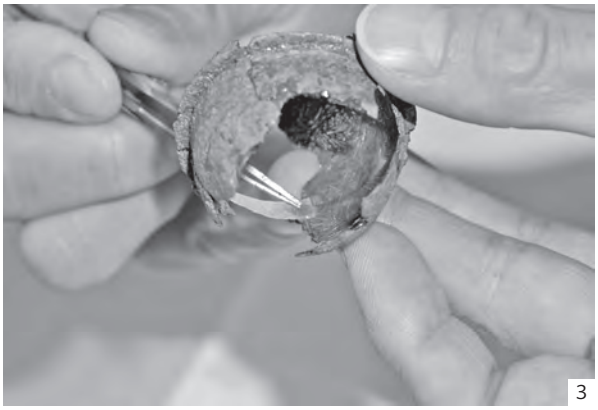




1　修理前
2　修理中
3　修理中
4　修理後

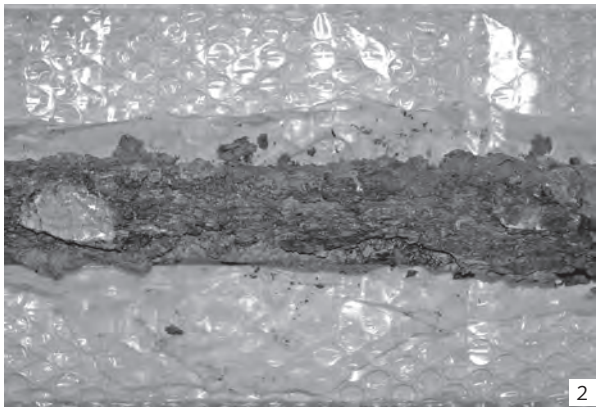
写真２　Ａ３ガラス製品

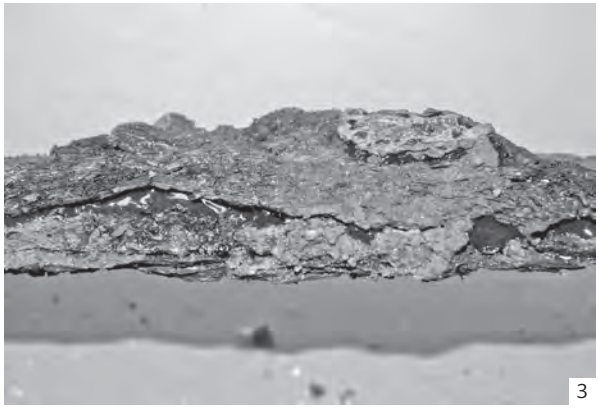




1　修理前Ａ６
2　修理中Ａ６
3　修理中Ａ９
4　修理中Ａ９左，Ａ６右

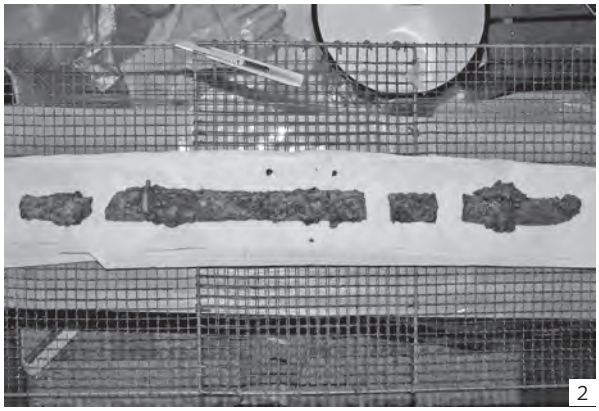
写真３　Ａ６鈴及びＡ９鈴断片





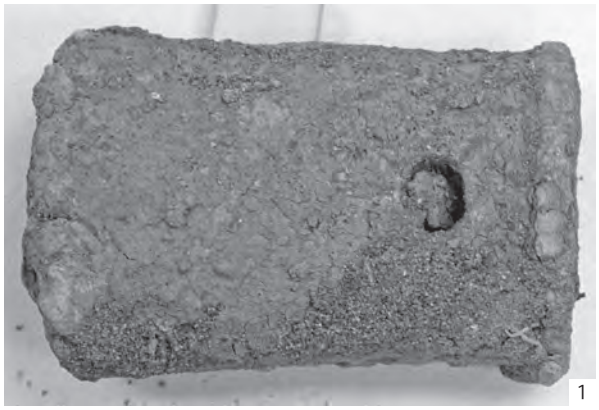
1　修理前
2　修理中
3　修理中
4　修理中

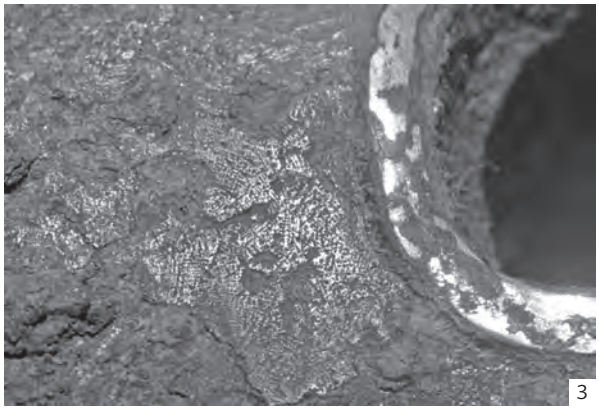
写真４　Ｓ１装飾大刀

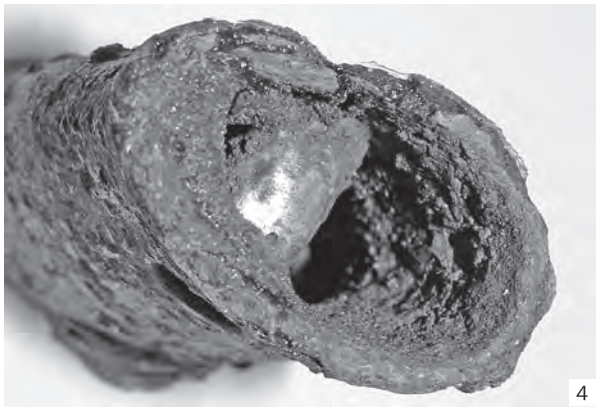


1　修理前
2　修理中
3　修理中
4　修理中

写真５　Ｓ２装飾大刀







1　修理前
2　修理中
3　修理中
4　修理中

写真６　Ｓ３－１柄頭

1　修理中
2　修理中
3　修理中
4　修理中

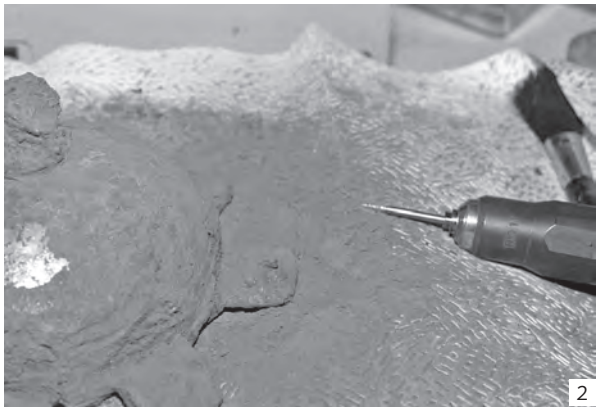
写真７　Ｂ 13－１・２鏡板

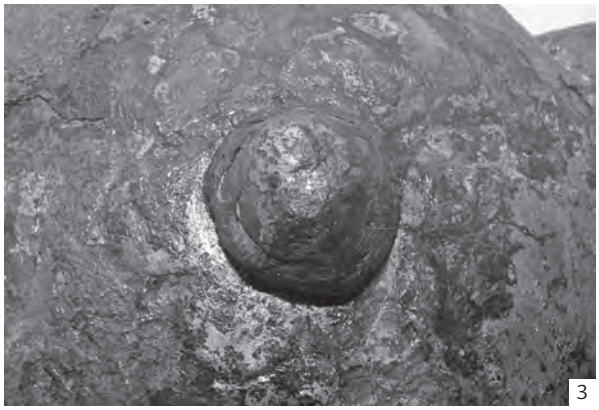
1　修理前
2　修理中
3　修理中
4　修理中

写真８　Ｂ 15 素環轡

1　修理前
2　修理中
3　修理中
4　修理中

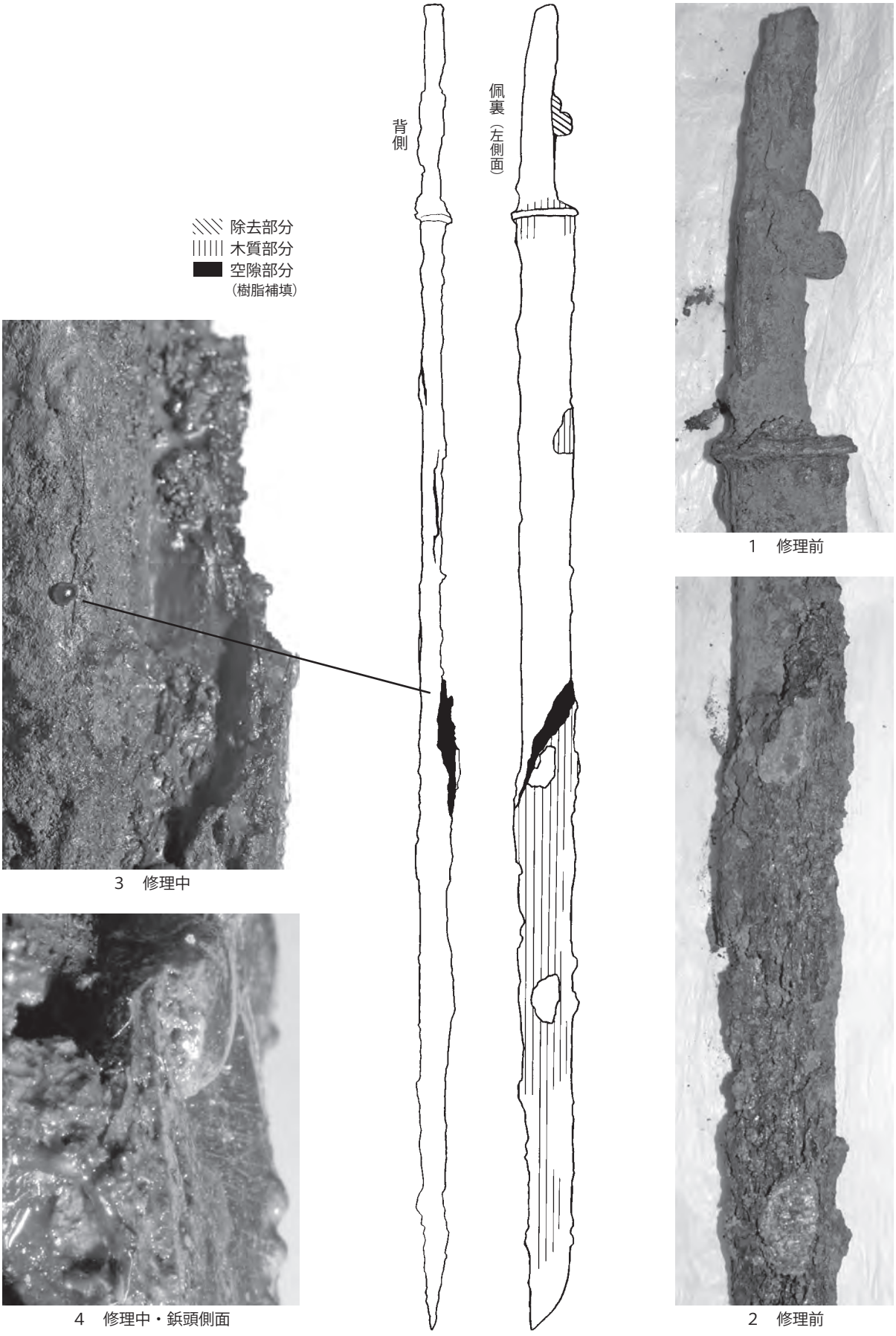
写真９　B 16 杏葉





1　修理前
2　修理中
3　修理中
4　修理中

写真 10　B 30 雲珠



1　修理前

2　修理前

3　修理中

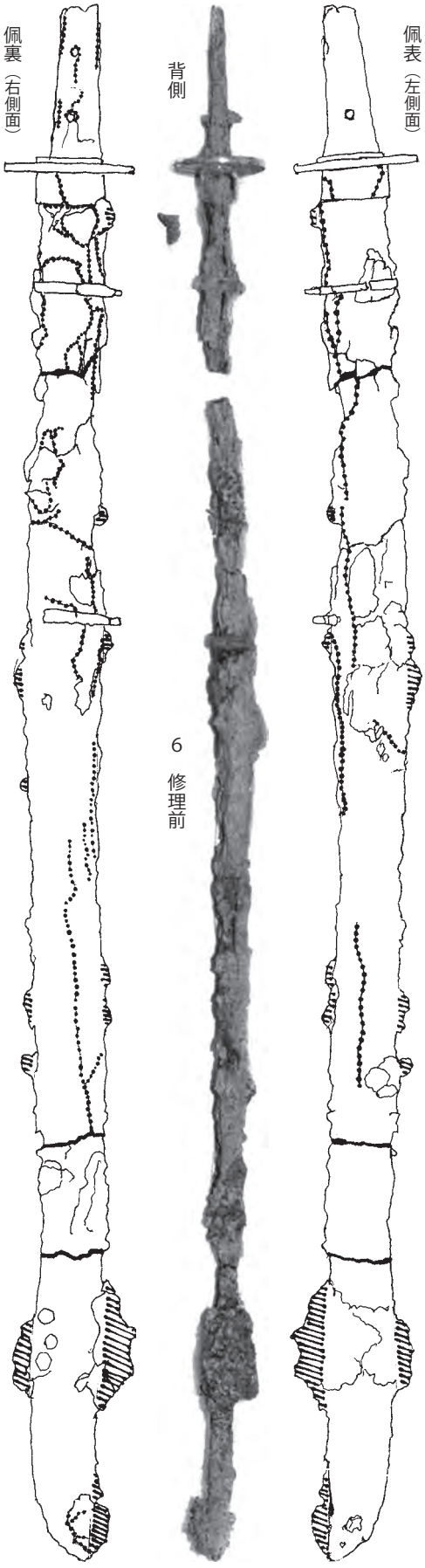
4　修理中・鋲頭側面

第１図　Ｓ１装飾大刀

3　修理前

4　修理前

5　修理前



1　修理前

2　修理前

第２図　Ｓ２装飾大刀

第３節　中村１号墳出土金銅製鈴の自然科学分析

１　分析対象

出雲市中村１号墳出土鈴（Ａ７）　１点（第１図）

２　分析内容

鈴を蛍光Ｘ線分析装置で成分分析し，表面微小部の実体顕微鏡観察を行った。

３　使用機器

▶　エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（XRF）
【SII ナノテクノロジー SEA5230】
試料の微小領域にＸ線を照射し，その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光Ｘ線を検出することにより元素を同定する。
測定は大気中でφ 1.8㎜のコリメータを用い，45kV の管電圧で 300 秒間行った。この条件は大気中でカルシウム（Ca）より重い元素を検出できる。なお，Ｘ線ターゲットはモリブデン（Mo）である。

▶　実体顕微鏡【ライカ MZ16・キーエンス VHX200】

第１図　出雲市中村１号墳出土　鈴（Ａ７）

４　結果と考察

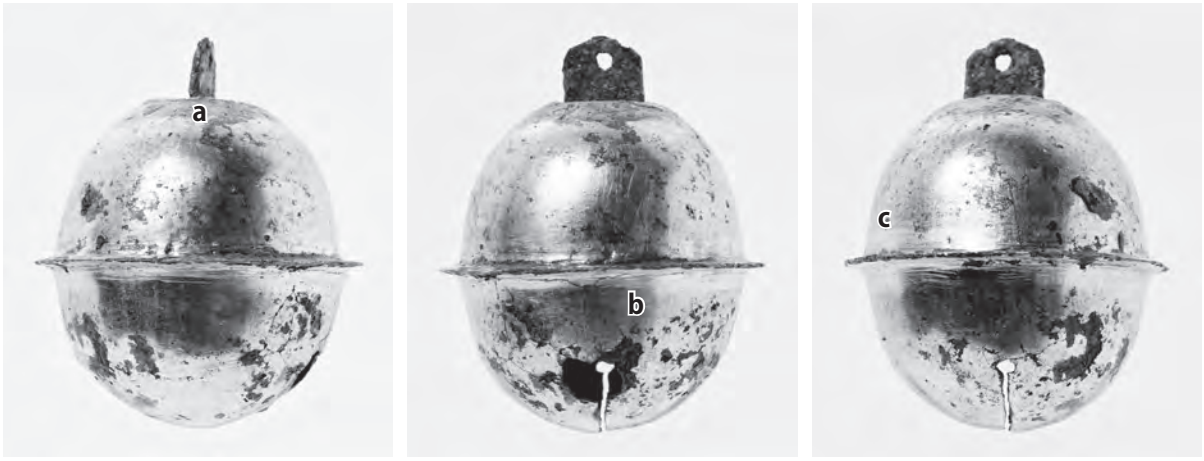
鈴（Ａ７）の金色部分（第２図分析箇所ａ，第３図）を XRF により分析したところ，鉄（Fe），銅（Cu），銀（Ag），金（Au），水銀（Hg）を検出し（第６図），金色が脱落し緑色の素地が露出した部分（第２図分析箇所ｂ，第４図）からは鉄と銅を検出した（第７図）。このうち鉄は主として周辺環境由来と思われ，銀は銅または金に微量含まれる不純物と思われることから，この鈴は銅板に鍍金を施したものと考えられた。

さらに，接合部付近の鍍金部を XRF により分析したところ（第２図分析箇所ｃ，第５図），銅，銀，金，水銀を検出した。このうち，金は分析箇所ｂに比べて強く検出され，実体顕微鏡観察では水平方向に表面の鍍金を均したようなようすが観察できた（第５図）。なお，接合のために用いられたような成分は検出できなかった。

（元興寺文化財研究所　川本耕三）

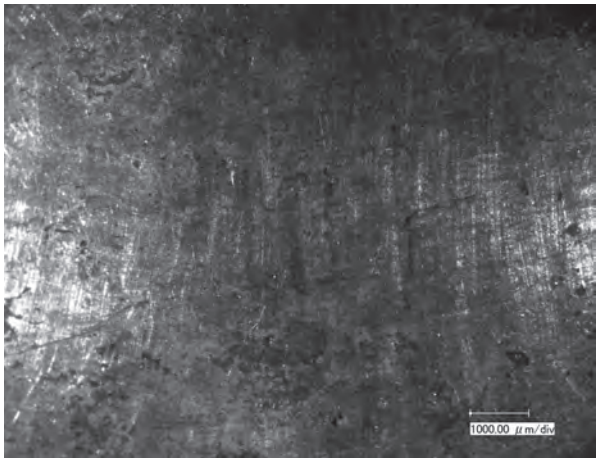
５．分析データ

［分析箇所］

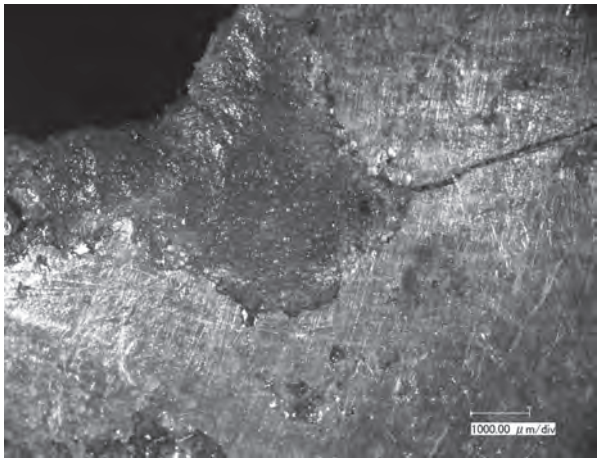


第２図　鈴（Ａ７）の分析箇所ａ～ｃ

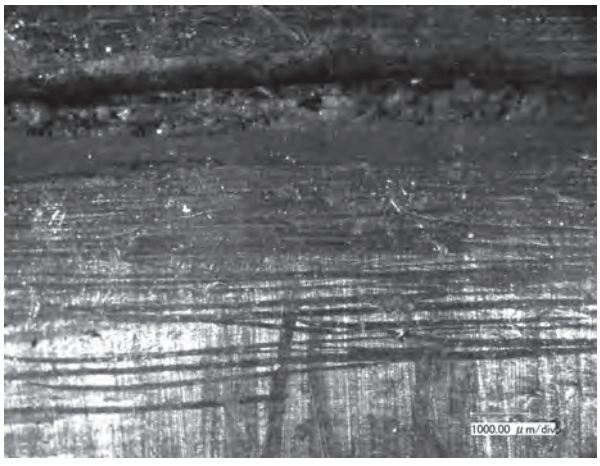
［表面微小部観察］



第３図　分析箇所ａの拡大図

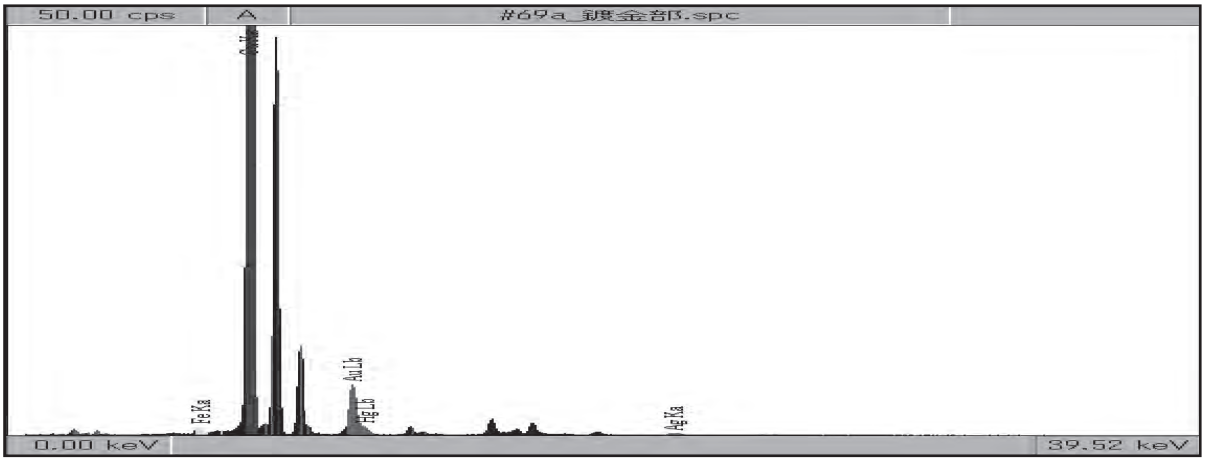


第４図　分析箇所ｂの拡大図

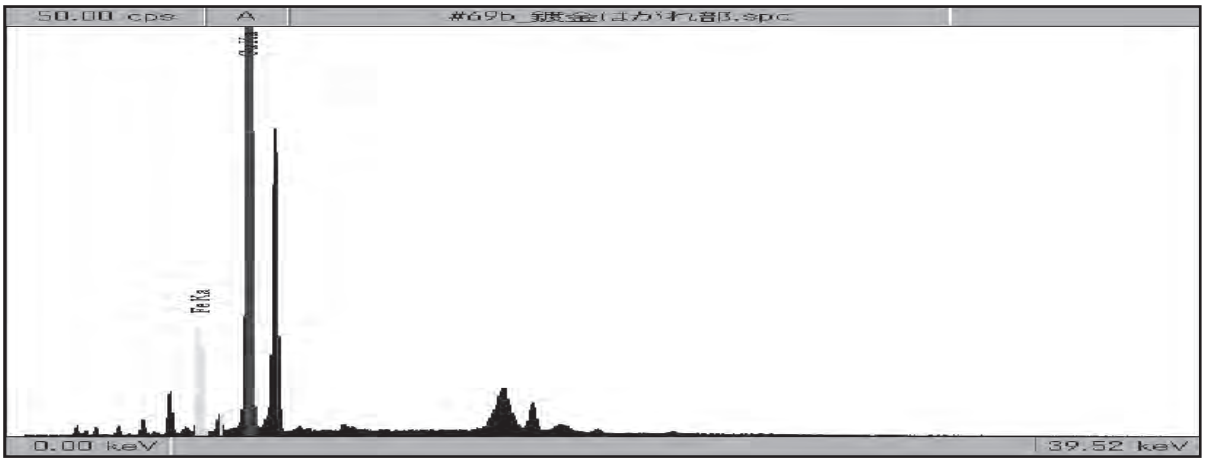


第５図　分析箇所ｃの拡大図

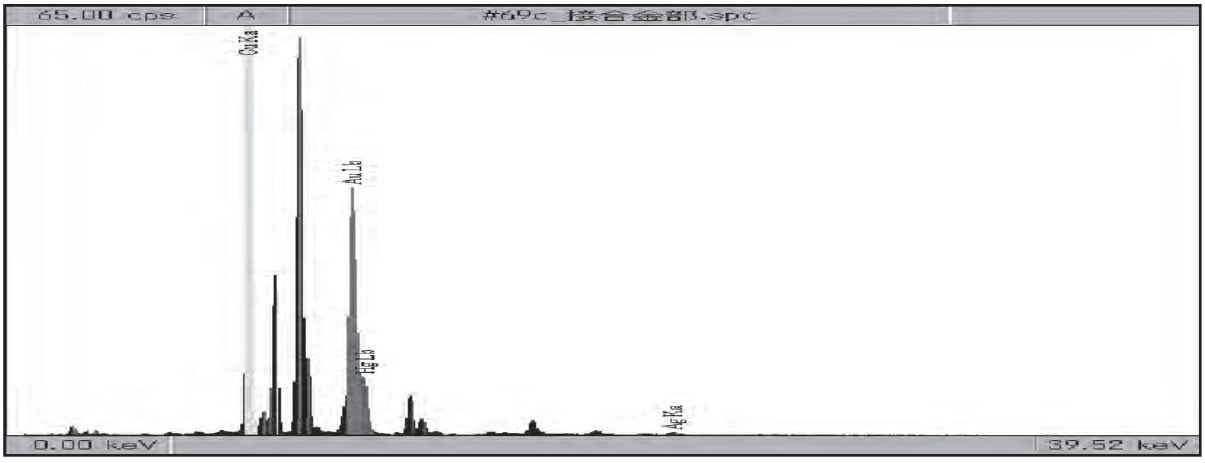
［蛍光Ｘ線分析］



第６図　鈴（Ａ７）の分析箇所ａの XRF スペクトル



第７図　鈴（Ａ７）の分析箇所ｂの XRF スペクトル



第８図　鈴（Ａ７）の分析箇所ｃの XRF スペクトル

第４節　中村１号墳出土遺物の自然科学分析

はじめに

島根県出雲市中村１号墳は，６世紀後半頃に築造された直径約 30 ｍの円墳である。全長 9.5 ｍの横穴式石室を有し，石室内は前室と玄室に分けられている。未盗掘古墳であり，玄室と前室にそれぞれ装飾大刀が立て掛けられていた他，鉄鏃，馬具，ガラス玉，須恵器等の副葬品が豊富に出土している。

今回の分析調査では，副葬品とされる出土遺物のうち，馬具や大刀の金箔部分および柄頭の地金部分・金環・銅鏡について，金属成分を明らかにする。また，ガラス製品や赤色物質についてもその素材に関する資料を作成する。一方，刀子の柄に用いられた鹿角と考えられている残存物や柄頭や大刀の柄の一部と考えられている木質については，顕微鏡下で観察同定を行い，その由来や材質について検討する。なお本報告は，平成 19 年度，平成 20 年度の２年度にわたり実施した分析調査結果を，入稿用にまとめたものである。

Ⅰ　金属製副葬品等の成分分析調査

１　金属製遺物及びガラス製遺物の成分分析

（１）　試　料

１）表面の金箔・柄頭の地金試料

馬具等付着の金箔試料 18 点（№ 1，2，4，5，8，9, 10，11，12，14，15，19，20，22，28，49，54，57）と，柄頭の地金１点（№ 26）の合計 19 点である（第１表）。金箔試料 18 点は，エネルギー分散形Ｘ線分析装置を備えた走査電子顕微鏡，柄頭はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を用いて分析を実施する。

２）銅鏡片試料

試料は，珠文鏡，Ｂ断片（№ 58）の１点である。エネルギー分散形Ｘ線分析装置を備えた走査電子顕微鏡（SEM － EDS）装置を用いて分析を実施する。

３）金環・ガラス・赤色物試料

金環試料は，№ 53 の１点である。エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を用いて分析を実施する。

ガラス試料は，№ 61 の１点である。エネルギー分散形Ｘ線分析装置を備えた走査電子顕微鏡（SEM － EDS）装置を用いて分析を実施する。

赤色物試料は，珠文鏡Ｅ断片の裏面に付着した赤色極小片１点（№ 58）である。Ｘ線回折分析を実施する。

（２）　分析方法

受領した試料は，いずれも保存処理を施す必要がある脆弱な保存状態であったため，分析にあたっては遺物の保護を最優先事項とした。そのため，直接測定機器にかけることにより破損等をきたす可

能性のある試料が多いため，クリーニング時の残渣などから金箔片を抽出するなどして，試料の確保につとめた。また，試料の性状や状態によって最適な方法・機器を選択することで，解析に耐えうる分析データの確保につとめた。

なお，一部試料はすでに保存処理済みであったため，試料本来の成分が検出できず処理薬剤に由来するデータが得られたものもあった。しかし測定場所の変更や代替試料を測定しても同様の結果である場合には，遺物保護の観点から処理薬剤の除去や過剰なクリーニングを行うことはせず，その時点で分析を終了した。

各分析方法は，以下の通りである。試料別に選択した分析方法については，第１表にまとめた。

１）エネルギー分散形Ｘ線分析

金箔試料は各遺物のクリーニング作業で生じた残渣を実体顕微鏡で精査し，金箔片を回収する。金箔片を水平試料載台にカーボン両面テープで固定し，エネルギー分散形Ｘ線分析装置（JED － 2300）を備えた日本電子製可搬形走査電子顕微鏡 JCM － 5700 により，元素分析を実施する。なお，分析位置は試料表面を観察し，付着物等の異物を含まない箇所を選択する。試料の観察・分析は，基本的に加速電圧 20kV，高真空モードで行う。測定条件の詳細については，分析結果とともに図中に示す。

得られた特性Ｘ線スペクトルは元素定性を実施した後，ZAF 補正法を用いたスタンダードレス（簡易定量）分析により定量演算を行い，相対含有率（質量%）を求める。なお，算出される結果は，半定量的なものであることに留意しておく必要がある。

２）蛍光Ｘ線分析

蛍光Ｘ線分析は，サンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であるが，ごく表面層を測定対象としているため，出土遺物表面が風化の影響を受けている場合，遺物本来の化学組成を導くことは難しく，本来の化学組成を知るためには風化層を除去しなければならない。ただし，遺物保護の観点から考えれば，外観上の変化を伴わない本分析法は概略の化学組成を知るためには極めて有効な手法となる。

材質調査に用いる装置はセイコーインスツルメンツ（株）製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SEA2120L）である。なお，試料の測定は柄頭頭部の比較的錆など腐食生成物の少ない部分を対象に，測定を実施する。得られた特性Ｘ線スペクトルは，元素定性を実施した後，FP 法（ファンダメンタルパラメーター法）を用いたスタンダードレス分析により定量演算を行い，相対含有率（質量%）を求める。算出される結果は，半定量的なものであることや，実際にどの程度の深さまでＸ線が進入しているのか不確実な部分があり（例えば表面の風化層のみから発生した特性Ｘ線を検出しているのか，あるいは風化層より内部の新鮮部分の材質も含めた特性Ｘ線を検出しているのか），結果の評価には注意する必要がある。本調査における測定条件の詳細については，分析結果とともに図中に示す。

３）Ｘ線回折分析

試料をメノウ乳鉢で微粉砕した後，アセトンを用いて無反射試料板に塗布し，測定試料とする。作成したＸ線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は，Materials Data,Inc. のＸ線回折パターン処理プログラム JADE を用

い，該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu（K α）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite 湾曲	Recieving Slit：0.3㎜
Voltage：40KV	Scanning Speed：2° /min
Current：40Ma	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：3 ～ 45°

第１表　分析試料一覧

No.	挿図番号	名　称	分析対象	分析機器
1	B 13	鏡板	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
2	B 18	杏葉	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
4	B 17	杏葉	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
5	B 16	杏葉	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
8	B 19	杏葉	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
9	B 20	杏葉	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
10	B 21	杏葉	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
11	B 14－1	鏡板	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
12	B 14－2	鏡板	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
14	B 12・42	鋲具・飾金具	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
15	B 32	鋲具	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
19	B 27	辻金具	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
20	B 26	辻金具	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
22	B 23	辻金具	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
26	S 3－1	柄頭	地金	エネルギー分散型蛍光X線分析装置
28	S 1	大刀	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
49	B 1	鞍	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
53	A 1	金環	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
54	S 1－1～4	鞘尻	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
57	A 8	鈴	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
58	M 1	珠文鏡片B	金箔	エネルギー分散形X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡
		珠文鏡片E	赤色物	X線回折装置
61	A 3	ガラス勾玉	ガラス	エネルギー分散型蛍光X線分析装置

（3）　結　果

1）金箔試料

分析試料 18 点についての SEM － EDS 分析結果を第 1 ～ 18 図に，スタンダードレス分析による半定量結果を一覧として第２表に示す。なお分析は，１試料につき複数箇所を行い，その試料の特徴を代表する１～２箇所の分析位置における結果を提示している。試料によっては亜鉛（Zn）と考えられる微少ピークも認められたが，検出強度が微弱であり不確かさがあるため，定量演算の際には除外している。

各試料，各箇所において共通して検出された元素は金（Au），銀（Ag），銅（Cu）の３元素である。No. 5 を除いた試料には水銀（Hg）が検出される部分も存在し，No. 1（No. 1 － 2），No. 2（No. 2 － 2），No. 4（No. 4 － 2），No. 10（No. 10 － 2），No. 11（No. 11 － 2），No. 15（No. 15 － 2）などでは，金アマルガムと見られる粒子も認められている。さらに，No. 5，No. 14，No. 28 を除く試料表面には筋状の擦痕が認

められ，№2，№4，№10，№11，№15，№20 については金アマルガム粒子が平滑化された状況も観察される。

なお，№49（鞍）試料は当初金箔の調査が目的とされていたが，実体顕微鏡下での観察では，試料は樹脂で被覆されており，地金表面には金箔は認められなかった。また，電子顕微鏡による反射電子組成像を観察しても一様である。表面および破断面の地金部分から検出される元素は銅（Cu）および炭素（C），酸素（O）であり，炭素，酸素は被覆樹脂に因るところが大きいと思われる。ただし，地金表面には錆化した部分も多く見られたことから，緑青の影響も少なからず内包されていると思われる。検出された金属元素が銅のみであることを踏まえれば，地金の素材は純銅製である可能性が高いと考えられる。

2）柄頭地金試料

柄頭の蛍光Ｘ線分析結果を，第 19 図に示す。検出された元素は，鉄（Fe），銅（Cu），ヒ素（As），銀（Ag），錫（Sn），鉛（Pb），ビスマス（Bi）の７元素である。スタンダードレスによる定量演算の結果では，銅が 49％，錫が 47％程度であり，鉛は 0.3％とほとんど含まれていない。主成分は銅と錫であり，鉄，ヒ素，銀，鉛，ビスマスが少量～微量程度含まれる。

3）銅鏡試料

銅鏡試料の SEM － EDS 分析結果を第 20 図に，スタンダードレス分析による半定量結果を第３表に示す。なお分析は反射電子組成像によって認められた銅錆基質と考えられる箇所（分析位置：№58 － 1）と組成が異なる輝度の高い箇所（分析位置：№58 － 2）について行った。両箇所において検出された元素は銅（Cu），錫（Sn），鉛（Pb），鉄（Fe），ヒ素（As），ケイ素（Si），アルミニウム（Al），リン（P）の８元素である。

４）金環試料

金環の蛍光Ｘ線分析結果を第 21 図に示す。検出された元素は，金（Au），銀（Ag），銅（Cu）の３元素である。スタンダードレスによる定量演算の結果では，金が 94％，銀が 2.8％，銅が３％程度であり，純金に近い素材が使用されていたことが窺える。

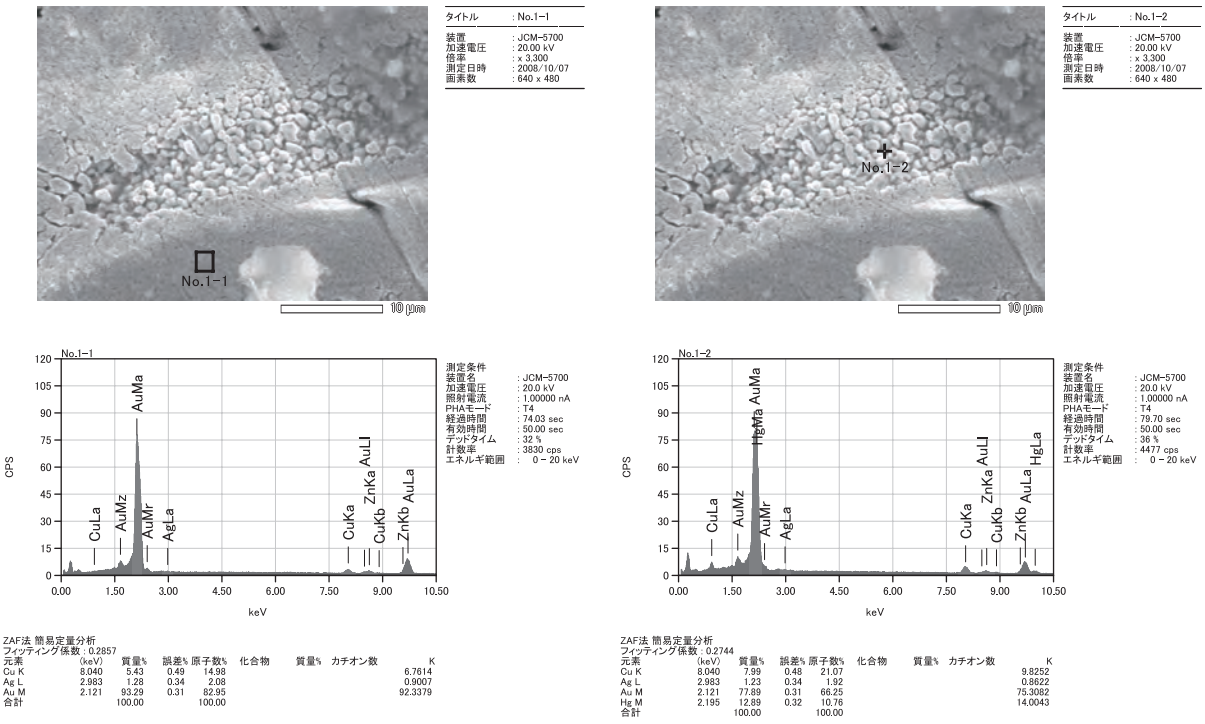
５）ガラス試料

ガラスの SEM － EDS 分析結果を第 22 図に，スタンダードレス分析による半定量結果を第４表に示す。検出された元素は，ケイ素（Si），チタン（Ti），アルミニウム（Al），鉄（Fe），カルシウム（Ca），ナトリウム（Na），カリウム K），銅（Cu）の８元素であり，酸化物換算した場合の質量百分率（％）では，SiO_2（網目形成酸化物）が約 82％，Al_2O_3（中間酸化物）が約 10％であり，Na_2O，K_2O，CaO などの修飾酸化物は１％強程度と少ない。

なお，１％程度含まれる CuO は，本試料の水色の発色に寄与している成分と考えられ，着色剤として基礎ガラスに意図的に添加されたものと思われる。

５）赤色物試料

Ｘ線回折図を第 23 図に示す。なお，図中最上段に試料のＸ線回折図を掲げ，下段に検出された鉱物の回折パターンを掲げている。



タイトル : No.1−1
装置 : JCM−5700
加速電圧 : 20.00 kV
倍率 : x 3,300
測定日時 : 2008/10/07
画素数 : 640 x 480

タイトル : No.1−2
装置 : JCM−5700
加速電圧 : 20.00 kV
倍率 : x 3,300
測定日時 : 2008/10/07
画素数 : 640 x 480

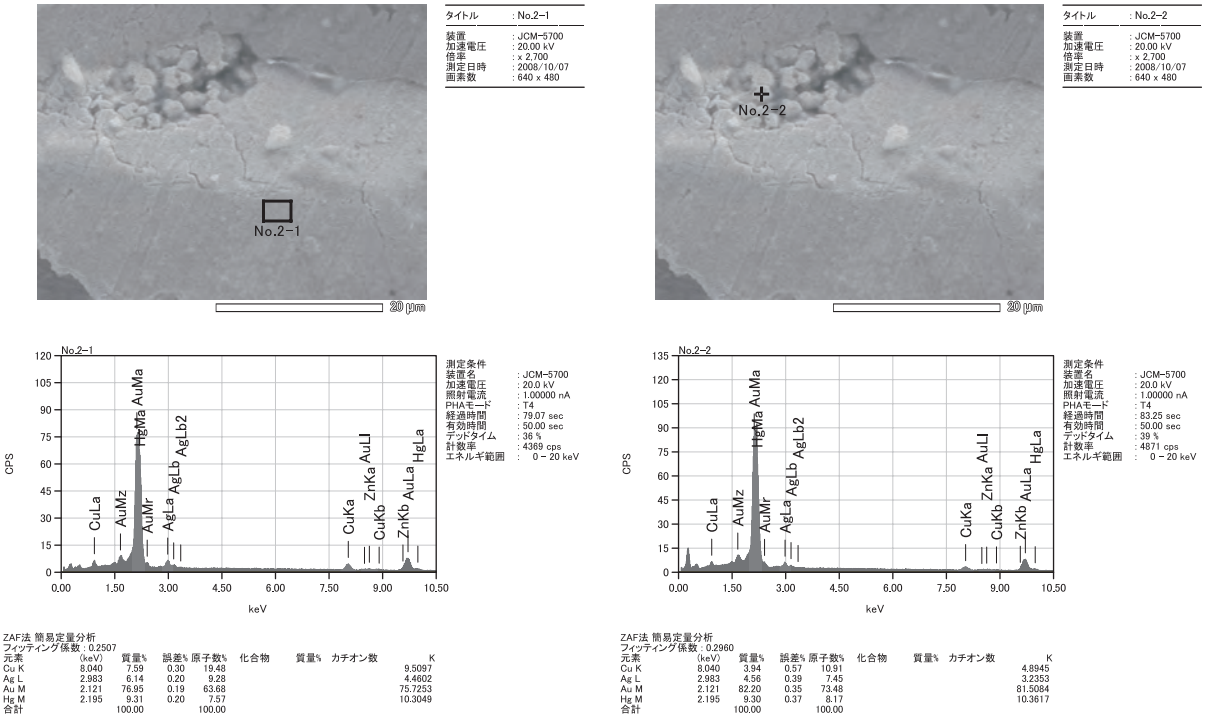
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2857

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	5.43	0.49	14.98				6.7614
Ag L	2.983	1.28	0.34	2.08				0.9007
Au M	2.121	93.29	0.31	82.95				92.3379
合計		100.00		100.00				

ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2744

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	7.99	0.48	21.07				9.8252
Ag L	2.983	1.23	0.34	1.92				0.8622
Au M	2.121	77.89	0.31	66.25				75.3082
Hg M	2.195	12.89	0.32	10.76				14.0043
合計		100.00		100.00				

第１図　No.１（B 13）鏡板付着金箔の SEM − EDS 分析結果



タイトル : No.2−1
装置 : JCM−5700
加速電圧 : 20.00 kV
倍率 : x 2,700
測定日時 : 2008/10/07
画素数 : 640 x 480

タイトル : No.2−2
装置 : JCM−5700
加速電圧 : 20.00 kV
倍率 : x 2,700
測定日時 : 2008/10/07
画素数 : 640 x 480

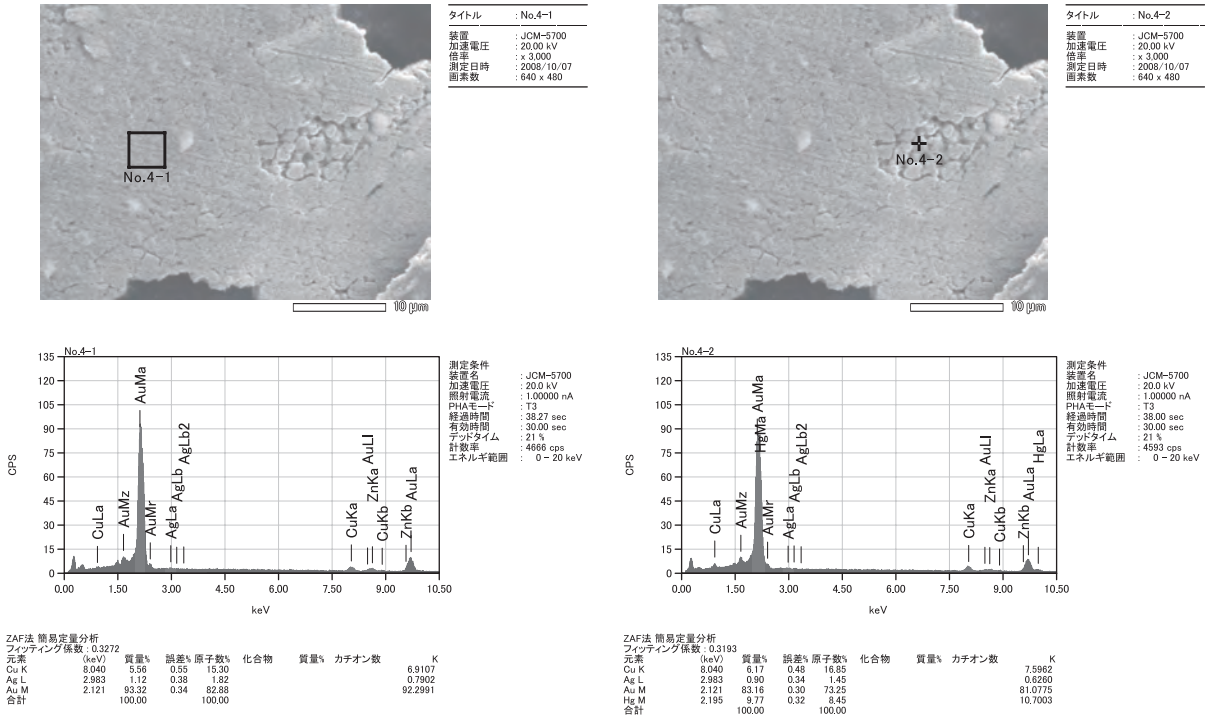
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2507

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	7.59	0.30	19.49				9.5097
Ag L	2.983	6.14	0.20	9.28				4.4602
Au M	2.121	76.95	0.19	63.68				75.7253
Hg M	2.195	9.31	0.20	7.57				10.3049
合計		100.00		100.00				

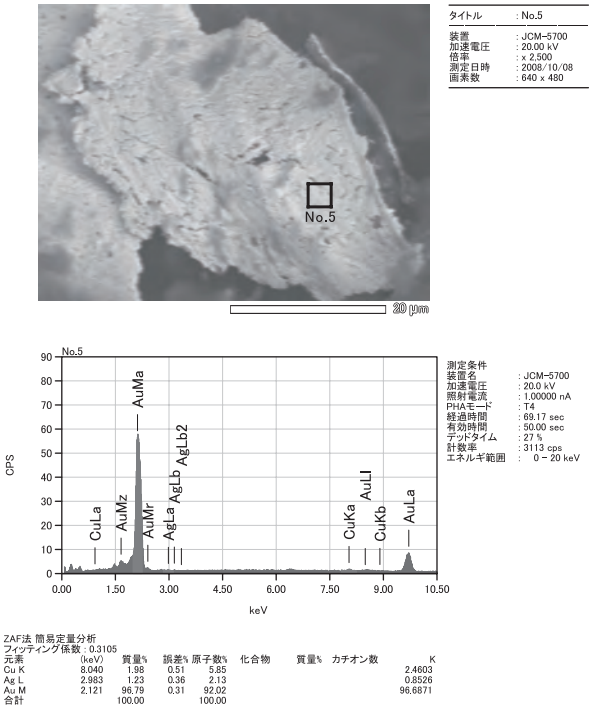
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2960

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	3.94	0.57	10.91				4.8945
Ag L	2.983	4.56	0.39	7.45				3.2353
Au M	2.121	82.20	0.35	73.48				81.5084
Hg M	2.195	9.30	0.37	8.17				10.3617
合計		100.00		100.00				

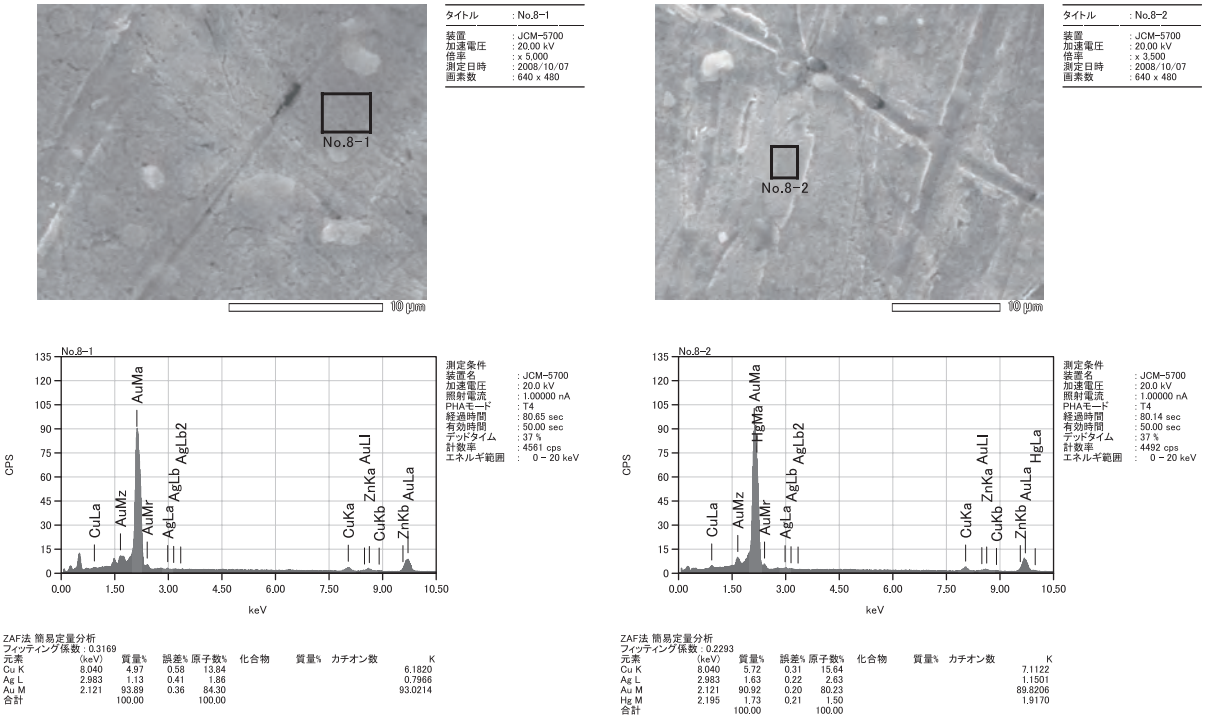
第２図　No.２（B 18）杏葉付着金箔の SEM − EDS 分析結果



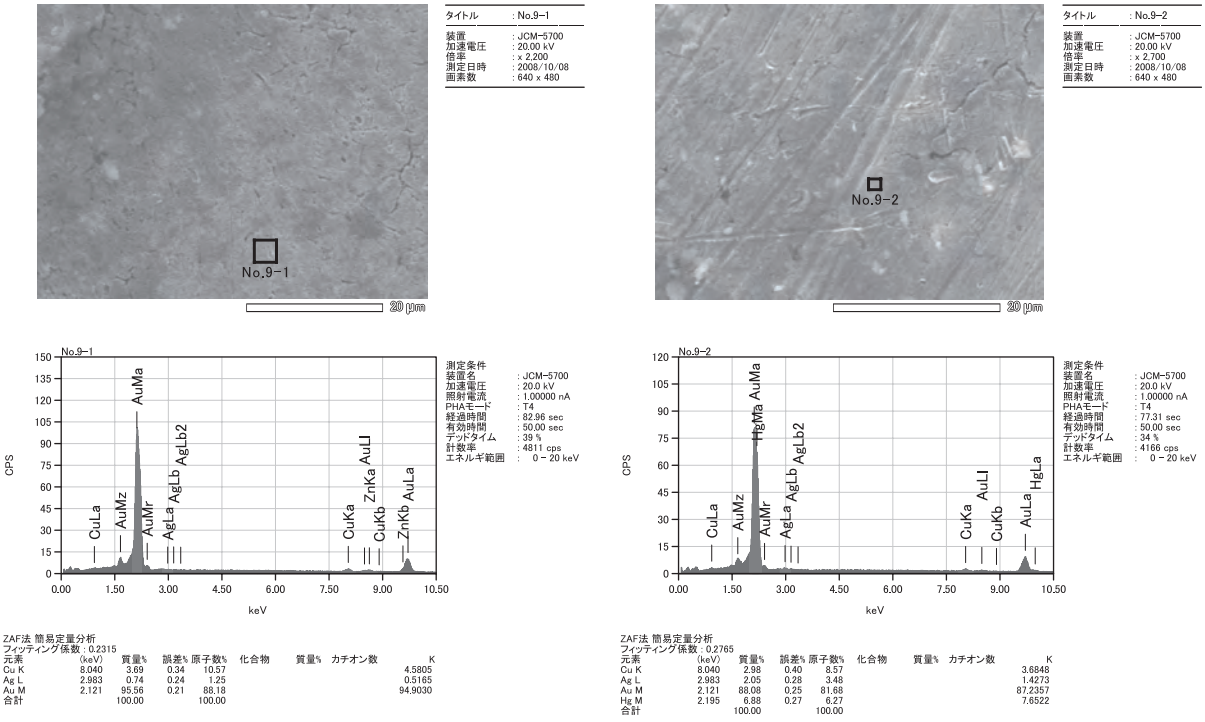
第３図　№4（B 17）杏葉付着金箔の SEM － EDS 分析結果



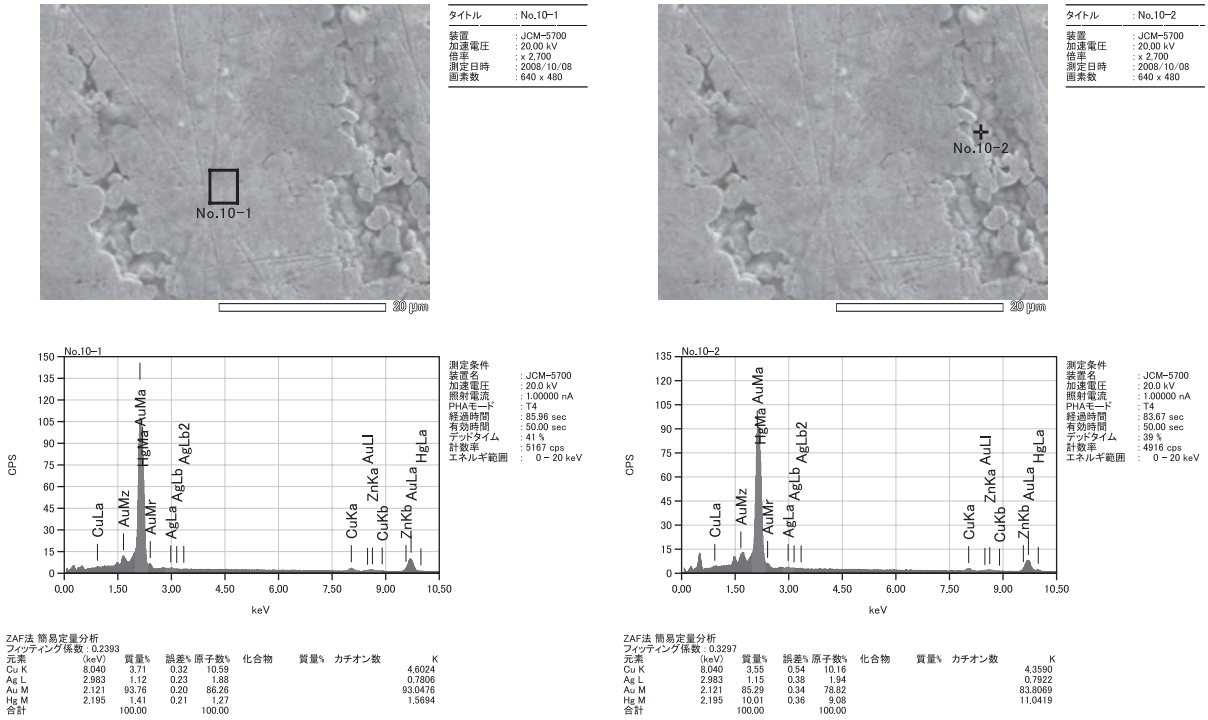
第４図　№5（B 16）杏葉付着金箔の SEM － EDS 分析結果



第５図　No.８（B 19）杏葉付着金箔の SEM － EDS 分析結果



第６図　No.９（B 20）杏葉付着金箔の SEM － EDS 分析結果



タイトル : No.10-1
装置 : JCM-5700
加速電圧 : 20.00 kV
倍率 : x 2,700
測定日時 : 2008/10/08
画素数 : 640 x 480

タイトル : No.10-2
装置 : JCM-5700
加速電圧 : 20.00 kV
倍率 : x 2,700
測定日時 : 2008/10/08
画素数 : 640 x 480

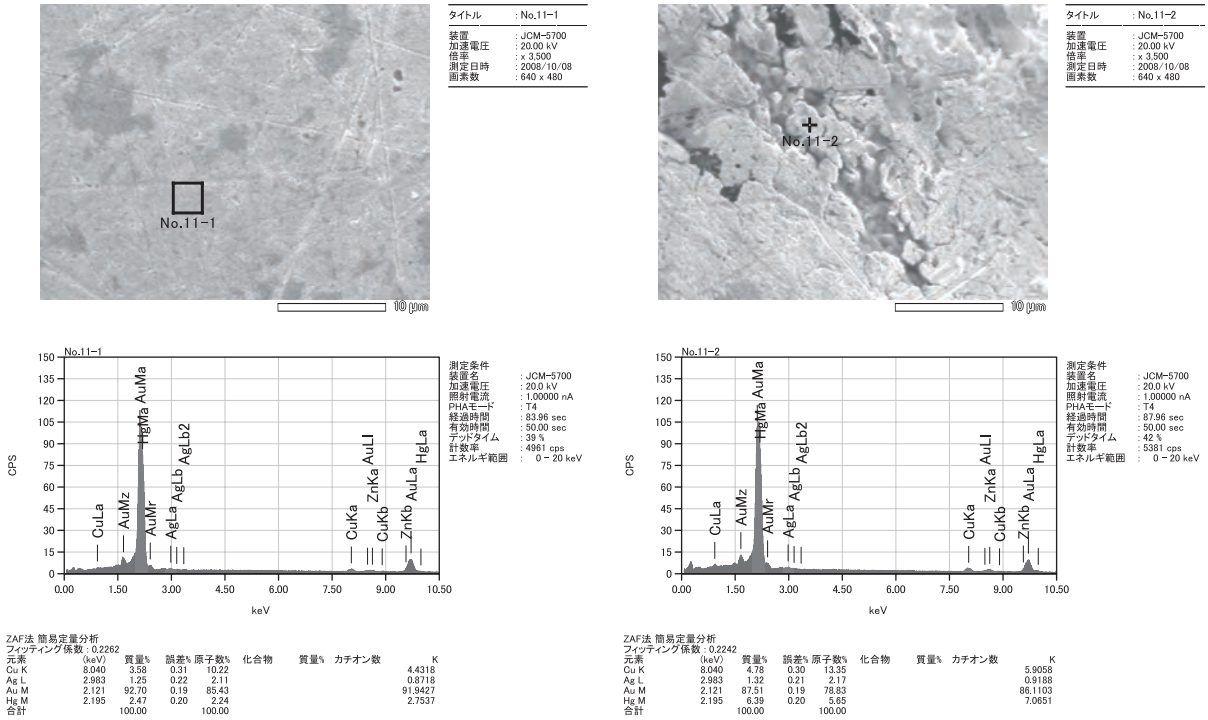
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2393

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	3.71	0.32	10.59				4.6024
Ag L	2.983	1.12	0.23	1.88				0.7806
Au M	2.121	93.76	0.20	86.26				93.0476
Hg M	2.195	1.41	0.21	1.27				1.5694
合計		100.00		100.00				

ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.3297

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	3.55	0.54	10.16				4.3590
Ag L	2.983	1.15	0.38	1.94				0.7922
Au M	2.121	85.29	0.34	78.82				83.8069
Hg M	2.195	10.01	0.36	9.08				11.0419
合計		100.00		100.00				

第７図　No. 10（B 21）杏葉付着金箔の SEM － EDS 分析結果



タイトル : No.11-1
装置 : JCM-5700
加速電圧 : 20.00 kV
倍率 : x 3,500
測定日時 : 2008/10/08
画素数 : 640 x 480

タイトル : No.11-2
装置 : JCM-5700
加速電圧 : 20.00 kV
倍率 : x 3,500
測定日時 : 2008/10/08
画素数 : 640 x 480

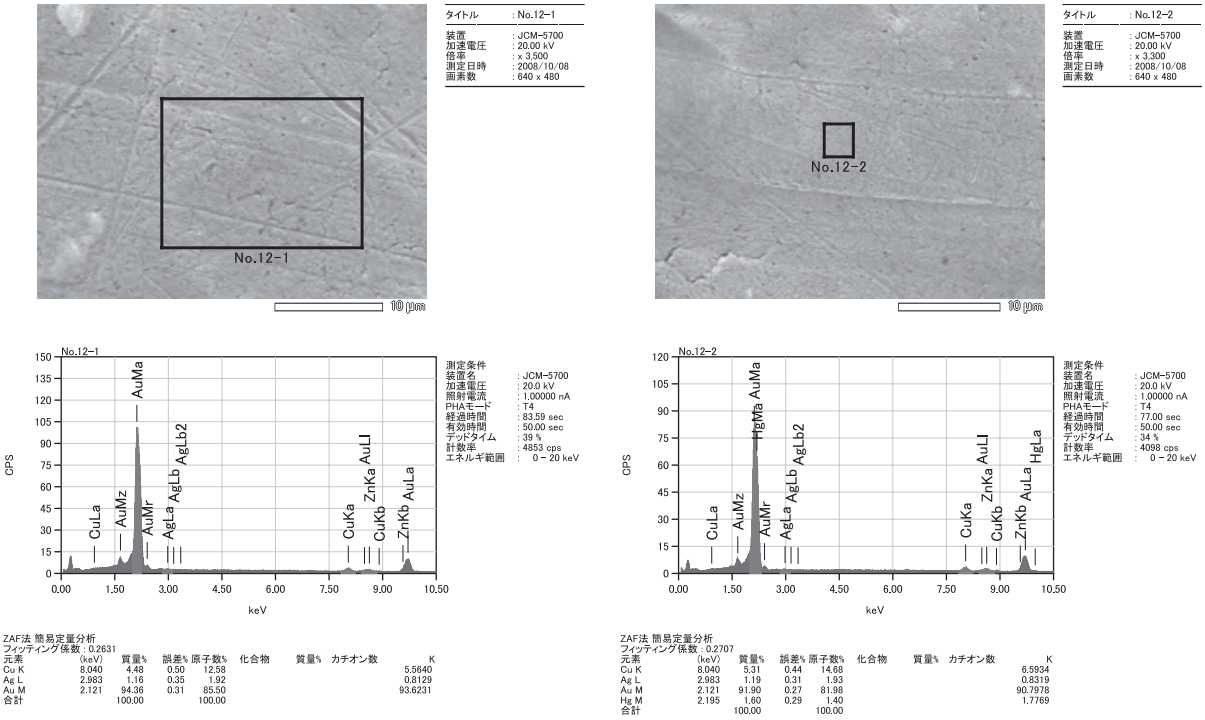
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2262

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	3.58	0.31	10.22				4.4318
Ag L	2.983	1.25	0.22	2.11				0.8718
Au M	2.121	92.70	0.19	85.43				91.9427
Hg M	2.195	2.47	0.20	2.24				2.7537
合計		100.00		100.00				

ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2242

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	4.78	0.30	13.35				5.9058
Ag L	2.983	1.32	0.21	2.17				0.9188
Au M	2.121	87.51	0.19	78.83				86.1103
Hg M	2.195	6.39	0.20	5.65				7.0651
合計		100.00		100.00				

第８図　No. 11（B 14 － 1）鏡板付着金箔の SEM － EDS 分析結果



タイトル　: No.12-1
装置　: JCM-5700
加速電圧　: 20.00 kV
倍率　: x 3,500
測定日時　: 2008/10/08
画素数　: 640 x 480

タイトル　: No.12-2
装置　: JCM-5700
加速電圧　: 20.00 kV
倍率　: x 3,300
測定日時　: 2008/10/08
画素数　: 640 x 480

測定条件
装置名　: JCM-5700
加速電圧　: 20.0 kV
照射電流　: 1.00000 nA
PHAモード　: T4
経過時間　: 83.59 sec
有効時間　: 50.00 sec
デッドタイム　: 39 %
計数率　: 4853 cps
エネルギ範囲　: 0 - 20 keV

測定条件
装置名　: JCM-5700
加速電圧　: 20.0 kV
照射電流　: 1.00000 nA
PHAモード　: T4
経過時間　: 77.00 sec
有効時間　: 50.00 sec
デッドタイム　: 34 %
計数率　: 4098 cps
エネルギ範囲　: 0 - 20 keV

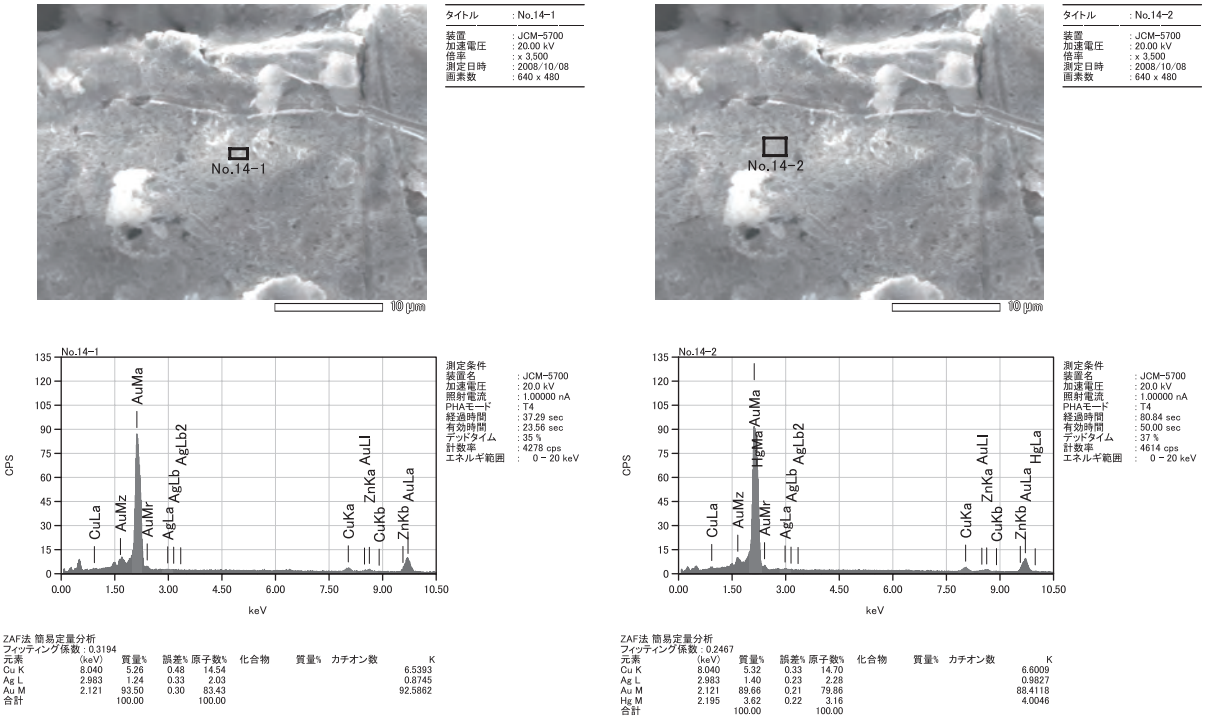
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2631

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	4.48	0.50	12.58				5.5640
Ag L	2.983	1.16	0.35	1.92				0.8129
Au M	2.121	94.36	0.31	85.50				93.6231
合計		100.00		100.00				

ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2707

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	5.31	0.44	14.68				6.5934
Ag L	2.983	1.19	0.31	1.93				0.8319
Au M	2.121	91.90	0.27	81.98				90.7978
Hg M	2.195	1.60	0.29	1.40				1.7769
合計		100.00		100.00				

第９図　No.12（B 14 － 2）鏡板付着金箔の SEM － EDS 分析結果



タイトル　: No.14-1
装置　: JCM-5700
加速電圧　: 20.00 kV
倍率　: x 3,500
測定日時　: 2008/10/08
画素数　: 640 x 480

タイトル　: No.14-2
装置　: JCM-5700
加速電圧　: 20.00 kV
倍率　: x 3,500
測定日時　: 2008/10/08
画素数　: 640 x 480

測定条件
装置名　: JCM-5700
加速電圧　: 20.0 kV
照射電流　: 1.00000 nA
PHAモード　: T4
経過時間　: 37.29 sec
有効時間　: 23.56 sec
デッドタイム　: 35 %
計数率　: 4278 cps
エネルギ範囲　: 0 - 20 keV

測定条件
装置名　: JCM-5700
加速電圧　: 20.0 kV
照射電流　: 1.00000 nA
PHAモード　: T4
経過時間　: 80.84 sec
有効時間　: 50.00 sec
デッドタイム　: 37 %
計数率　: 4614 cps
エネルギ範囲　: 0 - 20 keV

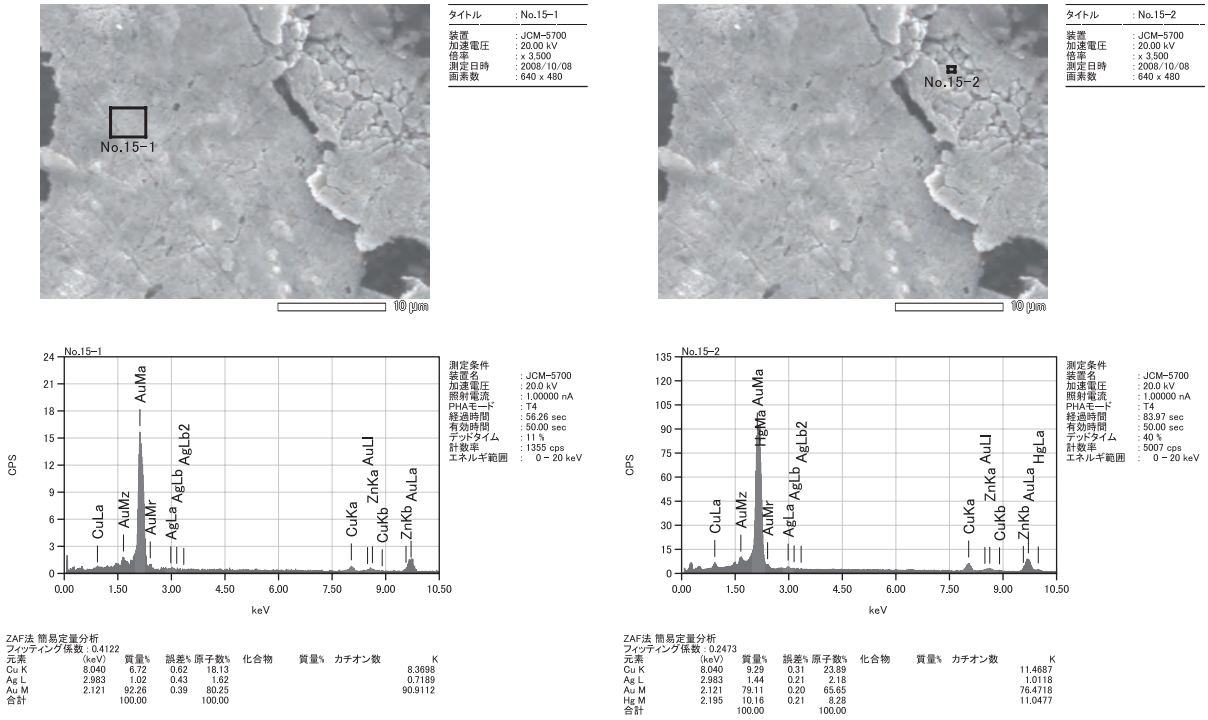
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.3194

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	5.26	0.48	14.54				6.5393
Ag L	2.983	1.24	0.33	2.03				0.8745
Au M	2.121	93.50	0.30	83.43				92.5862
合計		100.00		100.00				

ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2467

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	5.32	0.33	14.70				6.6009
Ag L	2.983	1.40	0.23	2.28				0.9827
Au M	2.121	89.66	0.21	79.86				88.4118
Hg M	2.195	3.62	0.22	3.16				4.0046
合計		100.00		100.00				

第 10 図　No. 14（B 12・42）鉸具・飾金具付着金箔の SEM － EDS 分析結果



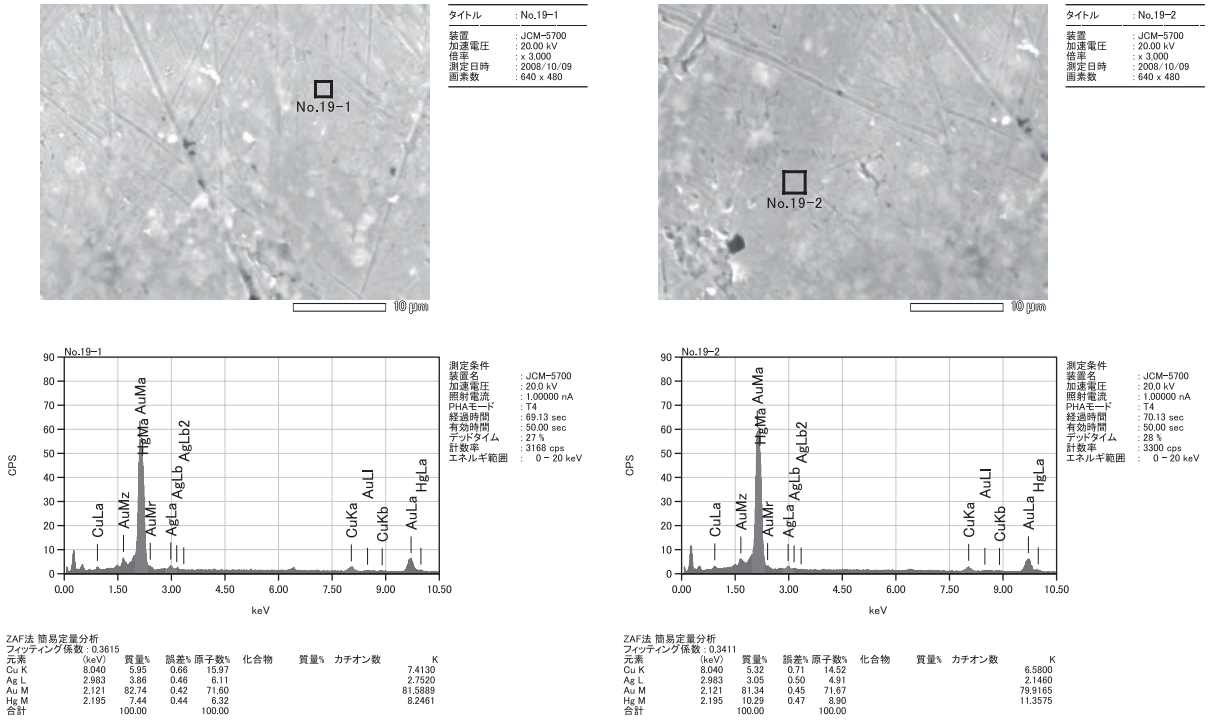
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.4122

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	6.72	0.62	18.13				8.3698
Ag L	2.983	1.02	0.43	1.62				0.7189
Au M	2.121	92.26	0.39	80.25				90.9112
合計		100.00		100.00				

ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2473

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	9.29	0.31	23.89				11.4687
Ag L	2.983	1.44	0.21	2.18				1.0118
Au M	2.121	79.11	0.20	65.65				76.4718
Hg M	2.195	10.16	0.21	8.28				11.0477
合計		100.00		100.00				

第 11 図　No. 15（B 32）鉸具付着金箔の SEM － EDS 分析結果



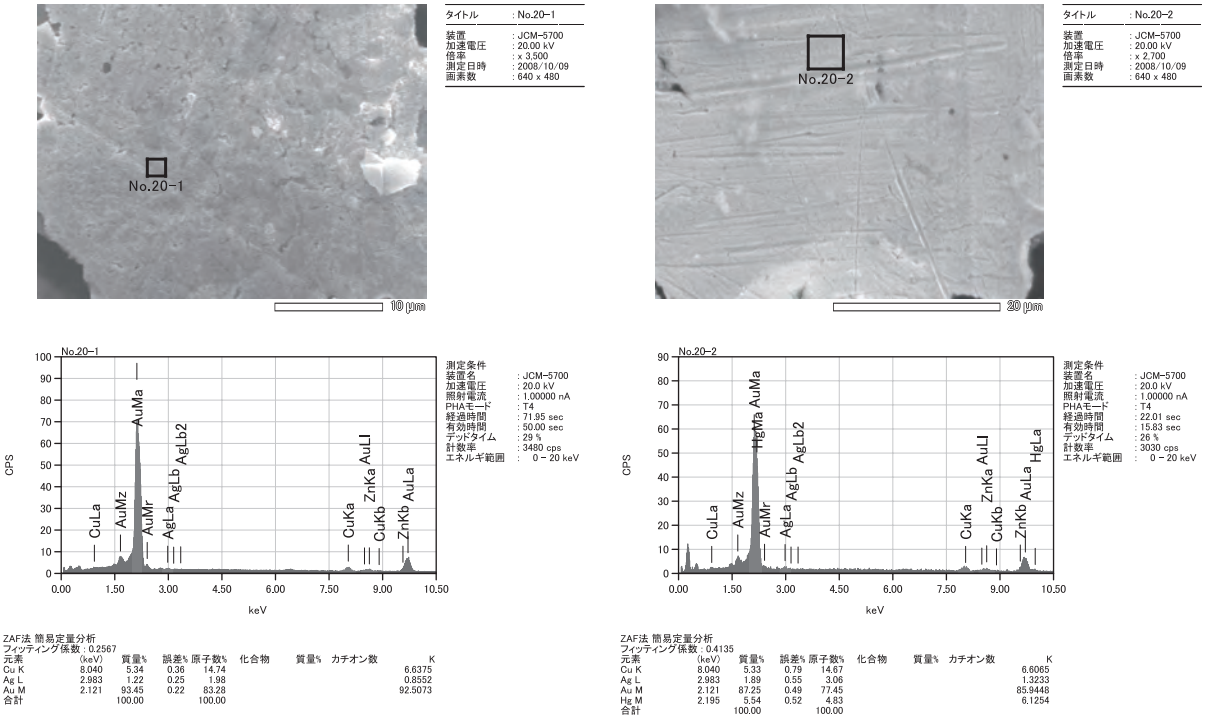
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.3615

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	5.95	0.66	15.97				7.4130
Ag L	2.983	3.86	0.46	6.11				2.7520
Au M	2.121	82.74	0.42	71.60				81.5889
Hg M	2.195	7.44	0.44	6.32				8.2461
合計		100.00		100.00				

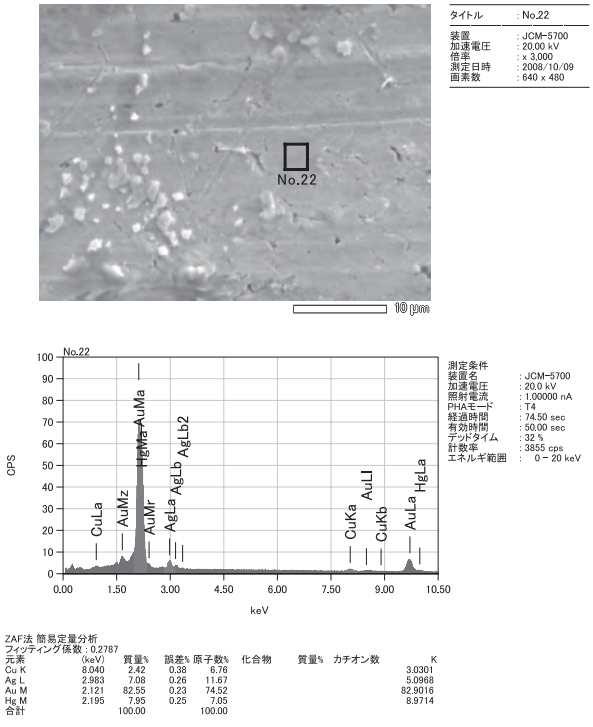
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.3411

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	5.32	0.71	14.52				6.5800
Ag L	2.983	3.05	0.50	4.91				2.1460
Au M	2.121	81.34	0.45	71.67				79.9165
Hg M	2.195	10.29	0.47	8.90				11.3575
合計		100.00		100.00				

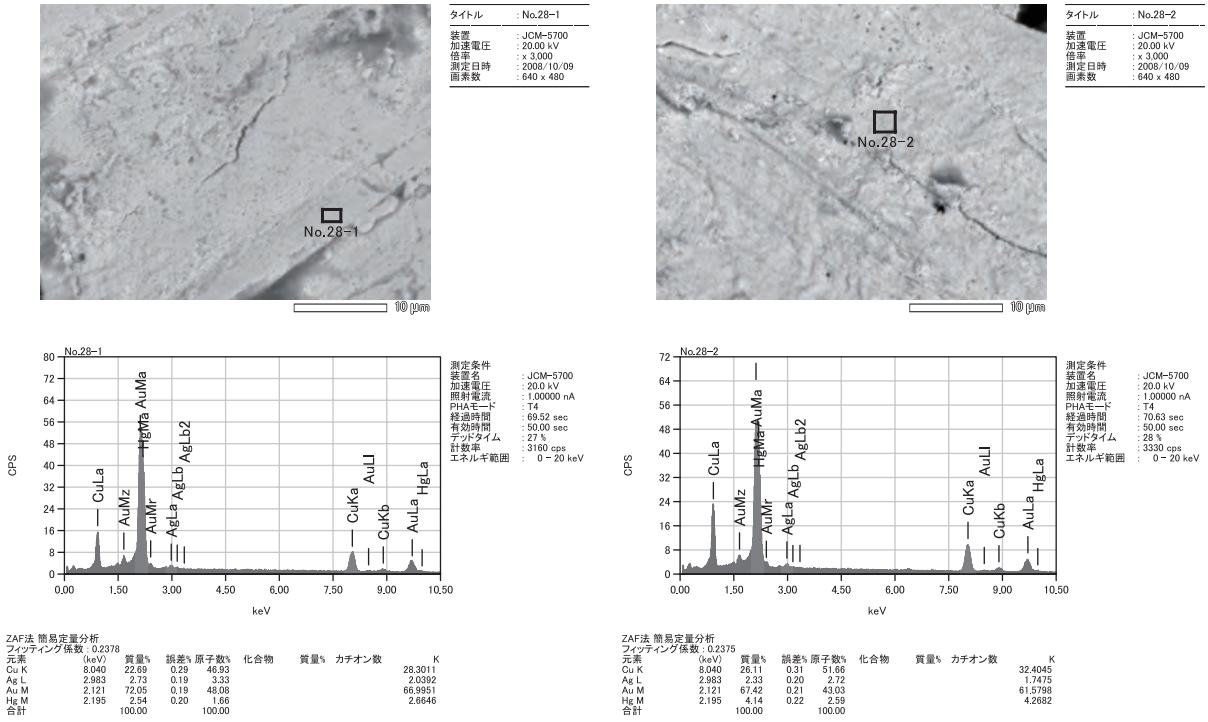
第 12 図　No. 19（B 27）辻金具付着金箔の SEM － EDS 分析結果



第 13 図　No. 20（B 26）辻金具付着金箔の SEM － EDS 分析結果



第 14 図　No. 22（B 23）辻金具付着金箔の SEM － EDS 分析結果



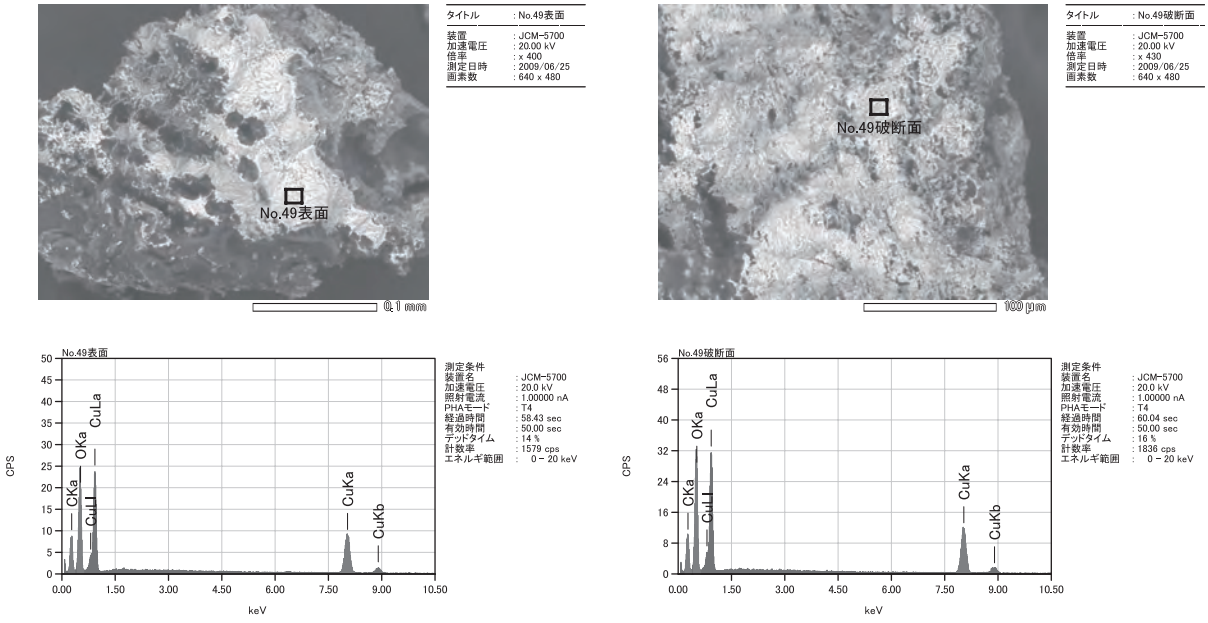
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2378

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	22.69	0.29	46.93				28.3011
Ag L	2.983	2.73	0.19	3.33				2.0392
Au M	2.121	72.05	0.19	48.08				66.9951
Hg M	2.195	2.54	0.20	1.66				2.6646
合計		100.00		100.00				

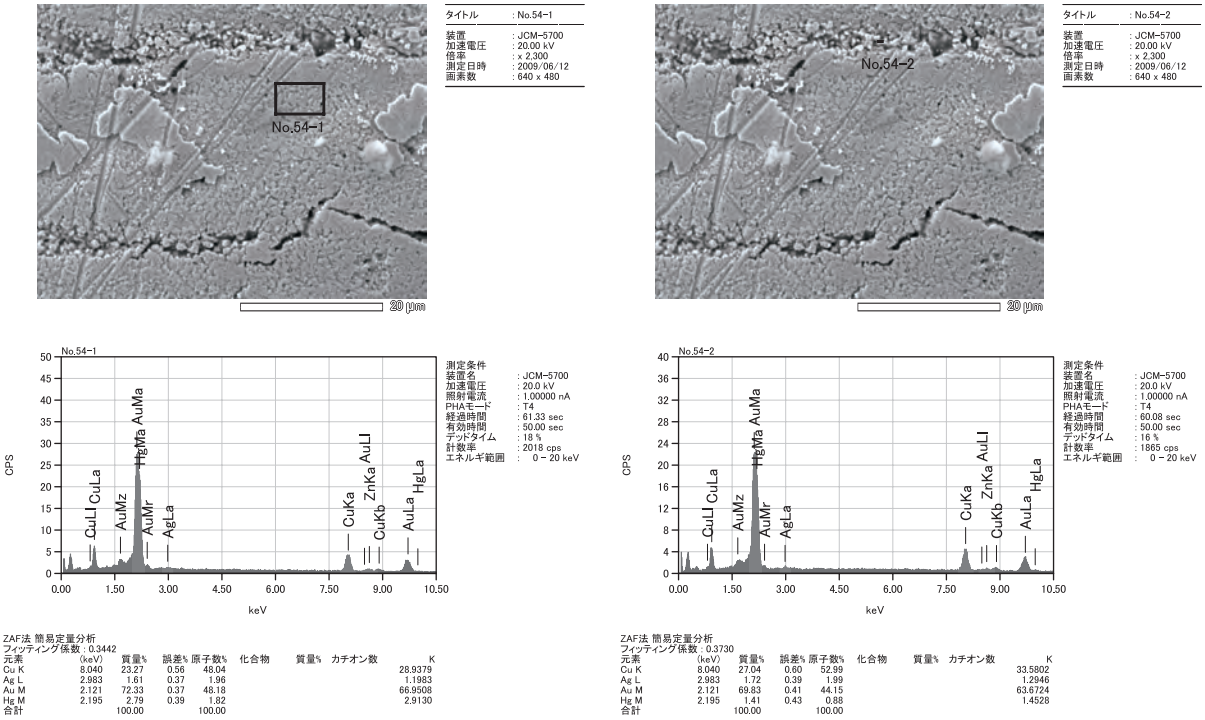
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.2375

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	26.11	0.31	51.66				32.4045
Ag L	2.983	2.33	0.20	2.72				1.7475
Au M	2.121	67.42	0.21	43.03				61.5798
Hg M	2.195	4.14	0.22	2.59				4.2682
合計		100.00		100.00				

第 15 図　No. 28（S 1）大刀付着金箔の SEM － EDS 分析結果



第 16 図　No. 49（B 1）鞍の SEM － EDS 分析結果



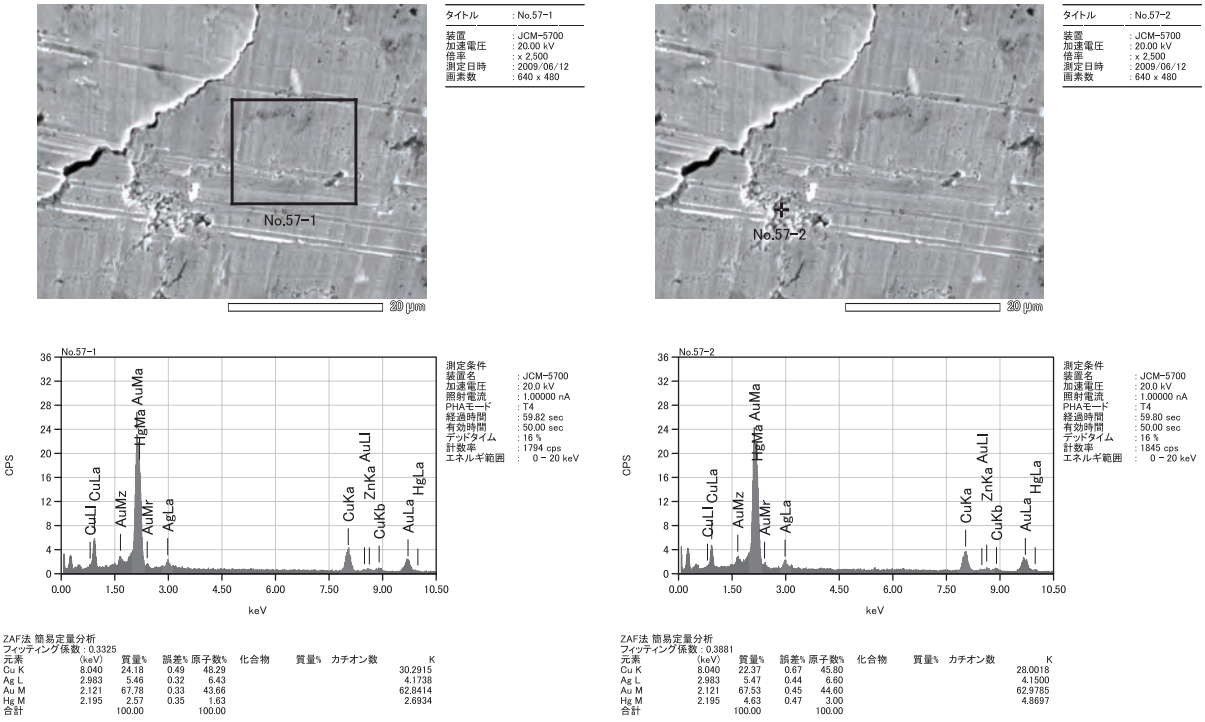
ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.3442

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	23.27	0.56	48.04				28.9379
Ag L	2.983	1.61	0.37	1.96				1.1983
Au M	2.121	72.33	0.37	48.18				66.9508
Hg M	2.195	2.79	0.39	1.82				2.9130
合計		100.00		100.00				

ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.3730

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	27.04	0.60	52.99				33.5802
Ag L	2.983	1.72	0.39	1.99				1.2946
Au M	2.121	69.83	0.41	44.15				63.6724
Hg M	2.195	1.41	0.43	0.88				1.4528
合計		100.00		100.00				

第 17 図　№ 54（Ｓ１～４）大刀，木質片＋金の SEM － EDS 分析結果



ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.3325

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	24.18	0.49	48.29				30.2915
Ag L	2.983	5.46	0.32	6.43				4.1738
Au M	2.121	67.78	0.33	43.66				62.8414
Hg M	2.195	2.57	0.35	1.63				2.6934
合計		100.00		100.00				

ZAF法 簡易定量分析
フィッティング係数 : 0.3881

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	カチオン数	K
Cu K	8.040	22.37	0.67	45.80				28.0018
Ag L	2.983	5.47	0.44	6.60				4.1500
Au M	2.121	67.53	0.45	44.60				62.9785
Hg M	2.195	4.63	0.47	3.00				4.8697
合計		100.00		100.00				

第 18 図　№ 57（Ａ８）鈴の SEM － EDS 分析結果

第２表　金箔の半定量結果

No.	挿図番号	分析位置	簡易定量分析結果（質量%）					三成分平均比率（%）		
			金（Au）	銀（Ag）	銅（Cu）	水銀（Hg）	合計（質量 %）	金（Au）	銀（Ag）	銅（Cu）
1	B 13	No. 1 － 1	93.29	1.28	5.43		100.00	91.35	1.35	7.30
		No. 1 － 2	77.89	1.23	7.99	12.89	100.00			
2	B 18	No. 2 － 1	76.95	6.14	7.59	9.31	100.00	87.74	5.9	6.36
		No. 2 － 2	82.20	4.56	3.94	9.30	100.00			
4	B 17	No. 4 － 1	93.32	1.12	5.56		100.00	92.74	1.06	6.20
		No. 4 － 2	83.16	0.90	6.17	9.77	100.00			
5	B 16	No. 5	96.79	1.23	1.98		100.00	96.79	1.23	1.98
8	B 19	No. 8 － 1	93.89	1.13	4.97		100.00	93.20	1.40	5.40
		No. 8 － 2	90.92	1.63	5.72	1.73	100.00			
9	B 20	No. 9 － 1	95.56	0.74	3.69		100.00	95.08	1.47	3.45
		No. 9 － 2	88.08	2.05	2.98	6.88	100.00			
10	B 21	No. 10 － 1	93.76	1.12	3.71	1.41	100.00	94.94	1.21	3.85
		No. 10 － 2	85.29	1.15	3.55	10.01	100.00			
11	B 14 －1	No. 11 － 1	92.70	1.25	3.58	2.47	100.00	94.26	1.35	4.39
		No. 11 － 2	87.51	1.32	4.78	6.39	100.00			
12	B 14 － 2	No. 12 － 1	94.36	1.16	4.48		100.00	93.87	1.19	4.94
		No. 12 － 2	91.90	1.19	5.31	1.60	100.00			
14	B 12・42	No. 14 － 1	93.50	1.24	5.26		100.00	93.26	1.35	5.39
		No. 14 － 2	89.66	1.40	5.32	3.62	100.00			
15	B 32	No. 15 － 1	92.26	1.02	6.72		100.00	90.16	1.31	8.53
		No. 15 － 2	79.11	1.44	9.29	10.16	100.00			
19	B 27	No. 19 － 1	82.74	3.86	5.95	7.44	100.00	90.03	3.79	6.18
		No. 19 － 2	81.34	3.05	5.32	10.29	100.00			
20	B 26	No. 20 － 1	93.45	1.22	5.34		100.00	92.90	1.61	5.49
		No. 20 － 2	87.25	1.89	5.33	5.54	100.00			
22	B 23	No. 22	82.55	7.08	2.42	7.95	100.00	89.68	7.69	2.63
28	S 1	No. 28 － 1	72.05	2.73	22.69	2.54	100.00	72.12	2.62	25.26
		No. 28 － 2	67.42	2.33	26.11	4.14	100.00			
54	S 1－1～4	No. 54 － 1	72.33	1.61	23.27	2.79	100.00	72.60	1.70	25.7
		No. 54 － 2	69.83	1.72	27.04	1.41	100.00			
57	A 8	No. 57 － 1	67.78	5.46	24.18	2.57	99.99	70.19	5.67	24.14
		No. 57 － 2	67.53	5.47	22.37	4.63	100.00			

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
管球ターゲット元素	Rh
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	219
コリメータ	φ 10.0㎜
励起電圧（kV）	50
管電流（μ A）	5
フィルター	なし
マイラー	OFF
雰囲気	大気

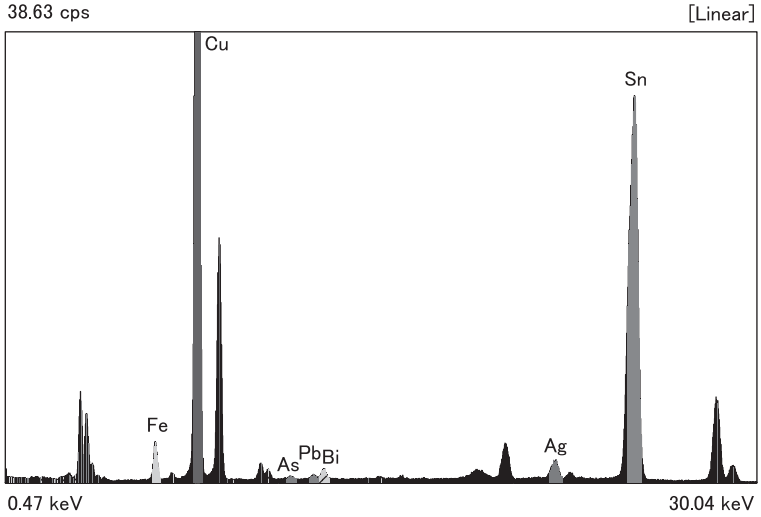
［定量条件］

分析手法	バルク FP

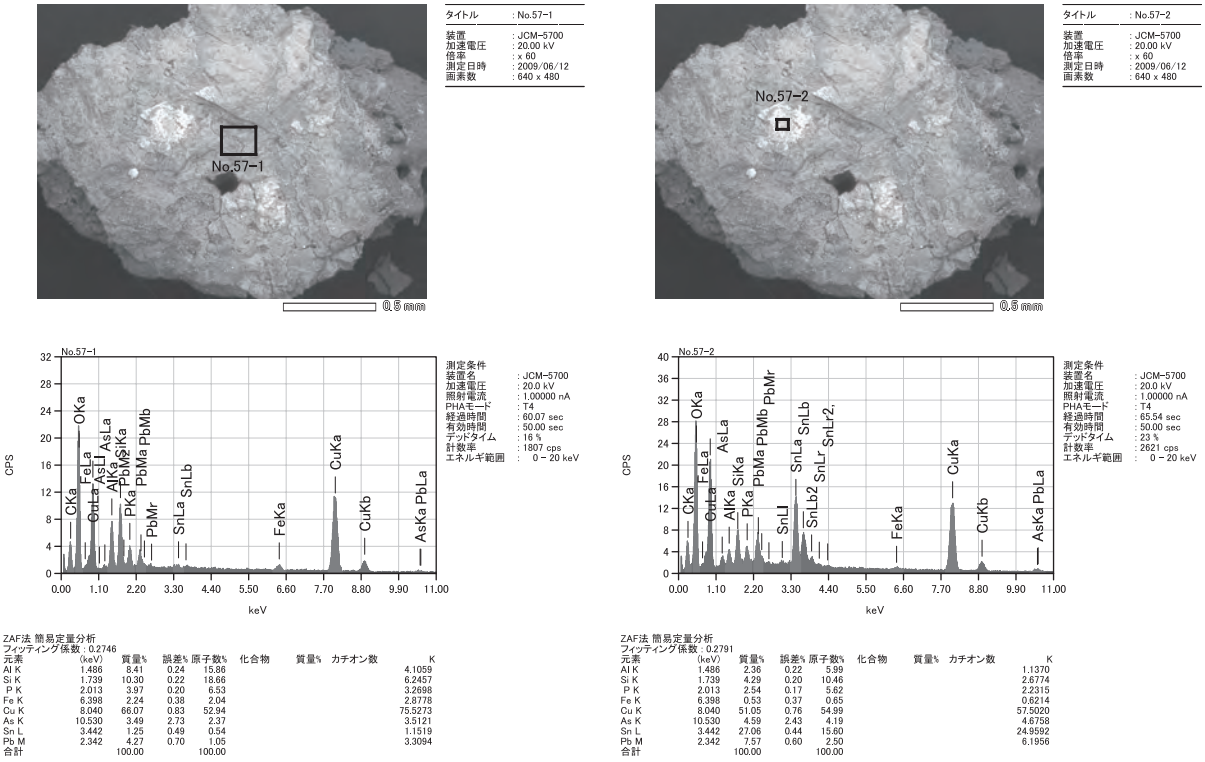
［定量結果］

Fe	1.51（wt%）	27.00（± 0.374）（cps）
Cu	48.67（wt%）	1128.210（± 2.272）（cps）
As	0.57（wt%）	2.747（± 0.193）（cps）
Ag	0.98（wt%）	23.897（± 0.387）（cps）
Sn	47.30（wt%）	608.990（± 1.675）（cps）
Pb	0.30（wt%）	4.190（± 0.211）（cps）
Bi	0.66（wt%）	9.796（± 0.269）（cps）

［Ｘ線スペクトル］



第 19 図　No. 26（Ｓ３－１）柄頭の蛍光Ｘ線（EDX）の分析結果



第 20 図　No. 58（M１）珠文鏡Ｂ断片の SEM － EDS 分析結果

第３表　銅鏡の半定量結果

No.	挿図番号	分析位置	簡易定量分析結果（質量%）								
			銅（Cu）	錫（Sn）	鉛（Pb）	鉄（Fe）	ヒ素（As）	ケイ素（Si）	アルミニウム（Al）	リン（P）	合計(質量 %)
58	M１	No.58 － 1	66.06	1.25	4.27	2.24	3.49	10.30	8.41	3.97	99.99
		No.58 － 2	51.05	27.06	7.57	0.53	4.59	4.29	2.36	2.54	99.99

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
管球ターゲット元素	Rh
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	220
コリメータ	φ 10.0㎜
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	6
フィルター	なし
マイラー	OFF
雰囲気	大気
コメント	No. 53（A1）金環

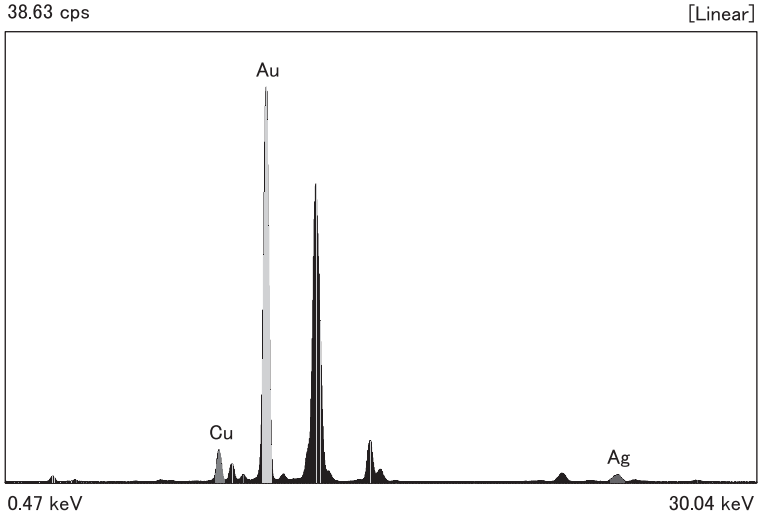
［定量条件］

分析手法	バルク FP

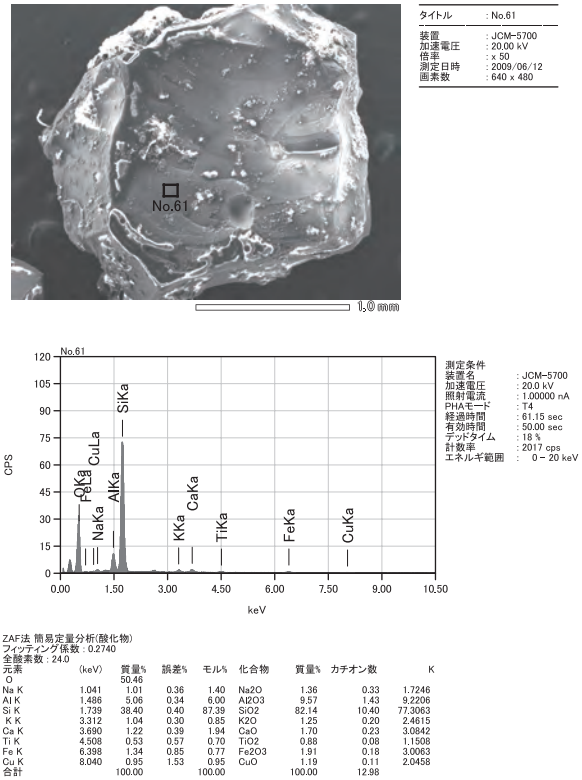
［定量結果］

Au	94.21（wt%）	996.419（± 2.138）（cps）
Ag	2.82（wt%）	30.451（± 0.390）（cps）
Cu	2.97（wt%）	72.431（± 0.597）（cps）

［Ｘ線スペクトル］



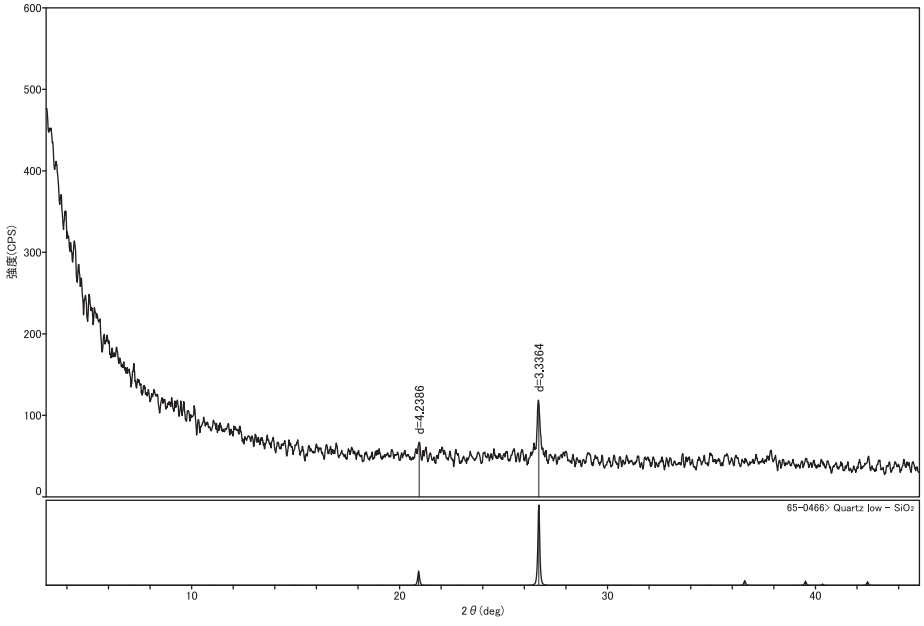
第 21 図　No. 53（Ａ１）金環の蛍光Ｘ線（EDX）の分析結果



第 22 図　No. 61（A 3）ガラス勾玉の SEM － EDS 分析結果

第４表　ガラスの半定量結果

No.	挿図番号	分析位置	簡易定量分析結果（酸化物質量%）								
			SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	CaO	Na_2O	K_2O	CuO	合計（質量 %）
61	A 3	No.61	82.14	0.88	9.57	1.91	1.70	1.36	1.25	1.19	100.00



第 23 図　No. 58（M 1）珠文鏡Ｅ断片のＸ線回折図

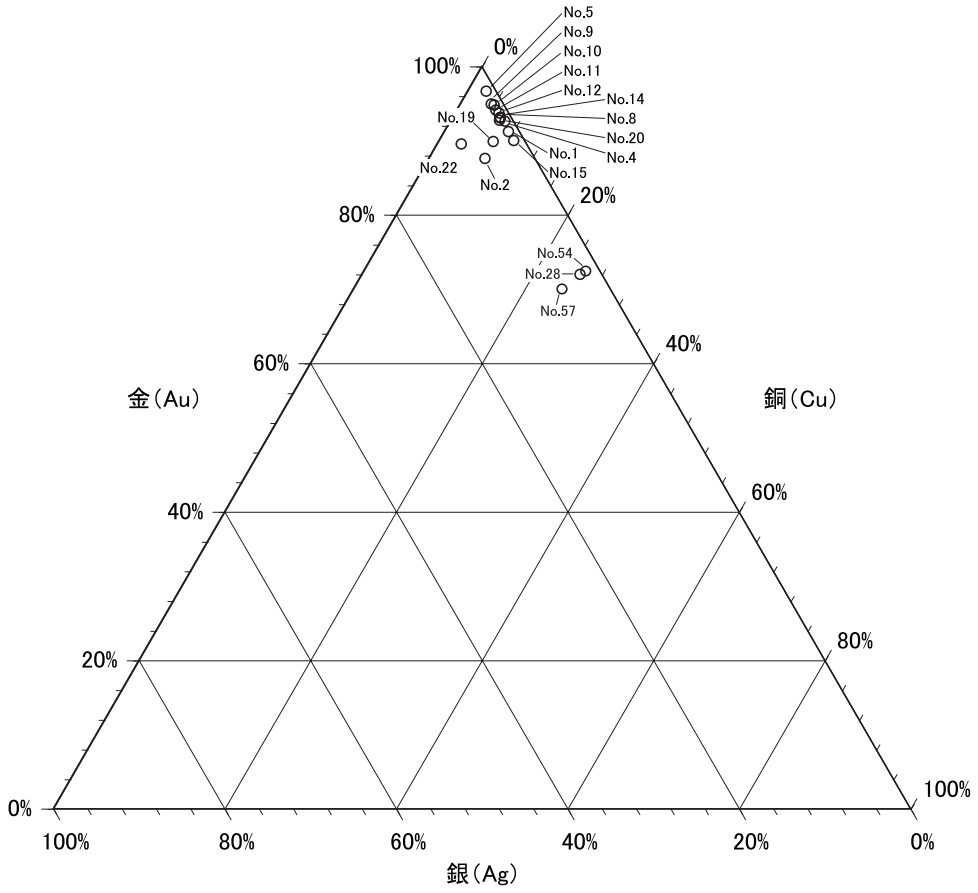
（４）　考　察

１）金箔について

古代金製品の材質は，基本的には金と銀の合金である。また，銅も含まれるが微量であることがほとんどである。金に銀が含まれると青味が増し，銅が含まれると赤味が増すことから，近世の金工では前者は「青金」，後者は「赤金」と呼ばれており，古代の金製品では「青金」が主流であったと考えられている。金の純度はカラット（K）で表され，純金（100％）を 24K とする。通常は 18K（75％）程度の金が使われることが多い（村上 2003）。

今回の分析結果をまとめた第２表には，金－銀－銅の三成分における平均比率を掲げているが，これを見ると馬具類は 21K ～ 23K 程度の純度であり，ほぼ純金に近い素材が利用されていたことが窺える。一方，大刀№ 28・№ 54 と鈴№ 57 の金箔は 17K 程度で，銅が約 25％含まれる特徴から，「赤金」と考えられる稀な材質であることが指摘される。

さらに，材質の特徴を視覚的に捉えるために，金－銀－銅の三成分における平均比率をダイヤグラムにして第 24 図に示した。「赤金」と考えられる３点を除き，金箔試料の中では若干組成的な違いが認められ，1.0 ～ 1.6％と安定した銀濃度を示すもの（№ 1，4，5，8，9，10，11，12，14，15，20）と，比較的銀濃度の高いもの（№ 2，19，22）に二分される。しかし，器種別に組成が異なるような傾向は把握できず，いまのところ組成が異なる理由について詳細は不明である。



第 24 図　金（Au）－銀（Ag）－銅（Cu）の三角ダイアグラム

なお，これら金箔ではNo.５を除きいずれも水銀が残存した状況が確認され，金アマルガム粒子が見られるものもいくつか認められていることから，金アマルガム法によって鍍金されたことが指摘される。また，No.５，No.14，No.28を除く試料表面には筋状の擦痕が認められ，No.２，No.４，No.10，No.11，No.15，No.20については金アマルガム粒子が平滑化された状況も観察されたことから，艶出し工程における篦磨きの痕跡と考えられる。

No.５の金箔については水銀が検出されず，金アマルガム粒子も観察されないことから，現段階で鍍金法についてはよくわからない。ただし，観察した試料が極微小なためこれらが検出できなかった可能性もあることから，他の試料同様金アマルガム法により製作された可能性も残される。今後，同試料については複数の金箔片を対象に，金アマルガム粒子の有無について観察するなど検証の余地があろう。

2）柄頭地金について

今回の非破壊蛍光Ｘ線分析結果によれば,銅と錫を主成分とした青銅であることが確認される。鉄，ヒ素，銀，鉛，ビスマスは，銅の精錬時に除去されずに残った不純元素と考えられる。本試料は高い濃度で錫を含む特徴から，白銅とも捉えられる材質である。銅－錫合金では，錫濃度が30％を超えると割れやすくなり，一般的には実用に耐えないとされている。試料が古墳に副葬されていることを考慮すれば，実用性よりも装飾性を重視して，高い濃度で錫を混入した可能性もある。しかし，錫が50％を占めるような高い濃度を示す背景には，何らかの理由で錫が表面に濃縮されたことや，銅の選択的溶出によって錫が見かけ上濃縮された可能性もあり，今回の結果のみでは判断できない。これは，蛍光Ｘ線分析法が表面分析法であることや，結果が半定量的なものであるため，材質の本質を言及することは困難であるためである。本来であれば，材質の本質については，試料内部の新鮮な部分での材質調査によって把握する必要がある。また，同様の遺物について成分に関する分析資料を蓄積することも必要であり，これらが今後の課題として残される。

３）銅鏡試料

今回の半定量結果によれば，測定した２箇所はいずれも主成分は銅であるが，錫の占める割合が大きく異なっており,錆化の過程で分離生成した腐食生成物の特徴を反映した結果と捉えられる。また,検出された元素のうち，ケイ素やアルミニウム，鉄，リンは錆化の過程で腐食生成物中に取り込まれた覆土などに因るところが大きいと思われる。なお，銅以外に検出された金属元素に錫と鉛が認められることから，その材質はいわゆる鉛入り青銅（Cu－Sn－Pb系）と考えられる。

４）金環試料

一般的な耳環は銅などを芯材とし，薄板や箔張あるいは鍍金によって表面被覆されていることが多い。今回の試料は完形品であり，芯材の露出した部分は見られていないため，金環自体が金製なのか，銅などの素材を芯材としたものかは，今回の分析結果のみでは判断し難い。なお今回の結果は，金アマルガム法によって鍍金された可能性を肯定するに至る水銀（Hg）の存在は確認されていないが，このことで鍍金等の可能性を否定することもまたできない。今後，金環内部の情報や製作技法に関する調査の実施がのぞまれる。

５）ガラス試料

古代ガラスの化学組成に関する分類基準は現在のところ，まだ体系的な基準は設けられていないが，山崎（1990）によれば古代のガラス製品は融剤に主として鉛を用いた鉛ガラスとナトリウム・カリウム等アルカリ元素を用いたアリカリ石灰ガラスに大別される。また，近年では肥塚（1995，1999，2001）による詳細な検討がなされており，融剤の種類によってアルカリ珪酸塩ガラス，鉛珪酸塩ガラス，アルカリ鉛珪酸塩ガラスに大別しているほか，構成酸化物の種類と量によってアルカリ珪酸塩ガラスを K_2O-SiO_2 系，$Na_2O-CaO-SiO_2$ 系，$K_2O-CaO-SiO_2$ 系，$Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$ 系，$(Na_2O/K_2O)-CaO-SiO_2$ 系に，鉛珪酸塩ガラスを $PbO-SiO_2$ 系，$PbO-BaO-SiO_2$ 系に，アルカリ鉛珪酸塩ガラスを $K_2O-PbO-SiO_2$ 系としている。

今回のガラス試料は鉛が検出されていないことから，アルカリ珪酸塩ガラスに属する材質と見られる。ただし，SiO_2 は約 82％と多く，Na_2O，K_2O，CaO などは１％強程度と少なく，現状では肥塚による詳細な分類にまで細分するには至らない。ところで，肥塚（1999）はガラスの風化表面と内部新鮮面では，カリガラスは風化表面で K_2O が減少し，SiO_2，Al_2O_3 が増加する傾向が，ソーダ石灰ガラスでは風化表面で Na_2O が減少し，SiO_2，Al_2O_3 が増加するほか，TiO_2，MnO，Fe_2O_3，CuO，PbO などの金属酸化物もやや増加する傾向があることを指摘している。風化の影響を受けている場合でも，外観上の変化をあまり伴わないアルカリ珪酸塩ガラスでは，風化による侵食をどの程度受けているのか推し量ることは難しいが，本ガラスの特異な組成にはこのような風化変質による組成変化が背景にある可能性がある。

６）赤色物試料

赤色を呈する代表的な顔料鉱物にはベンガラ（赤鉄鉱；hematite[$\alpha-Fe_2O_3$]）のほか，水銀朱（辰砂；cinnabar[HgS]），鉛丹（鉛丹；minium[Pb_3O_4]）などがあるが，今回珠文鏡Ｅ断片（№58）から検出された鉱物は石英（quartz）のみであり，上述の顔料鉱物は検出されていない。水酸化鉄のような低結晶度化合物あるいは非晶質化合物の可能性も挙げられるが，今回の提供試料が極少量であること，および提供試料の一部分のみが赤味がかった色彩を呈する程度であったことを踏まえれば，仮に結晶性の化合物であったとしても検出に至らなかった可能性がある。現段階で赤色の要因について言及することは難しく，今後追加試料を用いて再検証することがのぞまれる。また，必要量の確保が難しい状態であれば，微小部Ｘ線回折法などの他の調査手法による検証も可能と考える。

Ⅱ　副葬品等付着物の素材分析調査

１　木質の同定

（１）　試　料

試料は，№26 柄頭の内部に残存していた木質１点（Ｓ３－１），№28 大刀から採取された木質１点（Ｓ１），№54 大刀に付着していた木質片３点（Ｓ２木質片①，②，Ｓ１－１～４），№58 珠文鏡Ｂ断片に付着していた木質片１点（Ｍ１）の合計６点である（第５表）。いずれも炭化はみられず，鉄分が浸透して形状を保っている状態である。

（２）　分析方法

鉄分が浸透して硬くなっており，切片作成法による観察が困難であることから，炭化材と同様の方法で同定を行う。木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し，アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお，木材組織の名称や形状の特徴については，島地・伊東（1982），Wheeler 他（1998），Richter 他（2006）を参考にする。また，各分類群の組織配列については，林（1991），伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

（３）　結　果

樹種同定結果を第５表に示す。№26（Ｓ３－１）は常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属，№28（Ｓ１）は種類不明の針葉樹に，№54（Ｓ２）木質片①がヒノキ，木質片②がヒノキ科に同定された。一方，残る２点については，組織の保存状態が悪いために，種類の同定には至らなかった各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管を主体とする。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で，１分野に２～３個。放射組織は単列，１～10 細胞高。

樹脂細胞が認められなかったが，その他の特徴が一致することからヒノキに同定した。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管を主体とする。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は，スギ型あるいはヒノキ型であるが，保存が悪く詳細は不明である。放射組織は単列，１～10 細胞高。

樹脂細胞が観察した範囲で観察できないが，上記特徴に最も近い種類としてヒノキ科に同定した。分野壁孔が観察できない他は，上記ヒノキによく似ており，ヒノキの可能性がある。

・針葉樹

№28 の軸方向組織は，観察した範囲では仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで，晩材部の幅は狭い。仮道管内壁のらせん肥厚の有無は不明である。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は平滑で，じゅず状の肥厚は認められない。分野壁孔はヒノキ型あるいはスギ型で，１分野に２個。放射組織は単列，１～10 細胞高。

日本産針葉樹で，上記特徴に完全に一致する種類は存在しない。鉄分の浸透により，辛うじて残存している状況であるため，本来持っている形質や組織の一部が観察できなくなっていることが予想される。このような状況と，晩材部が狭いこと，柔細胞壁にじゅず状の肥厚を持たないこと，分野壁孔がヒノキ型あるいはスギ型であること等の特徴から，ヒノキ科，マキ属，カヤ，イヌガヤ等の可能性が考えられる。

一方，他の２点はいずれも保存状態が悪く，木口面のみ観察できた。軸方向組織が仮道管を主体とすることから，針葉樹材であるが，柾目・板目が観察できないことから種類は不明である。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で，管壁厚は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管の壁孔や穿孔板は観察できない。放射組織は同性，単列，１～15 細胞高。

コナラ属の特徴である複合放射組織，道管の穿孔板や壁孔が観察できないが，日本産広葉樹で放射孔材となる種類は少なく，上記の特徴に一致する特徴を有するのはアカガシ亜属のみであるため，本試料についてもアカガシ亜属に同定した。

第５表　木質の樹種同定結果

No.	挿図番号	名　称	部　位	樹　種
26	S３－1	柄頭	柄	コナラ属アカガシ亜属
28	S１	大刀	柄	針葉樹
51	M１	珠文鏡	B断片（木質片）	針葉樹
54	S２	大刀	木質片①	ヒノキ
			木質片②	ヒノキ科
	S１－1～4	大刀	木質片（金箔）	針葉樹

(4)　考　察

試料のうち，No.26 柄頭（Ｓ３－１）の木質は，柄頭の内部に残存していたものであり，柄の一部が腐らずに残ったものと考えられる。この試料は，アカガシ亜属に同定された。一方，No.54 大刀付着の木質片は，鞘や柄の一部に由来すると考えられる。Ｓ２の木質片①・②は針葉樹のヒノキとヒノキ科，Ｓ１－１～４は種類不明の針葉樹に同定され，大刀の鞘や柄にヒノキなどの針葉樹材が利用されていたことが推定される。一方，No.28 大刀（Ｓ１）から採取された木質は，採取位置から柄の木質が残存したものと考えられる。この試料は樹種不明であるが，組織の特徴からヒノキ科，マキ属，カヤ，イヌガヤ等の針葉樹と考えられる。そのうちヒノキ科はNo.54 大刀付着の木質片でも確認されており，木理が通直で割裂性が高く，加工は容易な種類が多い。一方，マキ属，カヤ，イヌガヤは，針葉樹としては重硬で緻密な材質を有し，加工はヒノキ科に比較すると困難である。また柄頭内部の木質に認められたアカガシ亜属は，重硬で強度が高い材質を有し，加工は困難な部類に入る。

島根県内では，古墳から出土した刀剣類の柄や鞘について樹種を明らかにした例が少ない。確認できた範囲では，岡田山１号墳（出雲市）から出土した刀の鞘と考えられる木質がブナ科に同定された例がある（松田 1987）。また，かわらけ谷横穴墓（安来市）から出土した刀の柄および鞘には，針葉樹のヒノキ属が利用されている（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター 2001）。この他，古墳以外の出土資料では，夫手遺跡（松江市）の古墳時代前期～中期とされる把頭にアカガシ亜属，前田遺跡（八雲村）の古墳時代後期とされる刀把装具にツバキ属等の事例が知られている（古野 2000，八雲村教育委員会 2001）。アカガシ亜属やヒノキ属の利用は，今回の結果とも同調的であり，同様の木材利用が推定される。

一方，珠文鏡に付着していた木質片は，鏡を収納した箱等に由来する可能性があり，種類不明の針葉樹に同定された。針葉樹材は，一般に割裂性が高く，加工が容易な種類が多いことから，中村１号

墳でも加工性の高い針葉樹材が箱に利用されていた可能性がある。

島根県内の古墳出土資料で箱の樹種を明らかにした例は確認できないが，五反配遺跡（出雲市）の古墳時代前期～中期とされる刳物箱に，針葉樹のスギが確認された例がある（島根県教育委員会2004）。針葉樹材が利用されている点で，今回の結果との関連が注意される。

２　刀子の観察

（１）　試　料

試料は，刀子のうち柄が残存している２点№23（Ｋ２），№25（Ｋ３）である。

（２）　分析方法

いずれも柄と思われる部分は小片であり，試料として一部を剥離することは困難である。そのままの大きさでは電子顕微鏡に入らないため，今回は実体顕微鏡を用いて組織の状況等を観察し，種類・由来などを検討することとした。

（３）　結　果

１）刀子　№23

全長約 16㎝で，所々に薄く柄材が残る。刀子の長軸方向に平行するように繊維が延びている。低倍率のため明瞭ではないが，細胞壁と思われる痕跡がある。また，節と思われる部分が認められる。

以上の特徴から，残存している柄材と思われる痕跡は，鹿角ではなく木材と考えられる。保存が悪いため，針葉樹か広葉樹かの区別も含めて種類は不明である。

２）鹿角製刀子　№25

全長約７㎝で，全体を包むように柄材が認められる。№23 よりも繊維細胞や細胞壁が明瞭に残ることから，本試料についても残存している部分は木材に由来すると考えられる。

（４）　考　察

今回の観察の結果，刀子の柄材と思われる痕跡はいずれも木質であり，柄には鹿角ではなく，木材が利用されたことが推定される。島根県内では，上野１号墳（宍道町）で古墳時代前期の刀子が出土しており，付着木質が広葉樹に同定されている（元興寺文化財研究所 2001）。しかし，この他には刀子の柄や鞘の材を明らかにした例は知られていず，柄や鞘の素材に関する資料はほとんど蓄積されていない状況であり，今後の資料蓄積がのぞまれる。　（パリノ・サーヴェイ株式会社　高橋　敦・斉藤紀行）

参考文献

古野　毅 2000「夫手遺跡出土木製品樹種鑑定調査報告書」『手角地区ふるさと農道整備事業にともなう夫手遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 81 集　松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団　107 ～ 112 頁

元興寺文化財研究所 2001「上野１号墳出土遺物樹種鑑定」『上野遺跡・竹ノ崎遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書９』島根県教育委員会　309 ～ 310 頁

林　昭三 1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫 1995『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ木材研究・資料 31』京都大学木質科学研究所　81 ～ 181 頁

伊東隆夫 1996『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ木材研究・資料 32』京都大学木質科学研究所　66 ～ 176 頁

伊東隆夫 1997『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ木材研究・資料 33』京都大学木質科学研究所　83 ～ 201 頁

伊東隆夫 1998『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ木材研究・資料 34』京都大学木質科学研究所　30 ～ 166 頁

伊東隆夫 1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ木材研究・資料 35』京都大学木質科学研究所　47 ～ 216 頁

肥塚隆保 1995「古代ガラスの材質」『古代に挑戦する自然科学』クバプロ　94 ～ 108 頁

肥塚隆保 1999「出土遺物の材質調査～日本で出土した古代ガラスの研究～」『理学電気ジャーナル』30 号 1 巻　理学電気工業　33 ～ 40 頁

肥塚隆保 2001「古代ガラスの材質と鉛同位体比」『同位体・質量分析法を用いた歴史資料の研究』国立歴史民族博物館研究報告第 86 集　財団法人歴史民族博物館振興会　233 ～ 268 頁

松田隆嗣 1987「鞘木の用材について」『出雲岡田山古墳群』島根県教育委員会　172 ～ 175 頁

村上　隆 2003「金工技術」『日本の美術』443　至文堂　98 頁

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）2006『針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト　伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）』海青社　70 頁　［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］

島地　謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社　176 頁

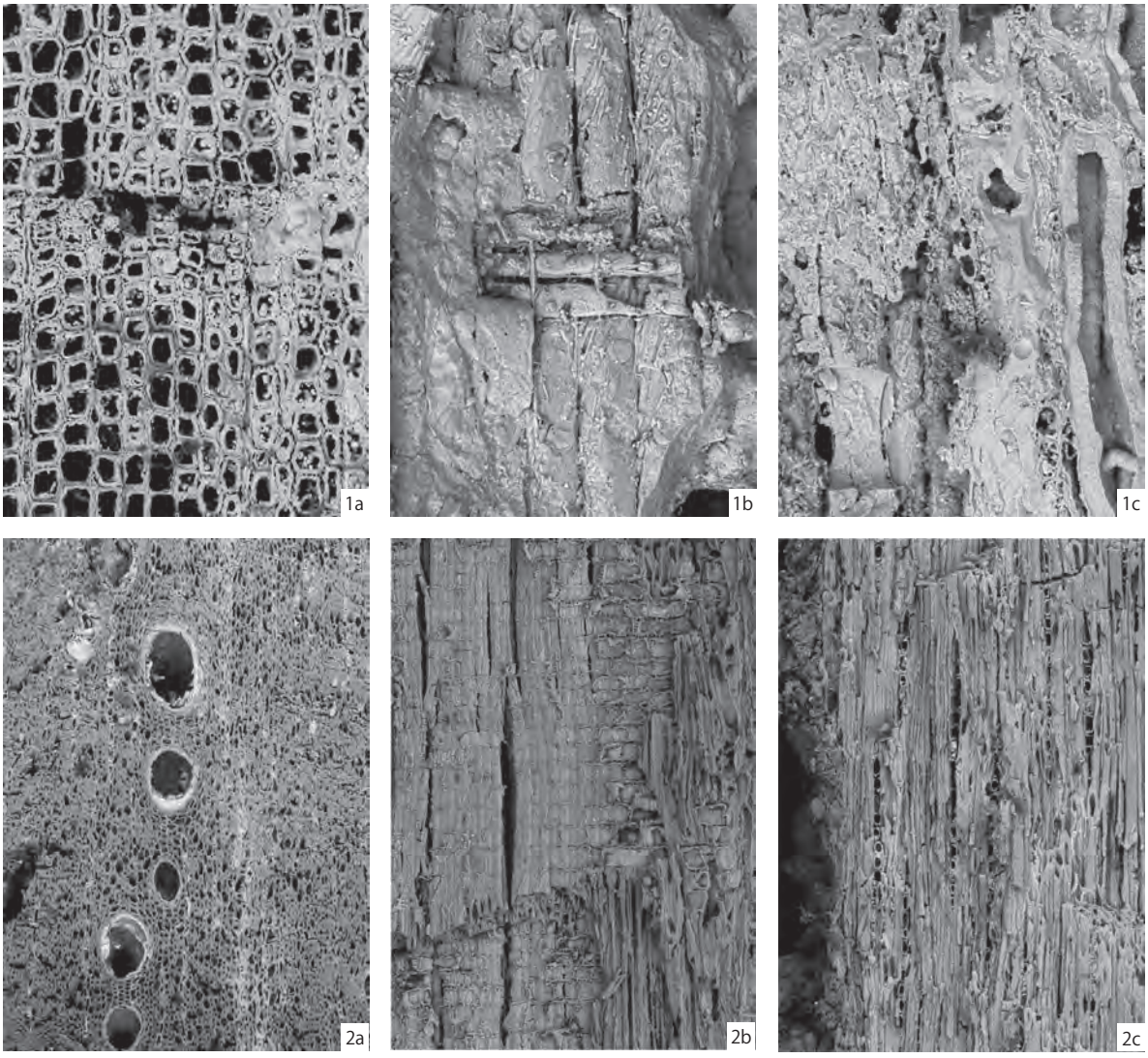
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター 2001「かわらけ谷横穴墓群の研究」『島根県古代文化センター調査研究報告』10　124 頁

島根県教育委員会 2004『五反配遺跡古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』40 頁

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）1998『広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト　伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）』海青社　122 頁　［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］

八雲村教育委員会 2001『前田遺跡（第Ⅱ調査区）一般国道 432 号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』八雲村文化財調査報告 19　192 頁

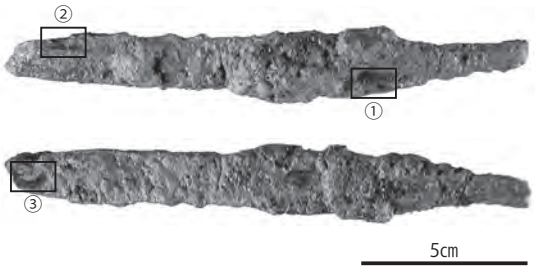
山崎一雄 1990「日本出土のガラスの化学的研究」『古文化財の科学』思文閣出版 274 ～ 300 頁



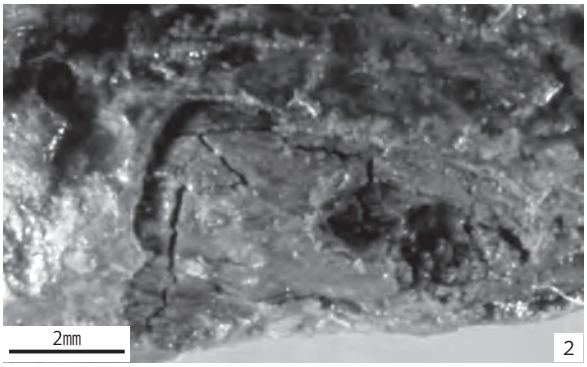
1　針葉樹（№28）
2　コナラ属アカガシ亜属（№26）
　ａ：木口，ｂ：柾目，ｃ：板目

200μm：2a
200μm：1a, 2b, c
100μm：1b, c

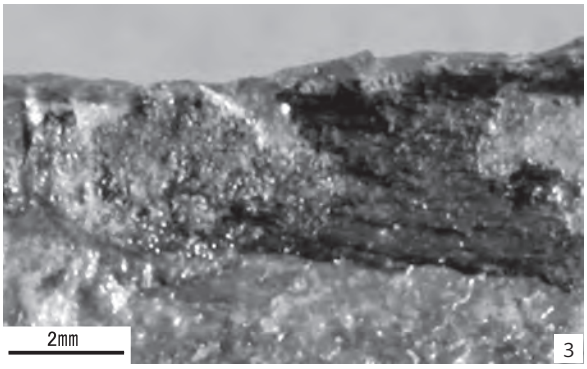
写真１　柄頭・大刀の木質



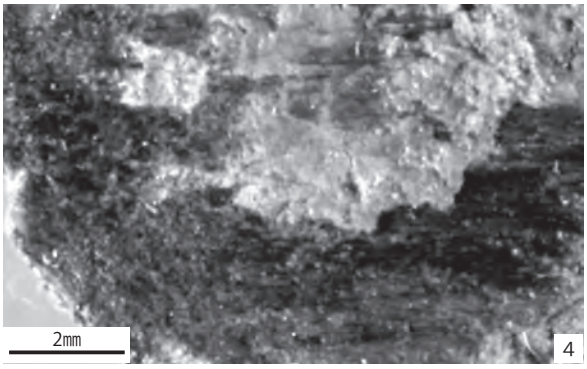
1



2

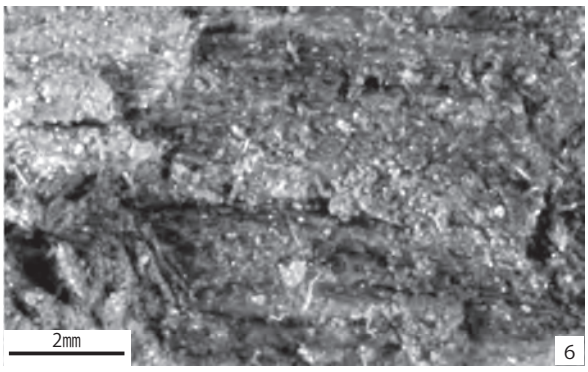


3



4

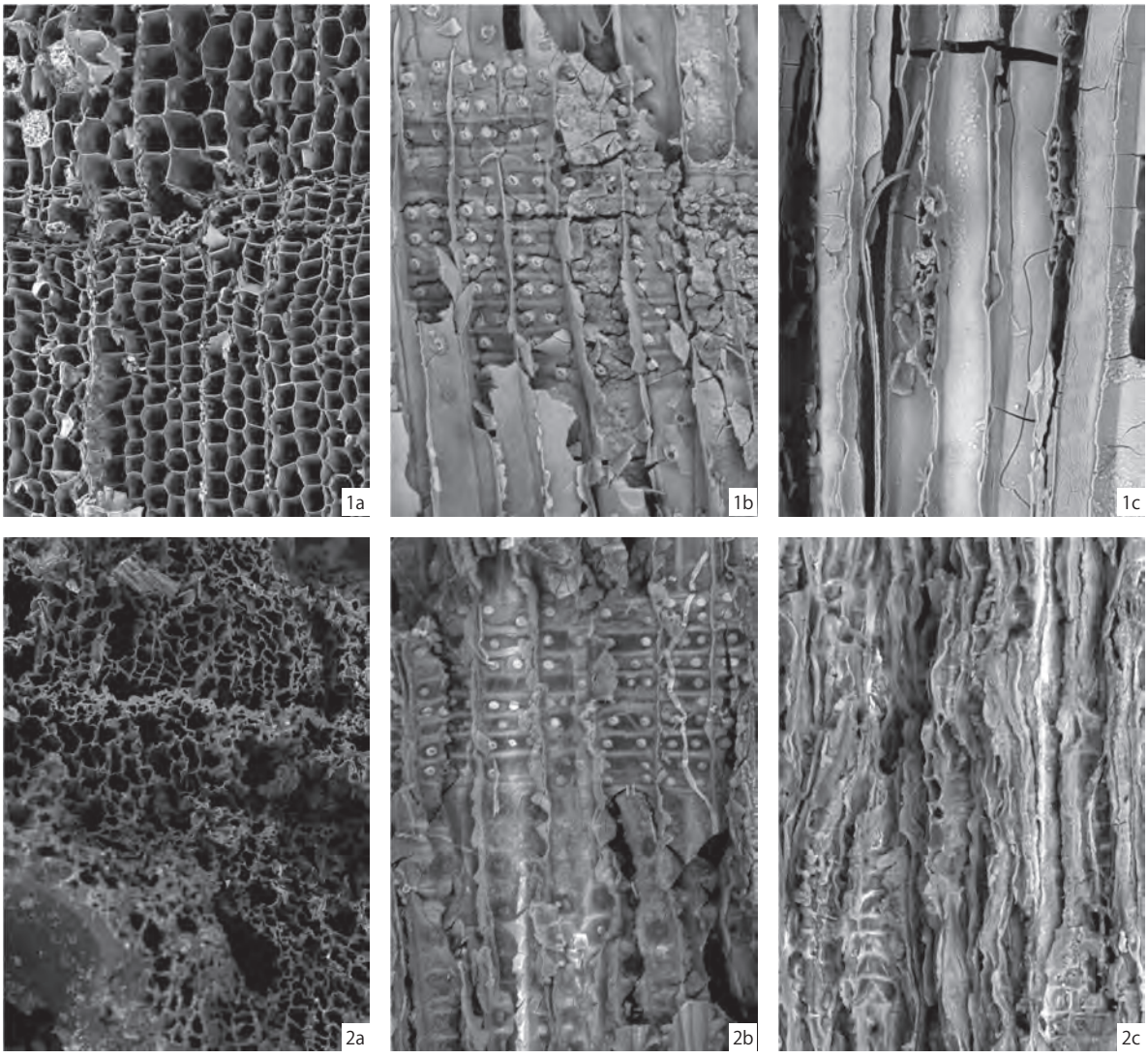
5



6

1　刀子　（K2）の全景　（No.23）
2　写真１－①の拡大写真　（No.23）
3　写真１－②の拡大写真　（No.23）
4　写真１－③の拡大写真　（No.23）
5　鹿角製刀子　（K3）の全景　（No.25）
6　写真５－①の拡大写真　（No.25）

写真２　刀子の木質



1　ヒノキ（S2；木質片①）
2　ヒノキ科（S2；木質片②）
　ａ：木口，ｂ：柾目，ｃ：板目

200μm：a
200μm：b, c

写真３　大刀の木質

第５節　中村１号墳出土鞍金具の蛍光Ｘ線分析

１　はじめに

中村１号墳から出土した馬具の鞍３点（Ｂ１，Ｂ４，Ｂ５）の蛍光Ｘ線分析による元素定性分析を行なった。

以下に，分析方法と結果を述べる。

２　分析装置と分析条件

分析装置は島根県古代文化センター所有・島根県埋蔵文化財調査センター設置のエスアイアイ・ナノテクノロジー社製　SEA1200VX　卓上型蛍光Ｘ線分析計（エネルギー分散型）である。

測定条件は以下のとおりである。

測定時間：100 秒（このうち分析可能な有効時間は 69 ～ 96 秒）
試料室雰囲気：大気 / 真空　　コリメータ：直径 8.0㎜ /1.0㎜
励起電圧：50kV/ 真空時 15kV
管電流：15 ～ 1000μA（管電圧の設定による自動設定）
ピーキングタイム　8.0usec.
Ｘ線管球：Rh ターゲット

また，測定箇所に関しては，肉眼でその馬具の特徴を示す，測定可能な箇所で行なった。

３　結　果

測定結果を以下のスペクトルピークに示す（第１図）。

馬具が金銅装や銀装である可能性を考慮し，Fe（鉄）以外に，Au（金），Hg（水銀），Cu（銅），Ag（銀）の検出が予想された。

しかし，Ｂ１からは試料に関する元素としては，Cu（銅）と Fe（鉄）のスペクトルピークを検出し，Ｂ４とＢ５からは Fe（鉄）のスペクトルピークのみを検出した。

これらの分析結果から，Ｂ１は銅を検出したことから，金銅装である可能性が考えられるが，測定箇所からは，金，水銀のスペクトルピークを検出できなかった。したがって，銅装の鞍と考えられる。

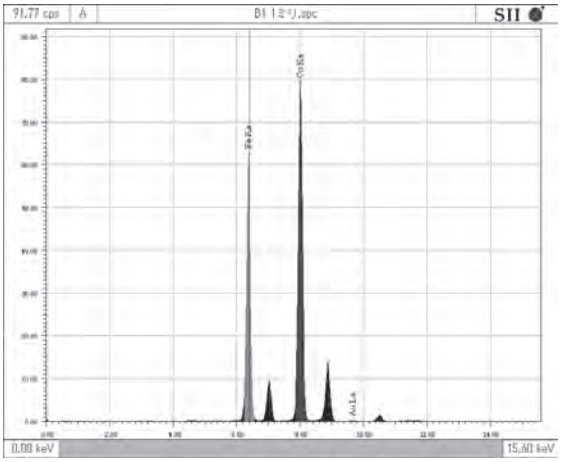
また，Ｂ４とＢ５は鉄のみを検出したことから，鉄製の鞍と考えられる。

（島根県埋蔵文化財調査センター　柴崎晶子）

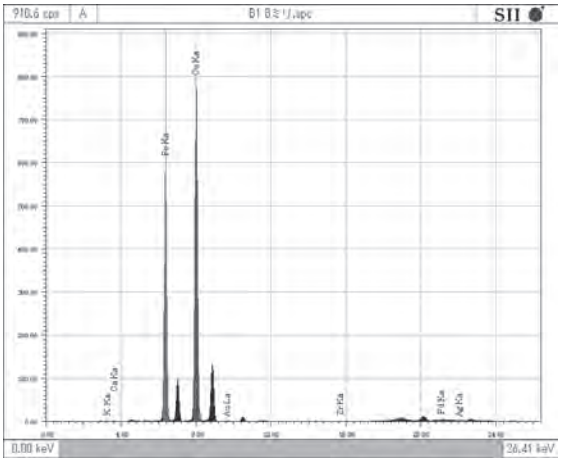
参考文献

村上　隆 2003「金工技術」『日本の美術』№ 443

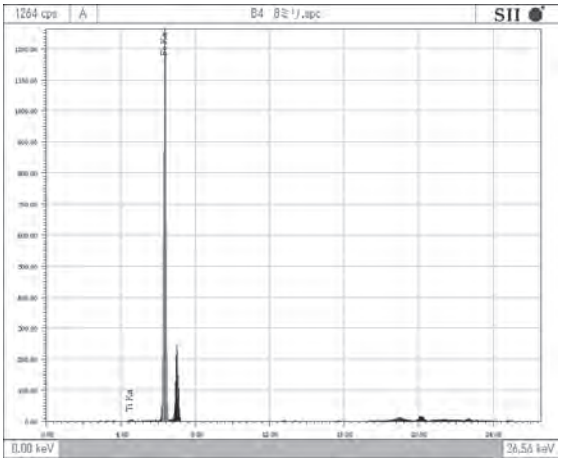
古川　匠 2010「古墳時代後・終末期の装飾馬具と装飾付大刀における貴金属の使用について」『京都府埋蔵文化財論集』第６集



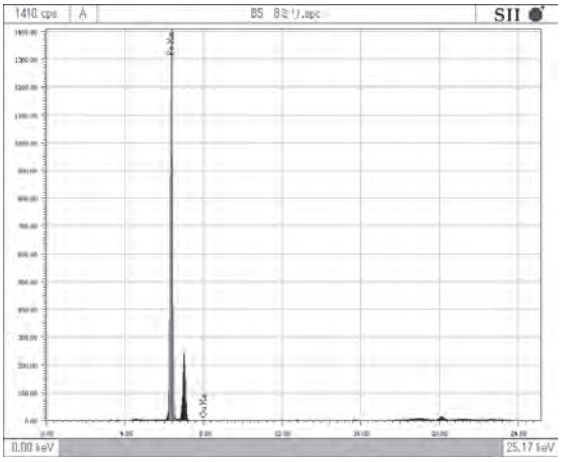
Ｂ１　１㎜



Ｂ１　８㎜



Ｂ４　８㎜



Ｂ５　８㎜

第１図　馬具Ｂ１・Ｂ４・Ｂ５蛍光Ｘ線分析結果〈スペクトル〉

第６節　中村１号墳出土資料の理化学的調査

１　はじめに

標記資料の素材や製作技法，腐食の状況等を明らかにするため，理化学的手法により調査をおこなった。調査が可能であった資料は出土品の一部であり，またその調査内容にも粗密を生じているが，遺物の理解を進める上では有益な情報となるため，調査結果の概要をここに報告する。なお，個々の資料についての考古学的，資料学的な意味付けについては，本報告書の関係項を参照されたい。

２　調査対象資料

調査対象とした資料は，以下のものである。

（１）　耳環Ａ１
（２）　珠文鏡Ｍ１
（３）　圭頭大刀柄頭Ｓ３－１
（４）　大刀Ｓ１（倭装大刀）
（５）　刀子３点（Ｋ１，２，３）
（６）　馬具類　鏡板付轡金具（Ｂ 13 ～ 15）・杏葉（Ｂ 16 ～ 21）・辻金具（Ｂ 22，23，26 ～ 29）・雲珠（Ｂ 30，31）

３　調査手法

調査は，非破壊的手法に依った。なお，対象資料の理解に不可欠な最小限度の試料採取については，これをおこなった。

Ａ　肉眼，顕微鏡等による詳細な観察

資料の詳細な観察は，資料の持つ素材，構造・技法，保存状態などの問題点を理解し，非破壊的なＸ線的調査（下記，Ｂ，Ｃの内容）をより有効に機能させるための大前提である。肉眼観察は当然のこととして，光学顕微鏡などによる微視的観察を実施し，画像として記録した。従前からの経験を踏まえれば，相当確度高く資料の実態を捉えることが可能である。

Ｂ　Ｘ線透過検査

工業用Ｘ線透過検査装置（理学電機製Ｘ線透過検査システム）により，Ｘ線透過像（以下，Ｘ線像と記す）をＸ線フィルム像として記録した。Ｘ線焦点 0.4㎜φ，撮影距離１m，電流は３mA に固定し，電圧，撮影時間については，適宜幅広く設定した。撮影フィルムとしては，フジグラビアフィルム（タイプＣ）（片面乳剤，無色透明ベース）を使用[(1)]，得られたＸ線フィルム画像については，フィルムデジタイザー（アレイ社製 Array2905）によりデジタル化し，パソコン上での観察の便に供した。このデジタル化したＸ線画像は，508dpi すなわち 50㎛の精度を有するものであるが，Ｘ線フィルム上の画像情報は，このデジタル化したＸ線画像より精緻であるため，これら両

画像を適宜使い分けながら，資料について検討した。

C　蛍光Ｘ線分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（日本電子製 JSX － 3201M）により，元素分析をおこなった。手法の特性上，得られるのは資料のごく表面部の元素情報である点に注意する必要があるが，測定部位の選択に十分注意し，多くの個所を分析することで，おおむね本体の素材を知ることが可能である。測定は，空気通路あるいは真空通路下でおこなった。Ｘ線管球はロジウム（Rh）を使用。測定結果の定量化（質量％表記）は，装置に内蔵されたソフトに依った。したがって本資料のような場合，それらの数値は，あくまで対象資料の元素組成を考察する場合の相対的数値（目安）として使用するのであり，必ずしも対象資料の構成元素組成を正確に示しているとは限らないことに注意する必要がある。

以下にこれらの調査結果を報告するが，関連するＸ線画像の図版なども掲げたので，それらも参照されたい。なお，本稿末に掲げたＸ線透過像は，Ｘ線フィルム上の画像に対して２分の１倍大（Ｓ１－１～４のみ等倍大）である。また，図版編（中村１号墳図版編（第２分冊）2011，以下「図版」と記す）についても，併せて参照されたい。

４　調査結果

（１）　耳環Ａ１（図版 14，31 －１，２）

表面全体は良好な金色で覆われているが，ごく一部に緑青錆が認められる。また，端部の小口面には金色の寄せ皺が認められる。僅かな破損個所に見られる金板被覆の状況から見ても，銅系素材を胎とし薄板状の金を巻き付けた製品と理解できる。Ｘ線像は未撮影であるが，その質量から見ても中実の胎と思われるので，銅の無垢棒を胎とし，そこに金の薄板を巻き付けた耳環と想定できる。

微細な破損個所に覗く緑青錆と胎の金属地部分を対象とした約１㎜φ範囲の蛍光Ｘ線分析（真空通路）の結果では，主成分としての銅（Cu）に対して，軽元素としてはアルミニウム（Al），ケイ素（Si），リン（P）の存在が目立っている。アルミニウム，ケイ素は，その多くが付着の土に由来し，リンは遺骸に由来するものと考えるのが妥当であろう。遺骸に装着されていたか近接していた可能性を示唆するものである。軽元素を除き重元素（金属元素）のみでその総量を仮に 100％（質量％）とした場合，銅約 97％に対して１％強の鉄（Fe）が存在するが，この鉄は胎の地金と付着土の両方に由来すると思われるので，更に鉄をも除外すると，他には，銀（Ag），鉛（Pb），アンチモン（Sb）の存在が目に付く。これら４元素の合計を仮に 100％とすれば，銅 98.09%，銀 1.16%，鉛 0.62%，アンチモン 0.13％となる。なお，重元素全体で見ても，ヒ素（As）は±，スズ（Sn）は検出されない。以上を整理して考えれば，耳環の胎が青銅質素材であることは否定され，純銅質の素材からなることが理解されよう。少量あるいは微量に検出された銀，鉛，アンチモンは，銅に伴う不純物との判断である。鉛が少量検出されたことが問題とはなるが，意図的に鉛分を加えた青銅の場合，一般にこの数値より少なくとも一ケタは高い値として確認されることから，その意図性を否定することになる。古墳出土製品の非破壊調査を数多く進めている立場の筆者としては，この程度の鉛を不純物として含む純銅の存在につい

て，朝鮮半島との関係で注意を向けていることを付け加えておきたい（類例については，現時点では未公表）。一般的に，国産の銅素材にはヒ素が比較的多く含まれていることから，本資料のようにその値が小さいことも外来の銅素材であることを支持するものと理解している。無論，耳環の製作地を特定することにはならないが。

表面の金部分の蛍光Ｘ線分析結果（約１㎜φの範囲，真空通路）は，金（Au），銅，銀の３元素よりなるとすれば，金 93.80%，銀 3.20%，銅 3.00％である。相当純度の高い金素材といえる。当然ではあるが，水銀（Hg）は検出されておらず，水銀アマルガム法を用いた金鍍金の可能性は否定される。顕微鏡所見から，30㎛前後の厚さの金薄板[2]を使用したものと判断できるが，これにより，展開した面積で約 20㎠，概ね 1.2g 程の金が使用されたものと推定される。

以上の調査結果は，本資料が純銅系胎素材に金薄板を被覆したものであるとの当初の観察結果を肯定するものであるが，具体的な製作方法については，検討の余地を残している。なお，同種の耳環は通常一対（２点）のものとして検出されるのであるが，本古墳においては１点のみ出土していることにも注意する必要がある。

（２）　珠文鏡Ｍ１（図版 14，32 －１～７，64）

鈕孔内に残る繊維性物質，布や赤色顔料等付着物の内容，青銅質素材や保存状態について調査したが，まずは，Ｘ線的な調査結果について検討を加えることとする。

Ｘ線像で見た資料の保存状態であるが，全面にクラックが発生し，またＸ線透過性の良い大小斑文状の腐食が無数に分布していることから，細片化直前の状態といえるほどに腐食と損傷が進んでいるものと理解できる。

緑黒色で平滑な鏡面部分を対象とした蛍光Ｘ線分析（真空下）では，概ね，銅 45％前後，スズ 40％ほど，鉛７％弱の分析値が得られることから，鏡本体は，銅，スズ，鉛を主要な構成成分とする青銅であることがわかる。一見スズの含有量が多いように思えるが，これは銅の溶脱によるものと理解すべきであり，本来のスズ成分は 20％前後であったと考えるのが自然である。これらの元素以外には，ケイ素，リン，アルミニウム，アンチモン，ヒ素，銀，鉄，ニッケル（Ni）などが検出される。最も数値の大きなケイ素で 1.5 ～２％，銅に伴う不純物と想定されるアンチモン，ヒ素，銀では，アンチモン 0.8％ほど，ヒ素と銀はそれぞれ 0.5％ほどになっている。アンチモン，ヒ素，銀の含有量がやや大きめの数値を示すことは，もしも日本産の銅が使用されているとすれば自然なこととも言えるが，腐食の進行によって数値が変動していることを考慮する必要があるので，銅の由来や性格についてこれ以上議論するのは現時点では控えておきたい。本体素材の性格については，鉛同位体比の測定など更なる調査を待って再検討すべきである。

鏡本体に認められる赤色部分であるが，鏡背面の各所に見られるばかりではなく，鏡面全面に渡って分布する微細な穴の底にも赤色部が観察される。この穴は，鏡面の研磨仕上げによって開放された鋳造時の鬆と思われる。鏡背面から採取した赤色微片の蛍光Ｘ線分析では，水銀が検出されず銅が相対的に多く認められる。したがって赤色を示す原因は，水銀朱の塗彩あるいは付着ではなく，赤色酸化銅（酸化第一銅，鏡本体に生じた銅錆の一種）に因るものと理解される。鏡背面の微細な鬆を多く含む

部分の分析でも水銀は検出されないことから，鏡面部の赤色も同質のものと判断できる。赤色錆（酸化第一銅）の成因としては，その部分に粘土等が付着したことで空気の遮断性が高まったことなどが想定される。

鈕孔内を埋めた繊維性物質は，両孔口にその端部を覗かせているが，その性状からして本来は緒として珠文鏡に付随していたものであろう。古墳時代の青銅鏡では時折，紐あるいは繊維束からなる緒が残存しており，また正倉院の伝世鏡でも緒を残す例があるが，本例もその事例の一つとなろう。筆者が実見した例ではいずれも植物質素材からなる繊維束，あるいは紐糸が使用されていた。本例の場合でも，辛うじて観察される繊維小口面や表皮部分と思われる細胞列などの様子は植物質素材であることを肯定するものである。現状では，束状の繊維なのか紐糸の類なのかの見極めが困難であるが，表皮部分も含まれていることを考えると繊維束である可能性が高いものと考えたい。ちなみに，繊維の極小片を採取して樹脂埋包し，断面試料の作製を試みたのであるが，微量すぎたため観察にまでは至らなかった。したがって，繊維の横断面形態から素材を絞り込むのは難しいのであるが，植物質繊維を多く見てきた筆者の経験からすれば，カラムシ（苧麻）の繊維である可能性を視野に置くべきものと考える。

本鏡には，鈕部の繊維とは別に，ごく僅かな繊維痕跡をたどることができる。それは，鏡面，鏡背面共に認められるもので，恐らく絹布で包まれていたことの痕跡であろう。

（３）　圭頭大刀柄頭Ｓ３－１（図版 19）

柄頭本体の素材であるが，側面や頭頂面など６個所の蛍光Ｘ線分析結果を見ると，検出された元素の強度はばらつくものの，検出元素の種類は皆ほぼ同じであった。例えば頭頂面（緑青錆面）の１㎜φ範囲を真空下で測定した結果では，検出元素の存在量（質量％）の合計を仮に 100％とした場合，アルミニウム 2.88％，ケイ素 6.09％，鉄 2.73％，銅 61.29％，ヒ素 0.02％，銀 0.91％，スズ 25.01％，アンチモン 0.04％，鉛 0.10％，ビスマス（Bi）0.18％，その他 0.75％となる。アルミニウム，ケイ素，鉄は付着する土にも起因するので，他の事例との比較には不利になるため，これらを除外した７元素の合計を 100％となるよう規格化を図ると，銅 68.62％，スズ 29.91％，銀 1.07％，ビスマス 0.21％，鉛 0.12％，アンチモン 0.05％，ヒ素 0.02％となる。したがって，本体素材は銅とスズからなる青銅製と理解することができる。当然ながら，鋳造製品との理解であるが，資料の腐食状況やＸ線像はこの理解に矛盾するものではない。少量ないし微量に存在する残りの５元素は，銅あるいはスズのいずれかまたは両者に伴う不純物と見なすことができるが，数多くの古墳出土資料の分析を実施してきた筆者の経験からすれば，これらの少量ないし微量成分は銅に伴う不純物と考えたい。なお，銅，スズの２元素系の青銅製品ではあるが，銅の溶脱を考慮すれば，スズの存在量はこれよりも小さいものと考えて良い。いずれにしてもスズ含有量の相当多い青銅製品であることに違いはなく，従ってその割れ易さなどを十分考慮した鋳造技術によって作られた製品であると理解する。筆者の分析事例に見る限り，古墳時代に見られる鋳造製の青銅環頭（単龍式，単鳳式，獅噛式など）の大半は，銅，スズの２元素から成る青銅製品であり，その点では本例もその範疇に収まるものといえる。古墳時代の青銅製品の内，青銅鏡や青銅製馬鐸などの大半は，本古墳出土の珠文鏡も含めて銅，スズ，

鉛の３元素系の青銅製品である。両者のグループの存在，すなわち青銅製品製作における鉛使用の有無については，その技術的系譜，製作地，製作者など様々な観点から検討すべきものと考えており，いずれ何らかの歴史的知見に結びつくものと理解している。

鳩目金具は外観的には銀製と判断されるが，孔口折り返し部分の１㎜φを対象とした蛍光Ｘ線分析でみても純銀製であることが確認できた。あえて言うまでもないことではあるが，蛍光Ｘ線分析でみても金鍍金は認められない。本鳩目金具は，一体のものとして作られており，金銅製の鳩目金具によく見られるような左右一対からなる別作り品の差し込み方式ではない。銀製品としての特質を生かした作り方なのであろう。

（４）　倭装大刀Ｓ１（図版 17，19，64）

本体資料（Ｓ１）についてはＸ線透過検査を，鞘尻端部かと思われる木質資料（Ｓ１－１）と鋲類（Ｓ１－２，３，４）については，加えて蛍光Ｘ線分析を実施した。先に，木質資料と鋲類について検討する。

木質資料（Ｓ１－１）には，外観からの推察通り木口方向から２本の鋲が打たれている。Ｘ線の透過性からは両者共に鉄製と判断できるが，脚の長さは 13㎜と一致するものの鋲頭部の側面形状は明らかに異なっている。他の鋲３本も鉄製であるが，これら５本の形状を比べると，Ｓ１－２の鋲はＳ１－１の内で鋲頭部の高さが低い方とほぼ同じであり（鋲Ａタイプ），Ｓ１－１の鋲頭部が高く丸みのある形状のもの（鋲Ｂタイプ）と，Ｓ１－４の頭部の形状はほぼ同じでありながら脚部が長いもの（鋲Ｃタイプ）の三つに分けることが可能である。なお，Ｓ１－４は腐食による変形のため，判断を保留。これら鋲頭部には被覆材が期待できるのであるが，Ｘ線像からはその存在が把握できず，また鉄錆と付着土に覆われているため肉眼的にも確認されない。しかしながらそれらを対象としたスポット的な蛍光Ｘ線分析では，複数の個所で銅，金，水銀の存在が確認できた。したがって，これらの鋲はその頭部に金銅張りを施したものと判断する。Ｘ線像で見る限り，鋲頭直下すなわち木質木口面の表面には何らかの金属薄板が存在することになるが，その素材については把握できていない。なお，木質資料（Ｓ１－１）の外側面部のごく一部に微視的ではあるが金色が認められたため，該当個所を蛍光Ｘ線分析した結果，金銅板の存在が確認できた。当初からのものか，資料の傷みに伴って二次的に移動してきたものかの判別は現時点では困難である。これら木質資料と鋲類が大刀Ｓ１に伴うとすれば，木質資料（Ｓ１－１）を鞘尻部とし，打たれた２本の鋲を蟹目釘と単純に判断するには一考を要することになる。倭風大刀の類例からすれば更に多くの鋲類が柄頭部と鞘尻部の木部に打たれていた可能性があり，それを前提とした議論に立ち戻ってしまうからである。

さて本体資料（Ｓ１）であるが，左側面の２個所に残る金銅製飾り板には，５本の金銅製の鋲が残されている。それらの内の４本は，Ｘ線像でみても刀身の身幅（刃から棟までの距離）の中心線上にほぼそろって並んでいる。残りの１本は棟側にずれた位置ではあるものの，やはり身幅内に完全に収まっている。すなわち，５本の鋲は鞘木の厚みの中で最も薄い部分に打ち込まれていることになる。古墳時代の飾り大刀で金銅製の飾り板を鞘木に鋲留めする場合，刀身に配慮して鋲の位置を背側，腹側にずらしているのが普通であることからすれば，本大刀の製作者は全くその意図を持たず，装飾性，デザイン性を最優先して金銅製飾り板を配置していたと見るべきであろう。金銅鋲頭部は比較的大きい

のにかかわらず，鋲の脚足の長さをきわめて短くしていることもそのための配慮であろう。この２片を残してはるかに多くの金銅板飾りが逸失してしまったと考えるのか，あるいは金銅板飾りの総面積を小さなものと捉えるのかで，本飾り大刀の想定される姿は大きく異なってくる。

（５）　刀子３点（Ｋ１，２，３）（図版 15）

刀子３点については，側面方向，腹から背の方向の二方向のＸ線像を撮影し，その形態や装具の特徴等を検討した。折れ断面に緑青錆が認められ刀子Ｋ１，３点の中では最長の刀子Ｋ２，鹿角装とされる刀子Ｋ３の３点である。また破損部に緑青錆の認められる刀子Ｋ１については，蛍光Ｘ線分析を実施し，素材内容を検討した。

刀子Ｋ１の折れ断面で刀身を遠巻きしている緑青錆の蛍光Ｘ線分析では，銅以外の元素として銀，セレン（Se）が目に付く。この２元素が少量あるいは微量存在することが，元の素材である純銅の特徴と考えられる。その錆が外側面にごく僅かに露呈した表面部の分析でも金の存在は確認されないので，表面への鍍金は無いものと判断する。Ｘ線像によれば，鞘木の鞘口部分を８㎜程度の幅で取り巻いていたものと復元できるので，純銅製の鞘口金具が存在したものと考える。関と茎の形状は不明であるが，茎の長さは概ね現況の通りと考えたい。なお，割れ断面に露呈した緻密な褐黒色錆面では，銅，スズ，ヒ素が少量ないし微量に検出されるので，このことを持って刀身部の鉄素材の特徴であると一応考えることとする。

刀子Ｋ２は，Ｘ線像から，両関でやや長めの茎を有することがわかる。刀身部以外には金属質素材の使用痕跡が見当たらないので，外装（鞘と柄）は有機質素材恐らく木製であったと考える。

刀子Ｋ３は，Ｘ線像から，両関で切っ先部と茎端部とを共に欠失しているものと判断する。茎の周囲を中心にして，木質とは思えない乱れたＸ線像が得られており，また関の前後には空隙も広がっている。これらの状況は，鹿角の存在を前提とすれば整合的に説明できる。当該個所には，鹿角様の白褐色物が外観的にも認められることから，鹿角製の刀装具の存在を考えたい。

（６）　馬具類　鏡板付轡金具（Ｂ 13 ～ 15）・杏葉（Ｂ 16 ～ 21）・辻金具（Ｂ 22，23，26 ～ 29）・雲珠（Ｂ 30，31）（図版 21 ～ 24，26，27，31 － 5 ～ 8，66）

上記の馬具類についてはＸ線透過像による構造・技法の調査を主に実施した。またごく一部の資料ではあるが，蛍光Ｘ線分析をおこなったものもある。

本古墳には，３組の馬具が納められたものと考えられている。それは，それぞれ形態の異なる鏡板（Ｂ 13 心葉形，Ｂ 14 花形，Ｂ 15 素環）を有する轡金具が３組出土したことに因ってである。鞍金具は５点（Ｂ１～５）確認されており，外観形態からとりあえず３組に分別された。しかしながら，錆の生成や土の付着が甚だしかったため，特に形態の近似するＢ１～３の３点については再確定する必要があった。同形と推定される２点（Ｂ２，３）のＸ線像を撮影したところ，両者共，一個所（後輪に固定した時，天側に相当か）に小突起状のはみ出しのある座金を有することが確認された。しかも，両者共に銀板様の金属で被覆されているものと判断できた。念のため，両座金の要所について蛍光Ｘ線分析をおこない，銀の使用を確定した。したがって，Ｂ２，Ｂ３は，鉄地銀被の装飾性の高い座金具を有する一組の鞍金具である。Ｂ１は，外観からの推定ではあるが銅あるいは金銅製の座金具を有する

鞍金具であり，対になるべき１点を欠失していることになる。残りＢ４，Ｂ５は一対であり，恐らく鉄製の座金具を有する最も簡易な鞍金具と思われる。

次に杏葉６点（Ｂ 16 ～ 21）であるが，これらと同系統の鏡板が使用されている関係で鏡板付轡金具３組(Ｂ 13 ～ 15)についても併せてＸ線像の検討をおこなう。Ｘ線像並びに資料の微視的外観から，杏葉，鏡板の全てに共通する製作技法として次のことが挙げられる。まずは所定の型に合わせて２枚の鉄板を用意する。１枚はそのまま地板〔下板〕とし，残りの１枚は型に従って文様を透かす〔上板〕。この〔上板〕に一回り大きな金銅板を載せ，透かし文様によく馴染ませた上で全周の端部を〔上板〕の裏面に折り込む。できあがった金銅板張りの〔上板〕を下板と重ね合わせ，縁部の要所を鉄地金銅張りの鋲で留める。これが本古墳から出土した鉄地金銅張り杏葉・鏡板の基本的な作り方であるが，個別の資料ごとに見れば若干の相違を有している。

花形杏葉・鏡板のグループは５点（Ｂ 14 の鏡板２点，Ｂ 19 ～ 21 の杏葉３点）あるが，鏡板では鉄地板〔下板〕の中央付近に角形の小孔が開けられており，鋲留前にハミ（馬銜）の銜環先端部に作り出した突出部をこの孔に差し込んでかしめた後，外周部に３本，立聞部に２本の鋲を打って，鉄地板との一体化を図っている。これに対して花形杏葉では，鉄地板の立聞部に相当する部分を除去した上で，外周部の３本のみで鉄地板と鉄地金銅張りの〔上板〕とを固定している。３本の鋲は，３点の杏葉では全く同じ位置に打たれているが，内２本の位置は鏡板とは異なっている。

心葉形杏葉・鏡板のグループ５点（Ｂ 13 の鏡板２点，Ｂ 16 ～ 18 の杏葉３点）については，鉄錆による障害のためＸ線像で見ても鏡板と銜金具との接合方法がはっきりとは捉えられないが，前述の例に同じ方法であると考えたい。外周部に打たれた鉄地金銅製の鋲は，杏葉の場合６本（同一の配置）であるが，鏡板では４本（天地左右の位置）と判断する。

以上，２組の杏葉・鏡板のグループ関係は，Ｘ線的にみても納得できるものであり，したがってこれまでに指摘されていた通り，本古墳出土の鋲具立聞付鉄製素環鏡板の馬具には杏葉が伴わないことが確定できたものと考える。

最後に，辻金具と雲珠であるが，辻金具は６点（Ｂ 22，23，26 ～ 29），雲珠は２点（Ｂ 31，32）が出土している。辻金具は，外観的には脚がコハゼ形を呈するもの２点（Ｂ 22，23）と方形のもの４点に分かれるが，Ｘ線像としても再度検討し，できるだけ細部の特徴を抽出する。両者は，その外観，Ｘ線像ならびに要所に対する蛍光Ｘ線分析の結果として，本体，鋲共すべて鉄地金銅張りの製品であることが確認できている。辻金具を俯瞰したＸ線像では，コハゼ形の脚を有する２点について，うっすらとではあるが宝珠飾りの下方に花弁状の座が存在することを指摘できる。形は崩れているが，六弁前後からなる花弁文様を鉄地鉢形の頂部に作り出しているのであろう。全ての脚には概ね外寄りの位置に１本の鋲のみ打たれており，その一部は鋲頭部が脱落している。脚部には，責金具を配する余地があるが，１本も見当たらないのは奇妙である。辻金具を側方から見たＸ線像にも幾つかの特徴が現れている。コハゼ形の脚を持つ２点（Ｂ 22，23）は，宝珠形の下方にあるくびれが弱く，鉢部の立ち上がりには数段の凹凸帯を巡らし，また鉢部は全体にふっくらとした半球状であるのが特徴である。これに対して，残りの４点すなわち方形の脚をもつ辻金具では，宝珠形下半部のくびれが大きく，鉢

部はほぼ垂直に立ち上がった後，やや膨らみの少ない形で宝珠形直下の平坦部へとつながっている。この４点をあえて分けるとすれば，鉢部にやや膨らみを残すＢ 26，28 の２点と，ほとんど膨らみのないＢ 27，29 の２点に分けることも考えられよう。

雲珠２点（Ｂ 30，31）のＸ線像を検討すると，Ｂ 30 の雲珠では宝珠形の下部にほとんど段差が認められないこと，鉢部の立ち上がりに数段の凹凸帯があること，コハゼ形脚が多いことなど，Ｂ 30 の雲珠とＢ 22，23 の辻金具とが同じ形態的特徴を示すことが確認される。それに対して，Ｂ 31 の雲珠は，宝珠形には明瞭なくびれがあり，鉢部の立ち上がりに凹凸帯が見られないこと，方形の脚であることなど，Ｂ 26 ～ 29 の辻金具に特徴が一致する。鉢部のゆるい膨らみを考えると，なかでもＢ 26，28 により近いものとも考えられる。

５　おわりに

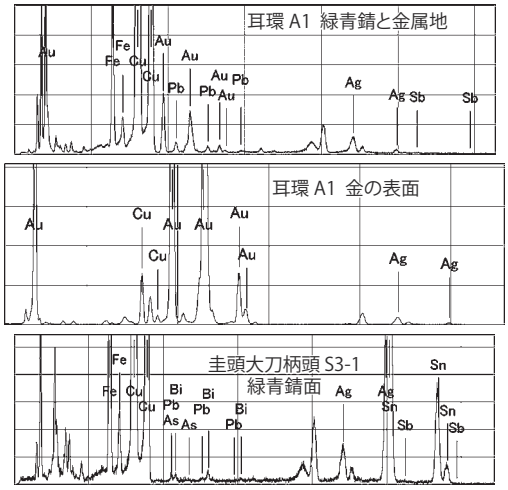
標記古墳出土の金属製品を主に非破壊的な手法により調査し，既述の様な理解に達した。諸般の事情で気がかりなまま十分調査しきれなかった資料も数多く，古墳全体の理解にどの程度役に立つのかいささか心許ないところもある。今後も更なる調査がおこなわれることを期待し，報告を終わりたい。

（国立歴史民俗博物館研究部　永嶋正春）

註

（１）筆者は，歴史資料のＸ線透過検査においては，できる限り情報量の多いＸ線像を確保すべきものと考えており，従来から無色透明ベースで片面乳剤のフィルムを選択使用している。該当するＸ線専用フィルムが製造中止になって以降は，印刷製版用フィルム（グラビアフィルム）を選択し，その用に供してきた。

（２）この程度の厚さの金属薄板について，筆者は〝箔〟とは呼ばないことにしている。金，銀などの貴金属やスズ（Sn）などの，工芸的利用に供される金属箔（例えば，金箔）は，はるかに薄いものであり，独特の手法によって製造されるべきものである。この厚さの違いは，その利用用途や使用法にそれぞれ個性を発生させることとなる。工芸的分野での金属箔製造の歴史やその利用について知見を得るためには，20 ～ 30㎛前後の厚さの金属板については，それを〝金属薄板〟とすることで，これらの金属薄板を含む広義の金属箔の歴史を解明すべきものと考える。ちなみに，家庭用に用いられているロールタイプのアルミ箔の厚さは，一般には 10㎛前後である（JIS 規格でいうアルミ箔とは，厚さ６～ 200㎛のアルミニウム圧延素材のことである）。



縦軸はＸ線強度　横軸は検出エネルギー

第１図　蛍光Ｘ線分析結果

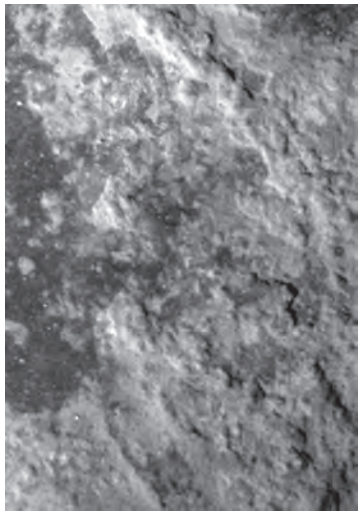


写真１　珠文鏡Ｍ１　鏡面に残る絹布の痕跡（10 倍大）

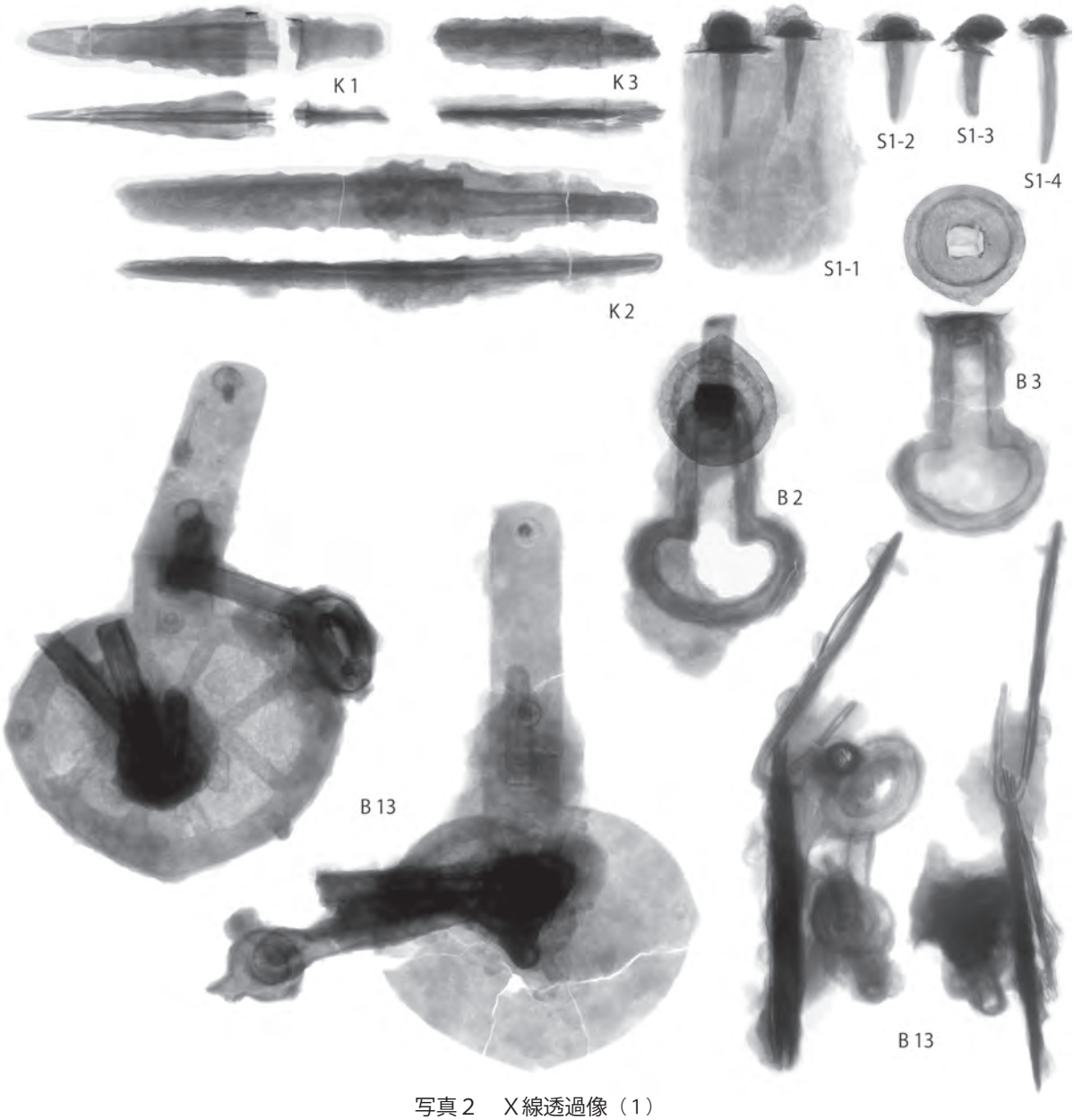


写真２　Ｘ線透過像（１）

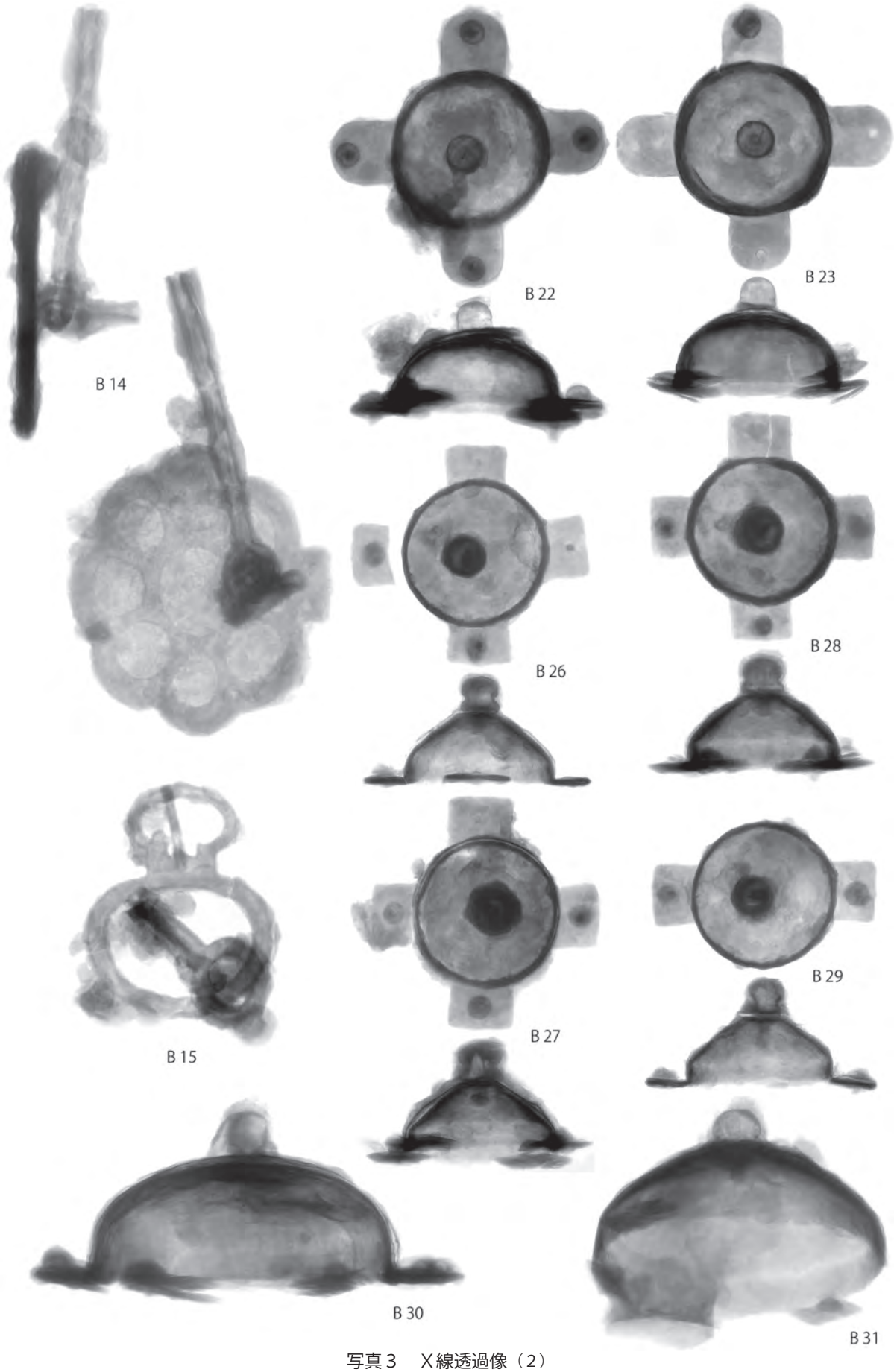


写真３　Ｘ線透過像（２）

第７節　中村１号墳出土資料の鉛同位体比分析結果

１　はじめに

出雲市文化財課の依頼により，島根県出雲市の中村１号墳（６世紀末～７世紀初）出土資料の青銅部分および銀線について，鉛同位体比の分析を行った結果を報告する。

２　資料および分析試料の採取

青銅鏡，金銅製の鈴，青銅地に銀板を巻いた銀環，装飾付大刀の圭頭柄頭については，青銅部分のうち，全体の形状に影響を与えない箇所から，刃先を使い捨てにするマイクロナイフを使用して錆粉末を採取し，分析用試料とした。鉄地金銅張の馬具類（杏葉，辻金具，雲珠，鏡板）は腐食が進行しており青銅の部分がわずかしか残存していなかったが，その錆を同様に採取した。これらはいずれも保存処理が施してあったので，明らかに保存処理剤が付いている表層部を除き，その下層から採取するようにしたが，特に馬具類については残存する青銅部分の層がごく薄いため，保存処理剤を完全に除いてサンプリングされていたかどうかということや，また試料粉末中に保存処理剤が混入してしまった場合，それが測定値にどの程度の影響をおよぼすかは，はっきりとはわからない。

銀線は，装飾付大刀に巻かれていたものである。青銅や鉄の錆が付着している部分を避け，銀色の光沢が見える部分を選んで，小型ニッパーによって端部をわずかに切断して試料採取した。その後１% 希硝酸の中で超音波洗浄し，表面に付着している青銅や鉄の錆などを取り除いた。

試料採取を行ったのは，青銅 14 点，銀１点の計 15 点である。資料のうち No.7 ～ 10，No.11 ～ 15（第１表参照）の２組が，それぞれ馬具としてセットになっている。

３　分析方法

採取した試料粉末から高周波加熱分離法で鉛を単離し，リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置（Finnigan MAT 262）を用いて，フィラメント温度 1200℃で鉛同位体比を測定した（齋藤 2001）。

４　結　果

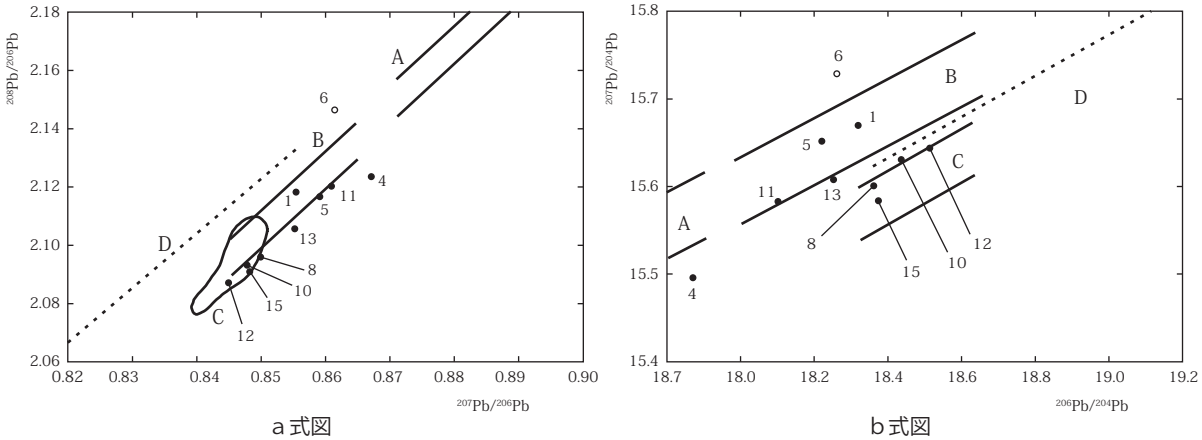
第１表，第１図に鉛同位体比測定結果を示した。全体として試料中の鉛濃度は非常に低く，15 点中５点は同位体比分析を行うのに十分な量の鉛を回収することができなかった。資料中に含まれている鉛は，意図的に混ぜられたものではなく，銅鉱石に含まれていた鉛であると考えられる。データを得ることができた 10 点の結果について以下に考察する。

馬淵・平尾は弥生時代から平安時代までの多くの青銅器についてデータを蓄積した結果，その鉛同位体比の変遷は下記のようにグループ分けできると報告している（馬淵・平尾 1982a，1982b，1983，1987，平尾・榎本 1999）。

第１表　中村１号墳出土資料の鉛同位体比測定結果

№.	資料名	資料番号	分析番号	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	推定される原料産地	備　考
1	珠文鏡	Ｍ１	B11001	0.8554	2.1183	18.319	15.670	38.804	華中～華南	
2	銀環	Ａ２	B11003	－	－	－	－	－		青銅に銀板を巻いたもの，青銅部分から採取
3	金銅鈴	Ａ６	B11007	－	－	－	－	－		剥落した小片の青銅部分から採取
4	金銅鈴	Ａ９	B11002	0.8671	2.1236	17.870	15.496	37.949	不明。中国北部か？	青銅部分から採取
5	圭頭柄頭	Ｓ３－１	B11006	0.8591	2.1167	18.220	15.652	38.565	華中～華南	
6	銀線	Ｓ３－７	B11015	0.8614	2.1465	18.261	15.729	39.197	不明。朝鮮半島か？	大刀Ｓ３に巻かれていたもの
7	杏葉（あ群）	Ｂ 16	B11012	－	－	－	－	－		
8	杏葉（あ群）	Ｂ 18	B11004	0.8499	2.0960	18.361	15.601	38.485	日本	
9	辻金具（あ群）	Ｂ 23	B11009	－	－	－	－	－		
10	雲珠（あ群）	Ｂ 30	B11011	0.8478	2.0932	18.436	15.631	38.590	日本	
11	鏡板（う群）	Ｂ 14－１	B11014	0.8609	2.1203	18.101	15.583	38.380	華中～華南	
12	杏葉（う群）	Ｂ 19	B11013	0.8449	2.0872	18.513	15.644	38.640	日本	
13	杏葉（う群）	Ｂ 21	B11005	0.8552	2.1057	18.252	15.606	38.434	華中～華南	
14	辻金具（う群）	Ｂ 27	B11008	－	－	－	－	－		
15	雲珠（う群）	Ｂ 31	B11010	0.8482	2.0910	18.374	15.584	38.420	日本	

＊（ ）は馬具としてセットになっているものをあらわす



ａ式図　　ｂ式図

第１図　中村１号墳出土資料の鉛同位体比測定結果

Ａ：弥生時代に将来された前漢鏡が示す数値の領域で，華北の鉛。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。

Ｂ：後漢・三国時代の舶載鏡が示す数値の領域で，華中～華南の鉛。古墳出土の青銅鏡の大部分はここに入る。

Ｃ：日本産の鉛鉱石の領域。日本産鉛は現在までのところ，飛鳥時代以降の資料にしか見出されていない。

Ｄ：多鈕細文鏡や細形銅剣など，弥生時代に将来された朝鮮半島系遺物が位置するライン。

ここでも，これらの領域とともに測定結果をあらわした。測定結果の表示には通常 $^{207}Pb/^{206}Pb$ 比と $^{208}Pb/^{206}Pb$ 比の関係（ａ式図）が使用されることが多く，それだけで識別が困難な場合などには，必要に応じて $^{206}Pb/^{204}Pb$ 比と $^{207}Pb/^{204}Pb$ 比の関係（ｂ式図）が併用される。今回の測定結果では，これらの領域から外れているものなどもあり，総合的に判断する必要があるため両方の図を表示している。

№.１（鏡Ｍ１），５（大刀Ｓ３－１），11（馬具Ｂ 14 －１）の測定値はａ式図，ｂ式図ともＢ領域であ

る。これらのうち，№1（Ｍ１）は中国の華中～華南地域産原料とみてよいであろう。

№5（Ｓ３－１）と№11（Ｂ 14 －１）については，齋藤ほか（2009）による朝鮮半島嶺南地域出土の青銅製品の分析結果から指摘された「グループ GB」の範囲内にある。グループ GB は，慶尚北道大邱近郊にある漆谷鉱山のデータと比較的近いことや，そのグループに含まれる資料の大部分が４世紀以降であり，313 年の楽浪郡の滅亡による銅関係技術者たちの朝鮮半島南部地域への流入の可能性や新羅の大邱地方への勢力版図の拡大と整合することから，同地域でこの時期から朝鮮半島産の原料使用が行われた可能性についても考慮しておく必要が指摘されていた数値領域である。したがって，これらのデータは，先行研究によれば中国華中～華南産原料と判定されるところであるが，近年の研究状況に鑑み，また遺跡の年代や他の出土資料などの点に考慮して考察を行うならば，朝鮮半島（南部地域）産原料である可能性も考えられる。

No. ４（装身具Ａ９）は設定されたいずれの領域からも外れており，産地の推定が困難である。鉛鉱石の分布傾向（馬淵・平尾 1987）からは中国北部の可能性がある。

No. ６（大刀Ｓ３－７）については，いずれの領域からも外れており，これまでにほとんどみられない数値である。しかし，韓国全羅北道益山市の王宮里遺跡から出土した鉛ガラス生産関連資料や緑釉の分析結果として報告された数値領域に近い（金ほか 2007a，2007b，2007c，2007d）。この領域は直線状に延びた分布を示しており，No.6（Ｓ３－７）のデータはそれをわずかに延長したあたりに位置している。また，数値としてはまったく異なっているが，同じくこの直線状の分布領域上に位置する資料として，鳥取県福本 70 号墳（７世紀中頃）の銅匙（齋藤・藤尾 2010）がある。ただし，今回の分析資料は鉛や銅ではなく銀製品であるので，これらと同一に論じられるかどうかはまだわからない。あくまでも対比する資料の候補である。なお，王宮里遺跡は７世紀の百済地域にある遺跡であり，今後はこの地域の青銅製品など金属資料に関する事例の蓄積が必要であろう。

No.10（馬具Ｂ 30）は，ａ式図において，奈良・平安時代の青銅製品や緑釉に頻出する数値範囲を中心とする領域，すなわち，特に皇朝十二銭などの分析結果に基づいて，齋藤（2001），齋藤ほか（2002），高橋（2001）によって，山口県長登銅山や蔵目喜鉱山が原料供給地ではないかと推定された数値領域と重なっている。ｂ式図ではＣ領域からわずかに外れているが，データの集中がみられる皇朝十二銭や長登銅山の一群の資料でも数値には若干の広がりがあり，一部はこれに近い数値を示すものがある。また No.10（Ｂ 30）の値は，国産原料を使用していると判断された武蔵国分寺跡附近出土銅造仏（７世紀後半）の測定値（馬淵 1983）ともほぼ一致している。これらの点からみて，No.10（Ｂ 30）はこの「長登銅山タイプ」の日本産原料と考えて矛盾はない。ただし，最近の測定例によると，発掘調査による確証は得られていないものの，文献史料および考古学的関連資料に基づいて，７世紀末かそれ以前における採掘の可能性も推測されている（亀田 2006）福岡県香春岳の銅鉱石でも，これと同様の数値を示すものもあることがわかっている（齋藤・藤尾 2010）。したがって現在のところでは，このような数値を示す資料の原料産地について，鉱山の推定までを行う際には慎重を期しておく必要がある。それを踏まえた上で，ここではデータの数値範囲を示すものとして，便宜的に「長登銅山タイプ」という呼称を使っている。

No. 8（馬具B 18），12（B 19），15（B 31）についても，C領域であり国産原料である可能性が高い。No.12（B 19）に一致はしないが比較的近い数値を示すものとして島根県の都茂鉱山がある。No.15（B 31）については，$^{207}Pb/^{206}Pb$ 比と $^{208}Pb/^{206}Pb$ 比の数値（a式図）では上述の「長登銅山タイプ」の範囲内にあるようだが，$^{206}Pb/^{204}Pb$ 比と $^{207}Pb/^{204}Pb$ 比の数値（b式図）はその範囲から明らかに外れているため，「長登銅山タイプ」の原料であるとは考えられない。

No.13（馬具B 21）は，a式図ではB領域からやや外れており，$^{207}Pb/^{206}Pb$ 比と $^{208}Pb/^{206}Pb$ 比の数値でみる限りでは，馬淵（1987）が平田市後野の鉛鉱石を原料として使っているのではないかと考察した，出雲市上塩冶築山古墳（6世紀後半～7世紀初）出土の銅鈴の値に近い。しかし，$^{206}Pb/^{204}Pb$ 比と $^{207}Pb/^{204}Pb$ 比，すなわちb式図での表示ではB領域に位置しており，それらの試料の数値とは明らかに異なっているので，日本産ではなく中国の華中～華南産と推定される。

5　まとめ

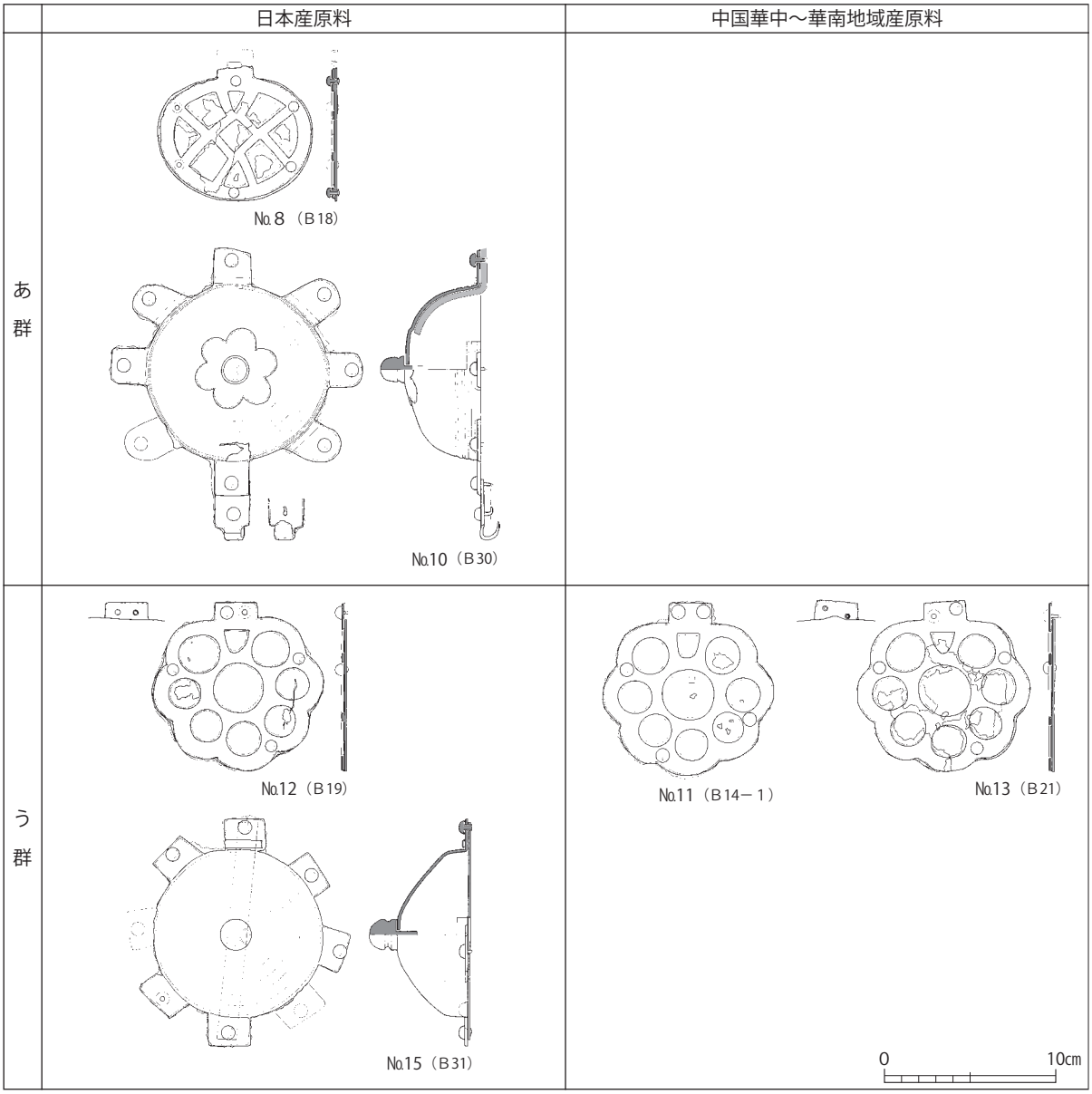
ここで分析対象としたのはいずれも保存処理済みの資料であるので，数値にその影響が多少なりともあらわれている可能性を考えておかなければならない。本稿では，仮に影響があったとしても，それはA・B・Cといった領域範囲を超えるほどの大きなズレを測定値に与えるものではないだろうという想定のもとにデータを解釈している。

青銅資料については，原料産地の判断がつきにくいものもあるが，産地が推定できるものでは中国産および日本産原料の数値を示す資料が検出された。

分析値は全体としてバラつきが大きく，またセットとなっている馬具でもそれぞれ異なった数値を示しているので，原料はどこか特定の地域から一括してもたらされたのではなく，入手できたいろいろな金属素材が使われたものと考えられる（第2図）。

これまで，鉛同位体比分析によって指摘された日本で最も古い国産鉛の使用例としては，馬淵（1987）による出雲市上塩冶築山古墳出土の銅鈴（6世紀後半～7世紀初）と，安来市高広Ⅳ区3号墓出土の耳環（6世紀末～7世紀初）がある。ここで分析結果が得られたNo. 8（馬具B 18），10（B 30），12（B 19），15（B 31）は，それらに続く事例として新たに見つかった，6世紀末～7世紀初において日本産原料が使用されていたと推定される資料である。現在までのところ，この時期に日本産と考えられる原料を使用している事例は島根県内の出土遺物からしか見出されていないことになる。しかし，この地域において，他に先んじて国産原料の使用が開始されるようになった歴史的事情があったのか，他の地域でも分析例を重ねていけば見つかる可能性があるのかということについては，まだわからない。

（国立歴史民俗博物館・研究部　齋藤　努）



第２図　馬具の青銅原料産地（１：４）

参考文献

亀田修一 2006「日本古代の初期銅生産に関する覚書　－朝鮮系考古資料との関わりを中心に－」『科学研究費補助金基盤研究（B）（２）「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」報告書』219 ～ 270 頁

齋藤　努 2001「日本の銭貨の鉛同位体比分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』86 集　65 ～ 129 頁

齋藤　努・高橋照彦・西川裕一 2002「古代銭貨に関する理化学的研究　－「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析－」『IMES Discussion Paper』No.2002 － J － 30　日本銀行金融研究所

齋藤　努・土生田純之・亀田修一・福尾正彦・鄭仁盛・高田貫太・風間栄一・藤尾慎一郎・柳昌煥・趙榮濟 2009「鉛同位体比分析による古代朝鮮半島・日本出土青銅器などの原料産地と流通に関する研究－韓国嶺南地域出土・東京大学所蔵楽浪土城出土・宮内庁所蔵の資料などを中心に－」『考古学と自然科学』59　57 ～

81 頁

齋藤　努・藤尾慎一郎 2010「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』158 集　163 ～ 288 頁

高橋照彦 2001「日本における銭貨生産と原料調達」『国立歴史民俗博物館研究報告』86 集　131 ～ 184 頁

平尾良光・榎本淳子 1999「古代日本青銅器の鉛同位体比」『古代青銅の流通と鋳造』鶴山堂　29 ～ 162 頁

馬淵久夫 1987「第 5 節　鉛同位体比による原料産地推定」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会　167 ～ 171 頁

馬淵久夫・江本義理・平尾良光・北田真吾・木村　幹 1983「鉛同位体比法による太安萬侶墓誌銅板および武蔵国分寺附近出土銅造仏の原料産地推定」『古文化財の科学』28　65 ～ 69 頁

馬淵久夫・平尾良光 1982a「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』68（1）　42 ～ 62 頁

馬淵久夫・平尾良光 1982b「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『MUSEUM』370　4 ～ 12 頁

馬淵久夫・平尾良光 1983「鉛同位体比による漢式鏡の研究（二）」『MUSEUM』382　16 ～ 26 頁

馬淵久夫・平尾良光 1987「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比～青銅器との関連を中心に～」『考古学雑誌』73（2）199 ～ 245 頁

金奎虎・平尾良光・韓松伊・魯禔玹・金那瑛・林徳洙（2007a）「益山王宮里遺跡関連のガラス及びルツボの鉛同位体比分析」『國立扶餘文化財研究所學術研究叢書』44（王宮의工房Ⅱ－琉璃篇）74 ～ 118 頁

金奎虎・平尾良光・韓松伊・魯禔玹・金那瑛・林徳洙（2007b）「益山王宮里遺跡から出土したガラス製品に関する鉛同位体比調査」『國立扶餘文化財研究所學術研究叢書』44（王宮의工房Ⅱ－琉璃篇）132 ～ 170 頁

金奎虎・平尾良光・韓松伊・魯禔玹・金那瑛・林徳洙（2007c）「益山王宮里遺跡出土の緑釉土器に関する鉛同位体比調査」『國立扶餘文化財研究所學術研究叢書』44（王宮의工房Ⅱ－琉璃篇）172 ～ 184 頁

金奎虎・平尾良光・韓松伊・魯禔玹・金那瑛・林徳洙（2007d）「益山弥勒寺址から出土した緑釉椽木瓦に関する鉛同位体比調査」『國立扶餘文化財研究所學術研究叢書』44（王宮의工房Ⅱ－琉璃篇）186 ～ 202 頁

第８節　中村１号墳ほか出土須恵器の胎土分析

１　はじめに

この胎土分析では，中村１号墳，築山遺跡，上塩冶築山古墳から出土した須恵器の自然科学的な胎土分析を実施し（第５図），現在わかっている生産地である大井窯跡群との比較検討を行うことで出雲地方出土須恵器の生産地を想定した。

２　分析方法と試料

分析方法は，蛍光Ｘ線分析法で検討した。

蛍光Ｘ線分析法では，胎土の成分（元素）量を測定し，その成分量から分析試料の違いについて調べる方法である。測定した成分（元素）は，Si，Ti，Al，Fe，Mn，Mg，Ca，Na，Ｋ，Ｐ，Rb，Sr，Zr の 13 成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（エスアイアイ・ナノテクノロジー社製 SEA5120A）を使用した。分析試料は，乳鉢で粉末にしたものを加圧成形機で約 15 ｔの圧力をかけ，コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって，一部破壊分析である。測定条件は，管球ターゲットは Rh，励起電圧は 50kV・15kV・７kV，管電流は４μA～ 1000μA，測定時間は 300 秒，雰囲気は真空で測定した。

分析した須恵器試料は，第１表と第５図に示した中村１号墳６点，築山遺跡１点，上塩冶築山古墳７点の 14 点である。器種は子持壺である。また生産地推定の比較試料として松江市大井窯跡群の６世紀末～７世紀代の山津１号窯跡 35 点，岩汐窯跡 29 点，ババタケ窯跡８点，池ノ奥窯跡６点の 78 点と時期は異なるが９世紀の出雲市木舟窯跡群の 35 点である。

３　分析結果

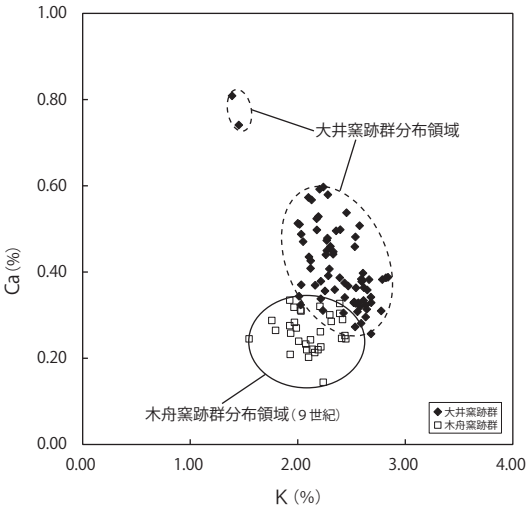
この分析では測定した 13 成分のうち，分析試料に顕著な差がみられたのは Ca，K，Sr の３成分であった。この３成分を用いて散布図を作成し，胎土の違いを検討した。

第１図Ｋ－Ca，第２図 Sr －Ca の両散布図では，大井窯跡群（山津１号窯跡，岩汐窯跡，ババタケ窯跡，池ノ奥窯跡）と木舟窯跡群（９世紀）の胎土比較を行った。その結果，両散布図とも１/３ほど分布域が重なった。つまり，第１図では Ca 量が３％以下の低いところに木舟窯跡が分布している。また，第２図でも Ca 量，Sr 量が共に低いところに木舟窯跡が分布していることがわかった。

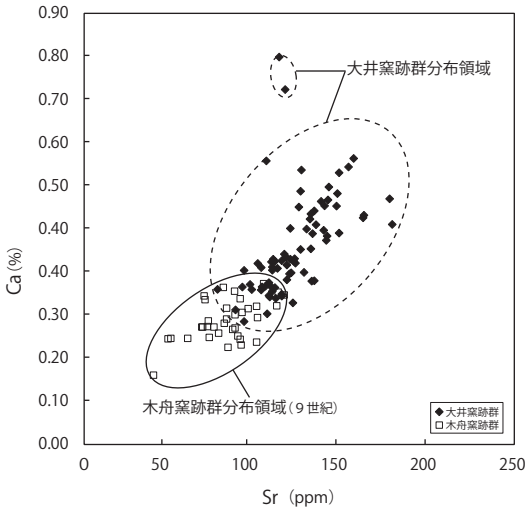
第３図Ｋ－Ca，第４図 Sr －Ca の両散布図では，中村１号墳，築山遺跡，上塩冶築山古墳から出土した子持壺須恵器の産地推定を行った。すると，中村１号墳と築山遺跡，上塩冶築山古墳の２つの胎土に分類が可能であった。それは，Ca 量・Sr 量の多い領域に中村１号墳が，低いところに築山遺跡と上塩冶築山古墳が分布した。また，生産地との比較では，中村１号墳が大井窯跡群の分布域に，築山遺跡と上塩冶築山古墳が木舟窯跡群の分布域に分布した。

第１表　中村１号墳ほか出土須恵器の胎土分析値一覧表（Si ～ P：%，Rb ～ Zr：PPm）

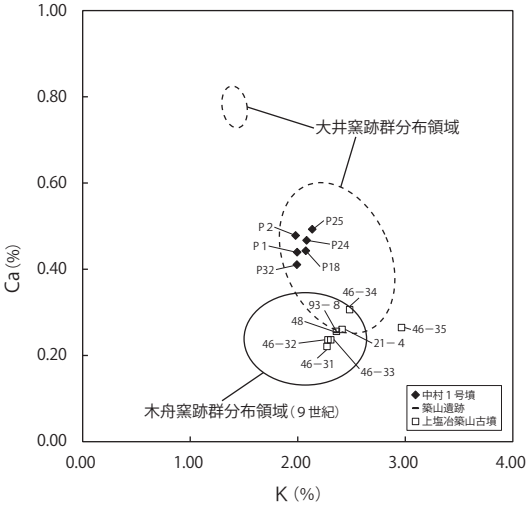
報告書図版番号	遺跡名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
P 1	中村1号墳	子持壺	74.49	1.20	13.92	5.57	0.04	1.54	0.44	0.65	1.99	0.05	39	122	312
P 2	中村1号墳	子持壺	75.59	1.31	13.90	5.77	0.03	0.78	0.48	0.00	1.98	0.05	41	85	337
P 18	中村1号墳	子持壺	77.32	1.25	13.30	4.07	0.04	0.98	0.44	0.39	2.07	0.05	23	138	355
P 24	中村1号墳	子持壺	75.77	1.22	14.20	4.15	0.01	1.25	0.47	0.68	2.08	0.05	20	120	270
P 25	中村1号墳	子持壺	76.15	1.19	13.65	5.09	0.02	0.79	0.49	0.35	2.13	0.04	46	127	321
P 32	中村1号墳	子持壺	72.27	1.44	15.70	6.65	0.01	1.13	0.41	0.28	1.99	0.03	20	133	341
93 － 8	築山遺跡	子持壺	76.49	1.09	14.01	5.34	0.00	0.33	0.25	0.00	2.36	0.03	31	52	254
21 － 4	上塩冶築山古墳	子持壺	72.83	1.18	16.96	5.96	0.00	0.27	0.26	0.00	2.41	0.04	33	69	320
46 － 31	上塩冶築山古墳	子持壺	71.65	1.13	16.22	6.34	0.01	1.64	0.22	0.39	2.27	0.04	16	28	245
46 － 32	上塩冶築山古墳	子持壺	77.02	1.01	13.35	5.75	0.02	0.19	0.24	0.00	2.28	0.04	25	54	255
46 － 33	上塩冶築山古墳	子持壺	76.19	0.98	14.21	5.00	0.01	0.64	0.24	0.31	2.31	0.04	41	73	257
46 － 34	上塩冶築山古墳	子持壺	77.25	0.90	13.54	4.74	0.00	0.37	0.31	0.26	2.49	0.04	30	36	237
46 － 35	上塩冶築山古墳	子持壺	76.93	0.99	13.47	4.97	0.00	0.26	0.27	0.00	2.97	0.02	19	77	251
48	上塩冶築山古墳	子持壺	76.75	1.00	13.66	5.18	0.02	0.37	0.26	0.29	2.36	0.04	52	70	280



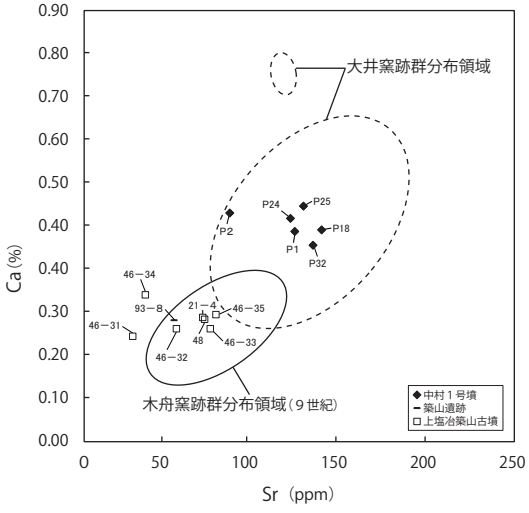
第１図　大井窯跡群と木舟窯跡群の比較
（K － Ca 散布図）



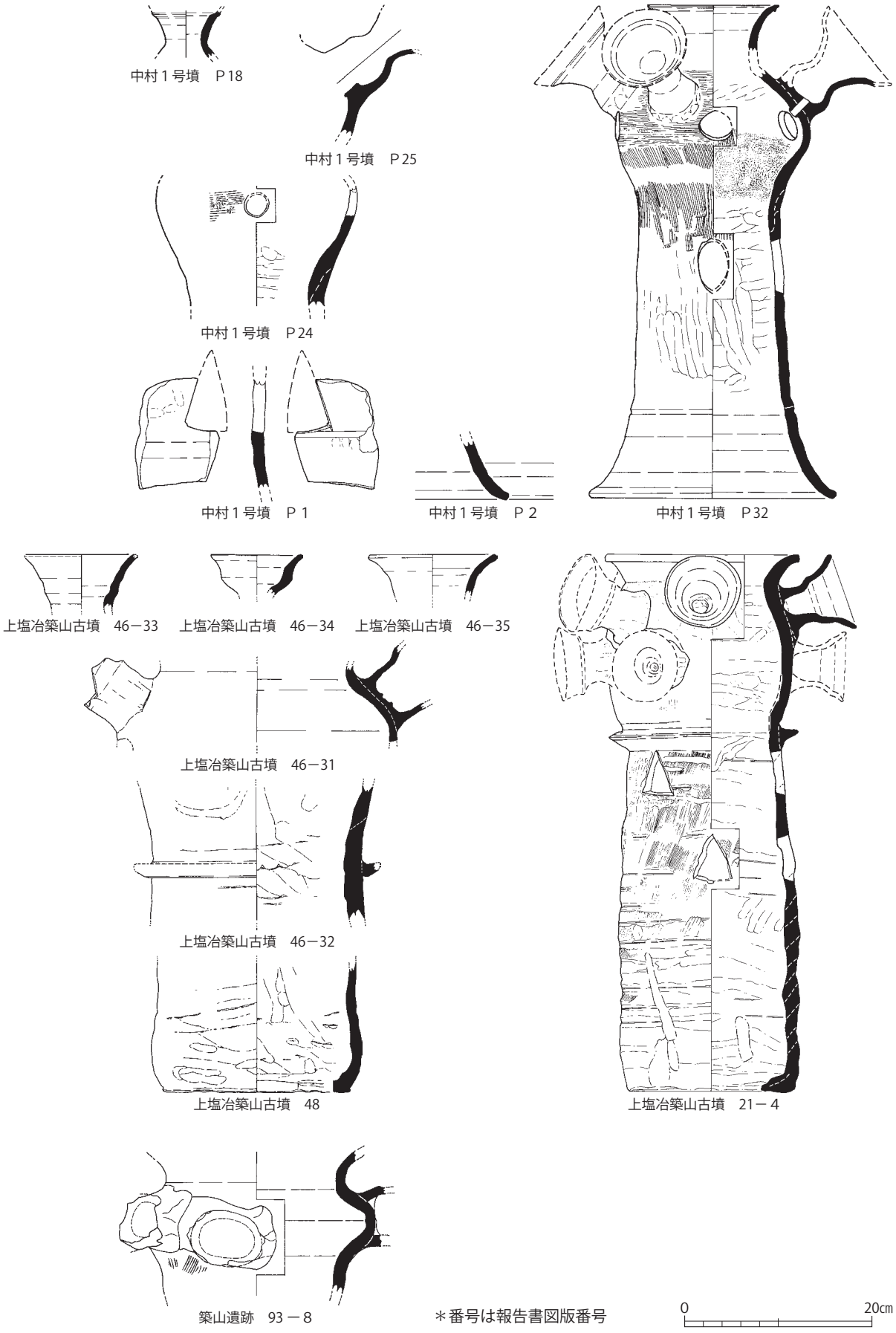
第２図　大井窯跡群と木舟窯跡群の比較
（Sr － Ca 散布図）



第３図　中村１号墳ほか出土須恵器の産地推定
（K － Ca 散布図）



第４図　中村１号墳ほか出土須恵器の産地推定
（Sr － Ca 散布図）



第５図　胎土分析を行った出雲型子持壺実測図（１：６）

４　考　察

蛍光Ｘ線分析による胎土分析で中村１号墳，築山遺跡，上塩冶築山古墳から出土した子持壺須恵器の産地推定を行ったところ，以下のことが推定された。

中村１号墳，築山遺跡，上塩冶築山古墳から出土した子持壺は，中村１号墳と，築山遺跡・上塩冶築山古墳の２つに分類できた。また生産地推定では，中村１号墳の子持壺は大井窯跡群の分布域に分布し，築山遺跡と上塩冶築山古墳の子持壺は大井窯跡群の分布域から外れ，窯跡の時期は異なるが木舟窯跡群の分布域に分布する結果となった。このように出雲市内の古墳出土の子持壺は複数の生産地から供給されていることが推定された。また，築山遺跡と上塩冶築山古墳の子持壺は今回の分析結果で，大井窯跡群の領域に入らなかったことから，大井窯跡群以外で生産された可能性が示唆された。しかし，大井窯跡群内にも今回分析した以外の窯も多数存在することから，窯跡試料の蓄積を行い再検討する必要がある。

（岡山理科大学　　白石　純）

分析試料出典

出雲市教育委員会 2004『上塩冶築山古墳』

出雲市教育委員会 2009『築山遺跡Ⅲ』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

参考文献

白石　純 2010「出雲地方出土須恵器の胎土分析」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』島根県古代文化センター　45 ～ 54 頁

第９節　中村１号墳の前室石棺内埋土のリン濃度分布

１　はじめに

中村１号墳前室内に安置された石棺は，発掘時に石棺内が泥で埋まっており，「亡きがら」あるいはその「こん跡」を見いだすことができなかった。石棺内埋土の厚さは均質ではなく，埋土の薄い部分でも「亡きがら」が見いだせなかったことから，本来あるべき「亡きがら」が石棺内のどこかに集められた可能性が指摘された。中村１号墳前室の石棺内埋土は 10㎝四方のブロックごとに採取・保管されていることから，この試料を利用して石棺内での「亡きがら」の状況（存在）を調べるために，リン分析を実施した。更に，リン高濃度分布域での有機物量の起源を判断するために，土壌中の有機炭素，全窒素濃度を測定した。

２　試料について

文化財調査コンサルタント（株）により 10㎝四方のブロックで採取され（第１図のリン濃度分布平面図に，ブロックの採取位置を示す），出雲市文化財課において保管されていた 148 試料から分取した。

３　測定方法

（１）　リン濃度測定方法

地質調査所の珪酸塩分析方法に準拠して試料を溶解後，モリブデン青吸光光度法により吸光度を求め，リン濃度を算出した。吸光度の測定には日立製作所製分光光度計 U － 2000 を使用し，波長 880nm の吸光度を測定した。

（２）　有機炭素・全窒素測定方法

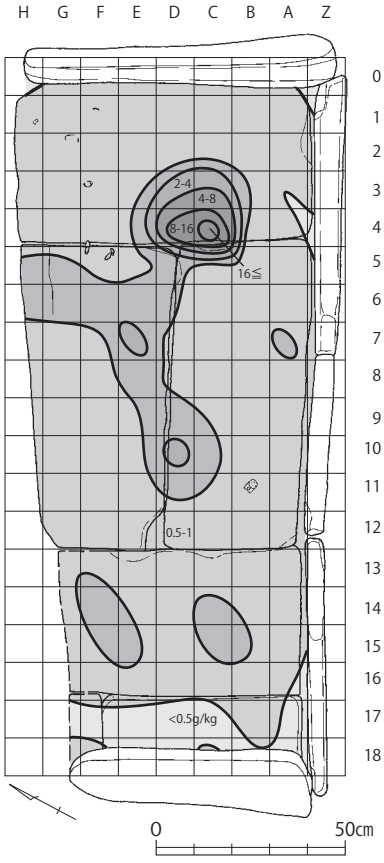
塩酸で $CaCO_3$ の溶解後，標準試料に BBOT を用いて，FISONS（旧カルロエルバ社）製元素分析機 EA － 1108 により測定した。

４　測定結果

（１）　リン濃度測定結果

第１図に濃度分布平面図，第１表に測定値を示す。

分析を行った 148 試料の平均：0.97g/㎏ 最大値：16.86g/㎏ 最小値：0.33g/㎏ 中央値：0.69g/㎏ 標準偏差：1.54 である。第２図の濃度分布（度数分布）を基に，大きく値が異なる３試料を除いた場合，平均：0.78g/㎏ 最大値：2.99g/㎏ 最小値：0.33g/㎏ 中央値：0.68g/㎏ 標準偏差：0.34 となる。



第１図　リン濃度分布
（グリッドの配置と平面分布）

（２）　有機炭素・全窒素測定結果

リン濃度の特に高いＣ－４グリッドについてのみ有機炭素，全窒素を測定した。測定値はＣ：0.765％，Ｎ：0.090％で，C/N：8.5 であった。一般に陸上高等植物の C/N は 10 以上，動物で 1 桁の値であり，Ｃ－４グリッドに動物由来の有機物が分布していたことが示唆される。

第１表　全リン測定結果

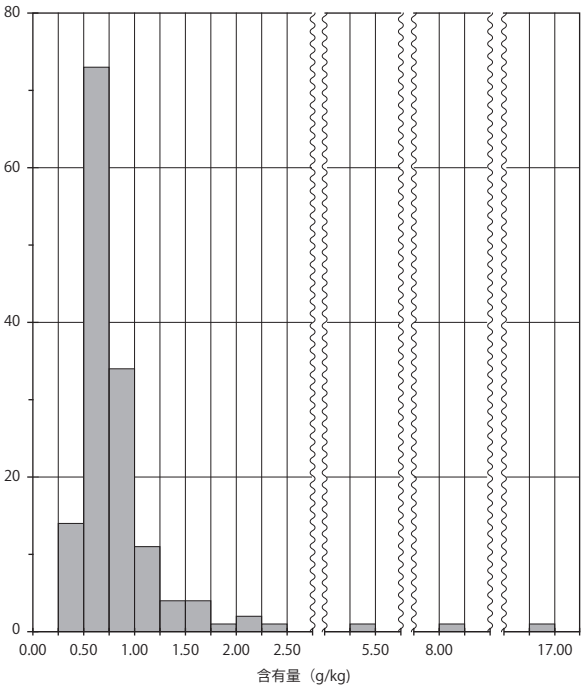
試料名	含有量(g/kg)	試料名	含有量(g/kg)	試料名	含有量(g/kg)	試料名	含有量(g/kg)	試料名	含有量(g/kg)	試料名	含有量(g/kg)	試料名	含有量(g/kg)	試料名	含有量(g/kg)	試料名	含有量(g/kg)
Ａ－０	0.52	Ｂ－０	0.74	Ｃ－０	0.85	Ｄ－０	0.54	Ｅ－０	0.66	Ｆ－０	0.55	Ｇ－０	0.53	Ｈ－０	0.47	Ｚ－０	0.45
Ａ－１	0.54	Ｂ－１	0.81	Ｃ－１	0.98	Ｄ－１	0.67	Ｅ－１	0.91	Ｆ－１	0.85	Ｇ－１	0.85	Ｈ－１	0.56	Ｚ－１	0.48
Ａ－２	0.53	Ｂ－２	0.60	Ｃ－２	0.82	Ｄ－２	0.56	Ｅ－２	0.67	Ｆ－２	0.84	Ｇ－２	0.98	Ｈ－２	0.68	Ｚ－２	0.55
Ａ－３	0.50	Ｂ－３	1.08	Ｃ－３	5.36	Ｄ－３	2.14	Ｅ－３	0.75	Ｆ－３	0.94	Ｇ－３	0.87	Ｈ－３	0.67	Ｚ－３	0.62
Ａ－４	0.53	Ｂ－４	0.59	Ｃ－４	16.86	Ｄ－４	8.24	Ｅ－４	1.13	Ｆ－４	0.71	Ｇ－４	0.83	Ｈ－４	0.70	Ｚ－４	0.45
Ａ－５	0.60	Ｂ－５	0.52	Ｃ－５	0.85	Ｄ－５	1.10	Ｅ－５	0.86	Ｆ－５	0.72	Ｇ－５	1.42	Ｈ－５	0.76	Ｚ－５	0.49
Ａ－６	0.64	Ｂ－６	0.85	Ｃ－６	0.65	Ｄ－６	1.55	Ｅ－６	1.35	Ｆ－６	1.27	Ｇ－６	1.10	Ｈ－６	1.11	Ｚ－６	0.52
Ａ－７	1.06	Ｂ－７	0.84	Ｃ－７	0.78	Ｄ－７	0.76	Ｅ－７	2.39	Ｆ－７	0.93	Ｇ－７	0.81	Ｈ－７	0.69	Ｚ－７	0.68
Ａ－８	0.73	Ｂ－８	0.86	Ｃ－８	0.73	Ｄ－８	0.78	Ｅ－８	1.14	Ｆ－８	0.86	Ｇ－８	0.84	Ｈ－８	0.64	Ｚ－８	0.75
Ａ－９	0.65	Ｂ－９	0.69	Ｃ－９	0.89	Ｄ－９	1.62	Ｅ－９	0.93	Ｆ－９	0.96	Ｇ－９	0.66	Ｈ－９	0.62	Ｚ－９	0.63
Ａ－10	0.65	Ｂ－10	0.80	Ｃ－10	1.77	Ｄ－10	2.22	Ｅ－10	0.51	Ｆ－10	0.62	Ｇ－10	0.58				
Ａ－11	0.54	Ｂ－11	0.63	Ｃ－11	0.54	Ｄ－11	1.15	Ｅ－11	0.57	Ｆ－11	0.61	Ｇ－11	0.59				
Ａ－12	0.51	Ｂ－12	0.55	Ｃ－12	0.58	Ｄ－12	0.72	Ｅ－12	0.66	Ｆ－12	0.57	Ｇ－12	0.53				
Ａ－13	0.57	Ｂ－13	0.61	Ｃ－13	0.58	Ｄ－13	0.69	Ｅ－13	0.71	Ｆ－13	0.67						
Ａ－14	0.54	Ｂ－14	0.88	Ｃ－14	1.11	Ｄ－14	0.67	Ｅ－14	0.78	Ｆ－14	1.53						
Ａ－15	0.71	Ｂ－15	1.03	Ｃ－15	1.26	Ｄ－15	0.51	Ｅ－15	1.08	Ｆ－15	1.70						
Ａ－16	0.73	Ｂ－16	0.59	Ｃ－16	0.66	Ｄ－16	0.75	Ｅ－16	0.62	Ｆ－16	0.69						
Ａ－17	0.45	Ｂ－17	0.68	Ｃ－17	0.33	Ｄ－17	0.44	Ｅ－17	0.43	Ｆ－17	0.46						
Ａ－18	0.48	Ｂ－18	0.45	Ｃ－18	0.54	Ｄ－18	0.40	Ｅ－18	0.48	Ｆ－18	0.51						

５　リンの濃度分布について

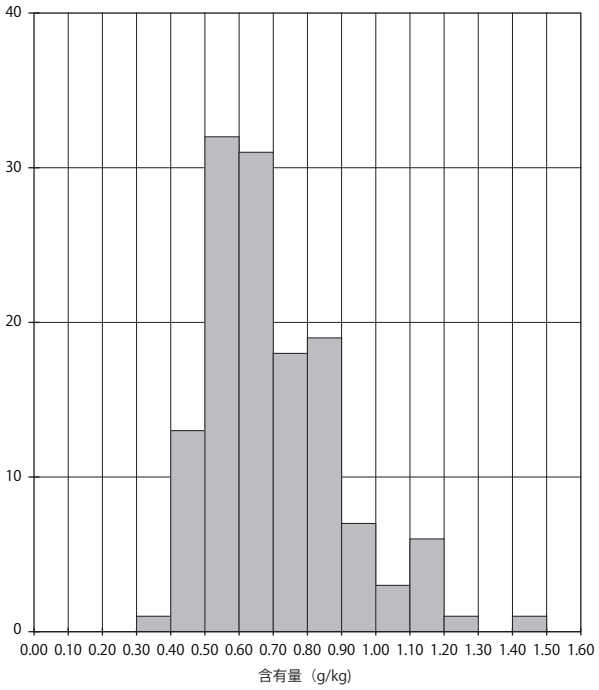
（１）　統計処理（度数分布）

石棺内埋土のバックグラウンドとしての濃度を求め，濃度分布図のしきい値を決めるために，0.25g/kg（以下単位を省略）をしきい値とする 濃度分布（度数分布）図：第２図を作成した。この図から，３試料（Ｃ－３，Ｃ－４，Ｄ－４グリッド）の値が，外の値から大きく離れていることが分かる。また，これら３試料に隣接するＤ－３グリッドも 2.14 と比較的高い値を示す。更に 2.00 ～ 2.25 と 1.50 ～ 1.57 にピーク（バックグランドからの高まり）が認められる。これらはＤ－ 10（2.22）を中心とするＤ－９（1.62），Ｃ－ 10（1.77）グリッド，Ｅ－７（2.39）グリッドを中心とするＤ－６（1.55），Ｅ－６（1.35），Ｆ－６（1.27），Ｅ－８（1.14）グリッド，Ｆ－ 15（1.70）グリッドを中心とするＦ－ 14（1.53），Ｅ－ 15（1.08）グリッドにまとめられる。したがって，石棺内のバックグランドを 1.0 程度と仮定すると，これら 15 試料について検出されたリンは，バックグランドから分離することができる。ただし一般に土壌中のリンの含有量は，森林土壌で 0.2 ～ 0.3 程度とされており，今回仮定したバックグランドの値（1.0）はやや高い。

第３図は，前記 15 試料を除いた上で度数分布のしきい値を 0.1 にした度数分布図である。この図から 1.0 ～ 1.2 のピークが認められる外，バックグランドと考えた 1.0 以下にも更に幾つかのピークが存在する可能性が示唆された。



第２図　リン濃度分布
（度数分布 148 試料 0.25g/kg間隔）



第３図　リン濃度分布
（度数分布 133 試料 0.10g/kg間隔）

（２）　濃度分布（平面分布）

度数分布から明らかになった４つのピークを明瞭に表すために，バックグランドを 1.0 と仮定し，0.5，1.0，2.0，4.0，8.0，16.0 をしきい値としたリン濃度の平面分布図（第１図）を作成した。

平面分布図ではＣ－４グリッドを中心に特に高濃度域が示されたほか，Ｃ，Ｄ，Ｅ列の石棺中心部に高濃度の帯が認められた。また，1.0 ～ 1.2 のグリッドは端部に分布した。

６　Ｃ－４グリッドにおける集骨の可能性

第２表に人間（部位別），及び動植物，土壌中の元素濃度及び P/C，C/N を示した。ここから，骨にはリンが 6.7％と高濃度で含まれることと，人体全体では 1.1％にすぎないことが分かる。また，骨の C/N は 8.4，P/C は 0.185，人間全体の C/N は 8.9，P/C は 0.049 である。

今回の分析では，Ｃ－４グリッドでリン濃度が 16.86（g/kg）と突出して高い。さらに，Ｃ－４グリッドでの C/N は 8.5 と人骨の C/N（8.4）に近く，Ｃ－４グリッドに人骨が集められていた可能性が示唆される。一方，P/C は 2.20 と，動植物の一般的な値から大きく外れ，人間全体の 50 倍程度，人骨の９倍程度を示す。このことは，リンの起源が人骨ではなく，何か別のものが混入した可能性を示唆する。

試料を採取した石棺内には石室の一部が剝落・落下していた。また，石棺そのものの風化も進んでおり，試料採取時にこれらを試料に取り込んだ可能性も否定できない。このように，石棺，あるいは石室の石材にリンが高濃度で含まれていたとすれば，リン濃度，P/C を上昇させる原因となりうる。しかし石室，試料を採取した石棺の石材は砂岩（第４章第１節）である。第２表に示したように堆積

岩（堆積物，頁岩）中のリン濃度，P/C は低いことから，石室，石棺の石材の影響でリン濃度や P/C が高くなったとは考えにくい。

土壌中での人体（亡きがら）の劣化に伴う，リン，炭素，窒素の動態はほとんど知られていない。前例となる渡辺（2008，2010）の調査結果では，C/N とリン濃度の間には相関が認められず，P/C が動植物に比べ高い傾向にある。一方，C/N は動植物の平均的な値から外れることがない。これらのことから，リンが炭素，窒素に比べ拡散しにくく，炭素，窒素はほぼ等しい動態を示すと予想される。リン，炭素，窒素の動態がこの予想通りとすれば，得られた P/C が骨の値より高いことが，骨の存在を否定する要因にはならない。従って現状では，Ｃ－４グリッドに人骨が集められたことを否定する要因は見つからない。ただし今後，石棺内や土坑墓を対象としたリン，炭素，窒素の測定例を増やし，土壌中での人体（亡きがら）の劣化に伴う，リン，炭素，窒素の動態を明らかにする必要がある。

第２表　人間，動植物，土壌中の元素の割合

		リン（P）	P/C	炭素（C）	窒素（N）	C/N	カルシウム（Ca）
人間	全体	1.1%	0.049	22.9%	2.6%	8.9	1.4%
	骨	6.7%	0.185	36.0%	4.3%	8.4	17.0%
	筋肉	0.58%	0.009	67.0%	7.2%	9.3	0.04%
	毛	0.01%	0.000	54.0%	16.0%	3.4	0.17%
	肝臓	0.94%	0.014	67.0%	7.2%	9.3	0.02%
動物	哺乳類	－	－	48.4%	12.8%	3.8	－
	魚類	－	－	47.5%	11.4%	4.2	－
植物	バクテリア	3.0%	0.056	54.0%	9.6%	5.6	0.51%
	菌類	0.50%	－	－	3.4%	－	0.09%
	蘚苔類	0.17%	－	－	1.2%	－	5.1%
	シダ類	0.20%	0.004	45.0%	2.0%	22.5	0.37%
	裸子植物	0.20%	0.004	45.0%	3.2%	14.1	0.85%
	被子植物	0.11%	0.002	45.0%	2.5%	18.0	0.85%
	野菜類	0.51%	0.011	45.0%	5.3%	8.6	2.5%
土壌・岩石	平均的土壌	0.08%	0.040	2.00%	0.20%	10.0	1.5%
	堆積物の平均	0.067%	0.023	2.94%	0.047%	62.6	6.60%
	頁岩の平均	0.070%	0.044	1.60%	0.060%	26.7	3.10%
	花崗岩の平均	0.070%	1.9	0.036%	0.0021%	17.1	1.6%
	玄武岩の平均	0.14%	2.3	0.061%	0.0030%	20.3	6.7%

Bowen（1979）によって編集された，Iyengar *et al.*（1978），Koons and Helmke（1978），Tjell and Hovmand（1978），Casagrande and Erchall（1977），Hanawalt snd Whittaker（1977），Valkovic（1977），Wakatsuki *et al.*（1977），Chester and Aston（1976），Connor and Shacklette（1975），Synder（1975），Golley *et al.*（1969），Scharrer and Linser（1969），Wedepohl（1969-1974），Haller *et al.*（1968），Wedepohl（1968），Bowen（1966），Chapman（1966），Gorham and Swaine（1965），Taylor（1964），Hanna and Grant（1962），Vinogradov（1959），Vinogradov（1953），Rankama and Sahama（1950）のデータを使用した。ただし，幅を持って示された値については，最高値と最低値の中間の値を用いた。

7　まとめ

今回の分析により，石棺内でリン濃度の分布に偏りがあることが分かった。特に石棺内長軸方向のＣ，Ｄ，Ｅ列に高濃度の部分が集中することが分かった。更にＣ－４グリッドの C/N 値から，リンが動物（人間，人骨）に由来することが示唆された。これらの事柄は，「亡きがら」が石棺内中央に安置されていたことを示唆する。

また，Ｃ－４グリッドを中心とした範囲にリンが高濃度で分布する原因について，この場所に遺骨が集められた可能性が指摘できた。現状ではこの事に対して否定的な要因が見つからないが，今後，

石棺や土坑墓でのリン，炭素，窒素の動態を明らかにしていくほか，人間以外の動植物，岩石，土壌など多くの物質について，リン，炭素，窒素の含有量を明らかにしていく必要がある。

（文化財調査コンサルタント株式会社　渡邉正巳）

参考文献

Bowen, H. J. M.（1966）"Trace Elements in Biochemistry", Academic Press, London, New York

Bowen, H. J. M.（1979）"Environmental Chemistry of the Elements", Academic Press, London, New York

Casagrande, D. J. and Erchall, L. D.（1977）*Geochim. Cosmochim. Acta*, 41, 1391

Chapman, H. D.（ed）（1966）"Diagnostic Criteria for Plants and Soils", Univ. California; Div. Agric. Sci.

Chester, R. and Aston, S. R.（1976）"Chemical Ocsanography", Vol. 6, p. 281（Riley, J. P. and Skirrow, G., eds）, Academic Press, London. New York

Connor, J. J. and Shacklette, H. T.（1975）*U.S. Geol. Surv. Prof. Paper* 574-F

Golley, F. B., McGinnis, J. T., Clements, R. G. I. and Duever, M. J.（1969）*Bioscience*, 19, 693 and 697

Gorham, E. and Swaine, D. J.（1965）*Limnol. Oceanog.* 10, 268

Haller, W. A., Rancitelli, L. A. and Cooper, J. A.（1968）*J. Agric. Food Chem.* 16,1036

Hanawalt, R. B. and Whittaker, R. H.（1977）*Sili. Sci.* 123, 25

Hanna, W. J. and Grant, C. L.（1962）*Bull. Torrey Bot. Club*, 89, 293

Iyengar, G., Kollmer, W. E. and Bowen.H. J. M.（1978）"Elememtal Composition of Human Tissues and Body Fluids", Springer Verlag, Berlin, Heidelberg, New York

Koons, R. D. and Helmke, P. A.（1978）*Soil Sci. Soc. Amer. J.* 42, 237

Rankama, K. and Sahama, T.（1950）"Geochemistry", Chicago University Press

Scharrer, K. H. and Linser, H.（eds）（1969）"Handbuch der Pflanzenernährung und Dungung", Springer Verlag, Berlin, Heidelberg, New York

Snyder, W. S.（ed）（1975）"Report of Task Group on Reference Man", argamon Press Ltd, Oxfofd, New York

Taylor, S. R.（1964）*Geochim. Cosmochim. Acta*, 28, 1273

Tjell, J. C. and Hovmand, M. F.（1978）*Acta Agric. Scand.* 28, 81

Valkovic, V.（1977）"Trace Elements in Human Hair", Garland S. T. P. M.

Vinogradov, A. P.（1953）"The Elementary Chemical Composition of Marine Organisms", Sears Foundation, New Haven, Conn.

Vinogradov, A. P.（1959）"Geochemistry of Rare and Dispersed Elements in Soils", Chapman and Hall, London

Wakatsuki, T., Furukawa, H. and Kyuma, H.（1977）*Geochim. Cosmochim. Acta*, 41, 891

渡邉正巳 2010「矢野遺跡 B 区 SK2866 の P（全リン）及び C（有機炭素）・N（全窒素）分析」『矢野遺跡 自然科学分析・考察編（第 4 分冊）－新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財報告書－』出雲市の文化財報告 10　出雲市教育委員会　31 ～ 38 頁

渡邉正巳 2008「原田遺跡 8 区土坑（SK57）の自然科学的検討」『原田遺跡 4　縄文時代以降の調査』国土交通省

中国地方整備局・島根県教育委員会　192 ～ 202 頁　Wedepohl, K. H.（1968）"Origin and Distribution of the Elements", p. 999（Ahrens, L. H., ed）, Pergamon Press Ltd., Oxford, New York

Wedepohl, K. H.（1969-1974）"Handbook of Geochemistry", Springer Verlag, Berlin, Heidelberg, New York

第６章　付　論

第１節　中村１号墳出土珠文鏡と出雲地域の銅鏡出土後期古墳

１　はじめに

珠文鏡は，古墳から出土する小型鏡のなかでもっとも多数の事例が確認されている鏡式である。確実に把握できる例だけでも 200 面以上が存在し，前期から後期という古墳時代を通じてほぼ継続的に古墳に副葬される。このように，古墳出土鏡を通覧した際の珠文鏡の特質は，数が多数にのぼるという点，そのうえで長期にわたって墳墓に副葬されるという点に尽きる。また，数は少ないものの，墳墓にかかわる遺跡以外において古墳時代の全期間を通じて確認されている事実もその性格を考えるうえで無視することのできない一側面を反映するものと考える。

珠文鏡の年代的位置の検討については，小林三郎と今井堯による先駆的な業績がある。両氏の研究によって，珠文鏡が古墳時代の初頭から存在する点が明確に示されたことは（小林 1979，今井 1991），それまで抱かれがちであった退化方向への変遷や，大型品から小型品へといった変化などの，漠然とした仿製鏡の推移のイメージを払拭することにつながった。また，珠文鏡という鏡式内での系列的な整理も進められるようになり，大まかながら前期から後期に至る製作の展開についても把握できるようになった（森下 1991）。

小稿では，上記の先行研究の成果をふまえながら，島根県出雲市に所在する中村１号墳から出土した珠文鏡の位置づけを，以下の二つの方向性から探ることとしたい。一つは，おもに文様構成の共通する鏡群を抽出することを試み，あわせて系譜的に関連性を考慮しうる鏡群を見出す基礎的な作業をおこなうものである。そのうえで，これらの作業を通して，年代的な位置づけを把握することをめざす。そしていま一つは，今後におこなうべき議論に備える内容となるが，古墳時代後期における銅鏡副葬の意義について考えるための基礎的な枠組みの提示を射程にした方向性であり，出雲地域における銅鏡出土後期古墳の様相を整理するものである。以下，個別に検討を試みることにしよう。

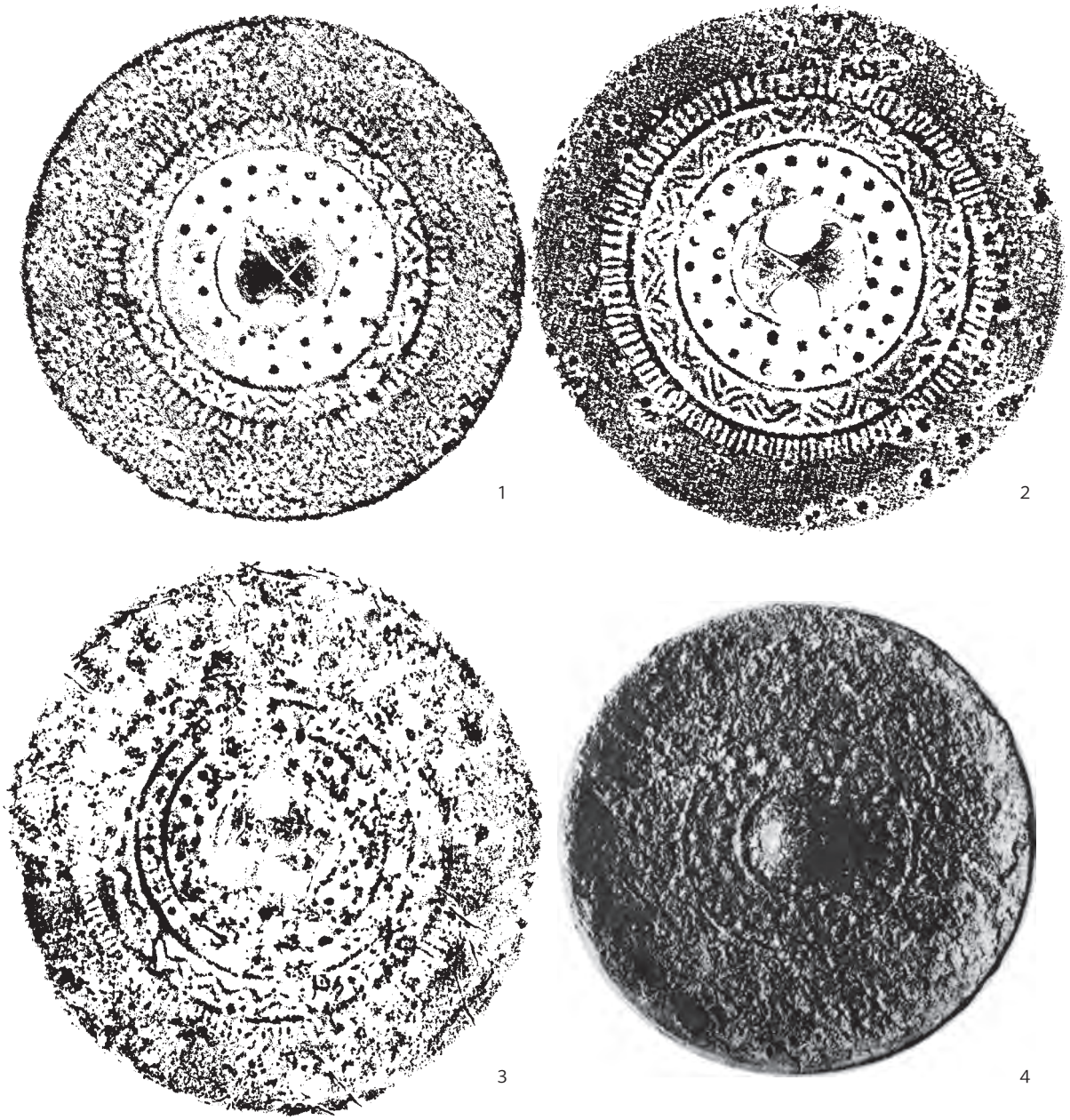
２　中村１号墳出土の珠文鏡の位置づけ

（１）　中村１号墳出土珠文鏡と類例

中村１号墳出土の珠文鏡にみる特徴　最大径 7.67㎝，最小径 7.63㎝のいわゆる珠文鏡である（第１図－１）。中央に整った半球形の鈕があり，その外周には１条の円圏がめぐる。円圏の外側には内区主文部があり，珠文を内外２重に列状に充填する。内区に相当する珠文部分を区画する乳は，存在しない。内区外周部は２条の文様帯からなり，内側が複線波文帯，外側が櫛歯文帯である。外区は素文の匙面をなす平縁であり，内外区の境には明瞭な段差がみとめられない。

類例の探索　中村１号墳から出土した珠文鏡にみる特徴として重要であると考えるのは，２重の列

状の珠文を内区主文部に配することと，内区外周部に複線波文帯と櫛歯文帯という文様構成を採用することである。同様の特徴をもつ資料を広く探索したところ，酷似する例として兵庫県文堂古墳出土鏡（直径 8.2㎝，中村 1992），島根県御崎山古墳出土鏡（直径 8.1㎝，大谷 1996）の２面を抽出した（第１図－２・３）。このほか，錆で内区最外周の文様帯の種類がはっきりしないが，慶州金鈴塚古墳出土鏡（直径 7.0㎝，梅原 1931・1932）も近似する例である可能性が高い（第１図－４）。これらのうち，御崎山古墳出土鏡では内区外周部が３帯構成となっており，もっとも内側に珠文帯をめぐらすといった他例との違いがみられる。また，文堂古墳出土鏡は，内区外周部の複線波文帯が３本で構成されるものであり，他例が採用する２本構成とは差がある。このように，きわめて類似する鏡が存在するわけであるが，そうした鏡どうしであっても，いっぽうでは細部には差がみとめられるのである。ただ



第１図　中村１号墳出土珠文鏡とその類例（S= １：１）

１　中村１号墳　２　文堂古墳　３　御崎山古墳　４　慶州金鈴塚古墳

し，こうした文様にみるわずかな差については，直径８㎝前後のなかでの微妙なサイズの違いに起因するものである可能性などを考慮することができ，あくまでも個体差とみなしうるものであるという点をここでは強調しておきたい。

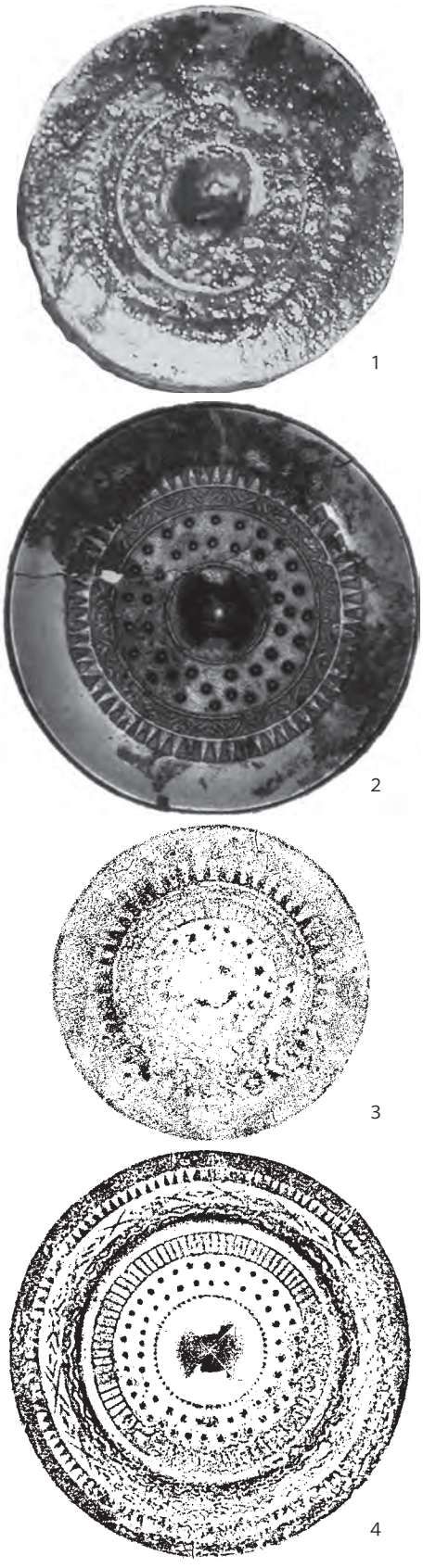
類例を出土した古墳の様相　先に抽出した４面の珠文鏡は，文様表現・構成という点で，一定のまとまりをなすものと考える。いずれもが直径８㎝前後という近似した大きさをもあわせもち，他の要素においても強い共通性を保持する点は上述したとおりである。そうしたまとまりの強い銅鏡群を，出土した古墳という観点からみると，共伴資料に装飾大刀や金銅装馬具を含むなど，副葬品にはいわゆる優品の存在を共通してみとめることができる。すなわち，中村１号墳の珠文鏡とその類例を出土した古墳に共通して指摘しうるのが，いずれもが小地域を代表するような首長墓とみなしうるという点なのである。

個々の銅鏡の年代的な位置については，共伴した須恵器が参考となりうる。ただし，現状においていわゆる陶邑編年（田辺 1966）を広域編年の基準として採用しうるかは，本来的に検証すべき研究段階にあるものと考える。しかし，ここではその準備がないので，あくまでも鏡の年代を考える一つの目安として須恵器の位置づけを示しておくこととしたい(1)。類例を出土した３古墳において，それぞれ伴出した須恵器を陶邑の窯跡資料に比定すると，私見でもっとも古く見積もった場合，中村１号墳では TK43 型式，御崎山古墳では TK43 型式，文堂古墳では TK209 型式がそれぞれの上限にあてはめうるものと考える。比較的近接した時期の型式の須恵器が，同じとみなしうる鏡群と共伴する状況を確認できることから，これらの銅鏡が一時期のまとまりを示す可能性を考慮しうる。また，その製作から副葬に至るまでの時間幅についてもそれほど大きくないものと推測できる。以上のように，中村１号墳から出土した珠文鏡を含むきわめて共通した様相を示す鏡群の年代については，現状の資料による限り，陶邑須恵器編年のいわゆる TK43 型式期を一つの目安としうる。古墳時代後期という時期表現のなかでは，中葉ないしは後半に相当するだろう。

（２）　中村１号墳出土珠文鏡と関連鏡群の位置

中村１号墳出土珠文鏡と関連する鏡群　つづいて，前項で検討した中村１号墳鏡を含む鏡群と関連する可能性のある別の鏡群を抽出し，比較検討を試みたい。

まずは，近似する文様構成をもつ例として，内区外周部のもっとも外側の文様帯が，櫛歯文帯のかわりに鋸歯文帯となっている事例を抽出する。施文にあたっての手間を考えるならば，こちらの鏡群が中村１号墳などのまとまりより，年代的に古相を示す可能性が高いと想定できよう。標識的な例としては，群馬県八幡原町若宮古墳（直径 7.0㎝，東京国立博物館編 1983），群馬県弦巻古墳（直径 7.0㎝，水野・山田・奥山編 2010），石川県和田山５号墳Ｂ槨（直径 8.2㎝，吉岡・河村編 1997），兵庫県鶏塚古墳（直径 8.7㎝，東京国立博物館編 1956），宮崎県西都原４号地下式横穴墓（直径 8.8㎝，日高 1958）から出土した資料をあげておきたい（第２図－１・２）。いずれの鏡も細部の文様表現に至るまで共通性が高く，形態面においても内外区の境界に明瞭な段差がみられないなど，強いまとまりを有する。これらのうち，若宮古墳は人物埴輪などから後期，鶏塚古墳も横穴式石室をもつという点から後期という年代的な位置づけを与えうるにとどまる。年代を決定する材料が豊富な和田山５号墳Ｂ槨について



第２図　中村１号墳出土珠文鏡の
同一系列鏡群（S= ２：３）

1　和田山５号墳　2　西都原４号地下式横穴墓
3　月岡古墳　4　五條猫塚古墳

は，三角板鋲留短甲，U字形鍬鋤先，長頸鏃，両関刀子の様相から中期後半新相ないし中期末の位置づけが可能である。須恵器型式でいうならば，TK208 型式期にまでさかのぼる可能性は低いと考えうる副葬品組成をなす。たいして築造年代の下限は，資料の存続期間という特性をふまえるならば，截然とは決めがたいが，鉄剣を伴出しているのでおおむね TK10 型式期までにおさまるものと思われる（岩本 2006）。さらに，西都原４号地下式横穴墓からは横矧板鋲留短甲が共伴しており，鉄鏃などからみても中期末という位置づけが妥当であると考える。以上の共伴資料の検討から，ここでとりあげた和田山５号墳ほかから出土した鏡群については，中期末から後期に副葬される傾向にあるものと評価できる。すなわち，年代的には中村１号墳ほかから出土した鏡群よりも先行するものとみてよい。したがって，内区最外周の鋸歯文帯は時間軸上においてより古相を示す属性であり，中村１号墳などにみられる櫛歯文帯はより新相を示す属性であるということになる。この想定は，そもそもは前期古墳出土の珠文鏡のように内外区の境界の段差が明瞭な事例では，一段高い外区素文部のもっとも内側にほどこされていた鋸歯文帯が，時期が下って内外区の境の段差が消滅する過程において，一段低い内区文様と同じ文様面において施文されるようになったという文様のセリエーション的な変化にたいする理解とも整合する。

さらに，別の関連するまとまりをなす鏡群として，内区主文部より外側の文様を３帯構成とし，内側から櫛歯文帯－複線波文帯－鋸歯文帯とする福岡県月岡古墳出土鏡（直径 6.9㎝，児玉編 2005）などをとりあげたい（第２図－３）。文様面においては，先の和田山５号墳などのまとまりよりやや複雑な構成をとるものと評価しうる鏡群である。文様構成の複雑さという点をふまえるならば，年代的にはこちらの鏡群が先行する可能性を考えることができるであろう。ただし，内外区の境に明瞭な段差が存在しない点はまったく同じである。同じ鏡群のまとまりをなす資料としては，ほかに徳島県恵解山９号墳出土鏡（直径 8.8㎝，森 1968）をあげておきたい。年代にかんしては，月岡古墳では古相

の鋲留眉庇付冑をはじめ，革綴と鋲留の短甲などからいわゆる鋲留技法導入期に位置づけられる副葬品が出土しており，鉄鏃に長頸鏃を含まない点，埴輪がすべて無黒斑である点などからも，中期中葉ないし中期後半でも古相の築造年代を与えうる。須恵器型式でいうならば，下がったとしてもTK208 型式期にはおさまるであろう。

さらに，主文様を２列の珠文で構成する例としては，奈良県五條猫塚古墳で出土した事例（直径 9.1 ㎝，網干 1962）も注目できる（第２図－４）。外区にいわゆる鼉龍鏡などを代表とする前期古墳出土鏡にみられる，菱雲文に由来する文様帯と鋸歯文帯を組み合わせる点が文様の特徴である。また，これまでにとりあげた鏡群と相違する特徴としては，内外区を分ける段差が明瞭である点をあげうる。型式的にはより古相を示す可能性が高い事例といえる。なお，兵庫県戒壇寺廃寺跡（櫃本 2002）から比較的類似した事例が確認されている。五條猫塚古墳については，古相の鋲留眉庇付冑の存在からいわゆる鋲留技法導入期に位置づけ，三角板革綴短甲や，鉄鏃に長頸鏃を含まない点，埴輪が無黒斑であることなどから，中期中葉ないし後半古相という年代観を与えうる。須恵器型式であえて表現するならば，月岡古墳と同様に下限は TK208 型式期ごろとなるだろう。文様に複雑な様相をうかがえる点や形態面の特徴において，これまでに抽出したほかの３つの鏡群より明確に古相を示すが，出土古墳の年代としては差があまりない。資料数が少ないために判断の難しいところがあるが，事例が増加すれば五條猫塚古墳鏡ほかのまとまりがさらに時期的に古く位置づけうるようになる可能性は否定できない。ただし，古墳時代前期以来の仿製鏡生産という枠組みでみる限り，その年代はわずかに遡上する程度であり，遡ったとしてもせいぜい中期中葉という時期表現を与えうるものであろう。

鏡群の推移と中村１号墳鏡の位置　以上のように共伴資料から，①五條猫塚古墳鏡ほかのまとまりと②月岡古墳鏡ほかのまとまり→③和田山５号墳鏡ほかのまとまり→④中村１号墳鏡ほかのまとまりという時間的な推移を，珠文鏡の諸鏡群にたいして想定できる。この想定は，検討したように，文様の簡略化にもおおむねあらわれており，珠文鏡の時間的な変遷を反映したものととらえて差し支えないであろう。共伴資料を参考とした年代的な位置づけについても，上限がほぼ①・②中期中葉→③中期後半新相ないし末→④後期中葉ないし後半と推移しており，矛盾しない。このことは，珠文鏡の生産が少なくとも後期中葉近くまでは継続的におこなわれていた可能性をも暗示させるという点できわめて重要である。ひいては古墳時代後期の銅鏡生産の終焉について考えるうえでも示唆的な内容を有するものといえよう。なお，今回は検討対象を内区に２列に珠文を充填するものに限定したが，１列の珠文のものやそれ以外のものも同様の推移を示す。ただし，中村１号墳出土鏡の類例以外を含めたくわしい分析については，機会をあらためておこなうこととしたい。

また，中村１号墳出土鏡の位置づけという点においては，現状の資料による限りは陶邑編年の須恵器型式でいう TK43 型式期が副葬年代の上限と考えうる。なお，上述したように，製作時期が副葬時期から大きく遡上することのない可能性を考慮しうる銅鏡であるということは，すなわち中村１号墳出土鏡が製作ののち比較的スムーズに副葬に至ったものと考えることにもなる。つまり，銅鏡の入手と副葬のあいだに連続性・関連性を考慮することになり，ひいては銅鏡から被葬者やその帰属集団の社会的な位置を具体的に考えることも可能になるだろう。さらに，ここで中村１号墳出土鏡に関連す

る珠文鏡のまとまりとして大きく4つの鏡群を抽出したが，いずれの鏡群も豊富な副葬品を有する古墳で出土しているという事実には大いに注目すべきである。要するに，当該期において銅鏡を保有するということじたいが，広域の社会のなかで重要な位置づけを与えられた可能性を反映しているのであり，中村1号墳の被葬者や古墳築造の主体となった集団の性格などを考究するうえできわめて大きな意味をもつものと考える。

3　出雲地域における銅鏡出土の後期古墳

つぎに，古墳時代後期における銅鏡副葬の背景や社会的な意義を考究する前提作業をおこなうにあたり，特定地域として出雲地域における古墳時代後期の銅鏡副葬古墳の様相を整理しておきたい。なお，後期古墳の多くでは横穴系の埋葬施設を採用するため，後世の攪乱の影響を排除しきれないという方法的な問題が介在する点には十分な注意が必要である。ただし，そうした資料的な制約はあるものの，現状で確認できる事例から一定の傾向を導き出すことは可能と考える。

出雲地域の銅鏡出土墳墓のうち，古墳時代後期に位置づけうる事例を第1表に示す。そもそも銅鏡出土古墳が50基に満たない出雲地域では，後期古墳という条件を付与すると，該当するのが安来市鷺の湯病院跡横穴墓（山本1984），松江市古天神古墳（高橋1919），松江市御崎山古墳（大谷編1996），松江市岡田山1号墳（山本・門脇ほか1987），雲南市神代古墳（杉原1991），出雲市今市大念寺古墳（川上・角田・西尾ほか1988，渡辺・内田・曳野・松本1991），出雲市上島古墳（池田1954），出雲市中村1号墳の8例のみとなる。資料の母数が少ないために，安定的な議論を期待することはあまりできないが，以下ではあくまでも一つの試みとしてケーススタディを提示することにしたい。

なお，これらのうち神代古墳鏡については，内区外周に断面蒲鉾形の圏帯をめぐらすなど，古墳時代でも前半期に製作された仿製鏡の特徴をとどめており，製作されてから副葬に至るまで長期に保有された，あるいは伝世といった状況を想定すべきやや特殊な事例であると考えられる(2)。この想定は，写真による観察においても，当該鏡の表面が全体に丸みを帯びた形状となっており，著しく磨滅したと考えうる状態を呈する点とも整合的である。

また，やや評価の困難な資料としては，今市大念寺古墳鏡がある。原位置において確認されたものではないが，報告では前室の副葬品であると推測されている。ただし，それを確定する材料はもちろん存在しない。鏡は攪乱のため，破片となって出土している（川上・角田・西尾ほか1988）。鏡片は外区の4分の1弱ほどが残存するものであり，内区を欠損している。したがって，鏡式はまったくわからない。残存する破片から，直径はおよそ12.5㎝に復元しうる。出土鏡そのものについては，すで

第1表　出雲地域における銅鏡出土後期古墳

番号	古墳名	所在地	墳丘形態	墳丘規模	埋葬施設	石棺	出土鏡式（直径）
1	鷺の湯病院跡横穴墓	安来市	—	—	横穴	組合式家形石棺	珠文鏡系仿製鏡（7.8㎝）
2	古天神古墳	松江市	前方後方墳	27 m	石棺式石室	—	旋回式獣像鏡系仿製鏡（13.6㎝）
3	御崎山古墳	松江市	前方後方墳	40 m	横穴式石室	組合式家形石棺	珠文鏡系仿製鏡（8.2㎝）
4	岡田山1号墳	松江市	前方後方墳	24 m	横穴式石室	組合式家形石棺	内行花文鏡（10.5㎝）
5	神代古墳	雲南市	円墳	8 m	石棺直葬	箱式石棺	獣像鏡系仿製鏡（7.0㎝）
6	今市大念寺古墳（前室?）	出雲市	前方後円墳	91 m	横穴式石室	組合式家形石棺	仿製鏡（復元約12.5㎝）
7	上島古墳	出雲市	円墳	15 m	石棺直葬	刳抜式家形石棺	珠文鏡系仿製鏡（9.1㎝）
8	中村1号墳（玄室）	出雲市	円墳	30 m	横穴式石室	組合式家形石棺	珠文鏡系仿製鏡（7.6㎝）

に報告でも外区に鋸歯文帯のめぐらされている点が注目されており，さらに鋸歯文帯の外側の外区素文部の上面が匙面状となって縁端部へと徐々に反りをもちながら厚みを増すという特徴を備える。こうした外区素文部の形態的特徴や，外区文様帯の最外周における鋸歯文帯の存在，さらにほどこされる鋸歯文帯が幅広のものである点をふまえるならば，今市大念寺古墳鏡は古墳時代仿製鏡に属する鏡式と判断して差し支えないものと考える。また，鋸歯文帯の内側の文様帯には，製品の鋳上がりや錆などの付着物のために不明な点が多いものの，同心円方向に文様によるわずかなふくらみがランダムに連続する状況をみとめうる。そのあり方は放射状に規則的に突線を入れる櫛歯文帯ではなく，複線波文帯がほどこされていると考えるのがふさわしい状況を呈している。さらに，そのふくらみは文様帯を一周連続することなく，細かくとぎれとぎれになっているものと観察しうる。すなわち，複線波文帯でも波文の折り返し部分で突線をとぎれさせる施文方法をとるものである可能性が高い。また，特徴的な要素としてとくに留意すべきは，内外区を分ける段差をみとめることができない点である。上記した特徴をもつ複線波文帯や，とりわけ内外区を分ける段差が存在しない点は，古墳時代中期中葉以降に盛行する仿製鏡に顕著にみとめられるものである。したがって，今市大念寺古墳に副葬された銅鏡については，古墳時代中期中葉以降に盛行する仿製鏡であること，大きさから中型鏡に属するものであると判断できるであろう。

出雲地域における銅鏡出土の後期古墳　第一に注目できるのが，銅鏡出土古墳がとくに副葬品の内容の豊かな事例にほぼ限定されるということを，出雲地域という枠組みでみてもあらためて確認しうる点である。そうした状況は，出雲地域の後期銅鏡出土古墳のなかでも最大規模の墳丘長を誇る，今市大念寺古墳鏡が，全体のなかでは比較的直径の大きなものであるということとも整合的である。むろん，上記の点は予測可能な当然の結果ともいえるわけだが，いっぽうでは銅鏡を含めた豊富な副葬品をもつ古墳であっても，出雲地域のなかで墳丘形態や墳丘構造，埋葬施設に差異があることをうかがう上での格好の材料ともなっている。

こうした見方をしたうえであえて強調したいのは，出雲地域の後期古墳にみるさまざまな地域性の枠組みを超えた次元において，銅鏡が保有された可能性を考慮しうるという点である。なぜなら，各古墳では遺構的な属性において明瞭な小地域にみる差異があるにもかかわらず，共伴した副葬品など遺物的な属性においては一定の共通性を見出しうるからである。とくに銅鏡の場合は，岡田山１号墳鏡を除けば，いわゆる中心系列鏡群（森下 1991・1993）に位置づけられる仿製鏡が副葬されており（第３図），そのほとんどが畿内地域との関係性のなかでもたらされた可能性が高いという共通項が存在する。とりわけ，古墳時代仿製鏡については，製作がある程度系統的にも限定されると予測できるわけであるから，その流通が広域におよぶことは銅鏡の分布じたいからも明らかである。そうした前提をもつ共通項の存在を考慮するならば，当該期の出雲地域で出土した仿製鏡ひいては銅鏡の流通は，出雲地域という地域的な枠組みに限定あるいは規制されない，より広域的な関係構築の結果によるものと考えうるであろう。

また，横穴墓を採用する鷺の湯病院跡横穴墓は別としても，同時期に小地域において存在する古墳のなかで，銅鏡出土古墳が総じてかなり規模の大きい墳丘をもついわゆる首長墓であることは，古墳

時代後期における銅鏡の保有が少なからず階層的な位置づけのなかでなされたことを物語る。また，今市大念寺古墳にみるように，ある程度の大きさをもつ銅鏡が，墳丘規模の大きな古墳から出土する状況がみとめられる。いっぽうで重要なのは，出雲地域最大の後期古墳出土鏡は，全長 27 mの前方後方墳である古天神古墳から出土した銅鏡であり，墳丘規模という点でほかの銅鏡出土古墳より卓越しているわけではないという事実である。ただし，少なくとも，低い階層においてまで銅鏡を保有しえたような状況が，共伴する副葬品の内容から想定できないことは首肯できるであろう。

したがって，出雲地域の後期古墳にみる全体的な様相からは，銅鏡の流通は地域という枠組みを超えたレベル，つまり広域的な関係性のなかでおこなわれたものであり，結果的にはその保有が階層的にはある程度の上位に位置づけられるような存在によってなされたものである可能性が高いという点を確認できるであろう。ここでは，古墳時代後期における銅鏡の流通が，豊富な副葬品をもつ例にかなり限られること，遺構的な部分の質や量とは大まかな関連性がみとめられるものの(3)，絶対的な傾向はうかがえないという点を確認しておきたい。

小地域における銅鏡出土古墳　上述の仮説と確認点を検証ならびに検討するには，より具体的なケーススタディが必要である。そこで，筆者がとくに注目したいのは，出雲地域のなかのさらなる小地域において，銅鏡出土古墳に一定の傾向をみとめうるのかどうかという点である。そして，そうした点を考えるうえで手がかりとなりうるのは，近接した地点においてほぼ同時期に築造された，御崎山古墳，岡田山 1 号墳，古天神古墳という 3 基の古墳の様相と考える。これら 3 基のあいだには，いずれも墳丘形態に前方後方墳を採用するという共通点が存在する。とりわけ，御崎山古墳と岡田山 1 号墳では九州系横穴式石室を埋葬施設とし（小田 1986），形態的特徴や製作技術（大谷 2003）をほぼ同じくする円筒埴輪を採用するなど，総じてきわめて高い共通性をみとめうる。いいかえれば，墳墓の構造的な特徴にかなりの同一性をみいだすことができるのである。これらにたいして，古天神古墳は定型化以前の石棺式石室（出雲考古学研究会 1987：221 ～ 222）を埋葬施設とする点で差がある。古天神古墳と，御崎山古墳および岡田山 1 号墳とのあいだには，出土した須恵器（山本 1960，大谷 1994）や副葬品をみる限り，築造時期にかんして大きな差を積極的には想定しがたい。基本的にはほぼ同時期とみてよいだろう。したがって，古天神古墳において，御崎山古墳と岡田山 1 号墳のような横穴式石室ではなく，定型化以前の石棺式石室が採用されている点は，埋葬施設の形式差が系譜の違いであることをふまえるならば（角田 1993），少なくとも同時期における埋葬施設にみるバリエーションによるものだと考えることができる。古天神古墳においては埴輪が不在であるわけだが，この点についても同様の説明が可能であろう。現状においては，こうした古墳の属性の相違をたんに階層差と評価することは難しいという点を確認事項として強調しておきたい。

以上の点をふまえながら，3 基の古墳に副葬された銅鏡の数的な差異に着目しても，いずれも出土面数が 1 面のみであるため，墳丘の規模や埋葬施設の種類との整合的な説明は困難な状況である。また，墳丘規模において全長約 40 mというほかの 2 例よりも卓越する御崎山古墳から出土した銅鏡は，鏡径がもっとも小さく，文様も単純なものである。いっぽう，3 基のなかで最大の大きさをもつ銅鏡を副葬する古天神古墳では，すでに述べたように該期の対象としてとりあげた小地域でもいまだ主流

第３図　出雲地域の後期古墳出土銅鏡（S= ２：３）

１　鷺の湯病院横穴墓　２　古天神古墳　３　御崎山古墳　４　岡田山１号墳
５　神代古墳　６　今市大念寺古墳　７　上島古墳　８　中村１号墳

でない石棺式石室を埋葬施設とする。さらに，質的な差異としては，岡田山1号墳鏡のみが中国鏡であるわけだが，これに対応するような有意な傾向もみいだすことはできない。このように，限定された時空間においても，銅鏡の数的・質的な側面が，墳丘形態や墳丘・埋葬施設の規模といった古墳の遺構的な属性と明確に連動していたとは考えられないのである。このことは，銅鏡の保有が小地域内部における階層性のみによってなされたものではない可能性を示唆する。いいかえれば，小地域という単位で銅鏡を受容するような関係性の形成や，小地域内部において流入した銅鏡を再分配するなどといった階層構造を明確化するシステムづくりに，器物としての銅鏡が積極的に活用されたとは考えにくいのである。

以上にくわしく分析したように，小地域における様相として，資料の制約から出雲東部地域を主たる検討の材料としたが，出雲西部地域において近接した位置にある中村1号墳と上島古墳でも，墳丘形態は同じ円墳であるものの，鏡径と墳丘規模は比例関係にあるわけではない。上島古墳が年代的により古相であり，中村1号墳が出雲地域のほかの事例よりも時期が新しいという点を差し引いても，銅鏡を保有するに至るまでに，やはり小地域単位でのまとまった受容や小地域内部での蓄積ののちに再分配に至るといった状況を想定することは，出雲東部地域だけでなく，出雲西部地域においても困難なのである。

出雲地域における古墳時代後期における銅鏡の流通　それでは，古墳時代後期における銅鏡の流通はいかなるものであったのであろうか。これまでの出雲地域における検討をふまえて，考察を試みたい。注目すべきは，出雲地域のなかのさらなる小地域という枠組みのなかで，銅鏡が格差づけの道具としては積極的に用いられたような状況を確認できない点，いっぽうでやや広い出雲地域という射程においては，階層的にはかなりの上位層と呼びうる存在に保有がほぼ限定されるという点である。

こうした，小地域内とやや広域におよぶ地域的枠組みのなかでの階層性という点で，いっけんすれば相反する矛盾した現象が生じた背景には，特定の主体による計画的な器物の分配戦略というものを銅鏡には積極的に想定しにくい点がかかわっていると考える。上述したとように，小地域単位においても，さらに出雲地域という枠組みにおいても，銅鏡の流通がコントロールされたような状況はうかがえないこととも整合的な想定といえよう。そうしたあり方は，大まかに墳丘規模といった視覚的に認識しやすい属性などの数的な差異には階層性をみいだせる例が多く存在するものの，いっぽうでは横穴墓といった墓制においても豊富な副葬品がおさめられるという現象にも端的に反映されているととらえうる。こうした墳墓の様式にみる質的な差異は，出雲地域の銅鏡出土古墳をみる限りは，あくまでも墓制という習俗の違いに通ずるものと考えたほうが理解しやすいように思う。いいかえれば，小地域単位では，数的・質的に近い古墳のまとまりが形成されているので，すでに地域的な枠組みが成立していた可能性を考えうるが(4)，墳墓要素からはそのまとまりの形成に強い政治性や中心性をみとめることは困難であるというのが実情なのである。墳墓にあらわれる差異は，あくまでも緩やかな関係性を示すものにすぎなかったと評価したい。

以上の分析を総合すると，古墳時代後期の出雲地域における出土古墳の様相からは，銅鏡の流通は古墳の築造基盤となる集団による，地域を超えた広域的な関係性構築のなかでの個別的な活動によっ

てもたらされたものと考えうる。また，古墳時代後期の銅鏡は，地域あるいは小地域の内部を構造化するための道具ではなく，広域における関係性のなかで共有された器物であったと評価したい。あくまでもこの時期における銅鏡の流通は，地域的な射程にとらわれないものであったと考える。

4　まとめ

以上，中村 1 号墳から出土した珠文鏡の年代的な位置づけと，出雲地域における古墳時代後期銅鏡出土古墳についての現段階での評価を試みた。

まず，その年代的位置については，内区主文部に 2 列に珠文を充填するタイプという枠組みのなかで，文様構成から中村 1 号墳出土鏡と関連する 4 つの鏡群を大まかに抽出し，文様のあり方と出土古墳の年代から，個々の鏡群が時間的に推移してゆく過程を跡づけた。中村 1 号墳が帰属する鏡群の副葬年代の上限は，陶邑編年のいわゆる TK43 型式期に相当し，後期中葉ないし後期後半という時期表現が可能な資料であることを明らかにした。また，想定した副葬上限年代が，ほかの類例の古墳の築造年代とも近接する例の多いことを積極的に評価するならば，製作年代とも比較的近い可能性のある点についても述べた。

さらに，出雲地域における銅鏡出土古墳の様相の整理を通して，古墳時代後期においては銅鏡を保有するということじたいが，社会のなかで広域的な関係性を有していた可能性を示すものと評価した。そうした広域的な関係性をもつことは，該期の小地域の代表者としての首長が備えるべき要件であったと考える。結果的に，銅鏡を出土する古墳が小地域のなかでは限られた存在であることも，上述の想定を裏づけるものといえよう。

このたびの検討によって，中村 1 号墳はその出土鏡から，古墳時代後期中葉ないし後半までの時期に，広域的な社会関係を有していた首長の墳墓と位置づけることが可能である。銅鏡の入手経路は，類例やとりあげた関連する鏡群を含めれば，銅鏡生産の主体となった畿内地域を中心とした首長間関係を想定するのが妥当である。

同様に，そのほかの副葬品の流通などを視野に入れ，そうした副葬品をいかに入手したかという点についても議論することは重要な意味をもつものと考える。ひいては，中村 1 号墳の被葬者像やその帰属集団の性格，さらには古墳が築造された地域的な特質を考える材料を提供することになるからである。さまざまな位相から特定の古墳あるいは小地域の検討をおこなうことで，古墳時代後期の社会構造をよりダイナミックに復元することが可能になるであろう。そうした作業の実践ついては，今後の課題としておきたい。

また本来は，珠文鏡だけをとりあげて，古墳時代後期における銅鏡の社会的な意義を論じることには無理があることはいうまでもない。古墳時代後半期の銅鏡については，生産体制にかかわる分析をとくに青銅器生産という観点から進める必要性があると考えている。そうした大枠での検討についても，今後に解決すべき課題であると位置づけ，ひとまず擱筆することとしたい。

付　記

小稿をなすにあたり，貴重な機会を与えていただいた，出雲市文化財課の花谷浩氏と坂本豊治氏に感謝申し上げます。また，関連資料の閲覧などさまざまな場面において，石松崇，岩戸晶子，魚津知克，櫃本誠一，平野芳英，森下章司の諸氏・諸先生方，出雲弥生の森博物館，大手前大学史学研究所，香美町教育委員会，島根県立八雲立つ風土記の丘資料館の諸機関よりご高配をいただきました。資料収集の過程においては，島根大学大学院生の鈴木圭君，島根大学学生の橋本友美子さんと古橋渉君の助力を得ました。

以上の方々に，小稿が雑駁なものとなってしまったことをお詫びするとともに，末筆ながら記して御礼申し上げます。ありがとうございました。　　（島根大学法文学部　　岩本　崇）

註

（1）むしろ方法論的にみれば，銅鏡のような系統を把握することのある程度可能な広域に流通する器物によって，長期保有や伝世などの可能性を考慮しながら広域編年を組み立てる方向性が不可欠と考える。そのうえで，ほかの遺構や遺物との整合をはかる作業を積み重ねる姿勢が求められるであろう。系統的な整理が困難であると予想される須恵器編年に過度に依存する現状の研究にみるスタンスには，方法的な問題点が多いという点を十分に認識しておく必要があろう。

（2）ただし，神代古墳の年代的な位置づけについては不明な点が多い。報告者によれば，鉄刀２点と須恵器片１点が伴出したという（杉原 1991：12)。なお，後期古墳であるとの位置づけは，須恵器片の存在によるところが大きいようである。本稿では，ひとまず従来の所見にしたがって後期古墳としているが，その年代的位置については保留すべき余地のある資料であることを明記しておきたい。

（3）後期古墳という枠組みで，出土鏡と出土古墳のあいだの質と量にかかわる分析を試みているが，古墳時代後期のなかで，そうした質や量という属性が必ずしも等質的であったと断言できない点には留意しておく必要がある。時間の流れのなかで，製作された器物の大きさや数量，遺構の大きさや質などが変化する可能性がある点は，古墳時代前期の銅鏡を例にすれば明らかであるし，古墳の規模が古墳時代中期をピークとすることからも想定すべきである。したがって，ここでの議論はあくまでも大まかな傾向をつかむためのものであることを断わっておきたい。本来は後述する，御崎山古墳，岡田山１号墳，古天神古墳の検討のような厳密な前提が不可欠であることを強調しておく。

（4）地域的な枠組みの成立という事象を考古学的に立証するには，分布論だけではなく，遺構や遺物そのものの十分な検討が不可欠であると考える（岩本 2010a・b)。具体的には，遺構あるいは遺物にかかわる技術にかんする系統的な連続性を一定の領域でみとめうるかの検討が，地域的な枠組みを保証するうえでは重要な鍵を握ることになるだろう。ただし，検討対象となる遺構ないしは遺物によって，認識できる領域の範囲は異なってくる可能性がある。その際に留意すべきは，「地域」の組織性とでもいえる質的な側面と考える。たとえば須恵器や埴輪生産にかかわる窯業技術の導入は組織的な体制の存在を想定しやすい代表例である。このような「地域」における組織的な枠組みをみとめることができれば，地域的な枠組みというものを考古学的に想定しうる点については大きな異論がないであろう。

引用文献

網干善教 1962『五条猫塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第 20 冊　奈良県教育委員会

池田満男 1954「出雲上島古墳調査報告」『古代学研究』第 10 号　古代学研究会　1 ～ 8 頁

出雲考古学研究会 1987『石棺式石室の研究』古代の出雲を考える 6　出雲考古学研究会

今井　堯 1991「中・四国地方古墳出土素文・重圏文・珠文鏡－小形倭鏡の再検討Ⅰ－」『古代吉備」第 13 集古代吉備研究会　1 ～ 26 頁

岩本　崇 2006「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』第 90 巻第 4 号　日本考古学会　1 ～ 34 頁

岩本　崇 2010a「古墳時代前期における地域間関係の展開とその特質」『龍子三ツ塚古墳群の研究－播磨揖保川流域における前期古墳群の調査－』大手前大学史学研究所・龍子三ツ塚古墳調査団　403 ～ 436 頁

岩本　崇 2010b「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺補論」『史跡　茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告第 383 冊兵庫県教育委員会　507 ～ 518 頁

梅原末治 1931『慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告』大正十三年度古蹟調査報告第 1 冊　図版　朝鮮総督府

梅原末治 1932『慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告』大正十三年度古蹟調査報告第 1 冊　本文　朝鮮総督府

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会　39 ～ 80 頁

大谷晃二 2003「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」『宮山古墳群の研究』193 ～ 208 頁　島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

大谷晃二（編）1996『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ　島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘

小田富士雄 1986「島根県の九州系初期横穴式石室再考」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　301 ～ 319 頁

角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第 10 集　島根考古学会　69 ～ 103 頁

川上　稔・角田徳幸・西尾克己ほか 1988『史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書』出雲市教育委員会

児玉真一（編）2005『若宮古墳群』Ⅲ－月岡古墳－　吉井町文化財調査報告書第 19 集　吉井町教育委員会

小林三郎 1979「古墳時代初期倣製鏡の一側面－重圏文鏡と珠文鏡－」『駿台史学』第 46 号　駿台史学会　78 ～ 96 頁

島根県教育委員会（編）1963『島根の文化財』第 3 集　島根県教育委員会

島根県教育委員会（編）1997『古代出雲文化展－神々の国　悠久の遺産－』島根県教育委員会・朝日新聞社

杉原清一 1911『詳細分武調査報告書大東町の遺跡』Ⅲ－佐世・阿用－　大東町教育委員会

高橋健自 1919「出雲國八束郡大草古天神山古墳發掘遺物」『考古学雑誌』第 9 巻第 5 号　日本考古学会　12 ～ 16 頁

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ

東京国立博物館（編）1956『東京国立博物館収蔵品目録』東京国立博物館

東京国立博物館（編）1983『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅱ）　東京国立博物館

中村典男 1992「225　文堂古墳」『兵庫県史』考古資料編　兵庫県　592 ～ 594 頁

日高正晴 1958「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第 43 巻第 4 号　日本考古学会　16 ～ 33 頁

櫃本誠一 2002『兵庫県の出土古鏡』学生社

水野敏典・山田隆文・奥山誠義 2010『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』平成 18 年度～平成 21 年度科学研究費補助金基盤研究（A）　奈良県立橿原考古学研究所

宮崎県立西都原考古博物館（編）2007『鏡が映したもの』宮崎県立西都原考古博物館

森　浩一 1968『眉山周辺の古墳Ⅱ－恵解山 9 号墳－』徳島県文化財調査報告書第 10 集　徳島県教育委員会

森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第 74 巻第 6 号　史学研究会　1 ～ 43 頁

森下章司 1993「仿製鏡の変遷」『季刊　考古学』第 43 号　特集　鏡の語る古代史　雄山閣　64 ～ 67 頁

山本　清 1960「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』島根大学　175 ～ 191 頁

山本　清 1984「横穴墓被葬者の地位をめぐって」『島根考古学会誌』第 1 号　島根考古学会　58 ～ 66 頁

山本　清・門脇俊彦ほか 1987『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会

吉岡康暢・河村好光（編）1997『加賀　能美古墳群』石川県寺井町・寺井町教育委員会

渡辺貞幸・内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 1991「出雲」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社　46 ～ 53 頁

図表出典

第 1 図　1．中村 1 号墳（出雲市教育委員会蔵），2．文堂古墳（香美町教育委員会蔵），3．御崎山古墳（大谷編 1996　21 頁　第 8 図），4．慶州金鈴塚古墳（梅原 1931　図版第 60）

第 2 図　1．和田山 5 号墳（吉岡・河村編 1997　図版 46），2．西都原 4 号地下式横穴墓（宮崎県立西都原考古博物館編 2007　2 頁　48），3．月岡古墳（児玉編 2005　16 頁　第 9 図　4 号鏡），4．五條猫塚古墳（奈良国立博物館蔵）

第 3 図　1．鷺の湯病院跡横穴墓（島根県教育委員会編 1997　118 頁　143），2．古天神古墳（島根県教育委員会 1963　32 頁），3．御崎山古墳（島根県立八雲立つ風土記の丘資料館蔵），4．岡田山 1 号墳（島根県立八雲立つ風土記の丘資料館蔵），5．神代古墳（杉原 1991　PL1），6．今市大念寺古墳（出雲市教育委員会蔵），7．上島古墳（島根県教育委員会編 1963　68 頁），8．中村 1 号墳（出雲市教育委員会蔵）

第 1 表　高橋 1919，池田 1954，山本 1984，山本・門脇ほか 1987，川上・角田・西尾ほか 1988，杉原 1991，渡辺・内田・曳野・松本 1991，大谷編 1996 をもとに作成。出土鏡式ならびに直径については筆者の実見・計測による成果を一部含む。

第２節　中村１号墳出土装飾大刀群の位置付け

１　はじめに

中村１号墳からは，倭装大刀，金銅装大刀，圭頭大刀の合計３振りの装飾大刀が出土している。装飾大刀は，古墳時代後期における代表的な古墳副葬品であるのみならず，佩用者の身分や職掌，氏族などを反映した器物であるとされる。したがって，装飾大刀の位置付けを検討することは，古墳の年代的な位置を求め，かつ被葬者の性格にせまるうえで，重要な基礎作業であると考えられる。本稿では，これらの大刀が日本列島出土の装飾大刀のなかで，どのような編年的位置を占める資料であるのかを検討し，中村１号墳の評価を定めるうえでの基礎となる情報を提供したい。

２　倭装大刀（Ｓ１）

倭装大刀の特徴をまとめると，以下の通りである。

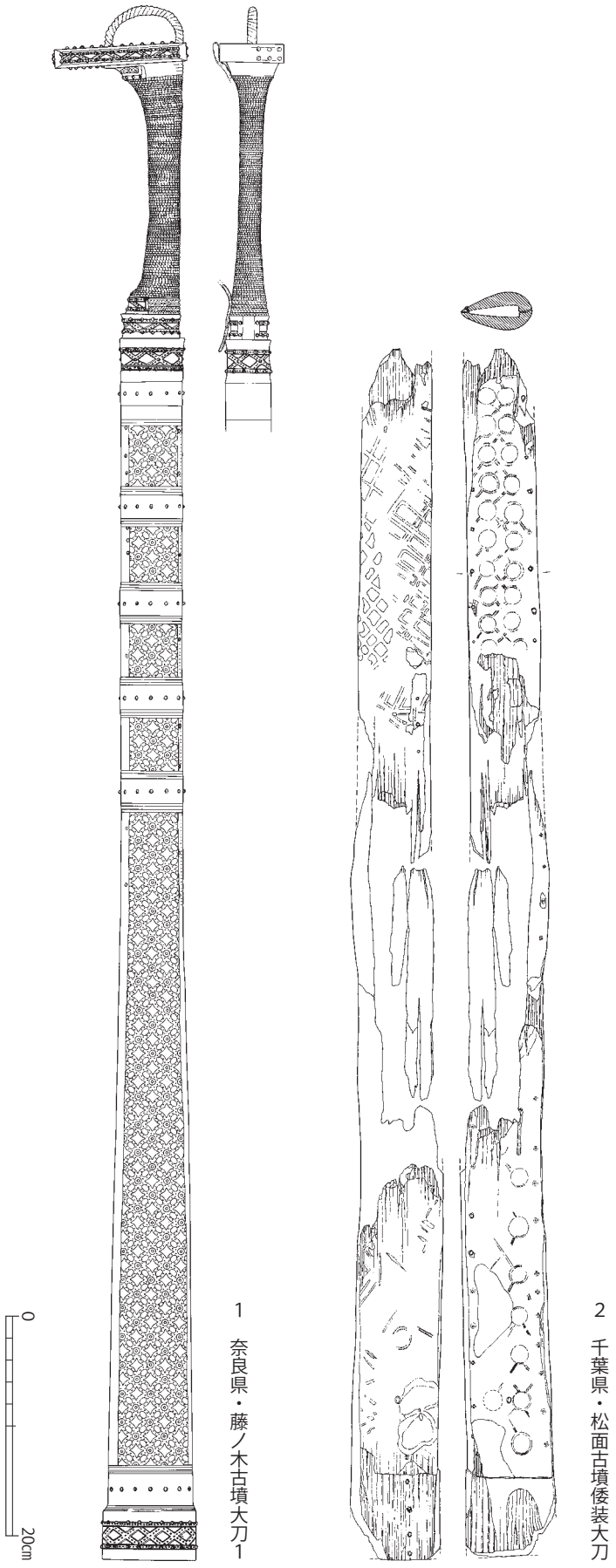
刀身は片関で，金属製の鎺をもたない。フクラ切先であり，刃部の幅は最大 3.8㎝と幅広である。柄縁と鞘口の接する部分には，金属製の装具が存在し，小口面に金属板がのこることから，呑口ではなく合口であったと考えられる。鞘間には，幅 3.5㎝の金銅製筒金具が，金銅鋲による鋲留で固定され，二つ以上存在したと考えられる。鞘身刃側にのこる鋲の痕跡は，鞘身刃側に帯状にあてる銅板が存在したことを反映していると考えられる。柄頭ないし鞘尻には，端部に金属板をあて，金銅装の鋲を打ちこむ。

これらの個々の特徴は，いずれもいわゆる倭系の装飾大刀に該当するものであるが，通有の倭装大刀のなかでは基本的に共存することのない要素が一部見て取れる。

（１）　筒金具の列点文

鞘間の筒金具には，鏨で列点文が施されるが，通有の金銅装の倭装大刀で鞘間の筒金具に施される文様は，波状列点文が主体となる。本例では，一部しか残っていないが，格子状を成すと考えられる列点文が施されている。また，列点文の施文方法も，通例では表側からのみ打ち込むのに対し，本例では，表側裏側両方から列点文を打ち込み，その違いによって表現される凹凸も装飾要素として利用しているのが確認される。これは他の倭装大刀には確認できない特徴である。

鏨による打ち込みを両面からおこなうものについては，同種の大刀における類例が求められない状況であるが，格子状の列点文による装飾のデザインについては，類似の文様が認められる。一つは奈良県藤ノ木古墳大刀１・５の鞘間に配された，花文状の切り抜き金銅板のデザインである（第１図－１）。筒金具に文様を施す本例とは施文箇所も方法も異なるが，おなじ倭装大刀の鞘のデザインとして，関連が想起できる。もう一つは，千葉県松面古墳出土大刀（第１図－２）の鞘身に配された格子状の文様である（千葉県 2002）。藤ノ木古墳大刀１・５は，田辺昭三による須恵器編年での TK43 型式平行期の資料であり，倭装大刀のなかでも，終末に近い段階のものと評価できる（田辺 1981）。また，松面古墳出土大刀は，鞘の法量が大きく，倭装大刀の鞘の大きさに近いことや，鞘尻に向かってやや幅

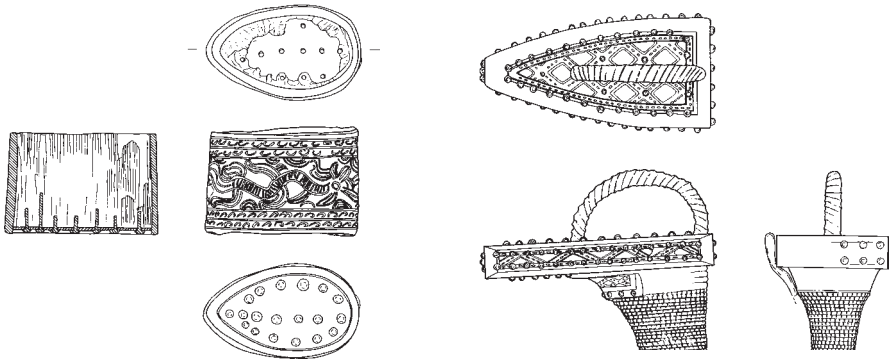


第1図　格子状列点文関連資料（1：6）

広になる平面形，鞘尻の木質から想定される，本来の鞘尻装具の形態が倭装大刀にみられるものと同一であることなどから，柄頭の情報を欠くものの，倭装大刀の鞘部分であると判断できる。ただし，鞘身の佩表側に，二列の円形浮文を持った鞘飾板の残存が確認される。これは本来，定形化した金銅装双龍環頭大刀・頭椎大刀・円頭大刀・圭頭大刀等にみられる装飾要素であり，その出現はTK209型式平行期であると考えられる。つまり，倭装大刀をベースとして，定形化した金銅装装飾大刀の装飾要素が取り込まれたものが，松面古墳出土倭装大刀であると評価できる。半島系の装飾大刀と，倭装大刀の要素の混交は，TK43型式平行期にみられ，TK209型式平行期には，倭系の装飾大刀の生産は，6世紀に新たに将来された半島系の工人集団のもとに吸収合併される（橋本2006b）。したがって，松面古墳出土倭装大刀は，倭系と半島系の要素を折衷させながらTK209型式平行期にまで残存した，倭装大刀のほぼ最終段階にあたる資料であると考えられる。中村1号墳出土倭装大刀の筒金具にみられる格子状の列点文は，藤ノ木古墳出土大刀1・5などにみられる鞘身の花形文が退化して，松面古墳出土倭装大刀の格子文に転じたものと，関連をもつものと考えられる。

（2）　柄頭ないし鞘尻の打ち込み鋲

まず前提として，11層出土S1－1，2，3，4が柄頭ないし鞘尻に相当



1　群馬県・綿貫観音山古墳倭装大刀鞘尻金具　　2　奈良県・藤ノ木古墳大刀１柄頭

第２図　倭装大刀の打ち込み鋲関連資料（１：４）

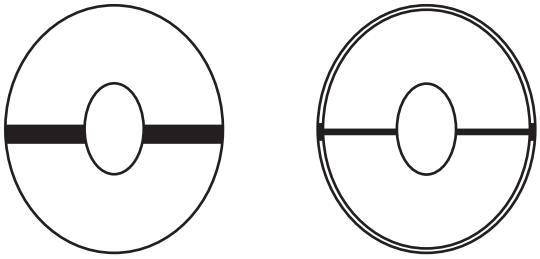
するという点の蓋然性を検討する。鋲脚の長さに異なるものがあるのは，打ち込まれる木質の厚みを考慮して調整したものと考えることが可能である。例えば楔形柄頭の場合，柄間に近い部位では，柄木の厚みがあるため，長い鋲脚の鋲を使用できるが，楔形の先端部では，下地の木質の厚みが限定されるため，鋲脚の短いものしか使用できない。鞘尻においても，鞘尻装具の端部と側面とでは，使用できる鋲脚の長さは異なる。このように考えると，鋲脚の長さに差異があることは，これらの鋲が，柄頭や鞘尻など，構造上，下地の木質の厚みが場所により異なるような装具に打ち込まれたものであると解釈することができる。ただし，綿貫観音山古墳出土倭装大刀の鞘尻装具をみると，鋲脚の長さは鞘尻端部に打たれるものの中でもばらつきがあるようであり，そもそも鋲脚の長さはもともと重視されていない可能性もある。

柄頭端部ないし鞘尻端部に鋲を打つものは，群馬県綿貫観音山古墳出土例などに認められるが（第２図－１），これらの多くは鉄地銀象嵌の鞘尻装具をもつものであり，かついずれも鉄地銀被せの鋲であり，本例とは異なる。峯ヶ塚古墳出土倭装大刀にも，鞘尻端部に鋲を打ちこむものがあるが，これは銀鋲である。これに対し，藤ノ木古墳大刀１・５の柄頭は，柄木に銀板を貼り，金銅鋲を打ちこむものであり，本例の状況に最も近いと言える（第２図－２）。打ち込み鋲の検討からは，藤ノ木古墳大刀１・５などを前後する時期に属することが示唆されるが，それ以上限定することは難しい。

（３）　中村１号墳出土倭装大刀の位置

以上をふまえると，中村１号墳出土倭装大刀は，鞘間筒金具の文様構成から，藤ノ木古墳大刀１・５よりも後出し，松面古墳出土倭装大刀に近い段階に位置づけられると想定される。ただし，中村１号墳例が，鞘間に二つ以上の筒金具を持っており，通有の倭装大刀と同様の鞘構成をとっていたと想定されるのに対し，松面古墳例では，佩裏から金銅板で鞘身を包み，佩表の鞘飾板を鋲留して固定するという，定形化した金銅装装飾大刀の鞘身にみられる装飾要素を採用している。したがって，中村１号墳例は，松面古墳例よりは若干さかのぼるものと考えられる。TK209 型式平行期のなかでも古い段階に求めるのが妥当であると考えられる。

3　金銅装大刀（S 2）



第３図　厚みと断面形による金銅装鍔の分類

金銅装大刀は，現状で，刀身，および装具として鍔・鏃，一の足，二の足の足金具のみが残る。柄頭の形態は不明で，残っている装具の状況からは，頭椎大刀，圭頭大刀，円頭大刀いずれの可能性も考えられる。こうした不確定要素をのこすが，本例の位置付けを検討するにあたって有効な，敏感な属性を持つ部位は，鍔と足金物であると考えられる。以下この２点を手がかりに検討を進めてゆきたい。

（1）　鍔の分類

金銅製の鍔については，従来から，無窓のものが古く，続いて八窓，六窓のものがあらわれるが，これらは併存するものであり，排他的な前後関係とまでは言えない，とされてきた（新納 1987，1991）。こうした傾向は肯首できるものであるが，本稿ではこれに加え，鍔の断面形・厚さに注目して，鍔の属性から金銅装大刀の新古を判断する基準を提示し，それをふまえて中村１号墳出土金銅装大刀の位置を検討したい。

金銅装大刀の鍔には，窓の有無にかかわらず，厚みがあり，断面形が扁平なものと（Ⅰ類），端部のみ断面Ｔ字に肥厚する薄手のもの（Ⅱ類）とに分けることができる（第３図）。筆者が実見した頭椎大刀を例にとると，厚手のものには，茨城県風返稲荷山古墳例（無窓），千葉県金鈴塚古墳例（大刀12，八窓），三重県坂本１号墳例（六窓），などがあげられる。断面をＴ字に肥厚するものでは，福島県淵の上１号墳例（六窓），福島県月の輪山１号墳の２例（六窓），栃木県竹下浅間山古墳例（六窓），群馬県伝小林古墳例（六窓），埼玉県小見真観寺古墳の２例（六窓），千葉県金鈴塚古墳例（大刀 11，六窓），千葉県神行古墳例（八窓），千葉県殿塚古墳例（無窓），愛知県段塚古墳例（六窓），兵庫県長尾古墳例（六窓），岡山県土井２号墳例（六窓）などがあげられる。

（2）　柄巻きの構成からの検証

これらを，金銅装頭椎大刀の新古に関する判定要素として，一般に認められている，柄間を金属線巻きにするか，金銅製の筒金具を被せるか，という点から検証すると，以下のようになる。

・金属線巻きのもの

Ⅰ類：風返稲荷山古墳例（無窓），金鈴塚古墳例大刀 12（八窓），坂本１号墳例（六窓）

Ⅱ類：淵の上１号墳例（六窓），殿塚古墳例（無窓），長尾古墳例（六窓）

・金銅製筒金具を用いるもの

Ⅰ類：なし

Ⅱ類：月の輪山１号墳の２例（六窓），竹下浅間山例（六窓），小林古墳例（六窓），小見真観寺古墳の２例（六窓），金鈴塚古墳例大刀 11（六窓），神行古墳例（八窓），段塚古墳例（六窓），土井２号墳例（六窓）

このようにみると，Ⅰ類の鍔を持つ資料は，事例がすくないものの，すべて金属線による柄巻きを

もつものであり，Ⅱ類の鍔を持つものには，金属線の柄巻きをもつものと，金銅製筒金具を用いるものとがある。

（３）　鞘の装飾からの検証

さらに鞘の装飾からみると，金属線巻きでⅠ類鍔をもつものは，すべて準素鞘（滝瀬 1984）になり，金属線巻きでⅡ類鍔をもつものは，準素鞘のものと，全体を，佩表に鞘飾板を用いない金銅製筒金具で覆うものとなる。金銅板巻きでⅡ類鍔をもつものは，準素鞘，および，二列の円形浮文をもつ鞘飾板を用いた飾鞘をもつものに分かれる。

（４）　佩用装置からの検証

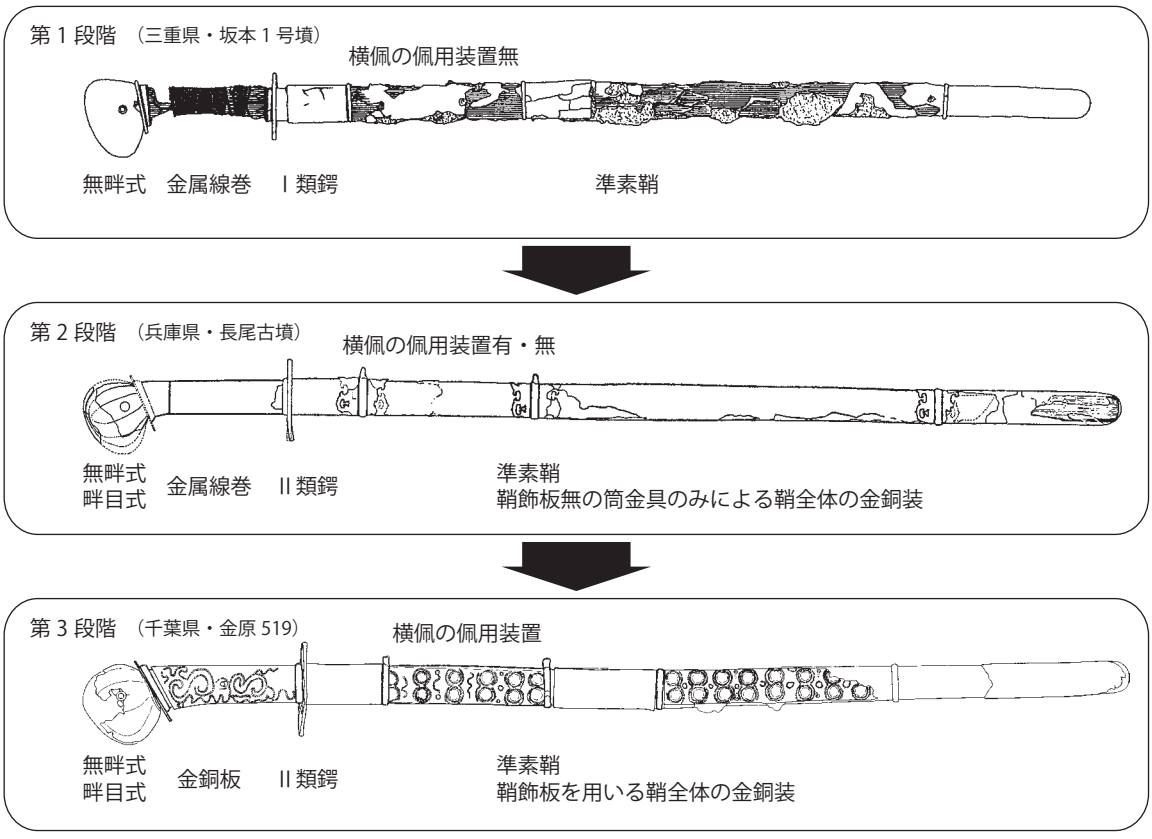
また，佩用装置の点からみると，金属線巻きでⅠ類鍔をもつものは，すべて横佩きの佩用装置がみとめられないのに対し，金属線巻きでⅡ類鍔をもつものは，横佩きの佩用装置を持たないもの（淵の上１号墳）と，横佩きの佩用装置をもつもの（殿塚古墳[(1)]，長尾古墳）とがあり，金銅製筒金具を用いてⅡ類鍔をもつものは，ほぼすべて横佩きの単脚足金物を二つもつものとなる。

（５）　柄頭からの検証

金属線巻きでⅠ類鍔をもつものは，すべて無畔の柄頭であり，金属線巻きでⅡ類鍔をもつものは，無畔，横畔両方が含まれる。金銅製筒金具を用い，Ⅱ類鍔をもつものは，少数の無畔のものと，竪畔，横畔のものとで構成される。

（６）　頭椎大刀の変遷３段階

以上をふまえると，あくまで頭椎大刀に限った場合であるが，Ⅰ類とⅡ類の相対的な新古は，他の



第４図　頭椎大刀変遷の３段階

要素からも矛盾しないと考える。また，金属線巻きでⅡ類の鍔をもつものと，金銅製筒金具を用い，かつⅡ類の鍔をもつものとは，上記の検証をみると相対的な前後関係をもつとして問題ないと考えられる。したがって，頭椎大刀の変遷は，鍔の厚みと柄巻きの種類を上位の分類要素として，以下の３段階に分けることができる（第４図）。

・頭椎第１段階（TK209 初頭）

Ⅰ類の鍔をもち，金属線の柄巻きをもつ。鍔の窓は無窓，六窓，八窓すべてがある。横佩きの佩用装置はもたず，鞘は準素鞘である。柄頭は無畔である。

・頭椎第２段階（TK209）

Ⅱ類の鍔をもち，金属線の柄巻きをもつ。鍔の窓は無窓，六窓があるが八窓の存在を否定するものではない。横佩きの佩用装置をもつもの，持たないものがある。鞘は準素鞘か，鞘飾板を用いずに，鞘全体を分割した筒金具で覆うものである。

・頭椎第３段階（TK209 後半～ TK217）

Ⅱ類の鍔をもち，金銅製の筒金具を柄間に用いる。鍔の窓は無窓，六窓，八窓すべてある。横佩きの佩用装置をもつ。鞘は準素鞘か，円形浮文を２列もつ鞘飾板を用いた飾鞘となる。

（7）　中村１号墳出土金銅装大刀の位置

以上をふまえ，中村１号墳出土金銅装大刀がどの段階に位置づけられるかをみると，鍔の断面形がＴ字を呈するⅡ類の鍔と，横佩きの佩用装置をもつことから，頭椎大刀の変遷に沿って位置づけると，頭椎第２段階，頭椎第３段階両方に該当することとなるが，それ以上限定するのは現状では困難である。やや幅を持たせ，おおよそ TK209 型式平行期と位置づけておきたい。

４　圭頭大刀（Ｓ３）

圭頭大刀の特徴をまとめると，以下の通りである。

柄頭は鋳銅製で，基部に責金具状の突線をもつ。鳩目金具をテーパ状に造り，佩表側から挿入している。柄巻きは刻み目をもたない銀線を 0.5㎝程度の間隔をあけてらせん状に巻く。鍔は鉄地銀貼の喰出鍔である。鞘口は銅製で，環付足金物は，環部分が銅地金鍍金，責金具部分が銅地銀貼である。鞘尻は鉄製で，鞘尻金具に接する責金具は銅地に銀貼である。

このようにみると，本例の最大の特徴は，装具の部位毎に製作技術，装飾技法がそれぞれ異なる，という点であるが，この点に焦点をあてて圭頭大刀における本例の位置を定めるのは難しい。ひとまずは外見上の装具の構成を，先行研究に照らし合わせながら整理し，その上で再度本例の特質および位置付けを検討したい。なお，前稿では，らせん状の柄巻きに注目して本例の特質を検討したが，本稿の目的は年代的な位置をもとめることであるため，前稿（橋本 2006a）で論じた部分については，基本的に重複をさけ，必要な場合のみ再度言及することとする。

（1）　装具の構成

柄頭の分類を上位分類として，装具の構成を含めて圭頭大刀を整理した菊池芳朗の分類に従うと（菊池 2010），本例の柄頭は，方頭大刀の系譜につながる菊池Ａ類（以下Ａ類）の柄頭類型に位置付けら

れる。Ａ類の装具構成は「喰出鍔と平尻の鞘尻金具を着装する。吊手孔付足金物と鐶付足金物のいずれかもしくは両者をもち，佩用方法が明確にわかる。鞘間金具は用いられない。装具の材質に銀を多用し，把に金属線を巻くものが大部分を占める」（菊池 2010，p78）というものであり，本例はまさしく菊池Ａ類に属するものと考えられる。ただしＡ類は，氏の年代観にしたがうと，氏のⅠａ期～Ⅱ期（TK43 型式平行期の一部～ TK217 型式平行期）までの期間存続するものであるため，本例がＡ類のうちでどの段階に位置づけられるのかについては，別途検討が必要となる。

（２）　柄頭の形状（第５図）

そこで，まずは装具の中でも属性が多くかつ鋭敏な形態の変化をすると考えられる，柄頭について着目してみたい。本例の柄頭は，圭頭としているが，形態的には方頭柄頭としても違和感がないほど，左右の高さの違いがない。また，本例は鋳銅製であり，柄頭基部の，通常責金具が位置する部分が，柄頭と一体で鋳造され，突線状になっている。この点は，本来柄頭と責金具とが別々に造られていたものを手本として，その形状を模倣したものと考えられる。以上の点から考えると，製作にあたっての発想からは，少なくとも本例はＡ類の最古段階に位置づけることはできず，さらに柄頭のプロポーションからは，むしろ方頭大刀の出現に近い段階が想定される。

（３）　鞘尻金具の形状（第５図）

つぎに鞘尻金具に着目すると，方頭大刀の古段階と目される静岡県大阪上古墳例（第５図－３），宮城県大念寺山 18 号横穴出土例，宮城県亀井囲 16 号横穴墓出土例（第５図－４）などでは，鞘尻金具にくり込みがみられ，その後に続く双脚足金物をもつ方頭大刀にも同様の鞘尻金具がともなう。鞘尻金具のくり込みは，菊池が指摘するように，圭頭大刀Ａ類と方頭大刀を区分する指標となりうると考えられる。中村１号墳例の鞘尻装具にはくり込みを持たないことから，柄頭の形態は方頭に近くとも，これら方頭大刀の古い段階のものよりは先行すると考えられる。

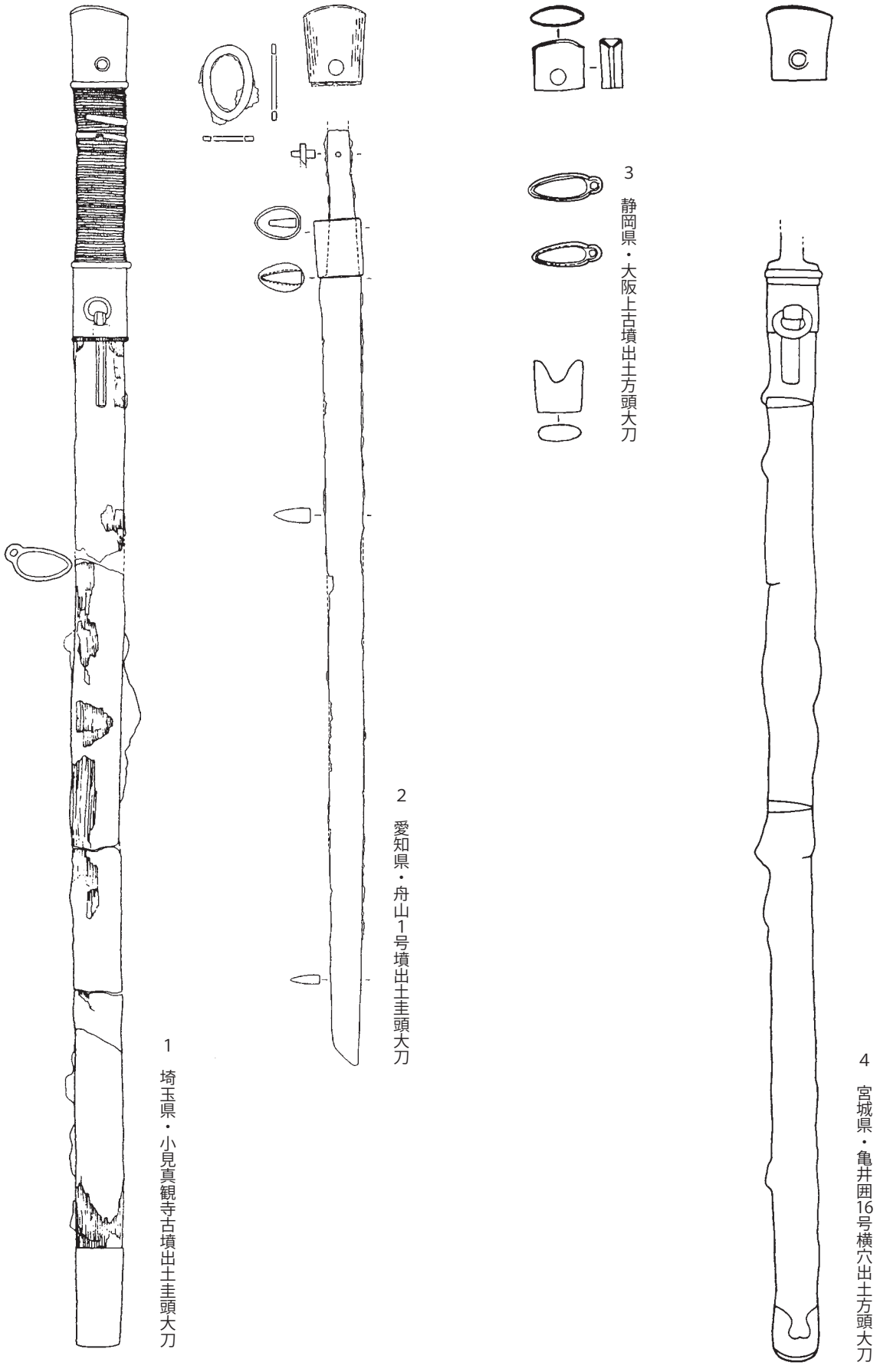
（４）　中村１号墳出土圭頭大刀の年代的位置

以上の点から中村１号墳出土圭頭大刀の位置を求めると，圭頭大刀Ａ類のうちでも，方頭大刀の成立に近い段階の資料と考えられ，TK209 型式平行期の後半から TK217 型式平行期に渡る時期に位置づけられると考えられる。これは，前稿でらせん状の柄巻きに着目して位置付けを検討した際に示した，「６世紀第３四半期から７世紀第１四半期に位置づけられる資料が多い」という時期幅の最末期と重なるものと考えられる（橋本 2006a）。

５　まとめ

以上みてきたように，中村１号墳出土装飾大刀には，倭装大刀（TK209 古段階），金銅装大刀（TK209），圭頭大刀（TK209 後半～ TK217），という相対的な順序と年代的な位置付けが想定される。いずれも直接比較できる資料・要素が少なく，部分的・間接的な比較を用いざるを得なかったが，出土状況から想定される相対的な順序とも概ね合致すると考えられる。

従来出雲西部では倭装大刀の出土が集中することが指摘され，地域の政治勢力，中央氏族との関係のなかで解釈されてきた（大谷 1999b）。中村１号墳から出土した倭装大刀も，基本的にこのコンテ



第5図　A類圭頭大刀と方頭大刀関連資料（1：4）

クストのなかでとらえられるものと考えられる。ただし，本古墳から出土した倭装大刀は，本稿での位置付けによると，TK209 平行期の前半に位置付けられる。大谷によるⅠ段階・Ⅱ段階の区分では，Ⅱ段階に入ることとなり，一見齟齬をきたすようにもみえるが，これはⅠ段階からⅡ段階の移行期にまたがって，前代の系譜に連なるものが残ったものと考えられ，大谷の段階区分との整合性は保たれているものと考える。

また，本古墳出土の圭頭大刀は，装具の各部材の製作技法が部位によってそれぞれ異なるという，類を見ない資料であることが確認されたが，この点についての明確な位置付けをおこなうことはできなかった。外見上の形態に加えて材質の調査も含めた調査をかさねることにより，将来的に同様の材質・技法の使い分けをおこなった大刀が確認されるものと期待される。自らの今後の課題としたい。

本稿が中村１号墳の評価を定める一助となれば幸いである。

付　記

本稿の執筆という機会を与えて下さった，出雲市文化財課の花谷浩氏と坂本豊治氏に感謝申し上げます。

資料調査においては，朝来市埋蔵文化財センター，宇都宮市教育委員会，岡山県埋蔵文化財調査センター，かすみがうら市教育委員会，木更津市教育委員会，郡山市教育委員会，芝山はにわ博物館，須賀川市教育委員会，東京国立博物館，豊橋市教育委員会，福島市教育委員会，明和町斎宮課の諸機関よりご高配をいただきました。また，本稿の執筆にあたっては，岩原剛氏，豊島直博氏，古谷毅氏より貴重なご助言を賜りました。関連文献の収集にあたっては，立命館大学大学院生の福山博章君にご協力いただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

（元興寺文化財研究所　橋本英将）

註

（1）殿塚・古墳例にともなう足金物は，法量が鞘身の他の装具よりも小さく，本来この大刀にともなうものであるか不明である。横佩きの佩用装置がなかった可能性も考えられる。

参考文献（報告書類は図版に引用したもののみ記載）

赤崎敏男 1977「九州の圭頭大刀」『竹並遺跡　弥生・古墳』寧楽社　308 ～ 319 頁

大谷晃二 1999a「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 4　島根県古代文化センター　134 ～ 148 頁

大谷晃二 1999b「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 4　島根県古代文化センター　179 ～ 193 頁

菊池芳朗 2010「圭頭大刀の編年」『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会　75 ～ 86 頁

下村登良男 2004「県指定史跡　坂本古墳群」『明和町史　史料編　第 1 巻－自然・考古－』明和町

田辺昭三 1981『須恵器大成』

滝瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　PHARANX　5 ～ 40 頁

千葉県編 2002『千葉県古墳時代関係資料』

東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と飾大刀』

徳江秀夫編 1999『綿貫観音山古墳 II 石室・遺物編』群馬県教育委員会・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

新納　泉 1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第 30 巻第 3 号　考古学研究会　47 ～ 64 頁

新納　泉 1991「副葬品の種類と編年　武器」『古墳時代の研究』 8 古墳 II 副葬品　25 ～ 39 頁

橋本英将 2006a「らせん状柄巻をもつ装飾大刀－中村 1 号墳出土大刀の検討から－」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 16 集　出雲市教育委員会　23 ～ 32 頁

橋本英将 2006b「「折衷系」装飾大刀考」『古代武器研究』Vol. 7　古代武器研究会　50 ～ 57 頁

櫃本誠一 1973「兵庫県和田山町筒江出土の頭槌大刀」『古代学研究』67　25 ～ 26 頁

前園実知雄編 1993『斑鳩　藤ノ木古墳　第二次・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所

図版出典

第 1 図　前園編 1993，千葉県編 2002 より作成

第 2 図　前園編 1993，徳江編 1999 より作成

第 3 図　筆者作成

第 4 図　櫃本 1973，下村 2004，千葉県編 2002 より作成

第 5 図　滝瀬 1984，東海古墳文化研究会 2006 より作成

第３節　中村１号墳における葬送儀礼

１　はじめに

島根県出雲市中村１号墳は６世紀末～７世紀初頭の未盗掘墳として調査時から注目された。そして，豊富な副葬品とともに耳目を引いたのは，この古墳の石室内における儀礼行為の痕跡であった。出雲市教育委員会によって緻密な調査が行われた結果，特異な遺物配置が明らかとなったのである。それと同時に石棺の蓋が三つに割れているなど，通常の古墳ではみられない現象も確認された。

筆者は，これまで古墳時代の葬送儀礼を被葬者である人骨の検討を通じて，『魏志倭人伝』『古事記』『日本書紀』『隋書倭国伝』などに記載された「モガリ（殯・喪）」や「ヨモツヘグイ（黄泉戸喫）」「コトドワタシ」の実態を明らかにしてきた（田中・村上 1994，田中 2004）。中村１号墳の事例は，人骨こそ遺存していないものの，遺物配置などから葬送儀礼の痕跡を残していると考えられるため，これまで検討してきた葬送儀礼と対照しながら儀礼行為の実態の復元を試みたい。

２　中村１号墳の葬送過程

中村１号墳における葬送過程は，第４章６節に詳述されているが，大略以下のようである。

まず，玄室石棺に初葬者が埋葬され，その後一定の時間が経過した後に鉄鏃を奥壁と石棺の間に散布し，玄室石棺内において被葬者が装着していた金環・ガラス勾玉・ガラス小玉が石棺外に再配置され，副葬品であった鏡・鈴・須恵器・大刀装具を石棺と奥壁の間に再配置している。これら石棺内の遺物の移動の際には被葬者の遺体である人骨も石棺外に出して再配置した可能性が高い。その場合，骨が置かれたのは遺物の空白部をなす玄室石棺の前の可能性が高い。また，左袖石付近では馬具の交連を解いて散布し，一部は須恵器・鉄鏃とともに玉砂利の中に埋めて，その上に須恵器壺と横瓶を据えた【玄室進入１】。その後，玄室内には土砂が堆積したが，石棺と奥壁の間の土砂上に大刀を立て掛けている。また，石棺の棺蓋を破壊し，蓋は３つに割れて反転している。そして，須恵器短頸壺を棺蓋の上に置き，石棺横口を塞ぐように須恵器壺・横瓶をおいている。また，鈴も土砂の上に散布される【玄室進入２】。

前室においては，前室石棺に追葬されて一定期間が経過した後に，石棺から副葬品である大刀が動かされて左袖石付近に立て掛けられ，交連を解いた馬具や鉄鏃が散布される。また，人骨は違存していないものの，副葬品の再配置からみて遺体も動かされた可能性がある。石棺床面のリン分析からは，遺体が棺内に納められていたことと，一カ所に集められていた可能性が指摘されている。この所見を重視するならば，前室石棺においては棺外ではなく棺内で集骨されたと考えられよう【前室進入１】。その後，前室内にも土砂が堆積し，大刀の柄頭や馬具を土砂上に再配置する【前室進入２】。

これらの過程は，埋葬とその後の儀礼行為である。内部の須恵器が二つの石棺における埋葬に伴うとすれば，出雲４期の幅の中で初葬と追葬が行われたと考えられ，儀礼行為はその後に相当の時間をおいて行われたことになる。儀礼行為である【玄室進入１】【前室進入１】と【玄室進入２】【前室進

入２】はそれぞれ類似した行為であり，特に【進入２】の行為は土砂堆積後のものであり，同時に行われた可能性は高い。そうすると，中村１号墳における葬送行為は，玄室石棺への埋葬→前室石棺への追葬→進入１の儀礼行為→進入２の儀礼行為という過程となり，二度にわたって儀礼行為を行ったことになる。そして，進入１が同時であるとすれば，追葬者の関節を固定していた靭帯や軟骨といった軟部組織が腐朽した後にこの行為が行われているため，少なくとも 10 年ほどの時間の経過を見込む必要がある（田中他 1985）。

では，この儀礼行為とはどのような内容のものなのだろうか。以下に古墳時代の葬送儀礼を整理して，中村１号墳における儀礼の意味を考察したい。

３　古墳時代の葬送儀礼

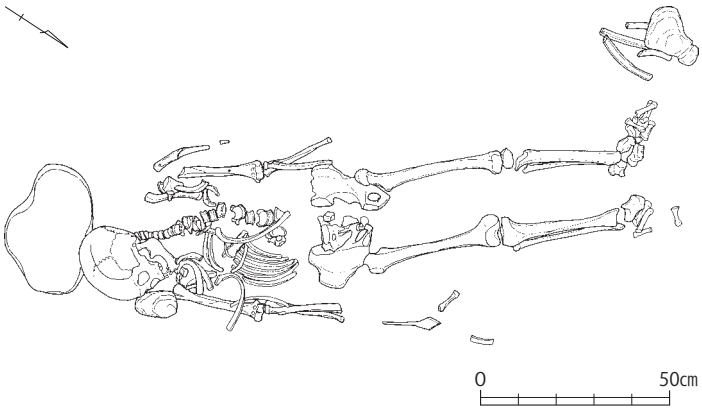
古墳時代の葬送儀礼については，『魏志倭人伝』『古事記』『日本書紀』『隋書倭国伝』などに記載された「モガリ（殯・喪）」や「ヨモツヘグイ（黄泉戸喫）」「コトドワタシ」が知られる。これらのうち，モガリは埋葬前の儀礼行為であり，古墳内で行われるものではない。これについては別稿で論じているので，参照していただきたい（田中 2004）。

「コトドワタシ」については横穴式石室の閉塞儀礼として認識され（白石 1975），死者が死後の世界で飲食をする「ヨモツヘグイ」については，石室内の飲食物や調理具供献を黄泉戸喫と捉えて研究が行われてきた（小林 1949，白石 1975，土生田 1985）。これらは『古事記』上巻および『日本書紀』巻一第五段一書における黄泉国神話に依拠したものである。すなわち，火の神を産んだことにより死亡してしまった妻のイザナミノミコト（伊弉冉尊）を現世に連れ戻そうとした夫のイザナギノミコト（伊弉諾尊）が黄泉国に至って再会を果たすが，イザナミはすでに黄泉国で飲食してしまった（ヨモツヘグイ）ため現世には戻れないという。そして，イザナミを待ちあぐねたイザナギは，自分を見るなというイザナミの依頼にもかかわらず灯りをともしてふり返ってしまう。そこには妻の腐乱死体があり，イザナミは辱められたと怒りヨモツシコメ（黄泉醜女）に命じて追走させる。イザナギは逃走する際に身につけた器物を投げ捨ててヨモツシコメたちの目をはぐらかし，ついに現世へと帰還する。そして，大石で黄泉国への入り口を塞いで，追ってきたイザナミと「死と再生」の掛け合いをする。これがコトドワタシである。白石はこのような記事をもとに横穴式石室内の遺物配置，特に羨道～閉塞部におけるそれに注目して，黄泉の国からコトドワタシに至る儀礼であろうとした（白石 1975）。

ヨモツヘグイについては，墓室内の飲食物供献との関連で論じられ，墓室内への土器副葬が５世紀後半に始まることから，これが朝鮮半島由来のものであり，それ以前の儀礼から大きく変化したという（白石 1975，土生田 1985）。たしかに，前半期の古墳における葬送儀礼は白石の指摘のように，埋葬と古墳の完成をもって終了する感があり，「神あがる」すなわち昇天をもって死の認定をしていたように思える。ところが，黄泉国は暗い地底のイメージであり，昇天思想とは別の他界観が加わったと考えられるのである。

そして，筆者と村上久和は，実際に行われたヨモツヘグイの儀礼には埋葬後 10 年程度経過した後に行われる場合があり，その際に遺体の主として脚部を毀損・再配置した事例があることを示してき

た。例えば，第１図にあげた大分県中津市上ノ原 48 号墓の人骨出土状態であるが，これは５世紀後半の横穴墓で，玄室内からは人骨１体がほぼ完全な状態で検出され，頭の右横と左足の外側にはくびれのある中空の植物果実（おそらくはヒョウタン）が供えられていた。前庭部の土層は，初葬時の埋土と，それを切り込んだそれ以降の埋土が確認され，しかも初葬時埋土の上面がやや黒色化していたことから，少なからず時間をおいた追葬が予想された。にもかかわらず，被葬者は熟年男性の１体のみであったため，埋葬後に追葬以外の何らかの目的で前庭部を掘り返し，再度閉塞部を開けたことが考えられた。また，左肋骨と胸骨および右肋骨の一部に大きな乱れが認められ，また右の膝関節は，右大腿骨・脛骨・腓骨で構成する諸関節が全く乱れていないにもかかわらず，膝蓋骨を欠いていた。そして，この右膝蓋骨は，足元の「ヒョウタン」の直下から検出されたのである。この検出状況からみて，人為的であることは疑いない。



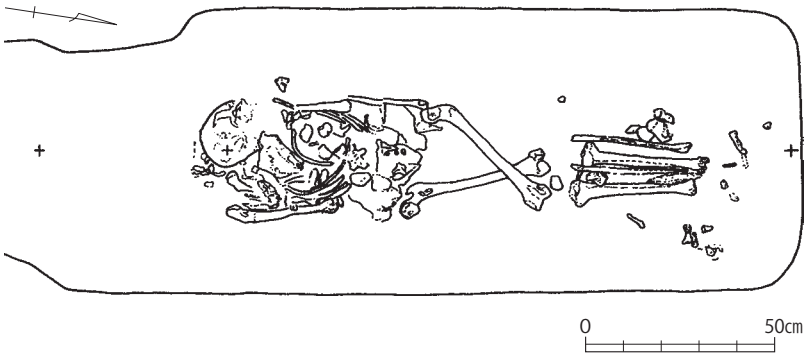
第１図　上ノ原 48 号墓人骨出土状態（１：20）

つまり，48 号横穴墓では埋葬後，遺体の軟部組織がある程度腐朽してしまうまでの期間を経て，再び閉塞部を開け「ヒョウタン」を供献したものと推定される。そして，足元に置くにあたって，右膝蓋骨を遺体から抜き取って足下に置き，その上に「ヒョウタン」を置くという行為を行っている。また，頭の右横に「ヒョウタン」を置くためには，横穴の天井が低いため，どこかに片手をつく必要があり，遺体の左胸部が乱されたと考えられたのである。そして，上ノ原横穴墓群では，５世紀後半～末の 50 号横穴墓においても膝蓋骨の移動が認められており，単発的な行為ではないことが知られている（田中・村上 1994）。

上ノ原 48 号横穴墓と同様に「ヒョウタン」を供献した事例は大分県中津市弊旗邸１号墳においても認められ，この古墳では墳丘の土層調査で埋葬後もう一度墳頂から掘り込んだ痕跡が確認された。したがって，被葬者を竪穴式石室内に葬って墳丘で被覆し，しばらくの時日をおいて再び掘り返して蓋石を開け，被葬者の脛骨を動かすとともに「ヒョウタン」を置いたと推定されるのである（田中・村上 1994）。

同様に埋葬後に遺体の軟部組織腐朽後に再開口し，人骨の一部，特に脚部を動かすという行為は，これらの他にも，大分県竹田市直入町山脇横穴墓，同町長湯横穴墓群（石川他 2004），群馬県伊勢崎市赤堀町多田山３号墳（田中・石川 2004）がある。また，島根県においても仁多郡奥出雲町殿ヶ迫１－２号横穴墓に同様な事例がある（仁多町教委 2001）。ここでは，被葬者の大腿骨が後面を上にして交差させており，それに連なる下腿骨も後面を上にした状態であり，両足が脛距関節から外されて脛骨・腓骨骨体の外側に再配置されている（第２図）。そして，この被葬者には頭頂部と右大腿骨・脛骨・腓骨に切創が認められた。報告者の井上は，右下肢に手当てされた副え木の存在によって，軟部腐朽の過程で大腿骨以下が移動したと考えているが（井上 2001），大腿もしくは下腿に沿って当てられた

副え木でこのような動きを誘因するとは考えられず，足根骨以下が下腿の外側に位置していることの説明がつかない。やはり，人為的な移動と考えざるを得ないのである。



第２図　殿ヶ迫１－２号横穴墓（１：20）

これらの埋葬後数年を経た遺体毀損は５世紀後半上ノ原横穴墓群の事例を嚆矢とし６世紀末までの事例であるが，このような人骨の再配置を確認するには考古学と人骨双方の知識をもった調査者が必要であり，そのような調査が少ないことを考慮すれば実際には見落としも多いのではないかと考えられる。

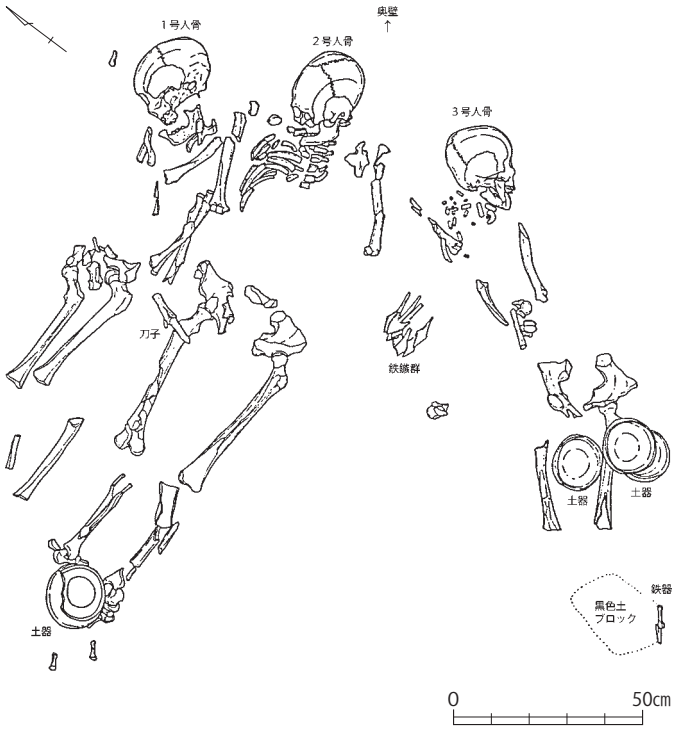
被葬者の遺体を毀損するこのような行為は，一般に断体儀礼とされ，再生阻止の儀礼として理解されている。すなわち，被葬者の社会的機能や死の状況は，時として残された集団成員にとっては害をなすものと怖れられ，それゆえに運動機能を断つための儀礼行為として行われたと考えられるのである（田中 2008）。

しかし，古墳時代後半期の断体儀礼は，縄文時代や弥生時代おいて被葬者の死後すぐに体の一部を切断したものと異なり，埋葬後相当期間を経過して骨を動かしている点に特徴がある。筆者と村上久和は，死後数年をへた断体行為に付随して行われたのが飲食物の供献であることから，ヨモツヘグイの儀礼を，埋葬後 10 年近くの年月を経て再開口したうえで執り行ったと考えた。そして，神話においてヨモツヘグイを行ったイザナミがイザナギを追走したように，黄泉国での飲食後も死者はなお生者に危害を加える力を持っていたことから，死者の運動機能を阻害して追走しないように脚の骨を動かしたと考えた。そして，このようなヨモツヘグイとコトドワタシを死後相当期間たった後に行った理由は，その当時成立した父系直系家族の家長権がいまだ不安定であり，生物としては死した先代家長の「社会的死」の認定を遅らせ，先代家長の霊が新家長を守護し，さらに新旧家長の父子関係，傍系家族に対する新家長の直系家族の優位性を，儀礼によって強調し自然化するという機能を果たしたと考えたのである（田中・村上 1994）。

５世紀後半から始まる墓室内への土器供献は，ヨモツヘグイとしての飲食物供献であると考えられるが（白石 1975，土生田 1985），この時期の土器供献は頭部と脚部に対して行われている。もちろん，石棺や木棺のような長方形の埋葬施設においては頭部と脚部にしか供献できないとも考えられるが，横穴墓のような遺体の左右にも空間が十分にある場合でも供献するのは頭部と脚部である。そして，この位置は上ノ原 48 号横穴墓においてヒョウタンを配置した場所でもあるのである。さらに，上ノ原横穴墓群においては，土器を人骨の下肢や足部の上にじかに置いた事例すらある（第３図）。したがって，このような行為は断体儀礼と同様な歩行機能の阻止を意味すると考えられよう。

しかし，一方では，遺体そのものへの毀損行為はエスカレートする。たとえば，大分県竹田市直入町長湯７号横穴墓では，玄室奥壁に向かって左に２段，右に１段の屍床を有しており，左側の屍床

から２体，玄室中央付近から右側の屍床にかけて１体の埋葬が確認されたが，閉塞が乱されていないにもかかわらず３体とも全ての関節が外れ，原位置から移動した状態で出土している（第４図）。この７号横穴墓は，熟年男性に顔面から側頭骨を離断するなどの刀創が認められることから，あるいはその死に対する怖れからこのような「過度の断体」を行ったとも考えられよう。しかし，この横穴墓群では３・４・９号横穴墓でも同様に関節がすべて外された状態であり，特例ではない。６世紀前半～後半に営まれたこの横穴墓群では，２・６号横穴墓の被葬者に足の関節を外した例も認められており（石川他 2004），死後の再生阻止儀礼が，当初は脚部に行われていたものが，次第にエスカレートして全身に及ぶ過渡期にあったと考えられよう。さらに，筆者が関係した福岡県宗像市須恵須賀浦横穴墓群においては，人骨遺存の横穴墓では１基を除いてすべて人骨はバラバラにされており，うち１基では人骨の関節を外してしまった後に横瓶を逆さにしてその上にウサギの大腿骨（腿の肉）を乗せていた。明瞭な儀礼行為の一環として「過度の断体」が行われたことが理解されよう。

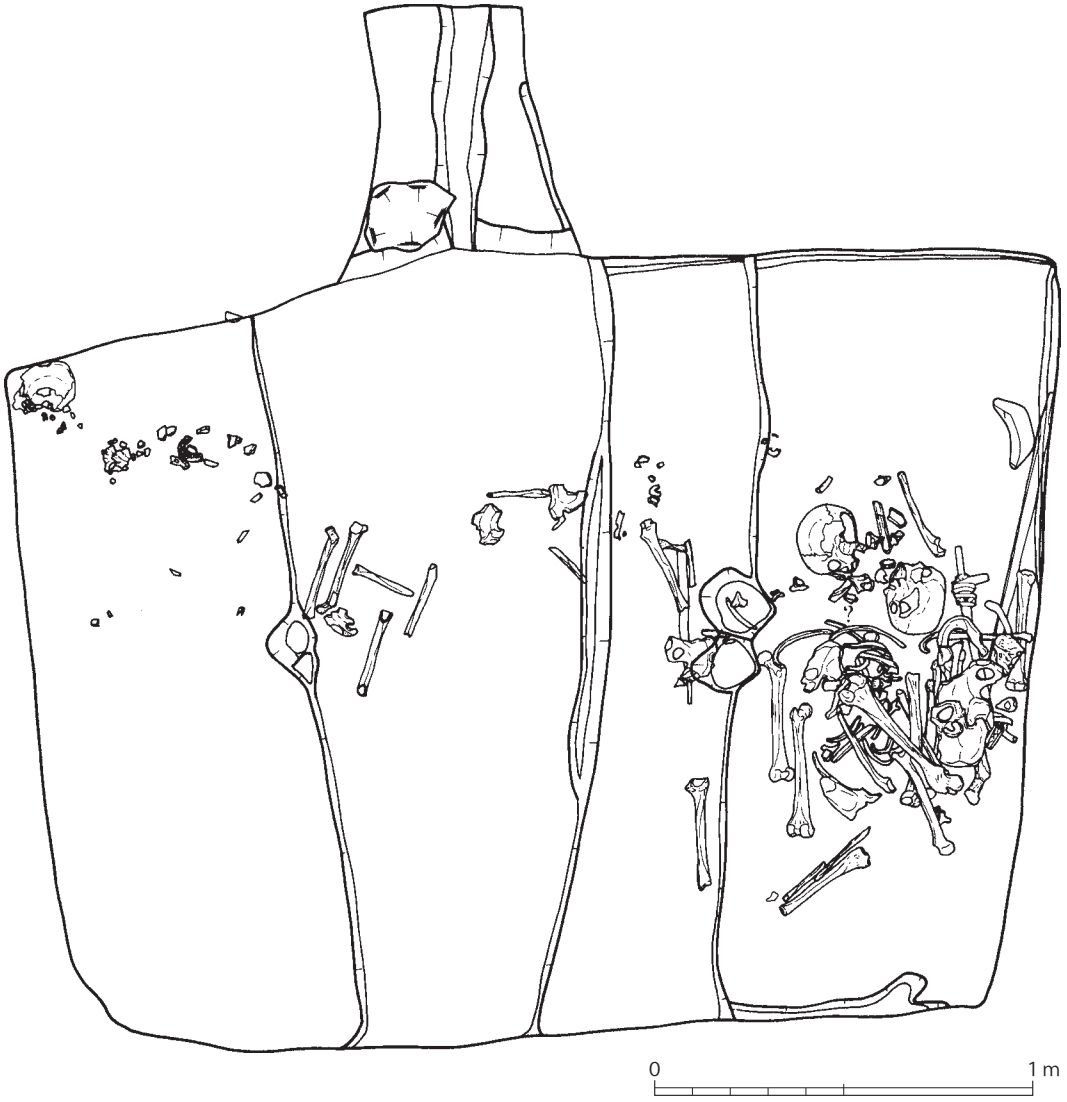


第３図　人骨上土器供献（１：20）

このような人骨の状態は，閉塞部が開口していた場合は「攪乱」，開口していなかった場合には「小動物による撹乱」として処理されることが多かったと思われるが，上記のように実際は人為的な儀礼行為であった例を含んでいる可能性がある。そして，このような全身の関節を外す行為は，６世紀後半から７世紀代には全国的に珍しい習俗ではなくなるのである。

以上のように，古墳時代の葬送儀礼は，後半期に至って埋葬後数年をへてヨモツヘグイとコトドワタシの儀礼を行う場合があり，その際には遺体毀損（断体儀礼）も含まれることがあった。また，遺体毀損は行わずとも，土器を脚の上に置くことで同様の意味を持たせることがあった。これらの行為は九州から関東まで及ぶことから局所的な現象ではないと考えられるが，いまのところ点的に認められるにとどまっていることから，全国的に統一された儀礼というわけでもない。しかし，『日本書紀』巻五の黄泉国神話には「一書」がいくつもあり，８世紀段階での死生観が未統一であったことを考慮すると，氏族によってそれぞれ異なる解釈と儀礼行為を行っていた可能性がある。さらに，断体儀礼は被葬者の社会的機能とともに死の状況も関係するため，個別の事情によっても儀礼行為の表現は変異したと考えることが出来よう。

では，このような古墳時代の葬送儀礼の脈絡の中で，中村１号墳の儀礼はどのように理解することができるのだろうか。



第４図　長湯７号横穴墓人骨出土状態（１：20）

４　中村１号墳の葬送儀礼

中村１号墳においては，埋葬後に二度にわたって再開口し，副葬品の再配置，棺蓋の破壊を行っており，遺体も棺外への再配置および集骨を行った可能性が高い。これらのうち，副葬された土器については飲食物の容器である壺・横瓶・坏などはヨモツヘグイとの関連でとらえることができよう。また，副葬品の再配置もコトドワタシに至る儀礼行為で説明できるものもある。すなわち，玄室では，左袖石付近で交連を解かれて散布され一部は須恵器・鉄鏃とともに玉砂利の中に埋められた馬具，土砂上に散布された鈴が該当し，前室においては，交連を解いて散布された馬具や鉄鏃があげられる。また，閉塞部の馬具等もこれに相当するだろう。

しかし，コトドワタシは黄泉国からの逃走とその後の別離の宣言，死と再生をモチーフとしたものであり，死者の位置から黄泉平坂を通って現世へと至るルート，すなわち棺や屍床から閉塞部あたりまでが儀礼の場として想定される。ところが，中村１号墳においては棺内に置かれたいたと考えられる鏡・鈴・大刀装具を石棺と奥壁の間に再配置しており，これらの移動は棺から羨門への動線上にな

く，逃走および死と再生のモチーフだけでは説明できない。したがって，これらには別の意味を付与されていたと考えられる。

そこで想起されるのが遺体毀損である。被葬者の遺体の関節状態を乱して再配置，あるいはバラバラにしてしまうという行為は，被葬者の体の位置関係を乱すことによって運動機能などを毀損し再生を阻止することであるが，それが「生物としての死」から 10 年前後をへて行われることからみて，その再生阻止は死者の「社会的死」を企図したものであったと考えられる（田中・村上 1994）。そうすると，死者の社会的立場を反映して選択され構成された副葬品とそのセット関係もまた，死者の「社会的死」の確認の対象となりうる。つまり，死者の遺体の一部を毀損して再生を阻止するという行為から人骨の関節をバラバラに外してしまうというエスカレートの脈絡でいえば，死者との関係において配置された副葬品との関係もまた毀損したと考えられるのである。そして，その行為が死者の容器である棺にまで及んだのが中村１号墳であると考えられる。

中村１号墳玄室石棺の蓋は三つに割れ，反転して棺内に倒れ込んだ状態であるが，少なくとも１片には蓋上面に当たる断端に打痕が認められ，もう１片にも類似の剥離が認められる。これは自重や土砂の重みで崩落したのではなく，意図的に破壊したことを物語っており，蓋上の須恵器も破壊行為の後に儀礼の一環として置かれたものと考えられる。そうすると，その意図するところは死者の容器としての機能の毀損であり，遺体・副葬品と同じ脈絡で捉えられるのである。そして，じつは類似した行為の例がある。

愛媛県松山市葉佐池古墳は，木棺の良好な保存と，人骨付着ハエ囲蛹殻からモガリの実態が明らかになったことで知られる（田中他 2003）。それらは１号石室における調査成果であるが，ここで注目されるのは２号石室である。この石室は１号石室より前の６世紀後半の築造であるが，人骨の保存は断片的ではあるものの，閉塞部の調査から３回の埋葬が想定されており，さらに１回開口した可能性も指摘されている。また，この石室では馬具は交連を解かれており，杏葉と馬鈴は閉塞部に再配置されている。副葬品類はまとまりを欠き，須恵器の多くは割られたり装飾部を外されたりして，閉塞部に置かれた子持壺の中には鏃の胴部が入れられていた。わずかに検出された人骨も歯３本を除けばまとまりに欠ける。そして，石室内には大量の木棺破片，というよりも「木っ端」と化した木棺小片が集積していたのである（第５図，松山市教委 2003）。報告者の表現を借りれば「ゴミ状態」を呈するこの石室の状況の成因については，報告書中でいくつかのケースで考察されているが，基本的に共通しているのは，埋葬後に木棺を破却していることである（栗田 2003）。石室内の木片は，石室中央から玄門よりに集積しており，奥壁側は流土に覆われて木片の保存も良くないが，木片自体は50㎝ほどのサイズのものがある。そして，「木っ端」の破断面を見ると，材の乾燥過程で破断した状態を示しており，本来は流土下の木片程度の大きさであったものが乾燥過程で細片化したものと考えられる。つまり，葉佐池古墳２号石室では，３体の埋葬を行いつつ，石室内に飲食物供献用の須恵器を副葬してヨモツヘグイの儀礼を行い，遺体と遺物を毀損・再配置して死者とその社会的属性の表象としての副葬品との「関係」を毀損し，さらには死者の容器であった木棺までも破却して，その後に木棺片がさらに細片化したと考えられるのである。

第5図　葉佐池古墳2号石室1（1：20）

以上から，中村１号墳における葬送儀礼は，２回の埋葬を行いながら，飲食物供献を行うヨモツヘグイの儀礼を行い，遺体の軟部組織が腐朽する 10 年前後の時を経過して再開口し，遺体を棺から出して再配置や集骨し，副葬品の交連を解いて再配置している。この行為はヨモツヘグイからコトドワタシへと至る儀礼の一環であり，死者とその社会的関係を毀損して再生を阻止する意味をもったと考えられる。そして，その行為は棺蓋の破壊にまで及んだ。

これらの儀礼行為は，黄泉国神話に残された死生観に基づくと考えられ，それを呪文や音楽その他の表象で抽象化するというよりは，きわめて即物的に表現したものと理解される。そして，このような過程が明瞭に看取されたという点で，中村１号墳はきわめて特異かつ重要であると評価できる。

５　おわりに

以上のように，中村１号墳における儀礼行為は，古墳時代葬送儀礼研究に大きな進展をもたらすものであった。たしかに，このような事象は一般的なものではないが，前述したように，人骨の関節外しや再配置は，これまでさほど注意されることなく，「攪乱」や「小動物による攪乱」として処理されてきた可能性が高く，しかるべく注意を払った調査であれば事例は増加すると考える。

ただ，それにしても，棺蓋の破却などはたしかに特異である。また，古墳によって，地域によっても考古学的現象としては変異が大きい。その背景には，これらの儀礼とその行為を行うにあたって，死者の社会的立場とともに死因や病状などの死の状況，あるいは死後における集団成員の病気や不幸等の状況が反映した可能性があろう。そして，それらとともに，黄泉国神話に反映された死生観は，中国の魂魄二元論が半島もしくは中国からもたらされた結果と考えられるが，もちろん中国や百済の葬送儀礼そのものではなくなっており，その理解や導入後の独自の解釈によって変質し，地域・集団によって変異した可能性があろう。『日本書紀』巻五に「一書」が多いことも，８世紀段階の他界観が細かい点では統一性に欠け，それゆえに氏ごとの解釈を併記せざるを得なかったともいえるからである。

末筆ながら，中村１号墳の現地観察および本稿執筆の機会を与えていただいた，出雲市文化環境部文化財課花谷浩・坂本豊治氏，愛媛大学名誉教授下條信行氏に感謝申し上げる。

（九州大学比較社会文化研究院　田中良之）

参考文献

石川　健・舟橋京子・渡辺誠・原田智也・田中良之 2004「長湯横穴墓出土人骨について」『長湯横穴墓群　桑畑遺跡－主要地方道路改良事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』大分県教育委員会　82 ～ 134 頁

井上晃孝 2001「仁多町時仏山横穴墓・殿ヶ迫横穴墓群出土人骨」『殿ヶ迫横穴墓群・西尾社遺跡・亀ヶ谷遺跡・シベ石遺跡・時仏遺跡・時仏山横穴墓　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県仁多町教育委員会

大分県教育委員会 1991「上ノ原横穴墓被葬者の親族関係」『上ノ原遺跡群Ⅱ』

栗田茂敏 2003「２号石室の状況について」『葉佐池古墳』松山市教育委員会

小林行雄 1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』 2

白石太一郎 1975「ことどわたし考」『橿原考古学研究所論集創立三五周年記念』吉川弘文館

田中良之 2004「殯再考」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』小田富士雄先生退職記念事業会

田中良之 2008「断体儀礼考」『九州と東アジアの考古学－九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集－』九州大学考古学研究室

田中良之・石川　健 2004「多田山古墳群出土人骨」『多田山古墳群第 1 分冊』本文編　群馬県企業局・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

田中良之・土肥直美・船越公威・永井昌文 1985「上ノ原横穴墓被葬者の親族関係」『上ノ原遺跡群』 4　大分県教育委員会

田中良之・舟橋京子・石川　健 2003 年「葉佐池古墳出土人骨」『葉佐池古墳』松山市教育委員会　203 ～ 210 頁

田中良之・村上久和 1994「墓室内飲食物供献と死の認定」『九州文化史研究所紀要』39

仁多町教育委員会 2001『殿ヶ迫横穴墓群・西尾社遺跡・亀ヶ谷遺跡・シベ石遺跡・時仏遺跡・時仏山横穴墓尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』

土生田純之 1985「古墳出土の須恵器（一）」『末永先生米寿記念献呈論文集』吉川弘文館

松山市教育委員会 2003『葉佐池古墳』

図版出典

第１図　大分県教育委員会 1991 より

第２図　仁多町教育委員会 2001 より

第３図　大分県教育委員会 1991 より

第４図　大分県教育委員会 2004 より

第５図　松山市教育委員会 2003 より

第４節　「黄泉国訪問神話」と喪葬儀礼
－中村１号墳にみる儀礼をめぐって－

１　はじめに

中村１号墳は未盗掘古墳として，その埋葬過程の様相を残し，特に埋葬終了後の進入による副葬品の毀損・ばら撒き，石棺の毀損などの行為が確認される（以下，「再生阻止儀礼」と略）。石室内におけるこれらの儀礼は『古事記』『日本書紀』にみえるイザナキの「黄泉国訪問神話」（以下，「黄泉国神話」と略。）を示唆するものとして注目される。「黄泉国神話」をめぐっては，神話学・国文学・考古学を中心とする多くの先学諸賢がさまざまな研究を重ねてきた。その多くは，「黄泉国神話」の原像やモチーフに関わる研究である。

まず，神話学・国文学においては，「黄泉国」の世界観をめぐる議論が中心となる。すなわち，その世界を①地下の暗黒で穢れた世界（本居宣長『古事記伝』1822・倉野 1958・平鍋 1996・勝俣 2006 ほか）と捉える説と②葦原中国と同一平面にある世界（松村 1955・神野志 1983・目黒 1999・北條 2011 ほか）と捉える説がある。①は天上「高天原」，地上「葦原中国」，地下「黄泉国」とする三層的世界観に基づき，②は「アメ」と「クニ」との水平方向の対立軸を中心とする世界観で捉え，「黄泉国」は「クニ」の一部で地下ではないとする。①②は観念的な議論に終始し，後述する考古学における議論とは斟酌できない面もあるが，「黄泉国神話」は文学作品としての性格を持つ以上，注視すべきである。特に，考古学における諸説は①を自明の前提として捉える傾向にあるが，神話学・国文学では必ずしも見解の一致をみていない。一方で，③葬儀・埋葬に使用された洞窟（松村 1955・菅野 1973・森 1993 ほか）と捉える説や④殯の場（西郷 1972 ほか）とする見解もある。③は『出雲国風土記』（以下，『風土記』と略。）出雲郡宇賀郷条にみえる「黄泉之坂，黄泉之穴」に比定される遺跡が海蝕洞窟であることから，「黄泉国」は海岸近くの洞穴の一種とする見方である。また，④は『日本書紀』の一書にイザナキの訪問先を「殯斂」の場とすることを根拠とする。また，考古学においては，⑤６・７世紀の横穴式石室における儀礼をモチーフとする説（高橋 1914・次田 1924・渡辺 1936・後藤 1938・小林 1949・金子 1963・三品 1970・白石 1975・田中・村上 1994・福島 2000 ほか）として，石室内で認められる考古学的な事例と対応させる研究が進んでいる[(1)]。

本稿では，上記の「黄泉国神話」の議論をふまえた上で，中村１号墳の石室内で確認された埋葬終了後の儀礼が，「黄泉国神話」と比して，どのように位置付けられるのか考察を試みたい。

２　『古事記』にみる「黄泉国訪問神話」

神話学・国文学・考古学における「黄泉国神話」の議論は，いずれもその原像・モチーフをめぐるものが多い。特に考古学における議論では，「ヨモツヘグヒ」や「コトドワタシ」などの部分的な記事をめぐる考察が目立つ。しかしながら，説話を収載する記紀は編纂の過程を経た二次史料であって，記紀全体の方向性の中で“神話素”が改変される可能性もある。「黄泉国神話」においても，『古事記』

の説話に類似したものが『日本書紀』には異伝の「一書」として別々に収載される（平野 2003）。すなわち，「黄泉国神話」はいくつもの説話がまとめられたものである可能性が高く，「黄泉国神話」の記事をめぐる実際の儀礼行為への比定は，一定の危険性を孕むことに留意する必要がある。

まず，「黄泉国神話」の考察にあたっては，編者がどのような意図をもって説話を収載したのか，その性格を位置付ける必要がある。従来の諸説ではその細部が注目され，説話収載をめぐる編者の意図が考察されることは少なかった。しかしながら，「黄泉国神話」は二次史料としての性格を有し，収載の意図をふまえた検討も必要である。煩雑ではあるが，『古事記』の「黄泉国神話」に相当する記事を掲げ，その意義について考えたい。

A　故，伊耶那美神は，火の神を生みしに因りて遂に神避り坐しき。（中略）故，爾に伊耶那岐命詔りたまはく，「愛しき我が那迩妹命を，子の一つ木に易へむと謂へや」とのりたまひて，乃ち御枕方に匍匐ひ，御足方に匍匐ひて哭きし時，御涙に成れる神は，香山の畝尾の木の本に坐す，名は泣沢女神。故，其の神避りし伊耶那美神は，出雲国と伯伎国との堺の比婆の山に葬りまつりき。（以下略）

B　是に其の妹伊耶那美命を相見むと欲ひて，黄泉国に追ひ往きき。①爾に殿の縢戸より出で向へし時，伊耶那岐命語らひ詔りたまはく，「愛しき我が那迩妹命，吾と汝と作れる国未だ作り竟へず。故，還るべし。」とのりたまひき。爾に伊耶那美命答へ曰さく，「悔しきかも，速く来まさずて。吾は黄泉戸喫為つ。然れども愛しき我が那勢命，入り来坐せる事恐し。故，還らむと欲ふを，且く黄泉神と相論はむ。我をな視たまひそ。」とまをしき。②如此白して其の殿の内に還り入りし間，甚久しくて待ち難ねたまひき。故，左の御美豆良に刺せる湯津々間櫛の男柱一箇取り闕きて，一つ火燭して入り見たまひし時，宇士多加礼許呂々岐弖，頭には大雷居り，胸には火雷居り，腹には黒雷居り，陰には析雷居り，左の手には若雷居り，右の手には土雷居り，左の足には鳴雷居り，右の足には伏雷居り，并せて八の雷神成り居りき。

C　是に伊耶那岐命見畏みて逃げ還ります時，其の妹伊耶那美命言さく，「吾に辱見せつ。」とまをして，即ちⓐ予母都志許売を遣はして追はしめき。爾に伊耶那岐命，黒御縵を取りて投げ棄つれば，乃ち蒲の子生りき。是を摭ひ食む間に逃げ行くを猶追ひしかば，亦其の右の御美豆良に刺せる湯津々間櫛を引き闕きて投げ棄つれば，乃ち笋生りき。是を抜き食むの間に逃げ行きき。且後には，ⓑ其の八の雷神に千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。爾に御佩せる十拳剣を抜きて，後手に布伎都々逃げ来るを，猶追ひて黄泉比良坂の坂本に到りし時，其の坂本に在る桃の子三箇を取りて持ち撃てば，悉に逃げ返りき。爾に伊耶那岐命，其の桃の子に告りたまはく，「汝，吾を助けしが如，葦原中国に有らゆる宇都志伎青人草の，苦しき瀬に落ちて患へ惚む時に助くべし」と告りたまひて，名を賜ひて意富加牟豆美命と号ひき。

D　最後に其の妹伊耶那美命身自ら追ひ来りき。爾に千引の石を其の黄泉比良坂に引き塞へて，其の石を中に置きて，各対ひ立ちて，事戸を度す時，伊耶那美命言さく，「愛しき我が那勢命，如此為ば，汝の国の人草，一日に千頭絞り殺さむ。」とまをしき。爾に伊耶那岐命詔りたまはく，「愛

しき我が那迩妹命，汝然為ば，吾一日に千五百の産屋立てむ。」とのりたまひき。是を以ちて，一日に必ず千人死に，一日に必ず千五百人生まるるなり。故，其の伊耶那美神命を号けて黄泉津大神を謂ふ。亦云はく，其の追斯伎斯を以ちて道敷大神と号くといふ。亦其の黄泉の坂に塞りし石は，道反之大神と号け，亦塞り坐す黄泉戸大神とも謂ふ。故，其の謂はゆる黄泉比良坂は，今出雲国の伊賦夜坂と謂ふ。　（荻原浅男・鴻巣隼雄『古事記　上代歌謡』小学館，1973）

「黄泉国神話」は，Aイザナミの死と埋葬，Bイザナキの「黄泉国」訪問とイザナミの「見るなの禁」提示・破綻，Cイザナキの遁走，D「コトドワタシ」として主に４つの説話に分類できる。ここでは『古事記』全体の構成の中で「黄泉国神話」の位置付けを考えたい。以下に『古事記』冒頭からの説話構成をまとめる。

㋐別天つ神……三柱の造化神（アメノミナカヌシ・タカミムスヒ・カミムスヒ）＋二柱の神
㋑神世七代の神→イザナキ・イザナミの出現
㋒天つ神の詔命（イザナキ・イザナミ）→オノコロ島の聖婚→国生み〈日本列島の島々〉
　→神生み〈自然風土の神・人間生活を取り巻く物品の神〉
㋓イザナミの死→火神カグツチの血〈雷・剣の神の化成〉/ 死体〈山の神の化成〉
㋔イザナキによる黄泉国訪問
㋕イザナキの禊祓→三貴子〈天照大神・月読命・須佐之男命〉の出現　┐
　　黄泉国神話　┘

『古事記』において「黄泉国神話」は上巻の冒頭に収載され，上記のように国生み・神生みに続く説話となる。イザナミの死をもって説話が展開することから，“死”に関わる説話がモチーフとなったことには違いない。ただし，「黄泉国神話」の後半部C・Dに「宇都志伎青人草」「人草」（＝人間）の存在とその生死が示され，国生み・神生みに続く全体的構成からすると，人間の存在を提示することが主題であったとみられる。また，「黄泉国」の不浄性の強調で，現世を清浄の世界として対立的に位置付け(2)，生（清浄）－死（不浄）といった，二つの相反する対象の存在の提示も主題の一つと考えられる。その提示によって日月の対称的な神々の出現を導き(3)，三貴子の清浄性が強調されるのである。そして，D「コトドワタシ」での「道敷大神」「道反之大神」といった道饗祭に関連する神々の提示から，二つの相反する対象の“境界”への意識も窺うことができる。説話冒頭の「出雲国と伯伎国との堺」の表現も境界を意識したものであろう。

このように，「黄泉国神話」は人間の存在，生（清浄）－死（不浄）の二つの相反する対象の存在，その対象の“境界”を提示することの三点を主としたと考えられる。その上で，生－死に関わる場面での祭祀・習俗の由来譚につながる説話が付加されたとみられ，Cイザナキの遁走にみえる説話も同様に考えられる(4)。そして，「黄泉国神話」の舞台として，生－死の境界に位置する喪葬儀礼の場がそのモチーフとなったとみられる。その具体相をめぐっては横穴式石室や殯の場などの指摘があるが，各説において「黄泉国神話」との不整合な部分もあり(5)，喪葬の場全般にわたる祭祀・習俗を巧み

に説話化したものが「黄泉国神話」であると解した方が良いのではなかろうか。

3　文献史料にみる記紀成立期の「黄泉」

従来の諸説では，記紀成立期，すなわち7世紀後半～8世紀初めの人々の「黄泉」に対する観念は等閑視されてきた。「黄泉」＝「黄泉国」を自明の前提とする論説もみられるが，そのようにいえるのであろうか。また，「黄泉」の語はどの程度一般化された言葉であったのか。中村1号墳で確認された埋葬終了後の儀礼と「黄泉国神話」との関連を考察する上では，地方における「黄泉」に対する意識を確認する必要がある。本節では，記紀成立期の地方における「黄泉」の観念を確認したい。

地方における「黄泉」観念を示唆する史料として(6),『出雲国風土記』出雲郡宇賀郷条の「黄泉之坂，黄泉之穴」の記事がある。中村1号墳は隣接する出雲郡美談郷に所在する。

（前略）即ち，北の海の浜に磯あり。脳磯（なづきのいそ）と名づく。（中略）磯より西の方に窟戸（いわやど）あり。高さと広さと各六尺許（ばかり）なり。窟の内に穴在り。人入ること得ずして，深き浅きを知らず。夢に此の磯の窟の辺に至らば，必ず死ぬ。故，俗人古より今に至るまで，此を「黄泉の坂，黄泉の穴」と号（なづ）く。

（『出雲国風土記』出雲郡宇賀郷条）

本条は宇賀郷の脳磯の西方にある窟戸の近くに，夢の中で至る場合に必ず死ぬとする。「黄泉の坂」の「坂」とは，その字義から境界の意味と考えられる。窟戸の近くに至ることを死の条件としており，窟戸，すなわち窟（洞穴）の入り口を現世と死者の世界との境界（＝「黄泉の坂」）と位置付けたものとみられる。一方で，「黄泉の穴」とは窟の地形表現とみるべきであろう。

この窟（洞穴）は，出雲市猪目町の猪目洞窟に比定される。洞窟内からは弥生～古墳時代の約20体の人骨と舟形木棺，須恵器，土師器などが見つかっている。海蝕洞窟の場での舟形木棺の利用から，舟葬観念に基づく埋葬，すなわち海上他界観を示唆するとの指摘もある（辰巳1996）。洞窟内の出土遺物には7世紀後半の須恵器も認められることから，『風土記』編纂の天平5年（733）の近い時期まで墓地として利用された可能性も考えられる。

本条の記述は『風土記』編者による「黄泉」の理解を前提とするもので，窟（洞穴）を「黄泉」（＝死者の世界）とする表現も矛盾のないものとして捉えられたと考えられる。風土記編纂過程の問題を考慮する必要はあるが，本条の伝承収載に関与した出雲郡の郡司層も「黄泉」の語の理解を有したと想定される。

一方で，中央官司における事例として，天平宝字2年（758），造東大寺司写経所へ阿閇（あへ）豊庭が提出した不出仕の理由を陳述する文書（『大日本古文書』14－381）がある。その中で，父親（正六位上阿閇朝臣多心）の危篤を「殆黄泉に赴く」と表現する。このことから，中央の下級官人層にも「黄泉」の意識が存在したことを窺える。

このように，「黄泉」の語が死者・死後の世界を意味するとの認識は，8世紀における中央の下級官人層から在地の郡司層まで及んでいた可能性を認めてもよかろう。

「黄泉」の用字は中国に由来し，戦国時代（前４世紀ごろ）の『春秋左氏伝』隠公元年の荘公武姜説話にみえる「黄泉」が最も古い時期の例である。同書の「黄泉」について，杜預（３世紀中ごろ）は「地中之泉」，服虔（３世紀前半？）は「天玄地黄，泉在地中」と注し，当初は「死者を埋めた地下の泉」と解されていた。漢代になると「地下の他界」の意でも使われ始め，その後は「地下」「地中の泉」と「地下の他界」の両様の用字例がある（江頭 1980）。日本での『春秋左氏伝』の受容については，儒家経典として大宝学令に大学・国学で学ぶべき書物の一つに列記され（学令集解５経周易尚書条古記），そのテキストとして杜預・服虔の注解によるものが使われた（学令６教授正業条）。愛知県・下懸遺跡では８世紀初めの習書木簡に「春秋」と記したものが見つかっており（池本・福岡 2002），同時期の地方における受容を示唆する。すなわち，地方でも国学を通して郡司子弟が『春秋左氏伝』を受容し得る状況にあり，その中で郡司層における「黄泉」の語に対する理解が展開した可能性も考えられる。

記紀の「黄泉国神話」において，『古事記』は「黄泉国」とする一方で，『日本書紀』では一書第六が「黄泉」とする他，すべて「泉」と表現する。その背景には，『春秋左氏伝』の杜預や服虔による注解や儒教の影響をみる指摘がある（寺川 1988）。慶雲４年（707）の紀年をもつ威奈大村骨蔵器銘文の末尾には，「空しく泉門に対し，長(とこしへ)に風燭を悲しぶ」とある。中国北周の文人庾信(ゆしん)による墓誌銘を参照したとされる文章ではあるが（東野 1977），『日本書紀』一書第六にも「塞ぐ所の磐石，是を泉門塞ぐる大神と謂うなり」とあり，漢籍を通した他界観の広がりにも注意する必要があるだろう。

一方，「黄泉」の音「ヨミ」については，上古において葬地あるいは他界と観じられた「山」の母音交替によって構成されたヨモ（ヨミの被覆形）の語からヨミに音韻変化したと指摘される（井手 1960）(7)。「黄泉国神話」Ａ段でイザナキがイザナミの死の原因となった火神カグツチを斬殺した際，八柱の山神が化成し，イザナミの葬地も比婆山とする。「黄泉国神話」にも「黄泉」を山上他界観念に繋がる語としての意識が窺える(8)。

「黄泉」の語は，在来の他界観念である「ヨミ」と中国の用字である「黄泉」が結合したものである。８世紀初めには中央の下級官人層から地方の郡司層までに認識されたとみられ，死者（死後）の世界を意味する一般的な語として用いられた可能性がある。日本における漢籍の受容について，『論語』『千字文』が６世紀の継体～欽明朝に請来されたとする指摘があること（和田 2010）からすれば(9)，「黄泉」の語の定着は７世紀代に遡る可能性もある。

それでは，「黄泉」はどのような世界として認識されたのであろうか。「黄泉」の観念については，記紀の「黄泉国神話」に具体的な表現がある。しかしながら，そこに表現される「黄泉」は一様ではない。『古事記』は「黄泉国」，『日本書紀』は「泉国」（一書第十）「黄泉」（一書第六）として，説話の舞台の名称も異なる。加えて，説話構成も異なり，最も体系的な説話を収載するのが『古事記』である(10)。そして，「黄泉国神話」には，伝統的な喪葬儀礼に基づく要素や陰陽五行思想，道教の思想など，多くの要素が含まれる（烏谷 2007）。表記や話の構成・内容の多様性をふまえると，「黄泉」とは一定の観念に基づくものではなかったと言わざるを得ない。

「黄泉」の観念を窺わせる史料として，大化５年（649），蘇我倉山田石川麻呂が山田寺の仏殿で自害する際の記事にみえる麻呂の言が注目される。

「夫れ，①人臣たる者，安(いづ)くんぞ逆を君に構へむ。何ぞ孝を父に失はむ。②凡そ此の伽藍(がらん)は，元より自身の故に造れるにはあらず。天皇の奉為(おんため)に誓ひ作れるなり。今，我，身刺に譖ぢられて，横しまいさをいだまかに誅されむことを恐る。③聊(いささ)か望むらくは，黄泉にも尚忠(いさお)しきことを懐きて退(まか)らむ。寺に来たる所以は，終りの時を易からしめんとなり。」　（『日本書紀』大化５年３月己巳条）

本条は，下線部①が儒教的な理想の人臣像を提示し，一方で，下線部②が儒教的な徳目（忠と孝）の具象化として仏教的な営為（氏寺の建立）を示すことから，儒教と仏教の結合を提示すると指摘される（八重樫 2001）。下線部③も「黄泉」での儒教的な忠を仏殿で誓願する。本条の記述からして「黄泉」とは，現世における儒教的・仏教的行為が連続し，多様な思想が混在する死後の世界との意識が窺える。そこには汚穢な「黄泉国」のイメージはなく，現世の延長としての意識がみえる。

このように，記紀成立に係る７世紀後半～８世紀初めにおいて，「黄泉＝死後（死者）の世界」との認識は中央の官人層から地方の郡司層まで共有されたことが確認される。「ヨミ」は在来の山上他界観念に由来する語とみられるが，その観念は一定ではなく，現世に対する死者（死後）の漠然とした世界観を示唆する語であった。「黄泉国」「泉国」との表現は記紀のみでしかみられず，死後（死者）の世界は「黄泉」との理解が一般的であった可能性が高い。

つまり，「黄泉国」とは「黄泉」の世界の一部として説話の舞台となった「国」，すなわち喪葬の場という領域的表現を意識した語句なのではなかろうか。その上で，記紀の世界観における汚穢の「国」としての「黄泉国」が位置付けられたのであろう。考古学では「黄泉」の観念と横穴式石室との関連を指摘する諸説も多いが，横穴式石室が埋葬施設として採用されなくなった奈良・平安時代においても「黄泉」の用例があり(11)，「黄泉」と横穴式石室は必ずしも一体のものではないことに注意する必要がある。したがって，「黄泉」は観念的な死後の世界観を示し，「黄泉国」は領域的な世界としての横穴式石室に代表される具体的な喪葬の場を意識したものと考える。

4　文献からみた埋葬終了後の儀礼－「黄泉国」をめぐって－

（1）　地方における喪葬儀礼の様相

前節で述べたように，「黄泉」と「黄泉国」とは同一の観念と捉えることはできず，説話の舞台設定としての「黄泉」と喪葬の場での祭祀・習俗を説話化した「黄泉国神話」とは切り離して考察すべきである。したがって，考古学の上で指摘される横穴式石室での喪葬儀礼は，「黄泉国神話」の“神話素”となった祭祀・習俗に関連するものとみるべきであろう。

それでは，記紀成立期の地方における喪葬儀礼はどのような様相であったのか。当該期の喪葬儀礼をめぐる研究は，天皇や貴族の喪葬儀礼や喪葬令の受容に係る制度的側面に関するものが多く（和田 1995・稲田 2000），実態面における考察は皆無と言ってよい。さらに，地方における喪葬儀礼の様相を考察することは史料的制約のため困難を伴うが，わずかな事例から考えてみたい。

まず，殯(もがり)儀礼については，いわゆる大化の薄葬令として「凡そ王以下庶民に及び至るまで殯を営む

こと得ざれ」（『日本書紀』大化２年（646）３月甲申条）の記事が注目される。大化の改新に係る施策をめぐっては諸説あるが，薄葬令については具体的内容を含み，考古学的な例証からしてその有効性が指摘される。本条は７世紀半ばに喪葬に際しての殯儀礼が広く行われた可能性を示唆するものとみてよいであろう。また，出雲国での殯儀礼の様相を示唆する記事が『風土記』に収載される。煩雑ではあるが，以下に当該条を示す。

安来郷。郡家の東北廿七里一百八十歩なり。（中略）即ち，北海に邑売埼あり。飛鳥浄御原宮御宇大皇の御世，甲戌年七月十三日，語臣猪麻呂が女子，件の埼に遥ぶに，邂逅に和爾に遇ひき。賊らえしこと，切にあらず。爾時，父猪麻呂，賊れし女子を浜の上に斂め置き，大く苦憤りて，天に号び地に踊り，行きては吟ひ，居ては嘆き，昼夜辛苦みて，斂めし所を避ること無し。是く作る間に数日を経歴たり。（以下略）（『出雲国風土記』意宇郡安来郷条）

天武３年（674），語臣猪麻呂の娘がワニに襲われ死去した際，娘の遺体に対する父・猪麻呂の行為を記したものである。埋葬後の墓前儀礼との解釈もあるが，「浜の上」に遺体を斂め置くことから葬地での儀礼とは考え難い。浜辺での数日にわたる滞在からすると，「数日」間の殯儀礼を示唆する記述とみられる。「天に号び地に踊り，行きては吟き，居ては嘆」く行為は，歌舞あるいは匍匐，哭泣といった殯儀礼にみられる要素である。本条は７世紀後半における出雲国での殯儀礼の一例としてよいであろう。

和田萃氏は日本における殯儀礼について，東アジア・東南アジア・メラネシアで行われた死者をある期間仮埋葬する複次葬の影響を指摘し，弥生時代後期からの殯の萌芽形態を想定する。そして，日本固有の葬法である殯は，５世紀末から６世紀初めにかけて渡来した人々の葬制の影響を受けて儀礼化したとする（和田 1995）。７世紀前半以前における出雲での殯儀礼の徴証は認められないが，早い時期から支配階層における殯儀礼が行われた可能性は否定できない。

また，殯儀礼の場から葬地へ向う儀礼を示唆する史料として，『常陸国風土記』逸文に黒坂命の葬列の叙述がある。「黒坂命の輸轜車，黒前の山より発ちて日高見の国に到りき。葬具の儀の赤旛と青幡と交雑り飄颺りて，雲とて飛び虹と張り，野を瑩らし路を輝かしき」とある。伝承ではあるが，８世紀前半の常陸国での葬送儀礼の様相を示唆する史料と言えよう。律令には葬列で幡を掲げる規定があり（喪葬令８親王一品条），「葬具の儀の赤旛と青幡」の記述と対応する。葬列に多くの幡を掲げる様相は地方においても同様であったとみられる。また，「野を瑩らし路を輝かしき」の記述について，『万葉集』にみえる志貴親王の葬列（巻２－230）の夜間出発と関連し興味深く，葬送儀礼は夜間での実施が一般的であった可能性がある。

葬地での儀礼に関わる史料も多くないが，殯儀礼と同様に歌舞あるいは匍匐，哭泣などの儀礼が行われたとみられる。「黄泉国神話」の「ヨモツヘグヒ」「コトドワタシ」などもその一つであろう。また，『日本書紀』神代紀に「伊弉冊尊，火神を生みし時，灼せられて神退去りぬ。故に紀伊国熊野の有馬村に葬る。土俗にこの神の魂を祭るは，花の時にまた花を以て祭る。また，鼓吹・幡旗を用い歌

舞して祭る。」（四神出生段第五一書）とある。本条も８世紀における紀伊国での葬地の儀礼を反映し，喪葬の擬似的な表現と理解されよう[(12)]。

以上，記紀成立期の地方における喪葬儀礼の様相を概観した。史料的制約はあるが，地方においても一連の喪葬儀礼が行われたことを確認できる。その儀礼執行の中心的階層は，『風土記』にみえる語臣猪麻呂のような臣姓を帯する階層の氏族，すなわち郡司層であったと考えられる。

（２）「黄泉国訪問神話」にみる喪葬儀礼の様相

前節では，記紀成立期の地方における一連の喪葬儀礼を確認した。「黄泉国神話」の“神話素”となった喪葬儀礼も地方で展開した可能性は高いと言えよう。「黄泉国神話」にみる儀礼をめぐっては，冒頭で見たような先学による多数の議論がある。本節では，中村１号墳にみる儀礼の痕跡に関連すると思われる「ヨモツヘグヒ」と「呪的遁走説話」に注目して考察を進める。

Ａ．「ヨモツヘグヒ」（「黄泉国神話」Ｂ段）

「ヨモツヘグヒ」とは，イザナキがイザナミと「黄泉国」で面会した際，イザナキの帰還の問いかけに対して，「ヨモツヘグヒ」をしてしまったなどと応える場面にみえる[(13)]。その意味は，黄泉国で煮炊きしたものを食べることと解釈される（荻原・鴻巣 1973）。神話学の松村武雄氏は「人間界でないあらゆる世界に於て，その食物を口にする人間は，そのためにそれ等の世界の一成員と成らざるを得ない」（松村 1955）とし，「ヨモツヘグヒ」はイザナミを黄泉国の一成員として確認する通過儀礼と理解される。考古学の上でも，横穴式石室に副葬される土器の様相から喪葬儀礼との関連が指摘され，小林行雄氏は石室内への食物を内容する土器の供献から死後の食物の概念が成立し，その調理具としての竈を加えた儀礼から「ヨモツヘグヒ」的な忌火の概念が成立したと論じる（小林 1949）。また，白石太一郎氏は石室内に埋葬された死者への供献食物に対する禁忌の意味とし（白石 1975），田中良之氏・村上久和氏は埋葬人骨にみられる断体儀礼の様相から，埋葬後十年近くの年月を経て再開口し執行したとする（田中・村上 1994）。

「黄泉国神話」を読み解くと，既に指摘されるように，「ヨモツヘグヒ」の執行によりイザナミが「黄泉国」から現世へ戻ることができない理由となっている。「黄泉国神話」の説話構成上の時間軸でみると，「ヨモツヘグヒ」はイザナミの埋葬後からイザナキの「黄泉国」訪問以前に執行された儀礼として位置付けられる。すなわち，「ヨモツヘグヒ」の“神話素”は，考古学的事象から指摘される横穴式石室での埋葬時もしくは埋葬後に行われた食物供献儀礼とみる方が妥当であろう。ただし，イザナミは「黄泉国」を訪れたイザナキに対して，「ヨモツヘグヒ」を執行しつつも現世に戻るために黄泉神と相論すると述べる。したがって，「ヨモツヘグヒ」は必ずしも死を確定する儀礼ではなく，死を確認するための供献儀礼と読みとれるのである。第一義的には埋葬直後の食物供献と考えられるが，追葬や埋葬終了後の儀礼を含めた死者に対する全ての食物供献儀礼を指す語としてよいであろう。そして，平安初期の『日本霊異記』には「ゆめ黄竈火物（よもつへもの）をな食ひそ」（中巻第七縁）として，仏教思想とも結合する様相がみられる。記紀成立期にも「ヨモツヘグヒ」は死者への儀礼として捉えられた可能性が高い[(14)]。

Ｂ．「呪的遁走説話」（「黄泉国神話」Ｂ～Ｃ段）

イザナミはイザナキと面会後，黄泉神と現世への帰還を相論するため「殿」の内に入る。イザナミはイザナキに対して，「見てはいけない」との言葉を残すが，神話学ではこれを「見るなの禁」の提示と表現する。イザナキはその提示を犯し，自らの櫛に火を灯してイザナミの様子を見てしまう。その様子はイザナミの身体にウジがたかり雷神を生み出す姿で，それに驚き逃げ帰るイザナキに対してイザナミの追走が始まる。この追走を松村氏は「呪的遁走説話」と定義付ける（松村 1955）。「見るなの禁」とその破綻をモチーフとする神話はアジア・アメリカ大陸・ポリネシアに広く分布し（小島ほか 1994），「黄泉国神話」の当該部分も同様の説話に基づいた可能性がある。

イザナキが自らの櫛に火を灯す場面は，『日本書紀』海宮訪問神話にホホデミノミコトがトヨタマヒメの出産を同様な方法で覗く説話があり興味深い。イザナミはウジたかる姿に，トヨタマヒメは八尋のワニに姿を変え，両者ともに櫛の火による灯りを媒介にして異様な光景を映し出している。『日本書紀』一書第六には「今，世人，夜，一片之火を忌む，又夜，櫛を擲つを忌む，此其縁也。」との注記があり，櫛の火に関わる説話は夜間の「一片之火」に対する禁忌の由来譚が背景にあると考えられる[(15)]。この説話については，「黄泉国神話」の場の明暗をめぐる議論もある。しかしながら，櫛の禁忌の由来譚を導く説話として挿入されたもので，場の明暗の根拠となり得るか疑問である。後段の「呪的遁走説話」にもあるように，櫛は異態を表出する媒介や呪具としての機能を有していたとみられる。生－死の境界に位置する喪葬儀礼の場で櫛が用いられた説話とみることができよう。

そして，「見るなの禁」の破綻で，イザナミによる追走が始まる。「呪的遁走説話」も，「見るなの禁」と同様に世界各地に分布する説話である（松村 1955）。当該部分は，『日本書紀』一書第六では（ａ）〈ウジがたかる→ヨモツシコメ・ヨモツヒサメの追走→【黒縵→蒲子（エビカズラ）】・【櫛→タケノコ】【放尿→大川】の化成〉とし，『日本書紀』一書第九では（ｂ）〈雷が成る→雷の追走→桃の実の投射〉とする説話で，『古事記』は両者の説話を組み合わせて構成する。「呪的遁走説話」は本来的に複数の説話から構成され，『古事記』はそれらを体系的にまとめた可能性が高いといえる（平野 2003）。

それでは，「呪的遁走説話」にも表れるものにはどのような意味が込められているのであろうか。まず（ａ）については，櫛をめぐる行為が注目される。先述のように，喪葬の場で呪具として櫛が用いられた由来譚が説話の背景にあると考えられる。特に櫛の投擲でタケノコが化成する点においては，『日本書紀』海宮訪問神話（一書第一）に塩土老翁が櫛を地面に投じて竹林が化成する類似の説話もある。奈良時代以前の遺跡から出土する櫛には竹製のものが多く，地下茎から何本も生える形状が櫛と類似することからしても，櫛とタケノコ（竹）に関わる共通の観念が背景にみられる[(16)]。平安時代以降，小竹の枝で天皇や中宮らの背丈を測り，その小竹を形代である荒世・和世の御服にあて罪穢を移す祓として，「節折（よおり）」と呼ばれる儀式が宮中で行われた。この儀式の遡源は不明であるが，小竹が祓の呪具として用いられたことは注目されよう。

さらに，黒鬘を投じて「蒲子」「蒲陶」（エビカズラ≒ブドウ）に化成する説話もみえる。ブドウについては，７世紀末～８世紀初めにかけて，高松塚古墳（奈良県明日香村）や杣之内火葬墓（同県天理市）などの墳墓への副葬や法隆寺五重塔の鎮壇具などに用いられた海獣葡萄鏡との関連が注目される（勝部 1996）。海獣葡萄鏡は唐代前半期を中心に造られた鏡背に「葡萄唐草文」を配する鏡で，国内での

出土例には舶載と仿製のものが知られる。「葡萄唐草文」は同時期に薬師寺薬師如来像台座や岡寺出土の軒平瓦などにもみられ，西域伝来の文様として多産性・豊穣の象徴とともに呪的なモチーフとして捉えられたとみられる。本説話は記紀成立期における「葡萄唐草文」をめぐる呪力の由来譚として挿入されたと考えることができ，喪葬や祭祀の場での海獣葡萄鏡などの使用を背景としたものであろう(17)。

このように，（a）に登場する品々は，記紀成立期に多産の象徴とともに呪的な力を有するものとして捉えられたものである。さらに，その説話構成も食物を追走者に食べさせて足を止めるモチーフであることが注目される。すなわち，８世紀に執行された道饗祭のモチーフと共通するのである。道饗祭とは，鬼魅・疫神を路上で食物を食べさせることにより退去させる儀式である（『令義解』神祇令天神地祇条）。天平７年（735）に大宰府管内で疫病が流行した際，長門国以西の諸国に道饗祭祀の執行が命じられ（『続日本紀』天平７年８月乙未条），地方での実施も確認される。「黄泉国神話」Ｄ段後半部には道饗祭に関わる神名がみられ，「黄泉国神話」は「道饗祭の説明神話」との指摘（広畑 1973）もある。また，平安初期の『日本霊異記』に「時に偉シク百味を備けて，門の左右に祭り，疫神を賂ひて饗す。」（中巻第二十五縁）として，門前に食物を土器に盛り，疫神に対して饗応する祭祀の叙述がある。その祭祀を示唆する木簡や墨書土器が各地で確認されており(18)，領域の境界祭祀として食物を鬼魅・疫神に食べさせる行為は広く行われた可能性が高い。このように，生－死の境界での祭祀・習俗の由来譚として，８世紀における境界祭祀に関わる説話が組み込まれたと考えられよう(19)。

次に（b）は，追走する雷神に対して，剣を後ろ手に振りつつ逃げ，黄泉比良坂の坂本で桃の子三つを投げ退去させる説話である。この説話に登場する雷神とは，イザナキがイザナミを覗き見た際にその身体の各所から化成した雷神である。そのうちの「土雷」「伏雷」については，蔡邕の『月令章句』（２世紀成立）の記述から，雷が一年のある期間には土中に伏在するという観念・思想によったとされる（福島 2002）。また，李肇の『唐国史補』（９世紀成立）に「雷公，秋冬は則ち地中に伏し人を取りて之を食す」とあり，『史記』（前１世紀成立）にも雷が秋冬に地中にあるとすることから，雷神の追走は雷が動き出す春夏へ季節が移り変わっていくことを示唆する（烏谷 2007）。そして，その雷に対して桃の実の投擲が行われる。横穴式石室での桃核の出土例から，「黄泉国神話」との関連が早くから指摘される説話である。桃崎祐輔氏は，当該部分は「木」気の雷を「金」気の呪物である剣や桃によって撃退するという陰陽五行説の哲理の介在を指摘する（桃崎 1990）。さらに，桃核の出土古墳には６世紀末～７世紀初めのものが多く，推古朝における百済からの造塔儀礼や中国的礼制の組織的導入などを背景として方相氏が明確に意識され，横穴式石室での桃果の投擲が行われたとする（桃崎 2011）。すなわち，（b）は陰陽五行説などの思想的背景から，地中で人を食べると観念された「雷」を「桃」により撃退するというモチーフがみられるのである。『日本書紀』一書第九には，「此，桃を用いて鬼を避（はら）う縁なり。」とする注がある。７世紀後半～８世紀初めの間に再建された法隆寺金堂柱へ辟雷呪として桃が封入されており（桃崎 1990），記紀成立期にも桃をめぐる思想が存在したことは確かめられる。（b）に登場する品々も（a）と同様に，記紀成立期に呪的な力を有するものとして捉えられたものである。

以上，「ヨモツヘグヒ」「呪的遁走説話」について概観したが，いずれも７世紀後半～８世紀初めにおける辟邪に関わる祭祀行為や呪具の由来譚が多く含まれ，それらを巧みに説話化したものと捉えることができる。

（３）「黄泉国訪問神話」と中村１号墳にみる「再生阻止儀礼」

「黄泉国神話」の「ヨモツヘグヒ」「呪的遁走説話」には，７世紀後半～８世紀初めにおける喪葬儀礼や祓の呪具の由来譚が多分に含まれると考える。しかしながら，「ヨモツヘグヒ」に相当する食物供献儀礼や「呪的遁走説話」にみえる桃果の投擲など，横穴式石室における喪葬儀礼として考古学的事例との関係が指摘される説話もある。さらに，「呪的遁走説話」の追走者に対する食物饗応は，横穴式石室における境界祭祀，すなわち閉塞儀礼を示唆する可能性もある。したがって，「黄泉国神話」には多分に記紀編纂時の思想が介在しつつも、その“神話素”の原形には記紀成立期よりさらに遡る横穴式石室での儀礼があると考える。このような解釈は、二律背反したものとなるが，『古事記』序にみえる編纂の意図をふまえると、必ずしも矛盾した解釈ではない。第二節でみたように，一連の喪葬儀礼が地方の郡司層にも認められ，「黄泉国神話」の“神話素”となった横穴式石室での喪葬儀礼が地方でも同様に執行された可能性も考えられる。

それでは，中村１号墳で確認される「再生阻止儀礼」は，「黄泉国神話」と比してどのように位置付けることができるのか。

中村１号墳の「再生阻止儀礼」とは，埋葬後に石室内へ２度にわたって進入し，副葬品の毀損，石棺の破壊を伴う行為である。田中良之氏は，古墳時代後期にみられる埋葬終了後しばらく期間を経て行われる毀損行為が「社会的死」の認定の儀礼であり，先代家長の「社会的死」の認定を遅らせることで，新家長の優位性を保ち，先代家長の霊が新家長を守護する意味をもつものであったとする。そして，その「社会的死」の認定の儀礼が「ヨモツヘグヒ」などの「黄泉国神話」に記される儀礼であったと指摘する（田中 2008）。

中村１号墳の「再生阻止儀礼」と「黄泉国神話」の構成を比較すると，埋葬終了後の再進入であることがまず注目される。すなわち，『古事記』の「黄泉国神話」も埋葬終了後の儀礼として叙述されるのである。「黄泉国神話」は埋葬時の様相として捉える論考も多いが，『古事記』ではＡイザナミの死と埋葬，Ｂイザナキの「黄泉国」訪問とイザナミの「見るなの禁」提示・破綻，Ｃイザナキの遁走，Ｄ「コトドワタシ」の説話構成をとる[20]。また『古事記』における葬地の表記は，本例を含めて６例ある。イザナミの埋葬がその初見である。葬地を示す記事は，被葬者が神号表記の場合は「葬○○山」，皇后などの令制に基く表記の場合は「葬○○陵」とし，記述の際の基準があったとみられる。葬地の記載は『古事記』では主要な項目の一つであって，「黄泉国神話」の冒頭に葬地が明記されることは編者の意図による可能性がある。

「黄泉国神話」が埋葬終了後の場面を叙述した可能性があることは，次の点からも窺える。イザナミがイザナキを迎える場面で，「殿の縢戸（とざしど）より出で向かへし時」とある（「黄泉国神話」Ｂ段下線部①）。勝俣隆氏は，『古事記』の用例から「自（より）」とは内と外という異なる環境の狭い出入り口を通過する場合に使われ，「縢戸」とは「閉じている戸」「閉ざしてある戸」の意と指摘する（勝俣 2006）。「閉じ

ている戸」から出迎えることは現実的には矛盾した記述で，身体から遊離したイザナミの魂との対話を示唆する記述との解釈も可能である。したがって，説話の場を横穴式石室とすると，石室に進入する際に既に閉じられた閉塞石の前で行われた被葬者との対話の儀式を暗に示した記述との可能性も考えられる。この場面は「黄泉国神話」冒頭の記事として，説話の原形の舞台が埋葬終了後の横穴式石室であったことを示唆するものである。

このように考えると，「黄泉国神話」は埋葬終了後の儀礼として，中村1号墳の「再生阻止儀礼」と符合することが分かる。「呪的遁走説話」は記紀成立期の祭祀行為を多く含むと考えるが，横穴式石室における喪葬儀礼がその原形となった可能性が高い。その行為は境界祭祀における辟邪の思想に伴うもので，鬼魅・疫神の領域への進入を防ぐものである。中村1号墳の儀礼にも，運動機能をもつ馬具の毀損といった死者を動けなくして封じ込める意図を持った行為がみられる。中村1号墳にみられる儀礼には，生－死の境界の喪葬儀礼として，「呪的遁走説話」と共通する思想的背景をみることができよう[21]。

それでは，埋葬終了後の儀礼には，どのような意義が含まれていたのであろうか。

この点について注目したいのが，『古事記』記述上でのイザナキ・イザナミの敬称変化である。すなわち，イザナキ・イザナミには神・命・大神（大御神）の三種類の敬称が付属するが，「黄泉国神話」の後に初めて大神の敬称を伴ってみえるのである。同様な変化は，「根堅州国」をオオクニヌシが訪問する説話においても，訪問後に「大穴牟遅神」から「大国主神」への呼称変化が認められる。このように考えると，「黄泉国神話」には，喪葬の場における儀礼の説話化のみでなく，訪問する人物の社会的立場を確立するための通過儀礼としてのモチーフも読み取ることができるのである。田中良之氏は埋葬終了後の儀礼について，先代家長の「社会的死」の認定と新家長の優位性を保持するための儀礼と位置付ける。「呪的遁走説話」にみる祭祀を領域（現世）への進入阻止として，被葬者の死の認定と位置付けるならば，田中氏の指摘と「黄泉国神話」の解釈とは符合すると言えよう。
埋葬終了後の喪葬儀礼の一般化は今後の課題ともなるが，『古事記』「黄泉国神話」は中村1号墳にみられる埋葬終了後の喪葬儀礼を認識した上で説話構成を図ったとの想定も可能であろう。

最後に，課題として問題点を一つあげておきたい。それは，イザナミの死因との関係である。『古事記』はイザナミの死因を出産によるものとする。田中良之氏は，縄文～古墳時代前半期の事例として，戦闘の犠牲者や妊娠後期～出産のトラブルによる死者などの死の状況は，残された集団成員にとって害をなす怖れがあったため断体儀礼が行われたとする（田中 2008）。すなわち，『古事記』「黄泉国神話」は，出産に伴う死者への断体儀礼がモチーフとなった可能性も残している。

「黄泉国神話」は喪葬の場での祭祀・習俗を巧みに説話化したものとみられ，埋葬終了後の儀礼としても様々な意味を含む可能性はある。さらに考古学的な検討や民俗事例をふまえて，その“神話素”あるいはその原形を追究することが求められよう。

５　おわりに

『古事記』「黄泉国神話」を中心に，中村１号墳の喪葬儀礼について考察した。「黄泉国神話」は生－死の境界となる喪葬の場での祭祀・習俗を巧みに説話化したものと考えられる。その説話には，記紀成立期に喪葬の場で用いられた辟邪の具の由来譚などが多分に含まれ，その説話の原形の一つとして古墳時代後期の横穴式石室における喪葬儀礼が相当する可能性を指摘した。その上で，中村１号墳にみられる埋葬終了後の儀礼について，その説話構成から「黄泉国神話」と類似することを明らかにし，その意義として，石室への訪問者の社会的立場を確立するための通過儀礼である可能性を示した。

従来，記紀の「黄泉国神話」をめぐっては細部の行為に関する論説は多くみられるが，説話構成をふまえた上での考察は多くなかった。しかしながら，物語的要素を多く含む文学作品としての側面をもつ『古事記』ではあるが，編者の意図をふまえた観点は重要である。『古事記』について，矢嶋泉氏は透徹した論理性に貫かれた書物と評価する（矢嶋 2008）。考古学の立場からの比定においても，史料の断片的な議論に終始するのではなく，的確な史料への理解が求められよう。

（出雲弥生の森博物館　髙橋　周）

註

（１）このほか，奈良時代あるいは古墳時代以前の死生観や葬送儀礼をめぐっては、国文学・考古学・民俗学などで多くの先行研究がある。本稿では「黄泉国」にふれたものを中心に研究史をまとめた。

（２）イザナキによる禊祓の説話では，「黄泉国」を「穢繁き国」と表現する。また，『古事記』序では「黄泉国神話」を「幽顕に出入」と表現しており，編者は「黄泉国」と現世とを対立的に捉えていたことが分かる。穢に対する浄への意識の高まりは７世紀後半の天武朝とされ（新川 1999），このことからしても，「黄泉国」のイメージは当該期の思想を反映させたものと言える。

（３）「日」とは天照大御神，「月」とは月読命のこと。『古事記』序に「日月目を洗ふに彰れ」とある。

（４）『古事記』序に「辞理の見えがたきは，注を以て明にし，意況の解り易きは，更に注せず」とあるように，編纂時の７世紀後半～８世紀における価値観が介在した可能性が高い。したがって，「黄泉国神話」にみえる説話についても，単純に祭祀・習俗の古相を示唆するものとすることはできない。

（５）「黄泉国神話」の舞台として横穴式石室に比定する説においても，Ｃ「黄泉比良坂」での逃亡の叙述が“下り坂”であることを示唆し，「黄泉国」は現世から上部に位置するなど，矛盾する点も多い。

（６）六国史における「黄泉」引用の史料として，他に『日本書紀』大化５年（649）３月己巳条，『日本三代実録』貞観７年（865）７月 19 日条〈願文〉，『同』貞観 14 年（872）10 月 16 日条〈勅答〉がある。『日本三代実録』の例は漢籍からの引用の可能性もある。このほか，『万葉集』巻９－ 1804・1809 の菟原処女の説話を素材とする歌にみえる。『延喜式』祝詞・鎮火祭には「与美津枚坂」とある。

（７）「ヨミ」の語源については「闇（ヤミ）」とする説のほか，「生命の神」の意とする説（中西 1991）もある。

（８）「黄泉」と山上他界観念との関係については，北條芳隆氏が横穴式石室比定説を批判した上で，里の世界を現実の社会が展開する「人界」であり，山の世界は死者たちが埋葬される「他界」であると観念されるようになっ

たと指摘する（北條 2009）。

（9）徳島県・観音寺遺跡で7世紀第2四半期の論語木簡が出土している。和田氏は論語木簡を粟国造の居館で記されたものとし，周辺に分布する渡来系氏族との関連を想定する。氏は6世紀後半に粟国造の領域内への渡来系氏族の直接的な移住があったとする（和田 2010）。

（10）従来の諸説には記紀の記述比較から「原黄泉神話」を考察する方法がみられるが，『古事記』と『日本書紀』の成立の背景あるいは理念の相違を考えると（矢嶋 2008），同様に扱うことには注意を払うべきである。記紀の説話については個別のモチーフを検討すべきで，「原黄泉神話」の想定は方法論的に無理がある。

（11）具体的な用例は註（6）参照。『続日本紀』以降の正史には類似の表現として，「泉途」（『続日本紀』延暦10年7月己卯条），「泉壌」（『日本後紀』逸文延暦13年10月庚戌条ほか），「泉扉」（『日本後紀』逸文天長9年3月癸丑条）などがある。

（12）「花の時にまた花を以て祭る」との記述が具体的にどの季節を示唆するものかは明確ではない。しかしながら，「黄泉国神話」の呪的遁走説話においても，「桃」「タケノコ」などの季節感をもつ語句がみられるのは興味深い。

（13）「ヨモツヘグヒ」は，『古事記』で「黄泉之竈」，『日本書紀』で「飡泉之竈」（一書第六）「飡泉之竈，此云誉母都俳遇比」（一書第七）と記される。

（14）「ヨモツヘグヒ」をめぐっては，調理に使用した黄泉国の火の禁忌との関係性を指摘した小林行雄氏の説が多くの支持を受けるが，記紀において，そのような記述はないことを確認しておきたい。横穴式石室における炊飯具形土製品や土器の出土との関連も注目されるが，本文中で指摘するように，「黄泉」「泉」の用字は漢籍の影響によるものであり，「竈」がはたして実態を示唆するものであったのかは疑問とせざるを得ない。

（15）夜間の火による覗き見の説話として，東晋の干宝による『捜神記』（4世紀ごろ成立）巻16に，「我，人と同じからず，火を以て我を照らすことなかれ」と言う妻の様子を夜間に覗き見たところ，下半身が枯骨と化していたとする話が収載され（松前 1960），中国の思想の影響を受けた禁忌とみられる。

（16）現在の民俗事例ではあるが，高知県西祖谷村の喪葬儀礼習俗で「投げ櫛」と称する儀礼が報告される（近藤 2007）。「投げ櫛」とは，墓地での埋葬が終わって葬家に帰る際に死穢を祓うための儀礼で，櫛で髪を梳かして後ろ手で箕の中に投げ込む行為を中心とする。『古事記』「呪的遁走説話」には，櫛を用いた後に十拳の剣を後ろ手に振る行為が記され，「遁走説話」と共通する点が認められる。8世紀の喪葬儀礼との直接的な関連を認めることには慎重でなければならないが，注目される事例である。

（17）5世紀の導水施設として殯所の可能性も指摘される，南郷大東遺跡（奈良県御所市）では桃核とともにブドウ属種子が多く検出される（金原ほか 2004）。祭祀にともなうものかは更に検討を要するが，注目すべき事例である。

（18）その一例として，兵庫県朝来市柴遺跡出土木簡がある（平川 2009）。

（19）『日本書紀』一書第六では，「コトドワタシ」に際して「岐神」「長道磐神」「煩神」「開齧神」「道敷神」の神名がみえ，いわゆる千引きの岩を「泉門塞之大神」あるいは「道返大神」とする。また，『同』一書第九にはイザナキが道辺の大桃の樹下に隠れて桃の実を雷神に投擲し，杖を投じて「此れより以て還らん」と言う。この杖を「岐神」として，元は「来名戸之祖神」とする。『古事記』ではイザナキの禊の際に対応する神名がみられるが，「コトドワタシ」の際に「道敷大神」「道反大神」の名がみえる。広畑輔雄氏は「道饗祭の説明神話」である要素も考えられるとする（広畑 1973）。

(20) 和田晴吾氏はこの説話構成に注目し，「黄泉国神話」は決して殯の場ではなく，あくまで黄泉国のできごととして理解すべきとする。この指摘から，氏は「黄泉国神話」の舞台装置を九州系横穴式石室と捉える方向へ論を展開する（和田 2008）。

(21) この場合，被葬者あるいは付随する穢れに対する現世への進入を防ぐことを意識する。一方で，被葬者を外界の鬼魅から守る意識を持った祭祀の存在も認められる。この点については，今後の課題とすべきところが多い。

補註

『日本書紀』一書第六・第九の「コトドワタシ」の場面で，「此(こ)れよりな過ぎそ」などの言葉とともに投じられる杖について，平川南氏は，岐神(ふなとのかみ)を祭った道饗祭において，陽物形木製品を道に立て邪悪なものの進入をくい止めようとした祭祀行為に通ずるとする。氏は道饗祭について，六世紀の百済の王都において行われた祭祀形態が七世紀後半の日本における都城制の導入に伴って実施された外来の呪術的要素を強く供えたものとする（平川 2009）。

参考文献

阿部真司 1986「黄泉比良坂考－『古事記』のサカを中心に－」『高知医科大学一般教育紀要』 1

池本正明・福岡猛志 2002「下懸遺跡出土の木簡」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第 3 号

井手　至 1960「所謂遠称の指示語ヲチヲトの性格－上古における他界観念との関連において－」『国語と国文学』37 － 8

稲田奈津子 2000「日本古代喪葬儀礼の特質－喪葬令からみた天皇と氏－」『史学雑誌』109 － 9

江頭　廣 1980「黄泉について－左傳民俗考　その一－」池田末利博士古稀記念事業会『東洋學論集』

上田正昭 1970「葬送儀礼と他界観念」『解釈と鑑賞』35 － 8

岡田裕香 2008「古事記における死の表現－黄泉国訪問の文脈を中心に－」『日本文学論究』67

勝部明生 1996『海獣葡萄鏡の研究』臨川書店

勝俣　隆 2006「伊邪那岐命の黄泉国訪問譚の解釈－黄泉国の存在位置と黄泉比良坂の位置関係を中心に－」『長崎大学教育学部紀要－人文科学－』72

金子武雄 1963『古事記神話の構成』桜楓社

金原正明・金原正子・岡山邦子 2004「南郷大東遺跡における遺体分析による検討」『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所報告書第 74 冊，奈良県立橿原考古学研究所

烏谷知子 2007「黄泉国訪問神話の構成」『学苑・日本文学紀要』795

神野志隆光 1983「「黄泉国」をめぐって－『古事記』の神話的世界－」『風俗』22 － 3

後藤守一 1938「上代における遺物遺跡」『上代日本文学講座』春陽堂

小林行雄 1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』 2

西郷信綱 1972『古代人と夢』平凡社

西條　勉 1997「黄泉 / ヨモ（ヨミ）－漢語に隠される和語の世界－」『東アジアの古代文化』91

白石太一郎 1975「ことどわたし考－横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって－」『橿原考古学研究所論集』末永雅雄編　吉川弘文館

新川登亀男 1999『道教をめぐる攻防』大修館書店

菅野雅雄 1973『古事記説話の研究』桜楓社

高橋健自 1914「喜田博士の『上古の陵墓』を読む」『考古学雑誌』 4 － 7

辰巳和弘 1996『「黄泉の国」の考古学』講談社

田中良之・村上久和 1994「墓室内飲食物供献と死の認定」『九州文化史研究所紀要』39

田中良之 2008「断体儀礼考」『九州と東アジアの考古学－九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集　上』

次田　潤 1924『古事記新講』明治書院

寺川眞知夫 1988「黄泉国と根之堅州国」『同志社女子大学学術研究年報』39 － 4

東野治之 1977「日本古代の墓誌」『日本古代の墓誌』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館

中西　進 1991『神話力－日本神話を創造するもの』桜楓社

平川　南 2009「兵庫県朝来市山東町　柴遺跡出土木簡」『柴遺跡』兵庫県教育委員会

平川　南 2009「道祖神信仰の源流－古代の道の祭祀と陽物型木製品から－」『東アジア古代出土文字資料の研究』工藤元男・李成市編　雄山閣

平鍋佐代子 1996『古事記』における「黄泉国」についての考察」『古典文学研究』 5

平野あや 2003「『日本書紀』の「一書」に関する一考察－黄泉国訪問の記述を中心に－」『東洋大学大学院紀要』40

広畑輔雄 1973「黄泉訪問神話」『民族学研究』38 － 1

北條芳隆 2009「「大和」原風景の誕生－倭王権が描いた交差宇宙軸－」『死の機能　前方後円墳とは何か』岩田書院

三品彰英 1970『日本神話論』平凡社

目黒礼子 1999「黄泉国の位置－黄泉比良坂を中心に－」『群馬県立女子大学国文学研究』19

桃崎祐輔 2011「横穴式石室から出土する桃核と黄泉国神話」『古文化談叢』65

森　浩一 1993『日本神話の考古学』朝日新聞出版

八重樫直比古 2001「「人臣」と氏寺」『東アジアの古代文化』106

矢嶋　泉 2008『古事記の歴史意識』吉川弘文館

和田　萃 1969「殯の基礎的考察」『史林』52 － 5

和田　萃 1995「飛鳥・奈良時代の喪葬儀礼」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰　上』塙書房

和田　萃 2010「観音寺木簡の歴史的意義」徳島県教育委員会『観音寺遺跡Ⅲ』

和田晴吾 2008「黄泉国と横穴式石室」『吾々の考古学』

第 7 章　総　括

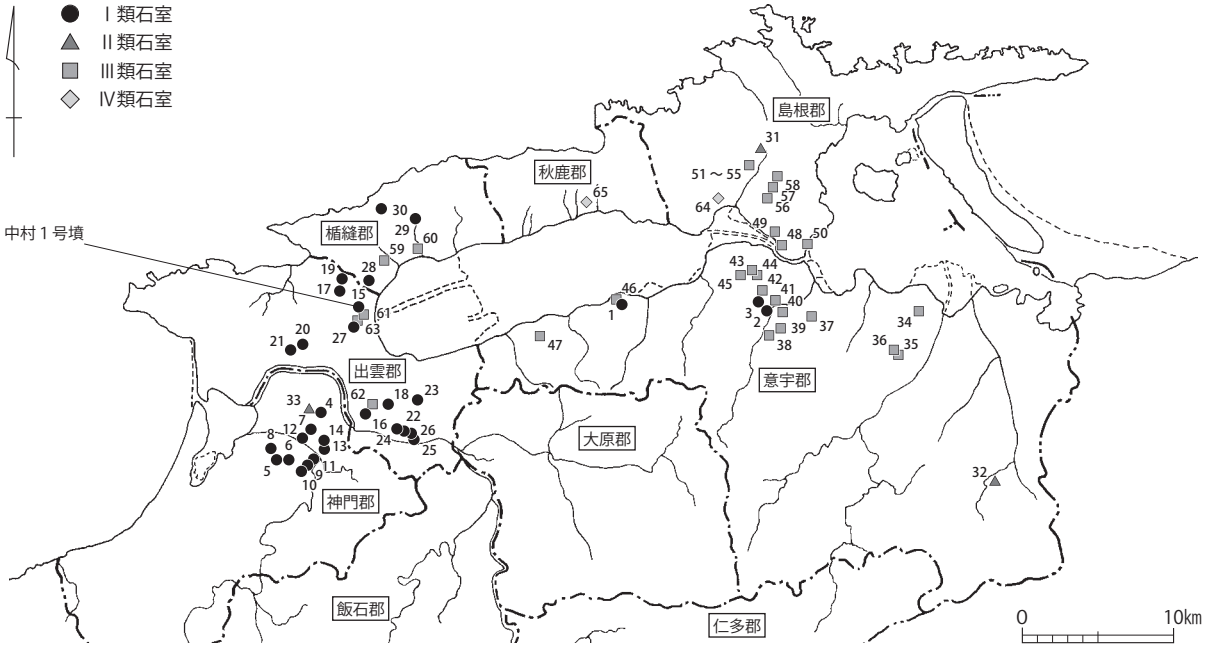
第 1 節　横穴式石室の玄門構造からみた中村 1 号墳

1　はじめに

中村 1 号墳は，横穴式石室玄門の楣石に接する玄室天井石が重機により壊されて発見された。幸いにして，玄門部の構造がよくわかり，特に楣石の巨大さが目立つ。また，石室床面の断割調査によって，袖石は全長の約 3 分の 1 が埋められていることと，袖石を立ててから側壁を積むことがわかった。これにより，横穴式石室における袖石の重要性を改めて認識することができた。

発掘調査で明らかになったこの袖石の重要性から，本稿では玄門部構造の変化に注目して，中村 1 号墳の横穴式石室を出雲の横穴式石室編年に位置付けたいと思う。そして，中村 1 号墳が所在する地域の状況についても検討してみたい。

論を進めるにあたり，出雲の地域区分が重要になってくる。そこで，以下のとおり出雲地域の小地域区分を定義しておきたい。出雲の後期古墳の埋葬施設には，玄門部が両袖の横穴式石室と出雲型石



1　林 43 号墳
2　御崎山古墳
3　岡田山 1 号墳
4　今市大念寺古墳
5　妙蓮寺山古墳
6　放レ山古墳
7　上塩冶築山古墳
8　宝塚古墳
9　刈山 4 号墳
10　刈山 5 号墳
11　小坂古墳
12　上塩冶地蔵山古墳
13　光明寺 2 号墳
14　三田谷 3 号墳
15　中村 1 号墳
16　出西小丸 1 号墳
17　佐佗谷奥古墳
18　外ヶ市古墳
19　口宇賀古墳
20　大前山古墳
21　石臼古墳
22　高野 1 号墳
23　武部西古墳
24　高野 3 号墳
25　布子谷古墳
26　高野 2 号墳
27　大寺 2 号墳
28　山根垣古墳
29　小谷下古墳
30　上石堂平 1 号墳
31　薄井原古墳
32　座王 7 号墳
33　塚山古墳
34　塩津神社古墳
35　飯梨穴神古墳
36　飯梨岩舟古墳
37　栗坪 1 号墳
38　池の尻古墳
39　雨乞山古墳
40　古天神古墳
41　岩屋後古墳
42　団原古墳
43　山代方墳
44　永久宅後古墳
45　向山 1 号項
46　林 8 号墳
47　伊賀見 1 号墳
48　朝酌岩屋古墳
49　朝酌小学校校庭古墳
50　大井向山古墳
51　太田 1 号墳
52　太田 2 号墳
53　太田 3 号墳
54　太田 4 号墳
55　太田 5 号墳
56　西宗寺古項
57　葉佐間古境
58　川原古墳
59　山崎古墳
60　奥屋敷古墳
61　寺山古墳
62　道脇古墳
63　美談神社 2 号墳
64　岡田薬師古墳
65　鍛冶屋谷 3 号墳

＊1 ～ 30 は第 2 表に対応

第 1 図　本稿で扱う主な横穴式石室の分布（1:500,000）

棺式石室やその亜流と考えられる石室が主体をなす。前者は出雲西部に，後者は出雲東部に多く分布していることが分かっている（山陰考古学研究集会 1996）。また，出雲国は，意宇郡・島根郡・秋鹿郡・楯縫郡・出雲郡・神門郡・飯石郡・仁多郡・大原郡の 9 郡からなることが 733 年に編纂された『出雲国風土記』で明らかで，中村 1 号墳の所在する島根県出雲市国富町は，出雲郡にあたる。仁木聡は，先学による 6 世紀末以降の古墳研究の成果をもとに，古墳資料が多い意宇郡・出雲郡・神門郡の状況を的確にまとめている。「出雲国の古墳群を語るには宍道湖東部・中海沿岸部を代表する出雲東部勢力と，宍道湖西部・神戸川下流域の出雲西部勢力の領域形成と，その勢力範囲が重なり合う宍道湖北西岸の楯縫郡と出雲郡東部の勢力の存在が重要である」と指摘した。そして，「出雲東部勢力は意宇郡に，出雲西部勢力は神門郡に移行しているもの」とした（仁木 2010，246 頁）。そこで本稿では，仁木が指摘した 3 地域区分を基に，『出雲国風土記』に記載のある郡を地域単位とし論を進めていきたい。そして，本稿で対象とする地域を，意宇郡・島根郡・秋鹿郡・楯縫郡・出雲郡・神門郡とする(1)。ただし，横穴式石室が盛行する 6 世紀末～ 7 世紀前半に，郡域が明確に分かれていたと考えているわけではない。

2　研究史と問題の所在

（1）　出雲における横穴式石室の研究史

出雲における古墳時代後期の石室墳の研究は，出雲型の石棺式石室を中心に進められてきたと言っても過言ではない。それは，出雲考古学研究会の精力的な測量作業と研究によって刊行された『石棺式石室の研究』に集約されている（出雲考古学研究会編 1987）。研究史についても，石棺式石室を中心に詳細にまとめられている。そこで，本項では，出雲西部における横穴式石室編年を中心に研究史を振り返り，中村 1 号墳を評価する上での問題の所在を明らかにしたい。

出雲西部の横穴式石室研究は，横穴式石室の現況調査から始まる。1826 年に出雲市今市大念寺古墳，1887 年には出雲市上塩冶築山古墳が開口し，それぞれの発見時の状況が伝えられている。その後，1897 年にウイリアム・ガウランドが出雲市に所在する横穴式石室の本格的な実測図を報告（今市大念寺古墳，上塩冶築山古墳，上塩冶地蔵山古墳，半分古墳，塚山古墳），さらに，1919 年に梅原末治が，石室実測図（今市大念寺古墳，上塩冶築山古墳，上塩冶地蔵山古墳，塚山古墳）と墳丘測量図，遺物の実測図を紹介し出雲地方の特殊性を示した（梅原 1919）。その 5 年後，野津左馬之助が島根県内の石室を集成し，写真も掲載した。これにより，県内の石室墳の状況が明らかになった（野津 1924）。

戦後の 1947 年～ 1963 年に山本清らによる出雲市内の古墳の発掘調査（放レ山古墳，上島古墳，出西小丸 1 号墳，大梶古墳，妙蓮寺山古墳）が始まった。この時の発掘調査成果が現在の石室編年における重要な材料となっていて，この発掘調査の開始が研究史上の大きな画期と言えよう。そして，山本は，横穴式石室の型式分類から考えられる地域区分，須恵器からみた古墳の編年を行っている（山本 1953・1956・1964）。特に，横穴式石室の型式から，東西出雲の地域差を明らかにし，「西部地区に後期の最も顕著な古墳の現れることは，このあたりが新たに極めて有力な豪族の根城となった」（山本 1953，431 頁）という考えを示した。

1980 年代になると，横穴式石室研究が活発に行われた。川原和人は，松江市岡田山１号墳および今市大念寺古墳と，上塩冶築山古墳の築造工程の相違を示した（川原 1982）。前者は楣石の架構を挟んで側壁を２度に分けて積み上げているのに対し，後者は側壁を一度に積んだ後，楣石を架構していることを指摘し，前者から後者への変遷を明らかにした。立体構造物である石室の築造工程の差を明らかにした成果は大きい。この川原の築造工程の研究を受け，島根県の九州系横穴式石室を検討したのが小田富士雄である。小田は玄室構造からみて，岡田山１号墳は福岡県日拝塚古墳，松江市御崎山古墳は福岡県王塚古墳と類似すると指摘し，これらの石室の上限を６世紀中頃とした（小田 1986）。

川原による築造工程という重要な視点が，その後の研究において十分に継承されたとは言えない。それは，その後の石室編年研究が，側壁の加工と側壁構成（段数）を重視した分類基準（土生田 1983，西尾・角田 1987・1989）で推し進められたからである。特に，その後に大きな影響を与えているのが角田徳幸と西尾克己の研究である。角田と西尾は出雲西部の横穴式石室を，

１類：割石・自然石を用いるもの

２類：天井石をのぞく各壁に切石と切石積みの技法を用いるもの

３類：各壁を一枚石で構成するもの

に大別し，石室１～３期の石室編年を示した（西尾・角田 1987・1989）。

この頃，出雲考古学研究会により出雲東部に多く分布する石棺式石室の編年も行われ，出雲の東西の石室の平行関係が示された。そして，出雲考古学研究会は石棺式石室の分布や他地域の石室への影響から石棺式石室３期（出雲東部の山代方墳や永久宅後古墳の時期）に意宇中央部が「他地域に対する規制を強め，その地位を卓越し」，出雲西部地域も「独自性を失っていないものの，実質的に意宇の体制に組み込まれたと考えられるのである。ここに至って，後の出雲国となる領域（少なくとも沿岸部においては）がほぼまとめられた」と結論付けた（出雲考古学研究会 1987，260 頁）。

佐藤雄史は，これまであまり検討されてこなかった島根半島西部の横穴式石室を集成し編年を示している（佐藤 1990）。これも，角田・西尾の側壁の加工と構成を重視した分類である。

その後は，御崎山古墳（島根県教委育員会 1996），上塩冶築山古墳（島根県教育委員会 1999），出雲市上石堂平１号墳（平田市教育委員会 2001），出雲市美談神社２号墳（花谷 2008）の詳細な調査報告がなされ，それぞれで出雲における石室の位置付けが行われている。特に大谷晃二は，上石堂平１号墳の報告で角田・西尾や佐藤の出雲西部の石室分類を整理・発展させ編年を行った（大谷 2001）。この大谷の論考も，基本的に側壁の加工と構成によりＡ型～Ｄ型に分類し，それぞれを石室１期～４期に編年するものである。

近年，角田徳幸は山陰における九州系横穴式石室についてまとめ（角田 2007），また，出雲考古学研究会が行った石棺式石室編年の細分を試みている（角田 2008）[(2)]。その中で，東西出雲の関係について，「西部の後期古墳に東部の要素が入りながらも変容され自立性が保持されることは，両者は対立よりもむしろ連携する関係にあったことを示すものと考えることもできよう」と指摘した（角田 2007，77 頁）。

副葬品から古墳の時期を決める研究も進んでいる。大谷晃二は古墳から出土した須恵器を中心に各

器種の詳細な型式分類を行い，それを基に古墳の変遷を明らかにした。そして，装飾大刀と馬具から畿内との平行関係を検討した（大谷 1994）。また，池淵俊一は出雲型子持壺の詳細な型式分類を行い，大谷須恵器編年に対応させつつ，子持壺の編年を行った（池淵 2004）。これにより，子持壺が単独で出土している古墳の時期が限定できるようになったため，石室編年の見直しが必要になってきた。

（2）　研究史の問題と本稿の目的

以上，出雲西部の横穴式石室の編年を中心に研究史をまとめた。川原による築造工程からみた石室の変遷を考えるという重要な視点が早くから出されたが，その後は，側壁の加工・構成を基準とした編年が重視されてきている。第１の問題はこの石室の型式分類にある。この側壁の加工・構成を分類の基準とした編年の中で，最も新しい大谷の分類案（大谷 2001）を例にあげて問題を抽出する。

大谷は出雲西部の横穴式石室をＡ～Ｄ型に整理している。概要を示すと，

Ａ型：割石・自然石を用い，奥壁はほぼ１枚で不足部分は１～２段の石材で補うもの

Ｂ型：天井石を除き切石で，奥壁は１枚。玄室側壁が４～５段積みのＢ１型と，２～４段積みのＢ２型に細分

Ｃ型：天井・各壁が切石の１枚石で構成されるもの

Ｄ型：狭長な玄室平面形で，玄室側壁に複数の石材を用い，玄門立柱石を側壁の内側につくるもの

大谷がＡ～Ｃ型の特徴とする「奥壁１枚，奥壁はほぼ１枚で不足部分を１～２段の石材で補う」という基準は，出雲郡や楯縫郡ではあてはまらないもの（中村１号墳，出雲市大前山古墳，出雲市石臼古墳，出雲市山根垣古墳）がある（第２表⑥奥壁参照）。つまり，奥壁の築造手法には地域性が認められる。また，Ｃ型は，各壁・天井を切石１枚石で構成するものとあるが，出雲市小坂古墳の左側壁は１枚石であるが，右側壁は１枚石ではないのでこの分類基準にあてはまらない。側壁を積む段数においても，小坂古墳のように左右の段数が違うものがあり，型式認定が難しい。以上のように，側壁と奥壁の石を積む段数を分類の基準にすると，例外がいくつかあり，石室の型式認定をする際には曖昧な基準であると言える。また，石材加工についても，石棺式石室は当初から切石が採用されているが，石棺式石室から変容したと考えられるものの中には自然石・割石を積んでいるものがある。このように，石材加工については各地域で変化する可能性があるので，出雲西部で自然石・割石から切石へと全ての地域で同じ変化をたどったとは断定できない。つまり，側壁が自然石・割石であれば，古い特徴をもつとは言えないかもしれない。

したがって，本稿では側壁の加工・構成を最優先の分類基準とはしない。横穴式石室は立体構造物であり，構造的にその変遷を明らかにする必要がある。中村１号墳で明らかになった袖石の重要性と川原和人の指摘した築造工程という視点を踏まえ，玄門構造を分類基準にした石室の変遷を示すことにする。また，新たに玄門部に両袖をもつ石室の編年を示すことで，石棺式石室との関係も再検討し，そして，横穴式石室からみた出雲の地域区分を設定したい。これらの検討から出雲東部と西部の関係が，出雲考古学研究会が指摘したような意宇中央部（出雲東部）が他地域に対する規制を強めた状況であったのか，角田徳幸が指摘したような連携する関係であったのかも検討してみたい。以上のような検討から，出雲東西勢力の実態が明らかになるとともに，中村１号墳の出雲における位置付けがで

第１表　出雲における横穴式石室の実年代比較

石室時期	出雲東部の石棺式石室	角田 2008	大谷 2001	本稿
1期	古天神古墳・伊賀見1号墳	6世紀中葉	6世紀後葉（出雲3期）	6世紀後半
2期a	岩屋後古墳・朝酌岩屋古墳・林8号墳	6世紀後葉	6世紀末～7世紀初頭（出雲4期）	6世後葉～7世紀初頭
2期b	太田2号墳・向山1号墳・飯梨穴神古墳			
3期a	山代方墳・葉佐間古墳	6世紀末～7世紀前葉		7世紀前葉
3期b	永久宅後古墳・雨乞山古墳・飯梨岩舟古墳		7世紀前葉（出雲5期）	

石室時期	出雲西部の横穴式石室	角田・西尾 1989	大谷 2001	本稿
1期	今市大念寺古墳・妙蓮寺山古墳	6世紀中葉～後半	6世紀後半（出雲3期）	6世紀後半
2期	上塩冶築山古墳	6世紀後半～末		6世紀後葉～7世紀初頭
	宝塚古墳		6世紀末～7世紀初頭（出雲４期）	
3期	地蔵山古墳・小坂古墳	6世紀末～7世紀前半		7世紀前葉

きるであろう。

第２の問題は，実年代である。現状で，出雲の古墳時代後期の研究を牽引している角田徳幸と大谷晃二の実年代は微妙に異なっている（第１表）。この差については，当事者の議論が積極的に行われていないため詳細なことは不明であり，また，実年代の問題は出雲の資料のみでは解決できない。本稿では，須恵器や円筒埴輪，装飾大刀，馬具の研究を行っている大谷の年代観を一部修正し，新たな石室編年に合わせて本稿の実年代を示しておくこととしたい。

３　出雲における導入期の横穴式石室

中村１号墳を理解するために，横穴式石室がどのように出雲に導入されたかを確認しておく。本項では川原和人が示した築造工程に注目し，導入期の横穴式石室について評価しておきたい。導入期の横穴式石室の系譜については，小田富士雄（小田 1986）や角田徳幸（角田 1995a・1995b・2008）の研究があるので，改めて触れない。

川原の築造工程の指摘を発展させ以下の分類を提示する。まず，玄門部の構造から横穴式石室をⅠ～Ⅳ類の４つに分類する（第２図）。

Ⅰ類石室：玄門部が両袖のもの（北部九州系）

Ⅱ類石室：玄門部が片袖のもの（畿内系）

Ⅲ類石室：玄門部が刳抜玄門の石棺式石室と呼ばれるもの（中部九州系）

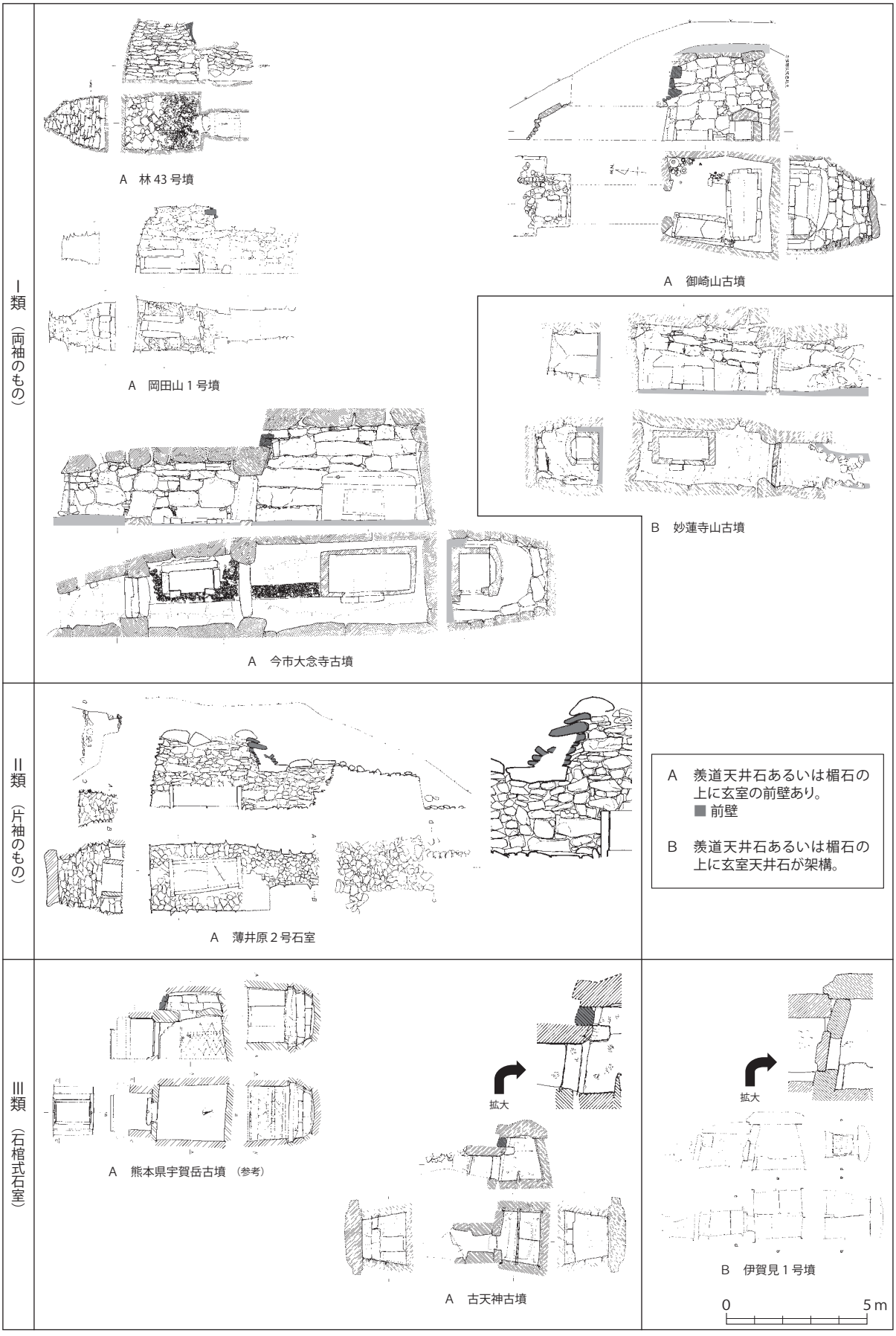
Ⅳ類石室：無袖のもの

これらの玄門部の構造を大まかにＡとＢの２つに細分する。

Ａ類：羨道天井石あるいは楣石の上に玄室の前壁が積まれるもの

Ｂ類：羨道天井石あるいは楣石の上に玄室前壁はなく玄室天井石が直接架構されるもの

ⅠＡ類は松江市林 43 号墳（出雲２期），御崎山古墳（出雲３期），岡田山１号墳（出雲３期），今市大念寺古墳（出雲３期），ⅠＢ類は妙蓮寺山古墳（出雲３期）となる。ⅡＡ類は松江市薄井原古墳１・２号石室（出雲２期）があり，それ以降で玄門部の構造が分かるものはない(3)。ⅢＡ類は松江市古天神古墳（出雲３期）があり，これの祖形と考えられている熊本県宇賀岳古墳と同じ構造をなす。ⅢＢ類



第2図　出雲における導入期の横穴式石室（1：200）

は松江市伊賀見古墳（出雲３期）があげられる。Ⅳ類にはⅣＡ類はない。ⅣＢ類は松江市岡田薬師古墳（出雲３期），松江市鍛冶屋谷３号墳（出雲３期）があげられる。出土須恵器などの副葬品からＡ類→Ｂ類の変遷が考えられる。

Ａ類→Ｂ類への変遷がわかる石室は，神門郡にあるⅠ類石室の今市大念寺古墳（Ａ）→妙蓮寺山古墳（Ｂ）[4]と，意宇郡にあるⅢ類石室の古天神古墳（Ａ）→伊賀見古墳（Ｂ）である。Ａ類は須恵器の出雲４期以降みられない構造であり，導入期の玄門構造と考えられる。Ａ類→Ｂ類の変遷は，玄室の構造を安定させるため玄室上部の構築物を省略した結果，つまり構造簡略化の方向性と考えられる。そして，Ⅰ類石室とⅢ類石室が同じように変化している（Ⅱ類石室も？）ことは重要で，系譜が異なる石室であるが，同じように構造簡略化に向け，初現形態を変容させていったのであろう。

４　出雲におけるⅠ類石室の編年

中村１号墳は前項で分類したⅠ類石室にあたる。そこで，Ⅰ類石室の細分を行い中村１号墳を位置付けることにしたい。竪穴式石室と横穴式石室とが大きく違うところは，玄門と羨道の有無である。横穴式石室は，玄室に開口部つまり玄門を設けることでその部分の構造が弱くなる。この開口部の構築方法によって，石室の安定性や開口部の大きさが変わってくる。そこで，本項では玄門構造を最優先の分類基準とし，それにいくつかの属性を加え編年を組み立てたい。

（１）　玄門構造の分類

Ⅰ類石室の各石室の特徴を７項目に分けて整理したのが第２表である。その項目は①玄門部の構成，②袖石と側壁の関係，③玄室の天井石の枚数，④側壁の石積み段数，⑤側壁の加工，⑥奥壁の石積み段数，⑦奥壁と側壁の組み方である。結論を言えば，①～③は小地域を超えて時期を細分することができる属性である（以下，①と②を合わせて玄門構造と呼ぶ）。また，残りの④～⑦は地域性を表す属性と考えた。したがって，①～③を時期を細分する最優先の分類基準とし，ａ類～ｉ類の型式の設定を行った（第３図）。

ａ類：①立柱状の袖石の上に側壁が積まれ，明確な楣石はない。その上に羨道天井石，さらに前壁が積まれ，玄室天井石が架けられるもの。
②袖石は左右の構造が異なり，単独の石あるいは，複数の石（前壁をなす）で築かれている。
③玄室天井石は３～４枚。（ａ類は林 43 号墳，御崎山古墳）

ｂ類：①袖石の上に，前壁（側壁）が積まれ，その上に明確な楣石（羨道の天井石とは明らかに厚さが異なり区別できる）が架構される。さらに，玄室前壁（側壁）が積まれ，玄室天井石が架けられるもの。
②袖石は一石で立柱状をなす。側壁には挟まれない（ｃ類～ｆ類も同じ，以下省略）。
③玄室天井石は３～４枚。（ｂ類は岡田山１号墳）

ｃ類：①袖石の上に直接，楣石が架構され，さらに前壁を数段積み，玄室天井石が架けられている。
③玄室天井石は４枚。（ｃ類は今市大念寺古墳）

ｄ類：①袖石の上に直接，楣石が架構され，その上に玄室天井石が架けられれるもの。

③玄室天井石は３～４枚。（ｄ類は妙蓮寺山古墳，放レ山古墳，山根垣古墳）。

ｄ’類：①袖石の上に直接，楣石が架構され，その上に玄室から羨道にかけて一つの天井石が架けられるもの。

＊玄室天井と羨道天井がほぼ同じ高さとなっていると考えられる。玄室と羨道の天井がほぼ同じ高さになるのはｅ２類とｆ類からである。したがって，玄室の天井と楣石の関係から，ｄとｆの中間型式としておく（ｄ’類は小谷下古墳，口宇賀古墳？）。

ｅ類：①袖石の上に直接，楣石が架構され，楣石の上には玄室天井石の下面は架けられないもの。つまり，楣石が玄室天井石を支えない構造のもの。

③ｅ類は玄室天井石の枚数でｅ１類とｅ２類に細分できる。

ｅ１類：玄室天井石が複数で２～４枚。（ｅ１類は上塩冶築山古墳，宝塚古墳，中村１号墳）

ｅ２類：玄室天井石が１枚。（ｅ２類は小坂古墳，出西小丸１号墳）

ｆ類：①袖石の上に直接，楣石が架構され，楣石の上には羨道天井石が架けられるもの。

③玄室天井石は１枚。（ｆ類は佐皿谷奥古墳[5]）

ｇ類：①玄門が組合せの刳抜玄門状をなし，その上に直接，玄室天井石が架けられるもの。

②玄門が側壁に挟みこまれるもの。玄門で天井を支える意識が低下し，側壁と玄門で天井石を支えている。

③玄室天井石は１枚。（ｇ類は上塩冶地蔵山古墳）

ｈ類：①袖石はあるが明確な楣石がないもの。袖石の上部は尖っており，袖石によって上部構造を支える形にはなっていない。玄室天井石は側壁の上に直接架けられている。

②袖石は一石で立柱状をなす。袖石の下部は側壁に挟まれていないが，上部は側壁に挟まれる。

③玄室天井石は２枚。（ｈ類は大前山古墳，上石堂平１号墳）

ｉ類：①袖石の上に直接，楣石が架構されるもの（玄門を直方体の石材で組み合わせて表現したものか）。その上に，玄室天井石が架けられる。

②袖石は立柱状をなし，側壁に挟まれる。側壁に袖石を挟み込むための刳り込みがあるものがある。

③玄室天井石は１枚以上。（ｉ類は光明寺２号墳，三田谷３号墳，石臼古墳，大寺２号墳，武部西古墳，高野１～３号墳，布子谷古墳）

（２）　型式組列と時間的関係

先に分類したａ～ｉ類の各型式を須恵器および出雲型子持壺の編年と組み合わせたものが第４表である。第４図は出雲西部の子持壺と石室の関係を示している。出雲４期古相と考えられるＣ１型が上塩冶築山古墳[6]と中村１号墳で出土していることから，石室ｅ１類は出雲４期前半と考えられる。出雲５期と考えられるＣ３型が出西小丸１号墳で出土していることから，石室ｅ２類は出雲５期となる。副葬品が無く，時期の決定ができない型式については，以下に時期決定の根拠を示しておく。ｆ類（佐皿谷奥古墳）は玄門部に玄室天井石が架からないことや，天井石が１枚であることから，出西小丸１号墳のｅ２類に近い構造と考え，出雲５期と考えている。ｅ２類と考えられる小坂古墳についても，

第２表　Ⅰ類石室の特徴

意宇郡

	古墳	①玄門構成	②袖石と側壁	③玄室天井石	④側壁の石積み段数	⑤側壁の加工	⑥奥壁石積み	⑦奥壁と側壁	須恵器（大谷）	子持壺（池淵）	石室（本稿）
1	林 43 号墳	a	イ	不明	16 段	割石	16 段	β	2c期		1期
2	御崎山古墳	a	イ	4 枚	8段	割石	6 段	α	3期		
3	岡田山１号墳	b	ロ	3 枚	11 段	割石	10 段	β	3期		

神門郡

	古墳	①玄門構成	②袖石と側壁	③玄室天井石	④側壁の石積み段数	⑤側壁の加工	⑥奥壁石積み	⑦奥壁と側壁	須恵器（大谷）	子持壺（池淵）	石室（本稿）
4	今市大念寺古墳	c	ロ	4 枚	5～6段	自然石・割石	3段	α			1期
5	妙蓮寺山古墳	d	ロ	3 枚	3～5段	自然石・割石	2段	α	3期		
6	放レ山古墳	d	ロ	3 枚	4～5段	切石	1 段	α？	4期	C1	2期
7	上塩冶築山古墳	e1	ロ	4 枚	4段	切石	1 段	α	3～4期	C1	
8	宝塚古墳	e1	ロ	2 枚	2～4段	切石	1 段	α			
9	刈山４号墳	dかe1	ロ	3 枚？	5段	切石	1段？	α	4期		
10	刈山５号墳	dかe1	ロ	不明	3段	切石	1段？	α			
11	小坂古墳	e2	ロ	1 枚	1 枚石と２段	切石	1 段	α	4～5期		3期
12	上塩冶地蔵山古墳	g	ハ	1 枚	1 段	切石	1 段	α			
13	光明寺２号墳	i	ホ	1 枚	1 段	切石	1 段	α			4 期
14	三田谷３号墳	i	ホ	不明	２段以上？	切石	1 段	α	6b・c期		

出雲郡

	古墳	①玄門構成	②袖石と側壁	③玄室天井石	④側壁の石積み段数	⑤側壁の加工	⑥奥壁石積み	⑦奥壁と側壁	須恵器（大谷）	子持壺（池淵）	石室（本稿）
15	中村１号墳	e1	ロ	2 枚	3段	割石・切石	3段	α	4期	C1	2 期
16	出西小丸１号墳	e2	ロ	1 枚	2段	切石	1 段	α		C3	3期
17	佐叺谷奥古墳	f	ロ	1 枚	2 枚	切石	1 段	α			
18	外ヶ市古墳	d～f	ロ	不明	２段～4段	自然石・切石	1 段	α	4期		2～3期
19	口宇賀古墳	d’？	ロ	2～3枚	4段	自然石・割石	不明	α？			2 期
20	大前山古墳	h	ニ	2 枚	6 段	自然石・割石	2段	α			3 期
21	石臼古墳	i	ホ	不明	２段以上	切石	2段？	α			4 期
22	高野１号墳	i	ホ	1 枚	1 段	切石	1 段	α			
23	武部西古墳	i	ホ	1 枚	2段	切石	1 段	α			
24	高野３号墳	i	ホ	1 枚	1 段と２段	切石	1 段	α			
25	布子谷古墳	i	ホ	1 枚	２段以上	切石	1 段	α			
26	高野２号墳	i	ホ	2 枚	3段	切石	1 段	α			
27	大寺２号墳	i	ホ	不明	2段	切石	1 段	α			

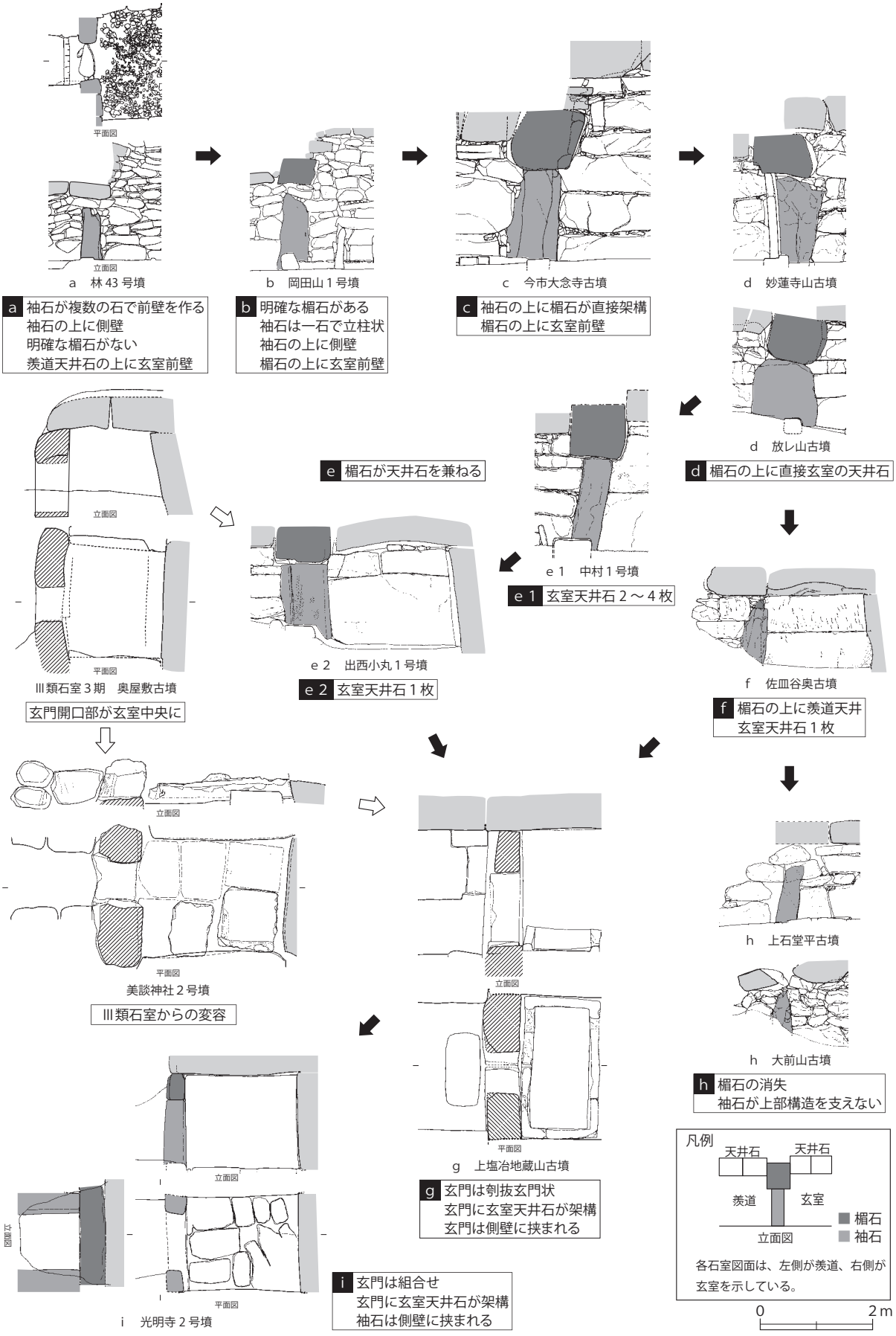
楯縫郡

	古墳	①玄門構成	②袖石と側壁	③玄室天井石	④側壁の石積み段数	⑤側壁の加工	⑥奥壁石積み	⑦奥壁と側壁	須恵器（大谷）	子持壺（池淵）	石室（本稿）
28	山根垣古墳	d	ロ	3 枚	3～4段	切石	3段	α			2 期
29	小谷下古墳	d’	ロ	2～3枚	5段	自然石・割石	1 段	α			2 期
30	上石堂平１号墳	h	ニ	2 枚	3段	切石	1 段	α	6a期		3 期

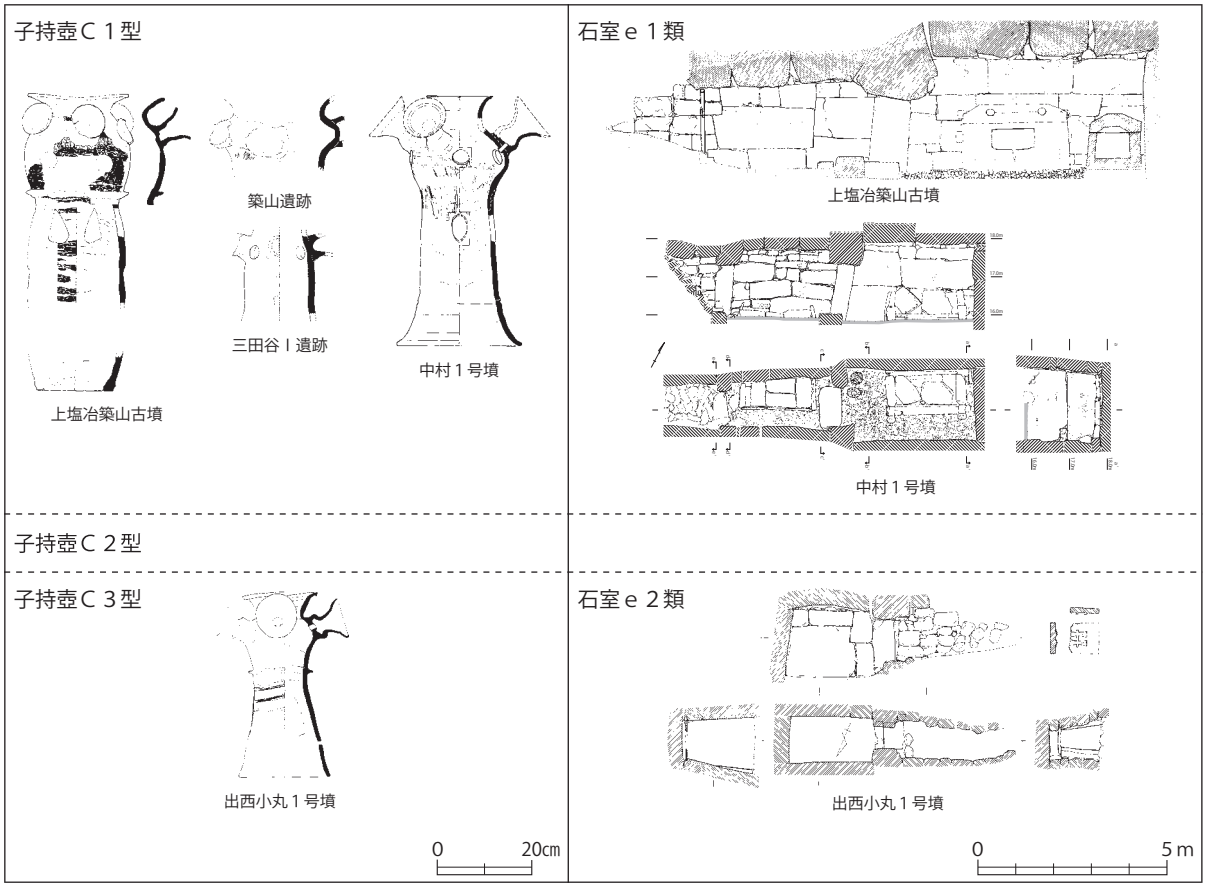
第２表の説明
②イ：袖石は左右の構造が異なり，単独の石あるいは複数の石で築かれている。ロ：袖石は立柱状に一石でたつ。ハ：玄門が組合せの刳抜玄門をなし，側壁に挟みこまれるもの。ニ:立柱状の袖石の下部は単独でたつが，上部は側壁に挟まれるもの。ホ:袖石が側壁に挟まれもるの。
⑦α：両側壁で奥壁を挟むもの。β：その他

第３表　Ⅰ類石室の分類

①玄門の構成	a	b	c	d	e1	e2	f	g	h	i
②袖石と側壁	イ	ロ						ハ	ニ	ホ
③玄室天井石	3～4 枚				2～4枚	1 枚		1枚	2枚	1枚以上
④玄室側壁の石積	8～16 段	11 段	5～6段	3～5段	2～5段	1～2段			3～6段	1～3段
⑤側壁の加工	割石		自然石・割石	自然石・割石・切石	割石・切石	切石			自然石・割石・切石	切石
⑥奥壁石積み段数	6～16 段	10 段	3段	1～3段		1段		1～2段？	1～2段	1～2？段
⑦奥壁と側壁	α・β	β	α							
石室数	2基	1基	1基	3基	3基	2基	1基	1基	1基	9基



第 3 図　Ⅰ類石室の玄門構造の分類（1 ：100）

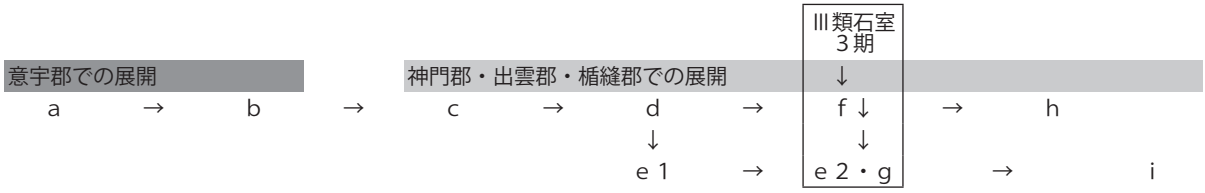


第４図　出雲西部における子持壺の変遷（子持壺１：16，石室１：200）

第４表　出雲における副葬品からみたⅠ類石室の変遷と特徴

Ⅰ類石室の玄門構造分類（本稿）											Ⅲ類石室（角田2008）	土器編年		
石室	特徴	a	b	c	d	e	f	g	h	i		須恵器（大谷）	子持壺（池淵）	畿内
1期	Ⅰ類石室導入期	●										出雲２ｃ期	A・B	TK10
	楣式構造の確立	●	●	●	●						1期	出雲３期		TK43
2期	玄門の独立				●	●1					２ａ期	出雲４期	C１	TK43末～TK209
	石室分布の拡大				○d’	○1					２ｂ期		C２	
3期	Ⅲ類石室の影響 玄門の形骸化					●2	○	○			３ａ期	出雲５期	C３	飛鳥Ⅰ
									●		３ｂ期	出雲６ａ期		
4期	石室の終焉									●	4期	出雲６ｂ・ｃ期		飛鳥Ⅱ

●：遺物により時期ほぼ確定　○：遺物なし



第５図　Ⅰ類石室の型式組列

出雲５期と考えている。小坂古墳からは出雲４期前半～５期の須恵器が出土したと伝えられている。一番古い遺物を初葬と考えるのが普通であるが，玄門構造ｅ２類・ロ類で，玄室天井石１枚など，出西小丸１号墳や佐皿谷奥古墳と型式的に近いと考え，時期も石室形態を重視してそれに近いと考えるのが妥当であろう(7)。ｅ１類の宝塚古墳も出土遺物がないが，同じｅ１類の上塩冶築山古墳や中村１号墳の出雲４期前半以降である。石棺の形態が上塩冶築山古墳石棺より新しい（西尾 1999）ので，出雲４期後半と考えておきたい。ｇ類の上塩冶地蔵山古墳も出土遺物が無く，時期決定が難しい。玄門が側壁に挟まれていることから，ｉ類の出雲６ｂ・ｃ期に近い時期と考えられる。上塩冶地蔵山古墳の特徴の１つである刳抜玄門の類例は，出雲５期の美談神社２号墳（石棺式石室から変容した石室）にもある。また，石棺は西尾克己が指摘しているとおり宝塚古墳石棺と近い型式であるが，より後出の特徴を持っている（西尾 1999）。したがって，出雲５期頃と考えておきたい。ｉ類は９基確認しているが，時期が確定できるものは三田谷３号墳（出雲６ｂ・ｃ期）のみである。また，天井石が残っているものも少ない。今のところ出雲６ｂ・ｃ期と考えておくが，時期が出雲５・６ａ期に遡るものもあろう。新資料の発見に期待したい。

上記の検討から，各型式は一部同時併存しながら型式変化していることがわかる。そして，第５図の型式組列を導きだすことができ，第６・７図に石室編年図を示した。ａ・ｂ類は出雲東部で出現・展開した。出雲西部にはｃ類が登場し(8)，その後，独自にｄ・ｅ１類へと展開する。そして，ｅ２・ｆ・ｇ・ｈ類に変化し，ｉ類で石室の築造が終焉するようである。

（３）　石室編年の設定

以上，玄門構造における型式分類と変遷を示した。次に，これを建築工法の視点で評価してみたい。

柱と梁で床や屋根を支える構造を「架構式構造」や「楣式構造」と呼び，木造住宅では一般的に在来工法といわれている。本稿では，玄門部に注目しているので「楣式構造」と呼ぶ。これに対し柱や梁を使わず壁体で構造物を支える構造を「壁構造」と呼び，木造住宅ではパネル工法や２×４工法などといわれている。

楣式構造とは，柱の上に楣といわれる建材を渡して開口部を作りだし，上部構造を支える構造である。つまり，横穴式石室の楣石は袖石と組み合わせて開口部（門）を作りだし，上部を支える構造と理解できる。一方，壁構造は，大きな楣を支えたり，大きな開口部を設けるには限界があり，高層建築には向かない。工法としてみると，Ⅰ類石室が楣式構造に(9)，Ⅲ類石室が壁構造にあたるであろう。

そこで，Ⅰ類石室に楣式構造がどのように利用されているかみてみたい。ａ類は明確な楣石がなく，楣式構造ができあがっていない。ｂ類で楣石が登場，ｃ・ｄ類になって楣式構造が確立されている。ｅ類は楣石が天井石を支えない構造であり，楣式構造とは呼べない。玄門が独立した段階である。これは玄室の高さを低くしたため，上部構造を支える必要がなくなったからであろう。楣式構造としては退化とも考えられるが，上部を支えるということよりも袖石と楣石で造り出す「門」という意識が強くなった構造と考えられる。また，袖石は側壁の役割は保っている。ｇ・ｉ類は側壁と玄門で玄室天井を支える構造で，袖石が側壁に挟まれていることから，袖石が側壁を兼ねる役割が薄くなっている。楣石もなくなったｈ類もあり，かなりの機能退化が読み取れる。すなわち，玄門部で天井石を支

える機能は薄く，「門」という装飾的な意味合いのみとなった，あるいはかなり形骸化したものといえる。以上のことから，玄門構造に新型式が出現した時期を重視した石室編年を設定すると，石室１期（ａ～ｄ類，出雲２ｃ～３期）は楯式構造の導入から確立期，石室２期（ｅ１類，出雲４期）は玄門の独立期，石室３・４期（ｇ・ｈ・ｉ類，出雲５～６期）は玄門が形骸化した時期，と評価できる。

５　Ⅲ類石室（石棺式石室）の影響

本項では，出雲西部におけるⅢ類石室（石棺式石室）の築造時期を示し，Ⅰ類石室との関係を明らかにしたい。

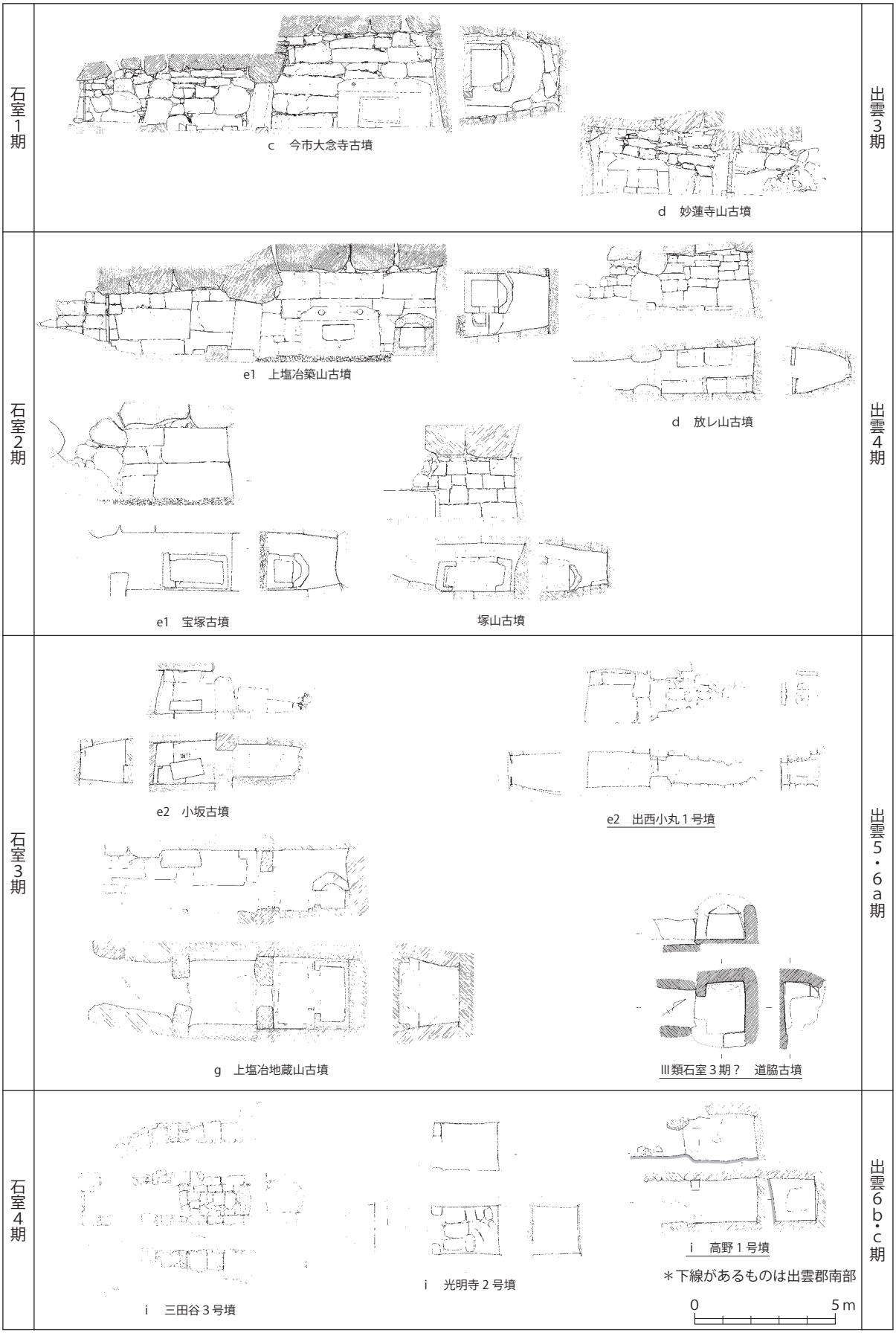
出雲西部にはⅢ類石室が３基確認されている。それは，寺山１号墳（出雲郡），奥屋敷古墳（楯縫郡），山崎古墳（楯縫郡）で（第７図），遺物はいずれの石室でも確認されていない。まず，これら３基の特徴を，出雲考古学研究会が示した石棺式石室の編年と，それを細分した角田徳幸の編年に照合し，築造時期を検討する（第８図）。出雲考古学研究会は，石棺式石室（Ⅲ類石室）を１～４期に編年した。Ⅲ類石室１期（導入期）には古天神古墳と伊賀見古墳がある。この２基はⅢ類石室の典型的なものではない。２期と３期は典型的なⅢ類石室が造られた時期で，その特徴は①刳抜玄門・閉塞用の刳込をもつ，②切石を使用する，③各壁・天井石・床石は１枚石を指向する，④石材の組み合わせは前壁・奥壁で両壁を挟む，と定義された。そして，Ⅲ類石室２期は玄門が石室の左右どちらかに偏り，Ⅲ類石室３期は玄門が石室中軸線上に位置するとした。Ⅲ類石室４期には，典型的なⅢ類石室が畿内の横口式石槨の影響を受けて変容していると指摘した（出雲考古学研究会 1987）。角田はⅢ類石室２期を玄室平面形から，横長長方形の２ａ期と正方形に近い２ｂ期に細分した（角田 2008）。

さて，楯縫郡と出雲郡におけるⅢ類石室の寺山１号墳，奥屋敷古墳，山崎古墳をみると，いずれも①～④の要素をそなえた典型的なⅢ類石室であり，玄門はほぼ石室の中軸線上に位置している。このことから，これら３基は，Ⅲ類石室３期と考えられる[(10)]。須恵器や子持壺の変遷と，Ⅰ類石室およびⅢ類石室との平行関係を第４表と第６表に示した。具体的には，Ⅰ類石室の小坂古墳，上塩冶地蔵山古墳，出西小丸１号墳は出雲５～６ａ期に平行し，そして，Ⅲ類石室の松江市山代方墳，松江市西宗寺古墳が同時期頃と考えておきたい。

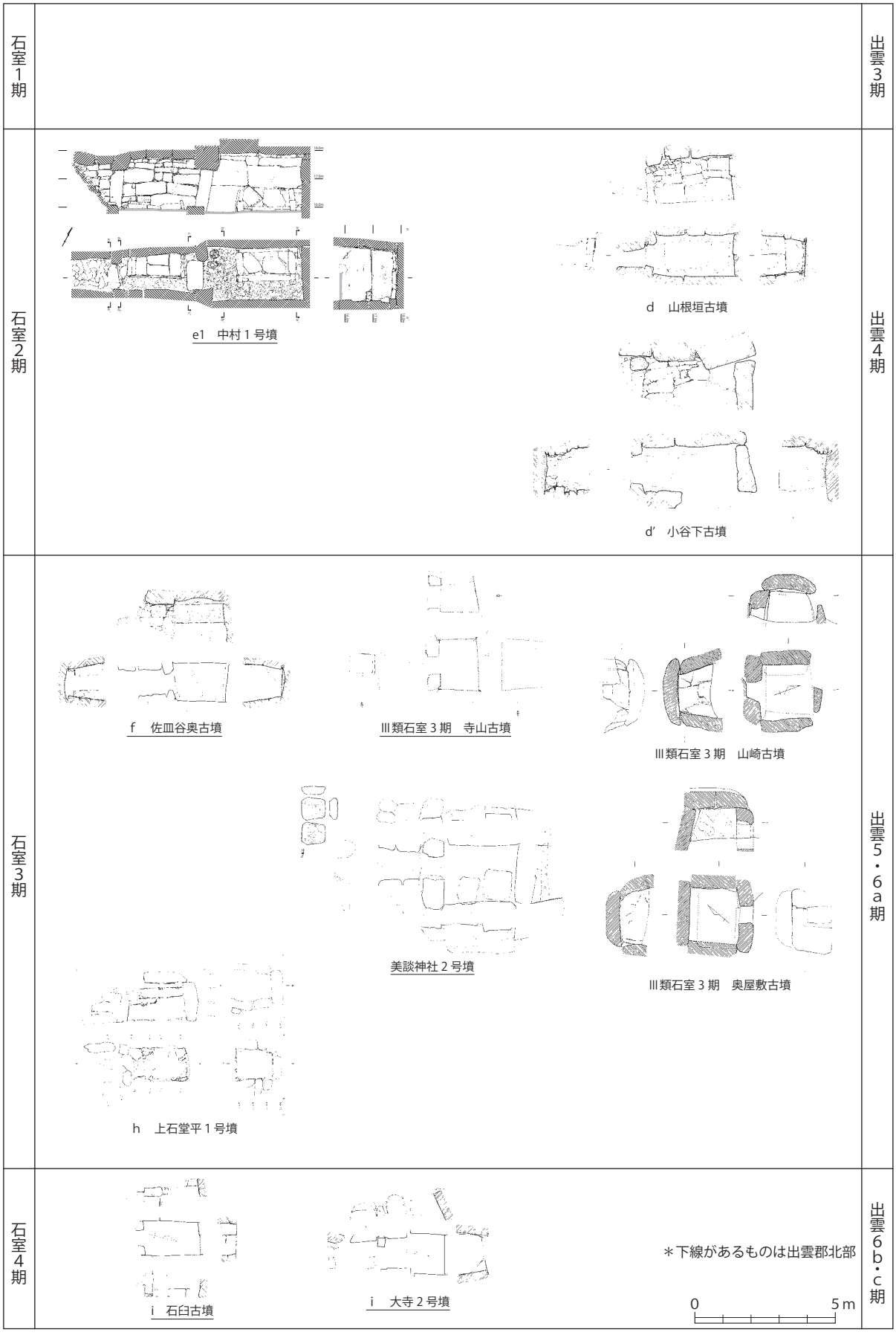
出雲西部においては典型的なⅢ類石室の分布が楯縫郡と出雲郡に限られ，神門郡には分布していない。では，神門郡のⅠ類石室にはⅢ類石室の影響が及んでいないのか検討してみよう。

石室３期のⅠ類石室にはｅ２類・ｆ類・ｇ類・ｈ類がある。ｅ２類・ｆ類・ｇ類に共通してみられる特徴として，玄室天井石が１枚であること，側壁が１枚石やそれに近いことがあげられる。また，ｅ２類の小坂古墳には，袖石に羨道側壁をはめ込むための刳りがある[(11)]。出西小丸１号墳では，袖石に閉塞用の刳込をもち，板石閉塞がある。さらに，ｇ類の上塩冶地蔵山古墳には玄門が刳抜玄門状をなす（閉塞用の刳込はない）ことが上げられる。これらは，Ⅲ類石室の影響と考えられる。

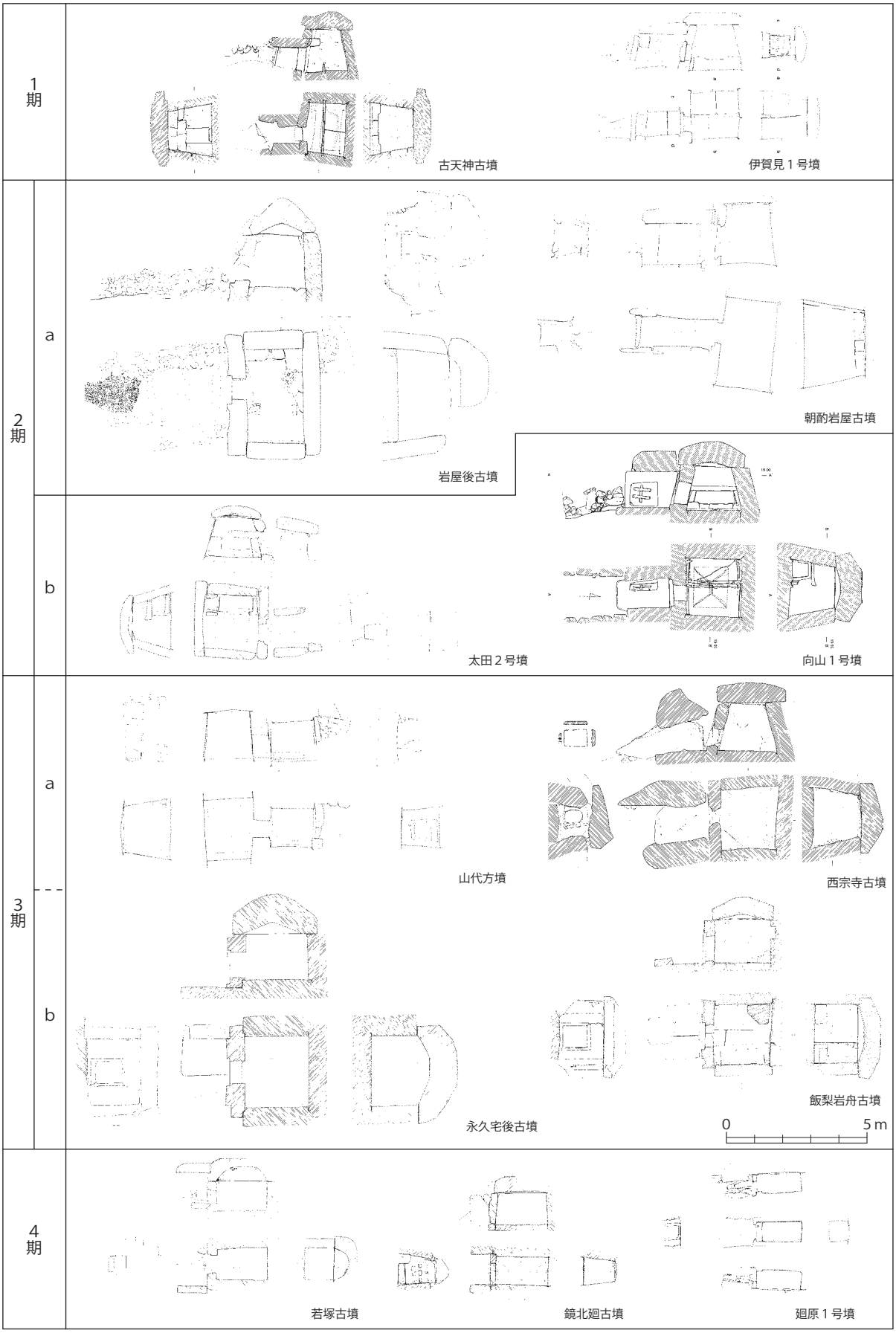
また，玄門の開口部面積にもⅢ類石室の影響が強く表れている。楯式構造のⅠ類石室と壁構造のⅢ類石室（大きな開口部を作り出すことには限界がある）の開口部面積を時期別に比べてみた（第５表）。その結果，石室１～２期は工法の違いが明確に表れ，Ⅰ類石室の開口部面積がⅢ類石室の面積より大き



第6図　神門郡・出雲郡南部の横穴式石室編年（1：200）

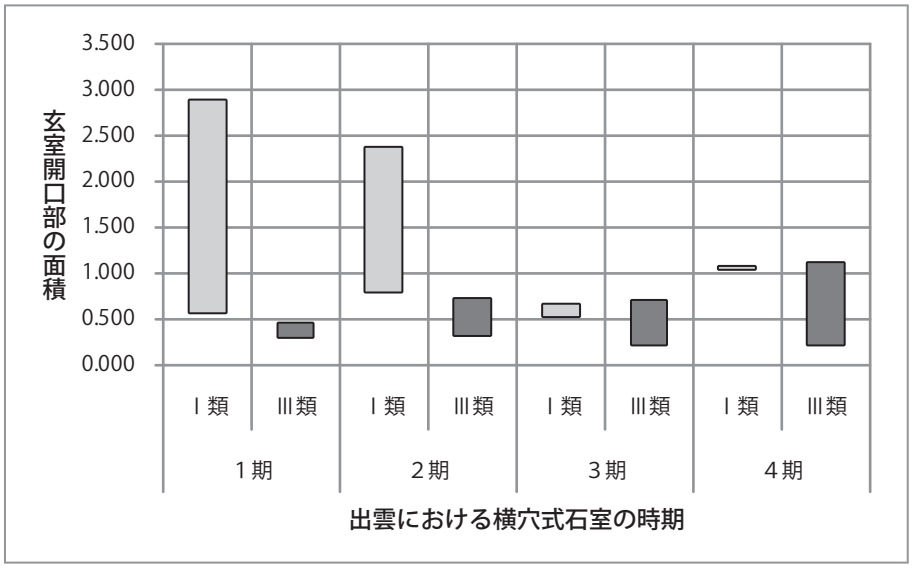


第 7 図　出雲郡北部・楯縫郡の横穴式石室編年（1：200）



第８図　意宇郡・島根郡における Ⅲ 類石室の編年（1：200）（西尾・角田 1987，角田 2008 を改変）

第５表　Ⅰ・Ⅲ類石室の玄門面積の比較



いが，石室３～４期には工法の違いが表れず，Ⅰ類とⅢ類石室の開口部面積はほぼ同じになる。これは，Ⅰ類石室の開口部面積が急激に小さくなったためで，楣式構造の形骸化が明確に表れたものと考えられる。そして，この楣式構造の形骸化は，Ⅲ類石室の影響と考えられる。

次に，典型的なⅢ類石室との相違点をあげる。石室３期のⅠ類石室の玄門構造をみると，ｅ２類・ｆ類では，玄門の上に玄室天井石が架かっていない。ｇ類は玄門を両側壁で挟むが，Ⅲ類石室は逆に玄門と奥壁で両側壁を挟むのが基本である。また，出雲西部のⅠ類石室のほとんどは，両側壁で奥壁を挟み（α，第２表），その逆はない。つまり，石材の組合せ手法という点では伝統を保っており，Ⅲ類石室の影響を受けてはない。これは，石室の平面形の違いにも表れている。

以上のことから，石室３期のⅠ類石室にⅢ類石室の影響を受けた部分と相違する部分があることがわかる。

次に，Ⅲ類石室の玄門構造の特徴である玄門閉塞についてみてみたい。Ⅲ類石室出現期である石室１期の古天神古墳（出雲３期），伊賀見１号墳（出雲３期）は刳抜玄門があり，玄室を閉塞する構造である。その後も，Ⅲ類石室は玄室を閉塞する構造が石室４期まで続く。一方，Ⅰ類石室出現期の林43号墳（出雲２期），御崎山古墳（出雲３期），岡田山１号墳（出雲３期）は，玄門が閉塞されない構造である。したがって，Ⅰ類とⅢ類石室の玄室の閉塞構造が異なることがわかる。そして，Ⅰ類石室が神門郡に伝わると，玄門あるいは前門が観音開きで閉塞される今市大念寺古墳（出雲３期）と妙蓮寺山古墳が出現する。その後は，石室２期の上塩冶築山古墳の玄門に切石を積んで閉塞した事例がある。袖石のある石室で玄室を観音開きの石材で閉塞する構造は，この時期までに西日本に類例がない。すなわち，神門郡にⅠ類石室が採用される際にも，Ⅲ類石室の玄室を閉塞するという構造が伝わったと考えられる。Ⅰ類石室は立柱状の石材で門を構成することから，別の石材で閉塞施設を作り出す必要がある。そこで観音開きという構造を独自に造り出したのであろう。その後，上塩冶築山古墳に切石を積む閉塞方法に変化した。しかし，元々，Ⅰ類石室の構造になかった玄門閉塞は廃れ，中村１号墳やその後のⅠ類石室には採用されなかったようである。

6　Ⅰ類石室の築造過程

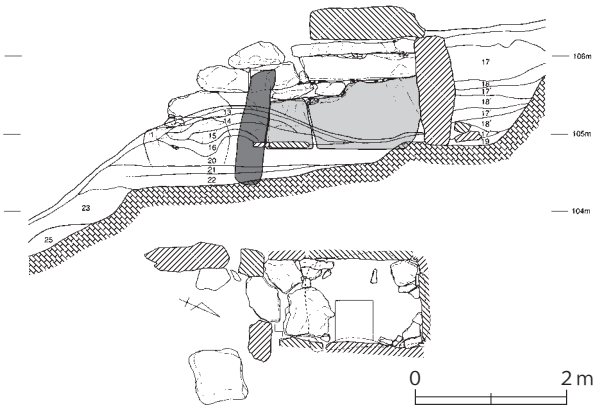
中村１号墳は完掘していないが，床面の断割調査によって，石室築造過程が推定できるようになった。特に袖石と側壁との関係がわかったことが重要である。中村１号墳では，袖石を立てたあとに，側壁を積んでいる。これによって，石室平面形と規模が奥壁と袖石で決まると推定できる。中村１号墳の場合，袖石は３分の１が地中に埋まり，３分の２が露出させてある。類例に，ｈ類の上石堂平１号墳がある（第９図）[12]。上石堂平１号墳も袖石を立て，盛土をしてから側壁を積んで，床石をならべている。袖石は３分の１を地中に埋め，３分の２を露出させている。中村１号墳と異なる点は，袖石上部が尖り，楣石がないことである。玄門としては退化した状況を示している。上石堂平１号墳の成果により，玄門が退化していても袖石を側壁より先に立てる伝統が残っていることがわかる。このことから，ｇ類やｉ類の袖石が両壁で挟まれる構造は，袖石を側壁よりも先に立てる築造手法に起因していると考えることができる。付け加えておくと，Ⅲ類石室の玄室は，まず，床石を置き，側壁を立てた後に，奥壁と前壁で両側壁を挟み込む。Ⅰ類石室とは築造過程が明らかに異なる。

7　出雲における中村１号墳の横穴式石室の位置付け

はじめに，石室編年１～４期の各時期との特色を示す。石室１期はⅠ類石室の導入期で，意宇郡でまず築造され，その型式変化したものが，神門郡に導入される。玄門部の構造は当初不安定なものだが，楣式構造が採用されて石室構造が安定化していく時期である。石室２期は，玄門部が独立したものが出現する段階である。また，Ⅰ類石室が出雲郡と楯縫郡にも出現し分布が拡大する。丁寧に加工された切石石材が採用されるものもある。石室３期は，玄門部が形骸化する時期。また，出雲西部でⅢ類石室の影響がみられる時期である。石室４期は３期に引き続き玄門部が形骸化した形態がみられ，そして，石室築造の終焉段階である。

次に，旧郡単位での石室変遷過程をまとめておく（第４，６表を参照）。神門郡地域では，石室１期の後半にⅠ類石室が導入される。最古の横穴式石室はｃ類の今市大念寺古墳で，出雲東部のｂ類（あるいはａ類）から型式変化して，生まれた型式である[13]。楣式構造が確立し，上部構造を支え石室構

左袖石と左側壁



側壁と袖石の位置（１：100）

第９図　上石堂平１号墳の玄門構造

第６表　出雲における主な横穴式石室の編年表

石室	神門郡	出雲郡	楯縫郡	意宇郡・島根郡・秋鹿郡	須恵器（大谷）
1期				**林 43 号墳・薄井原古墳**	出雲２c期
	今市大念寺古墳			**御崎山古墳・岡田山１号墳・古天神古墳**	出雲３期
	妙蓮寺山古墳			**伊賀見１号墳・岡田薬師古墳**	
2期	**上塩冶築山古墳・放レ山古墳**	**中村１号墳**	山根垣古墳	**岩屋後古墳・団原古墳**	出雲４期
	宝塚古墳・塚山古墳	口宇賀古墳	小谷下古墳	**向山１号墳**	
3期	小坂古墳・上塩冶地蔵山古墳	**出西小丸１号墳・美談神社２号墳** 寺山古墳・道脇古墳	山崎古墳・奥屋敷古墳	**山代方墳・西宗寺古墳**	出雲５期
			上石堂平１号墳	永久宅後古墳	出雲６a期
4期	**三田谷３号墳**・光明寺２号墳	高野２号墳・大寺２号墳		若塚古墳・鏡北廻古墳	出雲６b・c 期

太字は副葬品により時期がほぼ確定できるもの

造の安定化が読み取れる。その後の近い時期に，玄室の高さを低くしたｄ類の妙蓮寺山古墳が築造される。石材には，自然石・割石が採用されている。石室２期には，ｅ１類の上塩冶築山古墳が出現する。楣石が上部構造を支えなくなり，玄門は独立した構造である。石材には切石が採用されている。ｄ類の放レ山古墳（切石採用）もこの時期である。石室３期には，Ⅲ類石室の影響がみられるｅ２類・ｇ類がある。石室４期には，ｉ類の三田谷３号墳が築造され，その後，８世紀頃になると石室は築造されなくなるが，光明寺３号墓のような石櫃を埋葬する火葬墓が築造されている。

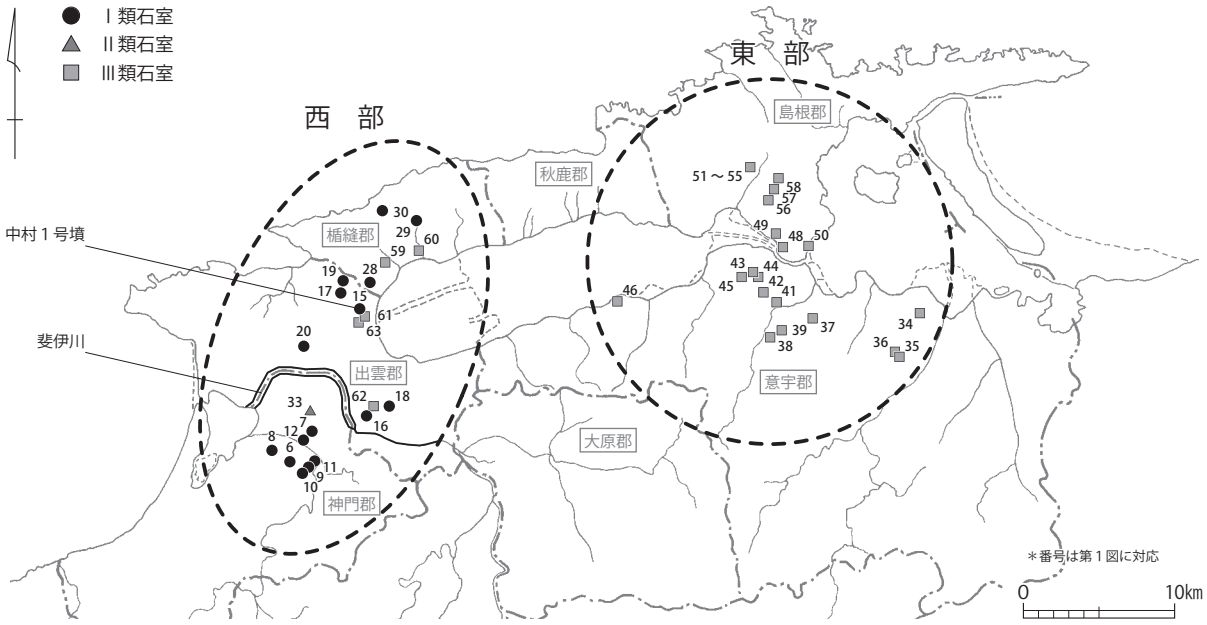
次に出雲郡地域について述べる。Ⅰ類石室が導入されるのは石室２期になってからで，ｅ１類の中村１号墳がある。これは，神門郡の上塩冶築山古墳と同じ型式である。石室３期になると，典型的なⅢ類石室３期の寺山１号墳と，Ⅲ類石室が変容した道脇古墳や美談神社２号墳が築造される。ｅ２類の出西小丸１号墳やｆ類の佐皿谷奥古墳といったⅢ類石室３期の石室の影響を受けた石室も築造される。そして，ｈ類の大前山古墳も築造されている。４期にはｉ類の石臼古墳や大寺２号墳が築かれ石室の築造が終わる。

楯縫郡地域も出雲郡と同じく，石室２期にⅠ類石室が導入される。ｄ類の山根垣古墳・小谷下古墳である。石室３期には，典型的なⅢ類石室の奥屋敷古墳と，山崎古墳が築造される。そして，ｈ類の上石堂平１号墳も築造される。石室４期の良好な資料はない。

各郡の地域性をまとめると楯縫郡と出雲郡には，Ⅲ類石室が入ってきているが，神門郡には，そのものは入ってきていない。また，切石技術が採用されている時期の小谷下古墳や大前山古墳には自然石と割石が採用されている。神門郡には，石室２期以降に切石造りの石室ばかりが採用されている。このような地域性が見られ，出雲郡と楯縫郡はほぼ同じ石室を築造していて，神門郡とはやや異なる。ただし，これら３郡とも玄門が形骸化する方向性は同じである。

出雲東部の意宇郡と島根郡の状況にも簡単に触れておく。石室１期の古段階（出雲２ｃ期）にⅠ類石室ａ類の林 43 号墳とⅡ類石室の薄井原古墳が，横穴式石室の最初の型式として導入される。その後（出雲３期）には，Ⅰ類石室ａ類の御崎山古墳とｂ類の岡田山１号墳が，Ⅱ類石室は座生７号墳が引き続き築造される。また，Ⅲ類石室として古天神古墳と伊賀見古墳が最初に築造されている。他に無袖のⅣ類石室岡田薬師古墳，鍛冶屋谷３号墳がある。石室２期（出雲４期）以降には，Ⅲ類石室とそれから変容したものが築造され，ⅠとⅡ類，Ⅳ類石室は築造されていない。

以上のことから，出雲の地域設定を行いたい（第 10 図）。石室２～３期にⅠ類石室が分布する範囲



第 10 図　石室２～３期における東西出雲の地域区分（1：500,000）

を出雲西部とし（神門郡・出雲郡・楯縫郡），出雲西部以外のⅢ類石室やそれが変容した石室が主に分布する地域を出雲東部（意宇郡・島根郡・秋鹿郡）とする。出雲西部は，さらにⅢ類石室やそれが変容した石室が分布する出雲郡･楯縫郡と，それらが分布しない神門郡の２地域に区分することができる。その境界はほぼ斐伊川にある。したがって，中村１号墳の石室は，出雲西部，その中でも出雲東部とも近い関係のある出雲郡・楯縫郡にある。また，出雲西部の大豪族の古墳と考えられる上塩冶築山古墳と同じｅ１類であることは重要である。石室２期の出雲郡・楯縫郡の中には，他にｅ１類の石室はないので，中村１号墳と上塩冶築山古墳は非常に近い関係ともいえる。

横穴式石室から東西出雲の関係をみると，石室１期と３期に出雲東部から西部へ影響が見られる。石室１期の出雲西部のⅠ類石室ｃ類（今市大念寺古墳）は，東部のｂ類（あるいはａ類）からの型式変化と考えられる。また，今市大念寺古墳や妙蓮寺山古墳の玄門部での閉塞もⅢ類石室１期の石室の影響と考えられる。石室３期には出雲東部を中心に分布するⅢ類石室やその変容したものが出雲郡と楯縫郡に採用されていることが際立つ。また，Ⅰ類石室の玄室開口部の面積が小さくなることも３期のⅢ類石室からの影響であろう。そして，石室ではないが石室２期の中村１号墳にも，出雲東部から灯明石をもつ組合せ式家形石棺が導入されている。

すなわち，基本的に石室１期～３期において常に出雲東部から出雲西部へ影響がみられるのである。特段に石室３期だけを取り上げて，出雲のまとまりを強調することはなく，石室１期にはすでに出雲のまとまりはあったと考えられる。つまり，出雲東部から西部への情報伝達があった上で，それぞれの地域の独自性を保って古墳の築造を行っていたのである。

以上の検討から，古墳時代後期の石室型式の違いによって東西出雲の関係は敵対していたとは考えにくい。

8　おわりに

中村 1 号墳の石室を位置付けるため，石室玄門構造に注目して，横穴式石室の変遷を検討した。まず，導入期の横穴式石室の玄門構造からⅠ～Ⅳ類にわけて，玄門構造に限らず玄室の高さが高いものから低いものへ変化することを示した。そして，玄門に両袖をもつⅠ類石室を玄門構造からａ～ｉ類に分けて，須恵器を中心とした副葬品との時間的な関係を示し，型式組列を導き出した。これにより，Ⅰ類石室は玄門部への楣式構造の導入から確立，玄門の独立，玄門の形骸化へと型式変化していることを明らかにできた。そして，Ⅲ類石室との平行関係とその影響について整理し，東西出雲の石室からみた関係について示した。既往の研究で考えられてきた東西出雲の対立は，石室からは証明できず，むしろ両者は独自性を有しながら，大きな出雲を形づくっていたと考えられる。以上のような歴史的背景の中で，中村 1 号墳は出雲西部に位置する。そして，石室２～３期の出雲西部の中でも出雲東部との関係が読み取れる地域にある。

本稿では玄門構造を中心に石室の型式分類を行い論を展開してきた。しかし，玄門構造が不明な小型の石室も数多くあり，また，Ⅲ類石室が変容した石室は島根郡などにも数多く分布する。これらについては，今後の課題としておきたい。本稿で検討した内容は十分ではないが，中村 1 号墳の石室を位置付けるという目的は達成できたと思う。

最後に，本稿を作成するにあたって以下の方々に，ご指導や資料見学でお世話になった。記して感謝する。

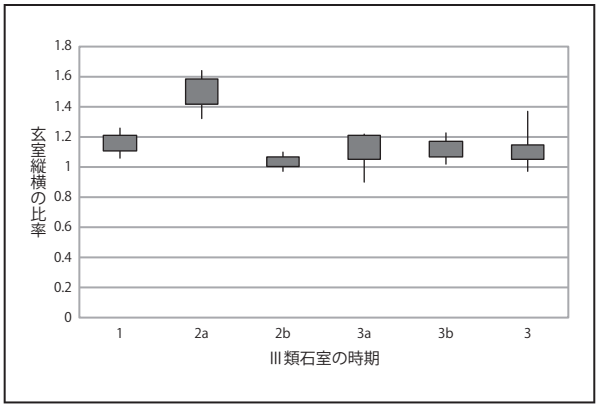
池淵俊一，大谷晃二，角田徳幸，川原和人，下條信行，宍道年弘，樋野真司，渡辺貞幸

（坂本豊治）

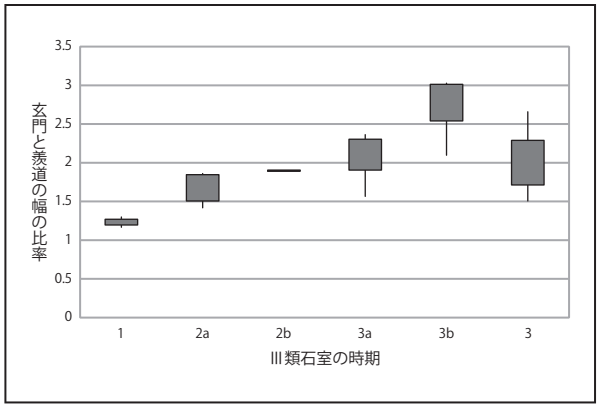
註

（1）本稿で扱わなかった奥出雲（大原郡・飯石郡・仁多郡）については，1986 年に蓮岡，1996 年に角田，2007 年に西尾ほかにより検討がなされている。中村 1 号墳の位置付けには直接関係しないので本稿では扱わなかった。

付表１　Ⅲ類石室の玄室縦横比の変遷



付表２　Ⅲ類石室の羨道幅と玄門幅の比率の変遷



（2）角田は玄室の方形化と羨道幅の拡大という指標から石棺式石室編年の細分を行っているが，その問題点を指摘しておく。まず玄室の方形化について，出雲考古学研究会は石室３期に正方形に近い形となると指摘し，角田も石室３期は，石室２ｂ期の要素を引き継いで方形化すると指摘している。ただ，石室が方形化したのは２ｂ期で，それ以降は２ｂ期とほぼ同じ比率であり方形化が進んだわけではない（付表１）。石室の方形化は２a 期と２ｂ期の細分には有効であろう。そして，石室２～３期の玄室縦横比からみると２ａ期の石室が特異であることがわかる。羨道幅の拡大については，石室１～３ｂ期にかけて羨道幅が大きくなっていることがわかるが，各時期のものが重なりあって変遷しており，時期を細分する根拠にはならない（付表２）。

（3）安来市伯太町にⅡ類石室の座生１号墳がある。これは，玄室から羨道にかけて天井石がないため，玄門部の構造が不明である。仮に天井石が取り去られただけであればⅡＢ類となる。出雲４期と考えられる出雲市塚山古墳もⅡ類石室であるが，その系譜は同時期の出雲市宝塚古墳（平面形は片袖のⅡ類に見えるが，立柱状の袖石が両壁にあり，Ⅰ類と判断）に求められると考えている。

（4）研究史と本稿との相違があるので整理しておく。土生田純之や角田・西尾は妙蓮寺山古墳を今市大念寺古墳よりも古い型式と考えている。これは，妙蓮寺山古墳の石室を複室構造の初現形態ととらえ，今市大念寺古墳は完成した複室構造をなすと理解したからである。確かに妙蓮寺山古墳の羨道左側壁には短い立石があるが，右側側壁付近は閉塞石が残存していて，詳細が不明である。したがって，複室構造の初現形態と確定することは非常に難しく，よくわからないというのが現実的な評価であろう。今市大念寺古墳や上塩冶地蔵山古墳のように，玄門部には新しい構造，前門部（前室の玄門）には古い構造が採用されていることから，複室の横穴式石室は玄門部の構造で築造時期を検討するべきと考えている。仮に，妙蓮寺山古墳が複室構造としても，それは前門部のことで，築造時期は玄門部で評価する必要があり，それ故に前記したとおりの変遷と考えられる。後述する玄門部構造細分の視点で，詳述する。今市大念寺古墳の玄門は，第２表①玄門の構成から，玄門はｃ類であるが，前門はｂ類であり，前門が古い型式的特徴をもつ。上塩冶地蔵山古墳では，第２表②袖石と側壁の関係から，玄門はハ類，前門はロ類であり，やはり前門が古い型式的特徴をもつ。

（5）佐田谷奥古墳の石室の楣石は欠損していて，わずかに側壁上部にその一部が残っている。

（6）上塩冶築山古墳の時期は本報告書の第７章第６節で詳述している。同古墳の子持壺ついて，池淵俊一はＣ１型から影響を受けてつくられたものと指摘している（池淵 2004）。Ｃ１型は出雲４期の松江市団原古墳などから出土していて，出雲３期に遡るＣ１型の例はないようである。したがって，上塩冶築山古墳の時期を出雲４期の前半と考えた。畿内の須恵器編年ではＴＫ 43 型式期の末頃であろう。

（7）小坂古墳は群集墳の刈山古墳群の中に位置する。この古墳の出土品は，発掘調査によって出土したものではない。小坂古墳出土と伝えられている須恵器には他の古墳の出土品が混在している可能性がある。角田・西尾（1989），大谷（2001）も，小坂古墳の時期を出雲４期前半ではなく，４期後半と評価している。出雲４期前半の須恵器が石室分類と合わず，古墳の築造時期を表していないと評価したのであろう。

（8）ｂ類の岡田山１号墳とｃ類の今市大念寺古墳の出土品からの前後関係がよくわかっていない。仮に，ｃ類がｂ類より古くあるいは同時に存在する場合も考えられ，その場合は，ａ類の御崎山古墳からｃ類とｂ類へ変化した可能性も想定しておきたい。本項では玄門構造を重視して，ｂ類→ｃ類とした。

（9）玄室は奥壁と側壁で天井石を支えているので基本的には壁構造であるが，玄門部分には楣式構造が採用されて

いるものがある。

(10) 典型的なⅢ類石室ではないが，これらから変容したと考えられるものがある。それは道脇古墳（出雲郡）で，一石を刳り抜いて玄室と玄門を築いている（第 6 図）。玄門は石室の中央に位置し，羨道は幅が広い。この特徴から，Ⅲ類石室 3 期と同時期頃と考えておきたい。道脇古墳の類例として，松江市西持田町の金毘羅谷古墳がある。玄門は別作りであるが，一石を刳り抜いて側壁・奥壁・天井石を築いている。また，美談神社 2 号墳（出雲 5 期で，Ⅲ類石室 3 期と平行）は，玄門部が刳抜玄門である。両側壁の手前に刳抜玄門があり，Ⅲ類石室 3 期と同じ築造方法。ただし，開口部の位置が石室中心軸線上からずれている。また，石室平面形が縦長長方形である。これらの特徴は，典型的なⅢ類石室 3 期のものとは異なる。

(11) 小坂古墳の実測図には描かれていないが，現地で確認できる。この刳込はⅢ類石室 2 ～ 3 期に見られる特徴である。

(12) 類例に Ⅰ類石室 a 類の林 43 号墳もある。この古墳の完掘写真をみると奥壁と両袖石の掘形があることが確認できた。Ⅰ類石室導入期の林 43 号墳の石室と中村 1 号墳の石室は同じ築造過程をただっていることがわかる。

(13) 今市大念寺古墳には超大型の石室規模と複室構造，および全国最大級の規模を誇る家形石棺が採用されている。これらが，すべて出雲東部からの影響とは考えにくい。ただ，意宇郡の大豪族の墓と考えられる山代二子塚古墳の石室が不明な現状では，これ以上の評価はできないであろう。

参考文献

池上　悟 1982「出雲における切石使用横穴式石室の一類型について－所謂 “ 石棺式石室 ” の再検討－」『考古学研究室彙報』22　立正大学文学部　5 ～ 22 頁

池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会　498 ～ 516 頁

出雲考古学研究会編 1987『石棺式石室の研究』

梅原末治 1919「出雲に於ける特殊古墳中ノ上」『考古学雑誌』第 9 巻　日本考古学会　16 ～ 32 頁

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会　39 ～ 82 頁

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会　43 ～ 54 頁

大谷晃二 2001「出雲東部の大首長の性格と権力」『第 8 回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会　103 ～ 121 頁

小田富士雄 1986「島根県の九州系初期横穴式石室再考」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 301 ～ 319 頁

角田徳幸・西尾克己 1987「神門郡と出雲郡」『石棺式石室の研究』251 ～ 259 頁

角田徳幸・西尾克己 1989「出雲西部における後期古墳文化の検討」『松江考古』第 7 号　松江考古学談話会　5 ～ 42 頁

角田徳幸 1995a「石棺式石室の系譜」『横穴式石室にみる山陰と九州』出雲考古学研究会　1 ～ 15 頁

角田徳幸 1995b「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学』③『出雲風土記』の巻 同成社　149 ～ 175 頁

角田徳幸 1996「出雲西部の横穴式石室」『山陰の横穴式石室ー地域性と編年の再検討ー』第 24 回山陰考古学研究集会　山陰考古学研究会　25 ～ 29 頁

角田徳幸 2007「山陰における九州系横穴式石室の様相」『日本考古学協会 2007 年度熊本大会研究発表資料集』日本考古学協会 2007 年度熊本大会実行委員会　71 ～ 116 頁

角田徳幸 2008「出雲の石棺式石室」『古墳時代の実像』吉川弘文館　72 ～ 107 頁

川原和人 1982「出雲西部における横穴式石室の形態及び築造工程について」『賀川光夫先生還暦記念論集』 賀川光夫先生還暦記念会　373 ～ 392 頁

佐藤雄史 1990「島根半島西部における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』第 7 集　島根考古学会　4 ～ 69 頁

仁木　聡 2010「山陰地方における後期・終末期古墳の領域性」『出雲国の形成と国府成立の研究』 島根県古代文化センター　239 ～ 257 頁

西尾克己・大國晴雄 1991『出雲平野の古墳』 出雲市民文庫 9　出雲市教育委員会

西尾克己 1999「出雲西部における上塩冶築山古墳の石室と石棺の位置付け」『上塩冶築山古墳の研究』 島根県教育委員会・島根県古代文化センター　119 ～ 127 頁

西尾克己・坂本論司・稲田　信・松尾充晶 2007『斐伊川中流域における後期古墳の様相－横穴式石室・横穴墓集成－』

西尾良一 1986「大社造と横穴式石室」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　333 ～ 372 頁

野津左馬之助 1924「島根県内の石室」『島根県史』 4

森本　徹 2008「山陰地方における古墳の終焉」『研 調査報告』第 6 集　大阪府文化財センター　135 ～ 162 頁

蓮岡法暲 1986「島根県仁多町無木古墳群の横穴式石室について」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　321 ～ 332 頁

土生田純之 1983「横穴式石室にみる古代出雲の一側面」『考古学論叢』

山崎信二 1986『横穴式石室構造の地域別比較研究－中国・四国編－』

山本　清 1953「遺跡の示す古代出雲の様相」『出雲國風土記の研究』出雲大社　413 ～ 447 頁

山本　清 1956「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」『島根大学論集（人文科学)』六号

山本　清 1964「古墳の地域色とその交渉－山陰の石棺式石室を中心として－」『山陰文化研究紀要』 5 号　島根大学

渡辺貞幸 1985「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究』第 1 号島根大学山陰地域研究総合センター　1 ～ 16 頁

渡辺貞幸 1986「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　221 ～ 238 頁

渡辺貞幸 1995「弥生・古墳時代の出雲－『風土記』と考古学の接点－」『風土記の考古学』③『出雲風土記』の巻　同成社　67 ～ 86 頁

図版出典

本稿で使用した図面は，各報告書から転載したものである。一部には，報告書を修正や再トレースしたものがある。

第２節　石室と墳丘規模からみた中村１号墳

１　はじめに

中村１号墳は約 30 ｍの円墳で，埋葬施設は複室構造の横穴式石室である。ここでは，石室と墳丘規模からみて当古墳が出雲でどのような階層にあったのかを考察してみたい。階層差を抽出する方法として，墳丘の形態や規模の比較，石室全長の規模比較，石棺の規模比較，副葬品の比較などがある。これらの手法すべてを出雲の後期古墳で適用できるかというと，発掘調査事例が少なく，また，墳丘や石室が破壊されて，副葬品も盗掘されていることからそう簡単ではない。そこで，本稿では規模の大小が階層差を示していることを前提とし，石室の多くで玄室部分は残っているので，まず，玄室の面積を比較する。次に，墳丘規模の比較を行い，石室規模と墳丘規模の組合せから出雲における中村１号墳の階層的な位置付けをしたい。

２　研究史と問題の所在

（１）　出雲における石室墳の階層構造

出雲西部における石室墳の階層構造に関する研究は，神戸川流域（神門郡）を中心に行われている。西尾良一は神門川左岸と右岸の石室墳の対比から次のことを導き出した。「①墳丘・石室・石棺の規模とも右岸（今市・塩冶）が大きく上回る。②両岸とも横口式家形石棺を内蔵し，古墳規模に比例し，刳抜石棺，組合石棺，石床と等級化されている。③右岸の石室・石棺は二室二棺あるいは一室二棺の合葬に対し，左岸（古志・朝山）では一室一棺の単葬のものが多い」とし（西尾良一 1986，341 頁），神戸川右岸の大型の石室墳が左岸より優位であると指摘した（西尾良一 1984，1985，1986）。西尾は，石室規模を比較する際に，玄室長を用いている。また，渡辺貞幸も神戸川右岸の古墳群が最高首長の類代墓を中心として形成され，左岸にはその最高首長に従属しつつそれを補佐した一族ないし家系の首長墓を中心に造営されたと指摘している（渡辺 1986）。

西尾克己と大国晴雄は石室長と石棺長辺長を比較し（西尾・大国 1991），その後，西尾克己は玄室長と幅によって石室規模を比較して階層構造を示した（西尾克己 1999）。

大谷晃二は墳丘・石室の規模と副葬品から古墳時代後期の神戸川下流域の地域には，

Ａ階層：卓越した規模の墳丘や石室をもつ古墳（大念寺古墳，上塩冶築山古墳，地蔵山古墳）…最高首長

Ｂ階層：墳丘・石室・副葬品において，次の階層Ｃの石室墳を越える内容をもち，階層Ａの隣接地に築かれている古墳（妙蓮寺山古墳，放レ山古墳，宝塚古墳，大梶古墳）…最高首長を輩出した一族の有力者

Ｃ階層：律令制下の郷程度の間隔で点在する大念寺系石室墳（両袖の石室）…在地首長

Ｄ階層：群小墳の大念寺系石室や横穴墓…有力家族

の４つの階層構造が認められると指摘した。そして，飛鳥Ⅱ期（出雲６ｂ・ｃ期）には横穴式石室をもつ小型の方墳となり，階層構造がみられないことを指摘し，首長が官人化して，中央の規制に従わ

ねばならない立場となったと理解している（大谷 1999，2011）。

一方，渡辺貞幸は出雲東部の馬橋川・意宇川流域の墳丘規模の比較から以下の通りの階層構造があると指摘した。馬橋川流域には墳丘規模が 40m 以上もある大首長の山代・大庭古墳群（山代二子塚古墳，鶏塚古墳，山代方墳，永久宅後古墳）があり，意宇川流域には大首長を盟主とする首長連合（地域政権）の構成員であった墳丘規模が 20 m内外の有古墳群（岡田山１・２号墳，岩屋後古墳，御崎山古墳）があるとした（渡辺 1984）。角田徳幸は石棺式石室（本稿のⅢ類石室）の玄室の規模から，石室２ａ期と３ｂ期に大規模，中規模，小規模の石室があることを示した。そして，階層構造の頂点に山代・大庭古墳群があると指摘した（角田 2008）。

出雲東部と西部の関係について渡辺貞幸は，古墳時代の中期段階にあった出雲地方の諸首長のゆるい連合関係・均衡関係が６世紀前半に破られ，首長の系列化が進んだ結果，山代・大庭古墳群を頂点とする東部出雲の政治的結集体と，今市塩冶古墳群被葬者を頂点とする西部出雲のそれとが，成立・並立したと指摘した。さらに，両者の政治的結集体をのちの郡名をとって「オウの勢力」・「オウ氏」，「カムドの勢力」・「カムド氏」と仮称した（渡辺 1986 ａ・ｂ）。また，出雲東部の６世紀末～７世紀初頭の山代方墳（筆者は７世紀前半と考えている，根拠は第６章第１節参照）が，整美な堀と外堤土塁を備えた大型方墳であることを理由に，その築造の背景に大和政権中枢と密接な関係を結んでいたと考えた（渡辺 1985）。そして，山代方墳の時期には「カムド氏」は大型古墳を造ることがなく，「オウ氏」は大和政権の後楯のもとで，ついに「カムド氏」を屈服させたと指摘した（渡辺 1987・1995）。

（２）　問題の所在

これまでの研究により出雲の東部と西部それぞれに階層構造が認められることが指摘されている。問題は，階層構造の区分に用いられている石室と墳丘規模の分類基準が明確に示されていないことである。それ故に，中村１号墳の石室と墳丘規模が，出雲の中でどの階層に位置するかが判断できない。また，大谷晃二による階層分類を用いると，中村１号墳は「Ｃ階層」となる。しかし，中村１号墳の副葬品をみると「Ｂ階層」の妙蓮寺山古墳，放レ山古墳と大差がないように思う。大谷の階層分類は，石室と墳丘規模，副葬品，石室の立地などを基に総合的な階層構造を導き出そうとした視点は重要であるが，その基礎の部分である石室や墳丘規模の分類が不明確であり，また，副葬品も明らかでないものが多く，分類に無理が生じてきていると考えられる。また，飛鳥Ⅱ期に古墳が小型化する根拠を首長が官人化した結果と評価しているが，官人にかかわる遺構（役所や寺院）が出雲に出現するのは飛鳥Ⅴ期以降であり時間差がある。古墳の小型化と首長の官人化については再検討する必要があろう。

以上の研究史上の問題点から，以下の方法で階層構造を導き出したい。本稿では前節で行なった石室編年を基に，Ⅰ類石室（両袖の石室）・Ⅱ類石室（片袖の石室）・Ⅲ類石室（石棺式石室）の玄室面積と墳丘の規模を示し，それらの分布のまとまりを分類し，時期ごとの階層構造を明確にしてみたい。そして，石室と墳丘との関係から出雲における中村１号墳の階層を位置付けたい。このような基礎作業を行うことが，階層構造を導き出す手段として，重要であると考えられる。

石室には石室編年を用いるべきであるが，墳丘には編年案を適用できないので，本稿では繁雑になることをさけ大谷晃二による出雲の須恵器編年（大谷 1994）を時間軸として示す。各古墳の時期の根

拠は，本書の第７章第１・４節の検討を基にしている。

３　玄室面積の比較

石室は空間であり，その大小を論ずるには玄室の容積を算出する必要があろうが，天井石が破壊されていて容積が明確でないものもあるので，玄室の床面積を計測した。面積は既に発表されている石室図面（縮尺 50 分の１）を用い，面積を算出し，これを出雲の東部と西部に分けて示す（第１・６表）。

Ⅰ類とⅢ類石室では石室の構造が異なるため，規模を単純には比較できない。そこで，それぞれの石室で規模を比較して時期ごとにグラフに示した（第１・２図）。また，Ⅱ類石室はⅠ類石室と構造的に近いことや，資料数が少ないのでⅠ類石室と合わせて示した。

（１）　Ⅰ・Ⅱ類石室の規模比較

Ⅰ・Ⅱ類石室を集成すると，玄室面積は 2.0 ～ 17.4㎡の範囲にあることがわかる。それらは，超大型，大型，中型，小型の４つに分類できる（第１図）。超大型は 16.0 ～ 17.4㎡，大型は 6.8 ～ 11.3㎡，中型は 4.1 ～ 6.0㎡，小型は 2.0 ～ 3.5㎡となる（第2～5表）[1]。この結果，出雲２期には大型と中型，出雲３期には超大型と大型と中・小型[2]，出雲４期前半には超大型と中型，出雲４期後半には大型と中型[3]，出雲５・６ａ期には大型と中型と小型，出雲６ｂ・ｃ期には小型が存在する。検討する資料数が少ないきらいはあるが，出雲３～５･6a 期にかけて，玄室規模に２～３段階の階層構造がみてとれる。そして，出雲６ｂ・ｃ期には小型のみとなり，階層構造は認められない。

以上の検討をふまえると，中村１号墳の玄室面積 6.0㎡は中型の規模となり，出雲４期前半では中型の中でも一番大きな規模である。出雲４期前半に築造されたⅠ類石室には，超大型の上塩冶築山古墳，中型の中村１号墳，放レ山古墳，刈山４・５号墳，山根垣古墳がある。

（２）　Ⅲ類石室の規模比較

ここでは，Ⅲ類石室の玄室規模から階層構造を明らかにしたい。また，中村１号墳の位置する出雲西部にもⅢ類石室が分布する。それらが，どのような規模の石室なのかは，出雲西部の状況を考える上で重要である。

Ⅲ類石室を集成した結果，玄室面積は 1.1 ～ 6.6㎡の範囲におさまる。それらの分布のまとまりをみると大型，中型，小型，超小型の４つに分類できる（第２図）。大型は 5.6 ～ 6.6㎡，中型は 3.4 ～ 4.6㎡，小型は 2.4 ～ 3.0㎡，超小型は 1.1 ～ 2.0㎡となる（第７～ 10 表）。この結果，出雲３期には小型，出雲４期前半には大型と中型と小型，出雲４期後半には中型，出雲５・６ａ期には大型と中型と小型，出雲６ｂ・ｃ期には超小型が存在する。すなわち，出雲４～５・6a 期にかけて玄室規模には３段階の階層構造がみてとれ，そして，出雲６ｂ・ｃ期には超小型のみとなり，階層構造はみられない。

中村１号墳と同時期の出雲４期前半には大型の岩屋後古墳，塩津神社古墳，朝酌岩屋古墳，中型の団原古墳，太田１号墳，林８号墳，小型の池の尻古墳，朝酌小学校校庭古墳がある。

出雲西部にある典型的なⅢ類石室の山崎古墳と奥屋敷古墳（どちらも楯縫郡）は中型，寺山１号墳（出雲郡）は小型に分類され，Ⅲ類石室が変容したもの（Ⅲ’）も中型か小型となり[4]，大型のⅢ類石室は出現していない。

第１表　出雲西部における主要な横穴式石室玄室の面積と墳丘

時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	玄室面積の分類	墳形	主丘規模（m）括弧内は全長	墳丘規模の分類	時期決定の根拠
出雲３期	①	今市大念寺古墳	Ⅰ類	17.4	超大型	前方後円墳	45（92）	大型	石室構造と副葬品
	②	妙蓮寺山古墳	Ⅰ類	8.2	大型	前方後円墳	25（49）	中型	石室構造と副葬品
	3	半分古墳	－	約3.5	小型	前方後円墳	20（34 以上）	小型	
出雲４期前半	④	上塩冶築山古墳	Ⅰ類	16.0	超大型	円墳	47	大型	石室構造と副葬品
	⑤	中村１号墳	Ⅰ類	6.0	中型	円墳	30	中型	石室構造と副葬品
	⑥	放レ山古墳	Ⅰ類	5.2	中型	円墳	13	小型	石室構造と副葬品
	7	刈山５号墳	Ⅰ類	5.1	中型	円墳	15	小型	副葬品
	8	刈山４号墳	Ⅰ類	5.1	中型	円墳	13	小型	石室構造
	9	山根垣古墳	Ⅰ類	4.1	中型	円墳	17	小型	石室構造
出雲４期後半	10	宝塚古墳	Ⅰ類	7.4	大型	－	－	－	石室構造と石棺
	11	小谷下古墳	Ⅰ類	5.3	中型	円墳	15	小型	石室構造
	12	塚山古墳	Ⅱ類	4.8	中型	－	－	－	石棺の配置
出雲５・６ａ期	13	上塩冶地蔵山古墳	Ⅰ類	6.8	大型	－	－	－	石室構造・石棺の配置
	⑭	美談神社２号墳	Ⅲ類’	5.0	中型	方墳	13	小型	石室構造と副葬品
	15	大梶古墳	Ⅰ類	4.3	中型	－	－	－	石室構造
	16	小坂古墳	Ⅰ類	3.2	小型	？	15？	小型	石室構造
	⑰	出西小丸１号墳	Ⅰ類	2.7	小型	円墳	10	小型	石室構造と副葬品
	18	佐皿谷奥古墳	Ⅰ類	2.5	小型	方墳	10	小型	石室構造
	19	山崎古墳	Ⅲ類３	3.6	中型	－	－	－	石室構造
	20	奥屋敷古墳	Ⅲ類３	3.4	中型	－	－	－	石室構造
	21	道脇古墳	Ⅲ類３’	2.6	小型	－	－	－	石室構造
	22	寺山１号墳	Ⅲ類３	2.4	小型	方墳	14	小型	石室構造
	23	大前山古墳	Ⅰ類	2.3	小型	？	10？	小型	石室構造
	㉔	上石堂平１号墳	Ⅰ類	2.2	小型	円墳？	9	小型	石室構造と副葬品
出雲６ｂ・ｃ期	25	光明寺２号墳	Ⅰ類	3.4	小型	－	－	－	石室構造
	26	高野１号墳	Ⅰ類	3.0	小型	－	－	－	石室構造
	27	大寺２号墳	Ⅰ類	2.5	小型	方墳	10	小型	石室構造
	28	石臼古墳	Ⅰ類	2.4	小型	－	－	－	石室構造
	㉙	三田谷３号墳	Ⅰ類	2.0	小型	方墳	6	小型	石室構造と副葬品

＊丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの

第２表　Ⅰ・Ⅱ類石室玄における超大型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	
出雲３期	①	今市大念寺古墳	Ⅰ類	17.4	16.0 ～ 17.4
出雲４期前半	④	上塩冶築山古墳	Ⅰ類	16.0	

第３表　Ⅰ・Ⅱ類石室玄における大型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	
出雲２期	㉛	薄井原古墳２号石室	Ⅱ類	9.8	6.8 ～ 11.3
	㉜	薄井原古墳１号石室	Ⅱ類	9.6	
出雲３期	㊲	御崎山古墳	Ⅰ類	11.3	
	②	妙蓮寺山古墳	Ⅰ類	8.2	
出雲４期後半	10	宝塚古墳	Ⅰ類	7.4	
出雲５・６ａ期	13	上塩冶地蔵山古墳	Ⅰ類	6.8	

第４表　Ⅰ・Ⅱ類石室における中型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	
出雲２期	㉝	林 43 号墳	Ⅰ類	5.1	4.1 ～ 6.0
出雲３期	㊳	岡田山１号墳	Ⅰ類	4.7	
	㊴	田和山１号墳	Ⅰ類	4.1	
出雲４期前半	⑤	中村１号墳	Ⅰ類	6.0	
	⑥	放レ山古墳	Ⅰ類	5.2	
	7	刈山５号墳	Ⅰ類	5.1	
	8	刈山４号墳	Ⅰ類	5.1	
	9	山根垣古墳	Ⅰ類	4.1	
出雲４期後半	11	小谷下古墳	Ⅰ類	5.3	
	12	塚山古墳	Ⅱ類	4.8	
出雲５・６ａ期	15	大梶古墳	Ⅰ類	4.3	

第５表　Ⅰ・Ⅱ類石室における小型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	
出雲３期	3	半分古墳	－	約3.5	2.0 ～ 3.5
出雲５・６ａ期	16	小坂古墳	Ⅰ類	3.2	
	⑰	出西小丸１号墳	Ⅰ類	2.7	
	18	佐皿谷奥古墳	Ⅰ類	2.5	
	23	大前山古墳	Ⅰ類	2.3	
	㉔	上石堂平１号墳	Ⅰ類	2.2	
出雲６ｂ・ｃ期	25	光明寺２号墳	Ⅰ類	3.4	
	26	高野１号墳	Ⅰ類	3.0	
	27	大寺２号墳	Ⅰ類	2.5	
	28	石臼古墳	Ⅰ類	2.4	
	㉙	三田谷３号墳	Ⅰ類	2.0	

第６表　出雲東部における主要な横穴式石室玄室の面積と墳丘

時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	玄室面積の分類	墳形	主丘規模（m）括弧内は全長	墳丘規模の分類	時期決定の根拠
出雲２期	㉚	山代二子塚古墳	－	－	－	前方後方墳	57（94）	大型	
	㉛	薄井原古墳２号石室	Ⅱ類	9.8	大型	前方後方墳	30（50）	中型	石室構造と副葬品
	㉜	薄井原古墳１号石室	Ⅱ類	9.6	大型	前方後方墳	30（50）	中型	石室構造と副葬品
	㉝	林 43 号墳	Ⅰ類	5.1	中型	前方後円墳	12（18）	小型	石室構造と副葬品
出雲３期	㉞	手間古墳	－	－	－	前方後円墳	32（66）	中型	副葬品
	㉟	東淵寺古墳	－	－	－	前方後円墳	33（62）	中型	
	㊱	椎山１号墳	－	－	－	前方後円墳	18（33）	小型	
	㊲	御崎山古墳	Ⅰ類	11.3	大型	前方後方墳	25（40）	中型	石室構造と副葬品
	㊳	岡田山１号墳	Ⅰ類	4.7	中型	前方後方墳	14（24）	小型	石室構造と副葬品
	㊴	田和山１号墳	Ⅰ類	4.1	中型	前方後円墳	12（20）	小型	副葬品
	㊵	古天神古墳	Ⅲ類１	3.0	小型	前方後方墳	18.5（27）	小型	石室構造と副葬品
	㊶	伊賀見１号墳	Ⅲ類１	2.9	小型	前方後方墳	12（25）	小型	石室構造と副葬品
出雲４期前半	㊷	岩屋後古墳	Ⅲ類２ａ	6.6	大型	方墳か	－	－	石室構造と副葬品
	43	塩津神社古墳	Ⅲ類２ａ	6.3	大型	－	－	－	石室構造
	44	朝酌岩屋古墳	Ⅲ類２ａ	5.8	大型	方墳	30	中型	石室構造
	㊺	団原古墳	Ⅲ類２ａ	4.6	中型	方墳か	30？	中型	石室構造と副葬品
	46	太田１号墳	Ⅲ類２ａ	4.0	中型	－	－	－	石室構造
	47	林８号墳	Ⅲ類２ａ	3.8	中型	方墳	20	小型	石室構造
	48	池の尻古墳	Ⅲ類２ａ	2.5	小型	－	－	－	石室構造
	49	朝酌小学校校庭古墳	Ⅲ類２ａ	2.5	小型	－	－	－	石室構造
出雲４期後半	㊿	向山１号墳	Ⅲ類２ｂ	4.0	中型	方墳	32	中型	石室構造と副葬品
	51	飯梨穴神古墳	Ⅲ類２ｂ	3.9	中型	方墳	18 未満	小型	石室構造
	52	太田２号墳	Ⅲ類２ｂ	3.7	中型	－	－	－	石室構造
出雲５・６ａ期	53	永久宅後古墳	Ⅲ類３	5.6	大型	－	－	－	石室構造
	54	飯梨岩舟古墳	Ⅲ類３	4.3	中型	－	－	－	石室構造
	㊺	西宗寺古墳	Ⅲ類３	4.2	中型	－	－	－	石室構造と副葬品
	㊻	山代方墳	Ⅲ類３	3.7	中型	方墳	45	大型	石室構造と副葬品
	57	雨乞山古墳	Ⅲ類３	3.7	中型	方墳	－	－	石室構造
	58	葉佐間古墳	Ⅲ類３	3.7	中型	－	－	－	石室構造
	59	太田５号墳	Ⅲ類３	3.7	中型	－	－	－	石室構造
	60	栗坪１号墳	Ⅲ類３	3.7	中型	方墳	14	小型	石室構造
	61	太田４号墳	Ⅲ類３	3.6	中型	－	－	－	石室構造
	62	太田３号墳	Ⅲ類３	2.9	小型	－	－	－	石室構造
	63	川原古墳	Ⅲ類３	2.9	小型	－	－	－	石室構造
出雲６ｂ・ｃ期	64	若塚古墳	Ⅲ類４	2.0	超小型	方墳	11	小型	石室構造
	65	鏡北廻古墳	Ⅲ類４	1.8	超小型	方墳	10	小型	石室構造
	66	廻原１号墳	Ⅲ類４	1.1	超小型	方墳	10	小型	石室構造

＊丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの

第７表　Ⅲ類石室における大型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	
出雲４期前半	㊷	岩屋後古墳	Ⅲ類２ａ	6.6	5.6 ～ 6.6
	43	塩津神社古墳	Ⅲ類２ａ	6.3	
	44	朝酌岩屋古墳	Ⅲ類２ａ	5.8	
出雲５・６ａ期	53	永久宅後古墳	Ⅲ類３	5.6	

第８表　Ⅲ類石室における中型の玄室

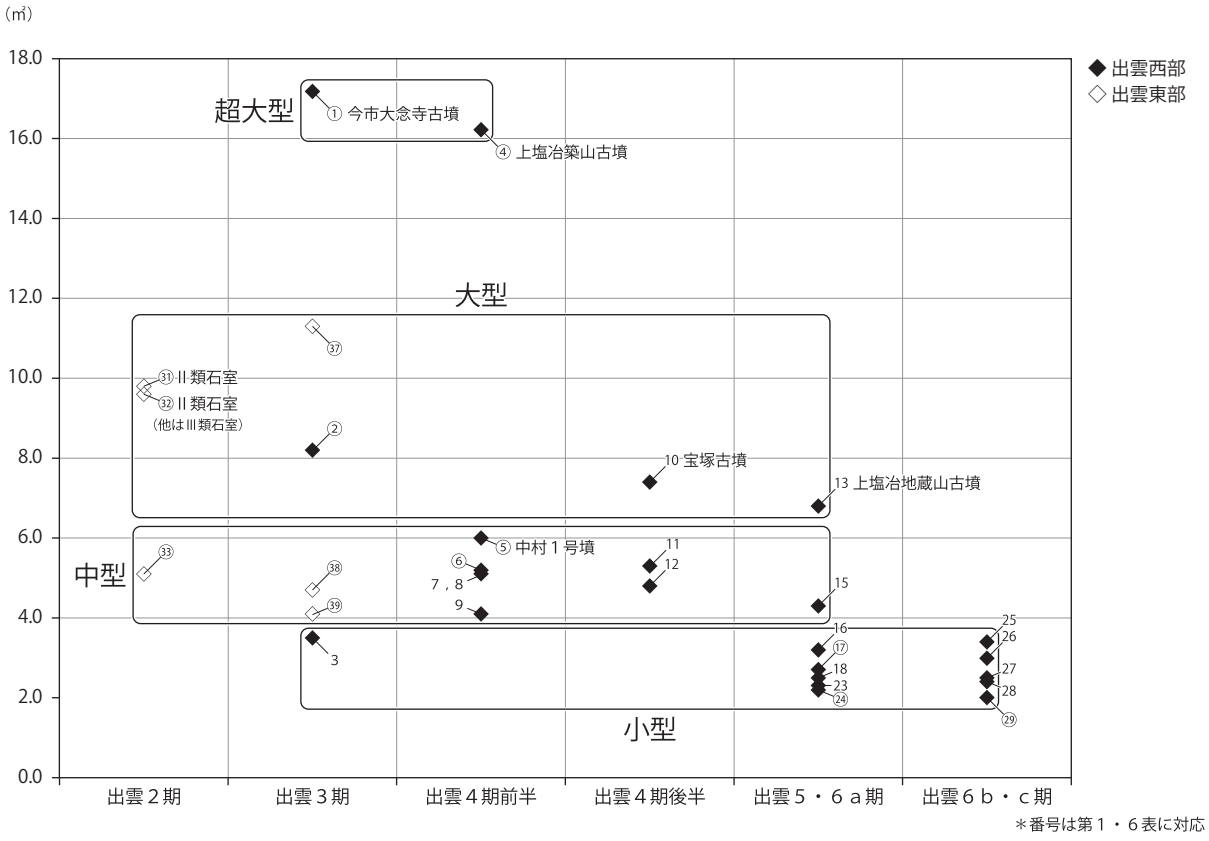
時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	
出雲４期前半	㊺	団原古墳	Ⅲ類２ａ	4.6	3.4 ～ 4.6
	46	太田１号墳	Ⅲ類２ａ	4.0	
	47	林８号墳	Ⅲ類２ａ	3.8	
出雲４期後半	㊿	向山１号墳	Ⅲ類２ｂ	4.0	
	51	飯梨穴神古墳	Ⅲ類２ｂ	3.9	
	52	太田２号墳	Ⅲ類２ｂ	3.7	
出雲５・６ａ期	54	飯梨岩舟古墳	Ⅲ類３	4.3	
	㊺	西宗寺古墳	Ⅲ類３	4.2	
	㊻	山代方墳	Ⅲ類３	3.7	
	57	雨乞山古墳	Ⅲ類３	3.7	
	58	葉佐間古墳	Ⅲ類３	3.7	
	59	太田５号墳	Ⅲ類３	3.7	
	60	栗坪１号墳	Ⅲ類３	3.7	
	61	太田４号墳	Ⅲ類３	3.6	
	19	山崎古墳	Ⅲ類３	3.6	
	20	奥屋敷古墳	Ⅲ類３	3.4	

第９表　Ⅲ類石室における小型の玄室

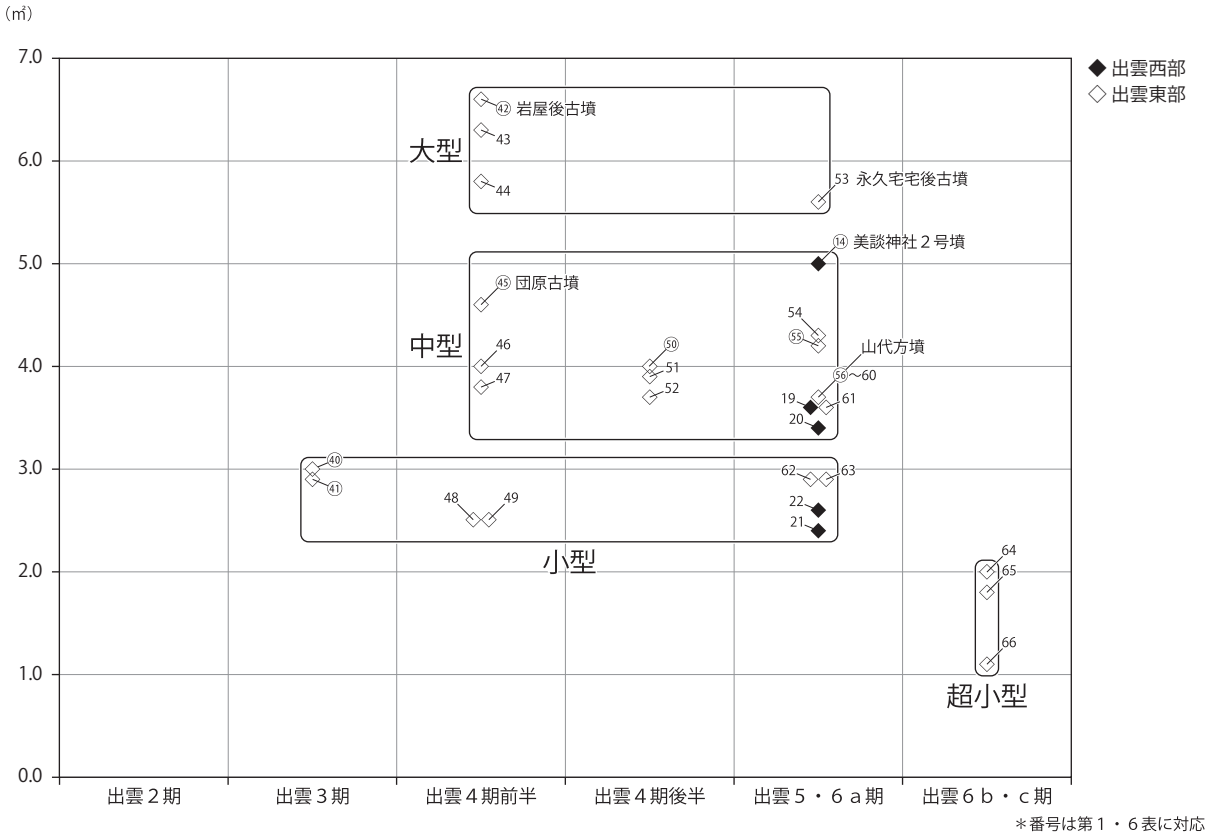
時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	
出雲３期	㊵	古天神古墳	Ⅲ類１	3.0	2.4 ～ 3.0
	㊶	伊賀見１号墳	Ⅲ類１	2.9	
出雲４期前半	48	池の尻古墳	Ⅲ類２ａ	2.5	
	49	朝酌小学校校庭古墳	Ⅲ類２ａ	2.5	
出雲５・６ａ期	62	太田３号墳	Ⅲ類３	2.9	
	63	川原古墳	Ⅲ類３	2.9	
	21	道脇古墳	Ⅲ類３’	2.6	
	22	寺山古墳	Ⅲ類３	2.4	

第 10 表　Ⅲ類石室における超小型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積（㎡）	
出雲６ｂ・ｃ期	64	若塚古墳	Ⅲ類４	2.0	1.1 ～ 2.0
	65	鏡北廻古墳	Ⅲ類４	1.8	
	66	廻原１号墳	Ⅲ類４	1.1	



第１図　Ⅰ・Ⅱ類石室玄室面積

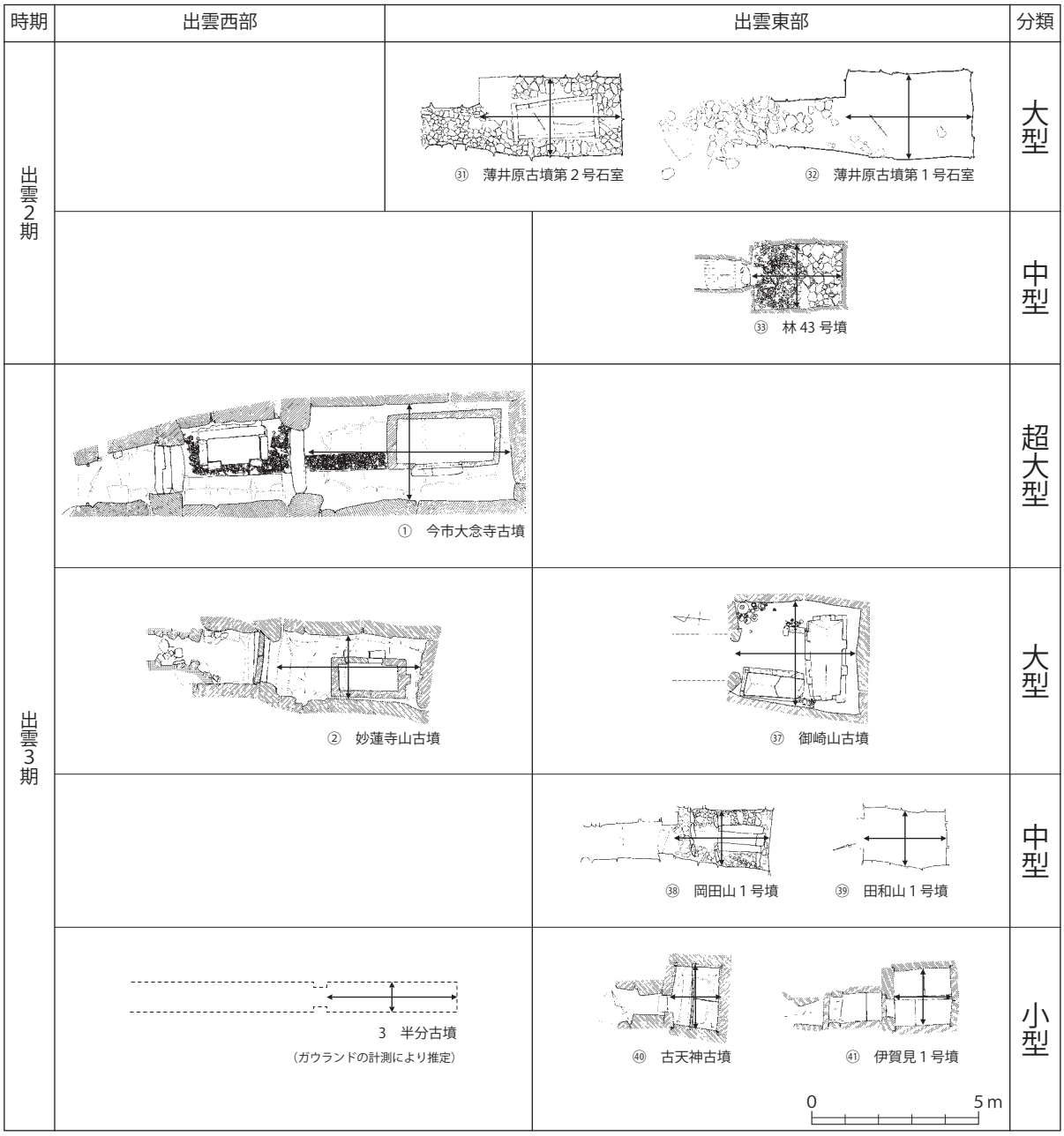


第２図　Ⅲ類石室玄室面積

（３）　東西出雲の玄室規模の比較

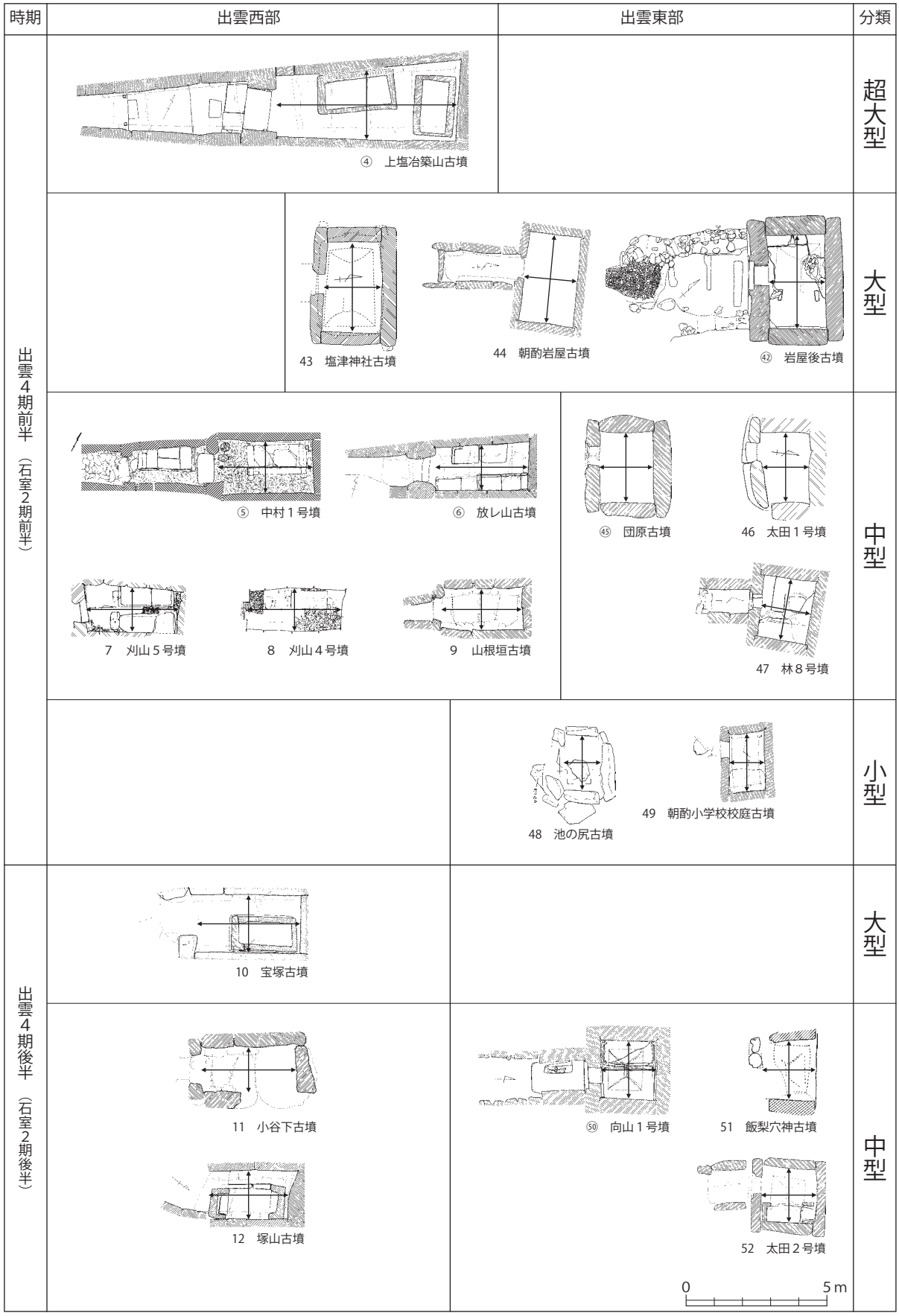
Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類石室の規模分類をもとに，出雲の東部と西部の状況をまとめたのが第３～５図である。先にも触れたように，Ⅰ・Ⅱ類石室とⅢ類石室は構造が異なり，また，玄室面積の数値だけでは単純に比較はできない。そこで，ここでは，分類結果から導き出した階層構造を東西出雲で比較してみたい。

出雲２期には，Ⅰ・Ⅱ類石室の中で，大型と中型の２段階の階層がある。Ⅲ類石室はまだ出現していない。また，出雲西部でも出雲２期の横穴式石室は出現していない。出雲３期になると東西出雲両地域に３段階の階層構造が認められる。しかし，その構造の比較は難しい。Ⅰ類石室の超大型の今市大念寺古墳に対応する石室が出雲東部にはみられないことによる。東西出雲とも同じ３段階の階層構



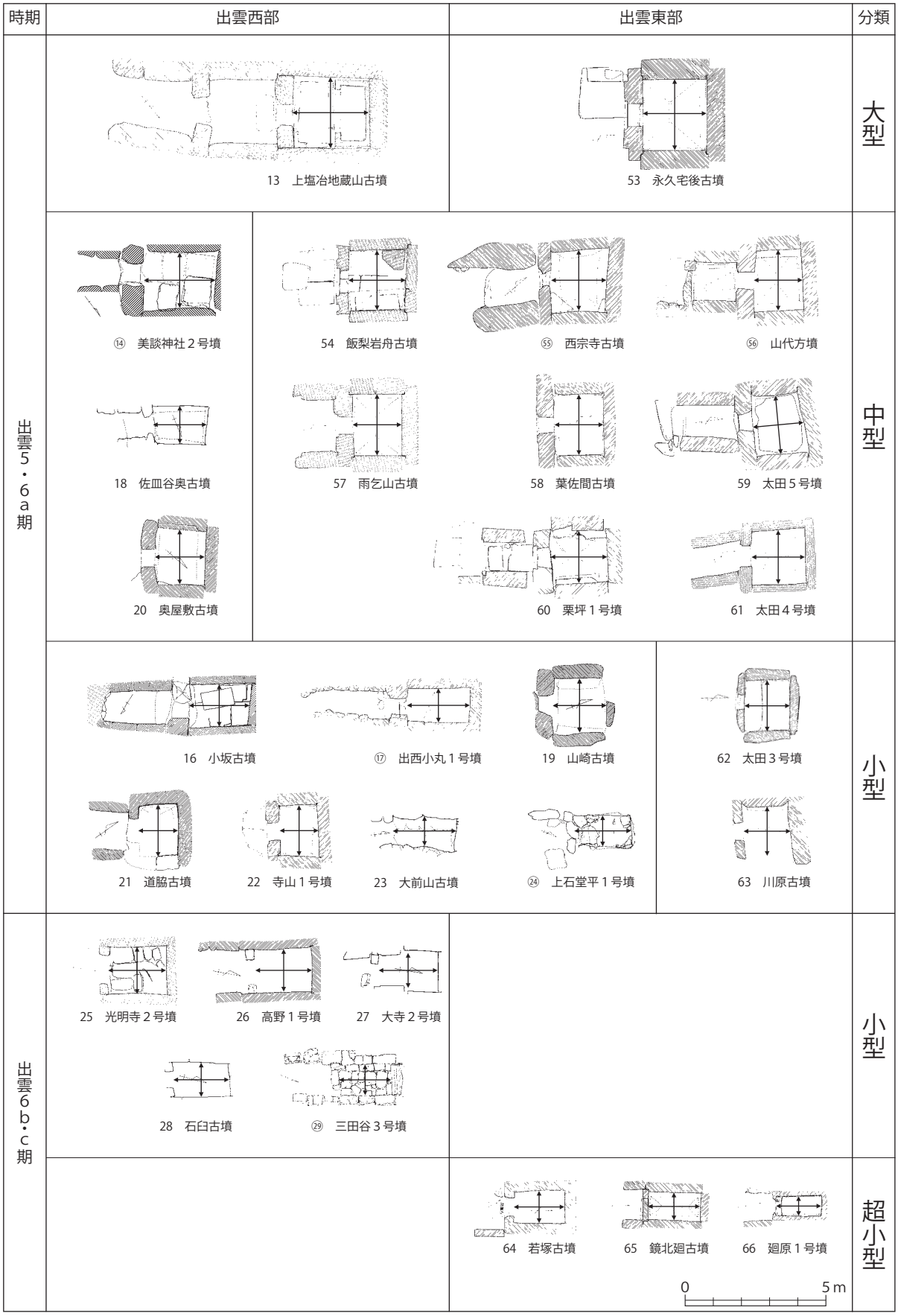
＊番号は第１・６表に対応，丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの

第３図　出雲２・３期における横穴式石室玄室の面積比較（１：200）



＊番号は第１・６表に対応，丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの

第４図　出雲４期における横穴式石室玄室の面積比較（１：200）



＊番号は第１・６表に対応，丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの

第５図　出雲５・６期における横穴式石室玄室の面積比較（１：200）

造であるが，両者の対応関係については別の要素からの判断も必要であろう。

出雲４期前半の階層構造は出雲３期と比べて相互の石室規模が近似するので考えやすい。Ⅰ類石室超大型の上塩冶築山古墳（西部）とⅢ類石室大型の岩屋後古墳（東部）などが，また，Ⅰ類石室中型の中村１号墳（西部）などとⅢ類石室の団原古墳（東部）が対応すると考えられる。出雲西部には小型の石室がみつかっていない。

出雲４期後半については，資料が少なく検討が難しいが，Ⅰ類石室中型の小谷下古墳（西部）などとⅢ類石室中型の向山１号墳（東部）とが対応する。

出雲５・６ａ期には出雲の東部と西部に３段階の階層構造が認められる。Ⅰ類石室大型の上塩冶地蔵山古墳（西部）とⅢ類石室大型の永久宅後古墳（東部）が，Ⅰ類石室中型の佐Ⅲ谷奥古墳（西部）とⅢ類石室中型の飯梨岩船古墳（東部）などが，Ⅰ類石室小型の小坂古墳（西部）などとⅢ類石室小型の太田３号墳（東部）などが対応すると考えられる。以上のことから，出雲３～５・６ａ期まで出雲の東部と西部に大まかな３段階の階層構造があったと考えられる。

また，出雲６ｂ・ｃ期には，Ⅰ類石室小型の三田谷３号墳（西部）などと，Ⅲ類石室の若塚古墳（東部）などの超小型が対応すると考えられる。すなわち，出雲全体で石室の小型化が進んでいることと，階層構造がみられないことがわかる。

以上の検討の結果，玄室面積に表現された出雲の石室階層の中で，中村１号墳の玄室は，中型の規模であることがわかる。

この玄室規模の分類の結果，研究史と大きく異なる問題が生じてきた。それは，出雲東部の最高首長と考えられている山代方墳は，Ⅲ類石室中型となり，最高首長の石室とは考えにくいということである。この問題については，墳丘規模を検討した後で解決したい。

４　墳丘規模の比較

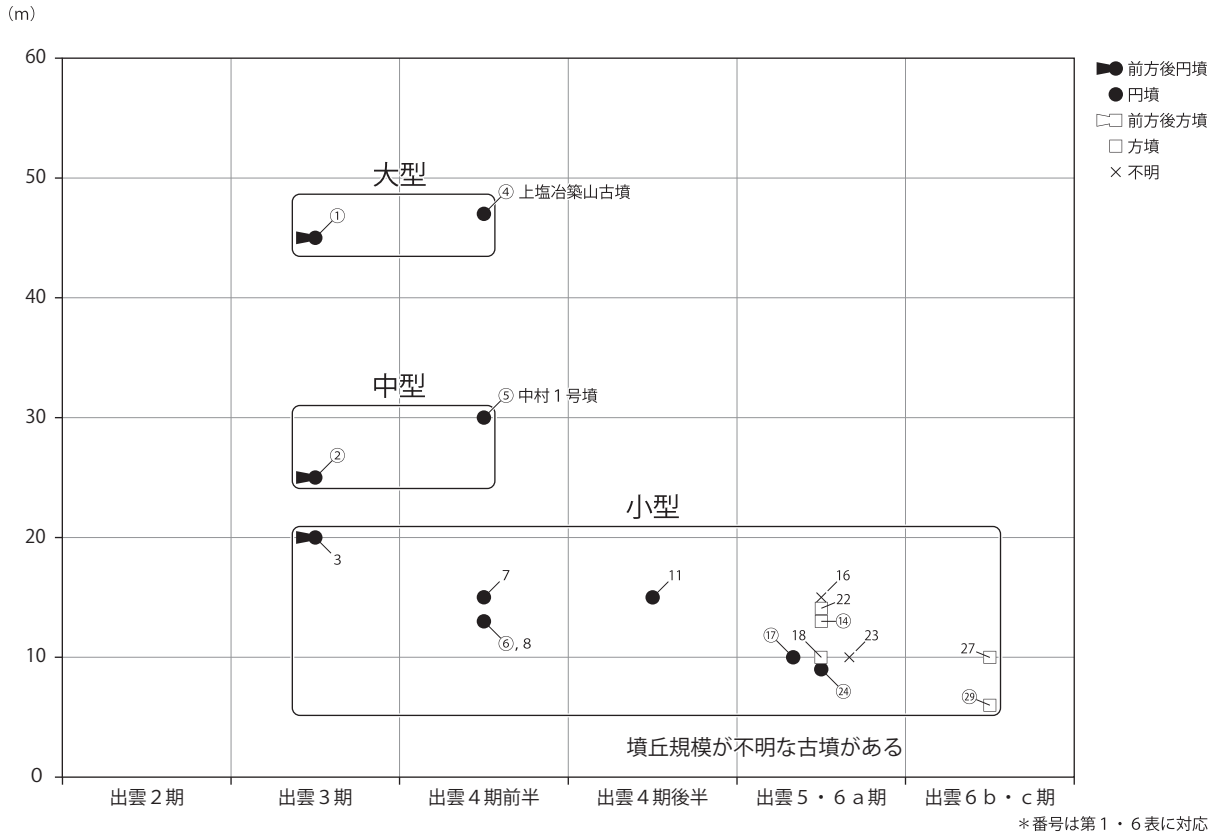
（１）　出雲における主丘規模比較

まず，墳丘規模の分類を行う。発掘調査で墳丘規模が明確になっている古墳は少ないが，測量調査により規模が推定されている（第１・６表）。また，前方後円墳や円墳など墳形によっ単純な規模比較が難しいと考えられることから，前方後円墳や前方後方墳は主丘部（後円部や後方部）の規模を採用し，他の円墳や方墳と比較する。計測数値は円墳が直径，方墳は長辺を採用している。また，埋葬施設が横穴式石室と推定されるものを対象にした。そして，墳形についても検討した。

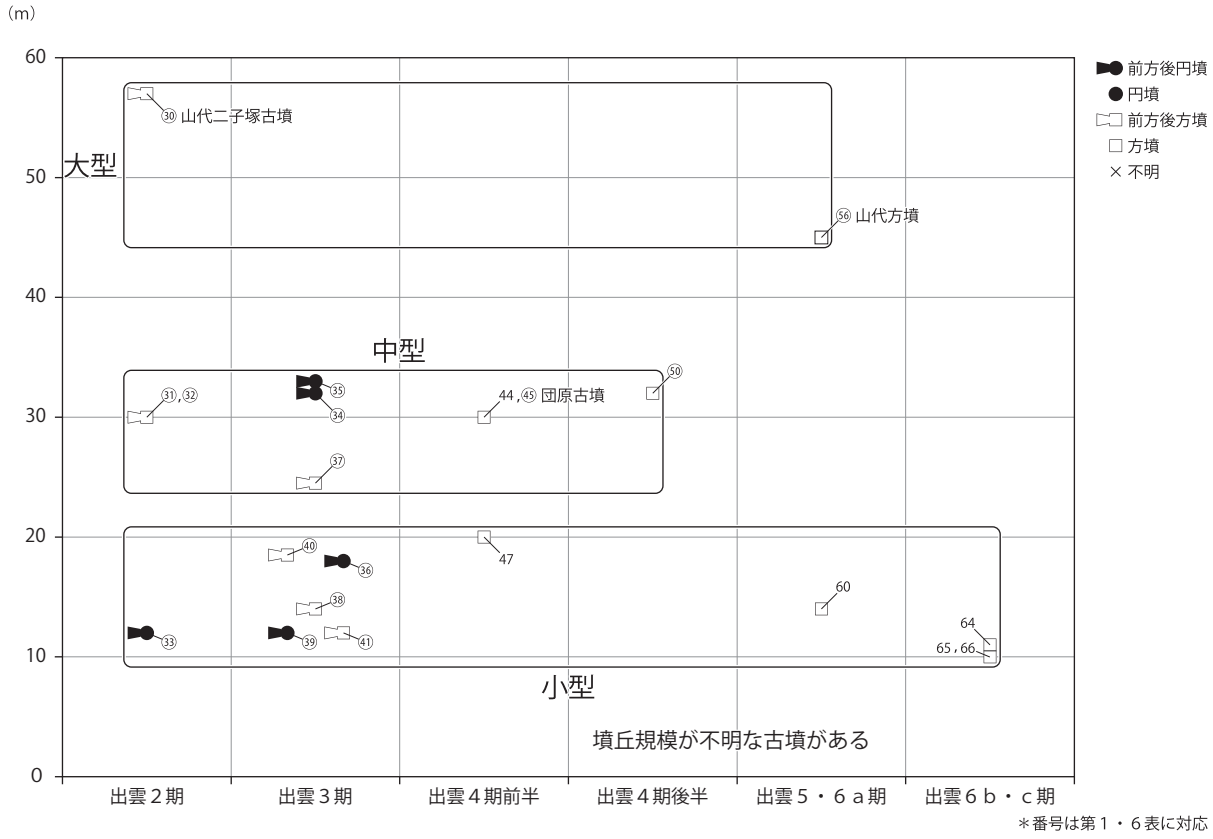
出雲西部では主丘規模が６～ 47 ｍの範囲にある（第１表）。また，出雲東部では主丘規模が 10 ～ 57 ｍの範囲にある（第６表）。それらは，出雲の東部と西部で差がなく，大型，中型，小型の３つに分類できる（第６・７図）。大型は 45 ～ 47 ｍ，中型は 25 ～ 33 ｍ，小型は６～ 20 ｍとなる（第 11 ～ 16 表）。

（２）　出雲西部の主丘規模と墳形

出雲西部では出雲２期に横穴式石室墳はない。出雲３期には，大型の今市大念寺古墳，中型の妙蓮寺山古墳，小型の半分古墳があり，３段階の階層構造がある。これらの墳形は前方後円墳である。



第６図　出雲西部における主丘規模比較



第７図　出雲東部における主丘規模比較

第 11 表　出雲西部における大型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模（m）括弧内は全長	
出雲3期	①	今市大念寺古墳	前方後円墳	45（92）	45 ～ 47
出雲4期前半	④	上塩冶築山古墳	円墳	47	

第 12 表　出雲東部における大型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模（m）括弧内は全長	
出雲2期	㉚	山代二子塚古墳	前方後方墳	57（94）	45 ～ 57
出雲5期	㊻	山代方墳	方墳	45	

第 13 表　出雲西部における中型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模（m）括弧内は全長	
出雲3期	②	妙蓮寺山古墳	前方後円墳	25（49）	25 ～ 30
出雲4期前半	⑤	中村1号墳	円墳	30	

第 14 表　出雲東部における中型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模（m）括弧内は全長	
出雲2期	㉛	薄井原古墳2号石室	前方後方墳	30（50）	25 ～ 33
	㉜	薄井原古墳1号石室	前方後方墳	30（50）	
出雲3期	㉞	手間古墳	前方後円墳	32（66）	
	㉟	東淵寺古墳	前方後円墳	33（62）	
	㊲	御崎山古墳	前方後方墳	25（40）	
出雲4期前半	44	朝酌岩屋古墳	方墳	30	
	㊺	団原古墳	方墳か	30？	
出雲4期後半	㊿	向山1号墳	方墳	32	

第 15 表　出雲西部における小型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模（m）括弧内は全長	
出雲3期	3	半分古墳	前方後円墳	20（34以上）	6 ～ 20
出雲4期前半	⑥	放レ山古墳	円墳	13	
	7	刈山5号墳	円墳	15	
	8	刈山4号墳	円墳	13	
	9	山根垣古墳	円墳	17	
出雲4期後半	11	小谷下古墳	円墳	15	
出雲5・6a期	⑭	美談神社2号墳	方墳	13	
	16	小坂古墳	？	15？	
	⑰	出西小丸1号墳	円墳	10	
	18	佐皿谷奥古墳	方墳	10	
	22	寺山1号墳	方墳	14	
	23	大前山古墳	？	10？	
	㉔	上石堂平1号墳	円墳？	9	
出雲6b・c期	27	大寺2号墳	方墳	10	
	㉙	三田谷3号墳	方墳	6	

第 16 表　出雲東部における小型の古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模（m）括弧内は全長	
出雲2期	㉝	林 43 号墳	前方後円墳	12（18）	10 ～ 20
出雲3期	㊱	椎山1号墳	前方後円墳	18（33）	
	㊳	岡田山1号墳	前方後方墳	14（24）	
	㊴	田和山1号墳	前方後円墳	12（20）	
	㊵	古天神古墳	前方後方墳	18.5（27）	
	㊶	伊賀見1号墳	前方後円墳	12（25）	
出雲4期前半	47	林8号墳	方墳	20	
出雲4期後半	51	飯梨穴神古墳	方墳？	18 未満	
出雲5・6a期	60	栗坪1号墳	方墳	14	
出雲6b・c期	64	若塚古墳	方墳	11	
	65	鏡北廻古墳	方墳	10	
	66	廻原1号墳	方墳	10	

出雲4期前半の出雲西部では大型の上塩冶築山古墳，中型の中村1号墳，小型の放レ山古墳の3段階の階層構造がある。これらの墳形は円墳である。

出雲4期後半には小型の小型の小谷下古墳のみしかわかっていない(5)。

出雲5・6a期には小型のみしかわかっていない(6)。墳形は，円墳に加えて方墳が採用されている。この時期にⅢ類石室の採用に伴い，墳形も方墳を採用していると考えられよう。

出雲6b・c期には出雲の東部と西部で小型のみで階層構造はみられない。墳形は，円墳はなく方墳のみである。

以上のことから，出雲西部の墳丘規模と墳形についてまとめると，出雲3期と4期前半に3段階の階層構造がある。そして，墳形は前方後円墳あるいは円墳で，前方後円墳の採用は出雲3期までであることがわかる。出雲4期後半と出雲5・6a期には，中型以上の古墳があると推定すると2段階程度の階層構造が認められる。出雲5・6a期には新たに方墳が採用され，出雲6b・c期には小型の方墳のみとなり，階層構造は認められない。

（２）　出雲東部の主丘規模と墳形

出雲２期には，大型の山代二子塚古墳と中型の薄井原古墳と小型の林 43 号墳があり，３段階の階層構造が認められる。墳形は前方後方墳と前方後円墳がある。

出雲３期には，中型の御崎山古墳と小型の岡田山１号墳などの２段階の階層構造がある。墳形は前方後方墳と前方後円墳がある。

出雲４期前半には，中型の朝酌岩屋古墳と小型の林８号墳などの２段階の階層構造がある。墳形は方墳である。

出雲４期後半では，中型の向山１号墳のみしかわかっていない。墳形は方墳である。

出雲５・６ａ期には，大型の山代方墳，小型の栗坪１号墳の２段階の階層構造がある。墳形は方墳である。

出雲６ｂ・ｃ期には，小型の方墳のみで階層構造はみられない。

以上のことから，出雲東部の墳丘規模と墳形についてまとめると，出雲２～５・６ａ期までに３段階あるいは２段階の階層構造が認められ，６ｂ・ｃ期には小型のみで階層構造は認められないようだ。墳形は，出雲２～３期にかけて，前方後方墳か前方後円墳が採用され，出雲４～６ｂ・ｃ期には方墳が採用されている。したがって，前方後方墳及び前方後円墳の採用は出雲３期までである。

（３）　出雲の東部と西部の主丘規模と墳形

以上の検討の結果，出雲の東部と西部の墳丘規模からみた階層構造は，出雲２～５・６ａ期にかけて２～３段階あり，出雲６ｂ・ｃ期にはないことがわかる[(7)]。

墳形については，出雲西部は出雲３～４期には円形を基調としているが，出雲東部では出雲２～３期に円形と方形を基調とする。前方後円墳及び前方後方墳の採用は出雲３期までで，出雲４期の出雲東部では方墳が，西部では円墳が採用されている。出雲西部の方墳の採用は，東部より遅れⅢ類石室の導入と同時期の出雲５・６ａ期からであろう。

したがって，墳丘規模に表現された出雲の墳丘階層の中で，中村１号墳の墳丘は，中型の規模であることがわかる。

先に玄室規模の比較で問題とした山代方墳は，墳丘規模が大型となり，最高首長にふさわしい規模である。そうすると，玄室規模と墳丘規模が合致していないと考えられ，玄室規模のみや墳丘規模のみで，階層構造を検討することが難しいことに気づく。

５　玄室と墳丘の関係

（１）　玄室と墳丘規模の組合せからみた階層構造

これまで，玄室と墳丘規模をそれぞれを検討してきたが，ここでは，それらの組合せについて検討し，階層構造を明らかにしてみたい。具体的には，玄室規模分類の超大型・大型・中型・小型・超小型と，墳丘規模分類の大型・中型・小型を組合わせの状況から，階層構造について検討してみたい。

玄室と墳丘規模の組合せの状況を東西出雲にわけて示した（第 17・18 表）。そして，その組合せは現状では８種類ある。それらを大まかにＡ～Ｃ類に分類した（第 19 表）。

Ａ１類：（玄）超大型・（墳）大型，（玄）大型・（墳）大型のもの。
Ａ２類：（玄）大型・（墳）中型，（玄）中型・（墳）大型のもの。
Ｂ１類：（玄）中型・（墳）中型のもの。
Ｂ２類：（玄）中型・（墳）小型のもの。
Ｃ類：（玄）小型・（墳）小型，（玄）超小型・（墳）小型のもの。

この分類を須恵器型式（時期）ごとにみると，古墳築造に関して，出雲地域において出雲３～５・６ａ期の間はＡ～Ｃ類の３段階の階層構造が認められるが，出雲６ｂ・ｃ期にはＣ類のみで，階層構造が認められない（第 20 表）。

この分類で，出雲４期前半の中村１号墳はＢ類となり，出雲では上位から見て２番目の階層にあると推定できる。また，その中でもＢ１類で，Ｂ類の中でも階層が高いと考えられる。

出雲５期の山代方墳の時期には，出雲西部に上塩冶地蔵山古墳が築造されている。前者は中型の玄室，後者は大型の玄室である。後者の墳丘規模は現地の状況から推定すると前者のように大型にはならないが，中型の墳丘規模を持つ可能性は十分にある。そうすると，階層分類では両者ともＡ２類になる可能性がある。したがって，渡辺が指摘している「カムド氏」が「オウ氏」によって屈服した確たる証拠はみあたらない。そして，その後の出雲６ｂ・ｃ期に出雲西部には小型化したⅠ類石室が築造されることもそれを首肯させる証拠となろう。

（２）　玄室と墳丘の築造

玄室と墳丘規模の組合せをみると，基本的には玄室≧墳丘 [例えば（玄）大型・（墳）大型や，（玄）大型・（墳）中型] となる。超小型はⅢ類石室の出雲６ｂ・ｃ期のみにあり，基本的には小型の中で考えることができよう。このような状況の中で，山代方墳のみが玄室＜墳丘 [（玄）中型・（墳）大型] となり，特異な状況を示している。また，多くの玄室が墳丘の中心に築かれるのに対し，山代方墳や栗坪１号墳は，墳丘の中心からはずれた位置に玄室が築造されている。

このように，出雲における石室と墳丘の築造において，山代方墳が特異であることがわかる。既に研究史で触れたように，山代方墳の特異性については，渡辺貞幸が整美な堀と外堤土塁を備えた大型方墳であることを理由に，その築造の背景に大和政権中枢と密接な関係を結んでいたと指摘している。そこで，石室と墳丘の位置関係について，全国的な視野で検討している青木敬の論考を参考とし，出雲における古墳築造について検討してみたい。青木は古墳築造で最も優先される事項を３つに分類している。

墳丘優先型：前期古墳以来の墳丘規模を優先するもの（埋葬施設が墳丘の中心にないもの）
石室優先型：後期古墳からはじまる横穴式石室を優先するもの（横穴式石室の玄室が墳丘の中心にない）
折衷型：墳丘・横穴式石室の双方を優先するもの（墳丘上段に横穴式石室が構築され，かつ墳丘の中央に玄室がつくられるもの）

そして，７世紀になると，関東地方以外に折衷型および石室優先型だけを採用するようになり，中央部埋葬の意識が列島の広い地域に浸透し，関東及び東北地方には，墳丘優先型が顕著に現れてくると指摘している（青木 2007）。

第 17 表　出雲東部における玄室と墳丘規模の関係

時期	番号	古墳名	玄室面積の分類	墳丘規模の分類	玄室と墳丘規模の組合せ	玄室と墳丘分類
出雲２期	㉚	山代二子塚古墳	―	大型	・大	A
	㉛	薄井原古墳２号石室	大型	中型	大・中	A２
	㉜	薄井原古墳１号石室	大型	中型	大・中	A２
	㉝	林 43 号墳	中型	小型	中・小	C
出雲３期	㉞	手間古墳	―	中型	・中	
	㉟	東淵寺古墳	―	中型	・中	
	㊱	椎山１号墳	―	小型	・小	
	㊲	御崎山古墳	大型	中型	大・中	A２
	㊳	岡田山１号墳	中型	小型	中・小	B２
	㊴	田和山１号墳	中型	小型	中・小	B２
	㊵	古天神古墳	小型	小型	小・小	C
	㊶	伊賀見１号墳	小型	小型	小・小	C
出雲４期前半	㊷	岩屋後古墳	大型	―	大・	A
	43	塩津神社古墳	大型	―	大・	A
	44	朝酌岩屋古墳	大型	中型	大・中	A２
	㊺	団原古墳	中型	中型	中・中	B１
	46	太田１号墳	中型	―	中・	
	47	林８号墳	中型	小型	中・小	B２
	48	池の尻古墳	小型	―	小・	C
	49	朝酌小学校校庭古墳	小型	―	小・	C
出雲４期後半	㊿	向山１号墳	中型	中型	中・中	B１
	51	飯梨穴神古墳	中型	小型	中・小	B２
	52	太田２号墳	中型	―	中・	
出雲５・６ａ期	53	永久宅後古墳	大型	―	大・	A
	54	飯梨岩舟古墳	中型	―	中・	
	㊺	西宗寺古墳	中型	―	中・	
	㊻	山代方墳	中型	大型	中・大	A２
	57	雨乞山古墳	中型	―	中・	
	58	葉佐間古墳	中型	―	中・	
	59	太田５号墳	中型	―	中・	
	60	栗坪１号墳	中型	小型	中・小	B２
	61	太田４号墳	中型	―	中・	
	62	太田３号墳	小型	―	小・	C
	63	川原古墳	小型	―	小・	C
出雲６ｂ・ｃ期	64	若塚古墳	超小型	小型	超小・小	C
	65	鏡北廻古墳	超小型	小型	超小・小	C
	66	廻原１号墳	超小型	小型	超小・小	C

第 18 表　出雲西部における玄室と墳丘規模の関係

時期	番号	古墳名	玄室面積の分類	墳丘規模の分類	玄室と墳丘規模の組合せ	玄室と墳丘分類
出雲３期	①	今市大念寺古墳	超大型	大型	超大・大	A１
	②	妙蓮寺山古墳	大型	中型	大・中	A２
	3	半分古墳	小型	小型	小・小	C
出雲４期前半	④	上塩冶築山古墳	超大型	大型	超大・大	A１
	⑤	中村１号墳	中型	中型	中・中	B１
	⑥	放レ山古墳	中型	小型	中・小	B２
	7	刈山５号墳	中型	小型	中・小	B２
	8	刈山４号墳	中型	小型	中・小	B２
	9	山根垣古墳	中型	小型	中・小	B２
出雲４期後半	10	宝塚古墳	大型	―	大・	A
	11	小谷下古墳	中型	小型	中・小	B２
	12	塚山古墳	中型	―	中・	B？
出雲５・６ａ期	13	上塩冶地蔵山古墳	大型	中型？	大・中？	A２
	⑭	美談神社２号墳	中型	小型	中・小	B２
	15	大梶古墳	中型	―	中・	
	16	小坂古墳	小型	小型	小・小	C
	⑰	出西小丸１号墳	小型	小型	小・小	C
	18	佐叺谷奥古墳	小型	小型	小・小	C
	19	山崎古墳	中型	―	中・	B？
	20	奥屋敷古墳	中型	―	中・	B？
	21	道脇古墳	小型	―	小・	C
	22	寺山１号墳	小型	小型	小・小	C
	23	大前山古墳	小型	小型	小・小	C
	㉔	上石堂平１号墳	小型	小型	小・小	C
出雲６ｂ・ｃ期	25	光明寺２号墳	小型	―	小・	C
	26	高野１号墳	小型	―	小・	C
	27	大寺２号墳	小型	小型	小・小	C
	28	石臼古墳	小型	―	小・	C
	㉙	三田谷３号墳	小型	小型	小・小	C

第 19 表　玄室と墳丘規模の組合せと分類

玄室と墳丘規模の分類の組合せ	分類
超大・大	A１
大・大	
大・中	A２
中・大	
中・中	B１
中・小	B２
小・小	C
超小・小	

第 20 表　東西出雲における玄室と墳丘規模の組合せ関係

時期と地域と分類	出雲２期		出雲３期		出雲４期前半		出雲４期後半		出雲５・６ａ期		出雲６ｂ・ｃ期	
	東部	西部	東部	西部	東部	西部	東部	西部	東部	西部	東部	西部
A１類	○			●	○	●		○	○			
A２類	●		●	●					●	○		
B１類					●	●	●					
B２類			●		●	●		●	●	●		
C類	●		●	●	●				●	●	●	●

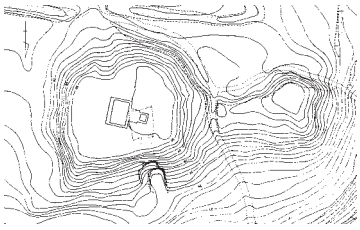
●確実なもの，○不確実なもの

それでは，青木の分類を基に出雲の状況をみてみたい（第８～10図）。Ⅰ類石室の中村１号墳は，石室を基盤層から築造し，玄室が墳丘の中心にある。したがって，石室優先型である。出雲におけるⅠ類・Ⅱ類石室の多くは石室優先型と推定される。次にⅢ類石室をみてみよう。古天神古墳は，石室が墳丘中心及び上部に築造されていて，折衷型である。林８号墳は，石室を基盤層から築造し，玄室が墳丘の中心にあり，石室優先型である。Ⅲ類石室をもつ山代方墳と栗坪古墳は，墳丘の中心に石室が築造されていないので，墳丘優先型となる。つまり，出雲ではⅠ・Ⅱ類石室をもつ古墳が基本的に石室優先型であるのに対し，Ⅲ類石室の古墳には墳丘優先型，折衷型，石室優先型の各類型が存在することがわかる。墳丘の中心に玄室を置くことが主流の中で，玄室が墳丘の中心に築造されない山代方墳と栗坪古墳は特異な状況を示している。

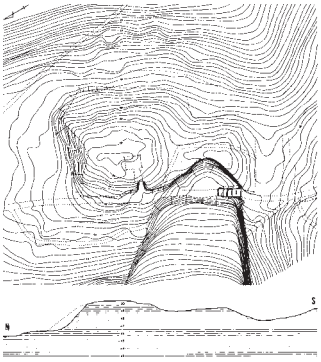
＊番号は第１・６表に対応，丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの，括弧内は階層分類と古墳築造意識

第８図　出雲東部における出雲２期の石室と墳丘の位置（１：1,000）

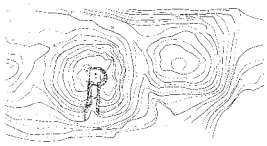
出雲３期



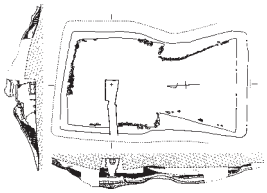
㊲　御崎山古墳　（Ａ２・石室優先型）



㊵　古天神古墳　（Ｃ・折衷型）

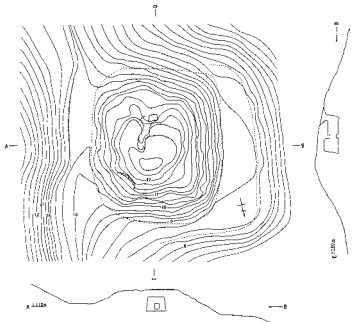


㊶　伊賀見１号墳　（Ｃ・石室優先型）



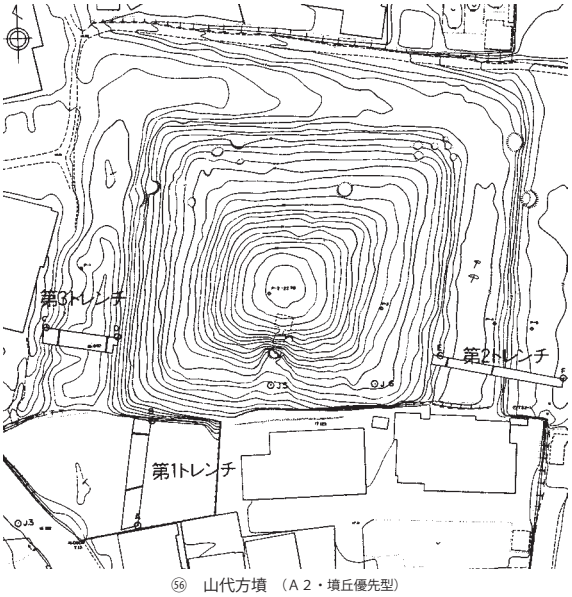
㊳　岡田山１号墳　（Ｂ２・石室優先型）

出雲４期前半

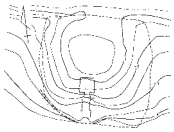


47　林８号墳　（Ｂ２・石室優先型）

出雲５・６ａ期



㊻　山代方墳　（Ａ２・墳丘優先型）

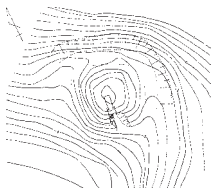


60　栗坪１号墳　（Ｂ２・墳丘優先型）

出雲６ｂ・ｃ期

64　若塚古墳　（Ｃ・石室優先型）

65　鏡北廻古墳　（Ｃ・石室優先型）

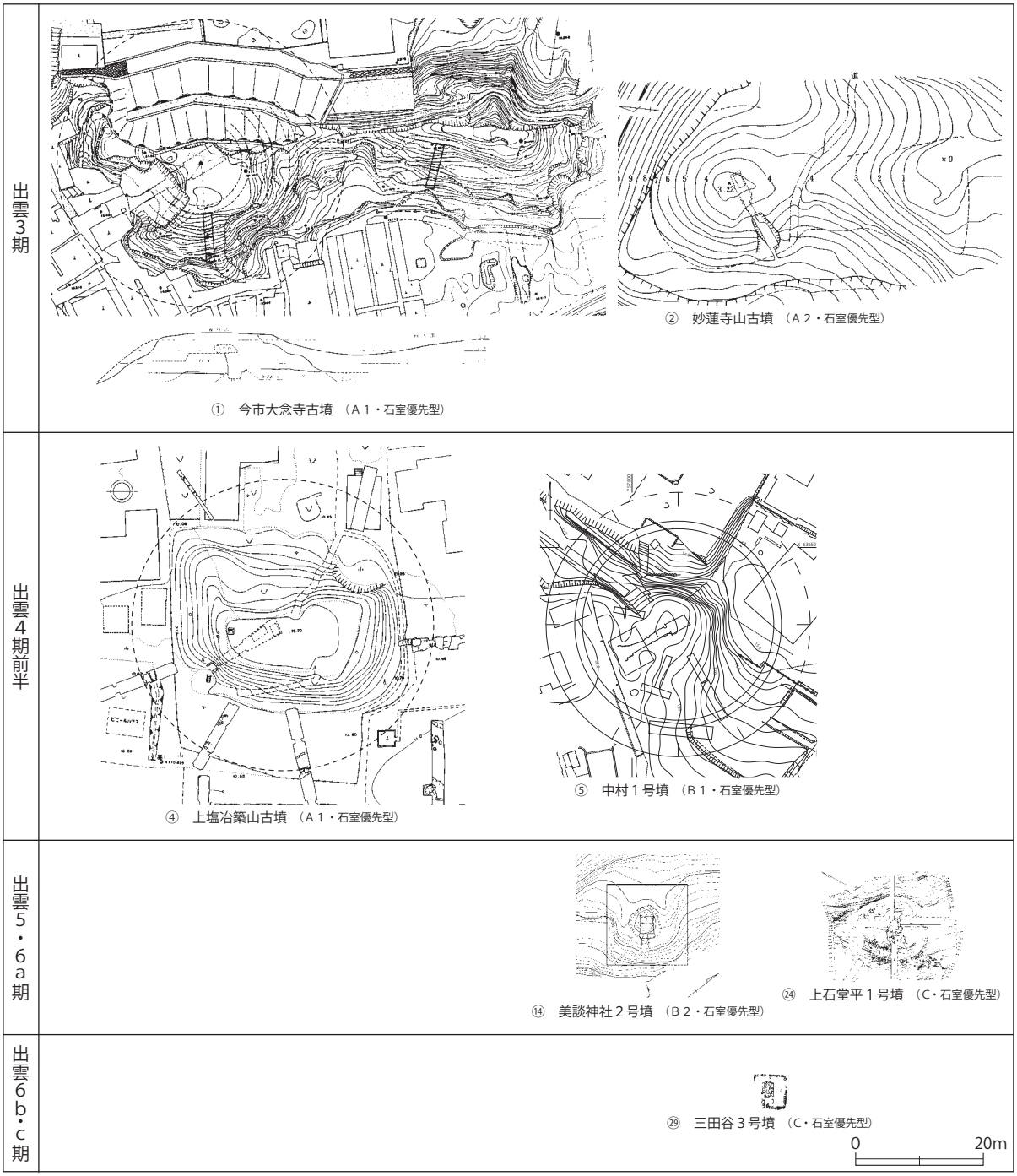


66　廻原１号墳　（Ｃ・石室優先型）

0　20m

＊番号は第１・６表に対応，丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの，括弧内は階層分類と墳丘築造意識

第９図　出雲東部における出雲３～６期の石室と墳丘（１：1,000）



＊番号は第1・6表に対応，丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの，括弧内は階層分類と古墳築造意識

第10図　出雲西部における出雲3～6期の石室と墳丘の位置（1：1,000）

山代方墳が築造された7世紀前半（出雲5・6a期）と同時期の近畿地方では，中央部埋葬を意識した石室優先型および折衷型のみが採用されている。したがって，山代方墳の築造意識と近畿地域の古墳築造意識は異なるようである。つまり，山代方墳の築造の背景に大和政権中枢との密接な関係が存在した，と渡辺は指摘するが，墳丘と石室との関係からは，そうは言えないのであろう。この山代方墳の墳丘優先型の出自については，他のⅢ類石室の石室と墳丘の関係を明らかにする必要があり，現状では判断ができないが，同時期の栗坪古墳が墳丘優先型であることは興味深い。

６．まとめ

本稿ではⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類石室の玄室面積および墳丘規模それぞれについて，客観的な基準を示して分類を行った。その結果，玄室規模と墳丘規模を組み合わせることが階層構造を考える上で重要であることを指摘した。具体的には，玄室と墳丘の規模分類を組合せ，Ａ～Ｃ類の階層分類を示した。出雲２～５・６ａ期にかけてＡ～Ｃ類が存在し，２～３段階の階層構造が認められる。しかし，出雲６ｂ・ｃ期にはＣ類のみとなり，階層構造は認められなくなる。本稿の目的である，中村１号墳の出雲における階層はＢ１類となり，上から２番目の階層であり，かつその中でも上位に位置したと考えられる。

本稿では，玄室と墳丘規模から古墳の階層構造を明らかにしたが，中村１号墳が複室構造の横穴式石室であることや副葬品が豊富であることも重要な視点である。また，大きな課題として残ることは，Ａ～Ｃ類に分類した古墳に埋葬される人物の実態解明であり，中村１号墳の被葬者の実態解明である。これらについては，本稿で行った基礎作業と組み合わせて，今後，検討してみたい。　　（坂本豊治）

註

（１）規模の分類には，小時期ごとに細分する方法もある。この方法は時期ごとに面積の分類基準ができ，詳細な検討が可能である。ただ，相対的な判断ができなくなる問題も含む。本稿では，分類基準が煩雑になることをさけた。

（２）出雲３期の中型（38・39）と小型（３）は近い数値であり，時期ごとに細分すれば同じ分類となる。

（３）神戸川左岸にある出雲４期後半の宝塚古墳の玄室面積は大型となる。この時期に，宝塚古墳よりも規模が大きい玄室はみつかっていない。神門川右岸の勢力が左岸の勢力よりも，常に優位に立っていたといえるのであろうか。

（４）美談神社２号墳（⑭）はⅢ類石室が変容したもの（Ⅲ’）である。この玄室面積は，典型的なⅢ類石室の中型のなかで最も大きく，大型に含めることもできる。ただ，石室平面が縦長長方形となるのはⅠ類石室の影響と考えられ，そのために規模が大きいようである。Ⅰ類石室の玄室規模にあてはめても中型の範疇に入ることから，Ⅲ類石室の分類でも中型と考えた。

（５）出雲西部の宝塚古墳の墳丘規模は不明であるが，現地の残丘から推定すると 30 m以上の規模で，中型か大型となろう。

（６）出雲西部の上塩冶地蔵山古墳の墳丘規模は不明であるが，現地から推定して 30 m未満の規模であると考えられる。玄室の奥壁か中央を墳丘の中心とした場合，最低でも 20 mの墳丘は必要である。したがって，中型規模の墳丘をもつと推定できよう。

（７）階層構造の変化の過程について次の２案が想定できる。案１は階層構造が３段階⇒２段階⇒１段階へと徐々に変化する，案２は３段階から１段階へ急激に変化する過程である。案１の場合，出雲西部では３段階から２段階の階層構造への変化が東部よりも遅れた可能性もある。しかし，検討資料が少ないので，現状ではこの判断はむずかしく，今後の課題としたい。

参考文献

青木　敬 2007「古墳における墳丘と石室の相関性」『日本考古学』第 23 号　41 ～ 65 頁

出雲考古学研究会編 1987『石棺式石室の研究』

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会　39 ～ 82 頁

大谷晃二 1999「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化財センター調査研究報告書 4　島根県古代文化センター　179 ～ 193 頁

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会　43 ～ 54 頁

大谷晃二 2001「出雲東部の大首長の性格と権力」『第 8 回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会　103 ～ 121 頁

角田徳幸 2008「出雲の石棺式石室」『古墳時代の実像』吉川弘文館　72 ～ 107 頁

白石太一郎 2009「古墳の墳丘における横穴式石室の位置について」『書陵部紀要』第 61 号 [陵墓篇]　宮内庁書陵部　1 ～ 20 頁

西尾克己・大国晴雄 1991『出雲平野の古墳』出雲市民文庫 9　出雲市教育委員会

西尾克己 1999「出雲西部における上塩冶築山古墳の石室と石棺の位置付け」『上塩冶築山古墳の研究』 島根県教育委員会・島根県古代文化センター　119 ～ 127 頁

西尾良一 1984「今市・大念寺古墳について」『ふぃ～るど・の～と』 6 号

西尾良一 1985「今市・大念寺古墳について」『ふぃ～るど・の～と』 8 号

西尾良一 1986「大社造と横穴式石室」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　333 ～ 372 頁

渡辺貞幸 1983「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題－測量調査の成果と今後の課題－」『山陰文化研究紀要』第 23 号　島根大学　213 ～ 240 頁

東森市良・永見　英・野坂俊之・金山尚志・大谷晃二・原　裕司 1996「安来市・飯梨穴神古墳－新たに発見された石棺式石室について－」

渡辺貞幸 1984「岡田山 1 号墳の現状と問題点」『島根考古学会誌』第 1 集　島根考古学会　85 ～ 91 頁

渡辺貞幸 1985「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究』第 1 号　島根大学山陰地域研究総合センター　1 ～ 16 頁

渡辺貞幸 1986 a「大念寺古墳の歴史的位置」『島根考古学会誌』第 3 集　島根考古学会　27 ～ 32 頁

渡辺貞幸 1986 b「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　221 ～ 238 頁

渡辺貞幸 1987「古墳時代の出雲　考古学からみた政治史」『季刊明日香風』第 22 号財団法人飛鳥保存財団　30 ～ 35 頁

渡辺貞幸 1995「弥生・古墳時代の出雲－『風土記』と考古学の接点－」『風土記の考古学』③『出雲風土記』の巻　同成社　67 ～ 86 頁

第３節　横穴式石室の閉塞からみた中村１号墳

１　はじめに

中村１号墳（出雲４期･TK209 型式期）の羨道部は，自然石が大量に積まれ完全に密閉されている（第１図３）。実際に，確認した閉塞の長さは 4.4 mであるが，床面との接点を考慮すると長さ約６.0m に及ぶと推定できる。閉塞石は，石室主軸方向に断面三角形状となるよう積まれ，奥側では約 50°の角度で急激に立ち上がり，最前部の羨道天井石に接している。石室の外側では，羨道天井石の上面が隠れる程度まで石が積まれ，そこから約 23°の角度で緩やかに傾斜する。羨道天井部の前端部から測ると，石室の内側には 1.2 m，外側には推定で 4.8 mの閉塞石が積まれている。つまり，石室外側の閉塞が長い。このような中村１号墳の閉塞は，出雲の中でどのように位置付けることができるか以下に検討する。

２　出雲における横穴式石室の閉塞

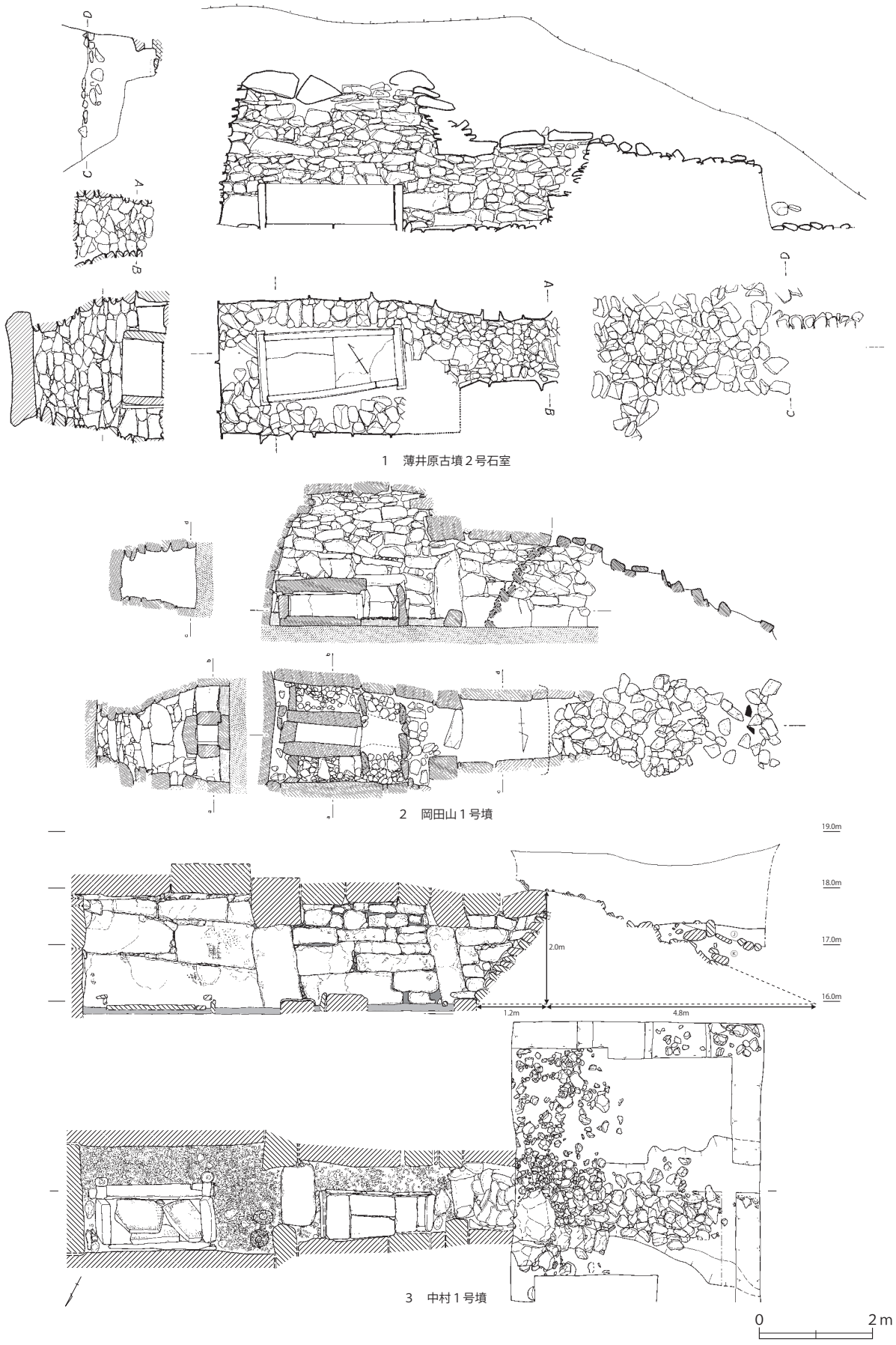
出雲において横穴式石室の閉塞状況がわかる例は少ない。中村１号墳とほぼ同じ閉塞状況は，同じⅠ類石室（第６章第１節参照）の松江市岡田山１号墳（出雲３期･TK43 型式期）にみることができる（第１図２）。閉塞は自然石で積まれ，長さ 5.1 mに及ぶ。内側では約 56°という急角度で立ち上がり，最前部の羨道天井石に接して完全に閉塞されていた。石室外側は，羨道天井石の上面が隠れる程度まで自然石が積まれ，そこから約 23°の角度で緩やかに傾斜する。岡田山１号墳の閉塞は完全な状態で発見されたが，調査時に取り除かれ，現存しない。

次に，横穴式石室の導入期の松江市薄井原古墳（出雲２期･TK10 型式期）の第２号石室をあげる（第１図１）。第２号石室はⅡ類石室で閉塞は自然石積みであり，長さは約 4.0 mに及ぶ。閉塞は羨道部の玄室袖より約 1.8 mから始まり，約 60°の角度で急激に立ち上がり，最前部の羨道天井石に接して完全に閉塞されている。石室の外側は，約８°の角度で，ほぼ水平に近い緩やな角度で傾斜している。閉塞の先端については未調査であり状況は不明であるが，推定すると垂直に近い角度で終わっているのであろう。第２号石室の閉塞は完全な残存状況をしていたようであるが，調査後に，閉塞が外されたようである。

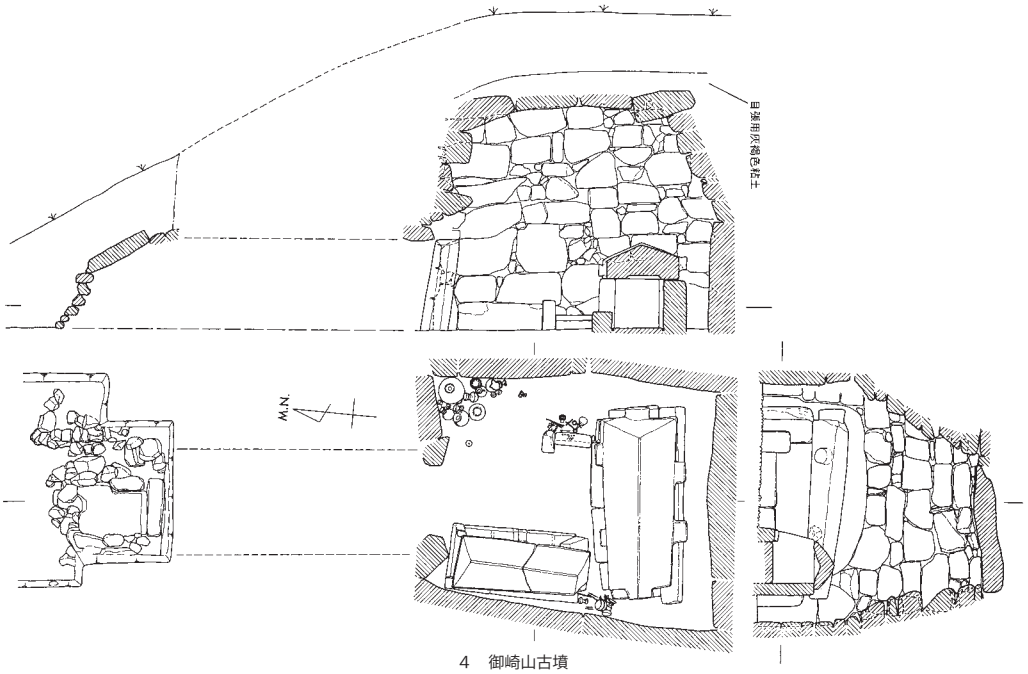
Ⅰ類石室の松江市御崎山古墳（出雲３期・TK43 型式期）は自然石と板石をつかって閉塞した事例である（第２図４）。羨道部における閉塞の始点は不明で閉塞全長も明らかでないが，閉塞石は良好に残存しているようである[(1)]。

中村１号墳を含めて以上の４基の横穴式石室は，羨道に自然石を積んで閉塞した事例である。次に，玄門と羨道それぞれを自然石あるいは板石で二重に閉塞した事例を示す。

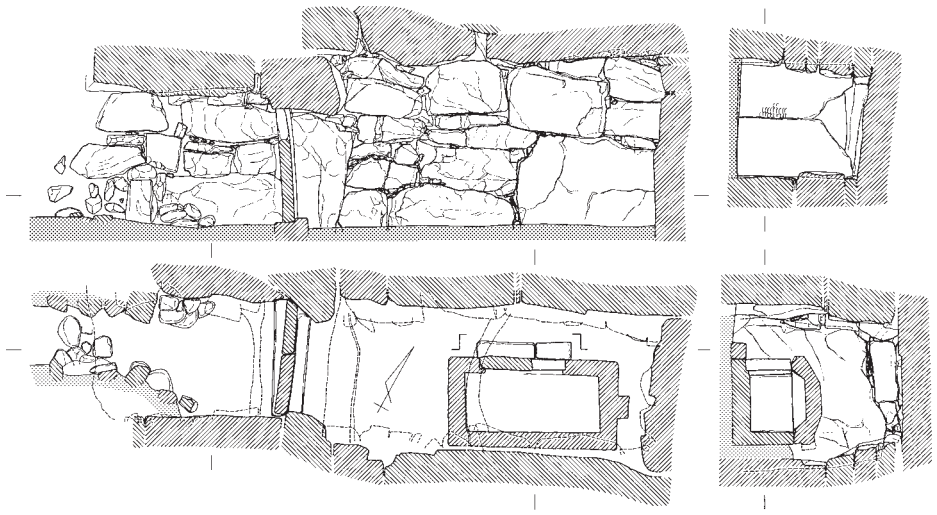
まず，Ⅰ類石室の出雲市妙蓮寺山古墳（出雲３期・TK43 型式期）をみてみたい（第２図５）。妙蓮寺山古墳は，玄門に板石２枚を立てた観音開きの閉塞があり，羨道は自然石積みで閉塞されている。類例には，前室玄門に板石２枚を立てたと推定されるⅠ類石室の出雲市今市大念寺古墳がある。床



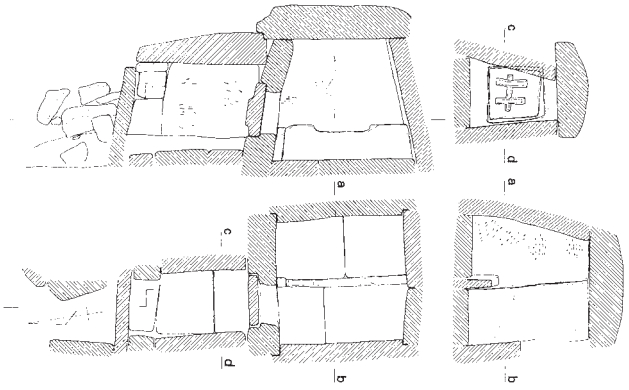
第１図　出雲における横穴式石室の閉塞部１（１：100）



4　御崎山古墳



5　妙蓮寺山古墳



6　伊賀見１号墳

0　2m

第２図　出雲における横穴式石室の閉塞部２（１：100）

面に残る梱石の加工によって観音開きの扉石であったことが推測できる（出雲市教育委員会 1984）。また，Ⅰ類石室の上塩冶築山古墳は，発見時の記録から，羨門は加工された大きな石と多数の石で閉塞されて，玄門部は切石を整然と積み上げて閉塞されていたと考えられている（渡辺貞幸 1999）。Ⅲ類石室の松江市伊賀見１号墳（出雲３期・TK43 型式期）は，玄門と羨門部を各々板石で閉塞する構造である（第２図６）。Ⅲ類石室の多くは二重の閉塞をもっていたと考えられる。しかし，これらの２重閉塞の状況が良好に依存している例はほとんどない。

以上にように，出雲で良好に閉塞が残存している事例をあげてみると，一重と二重の閉塞があることがわかる。その中で一重の閉塞は薄井原古墳２号石室（出雲２期）→岡田山１号墳（出雲３期）→中村１号墳（出雲４期）と系譜をたどることができる。これら３基の中で，中村１号墳の閉塞部が一番長く，厳重な閉塞である。

３　西日本における自然石による閉塞について

西日本における横穴式石室の羨道部の閉塞は，白石太一郎が以下のように分類している。

Ａ類：石室自体に閉塞施設のあるもの

（１）金属製の開き戸をもつもの

（２）石製の開き戸をもつもの

（３）木製の開き戸をもつもの

（４）その他

Ｂ類：石室自体に閉塞施設をもたないもの

（１）板石（扉石）をたてて閉塞したもの

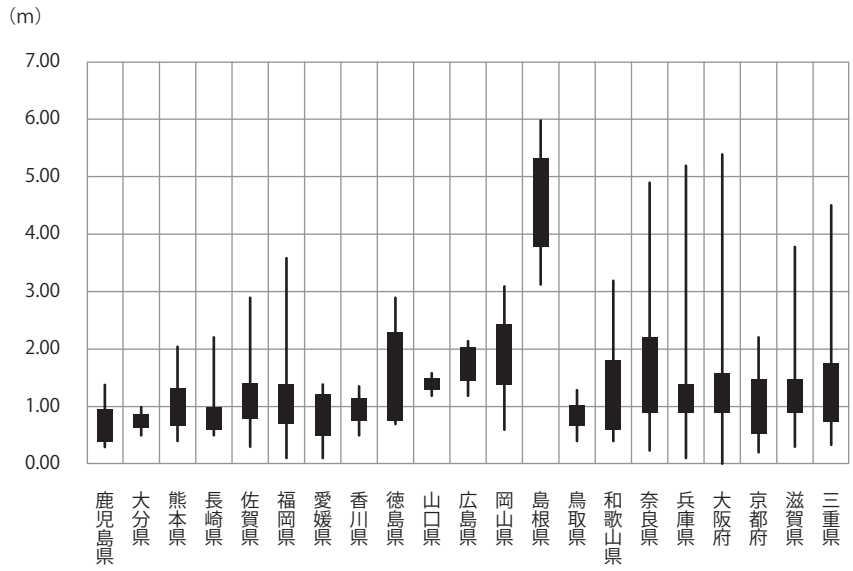
（２）羨道部に自然石塊を積み上げ封鎖したもの

白石はＡ類がきわめて特殊なもので，Ｂ類の類例がきわめて多く，これが横穴式石室の一般的な閉鎖法とし，中でもＢ（２）類が，最も普遍的な封鎖法であると指摘した（白石 1975）。

白石の分類に中村１号墳をあてはめると，Ｂ（２）類となり，特殊なものではないようであるが，西日本のＢ（２）類を検討することで，中村１号墳の閉塞部がもつ特徴を評価することができると考えられる。

横穴式石室の自然石による閉塞は，盗掘などによって完存している例はほとんどない。そこで，西日本の横穴式石室について残存している閉塞の長さを県別に計測して箱髭図で示した（第３図）。また，閉塞の長さが３ｍ以上のものを集成した（第１表）。残存の長さが，もともとの閉塞の長さを示しているとは限らない。しかし，上部は破壊されていても下部は元の長さを反映している可能性が高いと考えられる。また，閉塞部の調査事例が少ないと，長さの分布が偏ってしまうが，現状を整理しておきたい。

計測の結果，基本的に長さ１～２ｍ前後の閉塞が多いようであるが，おおむね３ｍを超える地域と３ｍ未満の地域がある。３ｍを越えるのは近畿地方，福岡県，島根県，岡山県である。特に３ｍを超えるものの中では，西日本で，中村１号墳の閉塞石の長さ６ｍ前後が最長となる。島根県内には３ｍ



第３図　西日本における自然石による閉塞の長さ

第１表　日本における３m以上の閉塞

場所	古墳名	土器の時期	閉塞部		玄室規模		墳形	墳丘規模（m）
			石の状態	長さ（m）	長辺（m）	短辺（m）		
島根県出雲市	中村1号墳	TK209	自然石	6.0 前後	3.1	1.9	円墳	30
大阪府八尾市	河内愛宕塚古墳	TK43	自然石	5.4	7.0	3.0	円墳	22.5
兵庫県養父市	万久里マシバ4号墳	TK209	自然石	5.2	5.0	1.9	円墳	27
島根県松江市	岡田山1号墳	TK43	自然石	5.1	2.8	1.8	前方後方墳	24
奈良県平群町	三里古墳	TK43	自然石	4.9	4.9	2.1	円墳か	12
奈良県天理市	龍王山古墳群 C 支群 3 号墳	TK43	自然石	4.7	6	1.7	円墳	18
奈良県斑鳩町	藤ノ木古墳	TK43	自然石	4.5 以上？	5.9	2.6	円墳	48
島根県松江市	御崎山古墳	TK43	自然石	4.6 未満	3.7	3.3	前方後方墳	50
大阪府羽曳野市	飛鳥千塚古墳群 A－12 号墳	TK43	自然石	4.5	3.4	2.1	不明	不明
奈良県御所市	條ウル神古墳	6世紀	自然石	4.4	7.0	2.8	不明	100 以上
奈良県天理市	龍王山古墳群H支群1号墳	TK43	自然石	4.1	4.5	2.4	円墳	15？
島根県松江市	薄井原古墳2号石室	TK10	自然石	4.0	4.3	2.2	前方後方墳	50
滋賀県高島市	北牧野2号墳	TK43	自然石	3.8	3.3	2.2	円墳	14
三重県津市	薬師谷4号墳	TK43	板石？・自然石	3.7	4.1	2.6	不明	不明
福岡県うきは市	楠名古墳	TK217	自然石・土砂	3.6	4.6	2.5	円墳	32
奈良県天理市	龍王山古墳群 B 支群 10 号墳	TK43～217	自然石	3.6	4.3	3.6	円墳	7～11
滋賀県高島市	北牧野3号墳	TK43～209	自然石	3.5	3.8	1.9	円墳	14
福岡県京都郡	山口南1号墳	TK209	自然石	3.3	5.5	2.6	円墳	26
滋賀県大津市	太鼓塚6号墳	TK209	自然石	3.3	2.5	2.4	不明	不明
奈良県葛城市	寺口忍海H－19 号墳	TK10	自然石	3.2	5.6	2.4	円墳	13
和歌山県和歌山市	大谷山 22 号墳	TK10	自然石	3.2	4.2	2.6	前方後円墳	80
岡山県総社市	こうもり塚古墳	TK43	自然石	3.1	7.7	3.6	前方後円墳	100
島根県松江市	薄井原古墳1号石室	TK10	自然石	3.1	3.9	2.3	前方後円墳	50
奈良県葛城市	寺口忍海H－5号墳	TK10	自然石	3.0	3.3	1.4	円墳	13
奈良県葛城市	平林古墳	TK43	自然石	3.0	5.0	2.9	前方後円墳	55
三重県津市	薬師谷 14 号墳	MT85	自然石	3.0	4.1	2.6	不明	不明
岡山県総社市	金子石塔塚古墳	TK209	自然石	3.0	5.5	3.6	円墳	26
福岡県春日市	西浦4号墳	TK209	自然石	3.0	2.6	2.3	円墳	16

未満の資料がないのが特異であるが，これは明確な資料がないためで３m未満のものも存在するであろう。また，４mを超えるもの数は，島根県が奈良県に次いで２番目に多い。すなわち，中村１号墳のみが閉塞が長いわけではなく，島根県，特に出雲の石室の閉塞が長いようだ。

なぜ，閉塞を長くする必要があるのであろうか。閉塞の長さが３m以上の横穴式石室の墳丘と玄室規模をみても，大型のもののみ閉塞が長いわけでもないようである（第１表）。したがって，被葬者

の階層によって閉塞の長さが決まるわけではない。

次に，閉塞の位置について検討してみよう。基本的に横穴式石室を密閉するために閉塞がなされることを考慮すると，閉塞は羨道天井石と接する必要がある。したがって，自然石による一重の閉塞は羨道部で行われる必要がある。実際に西日本の石室の閉塞位置は，羨道部内で収まるものがほとんどである（第4～6図）。閉塞の断面形は二等辺三角形や歪な三角形，長方形や台形状になるものなど様々であるが，それらは羨道部内で収まる。具体的には，羨道側壁の先端までである。

しかし，島根県の岡田山1号墳は羨道側壁の外側まで閉塞が延びてきている（第1図2）。中村1号墳の羨道側壁の先端は未確認であるが，確認した羨道側壁のレベルから推定すると閉塞の先端の方が，羨道側壁よりも長いことに間違いない。島根県の薄井原1号石室でも，羨道側壁の先端よりも閉塞が長く延びていた。したがって，これら3基は，西日本の中で石室の閉塞位置が特異であることがわかる。ただし，閉塞位置が前庭部まで延びる石室は，島根県内にあるだけではない。残存状況は良好ではないが，滋賀県の北牧野2号墳（TK43，第7図19）や兵庫県の万久里マシバ4号墳（TK209，第7図18）は閉塞が前庭部まで延びている例である。したがって，閉塞が前庭部まで延びる石室は，島根県だけではなく近畿地方にもあることがわかる。

以上のことから，閉塞が羨道部で収まるものと，前庭部まで延びるものがある。羨道部内で収まるものにも，奈良県の藤ノ木古墳（第5図13）や條ウル神古墳（第5図14）にように羨道が長く，そのため閉塞も長いものもある。いずれにせよ，古墳を完成させるためには石による閉塞の長短は関係ない。それは，石による閉塞をした後に，必ず羨門から前庭部を土で埋めるからである(2)。したがって，閉塞石の長さは機能的な意味があるわけではなく，むしろ，厳重に閉塞するという意識が表れた結果と考えておきたい。

4　西日本における横穴式石室の残存状況

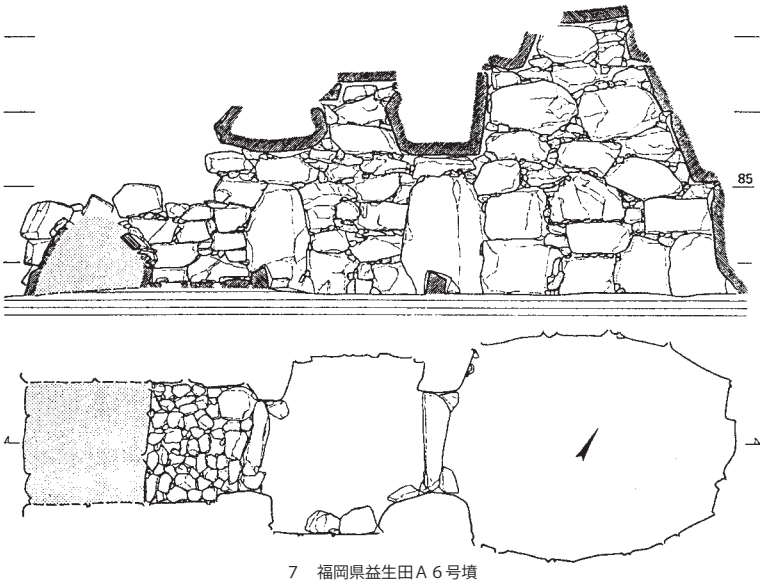
西日本の横穴式石室の閉塞について検討する中で，閉塞が良好に残存している例が少ないことに気づく。それは，羨道が出入口の機能をもつため，盗掘あるいは調査によって最初に破壊されるからである。言い換えれば，閉塞が良好に遺存していることは，石室の良好な残存状況を示すポイントとなろう。なぜなら，横穴式石室の閉塞は石室を完全に密閉するとても重要な機能をもっているからであり，閉塞が良好に残存すると同時に，天井石や側壁も破損が少ない状態でなければならない。そこで，中村1号墳の石室残存状況と西日本の石室の残存状況を比較してみたい。

中村1号墳は閉塞の石を取り除いていないため，閉塞時の状況をそのまま残している。また，玄室天井石の一部に軽微な破損がみられるのみで，石室の密閉状態が維持されている。

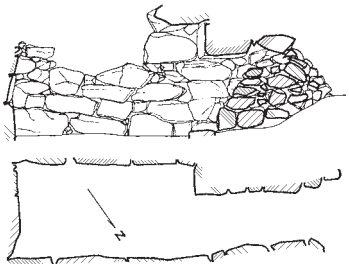
九州地方では発見時に密閉状態が認められた例として，福岡県王塚古墳があげられる（第8図20）。中村1号墳と同様に玄室の一部が開口して発見されたが，調査時に閉塞が外されている。

四国地方では，愛媛県葉佐池1・2号石室がある（第4図9・10）。これらは密閉状態を残していたが，調査時に閉塞部の一部が外されている。

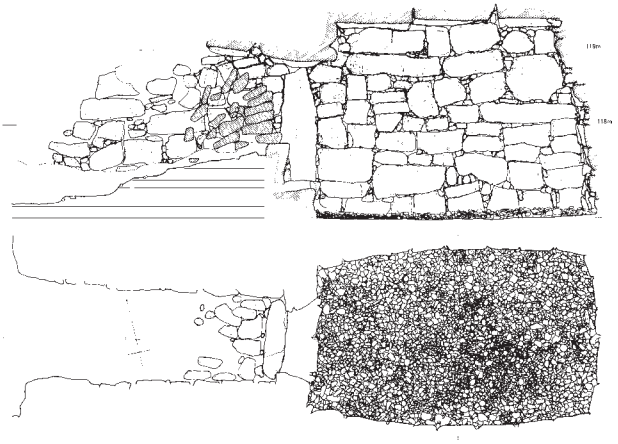
中国地方では，岡山県中宮1号墳（第5図12）と三輪山6号墳（第8図21），八幡大塚2号墳（第



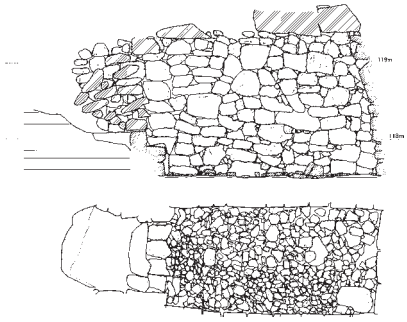
7　福岡県益生田Ａ６号墳



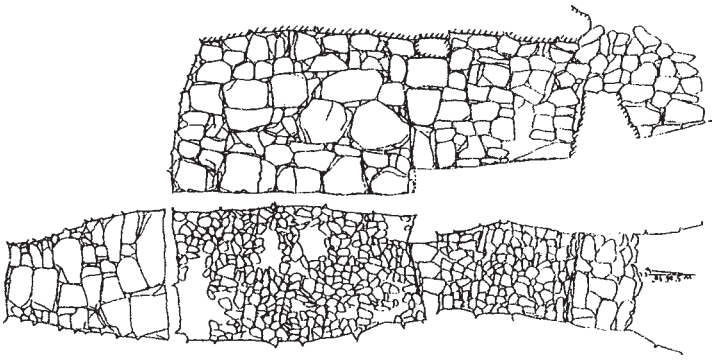
8　福井県虫山第１号墳



9　愛媛県葉佐池古墳２号石室



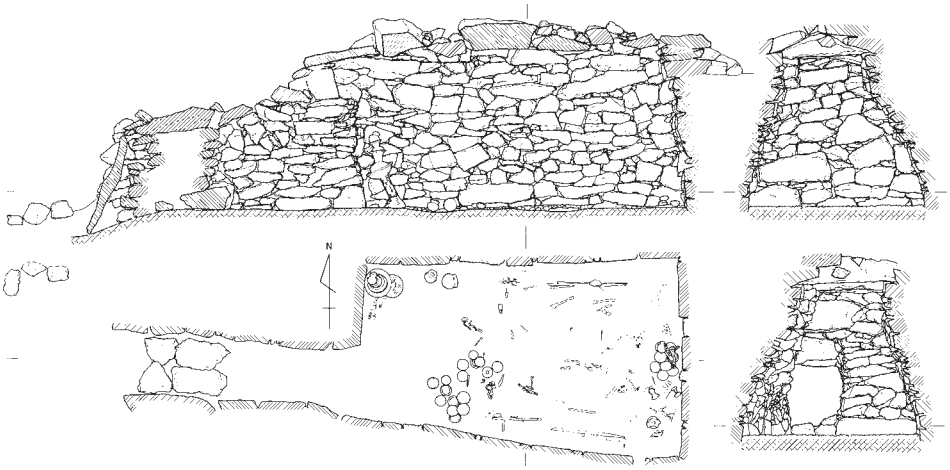
10　愛媛県葉佐池古墳１号石室



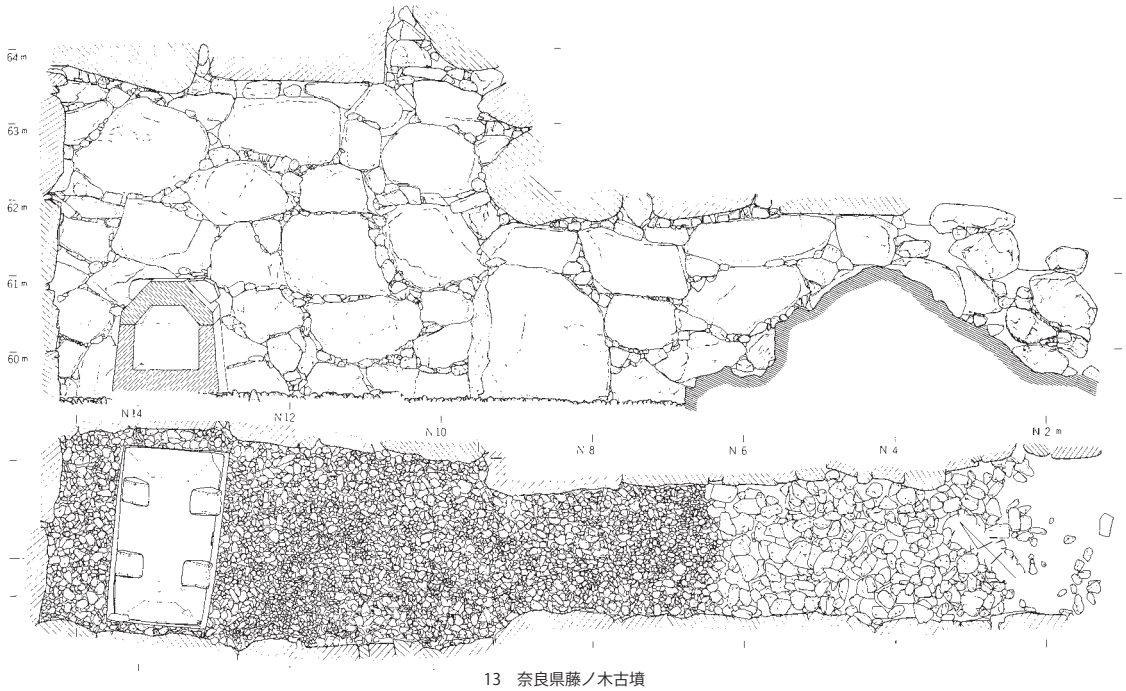
11　愛媛県大下田２号墳１号石室

0　2m

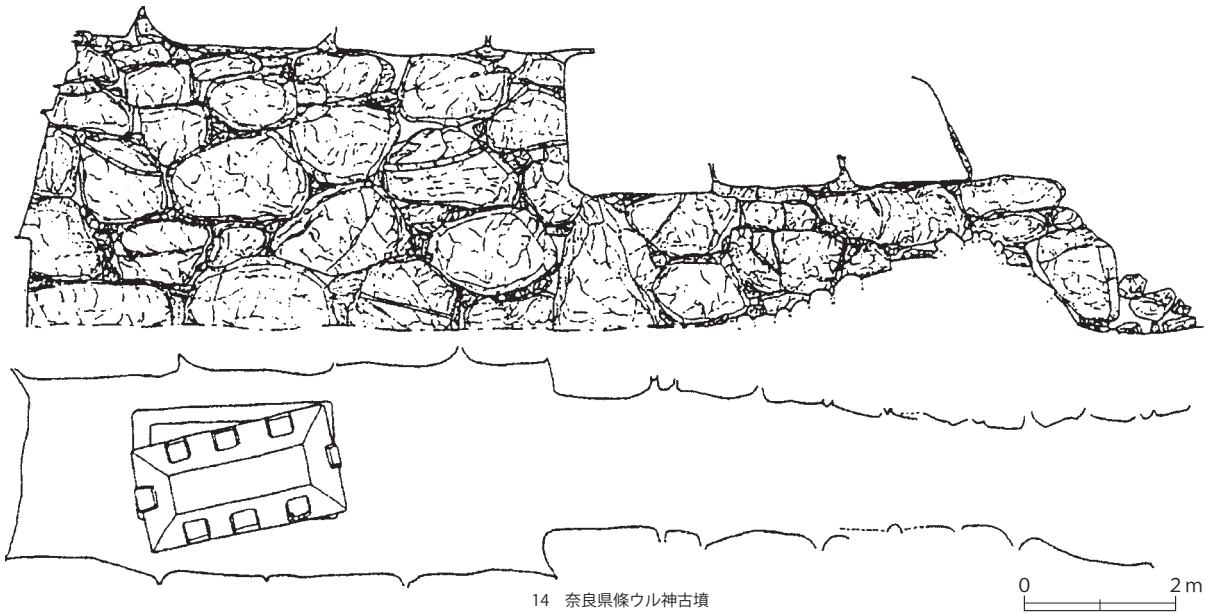
第４図　羨道部内の閉塞１（１：100）



12　岡山県中宮１号墳

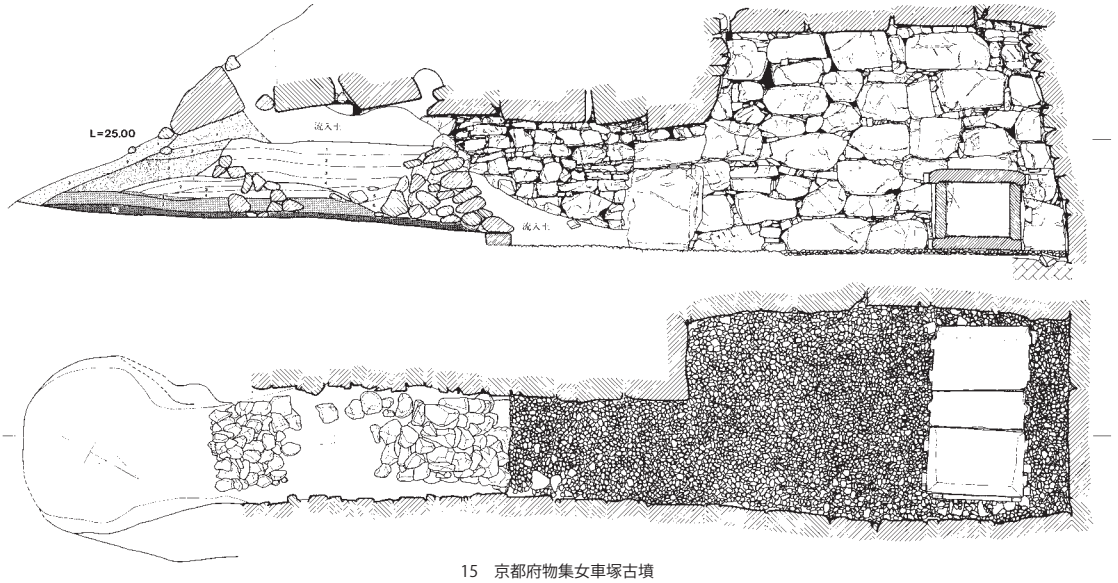


13　奈良県藤ノ木古墳

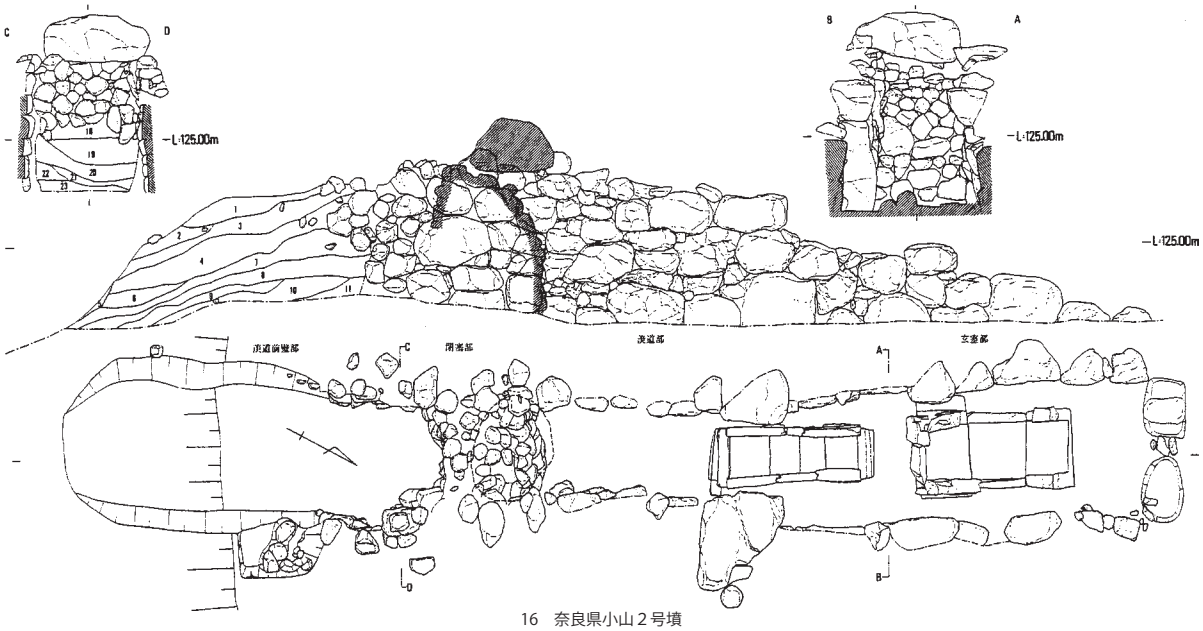


14　奈良県條ウル神古墳

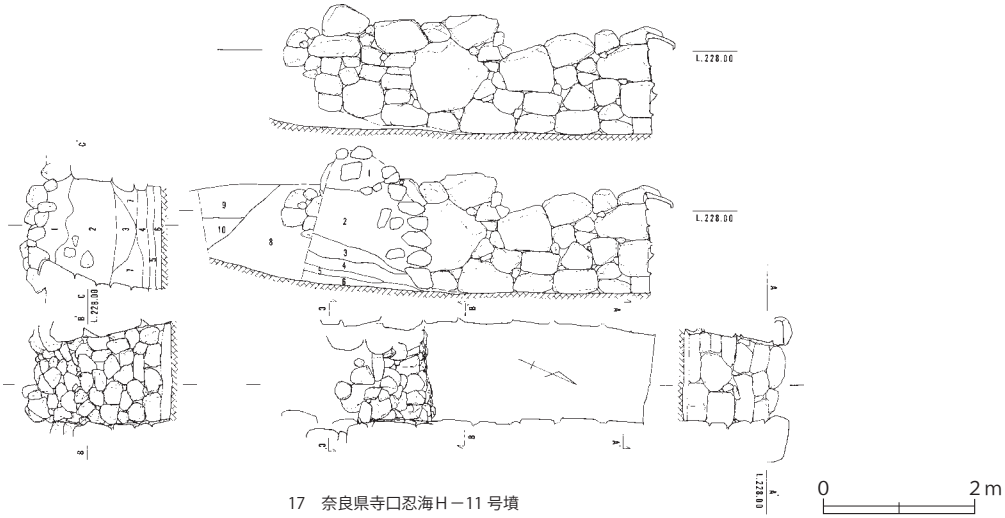
第５図　羨道部内の閉塞２（１：100）



15　京都府物集女車塚古墳

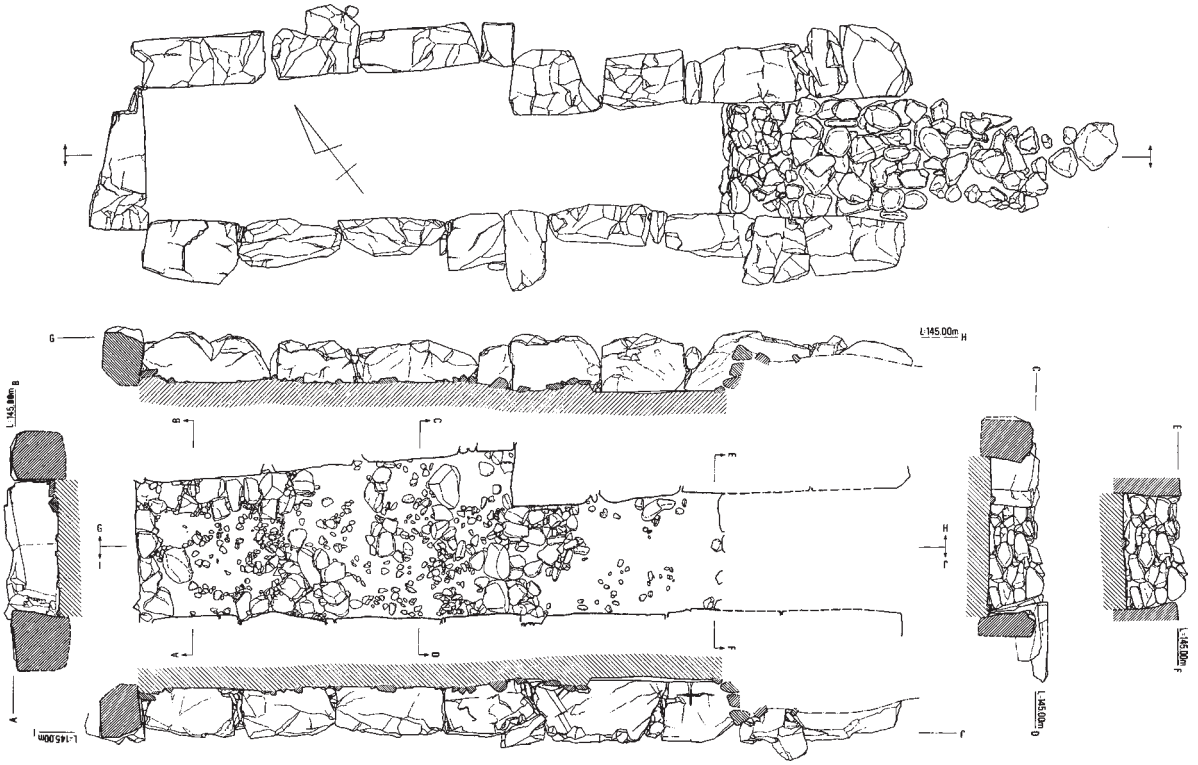


16　奈良県小山２号墳

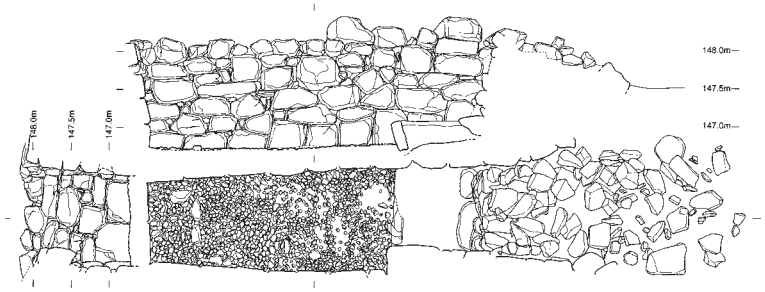


17　奈良県寺口忍海Ｈ－11 号墳

第６図　羨道部内の閉塞３（１：100）



18　兵庫県万久里マシバ4号墳



19　滋賀県北牧野2号墳

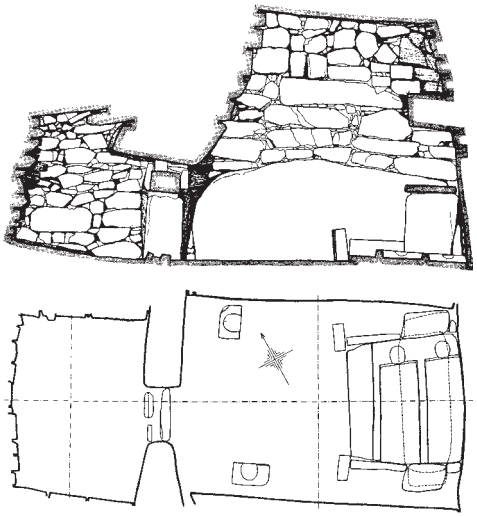
0　2m

第7図　前庭部まで伸びる閉塞（1：100）

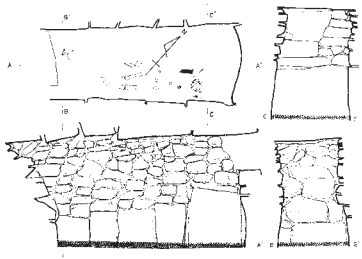
8図22）がある。これらも閉塞が外されたり，古墳自体が消滅したりしている。

近畿地方では，奈良県市尾墓山古墳（第8図23）がある。発見時には密閉性が高い状態であったが，閉塞の一部が調査時に外されている。また，奈良県藤ノ木古墳（第5図14）は，落下した石を取り除いた以外，発見時の状況を保ってるようである。しかし，天井石と閉塞は接しておらず，密閉状態は他よりは劣る。

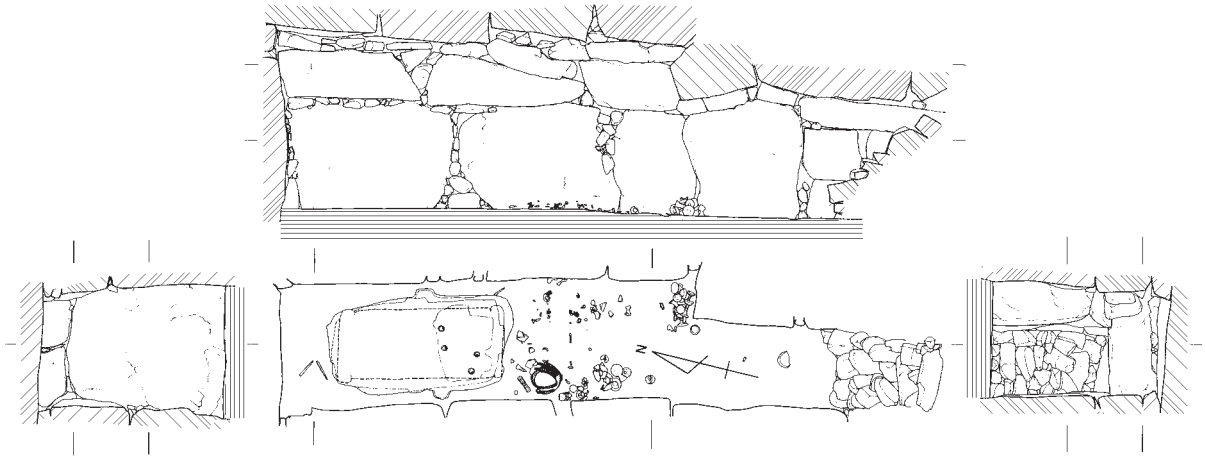
このように西日本において，閉塞が良好に残存し，密閉状態が高く，その状態が現在も残存しているものは，島根県の御崎山古墳と中村1号墳を挙げうるにすぎない。特に中村1号墳の玄室家形石棺には調査未了部分がある。すなわち，中村1号墳の石室は，西日本に現存する横穴式石室の中で最も石室の保存状態が良いだけではなく，埋葬時の状態を一部残している点で特異な例といえよう。



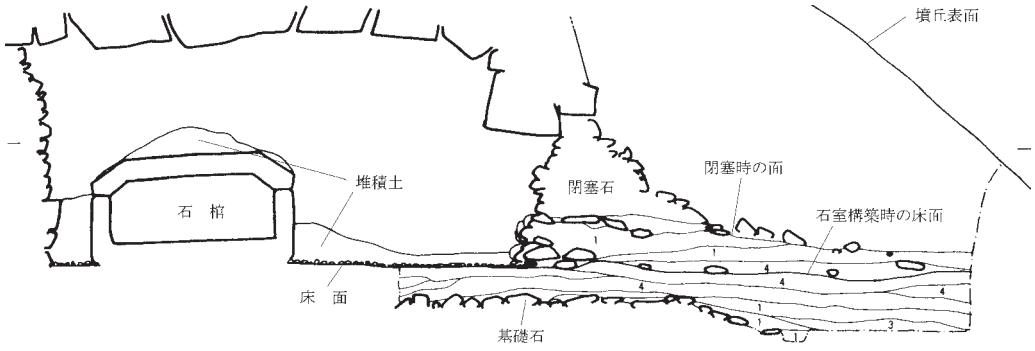
20　福岡県王塚古墳



21　岡山県三輪山６号墳



22　岡山県八幡大塚２号墳



23　奈良県市尾墓山古墳

0　2m

第８図　密閉度の高い状態で発見された横穴式石室（１：100）

5　まとめ

以上，中村1号墳の閉塞について検討してきた。中村1号墳の石室閉塞は，日本各地に最も多い普遍的な手法である。閉塞は，推定で長さ6m前後となり西日本の中で最も長い例であり，厳重な閉塞であったと考えられる。また，西日本において，閉塞は羨道部内で収まるものがほとんどであるが，島根県の特に出雲のそれは前庭部まで延びる特徴があることを示した。

そして，中村1号墳の石室は，密閉度の高さと，家形石棺に未調査部分があることも合わせると，西日本で最も保存状態が良く，また，当時の埋葬状態を残す横穴式石室であることを再度確認しておきたい。

古墳および横穴式石室研究において，閉塞部の調査はとても重要である。なぜなら，それは，当時の葬送儀礼の実態に迫ることができる部分だからである。中村1号墳の閉塞を未調査としたことで，古墳の実態解明には一部不明な部分を残すこととなった。しかし，閉塞の重要性を改めて認識するきっかけになったと考えている。これまでの発掘調査で，閉塞の多くは壊されてきたと思う。それによって得られた成果を詳細に検討することにより，閉塞での儀礼や意識の復元がより可能になるであろうと考える。

（坂本豊治）

註

（1）明治末か大正初年に開口し（天井からか），その際に，副葬品が持ち出されたようである。その後，埋められていた。1972年に整備を目的に天井から侵入して発掘調査が実施されている。発掘調査終了後，天井石が修復されて埋め戻され，現状では閉塞石の確認はできない。

（2）それを明確に示したものが京都府の物集女車塚古墳の石室測量図である（第6図16）。このように，閉塞石と前庭部の埋土との関係を示している測量図は少ない。

参考文献

岡山県史編纂委員会編 1986『岡山県史』第18巻　考古資料

芸備友の会 1997『芸備』第26集　特集・横穴式石室の地域相

古代学協会四国支部編 1995『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第9回徳島大会資料

山陰考古学研究会編 1996『山陰の横穴式石室－地域性と編年の再検討－』第24回山陰考古学研究集会

白石太一郎 1975「ことどわたし考」『橿原考古学研究所論集』創立三十五周年記念　347～371頁

西尾良一 1986「大社造と横穴式石室」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　333～372頁

第2回九州前方後円墳研究会実行委員会編 1999『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料集

文化財保存計画協会編 1984『史跡今市大念寺古墳保存修理工事報告書』出雲市教育委員会

横穴式研究会編 2007『研究集会　近畿の横穴式石室』

渡辺貞幸 1999「発見の経緯と研究略史」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4　島根県古代文化センター　11～16頁

第４節　中村１号墳の石棺の時期と灯明石

１　はじめに

山陰では家形石棺が 90 基確認されている。その内，約８割の 74 基が出雲に集中している。このことから，出雲において特に多く家形石棺が採用されていたことがわかる。したがって，家形石棺は，横穴式石室と同じく，出雲地域の古墳後期の社会構造や死生観などについて考える上で重要な材料なのである。

中村１号墳には，玄室のＡ石棺と前室のＢ石棺の２基が設置されている。Ａ石棺は組合せ式家形石棺で，灯明台を付設する。Ｂ石棺は蓋石がなく，組合せ式石棺を簡略化したものと理解している。本稿ではこれらの両者の構造から設置時期を検討することを第１の目的とする。そして，Ａ石棺に伴う灯明石について検討し，中村１号墳の特徴を明らかにすることが第２の目的である。

本稿では組合せ式家形石棺の各部位の名称を第１図に示し，この名称で論を進めていきたい。また，石棺の時期については，大谷晃二（大谷 1994）および第７章第６節の須恵器編年、本章第１節の石室編年を基準とした。

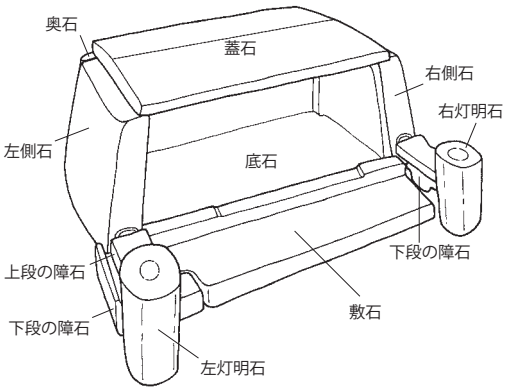
２　家形石棺の研究史

出雲における家形石棺の研究史については，石橋宏が詳細にまとめている（石橋 2006）。ここでは本稿に関係する家形石棺と灯明石についてそれぞれ簡単にふれておきたい。

（１）　家形石棺の研究史

山陰地域における家形石棺の考古学的研究は，山本清による研究が基礎となっている（山本 1971）。山本は家形石棺が出雲，伯耆，因幡など限られた地域に分布することを明らかにし，そして，それらが出雲に圧倒的に集中することを指摘した。また，刳抜式と組合せ式，横口の有無により型式分類を行い，横口式のものは出雲にのみ集中し，それがことごとく平入り側に口が開くことを指摘している。

そして，1980 年代以降に石棺研究が進んできている。まず，和田晴吾が出雲の家形石棺の蓋の頂部平坦面の広狭と断面形態，身の横口部の構造と石材の使用法を重視した分類基準を示した（和田 1983）。これを根拠に出雲地域を西部（出雲市周辺），中部（宍道湖沿岸），東部（松江・安来市周辺）の３地域に分けて各地域の特徴を抽出し，４時期の編年を示している。そして，出雲西部の刳抜石棺は，横口式という九州的な葬法を受け継ぎながらも畿内的な要素（蓋の外面形態や刳抜式の身）を留めるのに対し，出雲東部の組合せ式家形石棺は，九州的または出雲的であるとした。また，奥石が無く，石室や横穴墓の壁面をもってこれにかえているものがあることを指摘した。



第１図　組合せ式家形石棺の部位名称

出雲西部の横穴式石室編年を行った角田徳幸と西尾克己は，その論文で刳抜式家形石棺の変遷にも触れている（角田・西尾 1989）。角田らは，和田が示した今市大念寺古墳玄室棺→妙蓮寺山古墳棺という考えを棺蓋頂部平坦面の広さと突起の有無から否定した。具体的には，棺蓋の幅と平坦面の幅の比率は２つの棺とも同じであること，また，今市大念寺古墳玄室棺の身には突起はないが妙蓮寺山古墳棺にはあることをあげ，今市大念寺古墳玄室棺が妙蓮寺山古墳棺を遡ることはないとした。しかし，これらに遅れて築造されたことが明確な上塩冶築山古墳大石棺の身には突起があることから，突起の有無で石棺の時期差を証明したことにはならないと考える。

大谷晃二は河川流域ごとに盛行する属性（棺蓋平面形・棺身の仕障・敷石）が違うことに着目し，出雲を４地域に分けて石棺の地域性の抽出した。すなわち，①棺蓋の墳頂部が分銅形で袖石は立面長方形，敷石を有する安来平野地域，②仕障にＵ字形の刳り込みを設ける大橋川南岸地域，③板状の蓋石による箱形石棺が盛行する宍道湖沿岸地域，④組合せ式家形石棺において横断Ｌ字形の底石と平面Ｌ字形の短辺を持ち奥石を持たない神戸川下流域という地域性を示した（大谷 1995）。

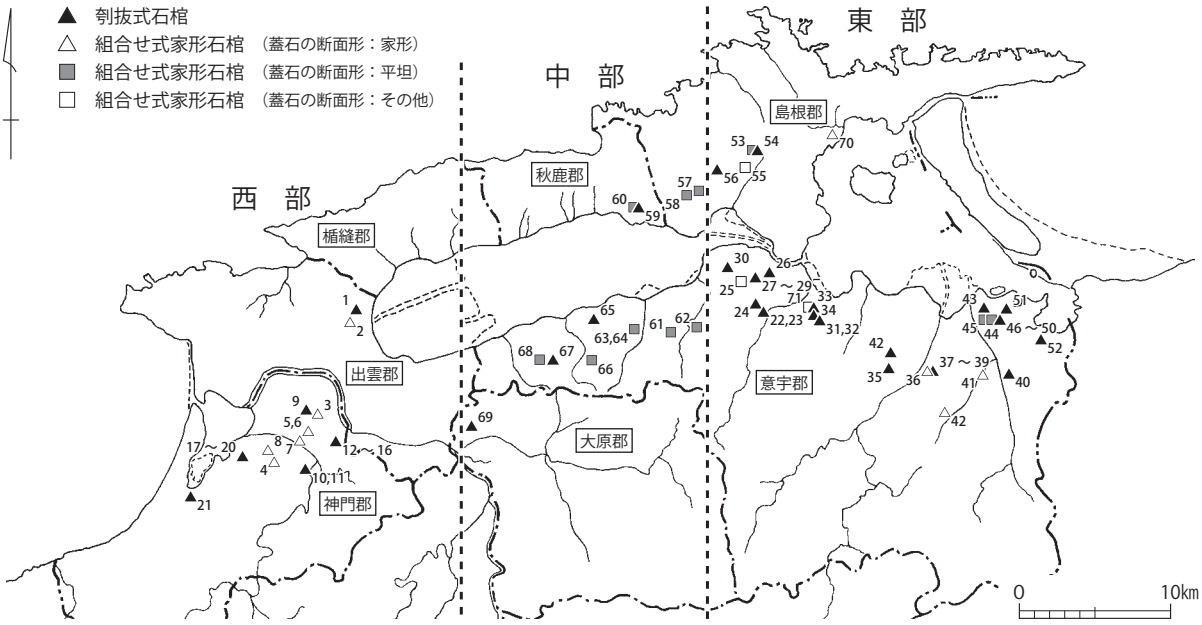
その後，西尾は上塩冶築山古墳の報告において，刳抜式家形石棺の変遷を縄掛突起や横口，蓋石の外面頂部，石材などの特徴によってⅠ類からⅢ類に分類し，この順に変遷したと考えた。そして，刳抜式家形石棺自体は神戸川下流域の首長墓のみに限られ，発展することなく姿を消したと結論付けた(1)。1999 年には，松山智弘が出雲西部の横穴墓を検討する中で，出雲４期（大谷編年）の横穴墓の石棺・石床の形態には多様性があるが，出雲５期には側石を横断面Ｌ字形に加工し，奥石を略すなど定型化した石棺がみられること，そして，この定型化した石棺は出雲西部に特有のものであることを明らかにした（大谷・松山 1999，大谷 2010）。

2004 年には，角田が山陰の因幡東部，出雲東部，出雲西部の家形石棺の受容期を中心に地域性をまとめている。肥後の横口式家形石棺や石屋形を基に独自の形態を生み出した出雲東部，畿内系家形石棺を祖形としながらも出雲東部との交渉から九州的な要素を取り入れた出雲西部，というあり方は，横穴式石室の受容の仕方と同様であると理解ができる点を指摘している（角田 2004）。

2006 年には，石橋宏が大谷や角田の石棺分類を基に出雲の家形石棺を再検討している。石橋は出雲を７地域，４段階に分けて，各小地域ごとの変遷と地域間の影響関係を整理した。そして，畿内の家形石棺との比較から出雲の家形石棺の特徴をあげ，日本海を介した交流で北陸や九州の家形石棺の中に出雲系の家形石棺があると指摘した（石橋 2006）。石橋の研究はこれまでの家形石棺研究を総括したものである。

以上の家形石棺の研究史をまとめると，出雲の家形石棺の研究は，地域性の抽出という地域の細分を中心に行われてきた。まず，山本による山陰の中の出雲の抽出が行われ，そして，和田による出雲の３地域区分，大谷による４地域区分，石橋による７地域区分と地域細分が進んできた。これらの研究は，九州や畿内への系譜を求めることや小地域間の影響関係をつかむことによって当時の出雲の地域社会の実態に迫ること，また，石橋のように列島内における交流についての検討に有効な手段となっている。しかし，出雲が小地域に細分できることが示すように，地域ごとに石棺が少しずつ違うのである。そのため，出雲全域に通じる型式分類と型式組列を明確にすることが困難である。これま

での論文では地域性の抽出を行うための分類が行われ，特徴が明確な部分のみが注目されてきた。そのため地域ごとの石棺自体の変遷が明確に示されていない。そこで，中村１号墳の石棺を位置付けるためには，小地域の組合せ式家形石棺の型式分類を行い，その組列を示すことが必要である。この方法によって，中村１号墳の石棺を位置付けることが本稿の第１の目的である。ここで，研究史と絡んで問題となるのは，出雲の地域区分と中村１号墳をどの地域に置くかである。これまで家形石棺の詳細な地域区分が行われてきたが，実際に出雲の古墳時代後期を位置付ける際は，横穴式石室の形態から東西出雲の２地域区分で表現されている。それによると中村１号墳は出雲西部に位置付けられる。一方，３地域区分を示した和田は，中村１号墳の南西にある上島古墳を中部地域としている（和田1983)。この中部地域は，平坦な蓋石の箱式石棺が主体となり，また，玄門閉塞の閂状陽刻が多く分布する地域であることも指摘されている。そこで，本稿では，組合せ式石棺の蓋石の形状を重視し，家形のものが主体をなして分布する東西出雲に，平坦なものが主体となす出雲中部を加えた３地域区分を新たに提示する (第２図)。したがって，中村１号墳は出雲西部の石棺の中で検討してみたい。



1　中村１号墳
2　上島古墳
3　今市大念寺古墳
4　妙蓮寺山古墳
5　上塩冶築山古墳大棺
6　上塩冶築山古墳小棺
7　上塩冶地蔵山古墳
8　宝塚古墳
9　塚山古墳
10　刈山４号墳
11　刈山５号墳
12　上塩冶 33 支群６号横穴墓
13　上塩冶 33 支群７号横穴墓
14　上塩冶 32 支群１号横穴墓１
15　上塩冶 32 支辞１号横穴墓２
16　上塩冶 32 支群６号横穴墓
17　神門Ｇ－６号横穴墓
18　神門 10 支群Ｈ－１号横穴墓
19　神門６支群５号横穴墓
20　神門１支群１号横穴墓
21　八幡宮４号横穴墓
22　御崎山古墳大石棺
23　御崎山古墳小石棺
24　岡田山１号墳
25　向山１号墳
26　十王免２号横穴墓
27　狐谷第３号横穴墓
28　狐谷第 15 号横穴墓
29　狐谷第 16 号横穴墓
30　論田２号横穴墓
31　渋山池２号横穴墓
32　渋山池５号横穴墓
33　島田１号横穴墓
34　島田池１号横穴墓
35　鷺の湯病院跡横穴墓
36　矢田Ⅱ群１号横穴墓
37　矢田Ⅰ群３号横穴墓
38　矢田Ⅲ群１号横穴墓
39　矢田Ⅱ群２号横穴墓
40　宮谷横穴墓
41　鳥木横穴墓
42　飯梨岩舟古墳
43　堤谷１群１号横穴墓
44　大原１号横穴墓
45　宮内Ⅱ区１号横穴墓
46　臼コクリＦ－１号横穴墓
47　臼コクリＦ－２号横穴墓
48　臼コクリＳ－２号横穴墓
49　臼コクリＳ－３号横穴墓１号棺
50　臼コクリＳ－３号横穴墓２号棺
51　高広Ⅳ区１号横穴墓
52　穴神１号墳横穴墓
53　薄井原古墳１号石室
54　薄井原古墳２号石室
55　太田２号墳
56　日吉垣の内古墳
57　菅田 16 号横穴墓
58　桜崎横穴墓
59　北小原２号横穴墓１
60　北小原２号横穴墓２
61　弥陀原１号横穴墓
62　菅沢谷Ｃ－５号横穴墓
63　花立山１号横穴墓
64　花立山４号横穴墓
65　松石横穴墓
66　栗屋山３号横穴墓
67　下倉２号横穴墓
68　女ヶ峠横穴墓
69　湯後２号横穴墓
70　連行 14 号横穴墓
71　古城山３号横穴墓

第２図　家形石棺からみた出雲の３地域区分（１：500,000）

（2）灯明石の研究史

家形石棺の研究はかなり蓄積されている一方，中村１号墳のＡ石棺に付属する灯明石についての研究は少ない。1995 年に角田が家形石棺を九州系譜と考える要素として，灯明石を取り上げている（角田 1995）。出雲東部に５例あることを示し，その系譜を福岡県桂川町の王塚古墳の石屋形に付属する灯明石に求めた。さらに，王塚古墳は肥後の横穴式石室の要素を備えていることから，肥後で灯明石という要素が成立し，各地に波及したと指摘している。大谷晃二は松江市御崎山古墳の報告で，馬橋川・意宇川流域の横口式石棺の変遷を示し，導入期には仕障，袖石，敷石，灯明石を備えるが，出雲４期には仕障のみを残すと指摘している（大谷 1996）。2002 年には中村１号墳Ａ石棺で灯明石が発見され出雲で６例目かつ，出雲西部では初めての発見例となった。これを受けて，内田律雄が灯明石についてまとめている（内田 2006）。内田は灯明石を備えた家形石棺と敷石（内田は敷石のことを浜床と呼ぶ）は必ず伴うと指摘し，敷石のみが発見されている石棺の場合，追葬時あるいは葬送儀礼終了後に灯明石が片付けられたか，あるいは盗掘されたと考えている。そして敷石や灯明石を使った葬送儀礼が行われなくなると，それに代わって，仏教の影響を受けて暗文土師器の灯明皿を使う新しい葬送儀礼が７世紀になって採用されたと指摘した。そして，結論として，７世紀代は灯明石という出雲的観念に決別し，灯明皿を使用する新しい葬送儀礼が始まった時期とした。また，和田晴吾は灯明石の系譜について，中国の「石棺床」正面の衝立の入口に「双闕」と呼ばれる門施設があり，灯明石はこれを真似た可能性があると指摘している（和田 2007）。

以上，灯明石の研究史についてまとめた。現状は灯明石の分布と，個別に検討された程度で，詳細な型式学的研究が行われていないことがわかった。そこで，出雲における灯明石の系譜と変遷をを型式的に明らかにし，中村１号墳Ａ石棺に付属する灯明石の位置付けを行うことが本稿の第２の目的である。

３　出雲西部における組合せ式家形石棺の編年

すでに，和田や大谷，石橋が指摘している石棺奥石の省略と側石の形態に注目し，出雲西部における組合せ式家形石棺について型式分類し，編年を組み立てたい。

（1）　組合せ式家形石棺の型式分類

分類は奥石があるものをⅠ類，奥石がないものをⅡ類，そして，側石の横断面形が，ａ類：長方形，ｂ類：コ字形，ｃ類：Ｌ字形とした。各石棺の特徴を第１表に，編年図を第３図に示す。側石の横断面形は左右で異なるものがあるので，型式的に新しい方を採用し型式決定を行っている。Ⅰａ類は今市大念寺古墳前室棺，上塩冶 33 支群７号横穴墓棺。Ⅰｂ類は中村１号墳Ａ石棺，八幡宮４号横穴墓棺。Ⅱａ類は刈山４号墳棺，中村１号墳Ｂ石棺。Ⅱｂ類は塚山古墳棺。Ⅱｃ類は刈山５号墳棺，神門 10 支群Ｈ－１号横穴墓棺，神門１支群１号横穴墓棺，神門６支群５号横穴墓棺，上塩冶 32 支群６号横穴墓棺，上塩冶 32 支群１号横穴墓左棺，上塩冶 32 支群２号横穴墓左棺。

（2）　型式組列と時間的関係

先に分類したⅠａ～Ⅱｃ類を須恵器の編年（大谷 1994）と組み合わせたものが第１表である。須

恵器などの副葬品や石室構造を基にⅠ類からⅡ類への変化，ａ類からｃ類への変化が読み取れる。すなわち，Ⅰａ類→Ⅰｂ類とⅡａ類へ，そして，Ⅰｂ類とⅡａ類から→Ⅱｂ類→Ⅱｃ類の大まかな型式組列が導きだせる。以上の型式展開から，出雲西部における組合せ式家形石棺は１期～３期にまとめられる。

組合せ式家形石棺１期は導入期，須恵器編年では出雲３期の段階である。時期は明確ではないがⅠａ類の今市大念寺古墳前室棺[2]（第３図１）が採用される[3]。刳抜式家形石棺では畿内系の横口のない上島古墳が出雲２期末に採用されている。出雲３期には横口のある今市大念寺古墳玄室棺や妙蓮寺山古墳棺がある。妙蓮寺山古墳棺には横口に閉塞石が有り，今市大念寺古墳玄室棺と前室棺の横口にも妙蓮寺山古墳棺と同じく閉塞石の存在を示す記事がある[4]。

組合せ式家形石棺２期は多型式（Ⅰａ類，Ⅰｂ類，Ⅱａ類，Ⅱｂ類，Ⅱｃ類）の組合せ式家形石棺が併存する[5]，須恵器編年では出雲４期の段階である。この時期以降，平入りの横口はあるが閉塞石はないものとなる。奥石のないⅡ類や，側石の横断面形ｂ・ｃ類が出現する。この石棺が設置される埋葬施設は，横穴式石室と横穴墓である。この時期から石床も採用されていて，組合せ式家形石棺と同じく奥の縁を無くす石床もある。また，仕障にＵ字形の刳り込みを設けるものが，中村１号墳Ａ・Ｂ石棺（第３図３・６），八幡宮４号横穴墓棺（第３図４），塚山古墳棺（第３図７）で採用されている。同時期の刳抜式家形石棺である上塩冶築山古墳大・小石棺，宝塚古墳棺にもＵ字形の刳り込みが採用されている。この特徴は，出雲３期の出雲東部安来市矢田Ⅱ群１号横穴墓棺に採用されており，出雲西部には１段階遅れた出雲４期になって採用されたことがわかる。

組合せ式家形石棺３期はⅡｃ類のみが２期から継続して採用される，須恵器編年では出雲５～６期の段階である。蓋の内面に刳り込みがあるものやないもの，左右の側石の横断面形が異なるものもあり，石棺のすべての属性が定型化するわけではない。この石棺が設置される埋葬施設は横穴墓のみである。刳抜式家形石棺は，上塩冶地蔵山古墳が採用されている。

第１表　出雲西部における家形石棺の変遷

組合石棺	分類	側石の横断面形			横口	出雲西部の刳抜石棺	土器編年	
		長方形（a 類）	コの字（b 類）	L字（c 類）			出雲	畿内
	奥石有（Ⅰ類）				なし	上島古墳	出雲2期	TK10
1期		今市大念寺古墳前室棺			あり（閉塞石あり）	今市大念寺古墳玄室棺 妙蓮寺山古墳	出雲3期	TK43
2期		上塩冶 33 支群7号横穴墓	中村1号墳A石棺 八幡宮 4 号横穴墓		あり（閉塞石なし）	上塩冶築山古墳	出雲4期	TK43 末～TK209
	奥石無（Ⅱ類）	刈山4号墳	塚山古墳			宝塚古墳		
		中村1号墳B石棺						
		（上塩冶 33 支群6号横穴墓）		刈山5号墳				
3期				神門 10 支群H－1号横穴墓 神門1支群1号横穴墓 神門6支群5号横穴墓 上塩冶 32 支群6号横穴墓 上塩冶 32 支群1号横穴墓左棺 上塩冶 32 支群2号横穴墓左棺		地蔵山古墳奥棺	出雲5期～出雲6期	飛鳥1～飛鳥2

（3）　中村１号墳Ａ石棺の特徴

本稿の目的である中村１号墳Ａ石棺とＢ石棺の設置時期を明確にするため，さらに特徴をまとめてみたい。

Ａ石棺はⅠｂ類で組合せ式家形石棺２期となる。他に出雲西部では出雲市八幡宮４号横穴墓棺がある。出雲中部のｂ類は出雲５期の雲南市湯後２号横穴墓棺があげられる。また，出雲東部のｂ類は出雲４期の松江市十王免２号横穴墓棺，出雲４期後半の松江市向山１号墳棺，出雲５期の松江市論田２号横穴墓棺があげられる。また，今のところｂ類が出雲３期に遡る例はない。中村１号墳と同時期と考えられる出雲市塚山古墳は，Ⅱｂ類という新しい特徴をもつ。ここで，出雲西部のｂ類をさらに形態から細分してみたい。中村１号墳Ａ石棺の側石のコ字形の刳り込みは浅く，八幡宮４号横穴墓棺と塚山古墳棺の刳り込みが深い。刳り込みが深い特徴はｃ類と同じと考えられ，型式的には同じｂ類でも刳り込みが浅いものから深いものへ，つまり側石が薄いものから厚いものへの変遷が推定できる。また，奥石と側石の組合せ方をみると，中村１号墳Ａ石棺は側石の外側に奥石がある。これは，今市大念寺古墳前室棺と同じで古い特徴である。八幡宮４号横穴墓棺は側石の内側に奥石が接し，そして，塚山古墳棺では奥石を省略する。以上のことから，ｂ類は，中村１号墳Ａ石棺→八幡宮４号横穴墓棺→塚山古墳棺という型式変化が推定でき，Ａ石棺は石棺２期の中でも古い特徴があることが分かる。

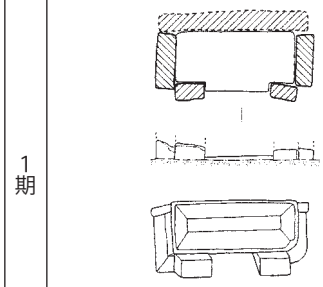
（4）　中村１号墳Ｂ石棺の特徴

Ｂ石棺はⅡａ類で組合せ式家形石棺２期となる。類例として刈山４号墳棺があげられる。Ⅱ類は組合せ式家形石棺３期に盛行する。出雲東部，中部では基本的に奥石があるので，Ⅱ類は出雲西部の地域性が明確に表れる特徴である。横断面形のａ類は石棺１期～２期にみられ，３期には神門10支群Ｈ－１号横穴墓のように片側の側石のみに採用されている。したがって，Ｂ石棺は組合せ式家形石棺２期と考えられ，奥石をなくすという新しい特徴がある。ただし，奥石をなくす特徴が組合せ式家形石棺２期のどの時期から採用されたかは，不明である。

（5）　中村１号墳Ａ・Ｂ石棺の設置時期

Ａ石棺の石室への設置時期は灯明石を地山に掘り込んで設置していることから，石室築造時であることがわかっている。Ｂ石棺の石室への設置時期は地山の上に盛土が施された後で，築造時あるいは追葬時の２つの可能性が考えられる（第４章第１・２節）。

以上のＡ・Ｂ石棺の特徴からその時期差について考えてみたい。確実に言えることは，家形石棺の型式と須恵器編年から組合せ式家形石棺２期（出雲４期）に両石棺が設置されていることである。石棺型式では，奥石があるⅠ類のＡ石棺が古く，奥石がないⅡ類のＢ石棺の方が新しい特徴をもつが，時期差として断言できる証拠がない。また，Ａ石棺とＢ石棺の設置面が異なることについては，時期差とも考えられるが工程差とも考えられる。松江市御崎山古墳では，大石棺の付属施設を取り除き，追葬時に小石棺を設置している。この例から，中村１号墳Ｂ石棺も追葬時に設置した可能性もある。あるいは，中村１号墳は複室構造であり当初から計画して設置されていた可能性がある。現状では，Ａ石棺とＢ石棺の時期差を明確にすることは難しい。したがって，Ａ・Ｂ石棺は須恵器の年代から出



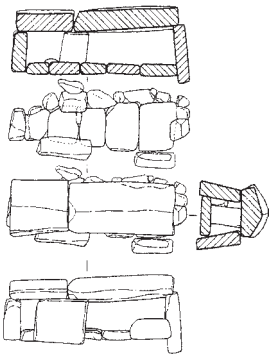
1　今市大念寺古墳前室　（Ⅰａ）
（平面図は今市大念寺洞中細見之圖）

Ⅰａ　⇒　Ⅰｂ／Ⅱａ　⇒　Ⅱｂ　⇒　Ⅱｃ

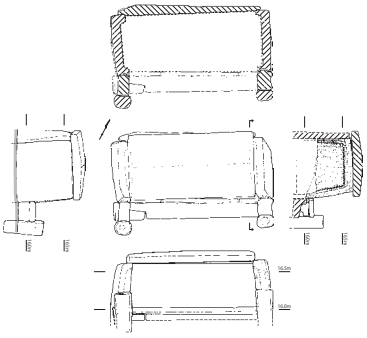
組合せ式家形石棺の型式組列

1期

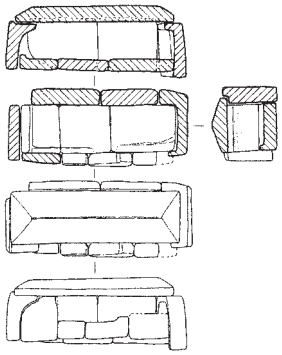
2期



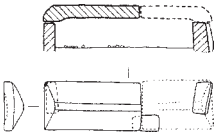
2　上塩冶 33 支群７号横穴墓　（Ⅰａ）



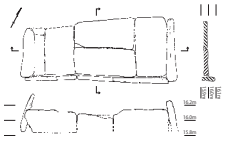
3　中村１号墳Ａ石棺　（Ⅰｂ）



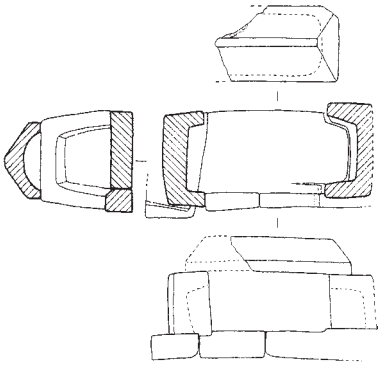
4　八幡宮４号横穴墓　（Ⅰｂ）



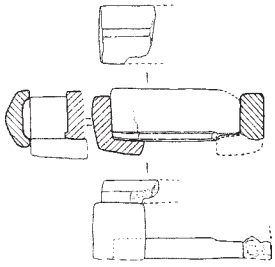
5　刈山４号墳　（Ⅱａ）



6　中村１号墳Ｂ石棺　（Ⅱａ）

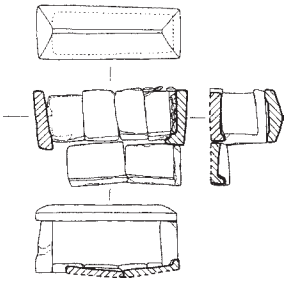


7　塚山古墳　（Ⅱｂ）

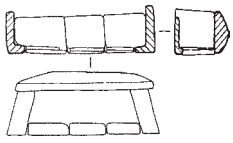


8　刈山５号墳　（Ⅱｃ）

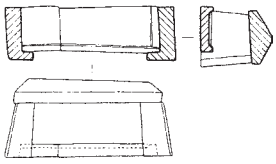
3期



9　神門 10 支群 H-1 号横穴墓　（Ⅱｃ）



10　神門１支群１号横穴墓　（Ⅱｃ）



11　上塩冶 32 支群１号横穴墓　（左棺）（Ⅱｃ）

0　2m

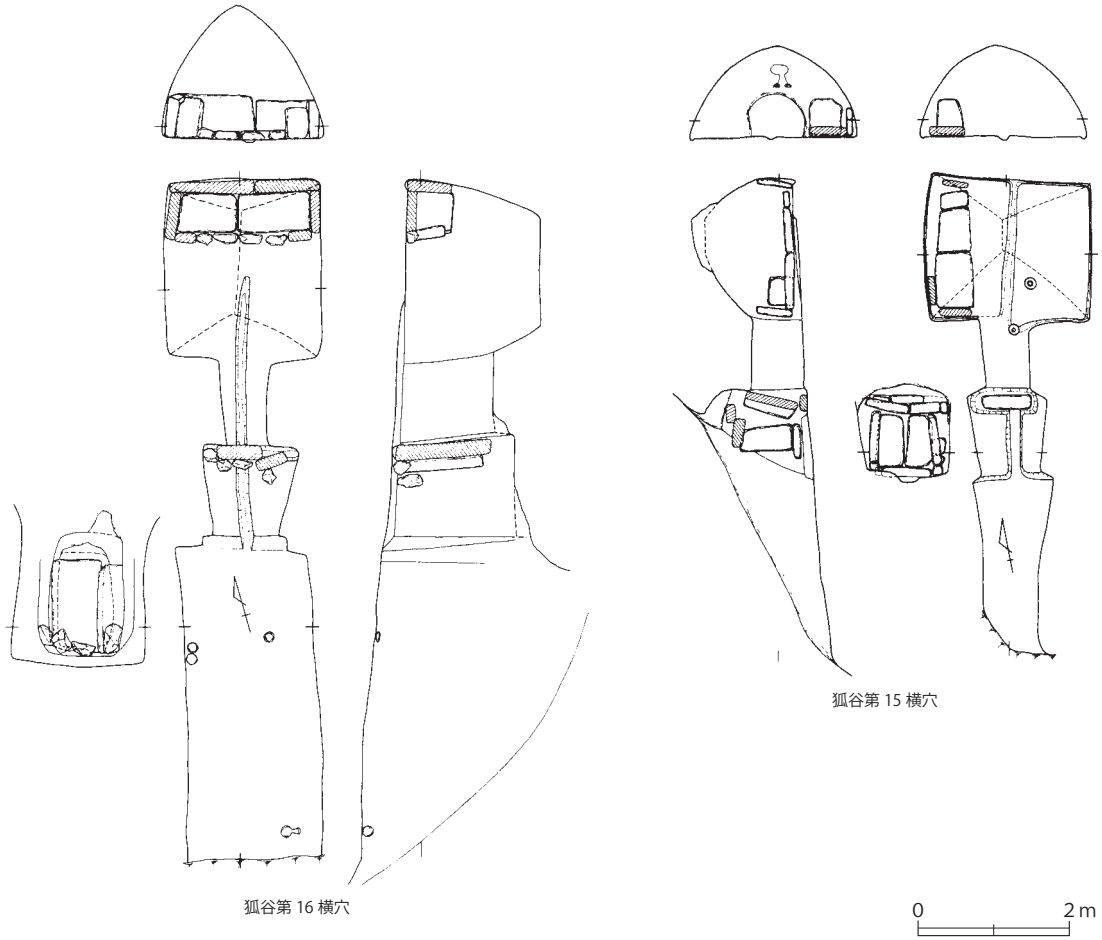
第３図　出雲西部における組合せ式家形石棺の編年（１：100）

雲４期前半頃に石室築造と同時に設置されたか，あるいはＡ石棺が石室築造時に，Ｂ石棺は初葬からそれほど時間が経ていない追葬時に設置されたとも考えられる。

４　出雲西部における石棺形式とその階層性と特徴

前項で出雲西部における組合せ式家形石棺の編年を示した。初めに，刳抜式家形石棺との階層差を示しておきたい。出雲３期と考えられる出雲市今市大念寺古墳では玄室に刳抜式家形石棺，前室に組合せ式家形石棺が採用されている。また，丁寧に造られた刳抜式家形石棺は横穴墓に設置された例がない。このことから，上位階層の石室墳には丁寧に造られた刳抜式家形石棺が，下位階層の横穴墓には組合せ式家形石棺が採用され，刳抜式家形石棺が組合せ式家形石棺よりも上位階層の棺であることがわかる。

次に，組合せ式家形石棺と石床とはどのような関係なのであろうか。横穴式石室墳である出雲４期の出雲市放レ山古墳や出雲５期と考えられる出雲市小坂古墳，詳細な時期は不明であるが宇那手塚山古墳には組合せ式家形石棺は採用されず，石床のみが採用されている。したがって，横穴式石室墳には組合せ式家形石棺と石床が採用されている。また，横穴墓でも組合せ式家形石棺と石床が採用されている。つまり，石室墳や横穴墓間では石棺と石床から導き出せる社会的な階層差がそれほど明確にあったとは考えにくい。階層差が明確に表れるのは，上位階層の棺に使われたと考えられる丁寧な造



第４図　石棺の蓋石がない未盗掘横穴墓（１：100）

りの刳抜式家形石棺であることを改めて指摘しておきたい。

ここで，中村１号墳Ｂ石棺の特徴の１つである蓋石のないことについて検討する。出雲には蓋石がない石棺が他に２例ある。第４図は玄門部に板石の閉塞石が残存し，未盗掘の横穴墓であることが明確な出雲５期以降の松江市狐谷 15・16 号横穴墓である。奥石と側石の上面の高さが揃っていないことからも蓋石が無かった可能性が高い。これらは，追葬時に石棺蓋石が取り除かれた可能性もあるが，埋葬儀礼の終了時には石棺蓋石が無かったことは確かであろう。出雲４期には，出雲西部に石床が出現する。これらも，蓋石がないものとして同じ類の構造と考えられる。このことから，組合せ式家形石棺の上部構造，つまり家形の形状は，出雲４期のある時点からそれほど必要なものではなかったこととがわかる。

また，前項の編年から，出雲３期の石棺は横口式で閉塞石があり，和田晴吾が示す「閉ざされた棺」にあたり，出雲４期以降は横口式で閉塞石がない「開かれた棺」にあたる（和田 2003）。したがって，出雲４期には遺体が密閉されない九州的な思想が強く浸透していて，蓋石のないＢ石棺や石床はこの思想に基づいて作りだされていると考えられる。

５　出雲における灯明石の導入と展開

中村１号墳Ａ石棺には，灯明石，敷石，２段の障石の付属施設がある。本稿ではこれらの系譜と展開を明らかにしてみたい。ただし，灯明石と呼んでいるが，この上から灯明皿や煤が付着した例がなく，灯りをともした明確な根拠はないのが現状である。

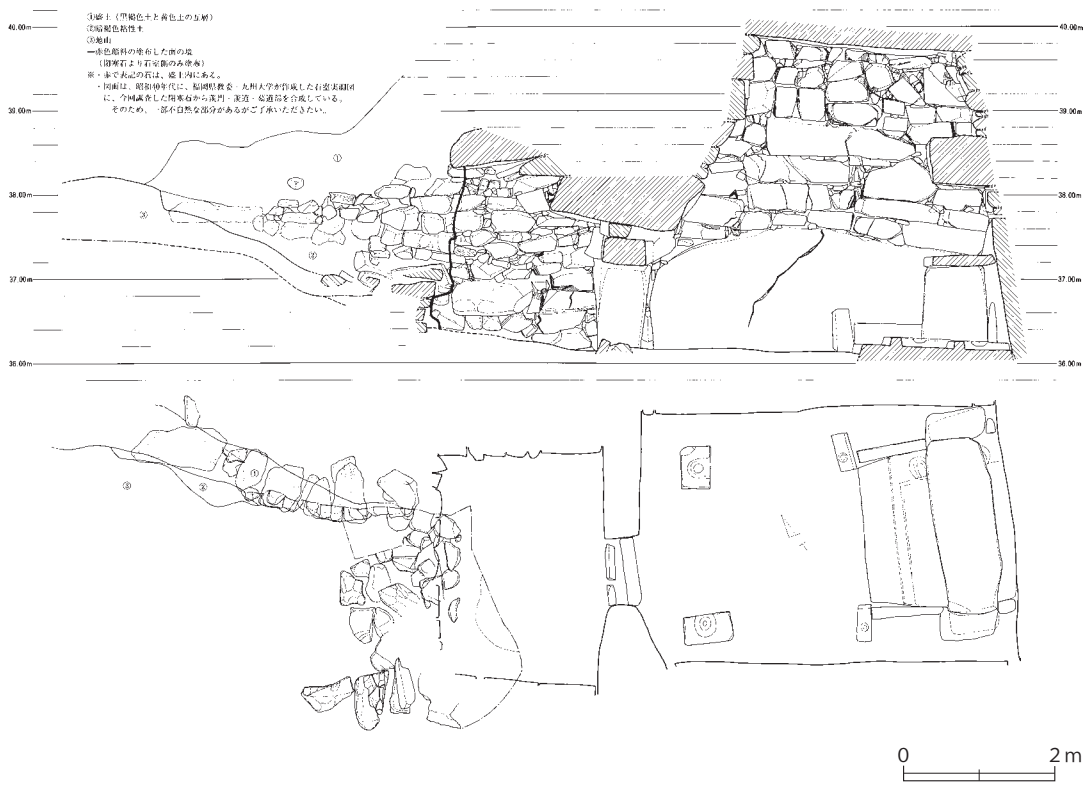
（１）　出雲における灯明石の系譜

出雲以外の灯明石をもつ埋葬施設は，福岡県桂川町王塚古墳と熊本県植木町宮穴 17 号・22 号横穴墓である。そこで，それぞれの灯明石の状況を概観し，出雲の灯明石の系譜について考えてみたい。

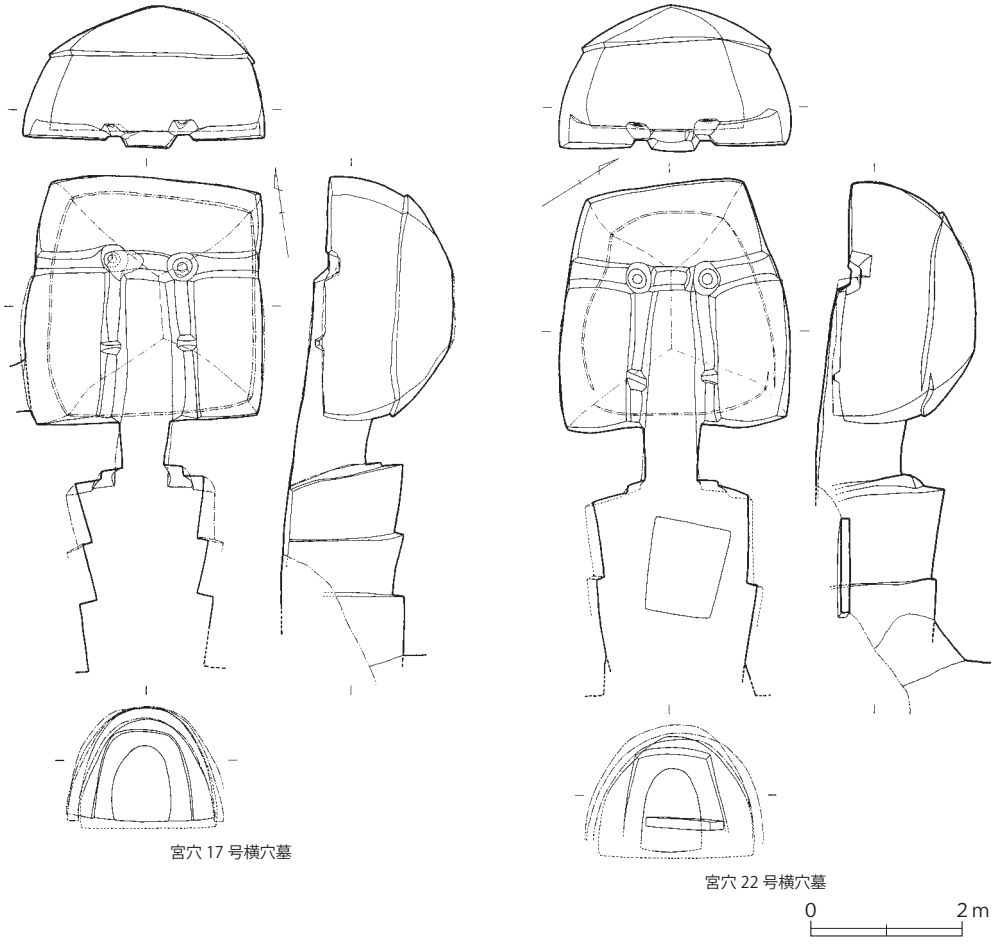
王塚古墳はＴＫ 10 型式期の横穴式石室を埋葬施設にした古墳である（第５図）。２基の灯明石は，側石の約 80㎝前側にある。灯明石は直方体をなし，横断面形が横長の長方形である。その上面に円い窪みがある。石屋形と灯明石の間には左右に障石があり，その内側に敷石がある。敷石は，石屋形の底石と同じ石，一石で造られている。この底石には遺体の頭を置くための加工があり，敷石にはないことから，敷石は遺体を安置する施設ではないことがわかる。このように，王塚古墳の灯明石は単独で存在するのではなく，障石と敷石が付属していることがわかる。また，側石と障石，灯明石の中心は，一直線に並んでいない。

宮穴 17 号・22 号横穴墓はほぼ同じ構造の灯明石をもつ（第６図）。玄室には「コ」の字形に屍床が配置されている。奥屍床の仕切りが左右の屍床の仕切りと接する所の２か所に，円錐台形の浮き彫り彫刻がある。これが灯明石と呼ばれている。その上面の中央には円形の窪みがある。22 号横穴墓から圭頭大刀の柄頭が出土している。圭頭大刀は列島でＴＫ 43 型式期以降にみられる資料で，横穴の時期もＴＫ 43 以降と考えられ，王塚古墳よりは新しい築造である。

王塚古墳と宮穴 17 号・22 号横穴墓の灯明石は，構造上明らかに異なっていることがわかる。共通することは，灯明石の上面が窪むこと，遺体の正面，平入り側に２基配置されていることである。



第５図　福岡県王塚古墳石室（１：100）



第６図　熊本県宮穴横穴墓群（１：100）

以上の状況から出雲における灯明石の系譜は，結論を先に示すと，明らかに王塚古墳の状況に近い。これについては以下で詳述するが，出雲には灯明石だけでなく障石，敷石がセット（以下，これらを石棺の付属施設と呼ぶ）で伝播してきているからである。したがって，王塚古墳の石室が肥後の影響を受けて成立していても，灯明石の系譜は肥後には求めることができない。現状では灯明石という要素は，筑紫から肥後と出雲に波及し，それぞれの地域で変容や省略をしていったと考えられよう。

（２）　出雲における灯明石と石棺付属施設の分類と展開

王塚古墳の灯明石の状況を踏まえ，出雲に６例ある灯明石[6]とそれに加え，組合せ式家形石棺に付属する施設について検討し，中村１号墳Ａ石棺の灯明石について検討してみたい。王塚古墳の石屋形に付属する施設の特徴を踏まえ，出雲における組合せ式家形石棺の付属施設の特徴を示したのが第２・３表である。第７図に型式組列，第８図に変遷図を示した。そして，敷石の前側に縁がないⅠ類と縁がある箱形のものをⅡ類に分ける。さらにⅠ類は灯明石・障石・敷石がセットになるもの：ａ類と灯明石が無く障石と敷石のもの：ｂ類，敷石のみ：ｃ類に，Ⅱ類は灯明石があるもの：ｄ類と灯明石がないもの：ｅ類に大まかな型式分類ができる。さらに属性を細分する。灯明石の横断面形は，長方形のもの：イと，円形状のもの：ロに分けることができる。また，ａ類の付属施設の配置をみると，側石と障石，灯明石の中心が一直線に並んでいない：α類と，側石と障石，灯明石の中心が一直線に並ぶ：β類に分けることができる。これらの分類から王塚古墳がⅠａ・イα類となる。

出雲における灯明石の導入は王塚古墳から１段階遅れたTK43・出雲３期の松江市御崎山古墳大石棺（第８図1）と安来市宮内Ⅱ区１号横穴墓棺（第８図２）である。これらの石棺付属施設は灯明石・障石・敷石があるａ類，敷石はⅠ類で王塚古墳と同じⅠａ類である。細分すると御崎山古墳大石棺がイα類で，宮内Ⅱ区１号横穴墓棺がロα類となる。型式的には御崎山古墳大石棺が王塚古墳と同じ特徴を導入し，宮内Ⅱ区１号横穴墓棺はわずかに変容していることがわかる。

これら２基の敷石は石棺の底石や仕障とは別づくりで，一体で造られる王塚古墳とは異なる。御崎山古墳大石棺に付属する施設は追葬時に取り除かれたと考えられ，左側の灯明石と障石のみが残っていて，本来は敷石と右側の灯明石と障石があったであろう。障石は直方体の石を上下２段積んでいるように見える。これは，王塚古墳にはなく，御崎山古墳大石棺のみにある特徴である。

御崎山古墳大石棺と宮内Ⅱ区１号横穴墓棺は，大まかに分類すれば王塚古墳と同じⅠａ類であるが，細かい属性をみれば全く同じものではなく，出雲独自の付属施設に変容させていることがわかる。これが，灯明石導入期（出雲３期・TK43）の状況である[7]。

次の出雲４期になると組合せ式家形石棺の付属施設が多様化し，大きく変容する。前時期から引き続きⅠａ類の中村１号墳Ａ石棺（第８図③），安来市臼コクリＳ－２号横穴墓棺（第８図４）がある。細分するとこれら２基はロβ類である。前時期の宮内Ⅱ区１号横穴墓棺に近いが，付属施設の配置がβ類になることがこの時期になって表れる特徴である。

また，出雲４期には灯明石をもたないⅠｂ類の安来市高広Ⅳ区１号横穴墓棺，臼コクリＦ－２号横穴墓棺（第８図６），松江市渋山池５号横穴墓棺がある。そして，障石もなくなって敷石のみのⅠｃ類に臼コクリＦ－１号横穴墓，臼コクリＳ－３号横穴墓１号棺，臼コクリＳ－３号横穴墓２号棺，松

江市古城山３号横穴墓棺，安来市矢田Ⅱ群２号横穴墓棺（第８図 12）がある。また，Ⅱ類の事例が１基あり，それはⅡｄ類とした渋山池２号横穴墓棺（第８図 13）である。渋山池２号横穴墓棺の敷石Ⅱ類からは人骨が出土していて，この敷石は遺体を置く目的で設置されたと考えられる。この事例から，灯明石を伴う石棺付属施設の設置目的が大きく変容したことがわかる。つまり，石棺の付属施設（Ⅰ類）から単独の遺体配置施設（Ⅱ類）へ変化したと考えられる。

出雲５～６期になるとⅠ類はⅠｃ類の安来市穴神１号墳横穴墓棺（第８図 14）のみで，この時期主体となるのはⅡ類である。Ⅱｄ類には松江市島田池１号横穴墓棺（第８図 15），Ⅱｅ類の島田１号横穴墓棺，出雲市神門 10 支群Ｈ－１号横穴墓棺（第８図⑰），出雲市上塩冶 32 支群６号横穴墓棺がある。

以上の石棺付属施設についてまとめると（第７図），Ⅰａ類は王塚古墳（イα）→御崎山古墳大石棺（イα）→宮内Ⅱ区１号横穴墓棺（ロα）→中村１号墳Ａ石棺（ロβ）・臼コクリＳ－２号横穴墓（ロβ）と変遷する。そして，Ⅰｂ類→Ⅰｃ類，Ⅱｄ類→Ⅱｅ類に変遷している。

ここで問題となるのは，灯明石と敷石Ⅱ類がどのような関係にあったかということである。簡単にいえば，それぞれが並列した機能をもっていた，あるいは，灯明石の機能がほとんどなく形骸化したもので，遺体配置が重視されていたか，ということである。これについては，遺体配置機能がないⅠ類から読み取る。Ⅰ類のａ～ｃの変化をみると，はじめに灯明石が無くなり，最後まで敷石が残る状況がある。灯明石自体の機能がⅠ類のなかでも重要ではなかったと考えられる。また，灯明石上面の窪みが，導入期の御崎山古墳大石棺にないことや，その後のものに窪みがあったりのなかったりすることから，この窪みもそれほど重要な機能を持っていたとは考えにくい。また，Ⅱ類もｄ類からｅ類に変化すると考えられ，灯明石の機能は重視されていない。そうすると，最後まで残る敷石が重要な機能を果たしていたと考えられる。しかし，Ⅱ類では遺体を配置してしまえば，単なる遺体を置く台となり，敷石としての特別な機能をその時点では重視することはできない。したがって，石棺に付属する施設，とくに灯明石は，出雲４期の時点で形骸化した施設になっていたと考えられる。

（３）　中村１号墳Ａ石棺の付属施設の特徴

中村１号墳Ａ石棺の付属施設は，出雲で他に例がない２つの特徴を持っている。１つは石棺の仕障と敷石が一石で造られていることである。これは，王塚古墳の石棺底石と敷石が一石で造られている特徴に近い。ただし，Ａ石棺の敷石と石棺仕障は，右側の灯明石と側石の隙間に挟みこむ構造で石棺底石とは別造りと考えられ，王塚古墳とは異なる。２つ目は上下２段の障石の存在である。左右の構造が若干異なるが，基本的には上段の障石は側石と灯明石をほぞ接ぎ加工で繋いだもので，側石と灯明石にそれぞれほぞ穴が穿たれている。そして，下段の障石で上段の障石を支える構造である。このように丁寧に加工されたものは他にない。これによく似た構造が，先にあげた御崎山古墳大石棺の左側の障石である。この障石は，厚さの異なる直方体の石が２段に重ねてあるようで，上段のものには，ほぞ接ぎ加工はない。この下段の障石がＡ石棺の下段の障石に変容したと考えたい。また，Ａ石棺の下段障石は，厚さが薄く板状のもので，敷石Ⅱ類の箱形を意識したものに近いとも考えられる。

したがって，中村１号墳Ａ石棺の付属施設は，御崎山古墳大石棺や宮内Ⅱ区１号横穴墓棺に近い特徴をもつことから，出雲東部からの影響を受けて造られたことがわかる。

第２表　出雲における組合せ式家形石棺の付属施設の特徴１

番号	遺跡名	型式	灯明石		障石	位置＊2	石棺の仕障	敷石	備考	土器編年	
			横断面＊1	窪み						出雲	畿内
祖形	福岡県王塚古墳棺	Ⅰa	イ	有	有	α	石屋形底石と敷石が一石	有			TK10
1	御崎山古墳大石棺	Ⅰa	イ	無	有	α	単体	不明	２段の障石 右側の灯明石・敷石・障石を取り除く	出雲３期	TK43
2	宮内Ⅱ区１号横穴墓棺	Ⅰa	ロ	有	有	α	単体	有		出雲３期	
③	中村１号墳Ａ石棺	Ⅰa	ロ	有	有	β	敷石と一石	有	２段の障石	出雲４期	TK43 末～209
4	臼コクリＳ－２号横穴墓棺	Ⅰa	ロ	無	有	β	無	有		出雲４期	
5	高広Ⅳ区１号横穴墓棺	Ⅰb			有		単体	有		出雲４期	
6	臼コクリＦ－２号横穴墓棺	Ⅰb			有		単体	有		出雲４期	
7	渋山池５号横穴墓棺	Ⅰb			有		無	有		出雲４期	
8	臼コクリＦ－１号横穴墓棺	Ⅰc					単体	有		出雲４期	
9	臼コクリＳ－３号横穴墓１号棺	Ⅰc					無	有		出雲４期	
10	臼コクリＳ－３号横穴墓２号棺	Ⅰc					無	有		出雲４期	
11	古城山３号横穴墓棺	Ⅰc					単体	有		出雲４期	
12	矢田Ⅱ群２号横穴墓棺	Ⅰc					無	有		出雲４期	
13	渋山池２号横穴墓棺	Ⅱd	ロ	無	有	β	単体	有	石床から人骨出土	出雲４期	
14	穴神１号墳横穴墓棺	Ⅰc					無	有		出雲５～６期	飛鳥1～2
15	島田池１号横穴墓棺	Ⅱd	ロ	有	有	β	単体	有		出雲５～６期	
16	島田１号横穴墓棺	Ⅱe					単体	有		出雲５～６期	
⑰	神門 10 支群Ｈ－１号横穴墓棺	Ⅱe					石床と一体	有		出雲５～６期	
⑱	上塩冶 32 支群６号横穴墓棺	Ⅱe					石床と一体	有		出雲５～６期	

③・⑰・⑱は出雲西部，それ以外は出雲東部
＊1灯明石の横断面形状　イ：長方形　ロ：円形状
＊2側石・障石・灯明石中心の位置　α：中心がそろわない　β：中心がそろう

第３表　出雲における組合せ式家形石棺の付属施設の特徴２

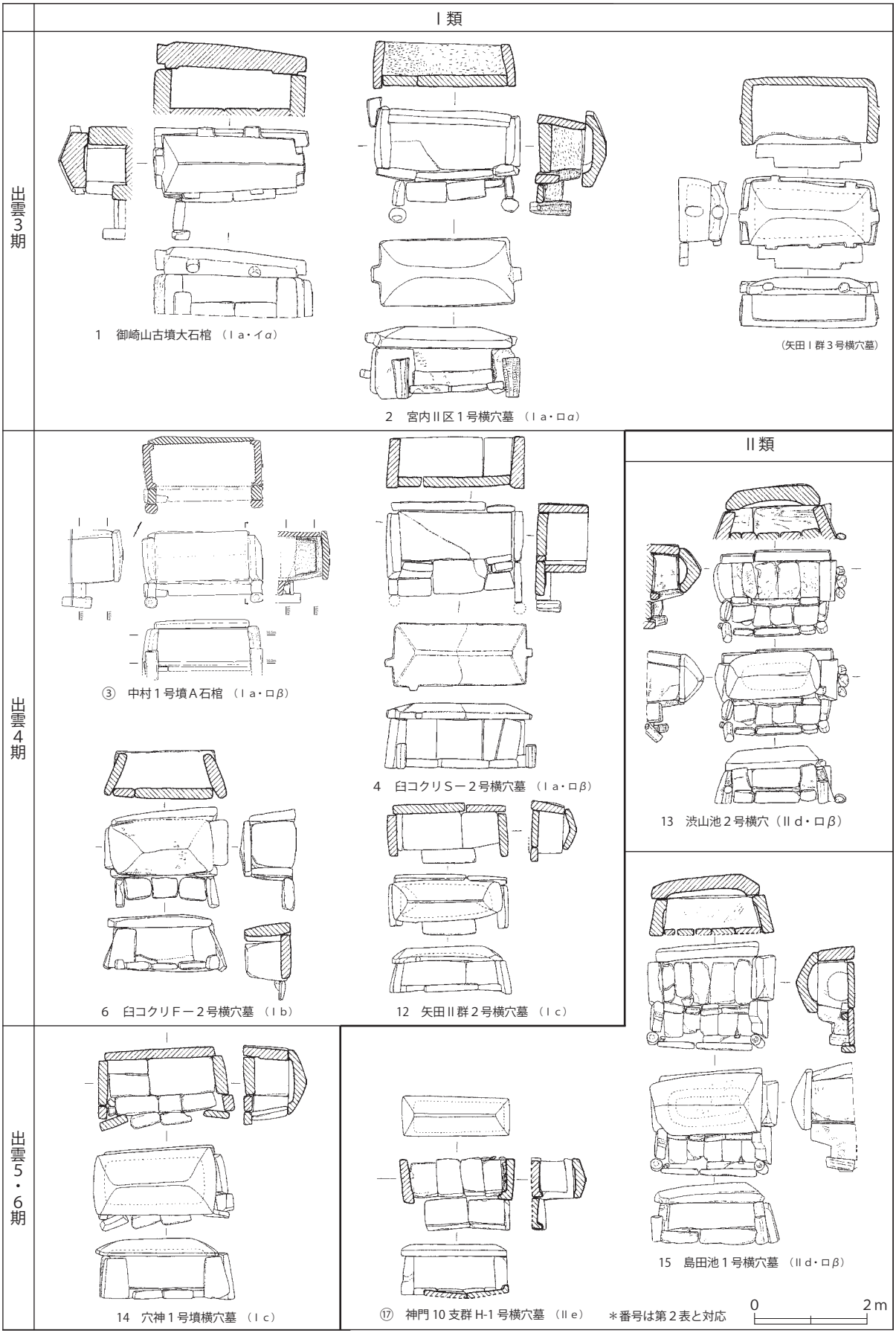
時期	Ⅰa			Ⅰb	Ⅰc	Ⅱd	Ⅱe	畿内
	イα	ロα	ロβ			ロβ		
出雲２期	○（王塚）							TK10
出雲３期	○	○						TK43
出雲４期			○	○	○	○		TK43 末～209
出雲５～６期					○	○	○	飛鳥1～2

Ⅰb　⇒　Ⅰc

Ⅰa（イα→ロα→ロβ）　⇒

Ⅱd　⇒　Ⅱe

第７図　出雲における組合せ式家形石棺付属施設の型式組列



第8図　組合せ式家形石棺に伴う付属施設の変遷（1：100）

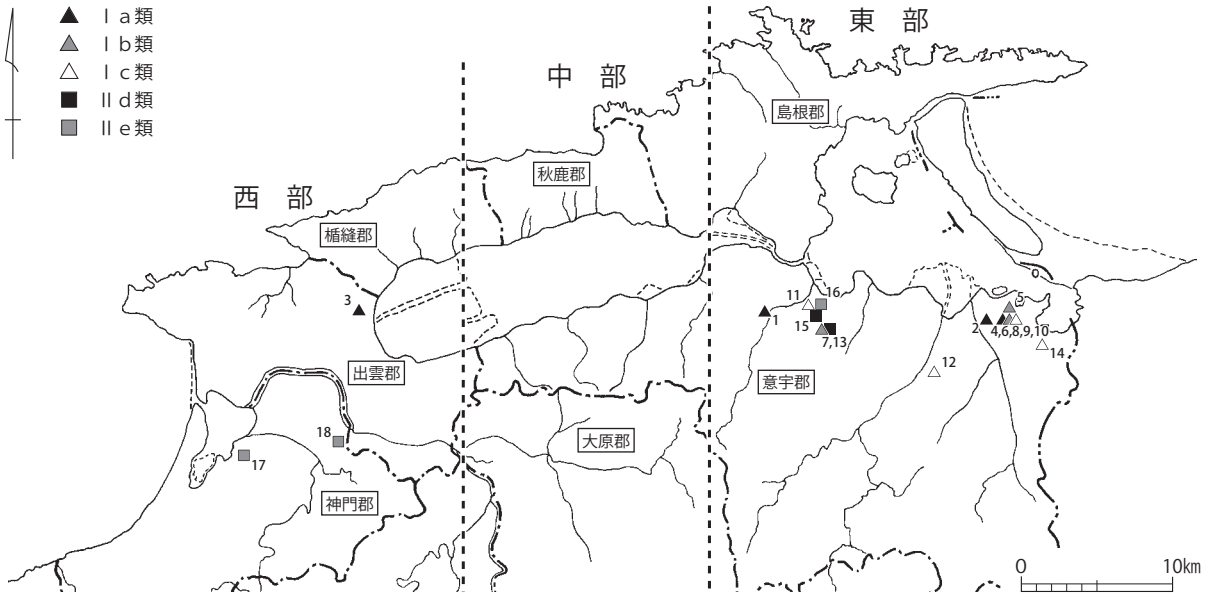
以上，灯明石の導入と展開についてまとめた。灯明石の導入期頃は内田律雄が指摘するように灯明石と敷石がセットで機能したものと考えた。しかし，出雲４期頃からは灯明石を省略するものがあると考えられる。灯明石は中村１号墳Ａ石棺のように基本的に掘形によって自立させている。取り除かれても臼コクリＳ－２号横穴墓棺のように掘形があるはずである。掘形の痕跡がないものは，当初から灯明石がなかったと考えるのが妥当であろう。

灯明石が付属する棺は，横口がある開かれた棺で，閉ざされた棺には伴わないようである。本稿では，灯明石の機能について明らかにすることはできなかった。今後は，出雲の灯明石の祖形と考えた王塚古墳などの開かれた棺が採用される地域で，灯明石の類例と機能の検討が必要であろう。

（４）　組合せ式家形石棺に伴う付属施設の分布からみた出雲

ここでは組合せ式家形石棺に伴う付属施設の分布状況を示し（第９図），先に示した出雲３地域区分の中でそれぞれの地域関係についてまとめてみたい。付属施設を伴う家形石棺は，出雲東部に16基，出雲西部に３基あり，中部にはないことから，基本的な分布の中心が出雲東部にあることは明らかである。それでは，時期と型式ごとに詳細してみたい。

出雲３期におけるＩａ類の出現は出雲東部の御崎山古墳棺などと考えられる。その後の出雲４期に出雲西部の中村１号墳Ａ石棺が造られたと考えられる。これは，Ｉａ類を細分した特徴の新古や，他の副葬品の新古関係からも明らかである。その他のＩｂ・Ｉｃ類も出雲東部で出雲５～６期頃まで展開する。出雲４期にはⅡｄ類の渋山池２号横穴墓棺が出雲東部で出現し，その後，出雲５～６期にも継続し，また，新たにⅡｅ類の島田１号横穴墓棺が出現する。同じころ出雲西部にⅡｅ類の神門10支群Ｈ－１号横穴墓棺と上塩冶32支群６号横穴墓棺がある。Ⅱｅ類は出雲東部に１基，出雲西部に２基あるが，出雲西部の２基は，それまでの型式展開を考えると出雲東部の影響を受けて造られたと



1　御崎山古墳大石棺
2　宮内Ⅱ区１号横穴墓
3　中村１号墳
4　臼コクリＳ－２号横穴墓
5　高広Ⅳ区１号横穴墓
6　臼コクリＦ－２号横穴墓
7　渋山池５号横穴墓
8　臼コクリＦ－１号横穴墓
9　臼コクリＳ－３号横穴墓１号棺
10　臼コクリＳ－３号横穴墓２号棺
11　古城山３号横穴墓
12　矢田Ⅱ群２号横穴墓
13　渋山池２号横穴墓
14　穴神１号墳横穴墓
15　島田池１号横穴墓
16　島田１号横穴墓
17　神門10支群Ｈ－１号横穴墓
18　上塩冶32支群６号横穴墓

第９図　組合せ式家形石棺に伴う付属施設の分布（１：500,000）

考えられる。

以上のことをまとめると，組合せ式家形石棺に伴う付属施設は出雲東部に分布の中心がある。出雲３期に出雲東部に出現し，出雲４期になって，出雲中部を飛び越えて出雲西部の中村１号墳Ａ石棺に分布が広がる。出雲５～６期にかけても出雲東部から出雲西部への影響がみられる。したがって，出雲西部の組合せ式家形石棺に伴う付属施設は，常に出雲東部から情報を得て造られていることが明らかになった。これは，東西出雲の勢力関係を表しているのではなく，大きな出雲というまとまり，つまり同じ横口の開いた家形石棺を造りだす地域の中で，出雲東部からの影響を受けながら出雲西部地域が独自性を持って石棺を造っていたことを示している。また，東西出雲の中間の出雲中部は，石棺本体の形態も独特であり，それに加え石棺の付属施設を取り入れないことも合わせ，独自の石棺作りを行っていると考えられる。

６　まとめ

以上，出雲西部における組合せ式家形石棺の変遷と組合せ式家形石棺に伴う付属施設の変遷を示した。そして，中村１号墳のＡ・Ｂ石棺を組合せ式家形石棺２期に位置付けることができた。ただ，それぞれの前後関係を明確に導き出すことはできなかった。したがって，両石棺は同時期に設置されたか，あるいはごく短期間に追葬があり，その際にＢ石棺が設置されたものと考えられる。

Ａ石棺には灯明石などの付属施設が伴う。これについては，出雲東部の影響を受けたものであることを型式組列から明らかにした。出雲東部から出雲西部への情報の伝播状況が明確に表れた事例である。また，Ｂ石棺は奥石がないという出雲西部の地域色が明確に表れていることを明らかにした。中村１号墳は，石室とＢ石棺が出雲西部，Ａ石棺が出雲東部の特徴をもつ。このことから，中村１号墳の被葬者は出雲西部勢力でありながら，出雲東部勢力と交渉をしていた人物であったと考えられる。言い換えれば，Ａ石棺の築造にあたっては，出雲東西勢力の厳しい規制があったのではなく，受容する側の意向でＡ石棺を採用したとも考えられる。

本稿を作成するにあたって角田徳幸，樋野真司，西尾克己に資料見学，資料収集でお世話になった。特に石棺図面については，大谷晃二にお世話になった。記して感謝する。

（坂本豊治）

註

（１）西尾がまとめた「発展することなく姿を消した」という評価は，かつて和田も同じような評価をしている（和田1983）。西尾らは刳抜式家形石棺の分布が限定的であることから，このような評価をしている。しかし，首長墓のみに採用される刳抜式家形石棺と，小規模な石室や横穴墓に採用される組合せ式家形石棺という違いは重要で，ここに明確な階層差が表れていると考えられる。また，刳抜式家形石棺で最も新しいと考えられる上塩冶地蔵山古墳の時期も問題となる。西尾は出雲４期，筆者は出雲５期と考えている。したがって，「発展することなく姿を消した」という評価は妥当ではない。

（２）今市大念寺古墳前室棺は，上部が破壊されている。発見当時の絵図『今市大念寺洞中細見之絵圖』を見ると蓋石が家形であることがわかる。

（３）他に半分古墳の石棺があるが，詳細は不明である。半分古墳は開口後，埋め戻されていて，実測図が無く詳細は不明である。唯一の記録が，1897 年のウィリアム・ガウラウンドの報告で，その報告について紹介したのが渡辺貞幸である。渡辺は石室と２基の家形石棺の寸法をメートル法で示した。そして，組合の石棺の蓋石の厚さが約 18㎝と薄いことから，土地所有者の談である家形石棺だけではなく，箱式石棺の可能性も想定している（渡辺 1979）。中村１号墳Ａ石棺の蓋石の厚さは約 14㎝（高さ約 18㎝）と薄い。蓋石が薄い家形石棺もある。

（４）『今市大念寺洞中細見之絵圖』の記載から判断した。

（５）神門 10 支群Ｇ－６号横穴墓棺は，横口がない石棺である。出雲西部のすべてが横口がある石棺に統一されたものではない。しかし，蓋石がないので，家形か箱形かは不明である。奥石の上面のレベルが均等でないため当初から蓋石が無かった可能性が高く，開かれた棺となる。

（６）灯明石の可能性がある石棺がもう１基ある。『八雲漫遊日誌』に記載がある安来市宮谷横穴墓群（№ 64）である。横口の組合せ式家形石棺で，「同質の石ヲ以テ造リタル丸形ノ門柱ヲ両側ニ立テタリ」という記事があり，灯明石と考えられるが，石棺自体の状況が不明である（大谷晃二 1989）。

（７）出雲３期の刳抜式家形石棺の前の敷石について触れておく。今市大念寺古墳棺と妙蓮寺山古墳棺にも横口の前に敷石が置かれている。この二つの棺には，横口があるが閉塞石が伴うことが分かっている。刳抜式と閉ざされた棺という特徴から畿内系の棺と考えられ，九州系譜の灯明石と組み合う敷石とは，系譜が異なる敷石と考えている。また，出雲３期の安来市矢田Ⅰ群３号横穴墓棺は横口のある刳抜式家形石棺である。敷石のみが残存していて，敷石の左右の前側には，長方形の刳り込みがある。これらには初葬時に灯明石がはめ込まれていて，何らかの理由で灯明石と敷石側石が取り除かれた可能性があるが，障石の位置，灯明石掘り形の有無など不明な点があり，灯明石があったとは断定できない。

参考文献

石橋　宏 2004「家形石棺の再検討」『古墳文化』創刊号　國學院大學古墳時代研究会　３～ 26 頁

石橋　宏 2006「山陰の家形石棺とその交流」『博望』第６号　東北アジア古文化研究所　45 ～ 78 頁

出雲考古学研究会 1987『石棺式石室の研究－出雲地方を中心とする切石造り横穴式石室の検討－』古代の出雲を考える６　出雲考古学研究会

内田律雄 2006「黄泉の国の灯火」『季刊考古学　特集古墳時代の祭り』第 96 号　雄山閣　21 ～ 27 頁

大谷晃二 1989「『八雲漫遊日誌』に見る安来平野の横穴」『松江考古』第７号　松江考古学談話会　67 ～ 110 頁

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会　39 ～ 82 頁

大谷晃二 1995「出雲の古墳時代後期の切石石棺」『古墳時代後期の棺－家形石棺を中心に－』第 23 回山陰考古学研究集会

大谷晃二 1996「総括」『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ　島根県教育委員会，島根県立八雲立つ風土記の丘　63 ～ 78 頁

大谷晃二・松山智弘 1999「横穴墓の形式とその評価」『田中義昭先生退官記念論文集　地域に根ざして』　田中

義昭先生退官記念事業会　95 ～ 122 頁
大谷晃二 2010「山陰－出雲・因幡を中心に－」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会　453 ～ 457 頁
角田徳幸 1995「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学』３出雲国風土記の巻　同成社　149 ～ 175 頁
角田徳幸 2004「山陰地域の家形石棺」『大王のひつぎ海を渡る－宇土馬門石製家形石棺の謎－』第７回九州前方後円墳研究会・第１回石棺文化研究会資料集　第７回九州前方後円墳研究会・第１回石棺文化研究会大会事務局　33 ～ 44 頁
西尾克己 1999「出雲西部における上塩冶築山古墳の石室と石棺の位置付け」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書４　島根県教育委員会　119 ～ 127 頁
山本　清 1971「山陰の石棺について」『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会　81 ～ 174 頁
和田晴吾 1983「出雲の家形石棺」『展望アジアの考古学－樋口隆康教授退官記念論集－』　新潮社　433 ～ 451 頁
和田晴吾 2003「棺と古墳祭祀（２）－『閉ざされた棺』と『開かれた棺』－」立命館大学考古学論集Ⅲ－２　713 ～ 725 頁
和田晴吾 2007「東アジアの「開かれた棺」」『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』19 ～ 41 頁
和田晴吾 2010「家形石棺」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』349 ～ 355 頁
渡辺貞幸 1974「ガウランド氏と山陰の古墳（上）」『八雲立つ風土記の丘』№.37　２～６頁

図版出典

本稿で使用した図面は，各報告書から転載したものである。石棺については，報告書を再トレースしたものがある。

第５節　馬具の特徴

中村１号墳の横穴式石室には，３組の馬具が副葬されていた。この馬具の組数は１古墳から出土した数としては山陰地方で最多である。これまで島根県内では，松江市岡田山１号墳（松本編 1987）や出雲市上塩冶築山古墳（松本編 1999）のように２組の金銅装や銀装馬具が出土したのが最多だった。出雲市今市大念寺古墳の出土馬具については，３組あったとみる説もある（西尾 1984・1985）が，その大部分が現存しておらず検証するには資料不足である。鳥取県内では，米子市石州府５号墳（小原・下高 1989）で３組分の鞍などの鞍金具が出土しているものの，杏葉は出土していない。また，盗掘をこうむっているため，馬具資料自体が断片的である。

このように，中村１号墳の馬具は，その内容においても，また遺存状況においても山陰地方のみならず，中国地方でも指折りの存在である。ここでは，まず，馬具の組み合わせを検討したうえで，その位置づけについて述べたい。

１　出土馬具の組み合わせ（第１図）

中村１号墳からは，３組の轡，３組の鞍が出土している。しかし，杏葉は２組，鐙吊金具は２組，雲珠・辻金具も２組しか見出せない。これらの馬具の出土状況は，第４章第４・６節で検討したように，副葬後の再配置を経ているため，そのままでは馬具の組み合わせには直結しない。そこで，出土状況とともに馬具各部品の特徴に基づき検討する。

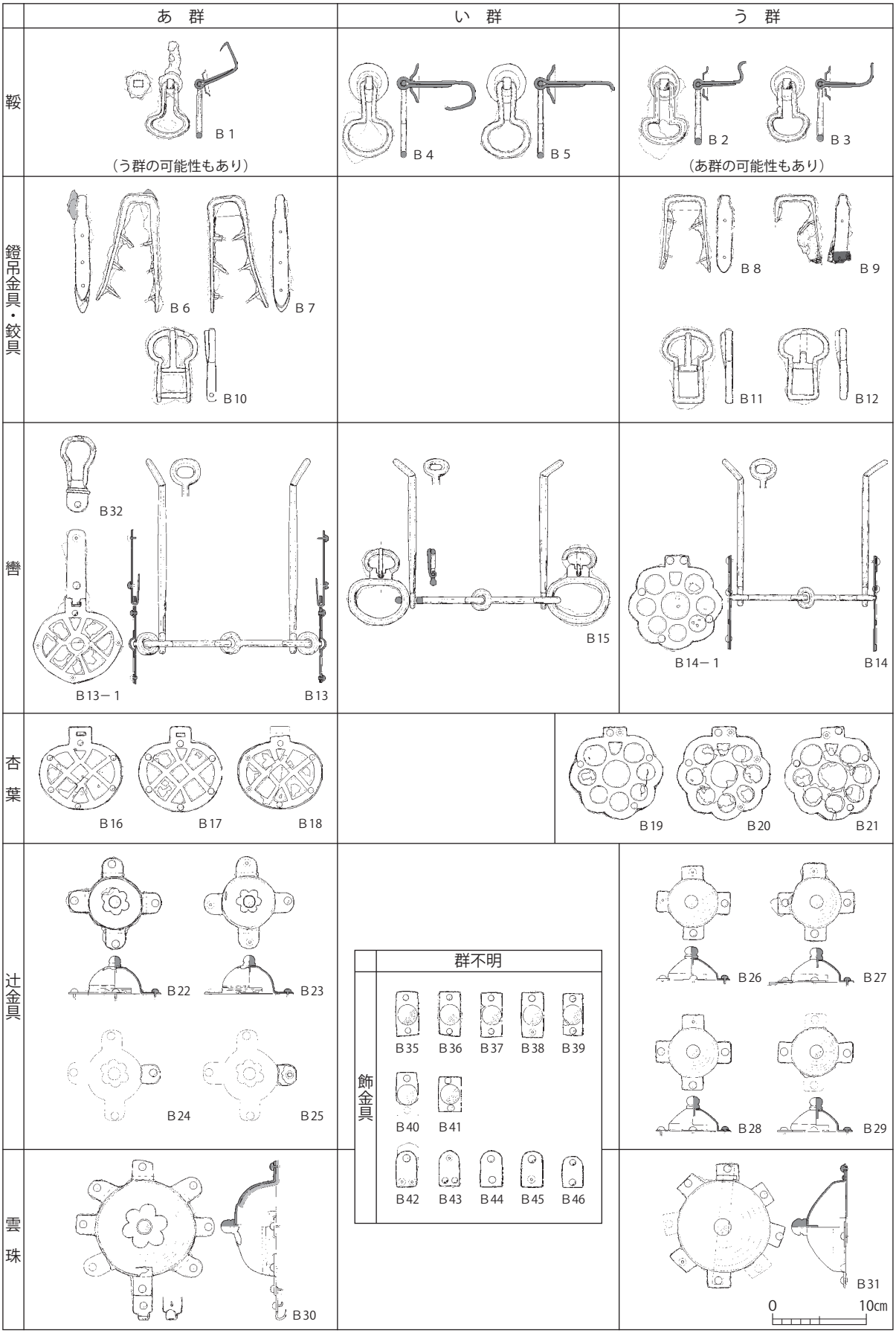
金銅装心葉形鏡板轡Ｂ 13 は，その意匠および立聞の形状から判断して楕円形杏葉（Ｂ 16 ～Ｂ 18）と組み合い，金銅装花形鏡板轡Ｂ 14 は同形の花形杏葉（Ｂ 19 ～Ｂ 21）と組み合う。素環轡Ｂ 15 には組み合う杏葉がない。

鞍金具の鞍は，座金具の形状と材質の違う３種類５点があり，素環轡には鉄製座金具の鞍がともなうとみてよかろう。心葉形鏡板轡には銅製六花形座金具の鞍，花形鏡板轡には銀装杏仁形座金具の鞍を推定するが，確証には欠ける。

鐙吊金具は，３鋲留めのＢ６・Ｂ７と２鋲留めのＢ８・Ｂ９があり，それぞれ鐙靼鋲具Ｂ 10 およびＢ 11・Ｂ 12 と組み合う。鐙吊金具は吊手が短く，鋲の数も少ないものが新しい。前者が心葉形鏡板轡にともない，後者が花形鏡板轡にともなうであろう。

辻金具と雲珠は，側面に凹線をもつ爪形脚部のＢ 22 ～Ｂ 25 とＢ 30，凹線のない円錐台形で方形脚部のＢ 26 ～Ｂ 29 とＢ 31 の２組がある。前者は，頂部に六花形飾りをもつことも共通する。爪形の脚部は心葉形鏡板轡の鉤形吊金具の形状と近似するので，これと組むと推定される。爪形の留金具をともなう鋲具Ｂ 32 も，辻金具Ｂ 22 ～Ｂ 25 にともなって面繋を構成するのであろう。

長方形半球形飾金具は，静岡・蜆塚１号墳の花形杏葉に鋲留めされた例があるが，同古墳では爪形飾金具も共伴している。また，中村１号墳では，長方形半球形飾金具７点中５点が玄室からの出土で，心葉形杏葉と出土位置が近い。よって，組み合わせ不明とした。



第1図　中村1号墳出土馬具の組み合せ（1：6）

２　心葉形鏡板轡

心葉形鏡板轡は，松尾充晶による分類では「Ⅲ－Ａ類」に該当する連結構造をそなえる（松本編 1999）。ただし，鏡板の鉄地板裏面に独立した円環をかしめ，それに銜先環をからめるという，やや特異な手法をとっている。類例には，長野・上原古墳（穂高Ｇ－１号墳）の花形鏡板轡（Ⅲ－Ａ類）や三重・前山古墳（Ⅲ－Ｂ類か）の鐘形鏡板轡がある。市内の出土馬具と比較するならば，構造的にはⅡ類の上塩冶築山古墳より新しい段階に位置づけられる。

３　花形鏡板轡と花形杏葉（第１表，第２図）

花形鏡板付轡と花形杏葉については，小野山節の研究がある（小野山 1983）。連結構造Ⅰ類の群馬・古城稲荷山古墳を最古とし，立聞の連結手法が吊金具から鋲留に変化すること，八花形の外形が変容することを示した。その後，内山敏行は古墳時代馬具の総合的な編年を提示する中で，花形鏡板と花形杏葉を，後期第３段階，後期第４段階，終末期第１段階に位置づけた（内山 1996）。内山は，後期を陶邑高蔵 209 号窯式期まで，終末期の開始を「飛鳥Ⅰ新相」としている。中村１号墳の花形鏡板轡は，やや大型の八花形の輪郭を保ち，連結構造がⅢ－Ｂ類で，立聞が鋲留されるから，内山の後期第４段階におかれるだろう。

花形鏡板と花形杏葉の出土例を，小野山や桃崎祐輔の研究（桃崎 2002）などによって収集したところ，中村１号墳を含めて 32 例（出土地不明３例を含む）を確認できた。これまでも指摘されてきたように，関東地方，特に群馬・栃木が全体の 1/3 を占め，これに静岡が続く。近年，近畿西部や山陰地域の出土例が確認され，関東と九州に偏在するあり方からは変化しつつある。

４　島根県内の馬具出土古墳（第２表，第３図）

島根県で確認できる馬具出土古墳・遺跡は，58 遺跡 66 例である。隠岐諸島（旧隠岐国）では，金銅鈴の出土のみで他の馬具は未出土。これを奈良時代の旧国郡別に集計する。

出雲国（47 遺跡 55 例）

意宇郡：22 遺跡 25 例（うち，のちの能義郡：９遺跡 10 例），島根郡：２遺跡２例，

秋鹿郡：０遺跡０例，楯縫郡：１遺跡１例，出雲郡：４遺跡４例，

神門郡：11 遺跡 16 例，飯石郡：０遺跡０例，仁多郡：２遺跡２例，大原郡：５遺跡５例

石見国（10 遺跡 10 例）

安濃郡：０遺跡０例，邇摩郡：１遺跡１例，那賀郡：１遺跡１例，邑智郡：４遺跡４例，

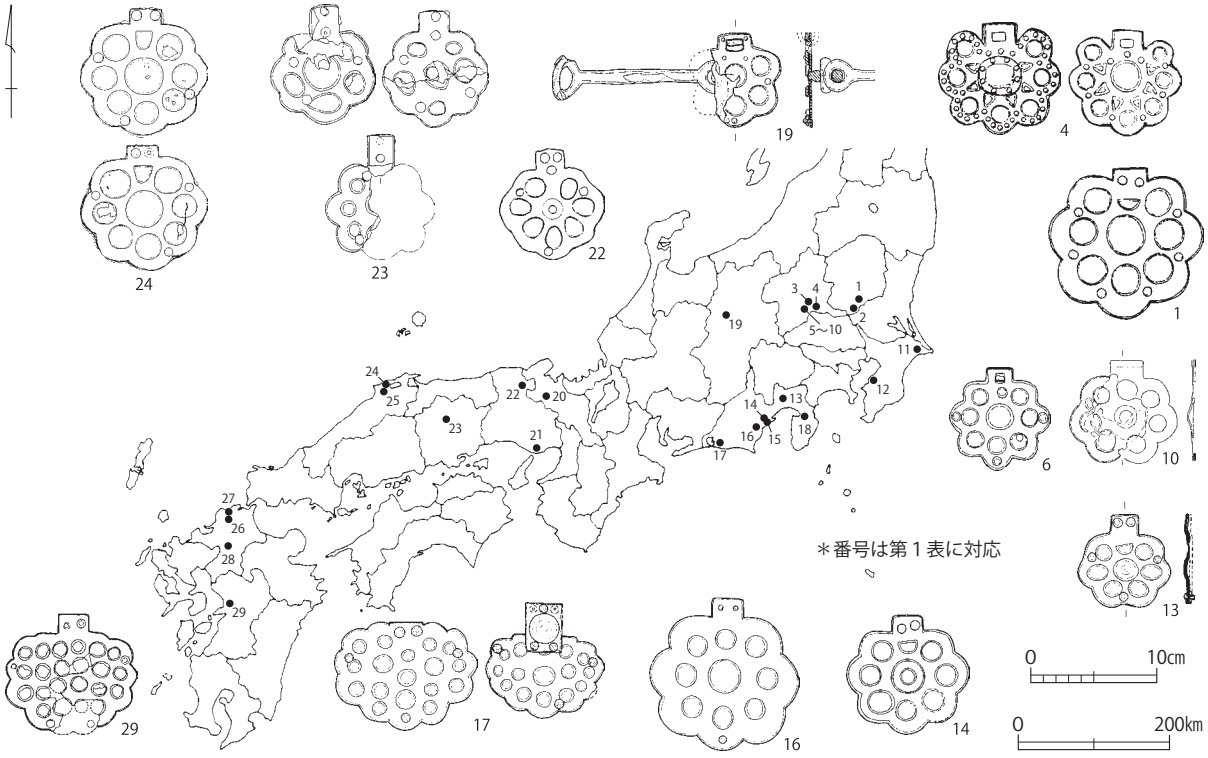
美濃郡：４遺跡４例

島根県内で最古の馬具は，北光寺古墳（神門郡）から出土した轡片である（仁木 2007）。墳形（前方後円墳）や舟形石棺の型式から中期前半から中葉の築造と推定されている。これ以外に，中期古墳からの出土例はない。

鉄製楕円形鏡板付轡など中期後半から後期初頭の馬具は，現在のところ，島根県内では出土してい

第1表　花形鏡板轡・花形杏葉一覧

番 号	遺跡名	所在地			墳　形	石室の種類ほか	花形鏡板	花形杏葉	立聞の型式
1	愛宕塚古墳	栃木県	下野市	下石橋	円墳 82m（造出）	石棺式石室	○	2	鋲留
2	飯塚2号墳	栃木県	小山市	飯塚	帆立貝前方後円墳 52m	横穴式石室		1	
3	大日塚古墳	群馬県	前橋市	五代町 249	前方後円墳 30m	横穴式石室		3	鋲留
4	古城稲荷山古墳	群馬県	伊勢崎市	稲荷町古城甲 848	前方後円墳 55m	横穴式石室	○	3	吊金具
5	上滝古墳	群馬県	高崎市	上滝町	不明			2	吊金具
6	前山古墳	群馬県	高崎市	下滝町境内 26	前方後円墳 60m			2	鋲留
7	不明	群馬県	高崎市	岩鼻町（旧陸軍省火薬製造所構内）	不明	不明		○	不明
8	石原稲荷山古墳	群馬県	高崎市	石原町中石原 1550	円墳 30m	横穴式石室		1＋	不明
9	観音塚古墳	群馬県	高崎市	八幡町	前方後円墳 105m	横穴式石室	○	3	大型，鋲留
10	堤上遺跡 H－142 号住居跡	群馬県	高崎市	群馬町三ツ寺字堤上		竪穴住居跡	○		不明
11	関向古墳	千葉県	匝瑳市	飯塚関向 306				1	
12	金鈴塚古墳	千葉県	木更津市	長須賀	前方後円墳 100m	横穴式石室	○	3	大型，鋲留
13	別所1号墳	静岡県	富士宮市	安居山別所			○		鋲留
14	賤機山古墳	静岡県	静岡市	葵区宮ヶ崎町	円墳 32m	横穴式石室 家形石棺	○	2	鋲留
15	（伝）小鹿村出土	静岡県	静岡市	駿河区	不明	不明	？	？	吊金具?
16	瀬戸B 20 号墳	静岡県	藤枝市	瀬戸	円墳	横穴式石室		1	鋲留
17	蜆塚1号墳	静岡県	浜松市	中区蜆塚	円墳 13m	横穴式石室	○	2	大型，鋲留
18	芋ヶ窪2号墳	静岡県	伊豆の国市	奈古谷芋ヶ窪	円墳	横穴式石室		1	鋲留
19	上原古墳（穂高古墳群G1号墳）	長野県	安曇野市	穂高	不明	横穴式石室	○		吊金具
20	久田山古墳群B支群 19 号墳	京都府	綾部市	下八田町	円墳 18m	横穴式石室	○		鋲留
21	狩口台きつね塚古墳	兵庫県	神戸市	垂水区狩口台7丁目	円墳 26m 二重周溝 55m	横穴式石室 家形石棺	○	2＋?	鋲留
22	不明	兵庫県	養父市	八鹿町岩崎	不明	不明		1	鋲留
23	定東塚古墳	岡山県	真庭市	上中津井 64	方墳 25 × 18m	横穴式石室 陶棺	○	2＋	鋲留
24	中村1号墳	島根県	出雲市	国富町中村	円墳 30m	横穴式石室 家形石棺	○	3	鋲留
25	築山遺跡2号墳	島根県	出雲市	上塩冶町	円墳 12m	横穴式石室		○	不明
26	竹原古墳	福岡県	宮若市	竹原	円墳 18m	横穴式石室	○	3	
27	銀冠塚古墳	福岡県	鞍手郡	鞍手町八尋大谷	円墳 18m	横穴式石室		2	
28	狐塚古墳	福岡県	朝倉市	入地	円墳 30m	横穴式石室		1	
29	つつじヶ丘C－1号横穴墓	熊本県	熊本市	手取本町	横穴墓			1	大型，鋲留



第2図　花形鏡板轡・花形杏葉分布図（1：10,000,000，遺物1：6）

ない。北光寺古墳例に続くのは，仏山古墳（前方後方墳，意宇郡（のち能義郡）），上島古墳（円墳？，出雲郡），今市大念寺古墳（前方後円墳，神門郡），めんぐろ古墳（墳形不明，那賀郡），小丸子山古墳（前方後円墳，美濃郡）など，ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉および馬鐸といった馬具を出土した古墳であり，いずれも後期前半から後期後半の初め頃と推定される。ともに出土した須恵器の型式は，出雲の須恵器編年では，大谷編年出雲２期から３期であり，陶邑の陶器山 15 号窯型式期から陶器山 85 号窯式期に平行する。

この他に，面繋の菱形飾金具しか出土していないが，横穴式石室と須恵器の型式から，薄井原古墳（前方後方墳，島根郡）を加えることができるだろう。一方，ほぼ同時期と考えられる，林 43 号墳（前方後円墳，意宇郡）からは馬具が出土しなかった。このように，島根県内では，古墳時代後期前半から中頃の馬具は，おおむね後の郡に相当する地域に１基程度の密度で導入されており，しかも，金銅装の馬具を中心とするようである。

これらを含めて後期の馬具出土古墳が集中するのは，意宇郡東部（のちの能義郡，現安来市域），意宇郡中部（現松江市南部）そして神門郡（現出雲市中央部）の３つの地域である。これらの地域は，出土遺跡（古墳）の様相に各々特徴がある。

まず，意宇郡東部，のちに能義郡となる現安来市域には，９遺跡 10 例の出土馬具がある。先述した仏山古墳を除く，８遺跡９例すべて横穴墓出土である。これがこの地域の特徴だ（内山・大谷 1995）。もちろん，石棺式石室をもつ古墳もあり，なかには飯梨岩舟古墳のように石室規模の大きい古墳もあるが，それらは古くから開口しているため副葬品は不明である。しかしながら，その点を考慮したとしても，宮内Ⅱ区１号横穴墓（宮本・山尾 1983）と鷺の湯病院跡横穴墓（山本 1984）のように金銅装の鞍金具（磯金具）を含む馬具を保有する横穴墓は，全国的にも出色の存在である。

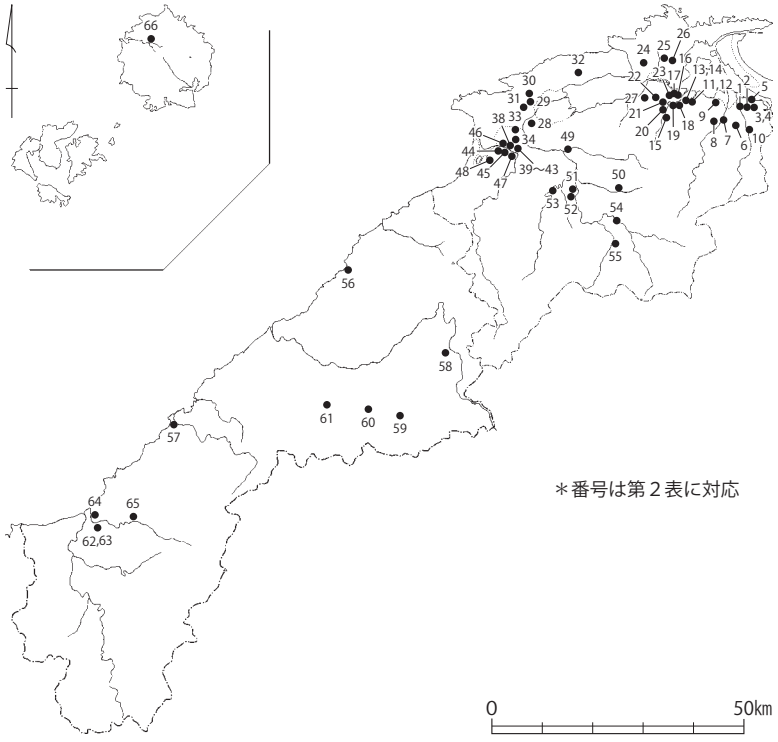
次に，意宇郡中部，現松江市域では，13 遺跡 15 例を数えることができる。この地域では岡田山１号墳が質量とも優れている（松本編 1987）。金銅装鏡板轡や杏葉に加え，金銅装鞍金具と２種の金銅装雲珠などがある。墳丘規模が近似する古天神古墳や，墳丘規模・石室規模ともにまさる御崎山古墳には，金銅装雲珠はあるものの，轡は素環轡であり金銅装鞍金具を欠く。金銅装鏡板轡が岡田山１号墳以外にないのは，この地域の現状での特徴である。大型の前方後円墳で副葬品の一端が判明するのは手間古墳に限られるが，金銅装鞍金具と雲珠が見つかっている。したがって，一応，大型古墳には鞍金具が保有され，墳丘規模 30 ｍ程度の中型以上の前方後方墳・前方後円墳には，金銅装鞍や金銅装鏡板轡が保有されない，という墳丘規模の階層差は存在し，その中で，岡田山１号墳だけが特異な馬具の様相を示すとみたい。それは「額田部」銘銀象嵌大刀に象徴される，被葬者の特殊な経歴に基因するのだろうか。そして，６遺跡８例ある横穴墓出土馬具は，わずかな飾金具を除けば金銅装製品を含まない。横穴式石室墳や石棺式石室墳との間には，大きな違いが存在する。

出雲西部の出雲平野部では，11 遺跡 16 例の出土馬具がある神門郡（出雲市中央部）を中心とし，中村１号墳の所在する出雲郡（出雲市東部）の４遺跡４例がある。この地域の特徴は，墳丘と石室の規模や墓の型式差と馬具の質量とにかなり明確な対応関係があることだろう。地域最大規模の墳丘と石室・石棺をもつ今市大念寺古墳は，馬具の全容は不明だが，金銅装雲珠を含むことは確実であり，

第2表　島根県内馬具出土古墳一覧

番 号	遺跡名	所在地	墳形と構造	石　棺	馬　具
1	宮内Ⅱ区1号横穴墓	安来市宮内町	横穴墓	家形石棺	金銅装鞍金具1，鐙金具2，素環轡1，金銅装飾金具3，鉸具2
2	岩屋口北遺跡1号墳	安来市宮内町	前方後円墳（12.5m）横穴墓	家形石棺	素環轡1，飾金具5，鉸具1
3	臼コクリF区2号横穴墓	安来市宮内町	横穴墓	家形石棺	鞍2
4	臼コクリN区2号横穴墓	安来市宮内町	横穴墓	家形石棺	金銅装辻金具1
5	高広Ⅳ区2号横穴墓	安来市黒井田町	横穴墓		素環轡1
6	鳥木横穴墓	安来市鳥木町	横穴墓	家形石棺	鞍金具，轡1，銀装辻金具7，鉸具1
7	矢田Ⅰ群3号横穴墓	安来市矢田町	横穴墓	家形石棺	素環轡1
8	鷺の湯病院跡横穴墓	安来市植田町	横穴墓	家形石棺	金銅装鞍金具1，轡1，金銅装雲珠1，金銅装辻金具2
9	仏山古墳	安来市荒島町	前方後方墳（47m）箱形石棺		轡1，金銅装剣菱形杏葉5
10	中山横穴墓	安来市伯太町	横穴墓		素環轡1
11	島田池1区1号横穴墓	松江市東出雲町	横穴墓	家形石棺	轡1，鞍2
12	島田池1区2号横穴墓	松江市東出雲町	前方後方墳（20m）横穴墓		素環轡1，鐙金具2，鉸具2
13	古城山B区3号横穴墓	松江市東出雲町	横穴墓	家形石棺	素環轡1，鉸具2
14	古城山C支群3号横穴墓	松江市東出雲町	横穴墓		鞍1
15	高野2号横穴墓	松江市八雲町	横穴墓		素環轡1，鉸具2
16	中竹矢1号横穴墓	松江市竹矢町	前方後方墳（14m）横穴墓		素環轡1，金銅装飾金具4，鉸具1
17	手間古墳	松江市竹矢町	前方後円墳（66m）横穴式石室？		金銅装鞍金具1，金銅装雲珠（辻金具）
18	安部谷横穴墓群	松江市大草町	横穴墓		素環轡1
19	古天神古墳	松江市大草町	前方後方墳（27m）石棺式石室		金銅装吊金具付素環轡1，金銅装雲珠1，金銅装辻金具1
20	御崎山古墳	松江市大草町	前方後方墳（40m）横穴式石室	家形石棺2	金銅装吊金具付素環轡1，金銅装雲珠1，金銅装辻金具1，金銅装飾金具2，金銅鈴4
21	岡田山1号墳	松江市大草町	前方後方墳（24m）横穴式石室	家形石棺	金銅装鞍金具1，金銅装心葉形轡1，金銅装雲珠2種2，金銅装辻金具2種4，鉄辻金具2，馬鈴6
22	向山1号墳	松江市山代町	方墳（32m，前方後方墳50m+？）石棺式石室		銀装鞍2，轡，銀装辻金具3，銀装飾金具3，鉸具2
23	十王免12号横穴墓	松江市山代町	横穴墓		鐙金具（兵庫鎖）1
24	菅田16号横穴墓	松江市菅田町	横穴墓	横口式石棺	鐙金具（鉸具）1（前庭部出土）
25	常熊古墳	松江市西川津町	円墳（12m）横穴式石室		金銅装吊金具付素環轡1，金銅装辻金具2
26	薄井原古墳2号石室	松江市坂本町	前方後方墳（50m）横穴式石室	箱形石棺	鐙金具，金銅装飾金具2
27	田和山1号墳	松江市乃木福富町	前方後円墳（20m）横穴式石室		鉸具1
28	平野西支群5号横穴墓	出雲市斐川町	横穴墓		素環轡1
29	上島古墳	出雲市国富町	円墳（22m）竪穴式石室	家形石棺	金銅装鞍金具1，金銅装f字形轡1，素環轡1，金銅装剣菱形杏葉3，鉄心葉形杏葉4，金銅装雲珠2，金銅装辻金具2，金銅装十字形辻金具9，鉸具4
30	中村1号墳	出雲市国富町	円墳（30m）横穴式石室	家形石棺・箱形石棺	鞍5，鐙金具4，金銅装心葉形轡1，金銅装花形轡1，素環轡1，金銅装楕円形杏葉3，金銅装花形杏葉3，金銅装雲珠2種2，金銅装辻金具2種6+，金銅装飾金具12，鉸具4
31	美談神社2号墳	出雲市美談町	方墳（13m）横穴式石室	棺台	銀装鞍1
32	大畑8号墳	出雲市野郷町	不明，箱形石棺か横穴式石室		素環轡1
33	今市大念寺古墳	出雲市今市町	前方後円墳（92m）横穴式石室	家形石棺2	鞍，金銅装轡2+，金銅装杏葉3+，金銅装雲珠，金銅装辻金具，馬鐸3
34	上塩冶築山古墳	出雲市上塩冶町	円墳（47m）横穴式石室	家形石棺2	金銅装鞍金具1，鞍1，鐙金具1，金銅装心葉形轡1，轡片1，金銅装心葉形杏葉7，銀装心葉形杏葉1，金銅装雲珠1，金銅装辻金具12，銀装雲珠1，銀装辻金具3，馬鈴5，鉸具，障泥金具1，鉸具
35	築山遺跡1号墳	出雲市上塩冶町	円墳（13m）横穴式石室		鐙金具1，飾金具2
36	築山遺跡2号墳	出雲市上塩冶町	円墳（12m）横穴式石室		金銅装花形杏葉片？2，金銅装辻金具2，金銅装飾金具4，鉸具1
37	築山遺跡4号墳	出雲市上塩冶町	円墳（21m）横穴式石室		金銅装辻金具1，金銅装飾金具16，鉸具1
38	半分古墳	出雲市上塩冶町	前方後円墳（34m以上）横穴式石室		金銅装f字形轡（出土疑問），金銅装雲珠2，金銅装辻金具2
39	上塩冶22支群12号横穴墓	出雲市上塩冶町	横穴墓		鉸具2+
40	上塩冶22支群14号横穴墓	出雲市上塩冶町	横穴墓		鞍1，素環轡1

番 号	遺跡名	所在地	墳形と構造	石　棺	馬　具
41	上塩冶 22 支群 15 号横穴墓	出雲市上塩冶町	横穴墓		鉸具 1
42	上塩冶 23 支群７号横穴墓	出雲市上塩冶町	横穴墓		鉄壺鐙 1，轡 1
43	上塩冶 36 支群３号横穴墓	出雲市上塩冶町	横穴墓		鐙金具（鉸具）1，素環轡 1，鉸具 1
44	妙蓮寺山古墳	出雲市下古志町	前方後円墳（49m）横穴式石室	家形石棺	金銅装鞍金具 1，木芯鉄装壺鐙 1，素環轡 1，金銅装心葉形杏葉 1，金銅装雲珠 2，金銅装辻金具 4，障泥吊金具 3，金銅装飾金具 1，鉸具 3
45	放レ山古墳	出雲市古志町	円墳（13m）横穴式石室	棺台	金銅装棘葉形轡 1，素環轡 1，金銅装棘葉形杏葉 3，金銅装雲珠 1，金銅装辻金具 2
46	大梶古墳	出雲市古志町	墳形不明，横穴式石室		鉸具 1
47	刈山５号墳	出雲市馬木町	円墳（15m）横穴式石室	家形石棺	金銅装辻金具 2，鉸具 1
48	北光寺古墳	出雲市東神西町	前方後円墳（64m）	舟形石棺	轡
49	湯後遺跡	雲南市加茂町	包含層（周囲に横穴墓８基）		鉄轡 1，鉸具 1
50	寺谷尻古墳	雲南市大東町	円墳（10m）横穴式石室		金銅装雲珠 1
51	岩佐古墳	雲南市木次町	不明		轡
52	岩広古墳	雲南市三刀屋町	墳形不明，横穴式石室		素環轡 1
53	太田２号横穴墓	雲南市三刀屋町	横穴墓		素環轡 1，鉸具 2
54	原田古墳	仁多郡奥出雲町仁多	円墳？（10m）横穴式石室		鐙金具（鉸具）1，金銅装心葉形轡 1，金銅装心葉形杏葉 2+，金銅装雲珠 1，金銅装辻金具 3，金銅装飾金具 2+，鉸具 2
55	川子原横穴墓	仁多郡奥出雲町仁多	横穴墓		素環轡 1，飾金具 6，鉸具 2
56	鳥居原古墳	大田市仁摩町	墳形不明，横穴式石室		金銅装鞍
57	めんぐろ古墳	浜田市治和町	墳形不明，横穴式石室		木芯鉄装壺鐙 1，金銅装ｆ字形轡 1，素環轡 1，金銅装剣菱形杏葉?，金銅装雲珠 1，金銅装辻金具?，三環鈴 1，馬鐸 3，鉸具
58	郷上古墳	邑智郡美郷町大和	円墳（12m）横穴式石室		素環轡 1，鉸具 1
59	長尾原Ａ－１号墳	邑智郡邑南町瑞穂	円墳（10m）横穴式石室		鉸具?
60	塔ノ本古墳	邑智郡邑南町	墳形不明，横穴式石室		轡
61	湯谷悪谷２号横穴墓	邑智郡邑南町	横穴墓		鐙金具，鉸具
62	北長迫Ⅱ群３号横穴墓	益田市赤城町	横穴墓		鐙金具 1
63	南長迫５号横穴墓	益田市赤城町	横穴墓	石枕	杏葉
64	小丸子山古墳	益田市乙吉町	前方後円墳（52m）不明		轡，三鈴杏葉 1，馬鐸 1+，辻金具
65	三谷小原４号墳	益田市美都町	墳形不明，横穴式石室		鐙金具
66	東笠根１号墳	隠岐郡隠岐の島町北方	円墳（12m）横穴式石室		金銅鈴



第３図　島根県内馬具出土古墳分布図（１：1,500,000）

金銅装鞍金具が大型円墳の上塩冶築山古墳と中型前方後円墳の妙蓮寺山古墳から出土している。これらに次ぐ，墳丘規模が 10 数mから 30 mの円墳には，金銅装鞍金具の保有は見出せない。だが，意宇郡中部と違って，このクラスの古墳に金銅装鏡板轡・杏葉・雲珠の保有は確認できる。これはこの地域の特徴である。中村 1 号墳もその例外ではない。そして，横穴墓からは，鉄製壺鐙が 1 例あるのを除けば，鉄製素環轡と鉄製鞍，木製鉄装壺鐙のセット以外出土しておらず，金銅装馬具はまったく含まれていない。この点では，意宇郡中部地域と共通する。

以上のように，素環轡を含めて，中村 1 号墳の馬具は，須恵器編年では出雲 4 期（陶邑高蔵 209 号窯式期）にあたる。そして，その組み合わせは，出雲西部における古墳規模の階層性をほぼ忠実に反映させたものとみることができよう。（花谷　浩）

参考文献

尼子奈美枝 2003「古墳時代後期における中央周縁関係に関する予察」『ヒストリア』第 183 号　大阪歴史学会　1 ～ 39 頁

内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 2007「松江市玉湯町所在の前方後円墳墳丘測量報告（下）」『島根考古学会誌』第 24 集　島根考古学会　101 ～ 132 頁

内山敏行・大谷晃二 1995「安来市鳥木横穴墓について」『八雲立つ風土記の丘』No.131　島根県立八雲立つ風土記の丘　2 ～ 9 頁

内山敏行 1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『96 特別展　黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘　42 ～ 47 頁

大谷晃二・松尾光晶 2004「島根県　装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧」『島根考古学会誌』第 20・21 集合併号　山本清先生追悼島根考古学会創立 20 周年記念特集号　島根考古学会　545 ～ 572 頁

小野山節 1983「花形杏葉と光背」『MUSEUM』383　東京国立博物館

小原貴樹・下高瑞哉 1989『鳥取県米子市　石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会・石州府古墳群発掘調査団

東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会

仁木　聡 2007『北光寺古墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書 36　島根県教育庁文化財課古代文化センター・埋蔵文化財調査センター

西尾良一 1984・1985「今市・大念寺古墳について」『ふいーるど・のーと』№6・8　本庄考古学研究室

松本岩雄編 1987『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会

松本岩雄編 1999『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 4　島根県古代文化センター

桃崎祐輔 2002「笊内 37 号横穴墓出土馬具から復元される馬装について」『福島県内出土古墳時代金工遺物の研究　－笊内古墳群出土馬具・武具・装身具等　真野古墳群 A 地区 20 号墳出土金銅製双魚佩の研究復元製作－』福島県埋蔵文化財センター白河館 2001 年度研究紀要　36 ～ 74 頁

第６節　須恵器からみた中村１号墳

１　はじめに

後期古墳の年代を決める材料の一つに須恵器がある。須恵器は他の副葬品と比べて多く出土することから，石室や横穴墓の相対年代決定に採用される最も信頼される遺物である。また，須恵器は葬送儀礼に欠かせない道具であり，古墳での使用方法も重要な問題を内包している。

中村１号墳からは，閉塞部から出雲型子持壺と大甕が，石室内からは蓋杯，有蓋高杯，台付直口壺，短頸壺，横瓶，大壺などが出土した。これらの中には出土位置から推定して一括性が高い良好な資料がある。そして，一括性の高い資料が少ない出雲の須恵器研究においても重要な位置を占める。また，これらの須恵器は中村１号墳の石室や副葬品の時期，葬送過程を検討する上においても重要になってくる。したがって，中村１号墳出土の須恵器について各器種の年代的な根拠を示し，中村１号墳の葬送儀礼の時期幅について明らかにすることは重要な課題であり，本稿を執筆する目的はそこにある。

２　須恵器研究の現状と課題

出雲における古墳時代の須恵器研究は，編年研究と，生産と供給についての研究が中心に進められてきた。本稿では，古墳時代須恵器の研究動向について簡単に触れておきたい。

（１）　編年研究

山陰の須恵器研究の先駆者は山本清であり，1960 年に須恵器編年が示されている。山本は蓋杯を７型式に細分し，それを基に山陰の須恵器をⅠ～Ⅳ期の４期区分の編年を提唱した。その後の研究は，総括的な研究ではなく，個別遺跡内の前後関係などを根拠に山本編年の細分と畿内との平行関係を示すことに力が注がれている（中濱 1982，萩本・佐古 1984，足立・丹羽野 1984，房宗 1985，門脇 1985，西尾・丹羽野 1991，渡辺・内田・曳野・松本 1991）。

これらの須恵器研究を踏まえて，編年研究を発展させたのが 1994 年の大谷晃二の論文である。大谷は，横穴式石室や横穴墓などから出土した一括性の高い資料を抽出し，蓋杯・有蓋高杯・長脚無蓋高杯・短脚無蓋高杯・𤭯・提瓶・平瓶・長頸瓶の明確な型式分類と型式組列を示し，それらの組合せを明らかにした。そして，出雲の須恵器について古墳時代～奈良時代前期を８期区分（出雲１～８期）する編年案を提唱するとともに，他地域とは異なる出雲地域の須恵器の地域色を明らかにした。また，出雲２期～５期の馬具と装飾大刀から畿内との平行関係を示したことも大きな成果である（大谷 1994，以下，大谷編年と呼ぶ）。後に，大谷は出雲１期と出雲６期について改めて検討を行っている（大谷 2001，2003）。

以上は，消費地から出土した資料による編年である。これに対し，生産地である窯跡出土資料からの編年研究も行われている。2000 年代に入って松江市により大井古窯跡群の６世紀末～８世紀と考えられる４基の窯跡が発掘調査されている。これらの成果を基に，藤原哲・秦愛子は，窯跡と灰原出土資料をもとに杯の型式分類と型式組列を示している。また，考古地磁気の年代測定の結果から，実

年代の検討も行われている（藤原・秦 2004）。

以上の編年研究についてまとめると，生産地である窯跡資料が少なく，消費地資料での編年を行っているのが現状である。藤原・秦が大井窯産資料による編年を行っているが，資料不足から消費地資料の大谷編年の精度に及んでいないと指摘できる。また，大谷編年は消費地資料のうち一括性の高い資料を中心に行われているが，基準資料の中には追葬などのため確実に一括性が高い資料といえるものが少なく，典型資料の根拠が曖昧なものがあると指摘できる。大谷が須恵器編年を発表して以来17年余り経ち，新たに良好な資料が蓄積されてきているが，大谷編年を発展させる総括的な論考が発表されていないことが現状の大きな問題であると考えられる。

特殊な須恵器である出雲型子持壺については，昌子寛光（昌子 1987），柳浦俊一（柳浦 1993），佐古和枝（佐古 1994），池淵俊一（2004・2011，以下，池淵編年と呼ぶ）の論考がある。大谷編年に対応させているのが池淵編年であり，子持壺からも古墳の築造時期が検討できるようになったことは重要であろう。

（2）　生産と供給

須恵器の供給については生産地である窯跡の分布から研究されてきた。窯跡出土資料を詳細に検討し，須恵器生産について触れたのは1986年の柳浦俊一の論文である。柳浦は山本編年の古墳時代の４期編年に，自身の歴史時代の５期編年を加えた９期区分の編年を示した。そして，窯跡採集資料を中心に各窯跡の操業期間を９期編年にあてはめて紹介している。その結果，１期（５世紀末～６世紀初頭・TK23およびTK47に相当）に出雲の須恵器生産が開始されていることを明らかにした。また，３期（６世紀後半）から７期（８世紀中頃）には松江市大井古窯跡群以外に窯跡がないことから須恵器生産が大井古窯跡群で独占的に行われていたと指摘した。そして，肉眼観察と考古学的手法から大井窯群産の製品は出雲国はもとより，伯耆・因幡国にまで供給されていると指摘した（柳浦 1986）。その後，須恵器生産と供給の問題を解決する手法として，白石純による胎土分析が行われた（白石 2010）。その成果をもとに岡田裕之が検討を行っている（岡田 2010）。白石は７世紀後半～９世紀前半の生産地と消費地資料の胎土分析を行い，大井窯群産が出雲国および伯耆西部まで分布していることを明らかにした（白石 2010，岡田 2010）。これは，柳浦の指摘がおおむね妥当であることを証明したといえよう。ただし，出雲市青木遺跡などの資料には「非大井産」のものがあることも明らかになった。

一方，生産地が大井窯群に独占されるという指摘に対し，疑問が投げ架けられている。それは，須恵器甕口縁部の装飾文様配置に東西出雲で地域差があるという花谷浩による指摘である（花谷 2008）。また，池淵俊一は出雲西部の出雲市上塩冶築山古墳の子持壺が，出雲東部の系譜を引きながら，それとは異なる手法で作製されていることを指摘している（池淵 2004）。これも，東西出雲の製品の相違と理解できる例である。このように，大谷編年の出雲４期～５期（６世紀末～７世紀前半）にかけて東西出雲の須恵器に地域性があるという指摘は重要で，出雲西部にも須恵器窯がある可能性が考えられる。このような視点は2000年代になって表れている。これは，出雲西部の須恵器の資料が増加したことが背景にあり，今後，他の器種においても地域性の有無について検討する必要があろう。また，胎土分析が，６世紀後半～７世紀前半にかけての資料に対して行われていない点も今後の課題である。

以上，須恵器の編年と，生産と供給についての研究史をまとめ，現状の問題点についてそれぞれあげてみた。現状の課題をまとめると，編年研究では新たに発見された一括性の高い資料を踏まえ，大谷編年を再構築することが求められている。これにより，曖昧であった型式認定や時期決定がより明確にできると考えられる。その編年構築においては，可能な限り東西出雲に分けて編年を構築し，地域性の有無を明らかにしていく必要がある。こうすることで，考古学的手法によって，大井窯群での須恵器生産が独占的であるのか，あるいは，東西出雲に地域差が明確に表れた場合に出雲西部にいまだ発見されていない窯跡が推定できるかもしれない。また，仮に大井窯群での独占的な生産と供給体制があったとした場合，供給の実態についても明らかにすることができるであろう。その上で，胎土分析による産地同定は有効な手法となろう。

本稿では，現状の須恵器研究の課題を踏まえ，中村１号墳出土須恵器の時期を決定していきたい。本来なら出雲の須恵器編年の再構築が必要であるが，筆者にはその余裕がない。そこで，基本的には大谷による杯蓋の型式組列を用いて時期決定を行い，大谷編年で扱っていない横瓶については新たな型式組列を示し，出土量が増えて大谷の型式分類に修正が必要になったと考えられる有蓋高杯と甕については再検討を行うこととした。大谷の杯蓋型式を時期決定の根拠にすることから，以下に使用する出雲１期～８期は大谷編年のことである。

３　中村１号墳出土須恵器の年代１

ここでは大谷と池淵の型式分類を用いて杯蓋，無蓋高杯，出雲型子持壺の年代を明らかにしていきたい。

（１）杯　蓋

第１表は，大谷による杯蓋Ａ類の型式の特徴と時期の関係を筆者が大谷論文から読み取り，表にしたものである。ただし，筆者が作成したため大谷の意図が十分酌みとれていない部分があるかもしれない。大谷編年では①口縁端部，②天井部と体部の境，③天井部の調整の特徴を細分し，それらの組合せから型式設定をし，型式組列を示し時期決定を行っている。第１表には，各型式を決定する特徴をトーンで示した。そして，各特徴を中村１号墳の杯蓋に照合し，中村１号墳の型式認定を行ったのが第２表である。結論から言えば，中村１号墳の杯蓋は，Ａ５型とそれに近い特徴をもつ。詳述すれば，②天井部と体部の境の特徴はＣ類（沈線を施すだけ）ばかりで，第１表から②Ｃ類はＡ５型とＡ６型の特徴となる。Ａ６型と認定する特徴は③天井部調整がⅡｃ類（天井部最外周のみを削り，全面にナデを施すもの）であるが，中村１号墳の杯蓋にはＡ６型は無く，Ａ５型が下限であると考えられる。また，①口縁端部のβ類（端部内面の上方に一条の沈線が巡るもの）とγ２類（単純に丸く仕上げるが，口縁部付近が肥厚せずに厚みが均一なもの）はＡ５型に組み合う特徴で矛盾はない。③天井部調整のⅡｂ類（天井部周辺を二から三周削り，中心部を削り残し，その部分にナデを施すもの）もＡ５型に組み合う特徴で矛盾はない(1)。これらに対し，Ａ５型には組み合わない特徴もあり以下に示す。①口縁端部のα５類（沈線を入れた痕跡が認められず，ナデによりなだらかでゆるい段状に仕上げられたもの）はＡ３ａ型と組み合う特徴である。また，③天井部調整のⅡａ類（天井のヘラ削り調整が中心から行われるが，削りが

第１表　大谷編年の杯蓋Ａ類の特徴と時期

杯蓋の特徴		Ａ1型	Ａ2ａ型	Ａ2ｂ型	Ａ3ａ型	Ａ3ｂ型	Ａ3ｃ型	Ａ4型	Ａ5型	Ａ6型	Ａ7型	Ａ8型
①口縁端部	α1類	●										
	α2類		●	段無し								
	α3類				●							
	α4類				●							
	α5類				●							
	β類							●	●	●		
	γ1類					●	●					
	γ2類					●		●	●	●		
	γ3類										●	●
②天井部と体部の境	A類	●										
	B類	●	●	●		●		●	●	●		
	C類								●	●		
	D類						●				●	●
	E類										●	●
③天井部の調整	Ⅰ類	●	●	●	●	●	●					
	Ⅱａ類				●			●				
	Ⅱｂ類								●			
	Ⅱｃ類									●		
	Ⅲａ類										●	●
	Ⅲｂ類										●	●
④口径（㎝）		13.1～12.0	15.2～13.3		14.5～12.5	14.6～12.6	14.2～13.2	13.8～11.0	13.3～12.2	12.4 前後	12.0 前後	10.0 前後
⑤時期		1期	2期A・B	2期B・C	3期～4期初め			4期古・中	4期中	4期新	5期・6期	6期

トーンはいくつかの特徴の中で型式を決定できるもの

第２表　中村１号墳杯蓋の特徴

番号	出土位置		報告書掲載番号	①口縁端部			②天井部と体部の境	③天井部の調整		④口径（㎝）	型式
	石室	群		α5	β	γ2	C	Ⅱａ	Ⅱｂ		
1	玄室	1群	P 36		●		●		●	12.8	A5型
2			P 38	●			●		●	12.2	～A5型
3			P 42		●		●	●		13.1	～A5型
4		3群	P 66			●	●		●	12.8	A5型
5			P 68			●	●		●	11.8	A5型
6	前室	4群	P 76	●			●	●		12.8	～A5型
7			P 78			●	●		●	12.5	A5型
8			P 80			●	●		●	12.6	A5型
9			P 82		●		●		●	12.6	A5型
10			P 84		●		●		●	12.4	A5型
11		5群	P 88	●			●		●	12.5	～A5型
12			P 90	●			●	●		12.0	～A5型
13			P 93		●		●	●		12.9	～A5型
14			P 94			●	●	●		11.8	～A5型

浅く粗雑なもの）はＡ３ａ型あるいはＡ４型に組み合う特徴である。これらは古い要素であるが，②天井部と体部の境がＣ類で新しい点を重視し，Ａ５型に古い特徴が残存したと判断したい。以上，中村１号墳の杯蓋はＡ５型とそれに近い型式と考えられ，時期は大谷編年の出雲４期中頃と考えられる[(2)]。だが，出雲４期の典型資料が少ない[(3)]ため，本稿では出雲４期を２期区分し，前半にＡ３型とＡ４型とＡ５型，後半にＡ６型が主流になると考えておきたい[(4)]。すなわち，中村１号墳の坏蓋は出雲４期前半となる。また，石室内の４か所から群としてまとまって出土している杯蓋には型式差がほとんどない。したがって，短期間にＡ石棺とＢ石棺への埋葬があり，それに伴って副葬されたのであろう。

（２）　長脚無蓋高杯

中村１号墳の長脚無蓋高杯Ｐ 59 は，杯部が平らな底部から直立する体部がつくものである。器高は 15㎝。上段の透かしは切れ目，下段の透かしの下の沈線は省略されている。大谷は長脚無蓋高杯

を杯部の形態からＡ型～Ｄ型に分類している。中村１号墳Ｐ 59 は杯部がＡ型で，脚が短小化する以前の特徴をもち，また，透かしの特徴から，大谷分類のＡ３型となる。大谷編年のＡ３型は出雲３期の後半から出雲４期の前半と考えられている。杯蓋が出雲４期であり，これだけが出雲３期に遡るとは考えにくいので，長脚無蓋高杯Ｐ 59 は出雲４期前半と考えられる。

（３）　出雲型子持壺

中村１号墳の出雲型子持壺Ｐ 32 は，口縁部が段状をなし，親壺には円形の透かしがある。小壺は５～６個あったと推定でき，文様はないが口縁部・頸部・胴部の境が明瞭である。底部のある小壺を親壺に接合した後に小壺底部と親壺を同時に穿孔している。脚部は，裾部が「ハ」字状に開く。脚部は３段区分と推定でき，上段に水滴状の透かし，上段と中段の境に凹線は無く，中段と下段の境のみに凹線が巡っている。これらの特徴からＰ 32 は池淵分類のＣ１型となる。池淵編年ではＣ１型は出雲４期前半と考えられている。また，脚部外面は縦ナデ調整である。以上の点からＰ 32 は，出雲東部の資料と同じ特徴を持つことから池淵がいう「意宇型」と考えられる。すなわち，出雲東部の大井窯跡群で生産された製品と考えられる。同じ出雲西部の上塩冶築山古墳の出雲型子持壺は，横方向のカキメ及び指頭による粗い凹線風横ナデが施されていて，中村１号墳とは異なる作りである。

４　中村１号墳出土須恵器の年代２

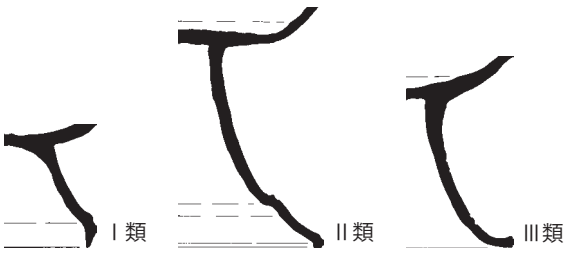
ここでは，大谷編年で扱われていたが，その後に資料が増えてきた有蓋高杯と𤭯，扱われなかった横瓶の時期について検討したい。

（１）　有蓋高杯

大谷による有蓋高杯の型式分類は，Ａ型～Ｆ型の６分類である。連続する組列を形成するものは少ないと考えられている。その後，有蓋高杯の資料数が格段に増えている。そこで，本稿では新たに型式分類を行い，型式組列を示したい。また，東西出雲の地域性についても検討したい。

検討に使用した資料は，一括性の高い資料あるいは，短期間に埋没したと考えられる資料である。追葬がある資料はできるだけ対象資料から外した（一部は除く）。このような基準で抽出した出雲東部の資料群を第３・４表にまとめた。時期については，大谷編年の杯蓋の時期に併せて決定した。出雲西部は一括性の高い資料，短期間に埋没した資料が少ないため，形態と特徴がわかる資料を第５・６表にまとめた。次に，出雲東部の資料について型式分類を行い，それを基に，出雲西部の資料について型式と時期の確定をしていきたい。なお，出雲東部は 2011 年 10 月現在の松江市と安来市を，出雲西部は出雲市とした。

型式分類は，脚の形態と透かしの段数について行った。脚の形態はⅠ類：杯部から直線的に「ハ」字状に開き脚端部が下方へ突出するもの。Ⅱ類：杯部から直線的あるいは内反しながら「ハ」字状に開き，さらに屈曲し外側に開く。Ⅲ類：杯部から外反しながら「ハ」字状の開く。脚端部は丸いもの，面



第１図　脚形態の分類

第3表　出雲東部における有蓋高杯1段透かし（Ⅰa類・Ⅱa類・Ⅲc類）の特徴

番号	遺跡名	型式	かえり高（cm）	器高（cm）	透かし		報告書掲載番号	時期
					形	数		
1	金崎古墳	Ⅰa	2.0	11.3	四角形	3		出雲1期
2	金崎古墳	Ⅰa	1.7	9.1	四角形	3		
3	薬師山古墳	Ⅰa	1.6	10.4	四角形	3	第5図20	
4	岩屋口南遺跡Ⅰ区 SI01	Ⅰa	1.6	9.7	四角形	3	第7図13	
5	門生黒谷Ⅰ遺跡門生山根1号窯跡	Ⅰa	1.6	9.6	四角形	3	第24図96	
6	伝宇牟加比売命御陵古墳造り出し	Ⅱa	1.6	14.9	四角形	3	第16図23・24	出雲2B期
7	伝宇牟加比売命御陵古墳造り出し	Ⅱa	1.2	15.0	四角形	3	第16図22	
8	徳見津遺跡Ⅲ区 SI01 床面	Ⅲc	1.2	11.0	無	0	第21図126	出雲4期前半
9	徳見津遺跡Ⅲ区 SI01 床面	Ⅲc	1.2	10.2	無	0	第21図125	
10	島田池遺跡4区 11 号横穴墓	Ⅲc	1.0	10.0	三角形	3	第136図8	
11	島田池遺跡6区 13 号横穴墓	Ⅲc	0.9	9.9	三角形	3	第288図48	
12	渋山池古墳群 SK01	Ⅲc	0.9	10.4	三角形	2	第22図3	出雲4期後半
13	渋山池古墳群 SK01	Ⅲc	0.8	11.3	三角形	3	第22図11	
14	渋山池古墳群 SK01	Ⅲc	0.8	10.1	三角形	2	第22図5	
15	渋山池古墳群 SK01	Ⅲc	0.8	9.8	三角形	3	第22図7	
16	渋山池古墳群 SK01	Ⅲc	0.8	9.5	三角形	3	第22図9	
17	向山1号墳前庭部	Ⅲc	0.7	10.6	四角形	2	第24図6	
18	向山1号墳前庭部	Ⅲc	0.7	9.6	無	0	第24図4	
19	向山1号墳前庭部	Ⅲc	0.6	10.4	四角形	2	第24図5	
20	島田池遺跡1区1号横穴墓前庭部	Ⅲc	0.7	9.6	三角形	3	第23図15	出雲5期～
21	池ノ奥窯跡群北部エ－3・4区	Ⅲc	0.6	8.5	三角形	2	第104図北－205	出雲5期？

第4表　出雲東部における有蓋高杯2段透かし（Ⅲb類）の特徴

番号	遺跡名	型式	かえり高（cm）	器高（cm）	透かし				報告書掲載番号	時期
					配置	形		数		
22	中竹矢2号墳	Ⅲb	1.6	－	－	上：切れ目 下：－	？	上：3 下：－	第92図115	出雲3期
23	中竹矢2号墳	Ⅲb	1.3	14.0	千鳥	上：四角形 下：三角形	イ	上：3 下：3	第92図114	
24	高野2号横穴玄室	Ⅲb	1.3	15.6	上下対応	上：四角形 下：四角形	ロ	上：3 下：3	第5図T3	
25	高広遺跡Ⅰ区1号横穴墓玄室	Ⅲb	1.1	14.5	千鳥	上：三角形 下：三角形	ハ	上：2 下：3	第17図21	
26	島田池遺跡6区 13 号横穴墓	Ⅲb	1.2	10.8	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第288図47	出雲4期前半
27	清瀬塩田遺跡 SX01	Ⅲb	1.0	11.2	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第19図7	
28	清瀬塩田遺跡 SX01	Ⅲb	1.0	11.0	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第19図8	
29	清瀬塩田遺跡 SX01	Ⅲb	0.9	10.8	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第19図6	
30	清瀬塩田遺跡 SX01	Ⅲb	0.9	10.6	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第19図5	
31	清瀬塩田遺跡 SX01	Ⅲb	0.9	10.2	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第19図4	
32	島田池遺跡4区 12 号横穴墓	Ⅲb	1.0	12.6	千鳥	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：4	第143図56	出雲3期～4期前半
33	島田池遺跡4区 12 号横穴墓	Ⅲb	0.9	13.2	千鳥・対応	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：4	第143図57	
34	五反田遺跡溝状遺構1	Ⅲb	0.8	－	上下対応	上：四角形 下：四角形	ロ	上：2 下：2	第114図26	出雲4期後半
35	五反田遺跡溝状遺構1	Ⅲb	0.7	17.1 以上	上下対応	上：四角形 下：四角形	ロ	上：3 下：3	第114図24	
36	五反田遺跡溝状遺構1	Ⅲb	0.7	－	上下対応	上：四角形 下：四角形	ロ	上：2 下：2	第114図25	
37	向山1号墳前庭部	Ⅲb	0.7	12.7	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第24図7	
38	向山1号墳前庭部	Ⅲb	0.6	14.9	上下対応	上：四角形 下：四角形	ロ	上：3 下：3	第24図9	
39	向山1号墳前庭部	Ⅲb	0.6	14.5	上下対応	上：四角形 下：四角形	ロ	上：3 下：3	第24図10	
40	向山1号墳前庭部	Ⅲb	0.6	13.2	上下対応	上：四角形 下：四角形	ロ	上：3 下：3	第24図8	
41	島田池遺跡1区1号横穴墓前庭部	Ⅲb	0.5	12.6	上下対応	上：四角形 下：四角形	ロ	上：3 下：3	第23図16	出雲5期～

第５表　出雲西部における有蓋高杯１段透かし（Ⅰａ類・Ⅲｃ類）の特徴

番号	遺跡名	型式	かえり高（㎝）	器高（㎝）	透かし		報告書掲載番号	推定時期
					形	数		
42	三田谷Ⅰ遺跡B区包含層1	Ⅰａ	1.8	－	－	－	第 180 図5	出雲1期
43	井原遺跡 C3GrP05	Ⅰａ	－	－	四角形	3	第 36 図1	
44	中村1号墳玄室	Ⅲｃ	1.3	10.1	三角形	3	Ｐ 54	出雲４期前半
45	中村1号墳玄室	Ⅲｃ	1.1	11.0	三角形	3	Ｐ 58	
46	中村1号墳玄室	Ⅲｃ	1.1	10.9	三角形	3	Ｐ 56	
47	築山2号墳周溝	Ⅲｃ	1.1	10.1	三角形	3	第 24 図 37	
48	築山2号墳周溝	Ⅲｃ	1.0	12.6	三角形	3	第 24 図 38	
49	三田谷Ⅱ遺跡1区	Ⅲｃ	1.0	9.1	三角形	3	第 42 図 10	出雲４期
50	三田谷Ⅱ遺跡1区	Ⅲｃ	1.0	8.9	三角形	3	第 42 図 11	
51	三田谷Ⅱ遺跡1区	Ⅲｃ	0.8	9.3	三角形	3	第 42 図7	
52	三田谷Ⅱ遺跡1区	Ⅲｃ	0.7	9.5	三角形	3	第 42 図8	
53	三田谷Ⅱ遺跡1区	Ⅲｃ	0.6	9.1	三角形	3	第 42 図9	
54	上塩冶横穴墓群 33－7号穴	Ⅲｃ	0.8	11.4	三角形	2	第 84 図 17	出雲４期後半
55	上塩冶横穴墓群 33－7号穴	Ⅲｃ	0.8	10.8	三角形	2	第 84 図 18	
56	上塩冶横穴墓群 33－7号穴	Ⅲｃ	0.8	10.4	三角形	2	第 84 図 21	
57	上塩冶横穴墓群 33－7号穴	Ⅲｃ	0.7	10.4	三角形	2	第 84 図 20	
58	上塩冶横穴墓群 33－7号穴	Ⅲｃ	0.7	10.3	三角形	2	第 84 図 19	
59	上塩冶横穴墓群 33－7号穴	Ⅲｃ	0.6	10.7	三角形	3	第 84 図 22	
60	尾田瀬Ⅱ遺跡 92－2区	Ⅲｃ	0.7	11.2	三角形	3	第3図	出雲４～５期
61	三田谷Ⅲ遺跡４号墳 SX01	Ⅲｃ	0.8	7.6	三角形	2	第 12 図4	出雲５期
62	三田谷Ⅲ遺跡４号墳 SX01	Ⅲｃ	0.7	11.0	三角形	2	第 11 図5	
63	三田谷Ⅲ遺跡４号墳 SX01	Ⅲｃ	0.6	10.7	三角形	2	第 11 図3	
64	三田谷Ⅲ遺跡４号墳 SX01	Ⅲｃ	0.6	8.3	三角形	2	第 11 図6	
65	三田谷Ⅲ遺跡４号墳 SX01	Ⅲｃ	0.5	10.6	三角形	2	第 11 図4	
66	三田谷Ⅲ遺跡４号墳 SX01	Ⅲｃ	0.5	7.8	四角形	2	第 12 図5	
67	御崎谷遺跡土器だまり	Ⅲｃ	0.4	8.6	四角形（切れ目）	2（1）	第 70 図 10	

をなすもの，上方または下方につまみ出されるものなどバリエーションがある。また，透かしは段数で分類した。ａ類：脚Ⅰ・Ⅱ類に組み合う１段透かしのもの。ｂ類：２段透かしのもの。ｃ類：脚Ⅲ類に組み合う１段透かしのものと透かしのないもの。これら脚形態と透かしの段数を組合せると，現状ではⅠａ類，Ⅱａ類，Ⅱｂ類，Ⅲｂ類，Ⅲｃ類がある。

これらを整理して，出雲東部の１段透かしを第３表に，２段透かしのものを第４表にまとめている。そして，大谷による杯蓋型式から出雲東部の有蓋高杯各型式の時期を導き出すと，Ⅰａ類が出雲１期，出雲Ⅱａ類が出雲２Ｂ期，Ⅲｂ類が出雲３期～５期頃，Ⅲｃ類が出雲４期～５期頃となる（第 11 表）。また，出雲東部の有蓋高杯の分類と時期をもとに，出雲西部の有蓋高杯（他の器種で時期が明確にできないものを含む）をまとめ，時期を推定したのが第５・６表である。これにより，Ⅱｂ類が出雲２Ｃ期となる。また，出雲西部の出雲市上島古墳は，Ⅱｂ類が主体であるが，Ⅲｂ類を伴っており，Ⅲｂ類の上限が出雲２Ｃ期まで遡る可能性がある(5)。出雲２Ａ期の明確な資料がないのが現状である。以上のことから，有蓋高杯は，Ⅰａ類→Ⅱａ類→Ⅱｂ類→Ⅲｂ類→Ⅲｃ類と変化していると考えられる。

大谷分類と本稿の大きな相違点は，型式組列に表れている。大谷は６系譜を想定しているが，本稿では１系譜と考えている。大谷の分類の問題点は，分類基準に形態と透かしの形や数が混在し，一貫性がないことである。さらに大谷編年との型式組列の違いを詳述すると，本稿で推定したⅢｂ類→Ⅲｃ類への変化が大きく異なる。大谷分類では，本稿のⅠａ類→Ⅲｃ類の一部に変化すると推定している。これについては，Ⅰａ類は出雲１期，Ⅲｃ類は出雲４期に出現しており，その間の出雲２～３期の明確な資料がないのが現状であり，これら２型式を繋ぐことは難しいと考えられる(6)。Ⅲｃ類に似ている低脚無蓋高杯は，出雲１～６期まで継続して型式変遷が認められることと比べても，Ⅲｃ

第６表　出雲西部における有蓋高杯２段透かし（Ⅱｂ類・Ⅲｂ類）の特徴

番号	遺跡名	型式	かえり高（㎝）	器高（㎝）	透かし				報告書掲載番号	推定時期
					配置	形		数		
68	上島古墳墳丘	Ⅱｂ	2.0	14.3	千鳥	上：四角形 下：三角形	イ	上：3 下：3	第 14 図 6	
69	上島古墳墳丘	Ⅱｂ	1.8	12.6	千鳥	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	第 14 図2	出雲２Ｃ期
70	上島古墳墳丘	Ⅱｂ	1.5	13.6	千鳥	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	第 14 図4	
71	上島古墳墳丘	Ⅲｂ	1.6	14.0	千鳥	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	第 14 図 16	出雲２Ｃ期?
72	中村１号墳玄室	Ⅲｂ	1.1	12.8	上下対応	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	Ｐ 50	
73	中村１号墳玄室	Ⅲｂ	1.1	12.7	上下対応	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	Ｐ 52	
74	中村１号墳玄室	Ⅲｂ	1.1	12.2	上下対応	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	Ｐ 48	
75	中村１号墳玄室	Ⅲｂ	1.0	12.8	上下対応	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	Ｐ 46	
76	築山1号墳周溝	Ⅲｂ	1.2	14.6	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 15 図 30	
77	築山1号墳周溝	Ⅲｂ	1.2	13.2	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 16 図 34	
78	築山1号墳周溝	Ⅲｂ	1.1	13.2	上下対応	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	第 16 図 33	
79	築山1号墳周溝	Ⅲｂ	1.0	13.5	上下対応	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	第 15 図 31	
80	築山1号墳周溝	Ⅲｂ	1.0	13.4	上下対応	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	第 16 図 32	出雲４期前半
81	築山2号墳周溝	Ⅲｂ	1.2	13.4	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 24 図 42	
82	築山2号墳周溝	Ⅲｂ	1.2	13.3	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 24 図 39	
83	築山2号墳周溝	Ⅲｂ	1.2	12.3	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 23 図 29	
84	築山2号墳周溝	Ⅲｂ	1.2	11.9	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 24 図 43	
85	築山2号墳周溝	Ⅲｂ	1.1	11.8	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 24 図 41	
86	築山2号墳周溝	Ⅲｂ	1.0	12.4	上下対応	上：三角形 下：三角形	ハ	上：3 下：3	第 23 図 27	
87	築山2号墳周溝	Ⅲｂ	1.0	12.0	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 24 図 40	
88	築山4号墳周溝	Ⅲｂ	1.0	13.1	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 40 図 63	
89	築山4号墳周溝	Ⅲｂ	1.0	12.6	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 40 図 64	出雲４期前半
90	築山4号墳周溝	Ⅲｂ	1.0	12.4	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 40 図 65	
91	築山4号墳周溝	Ⅲｂ	0.8	12.2	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 39 図 62	
92	三田谷Ⅱ遺跡1区	Ⅲｂ	1.3	13.5	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 42 図2	
93	三田谷Ⅱ遺跡1区	Ⅲｂ	1.3	9.2	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 42 図6	
94	三田谷Ⅱ遺跡1区	Ⅲｂ	1.1	13.1	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 42 図1	出雲４期
95	三田谷Ⅱ遺跡1区	Ⅲｂ	0.8	13.0	上下対応	上：三角形 下：四角形	ニ	上：3 下：3	第 42 図3	

類の出土量は少ないと考えられ，Ⅰａ類→Ⅲｃ類への変化は考えにくい。そこで，Ⅲｂ類→Ⅲｃ類への変化が推定できる根拠として，第３図を示したい。第３図は，Ⅲｃ類（１段透かし）の出雲４期頃の有蓋高杯である。第３図１・２は，透かしの上に沈線が施されており，ふつう透かしの上には沈線が施されないため，これは，２段透かしの高杯の名残と考えられる。また，第３図３は透かし脚部の

第７表　出雲東部における有蓋高杯１段透かしの特徴のまとめ

時期	型式	かえり高（㎝）	器高（㎝）	透かしの形	透かしの数
出雲１期	Ⅰａ	2.0 ～ 1.6	11.3 ～ 9.1	四角形・三角形	3
出雲２Ａ期	－	－	－	－	－
出雲２Ｂ期	Ⅱａ	1.6 ～ 1.2	15.0 ～ 14.9	四角形	3
出雲２Ｃ期	－	－	－	－	－
出雲３期	－	－	－	－	－
出雲４期前半	Ⅲｃ	1.2 ～ 0.9	11.0 ～ 9.9	無・三角形	3・0
出雲４期後半	Ⅲｃ	0.9 ～ 0.6	11.3 ～ 9.5	三角形・四角形・無	2・3・0
出雲５期	Ⅲｃ	0.7 ～ 0.6	9.6 ～ 8.5	三角形	3・2

第８表　出雲西部における有蓋高杯１段透かしの特徴のまとめ

時期	型式	かえり高（㎝）	器高（㎝）	透かしの形	透かしの数
出雲１期	Ⅰａ	1.8	－	四角形	3
出雲２期	－	－	－	－	－
出雲３期	－	－	－	－	－
出雲４期前半	Ⅲｃ	1.3 ～ 1.0	12.6 ～ 10.1	三角形	3
出雲４期後半	Ⅲｃ	0.8 ～ 0.6	11.4 ～ 10.3	三角形	2・3
出雲５期	Ⅲｃ	0.8 ～ 0.4	11.0 ～ 7.6	三角形・四角形・(切れ目)	2・(3)

第９表　出雲東部における有蓋高杯２段透かしの特徴のまとめ

時期	型式	かえり高（㎝）	器高（㎝）	透かしの配置	透かしの形＊	透かしの数
出雲３期	Ⅲｂ	1.6 ～ 1.1	15.6 ～ 14.0	千鳥・上下対応	イ・ロ・ハ	上：3・2 下：3
出雲４期前半	Ⅲｂ	1.2 ～ 0.9	13.2 ～ 10.2	上下対応・千鳥	ニ・ハ・(ロ)	上：3 下：3・4
出雲４期後半	Ⅲｂ	0.8 ～ 0.6	17.1 以上～ 10.2	上下対応	ロ・ニ	上：3 下：3
出雲５期	Ⅲｂ	0.4	12.6	上下対応	ロ	上：3 下：3

＊透かしの形　イ類　上：四角形・下：三角形　　ロ類　上：四角形・下：四角形
　　ハ類　上：三角形・下：三角形　　ニ類　上：三角形・下：四角形

第 10 表　出雲西部における有蓋高杯２段透かしの特徴のまとめ

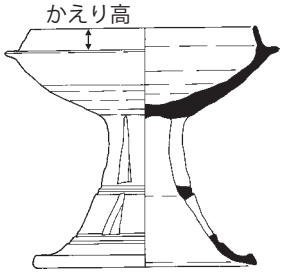
時期	型式	かえり高（㎝）	器高（㎝）	透かしの配置	透かしの形＊	透かしの数
出雲２Ｃ期	Ⅱｂ	1.8 ～ 1.5	14.0 ～ 12.6	千鳥	ハ・イ	上：3 下：3
出雲２Ｃ期?	Ⅲｂ	2.0	14.3	千鳥	ハ	上：3 下：3
出雲３期	－	－	－	－	－	－
出雲４期前半	Ⅲｂ	1.2 ～ 0.8	14.6 ～ 9.2	上下対応	ニ・ハ	上：3 下：3
出雲４期後半	－	－	－	－	－	－
出雲５期	－	－	－	－	－	－

＊透かしの形　イ類　上：四角形・下：三角形　　ロ類　上：四角形・下：四角形
　　ハ類　上：三角形・下：三角形　　ニ類　上：三角形・下：四角形

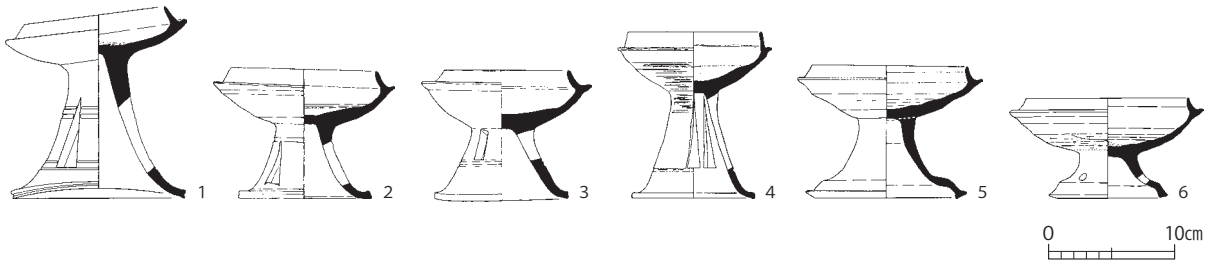
第 11 表　出雲における有蓋高杯身の型式組列と時期

時期	Ⅰａ	Ⅱａ	Ⅱｂ	Ⅲｂ	Ⅲｃ	かえり高（㎝）		畿内の時期
出雲1期	●					2.0 ～ 1.6	1㎝以上	TK208・23・47
出雲２Ａ期						2.0 ～ 1.2		MT15 ～ TK10
出雲２Ｂ期		●						
出雲２Ｃ期			●	○				
出雲３期				●		1.6 ～ 1.1		TK43
出雲４期前半				●	●	1.3 ～ 0.8	1㎝前後	TK209
出雲４期後半				●	●	0.9 ～ 0.6	1㎝未満	
出雲５期～				●	●	0.8 ～ 0.4		飛鳥1

型式組列　　Ⅰａ→Ⅱａ→Ⅱｂ→Ⅲｂ→Ⅲｃ



第２図　かえり高計測位置



1　前田遺跡貼石遺構付近　2　築山２号墳周溝　3　原田遺跡１区原田古墳　4　流田横穴　5　カンボウ遺跡 SI02　6　玉若酢命神社３号墳

第３図　Ⅲｂ類からⅢｃ類への変化の過程（1：6）

上方にあり，その下に沈線が施され，その下には，もう一段透かしがはいるスペースがある。これも，２段透かしの名残と考えられる事例である。また，第３図１と４は 13 ～ 14㎝代の器高が高いⅢｃ類である。Ⅲｂ類は 15㎝以上のものは少なく，15㎝以下のものが主体をなす。基本的に出雲３期以降の有蓋高杯は，２段が長脚，１段が低脚という整理はできないことが特徴である。したがって，脚Ⅲ類の中に２段と１段の透かしという装飾があると理解できる。

このⅢｂ類→Ⅲｃ類への変化に影響を与えたのが，第３図５・６かもしれない。これらの形態的な特徴は，低脚で杯部から直線的あるいは内反しながら「ハ」字状に開き，さらに屈曲し外側に開く。本稿のⅡ類に近いがⅡ類は長脚で同じ型式ではない。第３図５は安来市カンボウ遺跡の資料で，透かしはない。第３図６は隠岐の島町玉若酢命神社３号墳のもので，透かしは円形で３方向にある。これらは畿内の TK43 型式期に見られる形態で（佐藤隆の 2003 編年では陶邑Ⅲ新段階），出雲３期～４期と考えられる。また，これらの特徴を持つ有蓋高杯の出土は出雲と隠岐のこの２遺跡のみで，円形の透かしをもつものは他にない。搬入品の可能性も考えられ，出雲の有蓋高杯の分類からは外している。

第３図１～６はⅢｃ類の出現時期と同時期と考えられるため，Ⅲｂ類→Ⅲｃ類への変化に影響を与えたことを積極的に証明する資料にはならないが，大谷が指摘したⅠａ類→Ⅲｃ類への変化が考えにくい現状では重要な資料であろう。

本稿は中村１号墳の有蓋高杯の時期を決定することが目的である。中村１号墳からはⅢｂ類とⅢｃ類が出土している。これらは，出雲３期～５期まで存在しているので，さらに細分が必要である。そこで，注目したのがかえり高である（かえり高の計測位置は第２図）。計測方法は，４か所程度測り，その中の最小値を第３～６表に示した。地域別に時期と型式の特徴をまとめたのが第７～ 10 表で，出雲全域を時期ごとにまとめたのが第 11 表である。すると，かえり高が出雲１～５期にかけて徐々に重なりをもちながら低くなることが明らかになった。具体的には（第 11 表），出雲１期のⅠａ類かえり高が 2.0 ～ 1.6㎝の範囲に，出雲２期には 2.0 ～ 1.2㎝の範囲に，出雲３期は 1.6 ～ 1.1㎝の範囲に，出雲４期には 1.3 ～ 0.6㎝の範囲にある。出雲５期には 0.8 ～ 0.4㎝の範囲で１㎝以上のものはない。このかえり高の変化＝低減化は，型式を超えて共通する現象である。すなわち，器高の大小や透かしの段数，地域に関係なく有蓋高杯身に共通し，詳細な時期を決定することに最も有効な属性であることがわかる。ここで，Ⅲｂ類とⅢｃ類が多い出雲４期のかえり高について遺構ごとにその範囲をみてみたい。中村１号墳のかえり高は 1.3 ～ 1.0㎝の範囲にあり１㎝未満のものは含まれない（第５表 44 ～ 46，第６表 72 ～ 75）。他の遺構でのかえり高が１㎝未満を含まないものをあげると出雲東部では

安来市徳見津遺跡Ⅲ区 SI01 の 1.2㎝（第３表 8･9），出雲西部では出雲市築山１号墳の 1.2 ～ 1.0㎝（第６表 76 ～ 80），築山２号墳の 1.2 ～ 1.0㎝（第５表 47・48，第６表 81 ～ 87）などがある。かえり高が１㎝前後のものがある遺構は，出雲東部では松江市島田池６区 13 号横穴墓の 1.2 ～ 0.9㎝（第３表 11，第４表 26），安来市清瀬塩田遺跡の 1.0 ～ 0.9㎝（第４表 27 ～ 31），一括性が高いとは言えないが松江市島田池４区 12 号横穴墓の 1.0 ～ 0.9㎝（第４表 32･33）と出雲西部では築山４号墳の 1.0 ～ 0.8㎝（第６表 88 ～ 91）や出雲市三田谷Ⅱ遺跡１区の 1.3 ～ 0.6㎝（第６表 92 ～ 95）などがある。かえり高が１㎝未満の遺構は，出雲東部では松江市渋山池古墳群 SK01 の 0.9 ～ 0.8㎝（第３表 12 ～ 16），安来市五反田遺跡溝状遺構１の 0.8 ～ 0.7㎝（第４表 34 ～ 36），松江市向山１号墳の 0.7 ～ 0.6㎝（第３表 17 ～ 19，第４表 37 ～ 40），出雲西部では出雲市上塩冶横穴墓群 33 － 7 号穴の 0.8 ～ 0.6㎝（第５表 54 ～ 59）などがある。

以上のデータと出雲１期～５期にかけてかえり高が徐々に低くなることを勘案すると，出雲４期の中で１㎝以上のグループ→１㎝前後のグループ→１㎝未満のグループへと変化していると推定できる。この変化を大谷分類の杯蓋型式と組合せてみると，１㎝以上と１㎝前後のグループには，杯蓋Ａ４型・Ａ５型が伴い，１㎝未満のグループの渋山池古墳群 SK01，向山１号墳，上塩冶横穴墓群 33 － 7 号穴で杯蓋Ａ６型を伴っている。したがって，先に杯蓋で述べた出雲４期の２期区分に対応させると，有蓋高杯のかえり高が１㎝以上のグループと１㎝前後のグループを出雲４期前半，１㎝未満のグループを出雲４期後半としたい。したがって，中村１号墳の有蓋高杯は出雲４期前半に位置付けることができ，杯蓋と同時期と言えよう。

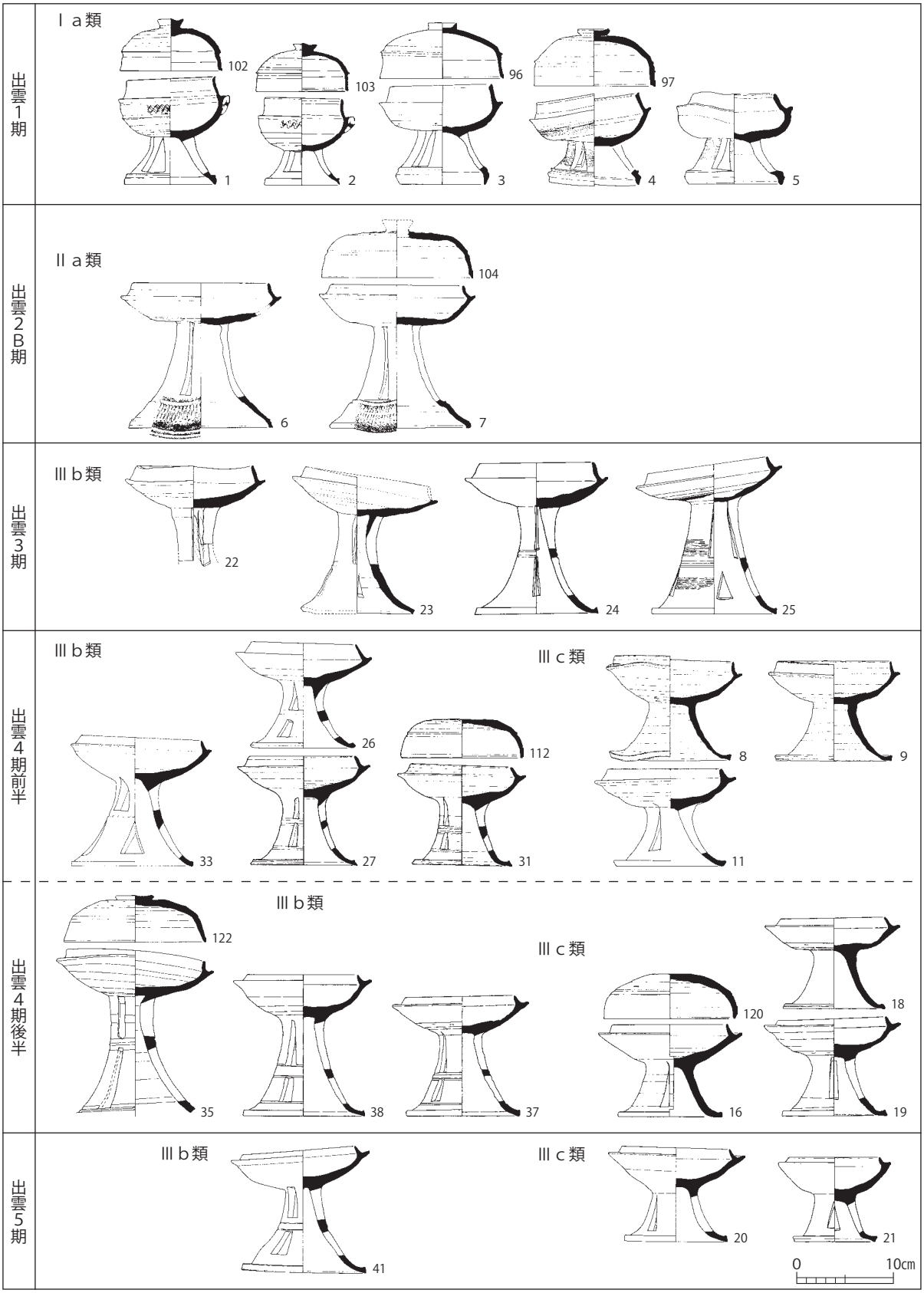
以上，有蓋高杯身の型式分類と編年について述べた。次に，研究史の課題でもふれた，有蓋高杯の東西出雲の地域性について検討してみたい。出雲西部の資料は少ないものの，現状での整理を行い，今後の議論の基礎になればと考えている。出雲東部の有蓋高杯身の特徴をまとめたのが第７・９表，編年図が第４図，出雲西部の有蓋高杯身の属性をまとめたのが第８･10 表で，編年図が第５図である。いずれも，器高と透かしの配置，透かしの形[(7)]，そして，透かしの数について整理した。次に，それぞれの地域ごとの変遷を簡単にまとめてみたい。

まず，出雲東部の状況をみる（第７・９表，第４図）。出雲１期にはⅠａ類（第４図１～５）があり，器高は 11.3 ～ 9.1㎝である。透かしの形は四角形が主体をなし三角形のものも１点ある。透かしの数は３方向である。窯跡もあり，出雲での須恵器生産が始まった段階である。

出雲２Ａ期の資料はない。出雲２Ｂ期にはⅡａ類（第４図６・７）がある。器高は 15.0 ～ 14.9㎝で，Ⅰａ類より高くなる。透かしの形は四角形，３方向にあく。出土数が少なく資料が増えることを期待したい。出雲２Ｃ期の資料はない。

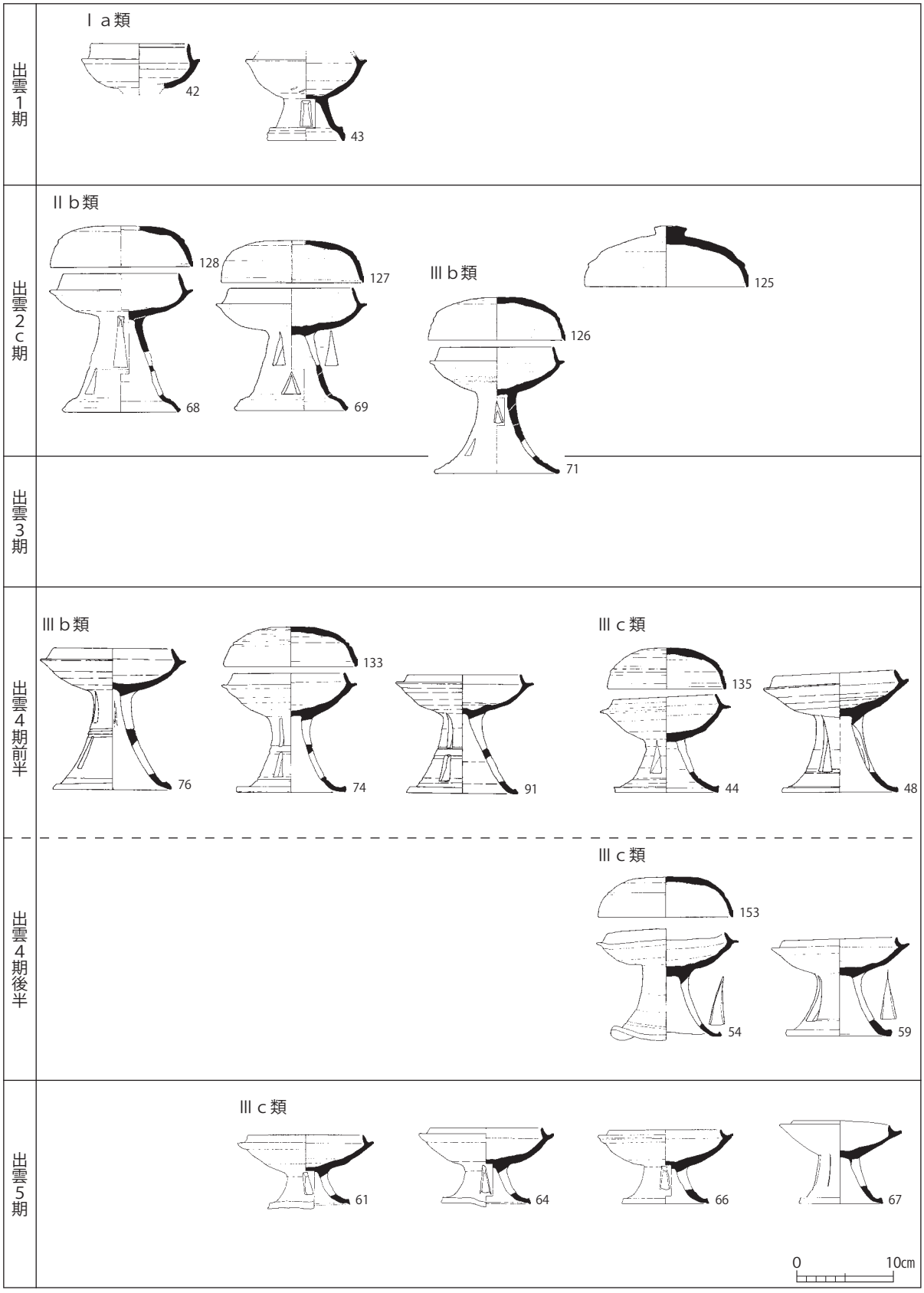
出雲３期は，Ⅲｂ類（第４図 23 ～ 25）の２段透かしが出現する。器高は 15.6 ～ 14.0㎝で前時期とほぼ同じである。透かしの配置は千鳥配置と，上下が対応するものがある。形はイ類（上：四角形・下：三角形），ロ類（上下：四角形），ハ類（上下：三角形）がある。数は上下３方向のものが多く，上が２方向のものもある。

出雲４期前半には，Ⅲｂ類とⅢｃ類がある。Ⅲｂ類（第４図 26･27･31･33）の器高は，13.2 ～ 10.2㎝で，前時期よりも低い。10㎝程度のものが現れる。透かしの配置は，上下対応が主体をなし，千鳥配置のも



1・2・102・103　金崎古墳　3・96　薬師山古墳　4・97　岩屋口南遺跡Ⅰ区 SI01　5　門生黒谷Ⅰ遺跡門生山根１号窯跡
6・7・104　伝宇牟加比売命御陵古墳造り出し　8・9　徳見津遺跡Ⅲ区 SI01 床面　11・26　島田池遺跡６区 13 号横穴墓　16・120　渋山池古墳群 SK01
18・19・37・38　向山１号墳前庭部　20・41　島田池遺跡１区１号横穴墓前庭部　21　池ノ奥窯跡群北部エ－３・４区　22・23　中竹矢２号墳
24　高野２号横穴墓玄室　25　高広遺跡Ⅰ区１号横穴墓玄室　27・31・112　清瀬塩田遺跡 SX01　33　島田池遺跡４区 12 号横穴墓　35・122　五反田遺跡溝状遺構１

第４図　出雲東部における有蓋高杯の編年（１：６）



42　三田谷Ⅰ遺跡Ｂ区包含層１　43　井原遺跡 C3GrP05　44・74・133・135　中村１号墳玄室　48・76　築山１号墳周溝
54・59・153　上塩冶横穴墓群 33－7 号穴　61・64・66　三田谷Ⅲ遺跡４号墳 SX01　67　御崎谷遺跡土器だまり　68・69・71・125 ～ 128　上島古墳墳丘
91　築山４号墳周溝

第５図　出雲西部における有蓋高杯の編年（１：６）

のも少しある。形はニ類（上：三角形・下：四角形）が多く，時期が明確ではないがハ類（上下：三角形）とロ類（上下：四角形）が少しある。数は上下3方向のものが主体で，下が4方向のものが少しある。Ⅲｃ類（第4図8・9・11）は器高が 11.0 ～ 9.9㎝である。透かしがないものや，三角形のものがある。透かしのあるものは3方向である。

出雲4期後半にはⅢｂ類とⅢｃ類がある。Ⅲｂ類（第4図 35・37・38）の器高は 17.1 以上[8] ～ 10.2㎝ものがあり，出雲3期の 15.6㎝よりも高い大型の有蓋高杯がある。大型の有蓋高杯の良好な資料がないため編年図と表には掲載していないが，かえり高が1㎝以上のものもあり，出雲3期～4期前半にもあったと考えている。透かしは上下対応に配置され，形はロ類（上下：四角形）が主体で，ニ類（上：三角形，下：四角形）が少しある。透かしの数は上下3方向にある。Ⅲｃ類（第4図 16・18・19）の器高は 11.3 ～ 9.5㎝で，前時期とほぼ同じである。透かしの形は三角形が主体をなし，四角形のものと透かしがないものもある。透かしの数は，2 方向と3方向のものがある。

出雲5期の確実な資料は少ないが，Ⅲｂ類とⅢｃ類がある。Ⅲｂ類（第4図 41）の器高は 12.6 ｃｍ，透かしは上下対応に配置され，形はロ類（上下：四角形）で，数は上下ともに 3 方向にある。Ⅲｃ類（第4図 20・21）の器高は 9.6 ～ 8.5㎝で前時期とほとんど変わらない。透かしは三角形で，数は3方向と 2 方向がある。出雲6期以降の資料はないので，出雲5期まで有蓋高杯が生産されたが，出土数が少なく，この時期に生産が終了したと考えられる。以上が出雲東部の状況で，透かしの配置や数では，詳細な編年が難しいことが分かってくる。

次に出雲西部の状況をみてみたい（第8・10 表，第5図）。出雲1期のⅠａ類の資料がわずかにあるが，器高がわかるものはない。透かしは四角形で 3 方向にある。

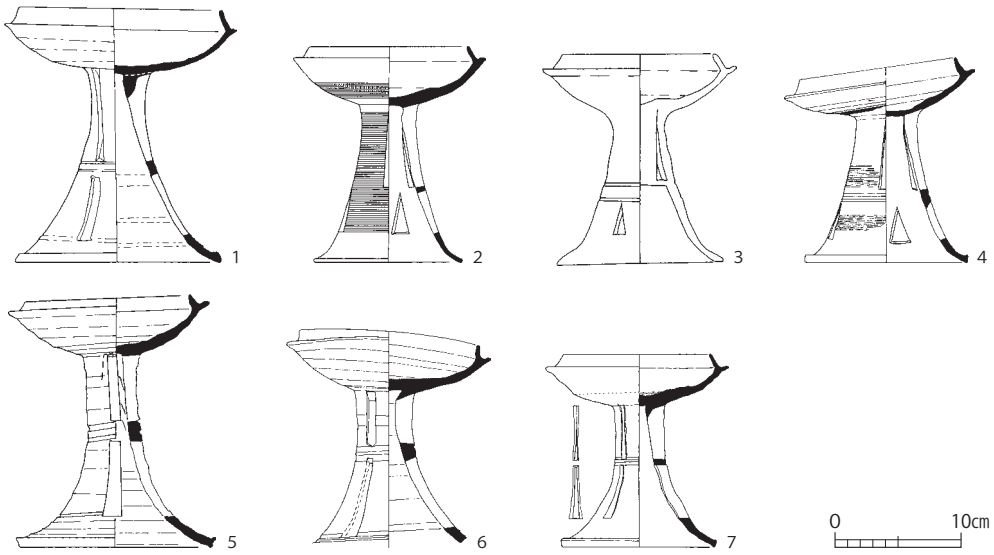
出雲2Ａ・2Ｂ期の資料はない。出雲2Ｃ期にはⅡｂ類の2段透かしが出現し，Ⅲｂ類も出現している可能性がある。Ⅱｂ類（第5図 68・69）の器高は 14.0 ～ 12.6㎝である。透かしは千鳥に配置され，形はハ類（上下：三角形）で，数は上下ともに 3 方向にある。Ⅲｂ類（第5図 71）の器高は 14.3㎝である。透かしは千鳥に配置され，形はハ類（上下：三角形）で，数は上下ともに 3 方向にある。

出雲3期の資料はない。出雲4期前半には，Ⅲｂ類とⅢｃ類がある。Ⅲｂ類（第5図 74・76・91）の器高は 14.6 ～ 9.2㎝。透かしは上下対応に配置され，形はニ類（上:三角形，下:四角形）が主体をなし，ハ類（上下：三角形）もある。数は上下3方向のものである。Ⅲｃ類（第5図 44・48）の器高は 12.6 ～ 10.1㎝である。透かしの形は三角形で，3 方向にある。

出雲4期後半はⅢｃ類のみで，Ⅲｂ類はない。Ⅲｃ類（第5図 54・59）の器高は 11.4 ～ 10.3㎝である。透かしの形は三角形で，数は 2 方向が主体をなし 3 方向もある。

出雲5期もⅢｃ類（第5図 61・64・66・67）のみで，その器高は 11.0 ～ 7.6㎝である。透かしの形は三角形と四角形のものがあり，数は 2 方向配置で，それに加えて切れ目を施すものがある。

以上，出雲の有蓋高杯について地域ごとに概観した。資料の多いⅢｂ類とⅢｃ類について東西 2 地域の相違点をいくつかあげてみたい。まず，出雲東部や隠岐，奥出雲にある器高 15㎝を超える大型品（第6図）が出雲西部にはない。出雲西部には 15㎝以下のものばかりがある。また，出雲東部ではⅢｂ類が出雲3期に登場し，出雲5期まであるのに対し，出雲西部では出雲4期後半～5期にはない。Ⅲｂ類の透



1　大座西遺跡２号墳　2　前田遺跡河道Ｃ遺構外　3　小池奥横穴墓群７号穴　4　高広遺跡Ⅰ区１号横穴墓玄室内
5　古浦遺跡　6　五反田遺跡溝状遺構１　7　御崎山古墳

第６図　大型の有蓋高杯Ⅲｂ類（１：６）

かしの形をみると，出雲東部にあるロ類（上下：四角形）が，出雲西部にない。Ⅲｂ類の透かしの数は，出雲東部には３方向に加え２方向や４方向があるが，出雲西部では３方向のみである。出雲４期のⅢｃ類をみると，出雲東部では，透かしの形が四角形と三角形のものに加え透かしのないものがあるが，出雲西部には三角形透かしのみである。このように，東西出雲に相違点を指摘できる。この地域性はなぜ生じているのであろうか。現状では以下の２案が想定される。一案は，出雲東部の大井窯跡群の製品は西部には搬入されず，出雲西部に見つかっていない窯跡があったという案。もう一案は，出雲東部で生産された様々な種類の有蓋高杯の中のいくつかが出雲西部に流通したと考える案。これら２案のどちらが妥当かは有蓋高杯だけでは判断できず，他の器種の状況も考える必要があろう。

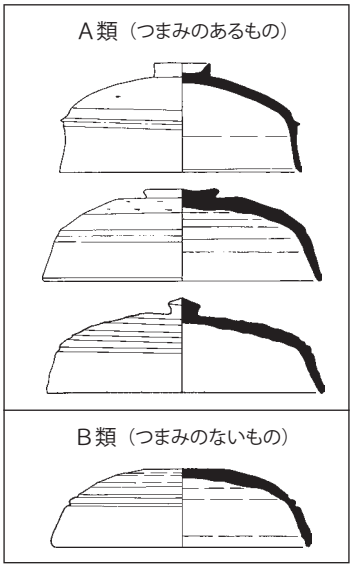
最後に，有蓋高杯の蓋をみておきたい。第 12•13 表は東西出雲の有蓋高杯の蓋を集成したものである。蓋はつまみの有無で２つに分類した。Ａ類：つまみのあるもの，Ｂ類：つまみのないもの，に分ける。

出雲１期の有蓋高杯は，蓋Ａ類で，出雲２Ｃ期から蓋Ｂ類が現れる。その後，蓋Ａ類と蓋Ｂ類が共存し，出雲４期にはＡ類よりＢ類が主体になることがわかる。西日本の有蓋高杯を概観すると，主要な型式の有蓋高杯にはＡ類のつまみのある蓋が採用されていて，Ｂ類が主体となる地域は出雲のみの可能性が高い。これまで，出雲の須恵器は地域色の強い須恵器として知られてきたが，有蓋高杯もそのひとつであるといえるであろう。

以上のように，出雲の有蓋高杯の蓋は，杯蓋との区別が難しい状況にあるが，中村１号墳の出土例で両者を比べてみたい。先に杯蓋については第２表で特徴を整理しており，大谷分類のＡ５型あるいはそれに近い型式と判断した。中村１号墳の有蓋高杯の蓋についても，大谷分類の杯蓋の特徴にあてはめて分類したのが第 14 表である。そうすると，③天井部調整がすべてⅡａ類であることから，Ａ４型とほぼ判断できる。②天井部と体部の境の特徴はすべてＢ類(沈線とナデを主体として突帯や稜を表現するもの)と判断し，これもＡ４型で矛盾はない。①口縁端部の特徴は，α５類の古い特徴を残すものもあるが，β類とγ２類が多くＡ４型で矛盾はない。したがって，中村１号墳の有蓋高杯の蓋は大谷分類のＡ４型とそれに近い型

第 12 表　出雲東部の有蓋高杯の蓋

番号	遺跡名	型式	口径（cm）	報告書番号	推定時期
96	薬師山古墳	A	12.8	第５図 19	出雲１期
97	岩屋口南遺跡Ⅰ区 SI01	A	12.6	第７図 11	
98	門生黒谷Ⅰ遺跡門生山根１号窯跡	A	12.9	第 22 図 72	
99	門生黒谷Ⅰ遺跡門生山根１号窯跡	A	12.4	第 30 図 165	
100	臼コクリ古墳周溝	A	12.4	第 10 図2	
101	臼コクリ古墳周溝	A	11.8	第 10 図1	
102	金崎古墳	A	10.4		
103	金崎古墳	A	9.3		
104	伝宇牟加比売命御陵古墳造り出し	A	15.6	第 16 図 19	出雲２B期
105	岩汐窯跡 SX01 Ⅰ黒色土下層	A	—	第 34 図 27	出雲３～４期
106	岩汐窯跡 SX01 Ⅰ黒色土下層	A	—	第 34 図 28	
107	岩汐窯跡 SX01 Ⅰ黒色土下層	A	—	第 34 図 29	
108	カンボウ遺跡Ⅰ区ＳＩ02	A	14.2	第 35 図5	
109	カンボウ遺跡Ⅰ区ＳＩ02	A	13.5	第 35 図6	
110	徳見津遺跡Ⅲ区 SI01 埋土	A	13.0	第 22 図 133	出雲４期前半
111	御崎山古墳	B	13.5	第 27 図 10	
112	清瀬塩田遺跡 SX01	B	12.4	第 19 図1	
113	清瀬塩田遺跡 SX01	B	12.3	第 19 図2	
114	古城山遺跡１号横穴	B	13.0	第 44 図 8	出雲４期～
115	古城山遺跡１号横穴	B	13.0	第 44 図 10	
116	古城山遺跡１号横穴	B	13.0	第 44 図 13	
117	渋山池古墳群 SK01	B	13.2	第 22 図2	出雲４期後半
118	渋山池古墳群 SK01	B	12.9	第 22 図4	
119	渋山池古墳群 SK01	B	13.5	第 22 図6	
120	渋山池古墳群 SK01	B	13.5	第 22 図8	
121	渋山池古墳群 SK01	B	13.3	第 22 図 10	
122	五反田遺跡溝状遺構1	A	14.4	第 113 図7	
123	古浦遺跡	A	14.6	第7図１	出雲４期後半～
124	古浦遺跡	A	13.3	第7図２	



第７図　有蓋高杯の蓋の分類

第 13 表　出雲西部の有蓋高杯の蓋

番号	遺跡名	型式	口径（cm）	報告書番号	推定時期
125	上島古墳墳丘	A	16.4	第 14 図 18	出雲２C期
126	上島古墳墳丘	B	14.8	第 14 図 15	
127	上島古墳墳丘	B	14.4	第 14 図1	
128	上島古墳墳丘	B	14.2	第 14 図5	
129	上島古墳墳丘	B	13.6	第 14 図3	
130	伝上塩冶築山古墳	A	15.4	第 78 図2	出雲４期前半
131	中村１号墳玄室	B	13.6	Ｐ 49	
132	中村１号墳玄室	B	13.5	Ｐ 45	
133	中村１号墳玄室	B	13.4	Ｐ 47	
134	中村１号墳玄室	B	12.3	Ｐ 57	
135	中村１号墳玄室	B	12.0	Ｐ 53	
136	中村１号墳玄室	B	12.0	Ｐ 55	
137	築山１号墳周溝	B	13.3	第 15 図 29	
138	築山２号墳周溝	B	12.8	第 23 図 26	
139	築山２号墳周溝	B	13.5	第 23 図 28	
140	築山２号墳周溝	B	13.5	第 24 図 30	
141	築山２号墳周溝	B	13.2	第 24 図 31	
142	築山２号墳周溝	B	13.5	第 24 図 32	
143	築山２号墳周溝	B	13.6	第 24 図 33	
144	築山２号墳周溝	B	13.5	第 24 図 34	
145	築山２号墳周溝	B	13.3	第 24 図 35	
146	築山２号墳周溝	B	12.7	第 24 図 36	
147	築山４号墳周溝	B	13.2	第 39 図 58	
148	築山４号墳周溝	B	12.8	第 39 図 59	
149	築山４号墳周溝	B	13.3	第 39 図 60	
150	築山４号墳周溝	B	12.9	第 39 図 61	
151	三田谷Ⅱ遺跡1区	B	13.4	第 40 図１	
152	上塩冶横穴墓群３３－７号穴	B	12.9	第 84 図3	出雲４期後半
153	上塩冶横穴墓群３３－７号穴	B	11.8	第 84 図5	
154	上塩冶横穴墓群３３－７号穴	B	13.5	第 84 図6	
156	上塩冶横穴墓群３３－７号穴	B	12.9	第 84 図8	
157	上塩冶横穴墓群 33 －7号穴	B	13.2	第 84 図9	
158	福知寺山横穴群	A	8.9	第1図	出雲４～５期
159	三部八幡宮横穴第1支群1号穴	A	13.2	第 10 図1	

第 14 表　中村１号墳有蓋高杯蓋の特徴

出土位置		報告書掲載番号	①口縁端部	②天井部と体部の境	③天井部の調整	④口径（㎝）	型式
石室	群						
玄室	２群	Ｐ 45	γ２	Ｂ	Ⅱａ	13.5	Ａ４
		Ｐ 47	α５	Ｂ	Ⅱａ	13.3	～Ａ４
		Ｐ 49	γ２	Ｂ	Ⅱａ	13.1	Ａ４
		Ｐ 51	α５	Ｂ	Ⅱａ	13.4	～Ａ４
		Ｐ 53	β	Ｂ	Ⅱａ	12.0	Ａ４
		Ｐ 55	β	Ｂ	Ⅱａ	12.0	Ａ４
		Ｐ 57	β	Ｂ	Ⅱａ	12.3	Ａ４

式と考えられる。すなわち，中村1号墳の有蓋高杯蓋と杯蓋は，各々Ａ４型とＡ５型に区別することができる。また，Ａ４型とＡ５型はともに出雲４期前半に位置付けられ前後関係があるとは言えないが，型式的にはＡ４型である有蓋高杯蓋に古い特徴が残るといえよう。同じような状況は築山２号墳の周溝から出土した一括性の高い有蓋高杯蓋と杯蓋にもいえ，中村1号墳だけの現象ではないようである。すなわち，有蓋高杯蓋にはＡ４型，杯蓋にはＡ５型が採用されているといえる。したがって，有蓋高杯蓋と杯蓋は意識して別々に作られていたと考えられる。

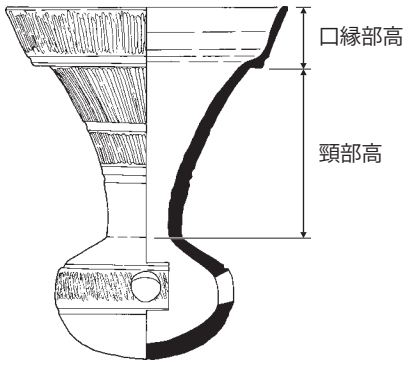
以上，中村1号墳の有蓋高杯を位置付ける目的で，有蓋高杯の編年を行った。その結果，つまみのない蓋が出雲の有蓋高杯の特徴であることや，有蓋高杯蓋と杯蓋との区別ができることをあきらかにすることができた。また，出雲４期～５期にかけて東西出雲には若干の地域性があることもわかった。そして，中村1号墳の有蓋高杯は，杯蓋と同じ出雲４期前半に位置付けられる。

（２）　鼈

中村1号墳から出土した鼈は3点ある。鼈については大谷編年で検討されているが，若干の修正が必要である。加えて，畿内系の鼈が出土しているので，畿内の須恵器編年との平行関係も検討してみたい。

大谷分類では，鼈をＡ型とＢ型に大きく２分類し[9]，Ａ型はＡ１型～Ａ９型まで細分し型式組列を示している。Ｂ型は畿内系の丸底でＢ１型とＢ２型に細分され，Ｂ１型が TK43 型式の典型的なもの，Ｂ２型は断定はしていないがＢ１型より新しい TK 209 型式期に属すると指摘されている[10]。これらの検討から，出雲の鼈の特徴である平底の要素は，Ａ３型から確認できることから，出雲２Ｂ期（MT15 ～ TK10 型式）から始まると指摘している。

まず，Ａ型の中村1号墳Ｐ 40（第 15 表・第9図 10）は大谷分類のどの型式にあてはまるかを検討してみたい。Ｐ 40 は，頸部の中央に２条の沈線が巡り，その上に雑な波状文が施されている。そして，体部には２条の沈線の間に刺突文が施されている。この特徴から大谷分類のＡ４型あるいはＡ５型と考えられる。Ａ４型とＡ５型の相違点は，頸部の長さにあり，Ａ４型よりＡ５型が短くなる。大谷分類には頸部の長短の基準が示されていなかったので，Ｐ 40 の頸部が長いのか短いのか判断ができない。そこで，本稿において仮の基準を作ってみたい。出雲東西におけるＡ４型とＡ５型を集成し，頸部高の器高に対する割合を算出した（計測範囲は第８図に示した）。そして，出雲４期に

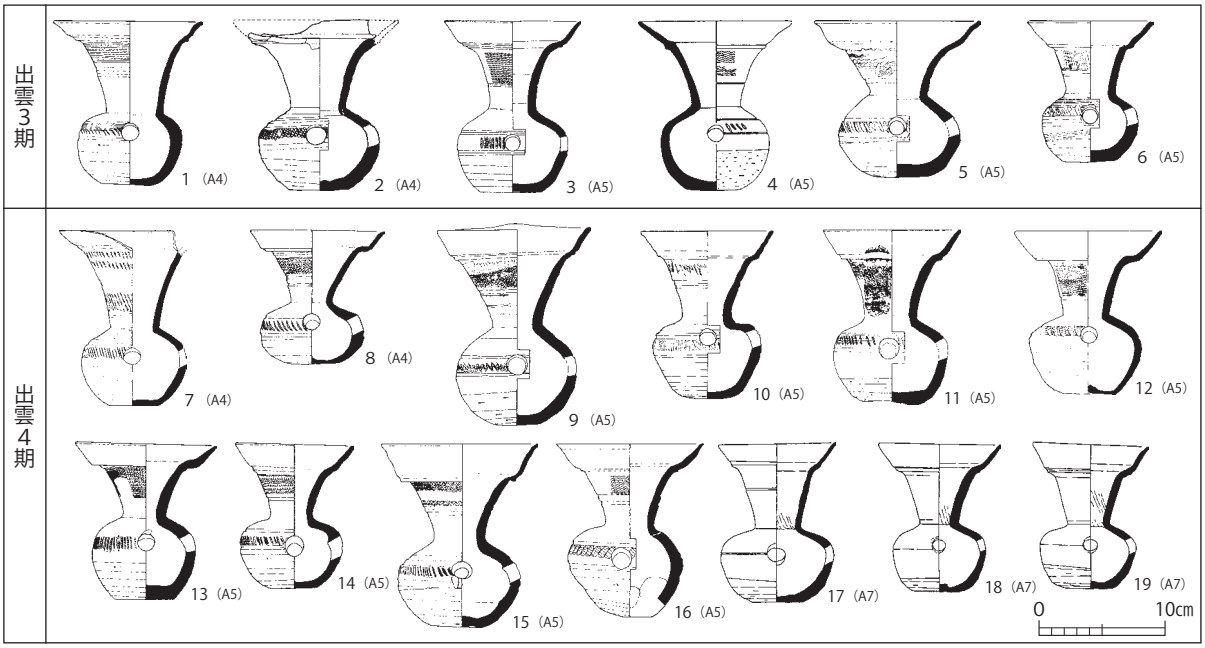


第８図　鼈の計測位置

第 15 表　出雲３～４期におけるＡ型瓮の計測値

番号	遺跡名	大谷分類の型式	頸部高 / 器高（%）	頸部高（cm）	頸部高の範囲（cm）	器高（cm）	口縁部高（cm）	口縁部高の範囲(cm)	報告書掲載番号	時期
1	宮内Ⅱ区１号横穴墓	A４	44	5.6	5.6 ～ 3.5	12.8	1.6	1.6 ～ 2.4	第 70 図 6	出雲３期
2	岡田薬師古墳		38	5.2		13.6	1.8		第 13 図 11	
3	弥陀原４号横穴墓	A５	36	4.8		13.4	2.0		第 10 図 30	
4	古天神古墳		34	4.6		13.4	2.2		第 17 図	
5	中竹矢１号横穴墓		32	3.6		11.2	2.2		第 104 図 117	
6	中竹矢１号横穴墓		29	3.5		12.4	2.4		第 104 図 116	
7	岩屋Ｉ区５号墳	A４	43	6.0	6.0（6.6）～ 3.6	14.0	1.6	1.6 ～ 3.0	第 44 図 5	出雲４期
8	臼コクリＮ－１号横穴墓		38	4.0		10.4	1.6		第 24 図1	
9	菅田 18 号横穴墓	A５	34	5.2		15.4	2.0		第 59 図 27	
10	中村１号墳		34	4.5		13.2	2.2		Ｐ 40	
11	社日 10 号横穴墓		34	4.6		13.4	2.4		第 68 図3	
12	古城山３号横穴		34	4.4		13.0	2.4		第 71 図2	
13	高広Ⅳ区１号横穴墓		32	4.0		12.4	1.8		第 147 図 22	
14	高広Ⅳ区１号横穴墓		32	3.6		11.4	2.0		第 147 図 23	
15	伊賀見１号墳		31	4.5		14.5	3.0		第 14 図3	
16	松本３号横穴墓		30	4.2		13.8	2.2		第 17 図9	
17	向山１号墳	A７	38	4.8	4.8 ～ 4.2	12.6	1.9		第 24 図 15	
18	向山１号墳		36	4.2		11.8	2.2		第 24 図 13	
19	向山１号墳		36	4.2		11.6	2.3		第 24 図 14	

＊頸部高の範囲の（）内の数値は，時期が不明確な資料の最大値である。



1　宮内Ⅱ区１号横穴墓　2　岡田薬師古墳　3　弥陀原４号横穴墓　4　古天神古墳　5・6　中竹矢１号横穴墓
7　岩屋Ⅰ区５号墳　8　臼コクリＮ－１号横穴墓　9　菅田 18 号横穴墓　10　中村１号墳　11　社日 10 号横穴墓　12　古城山３号横穴
13・14　高広Ⅳ区１号横穴墓　15　伊賀見１号墳　16　松本３号横穴墓　17～19　向山１号墳

第９図　出雲３～４期におけるＡ型瓮（１：６）

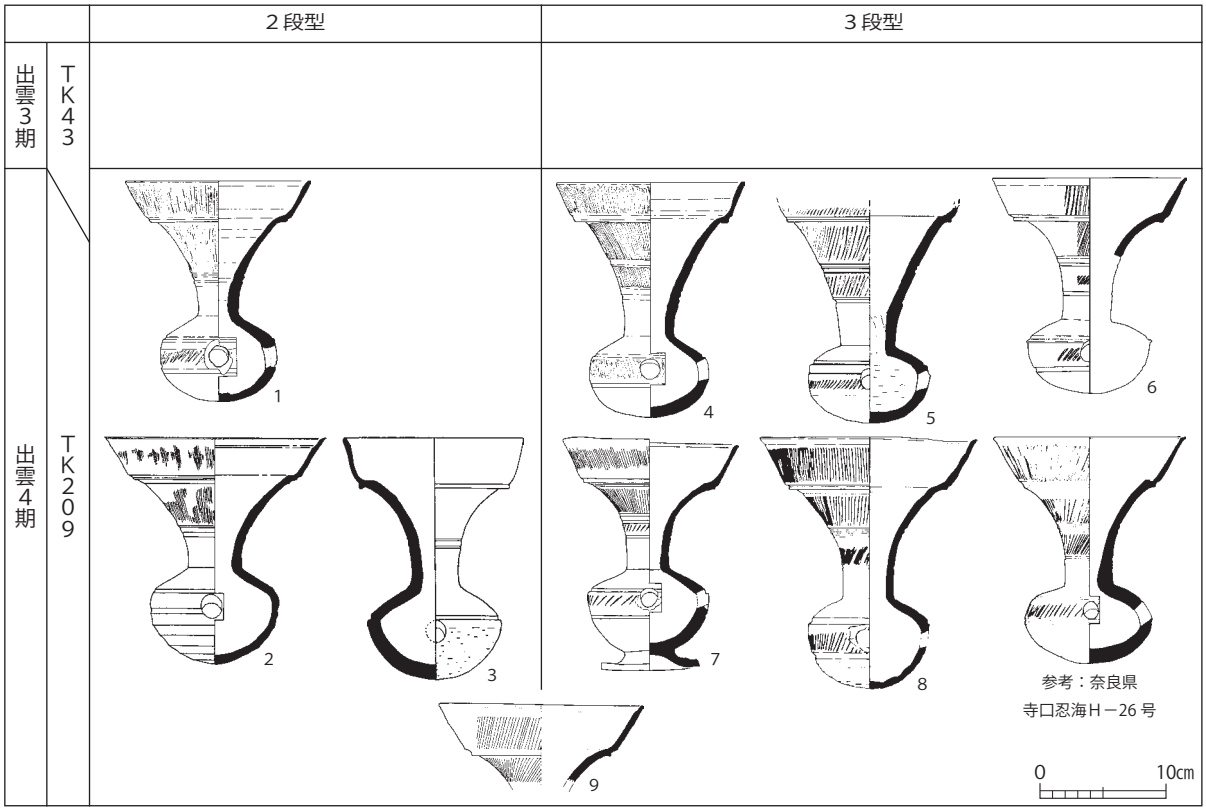
あるＡ７型も加え，時期が明確なものを第 15 表，第９図に示した。これによると，頸部高の器高に対する割合は 27%～ 46%の範囲にある（時期が曖昧なもの第 15 表以外を含む）。そこで，単純に上記の範囲の中間点をとると，36 ～ 37%である。そこで 37%以上を頸部が長いＡ４型，36%以下を頸部が短いＡ５型とする。そうすると，中村１号墳Ｐ 40 は約 34%でＡ５型となる。大谷編年でＡ４・Ａ５型は出雲３期～４期にあり，中村１号墳の杯蓋には出雲３期の資料がないことから出雲３期とは考えにくい。したがって，中村１号墳Ｐ 40 はＡ５型で出雲４期と推定できる。

次に中村１号墳Ｐ 41 について検討したい（第 16 表・第 10 図４）。Ｐ 41 は頸部の付け根が強くしぼられ，ラッ

第 16 表　出雲におけるＢ型瑞の特徴

番号	遺跡名	文様の段数	吉田分類の型式	口径（cm）	口縁部高（cm）	頸部高（cm）	口頸部高（cm）	器高（cm）	報告書掲載番号	時期	
										畿内	出雲
1	塚根横穴墓群	2段	2Dか	14.5	3.3	7.3	10.6	17.4	未報告	TK209	出雲４期
②	森遺跡Ⅱ区 SK06		2Dか	17.5	3.4	7.0	10.4	18.0	第 13 図 15		
3	常熊古墳		2Dか	14.3	4.0	7.5	11.5	19.1	第5図		
④	中村1号墳	3段	3C	15.0	3.3	9.1	12.4	18.6	P 41		
⑤	三代古墳			—	—	9.8	10.7 以上	—	第3図		
⑥	小池奥横穴群7号穴			15.5	3.4	7.8	11.2	17.0	第 13 － 31		
⑦	向山1号墳前庭部			13.7	3.6	6.4	10.0	18.2	第 24 図 16		
8	臼畑古墳			17.0	4.0	8.6	12.6	20.0	第 10 図1		
9	上島古墳	2か3段	2Dか3C	16.0	4.0	—	—	—	第 15 図3		

○囲みの数字は出雲の須恵器との共伴時期が明確なもの



1　塚根横穴墓群　2　森遺跡Ⅱ区 SK06　3　常熊古墳　4　中村１号墳　5　三代古墳　6　小池奥横穴群７号穴　7　向山１号墳前庭部　8　臼畑古墳
9　上島古墳

第 10 図　出雲におけるＢ型瑞の編年（1：6）

パ状にカーブしつつ広がる頸部と，きれいな丸底をなし，先述したように大谷分類の畿内系のＢ型となる。そこで，畿内の瑞編年と直接照合し，時期の検討を行ってみたい。ただし，搬入品かどうかの判断が難しいのであくまでも参考としての扱いとなる。

畿内の後期古墳出土瑞については，吉田知史による編年研究がある（吉田 2007，以下，吉田編年と呼ぶ）。吉田は文様のある瑞について検討し，頸部の沈線によって区分されている文様帯が1段のものを1段型瑞，2段のものを2段型瑞，3段のものを３段型瑞として，それぞれについて文様と法量から型式分類を行って，共伴資料から時期を決定している。

中村1号墳Ｐ 41 は3段型瑞である。吉田は３段型瑞を口縁部高で３Ａ～３Ｃ類に細分した。３Ａ類の口縁部高は 1.7 ～ 2.3㎝で TK43，３Ｂ類は 2.4 ～ 3.1㎝で TK43 ～ TK209 初頭，３Ｃ類は 3.3 ～ 4.8㎝で TK209 に該当する。口縁部高が低いものから高いものへ変化するわけである。また，３A 類・3B 類

の文様には波状文が施されるが，３C 類には波状文はみられない。中村1号墳P 41 の口縁部高は 3.3㎝で３C類と判断できる（第 16 表4）。３C類の中で中村1号墳P 41 と同じ３段とも直線文になるものに，奈良県矢部団栗山古墳，寺口忍海H－ 26 号墳がある。中村1号墳以外の３段型甕には，雲南市三代古墳，奥出雲町小池奥７号横穴墓，松江市向山1号墳，松江市臼畑古墳がある。これらの口縁部高は 3.4㎝以上あり，また，波状文が施されないことから3C 類，時期は TK209 と考えられる。

また，出雲には吉田分類の2段型甕もある（第 16 表・第 10 図）。吉田は2段型甕を口径と口頸部高，口縁部高により２A類～２D類に細分した。詳述すれば，２A類～２C類にかけて，口径と口頸部高は大きくなる。2A 類・2B 類は口径が 13.8㎝以下で，２C類・2D 類は口径 15㎝代である。また，口頸部高は 2A 類・2B 類が 9.8㎝以下で，２C類・2D 類は 10.2㎝以上である。口縁部高は 2A 類・2B 類・2C 類が 2.0㎝以下であり，2D 類は口縁部高が4㎝と高くなるもの。頸部文様は 2A 類・2B 類・2C 類は波状文，2D 類は箆描直線文が施される。時期は，2A 類が TK10 新相，2B 類が TK10 新相～TK43，2C 類が TK43，2D 類が TK209 としている。そこで，出雲の2段型甕は口径が 14.3 ～ 17.5㎝の範囲にあり，２C 類あるいは 2D 類の範囲に近い。口頸部高は 11.2㎝以上で2C 類あるいは 2D 類の範囲に近い。口縁部高は，3.3 ～ 4.0㎝で 2D 類の範囲に近い。頸部文様は箆描直線文のみであり，2D 類となる。以上のことから，出雲の2段型甕は口縁部が高くなった2D 類に近いものと判断できる。ただし，吉田のあげた畿内の2D 類は1例のみであり，それに近いものとして判断したい。したがって，出雲の2段型甕は TK209 に平行する資料と考えられる[11]。

このように，出雲出土の大谷分類B型甕はほとんどがT K209 の資料と判断できよう。そして，それらと共伴する須恵器は，中村1号墳，三代古墳，小池奥７号横穴墓，向山1号墳から出雲４期の資料とわかる。したがって，出雲で出土するB型甕によって，出雲４期が畿内の TK209 型式に平行すると考えられよう[12,13]。

最後に中村1号墳の甕P 75 について触れてみたい。底部は丸底で，頸部は短く，口縁部は大きく開く。頸部は２条の沈線で区画された2段型で，口縁部高は 2.9㎝，頸部高は 4.1㎝，頸部には波状文が施されている。先に検討したP 41 と同時期の資料と仮定すると，底部は畿内系の甕の特徴を持つが，頸部と口縁部の形態には当てはまらず，口縁部高はA型の範疇に収まる。また，頸部高の割合が 29％と低いことからA５型の形態に近い。また，口縁部外面が無文で，頸部には波状文が施されていることもA型の特徴である。したがって，P 75 は地元出雲のA５型や畿内系のB型とは異なる特徴をもつものと考えられる。現状では，出雲で生産された可能性に加え，出雲や畿内以外の地で生産されたことも考慮し，P 75 の出自については今後の課題としたい。

まとめると，中村1号墳の甕P 40 は大谷分類のA５型，P 41 は吉田分類の3C 類と判断した。時期はP 40 が出雲4期，P 41 が TK209 型式期で，これらが平行すると考えられる。

（3）横　瓶

中村１号墳からは横瓶が２点出土している。出雲における横瓶の編年研究は過去にないので，時期がわかる資料を第 17・18 表に抽出した。現状では，出雲１期～３期までの横瓶は無く，出雲４期～８期に横瓶があることがわかった。本稿ではこれらの資料の口縁部高，器高，胴部最大径，胴部最小

径を計測し表にした。計測の結果，胴部最大によって，大型と小型があることがわかった。大型は胴部最大径が 30㎝以上のもので，小型は 30㎝未満のものである。大型が主体となる（第 12 図）。小型は出雲４期には無く，出雲５期～８期にある。中村１号墳の横瓶２点の胴部最大径はＰ 44 が 44.5㎝，Ｐ 71 が 43.0㎝であるから，ともに大型である。

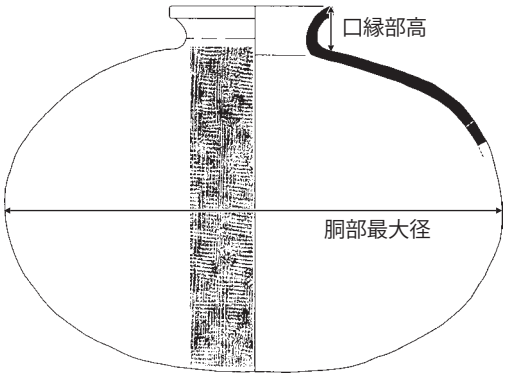
口縁部高には変化の方向が現れる。口縁部高の計測基準は胴部最大径がある中心軸の口縁端部外面に定規を垂直にあて，口縁部の上端から定規が胴部に接する部分までとした（第 11 図）。２か所計測し，低い数値を採用した。計測の結果，大型の横瓶は出雲４期から出雲６期にかけて口縁部高が低下することがわかった（第 13 図）。出雲４期の口縁部高は 5.0㎝以上で，出雲５期以降は約 5㎝未満のものがほとんどである。中村１号墳Ｐ 44 の口縁部高は 7.3㎝以上あり，これまでみつかっている出雲の横瓶の中で一番高い。中村１号墳Ｐ 71 は 5.1㎝で，Ｐ 44 よりはかなり低い。出雲５期の渋山池 11 号横穴墓（第 17 表・第 14 図９）の口縁部高が，4.6㎝以上で 5㎝前後と推定でき，口縁部高が５㎝前後のものは出雲５期にもある。したがって，Ｐ 44 は出雲４期の横瓶の中でも古い特徴をもち，Ｐ 71 は出雲４期でも出雲５期に近い特徴をもつと推定できる。

次に，胴部内面の調整について検討してみたい。胴部内面調整には丁寧なナデ調整が施されているもの，ナデが施されているが一部にあて具痕が残るもの，ナデが施されずあて具の痕跡が明確に残るものがある。これらの①胴部内面調整と②口縁部高，③文様の特徴を組み合わせてⅠ類～Ⅲ類に型式分類した（第 18 表）。

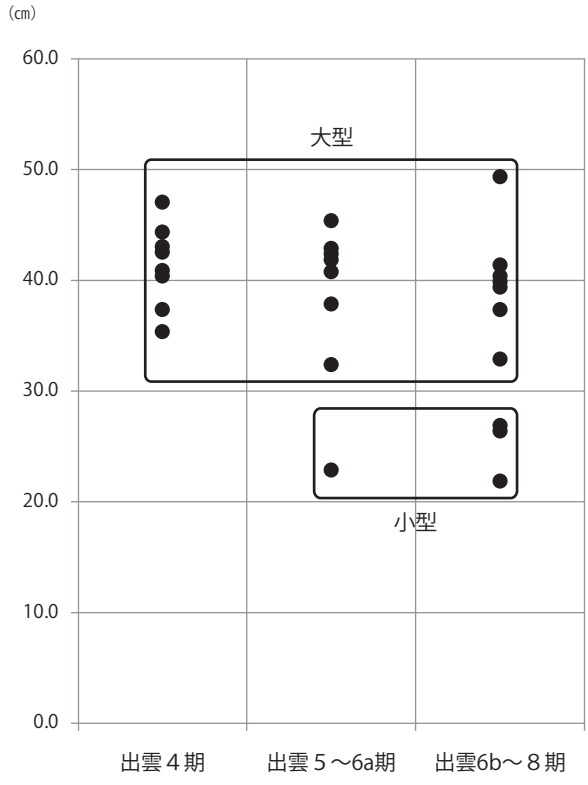
Ⅰ類：①丁寧なナデ調整が施されているもので，②口縁部高が 6.9㎝以上で高く，③は沈線や波状文が施されるものと，文様は施されないものとがある。

Ⅱ類：①ナデが施されているが一部にあて具痕が残るもので，②口縁部高は 6.5 ～ 5.1㎝で，Ⅰ類よりは低い。③文様は施されない。

Ⅲ類：①ナデが施されずあて具の痕跡が明確に残るもので，②口縁部高は 5.0 前後～ 2.0㎝でⅡ類よりは低いものがほとんどである。③文様が施されないものと円形浮文が施されるものがある。



第 11 図　横瓶の計測位置



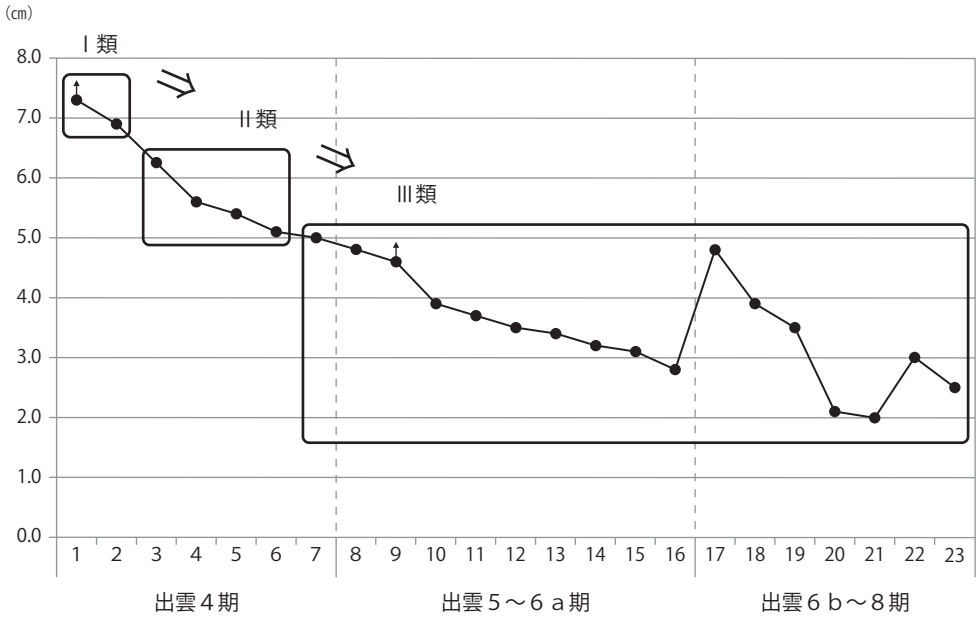
第 12 図　横瓶胴部最大径による分類

第 17 表　大型横瓶の特徴

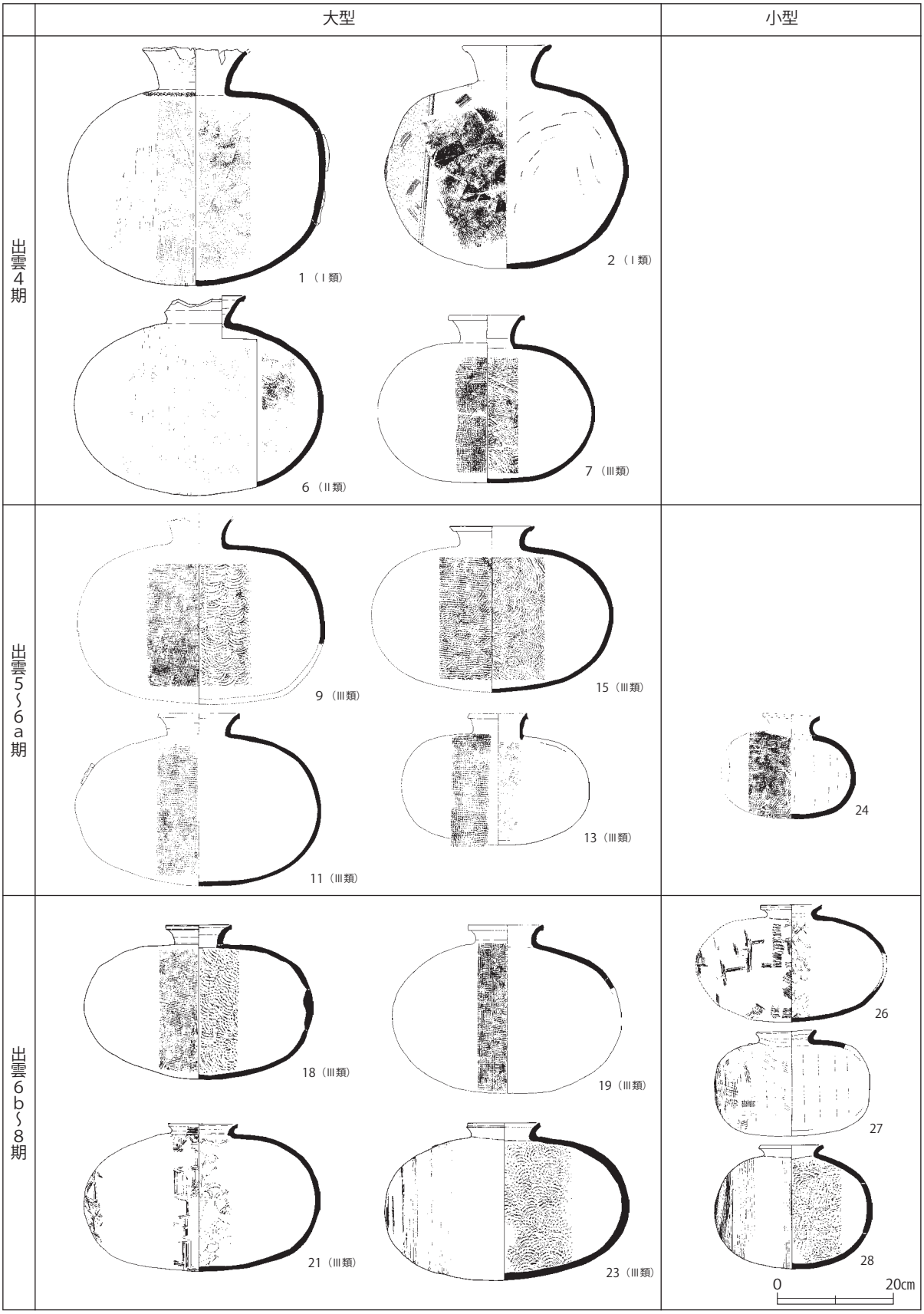
番号	遺跡名	口縁部高（cm）	器高（cm）	胴部最大径（cm）	胴部最小径（cm）	胴部内面調整	文様	型式	報告書掲載番号	時期
1	中村１号墳	7.3 以上	41.5 以上	44.5	35.0	あて具痕なし 丁寧なナデ消し	沈線 波状文	Ⅰ類	Ｐ 44	出雲４期
2	岩屋遺跡Ⅰ区３号墳周辺	6.9	38.0	40.2	36.2	あて具痕なし 丁寧なナデ消し	なし	Ⅰ類	第 25 図	出雲４期
3	林４３号墳玄室	6.3	36.0	47.2		あて具痕あり 粗いナデ消し	なし	Ⅱ類	未報告	出雲４期
4	岩汐遺跡１Ｇ	5.6	30.5	40.5	28.0	あて具痕あり 粗いナデ消し	なし	Ⅱ類	第 175 図5	出雲４期？
5	中竹矢４号横穴墓	5.4	30.0	35.5	25.6	あて具痕あり 粗いナデ消し	なし	Ⅱ類	第 89 図 374	出雲４期
6	中村１号墳	5.1	34.5	43.0	30.8	あて具痕あり 粗いナデ消し	なし	Ⅱ類	Ｐ 71	出雲４期
7	岩屋口南Ⅲ区２号横穴墓	5.0	29.0	37.5	24.5	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 103 図3	出雲４期
8	古城山１号横穴墓	4.8	32.0	40.9	27.0	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 46 図3	出雲４～５期
9	渋山池 11 号横穴墓	4.6 以上	32.0 以上	43.0	28.4	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 91 図 19	出雲５期
10	湯後２号横穴墓	3.9	30.0	45.5	26.4	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 26 図 15	出雲５期
11	湯後２号横穴墓	3.7	29.5	42.5	26.2	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 26 図 14	出雲５期
12	湯後７号横穴墓	3.5	27.0	41.0	23.1	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 50 図 11	出雲５期
13	天狗松Ⅰ支群３号穴	3.4	23.0	32.5		あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 19 図	出雲５期
14	平野３号横穴墓	3.2	29.0	38.0	28.0	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	15	出雲５～６ａ期
15	渋山池 11 号横穴墓	3.1	29.0	42.0	24.5	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 91 図 18	出雲５～６ａ期
16	徳見津遺跡Ⅳ区第４加工段第３平坦面下層	2.8	—	—	—	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 50 図 301	出雲５期
17	高広遺跡Ⅱ区 SX01 下層	4.8	38.8	49.5	28.0	あて具痕あり	円形浮文	Ⅲ類	第 110 図1	出雲６ｂ・ｃ期
18	高広遺跡Ⅱ区 SX01 下層	3.9	26.5	40.0	22.0	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 110 図2	出雲６ｂ・ｃ期
19	岩屋口南Ⅲ区１号横穴墓	3.5	28.7	39.4	26.0	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 95 図２	出雲６ｂ・ｃ期
20	宮尾横穴墓群Ｃ－９号穴	2.1	20.2	33.0	18.3	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	16	出雲６ｃ・ｄ期
21	宮尾横穴墓群Ｃ－ 23 号穴	2.0	25.6	40.2	23.5	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	17	出雲６ｄ～７期
22	社日９号横穴墓	3.0	26.0	37.4	24.7	あて具痕あり	なし	Ⅲ類	第 61 図2	出雲６ｂ～８期
23	高広遺跡Ⅳ区５号横穴墓	2.5	26.8	41.8	25.4	あて具痕あり	円形浮文	Ⅲ類	第 174 図 19	出雲８期

第 18 表　大型横瓶の型式的特徴

型式	①胴部内面調整	②口縁部高（cm）	③文様	時期
Ⅰ類	丁寧なナデ	6.9 以上	沈線・波状文・なし	出雲４期
Ⅱ類	ナデ，一部にあて具痕残る	6.5 ～ 5.1	なし	
Ⅲ類	あて具痕あり	5.0 前後～ 2.0	なし・円形浮文	出雲４～８期



第 13 図　大型横瓶の口縁部高と型式



1・6　中村１号墳　2　岩屋遺跡Ⅰ区３号墳周辺　7　岩屋口南Ⅲ区２号横穴墓　9・15　渋山池 11 号横穴墓　11　湯後２号横穴墓　13　天狗松Ⅰ支群３号穴
18　高広遺跡Ⅱ区 SX01 下層　19　岩屋口南Ⅲ区１号横穴墓　21　宮尾横穴墓群Ｃ－23 号穴　23・28　高広遺跡Ⅳ区５号横穴墓　24　遅倉４号横穴墓
26　宮尾横穴群Ｃ－９号穴　27　宮尾横穴墓群Ｃ－20 号穴

第 14 図　出雲における横瓶の編年（1：10）

第 19 表　小型横瓶の特徴

番号	遺跡名	口縁部高（cm）	器高（cm）	胴部最大径（cm）	胴部最小径（cm）	胴部内面調整	文様	報告書掲載番号	時期
24	遅倉4号横穴墓	3.0	18.0	23.0	15.6	あて具痕あり，粗いナデ消し	なし	第 43 図9	出雲5期
25	岩屋口南遺跡Ⅲ区1号横穴墓	3.1	22.2	27.0	20.7	あて具痕あり，一部ナデ消し	竹管文	第 95 図1	出雲6ｂ・ｃ期
26	宮尾横穴墓群C－9号穴	3.1	17.6	22.0	22.6	あて具痕あり	なし	15	出雲6ｃ・ｄ期
27	宮尾横穴墓群C－20 号穴	1.8	17.9	26.5	16.0	不明	なし	2	出雲6ｃ～7期
28	高広遺跡Ⅴ区5号横穴墓	1.9	21.4	26.5	19.8	あて具痕あり	なし	第 174 図 20	出雲8期

大型横瓶Ⅰ～Ⅲ類の時期は，共伴した須恵器からⅠ類とⅡ類が出雲４期，Ⅲ類は出雲４期～８期にかけてあり，主体は５期～６期と考えられる。Ⅲ類の中では６ｂ期以降に円形浮文があるものや口縁部が直口するものが出てくる。

以上の分類から，中村１号墳Ｐ 44 はⅠ類，Ｐ 71 はⅡ類となる。そして，Ⅰ類は胴部最小径が 35㎝以上で大きく，ⅡとⅢ類は 31㎝以下である。したがって，Ⅰ類の球形に近いものからⅡ類・Ⅲ類の横長長胴の典型的な横瓶に変化すると考えられる。

小型横瓶についても若干ふれておく。小型横瓶の時期が明確な資料はわずかに５点である（第 19 表）。出雲４期の資料は無く，出雲５期～８期まで存在する。口縁部高は 3.1 ～ 1.8㎝で低い。胴部内面の調整は，あて具痕が明瞭に残るものが多い。

以上，出雲における横瓶の型式分類を行い変遷を示した。中村１号墳の２点の横瓶は出雲４期に位置付けることができた。

5　中村１号墳の須恵器のまとめと課題

本稿で検討した中村１号墳の須恵器の時期についてまとめてみたい。まず，各器種の型式と時期について第 20 表にまとめている。杯蓋がＡ５型で出雲４期前半と考えられることから，出雲３期の資料がないと仮定すると，すべての須恵器が出雲４期の範疇で収まる。その中で，杯蓋，有蓋高杯身，長脚無蓋高杯，出雲型子持壺が出雲４期前半と限定できる。このことから，玄室への初葬と前室への追葬は出雲４期の短期間に行われていると推定できよう。課題として残るのは，埋葬終了後の進入で置かれた２セットの横瓶と大壺である。これらの詳細な時期を検討すれば，埋葬終了後の儀礼の時期が明確となる。今のところ，最後の進入時に使用され石棺の前に置かれた横瓶Ⅱ類は出雲４期の中で収まり，出雲５期には降らない。したがって，中村１号墳は出雲４期前半に築造され，石室の使用は出雲４期の中で終わったと考えられる。その後，西暦 2004 年まで攪乱されることなく残った貴重な未盗掘古墳である。

最後に，出雲西部の大型円墳である上塩冶築山古墳と中村１号墳の時期差について示しておきたい。上塩冶築山古墳から出土したと伝えられている須恵器の杯蓋は大谷編年のＡ３ａ型に分類される（大谷 1999）。Ａ３ａ型は出雲３期～４期前葉と考えられる(14)。１点のみで古墳の時期を決めるのは難し

第 20 表　中村１号墳出土須恵器の器種別の型式と時期

論文	大谷編年			吉田編年	池淵編年	本稿の編年	
器種	杯蓋	長脚無蓋高杯	A型鏃	B型鏃	出雲型子持壺	有蓋高杯身	横瓶
型式	Ａ５	Ａ３	Ａ５	３C	Ｃ１	Ⅲｃ	Ⅰ・Ⅱ
時期	出雲４期前半	出雲４期前半	出雲４期	TK209	出雲４期前半	出雲４期前半	出雲４期

い。次に上塩冶築山古墳の金属製品の時期をみると，型式的特徴から TK43 の中でも新しい特徴をもつものである。最後に，石室の型式はⅠ類石室ｅ１類で，中村１号墳と同じ型式であり近い時期に築造されたと考えられる。中村１号墳からは，出雲４期前半の出雲の須恵器，TK209 の蓋が出土している。また，大刀や馬具は TK209 期の所産と考えられる。

以上のことから，中村１号墳（TK209）が上塩冶築山古墳（TK43）よりも新しいことがわかる。ただし，石室型式が同じことから近い時期に築造されたともいえる。大谷編年の出雲４期は，畿内の TK43 の一部と TK209 が平行する。以上のことから，上塩冶築山古墳を出雲３期とするよりは，出雲４期の初頭と考えた方が理解がしやすい。すなわち，出雲４期前半の TK43 に平行する時期に上塩冶築山古墳が，TK209 に平行する時期に中村１号墳が位置付けられる。

以上，中村１号墳の須恵器の相対年代を決めるため，既往の編年を引用し，また修正や再構築を行った。そして，ある程度の根拠をもった位置付けができたと考える。ただ，一括性の高い資料が不足していることを改めて認識した。特に本稿での関わりでいえば，出雲３期の資料と出雲西部の資料が不足している。資料の増加を待って，改めて須恵器の編年と地域性，生産と供給の問題について検討してみたい。現状では，出雲東部の須恵器の出土量が出雲西部に比べ圧倒的に多い。単に発掘調査件数の差なのであろうか。古墳の検討により出雲の古墳時代後期社会の解明が行われてきているが，須恵器の出土量からも社会情勢について検討できるのではないかと思う。これについても今後の課題である。

最後になったが，大谷晃二氏には須恵器の見方や研究の現状について多くの指導を賜った。また，資料の見学については，以下の機関にお世話になった。記して感謝する。

出雲玉作資料館，奥出雲町教育委員会，荒神谷博物館，島根県立古代出雲歴史博物館，島根県埋蔵文化財調査センター，島根大学考古学研究室，松江市教育委員会，松江市立鹿島歴史民俗資料館，八雲立つ風土記の丘，安来市教育委員会

（坂本豊治）

註

（１）③Ⅱｂ類と判断したが，中村１号墳杯蓋の天井部中心はナデが施されていない。

（２）大谷編年の出雲４期の杯蓋（大谷論文の第 14 図）は，Ａ３型とＡ４型の段階，Ａ４型とＡ５型の段階，Ａ６型の段階があると読み取れる。このことから，本稿の第１表の⑤時期に，Ａ４型を古・中，Ａ５型を中，Ａ６型を新として表現した。大谷による出雲４期細分の結論は，杯蓋Ａ６型が出雲４期後半として細分できる可能性を示しながら，他器種との良好な一括資料がないため，出雲４期の細分は行っていない。

（３）大谷が提示した出雲４期の代表的な資料は，安来市高広Ⅳ区２号横穴墓，安来市中山横穴墓である。

（４）大谷論文が提出された以降に発掘された資料で出雲４期の代表的な資料に，前半の出雲市築山２号墳，後半の松江市向山１号墳があげられる。

（５）ただし，上島古墳出土須恵器のほとんどは墳丘からの採集資料であり，出土状況が明確ではない。また，上島

古墳からは出雲４期と推定できる廻が出土している。Ⅲｂ類が出雲２Ｃ期に遡るとは断定できない。

（6）大谷編年では，本稿のⅢｃ類（大谷編年のＤ型とＥ型）を松江市の池ノ奥窯跡，高井横穴墓の資料をあて，出雲３期の資料としているが，どちらも一括性が高い資料ではない。高井横穴墓は遺物出土状況から追葬があったと推定できる。杯蓋にもいくつかの型式があり，出雲３期と限定できるわけではない。本稿のかえり高の検討から，高井横穴墓はかえり高の組み合わせが１㎝前後の資料となり出雲４期前半の資料になる可能性がある。さらに，松江市御崎山古墳と高野２号墳からはⅢｂ類が出土しているが，どちらも出雲４期の杯蓋があり３期の典型資料とは言えない。高野２号墳のかえり高は 1.5㎝と高く，松江市中竹矢２号墳の資料に近く，出雲４期にはかえり高がこれほど高い資料はないことから，出雲３期の資料とした。御崎山古墳のかえり高は 0.8㎝と短く，出雲４期に降る追葬の資料と考えた。

（7）本稿では，整理の途中で透かしの形の三角形か四角形かの判断が難しかった場合は，三角形の頂点が明確に接しているものに加え，三角形を指向しているが頂点が交差せずに四角形になっているものも三角形とした。これらは，正確に三角形を作ったものと不正確に作ったものと考えられる。ここに工人の差が表れていると考えられ，本来なら分類して示す必要があるが，本稿ではまとめて表記した。四角形のほとんどが台形をなすが，長方形のものもあり，本稿ではこれらをまとめて四角形として表記した。

（8）松江市古浦遺跡の有蓋高杯３点は，いずれも器高が約 17.4 ～ 20㎝と高く，かえり高は1㎝未満である。出雲４期後半以降の資料であろう。

（9）大谷論文では「６世紀前半から漸次その変化を追うことができるＡ型と継続的な組列を形成しないＢ型」に分けている。

（10）大谷分類のＢ１型は口縁部が外反する。Ｂ２型はＢ１型より丸みをもち，口縁部は内湾する。この分類に中村１号墳Ｐ 41 をあてはめると，Ｂ１型となり TK43 型式と推定できる。しかし，大谷編年のＢ型の細分基準が明確ではないことをここに指摘しておきたい。それは，Ｂ型の細分の根拠になっている口縁部の形状である。Ｂ１型は口縁部が外反するものとされているが，その例として松江市臼畑古墳（第 10 図８）があげられている。この口縁部は外反というよりは内湾していると考えられ，Ｂ２型とも判断できる。そこで，出雲のＢ型廻を集成し（第 16 表・第９図），口縁部の形態をみると，頸部と口縁部の境から内湾して立ち上がり，外傾あるいは外反して開くと表現できるので，口縁部形態をもって細分することは難しいと考えられる。

（11）口縁部片のみであるが上島古墳出土品がある（第 16 表・第 10 図９）。口縁部高が 4.0㎝と高いことから吉田分類の２段型の２Ｄ類あるいは３段の３Ｃ類の廻と考えられる。口縁部片であるが，地元出雲の出雲４期のＡ型廻の口縁部高は 1.6 ～ 3.0㎝の範囲で，畿内系廻の口縁部高が 3.3㎝以上になり，明確に区分することができる。したがって，口縁部高から上島古墳の廻は TK209 の資料の可能性が高い。そして，上島古墳出土資料は出雲２Ｃ期（TK10）の一括資料と考えられてきたが，他の時期の資料が混在していることがわかってきた。

（12）ここで，問題として残るのは，底部が丸底で，頸部に区画が無く無文の資料で，安来市高広Ⅰ区１号横穴墓の２点，隠岐の立石古墳の１点，大座西２号墳の２点である。無文の資料については，吉田編年で取り扱われていないので詳細な時期が不明である。今後の課題としておきたい。

（13）出雲４期の松江市社日 10 号横穴墓からは，愛知県の猿投窯跡産と考えられるフラスコ型長頸瓶が出土している。報告書では，「この長頸瓶は TK43 並行期の次に位置付けられる型式に含まれる」と記載がある。TK43 の

次の型式は TK209 であるから，出雲４期が TK209 と平行することを示す資料と考えられる。社日 10 号横穴墓資料の詳細な調査が課題である。

(14) 大谷の報告ではこの杯蓋を出雲３期と限定しているが，限定する根拠は示されていない（大谷 1999）。

参考文献

足立克己・丹羽野裕 1984『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会

池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会　498 ～ 516 頁

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 14 集　島根考古学会　39 ～ 82 頁

大谷晃二 1999「上塩冶築山古墳の諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター　179 ～ 193 頁

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書　第８集　平田市教育委員会　43 ～ 54 頁

大谷晃二 2003「古墳群とその時期」『宮山古墳群の研究』　島根県古代文化センター　134 ～ 146 頁

岡田裕之 2010「考古学からみた大井産須恵器の供給問題－胎土分析の結果を受けて－」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』　島根県古代文化センター　55 ～ 63 頁

門脇俊彦 1985「西山陰における横穴墓の受容（上）」『島根考古学会誌』第３集　島根考古学会　1 ～ 33 頁

佐古和枝 1994「出雲型子持壺について」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ　131 ～ 146 頁

佐藤　隆 2003「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年－陶邑窯跡編年の再構築に向けて－」『大阪歴史博物館研究紀要』第２号　3 ～ 30 頁

昌子寛光 1987「出雲の子持壺」『古文化談叢』18

白石　純 2010「出雲地方出土須恵器の胎土分析」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』島根県古代文化センター　45 ～ 54 頁

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

中濱久喜 1982「仁多地域の古墳文化と『出雲国風土記』」『風土記論叢』創刊号　出雲国風土記研究会

西尾克己・丹羽野裕 1991「山陰の横穴墓－出雲地方を中心として－」『おおいた考古』第４集

房宗寿雄 1985「出雲地方東部の古式須恵器について」『松江考古』第６号　松江考古学談話会　34 ～ 50 頁

萩本　勝・佐古和枝 1984「須恵器について」『陰田』－一般国道９号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－　米子市教育委員会

花谷　浩 2008『出雲における県（あがた）の歴史考古学的研究』　課題番号 19904024　平成 19 年度科学研究費補助金（奨励研究）成果報告書

藤原哲・秦愛子 2004「出雲地域における窯跡出土の須恵器－大井古窯跡群における６世紀末～８世紀の資料を中心に－」『島根考古学会誌』第 20・21 集合併号　島根考古学会　367 ～ 384 頁

山本　清 1960「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』

柳浦俊一 1980「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第３号　松江考古談話会２～ 13 頁

柳浦俊一 1986「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集　山本清先生喜寿記念論集刊行会　423 ～ 445 頁

柳浦俊一 1993「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第 10 集　10 周年記念特集号　島根考古学会　13 ～ 37 頁

吉田知史 2007「文様と形態からみた後期古墳出土鏡の編年」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第 4 冊　259 ～ 277 頁

渡辺貞幸・内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 1991「出雲」『前方後円墳集成』山川出版社

図版出典

本稿で掲載した実測図は以下の報告書から転載したものである。

出雲市教育委員会 1960「知井宮町福知山横穴群出土品」『出雲市の文化財』出雲市文化財調査報告第二集

出雲市教育委員会 2002『伊原遺跡発掘調査報告書』新内藤川広域基幹河川改修事業地内

出雲市教育委員会 2007『上島古墳出土遺物・日御碕神社境内遺跡・鷺隧道』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集

出雲市教育委員会 2009『築山遺跡Ⅳ』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

隠岐島後教育委員会 2004『森遺跡発掘調査報告書』今津漁港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書

隠岐の島町教育委員会 2006『大座西遺跡発掘調査報告書』磯地区統合小学校建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

奥出雲町教育委員会 2010『マタイ廻横穴墓・小池横穴群・小池奥横穴群・天狗松横穴群・滝ノ谷尻横穴』諸工事に関わる横穴墓調査

鹿島町教育委員会 2005『古浦遺跡』

加茂町教育委員会 1990「三代古墳」『加茂町の遺跡－赤川以南－』

湖陵町教育委員会 2000『湖陵町遺跡地図』

島根県教育委員会 1983「古天神古墳」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅱ－松江市大庭町字内屋敷　山代町字小門　字岡所在遺跡－付　古天神古墳』

島根県教育委員会 1983「中竹矢遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　国道９号線バイパス建設予定地内

島根県教育委員会 1983「中竹矢横穴群」『埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳｂ　国道９号線バイパス建設予定地内

島根県教育委員会 1984『高広遺跡発掘調査報告書』和田団地造成工事に伴う発掘調査

島根県教育委員会 1986『岡田薬師古墳』淞北台第二団地造成に伴う発掘調査報告

島根県教育委員会 1991「弥陀原横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第ⅩⅦ集

島根県教育委員会 1992『中竹矢遺跡』一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

島根県教育委員会 1993『越峠遺跡・宮内遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

島根県教育委員会 1994『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

島根県教育委員会 1994『臼コクリ遺跡・大原遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

島根県教育委員会 1994『三田谷Ⅱ遺跡・上沢Ⅰ遺跡』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

島根県教育委員会 1996『岩屋口南遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

島根県教育委員会 1996『徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 12

島根県教育委員会 1996『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ

島根県教育委員会 1997『島田池遺跡・鶴貫遺跡』（第１分冊）（第２分冊）一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅷ

島根県教育委員会 1997『松本古墳群・大角山古墳群・すべりざこ古墳群』一般国道９号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３

島根県教育委員会 1998『上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴墓群（第７・12・22・23・33・35・36・37 支群）』斐伊川放水路予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

島根県教育委員会 1998『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡（門生山根１号窯・門生黒谷１号窯・五反田古墳群）』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 14

島根県教育委員会 1998『渋山池古墳群』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区 XI

島根県教育委員会 1998『山ノ神遺跡・五反田遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 16

島根県教育委員会 1999『三田谷Ⅰ遺跡（Vol. １）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅲ遺跡』斐伊川放水路予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

島根県教育委員会 2000『社日古墳』一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 12

島根県教育委員会 2001『岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書６

島根県教育委員会 2001『湯の奥遺跡　登安寺遺跡　湯後遺跡　土井・砂遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 12

島根県教育委員会 2004『家ノ脇Ⅱ遺跡・原田遺跡１区・前田遺跡４区』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４

島根県教育委員会 2009『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西Ⅱ遺跡・間谷西古墳群』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

島根県古代文化センター 1999『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書４

島根大学法文学部考古学研究室 2002「薬師山古墳出土遺物について」『松江市手間古墳発掘調査報告』島根大学考古学研究室調査報告第３冊

島根町教育委員会 1992『宮尾横穴群』第２集　第２次調査報告書

宍道町教育委員会 1980「伊賀見古墳群」『宍道町埋蔵文化財調査報告』２　地域と古墳と魔崖仏

東出雲町教育委員会 2008『古城山遺跡』主要地方道大東東出雲線出雲郷工区地方道路交付金（改良）工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２

東出雲町教育委発掘調査報告書Ⅷ

斐川町教育委員会 1983『平野遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』

斐川町教育委員会 1999『尾田瀬Ⅱ・西谷Ⅱ・西谷遺跡発掘調査報告書』荒神谷史跡公園整備に伴う斐川町文化財調査報告 18 集

松江市教育委員会 1990『池ノ奥Ａ遺跡・池ノ奥窯跡群』松江東工業団地内発掘調査報告書

松江市教育委員会 1993『伝宇牟加比売命御陵古墳』松江市文化財調査報告書第 54 集

松江市教育委員会 1998『向山古墳群発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 77 集

松江市教育委員会 1999「岩汐遺跡」『遅倉横穴墓群・米坂古墳群他』西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

松江市教育委員会 2005『菅田横穴墓群・薦沢砦跡』ソフトビジネスパーク進入路予定地内

松江市教育委員会 2009『岩汐窯跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書 121 集

八雲村教育委員会 1980『高野２号横穴発掘調査報告書』

八雲村教育委員会 2001『前田遺跡（第Ⅱ調査区）』一般国道 432 号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

安来市教育委員会 1999『笠松遺跡・清瀬塩田遺跡』清瀬地区発掘調査報告書　安来市埋蔵文化財調査報告書第 29 集

第8章　結　語

中村１号墳は６世紀末～７世紀初頭（出雲４期・TK209 型式平行期）の複室構造の横穴式石室を内蔵する未盗掘の古墳である。第５～７章で，遺構・遺物を詳細に検討し，中村１号墳の位置付けを行った。ここでは，今回の発掘調査の主な成果をまとめ，本書の結語とする。

１　墳丘と石室と石棺

中村１号墳は直径約 30 ｍの円墳である。ただし，墳丘の南側が丹堀川の土石流によって，また，北側は人為的に破壊されているため，現地では，直径約 10 ｍの高まりがある程度で，墳形はほとんどわからない。

墳丘トレンチ調査の結果，段築と葺き石はないと考えられる。また，閉塞部と墳丘トレンチから円筒埴輪の小片がそれぞれ１点ずつ出土したが，どのように使用されていたかは不明である。

横穴式石室は玄室と前室，羨道からなり，石室全長 9.3m 以上（羨道側壁検出部分まで）である。玄門は両袖式の構造で，立柱状の袖石に楣石が直接架けられている。石材は近傍で産出される砂岩で，割石および切石に加工されている。壁は奥壁３段，玄室側壁３段，前室側壁５～８段，羨道側壁６段からなる。石室天井は玄室２枚，前室３枚，羨道２枚からなる。

玄室には組合せ式家形石棺（Ａ石棺）があり，横口式で閉塞石がない（「開かれた棺」）構造である。さらに石棺前には灯明石，敷石，２段の障石が付属している。Ａ石棺の蓋石は現状で大きく３片に破損し，石棺内に落ち込んでいて，両端の２片は表裏が反転した状況である。蓋石表面の２か所に打撃痕が確認できることから，この状況は人為的な棄損行為の結果と考えられる。このＡ石棺内は，上層の流土を取り除いたのみで，石棺内の調査はしていない。蓋石も発見時の状態を残した。前室には蓋石も奥石もない組合せ石棺（Ｂ石棺）がある。このＢ石棺内は，ほぼ完掘したが，わずかに埋土を残した。

石室と石棺の構築過程は，床面の断ち割り調査によって明らかになった。すなわち，まず，奥壁と袖石を立ててから，側壁を積んだこと，そして，石室構築途中でＡ石棺を設置したこと，その後に，Ｂ石棺を設置したと推定されること，が判明した。

次に，石室と石棺の系譜と評価についてまとめる。中村１号墳の横穴式石室は，玄門部が両袖式で，これをⅠ類石室と呼んだ（第７章第１節）。Ⅰ類石室は九州北部から出雲東部に伝播し，その後，出雲西部に伝播していることを型式変化から明らかにした。そして，中村１号墳は，南西約 10㎞にある出雲市上塩冶築山古墳と同じ構造と判断し，両者が近い関係と考えた。Ａ石棺とＢ石棺はともに「開かれた棺」で，その起源は九州に求めることができるが，直接的な系譜は出雲東部を経由して，出雲西部の上塩冶築山古墳につながる。そして，Ｂ石棺の奥石がない特徴は，出雲西部の地域色である（第７章第４節）。

さて，石室は自然石積みの閉塞と前庭部の埋め戻し土で厳重に封鎖されている。長さ６ｍもの閉塞

部が，羨道から前庭部にかけて良好に残存している。そして，中村１号墳の閉塞石は西日本の中でも最も長い。西日本の横穴式石室では，羨道部内を自然石で閉塞する方法が一般的であるが，出雲では，前庭部まで自然石を積んで閉塞する例が松江市薄井原古墳１号石室や岡田山１号墳などにあり，地域的特徴といえそうである。それ故に，中村１号墳の閉塞も長く厳重なものになっているのであろう（第７章第３節）。

最後に出雲における中村１号墳の階層的位置についてふれておく。階層構造は，玄室と墳丘規模の両者に表れると考えた。そして，両者の組合せはＡ～Ｃ類の３段階構造と把握することができ，中村１号墳はその中のＢ類，つまり２番目の階層となる。かつその中でも上位に位置したと考えられる（第７章第２節）。

以上，墳丘と石室についてまとめた。特に重要な点は次の２点である。１点目は，本墳は未盗掘墳で，閉塞石が埋葬当時の状況を完全に残しており，高い密閉度を保持していること。２点目は，家形石棺を基本的に未調査としたため，発見時の状態，つまり未盗掘の状態がそのまま保たれていることである。すなわち，中村１号墳は，西日本の現存する横穴式石室の中で最も保存状態が良い石室であり，かつ閉塞状態を目の当たりにできる稀有な古墳といえよう。

２　副葬品の出土状況からみた葬送過程の復元

石室内からは副葬品として，珠文鏡１面，金環１点，銀環１点，ガラス製勾玉１点，ガラス製丸玉１点，ガラス製小玉２点，青銅製鈴４点，装飾大刀３振，刀子３点，鉄鏃３組，馬具３組，須恵器61点（うち３点は現地に保存）が出土した。石室外の閉塞部からも須恵器の出雲型子持壺や甕などが出土した。これら古墳に伴う出土品はおよそ250点である。副葬品の時期は，珠文鏡がTK43型式期以降，装飾大刀と馬具がTK209型式期，須恵器は出雲産が出雲４期前半で，須恵器の搬入品がTK209型式期と考えられる。したがって，中村１号墳の築造と埋葬時期は出雲４期前半（TK209型式期）となる。

金銅製品については，鉛同位体分析を行った。分析の結果，原料産地が中国産と日本産を示す資料を検出した。そして，セットとなっている馬具の中でも産地が異なる金属素材が使われたことと，国産鉛の使用例として最古級であることが明らかになった（第５章第７節）。

須恵器出雲型子持壺の胎土分析の結果，中村１号墳出土のＰ１・２・18・24・25・32は出雲東部の松江市大井窯跡群で生産された可能性が指摘された。これは，子持壺自体の型式的特徴と符合する。一方、出雲西部の出雲市築山遺跡および上塩冶築山古墳出土の出雲型子持壺は、出雲東部とは異なる型式的特徴を持ち、胎土分析の結果も、大井窯跡産とは異なる分布域を示し、出雲西部にも窯跡がある可能性がある（第５章第８節・第７章第６節）。

副葬品の多くは石室内に散在した状態で出土した。この古墳が未盗掘墳であること，そして，土砂との関係から，その状況は最初に配置された時点のものではなく，その後に再配置された結果と考えられる。大刀Ｓ１と大刀Ｓ３は，立て掛けられた状態で出土しており，これも再配置と考えられる。そして，再配置の前に鉄鏃や馬具などは毀損されている。これらの毀損は，家形石棺（Ａ石棺）の蓋

石の毀損と同様な行為と理解できる。

石室外側の閉塞石の検出面では，出雲型子持壺と甕が破片となって出土した。これは，閉塞時（初葬時か）にそれらが毀損され、配置されと考えられる。

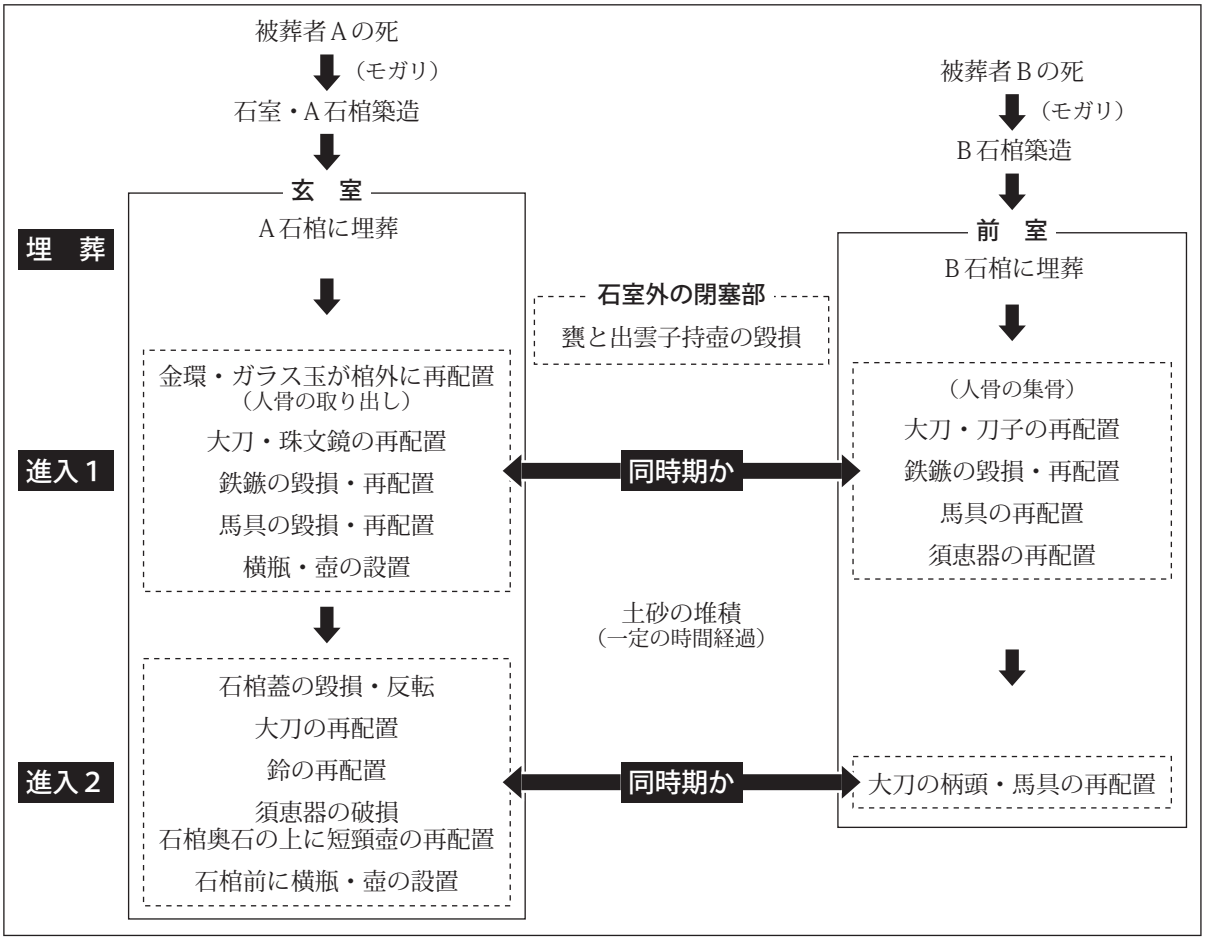
これら副葬品などの出土状況は，石室内の層位的発掘の結果，次のような葬送過程の中に位置付けることができる（第１図，第４章第８節）。中村１号墳の葬送過程を推定復元すると，まず，玄室のＡ石棺に埋葬が行われ，その後，前室のＢ石棺にも埋葬が行われる。この頃までに閉塞石の外で，出雲型子持壺と甕を毀損し，前底部の埋め戻しが行われた。ここで、副葬品の出土状況と各器種の型式的特徴から，それらの埋葬時のセット関係を第１表に推定しておく。玄室には、鏡Ｍ１，装身具Ａ１・勾玉Ａ３・小玉Ａ５・鈴Ａ６～９，大刀Ｓ１・Ｓ２，鉄鏃あ群・い群，馬具あ群が、前室には銀環Ａ２，大刀Ｓ３，鉄鏃う群，馬具う群が配置されたであろう。刀子は前室から３点出土している。いずれかは玄室に副葬されたものであろう。玄室に伴う大刀Ｓ１・２と馬具あ群は、前室に伴う大刀Ｓ３と馬具う群よりもそれぞれ古い型式的特徴をもつことから、初葬は玄室Ａ石棺、追葬は前室のＢ石棺に行なわれたと考えられる。

そして，須恵器出雲４期内という短期間に，埋葬に伴わない石室への進入が２回ある。この２回の進入は土砂との関係で明らかである。「石室進入１」では，Ａ石棺からガラス製勾玉や小玉（人骨もか）および珠文鏡や大刀などを取り出し再配置している。また，玄室の石棺外にあった鉄鏃や馬具も毀損し再配置した。そして，この行為に伴って，壺Ｐ 43 と横瓶Ｐ 44 を左袖石付近に据え置く。これらは、「石室進入１」に伴って持ち込まれたことが推定できる。同時に前室のＢ石棺の人骨も棺内で集骨されたと推察したい（第５章第９節）。また，Ｂ石棺内にあった大刀や須恵器などは棺外へ再配置される。そして，棺外にあった鉄鏃や馬具が毀損され再配置された。

その後，玄室および前室に若干の土砂が堆積した後，「石室進入２」が行われた。玄室では，Ａ石棺蓋の毀損・反転が行われ，大刀の立て掛けと鈴および須恵器の再配置が行われた。この行為に伴って石棺前に壺Ｐ 70 と横瓶Ｐ 71 が置かれる。これらの須恵器は、「石室進入２」に伴って持ち込まれた可能性がある。前室でも，大刀の柄頭と馬具の飾金具が再配置された。これらの２回の進入は，副葬品と人骨および石棺の毀損とそれらの再配置が目的であったと考えられよう。

第１表　埋葬時の副葬品の組合せ

	副葬品	玄　室	前　室	備　考
埋葬時	鏡	Ｍ1	－	
	装身具	金環Ａ1・勾玉Ａ3・小玉Ａ5・鈴Ａ6～9	銀環Ａ2	
	大刀	Ｓ1・Ｓ2	Ｓ3	
	刀子	不明	不明	前室から３点出土している。いずれかは玄室に副葬されたものであろう。
	鉄鏃	あ群・い群	う群	
	馬具	あ群	う群	出土状況と型式から判断
石室進入1	須恵器	杯蓋Ｐ 42・壺Ｐ 43・横瓶Ｐ 44	－	同じような組合せで配置されており，石室進入1および2にそれぞれを持ち込んだと推定できる。ただし，埋葬時に置かれた可能性も残る。
石室進入2	須恵器	杯蓋Ｐ 69・壺Ｐ 70・横瓶Ｐ 71	－	

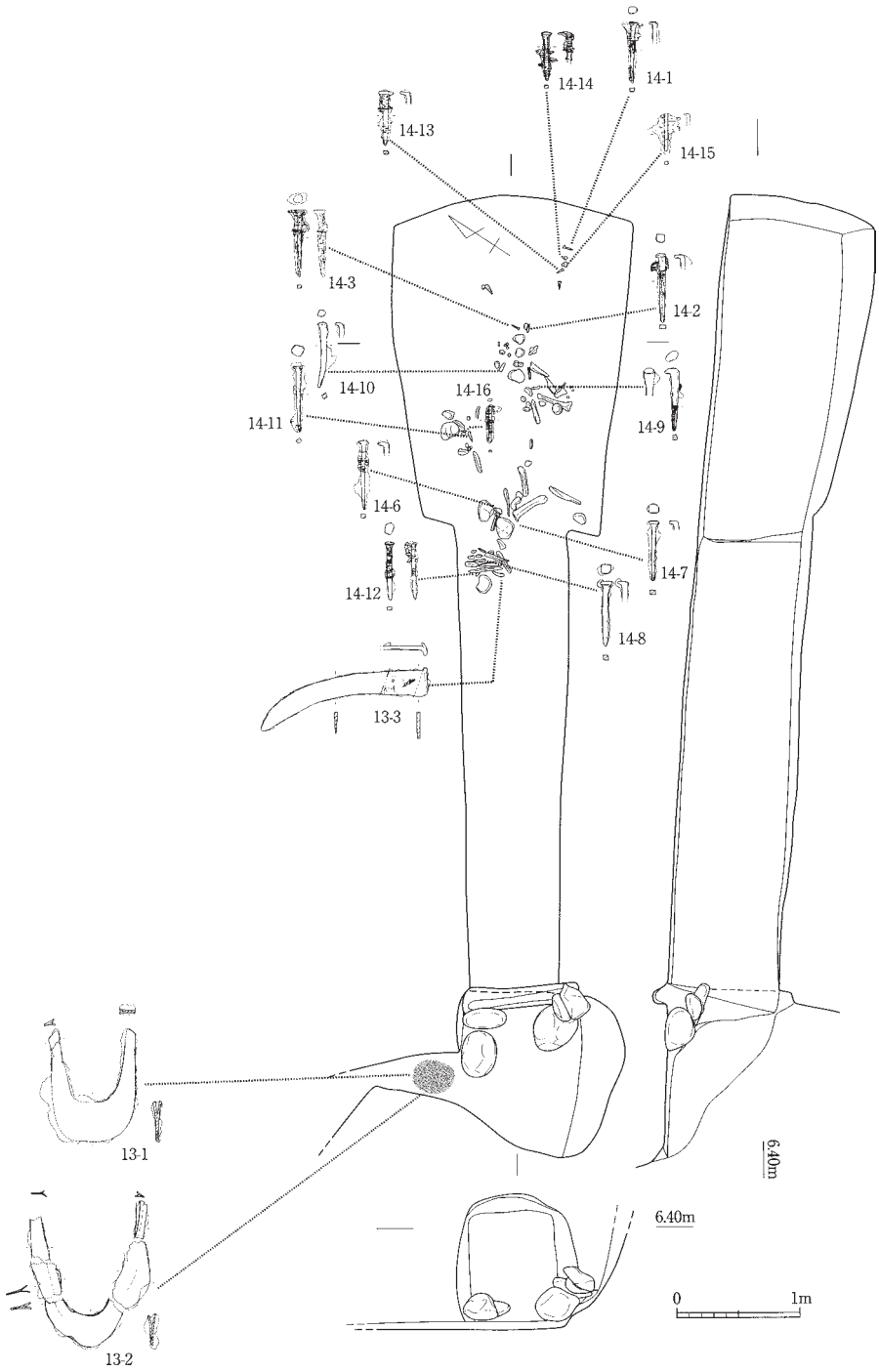


第1図　中村1号墳の葬送過程

3　再生阻止儀礼

前項で述べた副葬品などの毀損と再配置は，埋葬当初に死者のために配置された副葬品を移動させることにより，その関係性を毀損した行為と考えられ，また，その行為が死者を納める容器である棺にまで及んだ結果と解釈した。つまり，死者と彼のために配置された物を毀損して，それらの機能を停止させる，つまり，再生を阻止する意味があると考えられる（この行為を再生阻止儀礼と呼ぶ，第6章第3・4節）。

再生阻止儀礼の中でも遺体の毀損（断体儀礼）は，九州～関東地方で点在的にみられる行為である。中村1号墳のように棺までが毀損された状況が未盗掘の状態で発見された例としては，愛媛県葉佐池古墳2号石室と島根県西ノ島町の黒木山5号横穴墓の2例をあげることができる。葉佐池古墳2号石室では，副葬品類がまとまりを欠き，馬具が毀損されて閉塞部に再配置されていたり，須恵器の多くは毀損されていたりした。わずかに検出された人骨もまとまりに欠ける。そして，埋葬後に木棺を破却しているようである。黒木山5号横穴墓では人骨と木棺に使用された鉄釘が玄室内から散在した状況で出土した。これは，人骨や木棺を毀損し，その破片を再配置（バラマキ）した結果と推定できる（第2図）。



第２図　黒木山５号横穴墓遺物出土状況（1：60）

では，副葬品の再配置が西日本の他の地域にはどの程度広がっているのであろうか。近畿地方には人骨毀損事例（京都府女坂横穴墓群および荒坂横穴墓群）があっても，副葬品を再配置したという指摘はないようだ。近畿地方の首長墳では副葬品の配置に一定の規定があるという指摘もあり（森本徹 2007），副葬品が再配置される状況は追葬時の片付け以外では指摘されていない。九州地方では，人骨の毀損事例（大分県上ノ原 48 号墓，長湯 7 号横穴墓）があっても，副葬品が再配置されたというような指摘はない。これは，未盗掘古墳の調査例が少ない結果，その多くが追葬時の片付けとして扱われているためかもしれない。あるいは，再生阻止儀礼の中で，人骨毀損のみが行われており，副葬品の再配置までは行われていないのかもしれない。

ここで重要になってくるのは，大刀の立て掛けの事例である。この大刀などの刀類の立て掛けは，東北地方から九州地方まで分布し，筆者が確認したところ総数 45 遺跡でみつかっている。この行為については，日高慎の詳細な研究がある。日高は「横穴式石室という新来の埋葬施設が日本列島に導入されててから，刀類を立てかけて副葬することが始まった」と指摘し，その行為は「辟邪という観念をもって立てられていた」と考えている（日高 2008）。日高の刀類立て掛けの解釈には，その立て掛けが埋葬当初に行われたという前提がある。しかし，中村 1 号墳では，大刀の立て掛けを再配置と考えた。須恵器に付着した錆の状況から判断して，立て掛けられた時点では，既に大刀は錆化していたであろう。さらに，大刀Ｓ３は柄の銀線が切れて破損した状態で立て掛けられている。このような，錆化あるいは破損した大刀に辟邪の観念があったとは考えにくい。したがって，中村 1 号墳の大刀は，当初は死者の「護り刀」として邪気を払う効果を期待し，遺体に添えらたと考えられる。しかし，その後，錆化した大刀を立て掛けることによって，死者から大刀を離し，大刀の機能を完全に不能にしたと考えられる。すなわち，大刀の立て掛けは再生阻止儀礼の中でとらえることができよう。中村 1 号墳の大刀と同じく破損してから立て掛けられた例として，神奈川県市ヵ尾Ａ－ 18 号横穴墓があげられる。ここでは，２振の大刀が立て掛けられ，その内の１振は折れてから立て掛けられていると考えられる。したがって，刀類の立て掛けは，すべて再配置とは言えないが，このような例があることは重要であろう。つまり，副葬品配置については，まだまだ研究の余地があるように思われ，近畿や九州でも副葬品の再配置の事例が増える可能性がある。とはいえ，中村 1 号墳や葉佐池古墳などの棺の棄損はかなり特異な事例であろう。

以上のことから，再生阻止儀礼は各地でみられるが，その方式は地域によって異なることが推察される。その中で中村 1 号墳は儀礼の過程を具体的に復元できた点で貴重である。

4　中村 1 号墳の外部との交流

出雲における横穴式石室と家形石棺は，導入期には畿内系と九州系の両系統がある。しかし，その後は，基本的には九州系が主体をなし，それを母体に出雲独自の横穴式石室・家形石棺が展開していく。中村 1 号墳の家形石棺も和田晴吾が示した九州系譜の「開かれた棺」である。近畿地方で多く存在する横口のない密閉された「閉ざされた棺」ではない。埋葬観念が石室・石棺構造に表れているのであれば，九州系の横穴式石室・家形石棺が出雲で採用されたことと再生阻止儀礼の伝播は，一連のものと考えられる。

これに対して，中村 1 号墳の出土の鏡と金銅装製品は畿内地域の豪族から直接あるいは間接的に入手したと考えられる。また，畿内系の須恵器蹴Ｐ 41 も同様と考えられる。これらの副葬品は，被葬者の職掌を表していると指摘があり（林正憲 2010），埋葬観念と直接的な関係は薄いと考えられる。

以上のように，中村 1 号墳の石室および石棺は九州地方に系譜をたどれる出雲独自の特色を持っている一方，鏡や金銅装製品などの副葬品は畿内系である。中村 1 号墳は，埋葬観念と関わる出雲独自の石室･石棺に被葬者の生前の職掌が関わる畿内系副葬品が収められるという二面性を内包している。

5　中村１号墳の特色

中村１号墳は，６世紀末～７世紀初頭に築かれた約 30 ｍの円墳であり，家形石棺を収めた複室構造の横穴式石室をもつ。この時期，出雲は考古学的には大きく東部と西部に分かれるが，当古墳はその立地からも，また石室などの諸属性からも出雲西部に属す。規模などからみて，その位置は，出雲における３段階構造の中で２番目，最上位ではないが上位の首長墳である。

そして，中村１号墳の特色を次のようにまとめることができる。

① 閉塞石が完存する未盗掘墳で，調査後もその良好な保存状態が保たれている石室である。このような横穴式石室は、西日本において他にない。

② 石室内の石棺蓋や副葬品に対し，毀損と再配置が行われていた。石棺の毀損行為が明らかになった例は，他にない。

③ 未盗掘墳であることから，それらの行為が葬送過程に関わることが明瞭であり，特に，埋葬終了後に行われた２回の石室進入が重要である。

④ この２回の進入は，再生阻止儀礼（石棺・副葬品の毀損）が目的であると推定される。

以上のように，中村１号墳の特色は，①～③の事実とそこから導き出された④にある。特に②の石棺の毀損が中村１号墳で初めて確認できたことは重要である。これらの特色は，古墳時代の葬送儀礼研究に大きな成果をあげ，また，今後の後期古墳研究の一つの方向性を示した点で大きな意義をもつといえよう。

（坂本豊治）

参考文献

池淵俊一編 2010『黒木山横穴墓群』御所前地区災害関連地域防災がけ崩れ対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　島根県西ノ島町教育委員会

岩松　保・上田真一郎 2003「八幡市女坂・荒坂横穴墓群における改葬の実例」『京都府埋蔵文化財情報』第 87 号京都府埋蔵文化財調査研究センター　９～ 20 頁

岩松　保 2006「黄泉国への儀礼－骨を動かす行為－」『京都府埋蔵文化財論集』第５集　－創立二十五周年記念誌－　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　393 ～ 410 頁

林　正憲 2010「古墳時代における階層構造」『考古学研究』57 －３　考古学研究会　22 ～ 36 頁

日高　慎 2008「後期古墳における刀類立てかけ副葬について」『王権と武器と信仰』（株）同成社　784 ～ 795 頁

村田文夫 2007「狭蝿なす妖怪・悪鬼を放逐する呪術・その断想」『史峰』第 35 号　15 ～ 28 頁

森本　徹 2007「横穴式石室と葬送儀礼」『研究集会　近畿の横穴式石室』　横穴式石室研究会　291 ～ 304 頁

横浜市編 1982「市カ尾古墳群の調査」『横浜市史』資料編 21　考古資料編

和田晴吾 2003「棺と古墳祭祀（２）－『閉ざされた棺』と『開かれた棺－」立命館大学考古学論集Ⅲ－２　713 ～ 725 頁

報告書抄録

ふりがな	なかむらいちごうふん
書　名	中村 1 号墳
副書名	
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	15
編著者名	坂本豊治（編）　岩本　崇　川本耕三　齋藤　努　斉藤紀行　澤田正明　柴崎晶子　白石　純　高橋　敦 髙橋　周　永嶋千鳥　永嶋正春　橋本英将　花谷　浩　渡邉正巳
編集機関	出雲市文化環境部文化財課
所在地	〒699-0011　島根県出雲市大津町 2670　TEL（0853）21-6893
発行年月日	平成 24 年度（2012）5 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北　緯	東　経	発掘機関	発掘面積	発掘原因
なかむらいちごうふん 中村 1 号墳	しまねけんいずもしくにどみ 島根県出雲市国富町 1948 ほか	32203	x 255	35°25′39″	132°48′02″	20060710 ～ 20100930	300 ㎡	内容確認

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中村 1 号墳	古墳	古墳時代後期 （6 世紀末～ 7 世紀初頭）	石室 周溝	珠文鏡，耳環，ガラス玉 鈴，装飾大刀，鉄鏃 刀子，馬具，須恵器	未盗掘の横穴式石室 再生阻止儀礼

要　約

中村 1 号墳は，平成 14 年（2002）に工事中に重機によって玄室天井石が破壊され，発見された古墳である。調査の結果，古墳時代後期（6 世紀末～ 7 世紀初頭）に築造された約 30mの円墳で，埋葬施設は複室の横穴式石室であることがわかった。

墳丘の大部分は後世の土石流によって破壊されている。石室部分はほぼ完全に残っていて，西日本の中でも最も石室の残存状況は良好であるといえよう。そして，盗掘を受けていない全国的にも珍しい後期古墳である。

副葬品は約 250 点出土している。副葬品の出土状況から，埋葬終了後に 2 度にわたり石室に侵入し，遺物の棄損や再配置，石棺蓋の毀損などの再生阻止儀礼が行われたことがわかる，重要な古墳である。

また、出雲における石室・石棺および副葬品の研究において重要な成果をあげたといえる。

2012年5月31日　印刷

出雲市の文化財報告書15

中村1号墳

本文編

著作権所有　〒693-8530 島根県出雲市今市町70
発　行　者　ＴＥＬ（0853）21－6874
　　出雲市教育委員会

印　刷　者　島根印刷株式会社